



Title	日本語身体部位詞の比喩義に関する認知言語学的研究 —精神作用の座としての腹・胸・頭の理解の共時的・ 通時的分析—
Author(s)	後藤, 秀貴
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/98641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年博士学位申請論文

日本語身体部位詞の比喩義に関する
認知言語学的研究

—精神作用の座としての腹・胸・頭の理解の
共時的・通時的分析—

大阪大学大学院言語文化研究科

言語文化専攻

後藤秀貴

謝辞

筆者の大学院博士前期課程入学時より、博士論文完成までの12年間、多大なるご指導を賜りました。大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻言語認知科学講座教授の大森文子先生に深く感謝申し上げます。先生の丁寧なご指導と温かい励ましのお言葉がなければ、本研究が完成することはありませんでした。先生より教わったテキストの読み込み方、研究そのものに対する姿勢をもとに、博士論文研究の道のりを歩んでいくことができました。

また、大阪大学名誉教授、関西外国語大学外国語学部教授の渡辺秀樹先生に心より感謝申し上げます。関西外国語大学にご就職された後も、先生が言語文化研究科棟で繰り返しご指導下さったおかげで、博士論文を何とか形にすることができました。先生から教わった文献資料に向き合う態度は博士論文執筆時の大きな糧となりました。

本論文の審査にあたっては、大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻言語認知科学講座の小葉哲哉先生、田村幸誠先生に大変お世話になり、御礼申し上げます。博士論文提出前に先生お二人からいただいたご指導のおかげで、本研究の位置付けや論文としての構成・体裁に関して見直すことができました。

大学院生時代、学部生時代の恩師にも感謝申し上げます。杉本孝司先生と春木仁孝先生には大学院での指導教員として大変お世話になりました。早瀬尚子先生をはじめとする大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻の先生方にも、授業・研究会で手厚いご指導をいただきました。静岡大学での学部生時代に筆者に大学院進学の道を拓いて下さった大村光弘先生、服部義弘先生にも感謝申し上げます。

研究科の先輩や研究仲間からは、研究面での支えだけでなく、研究を進める上での励みを得ることができました。大神雄一郎氏、木山直毅氏、瀬戸義隆氏、友繁有輝氏、南澤佑樹氏をはじめとする多くの方に感謝申し上げます。

学会や研究会でお世話になった皆様にも御礼申し上げます。特に名古屋学院大学の有蘭智美先生、関西大学の鍋島弘治朗先生からは、学会や研究会での小生の研究発表時に貴重なご助言を賜りました。また、大阪大学の中畠浩貴先生からは、博士論文資格審査発表会の後に有益なご助言をいただきました。例文解釈のご協力をいただいた大阪大学の王周明先生、元大阪大学大学院生の陳栩氏、北九州市立大学の中岡深雪先生、許慧先生にも感謝申し上げます。

最後に、いつも筆者を支え、励ましてくれる家族の茜と想介に心から感謝いたします。

もちろん、本稿の内容に不備や誤りがある場合、全て筆者の責任に帰されるものです。

第1章 序論	1
1.1 研究背景と目的	1
1.2 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の定義	7
1.3 本論文の構成と概要	10
第2章 本研究で援用する理論的枠組み	12
2.1 はじめに	12
2.2 イディオムと慣用句	12
2.2.1 はじめに	12
2.2.2 英語のイディオム研究	13
2.2.3 日本語の慣用句研究	18
2.2.4 諸研究の検討と本研究における慣用句および関連概念の定義	29
2.3 認知意味論	39
2.3.1 はじめに	39
2.3.2 メタファー	40
2.3.2.1 概念メタファーの体系性と写像	40
2.3.2.2 メタファーの認知基盤	46
2.3.3 メトニミー	50
2.3.3.1 メトニミーと隣接性	50
2.3.3.2 メトニミーと概念領域・ICM	58
2.3.3.3 メトニミーの認知基盤	61
2.3.4 メタフトニミー	65
2.3.5 イメージスキーマ	68
2.3.6 プロトタイプシナリオ	75
2.3.7 身体基盤と文化基盤	77
2.3.8 文化モデル	85
2.4 第2章のまとめ	88
第3章 現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉	92
3.1 はじめに	92
3.2 先行研究と問題の所在	93
3.2.1 佐竹(1984)	93
3.2.2 認知言語学的アプローチ	94

3.2.2.1	はじめに	94
3.2.2.2	Matsuki (1995)	96
3.2.2.3	McVeigh (1996)	97
3.2.2.4	Shinohara and Matsunaka (2003)	97
3.2.2.5	田中 (2003), ケキゼ・田中 (2004)	98
3.2.2.6	有蘭 (2007, 2009)	102
3.2.3	問題提起	107
3.3	分析の枠組みと調査方法	113
3.3.1	感情言語の階層モデル：楠見 (1996), 楠見・米田 (2007)	113
3.3.2	身体部位詞表現の具象性	122
3.3.3	身体部位詞表現に見られる比喻の二重性	124
3.3.4	〈腹〉〈胸〉〈頭〉をめぐる日本の心身観	132
3.3.4.1	五臓思想	132
3.3.4.2	丹田の鍛錬と腰肚文化	137
3.3.4.3	近代西洋医学と頭	140
3.3.5	調査対象語とデータ収集法, および分類基準	142
3.4	現代日本語の〈腹〉表現	146
3.4.1	感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語, メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	147
3.4.2	スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	148
3.4.3	スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語, メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	149
3.4.3.1	〈容器としての腹〉と〈具象物としての腹〉	149
3.4.3.2	〈容器としての腹〉	151
3.4.3.3	〈具象物としての腹〉	163
3.4.3.4	慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	169
3.4.4	観察のまとめ	170
3.4.5	〈腹〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤	175
3.5	現代日本語の〈胸〉表現	178
3.5.1	感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語, メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	179
3.5.2	スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	183

3.5.3	スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語，メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	190
3.5.3.1	〈容器としての胸〉と〈具象物としての胸〉	190
3.5.3.2	〈容器としての胸〉	190
3.5.3.3	〈具象物としての胸〉	197
3.5.4	慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	200
3.5.5	観察のまとめ	201
3.5.6	〈胸〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤	208
3.6	現代日本語の〈頭〉表現	212
3.6.1	感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語，メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	212
3.6.2	スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	216
3.6.3	スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語，メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	217
3.6.3.1	〈容器としての頭〉と〈具象物としての頭〉	217
3.6.3.2	〈容器としての頭〉	217
3.6.3.3	〈具象物としての頭〉	225
3.6.3.4	慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	229
3.6.4	観察のまとめ	230
3.6.5	〈頭〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤	234
3.7	考察	236
3.8	第3章のまとめ	247
第4章	日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の史的展開	252
4.1	はじめに	252
4.1.1	先行研究	252
4.1.2	本章の目的と構成	255
4.2	調査方法	257
4.2.1	調査対象語：日本語身体部位詞の語彙史	257
4.2.2	データ収集法	259
4.2.3	観察方法	262
4.3	〈腹〉表現の史的展開	263

4.3.1	分類方法.....	263
4.3.2	〈腹〉と精神作用が間接的に関係する表現.....	265
4.3.3	上代.....	266
4.3.4	中古.....	267
4.3.5	中世.....	268
4.3.6	近世.....	273
4.3.7	近代.....	278
4.3.8	現代.....	281
4.3.9	観察のまとめ.....	281
4.4	〈胸〉表現の史的展開.....	287
4.4.1	分類方法.....	287
4.4.2	〈胸〉と精神作用が間接的に関係する表現.....	290
4.4.3	上代.....	291
4.4.4	中古.....	292
4.4.5	中世.....	295
4.4.6	近世.....	297
4.4.7	近代・現代.....	302
4.4.8	観察のまとめ.....	304
4.5	〈頭〉表現の史的展開.....	312
4.5.1	分類方法.....	312
4.5.2	〈頭〉と精神作用が間接的に関係する表現.....	314
4.5.3	中世以前.....	316
4.5.4	近世.....	318
4.5.5	近代.....	319
4.5.6	現代.....	324
4.5.7	観察のまとめ.....	325
4.6	考察.....	329
4.6.1	身体基盤と通時性, 文化基盤と意味の変容.....	329
4.6.2	言語接触: 漢語の影響.....	334
4.7	第4章のまとめ.....	337
第5章	結論.....	340

5.1	本研究のまとめ	340
5.2	今後の展望	344
	参考文献	346

図表目次

図 1	身体部位詞表現の階層モデル	6
図 2	身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現の分類（有蘭 2009, p. 63）	27
図 3	参照点構造 (Langacker, 1993/1999, p. 174).....	62
図 4	〈容器〉（〈包含〉）スキーマ (Johnson, 1987, p. 23)	71
図 5	〈容器〉スキーマと言語主体の視点（山梨, 2000, p. 145）	73
図 6	「腹」を含む表現の表す意味（有蘭, 2007, p. 314 [本文の用例に従い表現を追加]）	102
図 7	「胸」を含む表現の表す意味（有蘭, 2007, p. 312 [本文の用例に従い表現を追加]）	103
図 8	「頭」を含む表現の表す意味（有蘭, 2007, p. 311 [本文の用例に従い表現を追加]）	103
図 9	感情言語の階層モデル（楠見・米田, 2007, p. 56）	113
図 10	五行と五臓（三浦 (1996, pp. 42, 45) をもとに作成）	133
図 11	精神作用に関する現代日本語の〈腹〉の理解と概念メタファー	175
図 12	〈腹〉におけるメトニミー表現（L1）とメトニミー×メタファー表現（L2）の対応	176
図 13	現代日本語の〈腹〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤	178
図 14	精神作用に関する現代日本語の〈胸〉の理解と概念メタファー	207
図 15	〈胸〉におけるメトニミー表現（L1）とメトニミー×メタファー表現（L2）の対応	209
図 16	現代日本語の〈胸〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤	210
図 17	精神作用に関する現代日本語の〈頭〉の理解と概念メタファー	233
図 18	〈頭〉におけるメトニミー表現（L1）とメトニミー×メタファー表現（L2）の対応	234
図 19	現代日本語の〈頭〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤	236
表 1	分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムと慣用句・慣用的連結句の比較（再解釈） ...	34
表 2	共起性基盤を持つメタファーと身体経験（Grady (1997a, Appendix) をもとに作成）	78
表 3	「腹」「胸」「頭」表現を扱った認知言語学研究の分析項目	95
表 4	精神作用に対する比喩×身体的作用・性質に対する比喩	128
表 5	〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用表現の分類	130

表 6 五臓六腑（三浦 (1996, p. 59) をもとに作成）	133
表 7 五神とその特徴（平馬ほか (2014, p. 30) をもとに作成）	134
表 8 五臓と七情（平馬ほか (2014, p. 87) をもとに作成）	134
表 9 『分類語彙表 増補改訂版』に記載の〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における頻度（左が短単位，右が長単位）	142
表 10 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用と表現例（現代日本語）	145
表 11 存在のメタファー×〈容器〉スキーマ	151
表 12 現代日本語の〈腹〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）	171
表 13 たこつば症候群の精神的誘因（古島ほか (2021, p. 88) より抜粋）	180
表 14 現代日本語の〈胸〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）	202
表 15 〈内容物〉が具体化された〈容器としての腹〉〈容器としての胸〉の下位メタファー	207
表 16 現代日本語の〈頭〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）	231
表 17 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の階層ごとのカテゴリー数（慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語）	237
表 18 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	237
表 19 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用と対応するカテゴリー数	239
表 20 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の感覚・運動レベル (L1) のカテゴリーの比較	240
表 21 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベル I (L2) のカテゴリーの比較	241
表 22 スキーマレベル II～概念レベル (L3) のメタファー	242
表 23 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベル II～概念レベル (L3-C) のカテゴリーの比較	243
表 24 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベル II～概念レベル (L3) の基盤	244
表 25 〈腹〉〈胸〉〈頭〉を指す語（『現代語古語類語辞典』に基づく）とおおよその使用開始時代	258
表 26 親見出し・子見出しの語釈に精神義を含む〈腹〉〈胸〉〈頭〉の身体部位詞	258
表 27 調査対象語の子見出しに収録された精神義を持つ表現	260
表 28 「腹」「胸」「頭」のいずれかを見出しの構成要素に含む項目	261
表 29 〈腹〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（慣用的意味固定）	264
表 30 〈腹〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型	265
表 31 精神作用の座としての〈腹〉の史的展開（精神作用固定）	283

表 32 精神作用の座としての〈腹〉の史的展開（字義的意味固定）	284
表 33 〈胸〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（慣用的意味固定）	288
表 34 〈胸〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型	290
表 35 精神作用の座としての〈胸〉の史的展開（精神作用固定）	306
表 36 精神作用の座としての〈胸〉の史的展開（字義的意味固定）	308
表 37 〈頭〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（慣用的意味固定）	313
表 38 〈頭〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型	314
表 39 精神作用の座としての〈頭〉の史的展開（精神作用固定）	326
表 40 精神作用の座としての〈頭〉の史的展開（字義的意味固定）	327
表 41 感覚・運動レベル (L1) およびスキーマレベル I (L2) の比喩の発生時代.....	329
表 42 『日本国語大辞典 第二版』において漢籍の出典が確認される漢語および漢語によって構成される慣用表現	336

凡例

1. 例文には全ての章を通じた通し番号をつける。既出の例文を再掲する際には、その最後に初出の通し番号を示す。
2. 先行研究から例文を引用する場合、例文の後に著者名・年号・頁数を示す。
3. 文芸作品から引用を行う場合、引用の後に作品名と（おおよその）成立年代、引用箇所（分節がある場合）を示す。近代以降に成立した作品については、作者名も併記する。
4. Web ページから得た例文については、例文の後に URL を示す。
5. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』から得た例文については、例文の後に「BCCWJ」と示した上でサンプル ID および開始位置を併記する。
6. 『日本語歴史コーパス (CHJ)』から得た例文については、例文の後に「CHJ」と示した上でサンプル ID および開始位置を併記する。
7. 『青空文庫』から得た例文については、3 と同じ様式で引用し、最後に「青空文庫」と示す。
8. その他データベース（『漢籍電子文献資料庫』、『古記録フルテキストデータベース』（「古記録デ」と略す）、『古文書フルテキストデータベース』（「古文書デ」と略す）、『日本古典文学大系本文データベース』（「大系デ」と略す））から用例を引く際には、データベース名（略称）を示した上で作品名と引用箇所（分節がある場合）を示す。
9. 『日本国語大辞典 第二版』で挙げられている用例を引く際には、原則として直接出典にあたり引用したが、『日本国語大辞典 第二版』の典拠とは異なる資料を用いた場合がある。また、参考文献一覧に記載のない資料からの引用例は、資料が入手困難などの理由で『日本国語大辞典 第二版』にある用例を直接引用したものである。
10. 用例中の下線は特に断りのない限り筆者が追加したものである。
11. 再出版・再収録された版のある先行研究を引用する際は、Lakoff and Johnson (1980/2003) のように、旧版（初版）の年と新版の年を併記する。頁数や章番号を示す場合は全て新版に従う。
12. 本文中（例文を含む）で英文を引用する際、原則として日本語訳を併記する。訳本が存在する場合、その訳本の日本語を採用し、存在しない場合は筆者による日本語訳を添える。ただし、日本語での用語の統一の目的などから、訳本が存在しても筆者による訳を採用した場合がある。
13. 印刷物としてのみ刊行されている書籍などから図表を引用する際、技術上の問題から画像データの引用ではなく筆者が再作成したものを用いた場合がある。電子版の資料から図表を引く際、不鮮明な場合を除き原則画像データを引用とした。
14. 現代日本語の例文の容認度の低さを示すために「?」「??」「*」を用いる。「?」と「??」は当該表現が現代日本語として不自然である、あるいは特に不自然であることを示す。「*」は、その表現が容認不可能であることを示す。

15. 概念・概念メタファー・言語表現の意味を指す場合〈 〉を，語や語句など，言語形式を指す場合「 」を用いる。英語の言語表現は斜体で示し，概念・概念メタファーは小型大文字で示す（表現の意味は斜体・小型大文字以外で表記する）。ただし，引用の際はその限りではない。

本稿は、筆者がこれまでに執筆した以下の論文に基づき、その後の研究成果に基づいて、大幅な加筆修正を施したものである。下には論文内容の該当する章を示すが、各章との対応は目安であり、構成上の事情で別章に一部の論考を移動したことがある。

【第3章】

後藤秀貴 (2015). 「「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴—比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から—」『日本言語学会第151回大会予稿集』, pp. 40–45.

後藤秀貴 (2017). 「再び日本語の「胸」の理解をめぐって—英語との比較から—」『言語文化共同研究プロジェクト2016 交差するレトリック—精神と身体, メタファーと認知—』, pp. 39–51.

後藤秀貴 (2018). 「日英語の胸部と腹部の理解をめぐって—比喩的認知を生む身体経験, 社会・文化経験の観点から—」『JELS』, 35, pp. 21–27.

後藤秀貴 (2018). 「日英語の頭部の理解をめぐって—理性・知性の座としての「頭」と head—」『言語文化共同研究プロジェクト2017 レトリック, メタファー, ディスコース』, pp. 29–42.

【第4章】

後藤秀貴 (2019). 「精神の座としての〈腹〉—身体部位詞の通時的観察と認知言語学的分析—」『言語文化共同研究プロジェクト2018 レトリックとコミュニケーション』, pp. 23–35.

後藤秀貴 (2020). 「精神作用を表す身体部位詞の史的展開—〈胸〉と〈頭〉を中心に—」『日本認知言語学会論文集』, 20, pp. 138–150.

後藤秀貴 (2021). 「精神の座としての〈腹〉の史的展開再考—中世以前の表現に注目して—」『言語文化共同研究プロジェクト2020 感情・感覚のレトリック』, pp. 51–63.

後藤秀貴 (2023). 「〈胸〉と〈頭〉を指す日本語身体部位詞の意味拡張に関する史的研究—精神作用に関する比喩義を対象に—」『認知言語学研究』, 8, pp. 1–37.

第1章 序論

1.1 研究背景と目的

本研究は、腹・胸・頭に関する語を構成要素に含み、精神作用に関する意味を持つ日本語表現を認知言語学の枠組みに基づいて分析することで、それらの表現を成立させる比喻の仕組みと動機づけ（基盤）を明らかにするものである。現代日本語の身体部位詞表現の共時的研究に加え、通時的研究を行うことで、共時的分析の結果を意味拡張という観点から再分析する。

私たち人間はしばしば身体を分節し、言語化している。身体あるいは身体の一部を指す語は身体語や身体部位詞と呼ばれ、身体語彙と呼ばれる語彙カテゴリーを形成している。これらの語は、日常の中で実際の身体部位を指すために用いられるだけでなく、「頭が上がらない」「目を見開く」「鼻で笑う」「開いた口が塞がらない」「肩を落とす」「胸が躍る」「腹が立つ」「腰を抜かす」「腕が鳴る」「手をかける」「足を踏み入れる」など、人の行為や精神作用を表す表現の中で多用される。星野 (1976, p. 155) は、こうした身体に関する語を用いた表現のことを「身体語彙による表現」と呼び、次のように説明している。

身体語彙による表現とは、人間の身体に関する語彙のうち、直接身体・その部位を指示する名称（身体用語）の名称を一部または全部借用しながら、身体の状態・活動を直接指示するというよりは、むしろ別の状態や活動を暗示し描写する表現のことである。（中略）身体とその部位を指示する名称、たとえば頭・髪・脳・額・顔・面・眉・目（眼）・耳・鼻・口・歯・舌・首（頸）・喉・肩・背・胸・肺・腑・乳・腹（肚）・肝（胆）・胃・腸・臍・胴・腰・尻・けつ・股・腿・膝・脛・踵・足・手・腕・肘（肱）・臂・掌・拳・指・爪・毛・皮・脈・神経・肌・筋・肉・しこり・骨・身・体・からだなどと、それらを一部に含みながらその部位の状態や活動を直接指示するというよりは他の精神状態や活動を暗示的比喩的に指示している表現である。

（星野, 1976, p. 155）

星野 (1976) が上の引用の中で「その部位の状態や活動を直接指示するというよりは他の精神状態や活動を暗示的比喩的に指示」すると述べるように、身体語彙による表現は精神作用や比喻と密接な関係にある。我々人間が精神作用を語るために繰り返し身体に目を向け、ある部位の状態や活動を通じ

てそれを言語化しているのだとしたら、そこには何らかの動機と表現を成り立たせる仕組みがあるはずである。この動機と仕組みを明らかにすることは、人間が精神を身体との関係においてどのように理解しているのかを明らかにすることにつながるであろう。

このような考えのもと、身体部位詞表現（以降、本研究では「身体語」の代わりに「身体部位詞」という言い回しを用いる）の研究に取り組んできたのが、認知言語学 (Cognitive Linguistics) である。認知言語学とは、言語の意味というものが、ヒトが身体を通じて世界と関わり、その中で経験的に得た世界に対する認識を反映するという見方をする言語学の一派である (e.g. Ungerer & Schmid, 1996/2006, Ch. 1; 松本, 2003; 山梨, 2000, 第 1 章)。このような言語観を持つ認知言語学においては、身体部位詞表現が、身体を通じたヒトの外界や内面の理解を映し出す言語表現の一例として扱われてきた。たとえば、Sharifian et al. (2008b) では、日本語・中国語・韓国語・インドネシア語・マレー語・バスク語・英語・オランダ語を含む多言語を対象に、内臓（内的器官）(internal organ) を通じた様々な精神の理解が明らかにされている。

Sharifian et al. (2008a) によれば、精神の座を身体のどこに求めるかについては、文化差がありながらも概ね腹部・胸部・頭部の三分位に集中するという。Sharifian et al. (2008a, p. 4) は、これらを Abdominocentrism（腹部中心主義）、Cardiocentrism（心臓中心主義）、Cerebrocentrism (cephalocentrism)（脳中心主義（頭部中心主義））と呼んでいる。彼らによれば、Abdominocentrism は南アジア、ポリネシアといった地域のほか、バスク文化など全く異なる文化でも点在して見られ、一方の Cardiocentrism は、日本・中国・韓国を含む東アジア地域で確認されるという (p. 4)。さらに Sharifian (2008a, p. 4) は、Cerebrocentrism (cephalocentrism) が二元論をとる西洋文化の中に組み込まれており、古代ギリシャ時代より心臓（胸部）に対するもう一つの精神の座としてしばしば脳（頭）が選ばれてきた歴史があると述べている。

Sharifian et al. (2008a) の分類では、日本文化は Cardiocentrism（心臓中心主義）の文化として位置付けられているが、同論文集に収録された Ikegami (2008) の研究でも、日本語の「こころ」がもとは心臓の意味を有しており、感情・思考・意志を含むあらゆる精神作用に対して用いられることが論じられている。その一方で、Ikegami (2008, pp. 170–172, 186) は「こころ」（心臓）と同じ内臓を指していた「肝（きも）」に加え、それらの外的部位にあたる「胸」と「腹」にも精神が結びつくとして述べており、さらに脳の働きの意味では「頭」も精神義を持つと追記している。日本語において、腹部・胸部・頭部の三部位がすべて精神の座として捉えられるということは、次に示す豊かな身体部位詞表現の存在からも明らかである。

- (1) 【怒り】腹を立てる／腹に据えかねる 【不満】腹が脹れる 【可笑しさ】腹を切る 【性格】腹汚い 【度量】腹が小さい 【理解・納得】腹に落ちる 【内心・本心】腹の中 【考え・意図】腹に一物 【覚悟・決心】腹を括る
- (2) 【悲しみ・辛さ・不安・驚き】胸が潰れる 【苦悶・恋慕】胸を焦がす 【恐怖】胸を冷やす 【喜び・期待】胸が躍る 【感銘】胸に響く 【嫌悪・怒り】胸が悪い 【怒り】胸が煮える 【驚き】胸をつく 【感情の高ぶり】胸に迫る 【感情の解消】胸が開く 【内心・本心】胸の内 【考え・意図】胸算用 【覚悟・決心】胸を定める 【理解・納得】胸に落ちる 【記憶】胸に刻む 【度量・包容力】胸が広い
- (3) 【怒り】頭に来る 【興奮の抑制】頭を冷やす 【思考（苦悶）】頭を砕く 【考え・記憶の想起】頭に浮かぶ 【思考】頭を使う 【思考力】頭が足りない 【思考方法】頭が古い 【記憶】頭に入れる

本研究では、身体部位詞のうち、日本語の精神作用を論じる上で特に重要と考えられるこれら腹・胸・頭の三部位に焦点を絞る。認知言語学理論を援用することで、精神作用に関する意味を持つ腹・胸・頭の身体部位詞表現（身体語彙による表現）が、どのような仕組みと動機づけによって成り立っているのかを探っていく。

認知言語学の立場に基づくと、精神作用に関する身体部位詞表現の観察を通じて明らかになるのは、我々人間が生物として与えられた身体を介し、自らの置かれた社会・文化の中でどのように心を理解し共有しているかという人間の有りよう、つまり心身の文化モデルである。ここでいう「文化モデル (cultural model)」とは、Quinn and Holland (1987) によって次のように定義される。

- (4) *Cultural models* are presupposed, taken-for-granted models of the world that are widely shared (although not necessarily to the exclusion of other, alternative models) by the members of a society and that play an enormous role in their understanding of that world and their behavior in it. (文化モデルとは、(必ずしも代わりとなる他のモデルを排除するわけではないが) ある社会の成員によって広く共有された、世界についての前提化した、また当然視されたモデルのことであり、社会の成員がその世界を理解し、その中で行動する際に大きな役割を果たすモデルでのことである。)

(Quinn & Holland, 1987, p. 4 [日本語訳は筆者による])

身体部位詞表現への文化モデルに基づくアプローチは、(非明示的でありながら実質的に文化モデルの援用をした研究を含め) 上に挙げた Sharifian et al. (2008b) の他にも認知言語学の中で多く行われてき

た。たとえば, Niemeier (2000) は (5) の a-d に示すような英語の *heart* 表現を観察することで, 英語話者が HEART を通じて感情を理解する仕組み, つまり感情の座としての〈心臓 (心)〉(HEART) の文化モデルが複数の下位モデルから成ることを明らかにしている。

(5) *Heart as a metonymy for the person* (人物を表すメトニミーとしての心臓)

a. *set one's heart on somebody* (誰かに心臓を置く (←誰かに心を寄せる))

The *heart* as a LIVING ORGANISM (〈生命体〉としての心臓)

b. *make one's heart bleed* (心臓を流血させる (←辛い気持ちになる))

The *heart* as an OBJECT OF VALUE (〈価値あるもの〉としての心臓)

c. *to win someone's heart* (誰かの心臓を勝ち取る (←誰かの愛を勝ち取る))

The *heart* as a CONTAINER (〈容器〉としての心臓)

d. *a heart overflowing (with gratitude)* ((感謝で) 溢れる心臓 (← (感謝で) 溢れる心))

(Niemeier (2000, pp. 200–207) から抜粋 [日本語訳は筆者による])¹

認知言語学による身体部位詞研究の前提にあるのは, 言語が人間の世界に対する認識を反映し, 反対に我々の世界に対する認識が, 言語のありようを説明する手がかりともなるという考えである。本研究でもこのような見方に基づく双方向的なアプローチをとる。つまり, 身体部位詞表現を分析することは精神の座としての身体の文化モデルを明らかにする手段の一つであり, 反対にその文化の中で身体や精神に関する理解様式を把握することは, 身体部位詞表現の意味を説明する手段となりうるという考え方である。

文化モデルの流れを汲む身体部位詞研究では, 精神作用に関する意味を持つ特定の身体部位詞表現の観察を通じて, その部位が当該言語文化の中でどのように理解されているか (いたか) を明らかにすることに重点がおかれる (e.g. Niemeier, 1997, 2000, 2008; Swan, 2009; Yu, 2003, 2008; ケキゼ・田中, 2004; 田中, 2003)。また, そのようにして明らかにされた身体部位の特徴は, 認知言語学の比喩研究において想定される比喩の二大基盤である身体経験 (bodily experience) と社会・文化経験 (social-cultural experience) に基づき (Kövecses, 2005), しばしばその動機づけが論じられてきた。本稿ではこれらの経験に関する基盤を「身体基盤」, 「文化基盤」と呼ぶが (2. 3. 7 節で詳しく説明する), この二大基盤のもとでは, 比喩表現には, 同じ人体を有する人間としての (半) 普遍的基盤に, 社会・文化的要因に基

¹ 当該研究に先立ち, Niemeier (1997) は The *heart* as a LIVING ORGANISM を除く三種のカテゴリーを提案している。また, Niemeier (1997, 2000) では cultural model (文化モデル) ではなく folk model (民衆モデル) という用語が用いられているが, これら二つの用語はしばしば同義的に用いられる。

づく言語固有の基盤が作用することで、通言語的な類似性と相違性の両方が現れうると考えられている。Sharifian (2008b) のモノグラフの存在が裏付けるように、これまでに多くの言語で、身体を用いた表現の言語間の類似性と固有性が、身体基盤・文化基盤の観点から明らかにされてきた。

しかしながら、「基盤」や「動機づけ」と呼ばれるものを議論する上で、十分に系統立った説明の手立てが存在するかといえそうではない。多くの場合、基盤は各々の研究が論じた身体部位の特徴を解釈するための手掛かりとして大きく提示され、巨視的な説明が与えられる傾向にある。そのため、同じ身体部位を扱う場合であっても、研究間で全く異なる視点からの説明が与えられることがしばしばある。

その一例が、本研究の対象の一つである日本語の「腹」である。日本語の「腹」は、精神作用の意味を多く持つ身体部位詞の一つとして、これまでに様々な基盤が議論されてきた。たとえば、Matsuki (1995) は、「腹が立つ」の表現が示すような「腹」と〈怒り〉との強い結びつきに「本音と建前」文化の影響を論じ、田中 (2003) は「腹」表現を広く見た上で摂食活動という生命維持活動を担う「腹」の身体性を強調し、また、McVeigh (1996) は日本語の「腹」表現に対するデュルクハイム (Dürckheim) による日本の「腹」文化 (cf. 「腰肚文化」(齋藤, 2000)) の影響を論じている (これらの研究の詳しい説明は 3.2.2 節で行う)。

互いに関連しながらも異なる精神作用に関する意味が、ある一つの身体部位詞を通じて表現されるのだとしたら、それらを動機づける複数の基盤が存在してもいいはずである。² 本稿では、身体部位詞表現の根底に複数の基盤が共存し、それぞれが部分的に影響し合いながらも独自の役割を果たすことで、当該身体部位の文化モデルを形成するという基本的な見方をとる。このように、精神作用に関わる身体部位詞表現に対し、想定される複数の基盤を集約・系統立てて論じようとした研究は筆者の管見では存在しない。本稿では、下に述べる認知言語学における慣用句研究の知見を援用することに加え、楠見・米田 (2007) の「感情言語の階層モデル」を身体部位詞表現の分析に応用することで、精神作用を表す身体部位詞表現およびその背後にある精神作用の座としての腹・胸・頭の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤を体系的に説明することを研究目的とする。

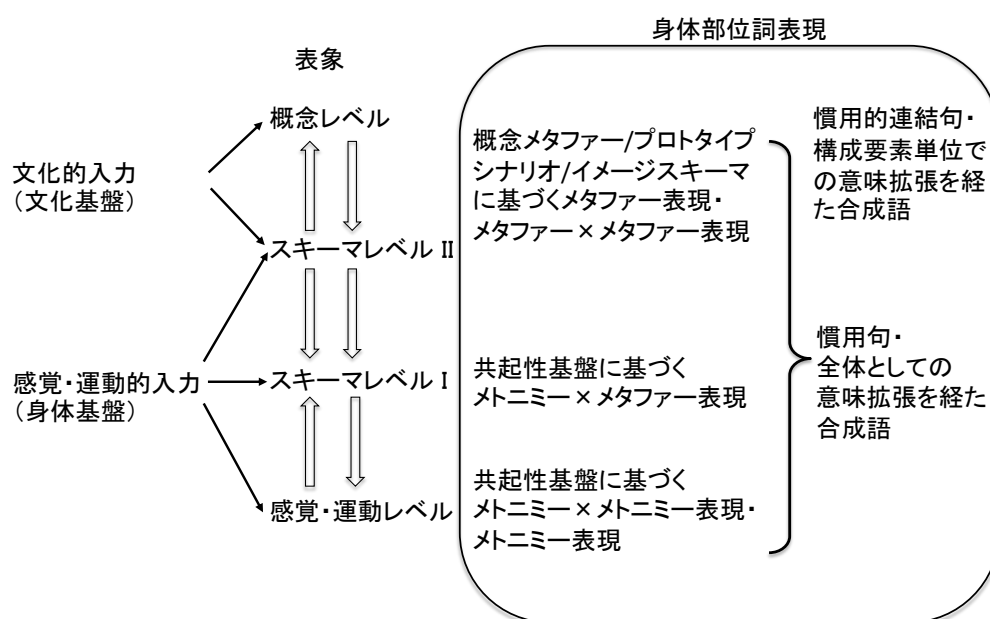
身体部位詞表現が認知言語学の中で注目を受けてきた背景には、その多くが比喩を伴うイディオム・慣用句であるというもう一つの理由がある。認知言語学の理論の一つである概念メタファー理論では、比喩が人間の思考に根ざしたものであり、我々が無意識に使用する日常言語の意味にも比喩の影響が遍在するという見方がとられる (e.g. Lakoff, 1993, p. 203; Lakoff & Johnson, 1980/2003, Ch. 1)。伝統

² もっとも、これまでの研究でも複数の基盤の存在が否定されてきたわけではない。たとえば、3.2.2.5 節で述べるように、田中 (2003) は他に考えられる「腹」の基盤として幾つか言及している。

的な見方では、イディオム・慣用句は、構成要素の意味の総和が全体としての意味と一致しないという非合成性 (non-compositionality) の特徴を有するものとみなされ、多くの場合意味論の分析対象から外されていた (Gibbs, 1990, pp. 419–422; 1994, pp. 270–273)。これに対し、概念メタファー理論における研究が進むにつれ、イディオム・慣用句の意味の成立にも、メタファー・メトニミー・シネクドキーといった人間の思考に根差した比喩が働いていることが明らかにされてきた。その説明によれば、身体部位詞表現に代表される慣用句の多くは、各々の成立に何らかの動機づけがあり、比喩（を含む様々な認知プロセス）を通じて慣用的意味を獲得している (e.g. Gibbs, 1994, Ch. 6; 有蘭, 2009; 庄司, 2010; 杣山, 1997, 2002)。

慣用句研究の一環として身体部位詞を扱う研究においては、身体部位に関するその文字通りの意味と慣用的意味を結ぶ比喩的な成り立ちの説明に重点が置かれている。本研究では、こうした分析の手法を重視し、各々の表現の比喩的な成り立ちに基づいた分類を行う。また、表現の比喩的な成り立ちと基盤（動機づけ）の説明を結びつける分析モデルとして、楠見・米田 (2007) の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を新たに設定し、階層ごとに分類された表現を身体基盤・文化基盤の両方、あるいはいずれかが動機づけるという想定のもと、論考を加える。図1にあらわすこのモデルは、精神作用に関する身体部位詞表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけを帰納的に明らかにし、他部位との比較を可能とするものである。

図1 身体部位詞表現の階層モデル



本稿の前半部（第 3 章）では、上記の「身体部位詞表現の階層モデル」を用いて現代日本語の腹・胸・頭表現を分析することで、身体部位に関する精神の座としての文化モデルを支える基盤を体系化し、そのモデルを最も特徴付ける比喩の仕組みと動機づけ（基盤）を明らかにする。続く後半部（第 4 章）においては、腹・胸・頭表現の意味の展開を歴史的に観察することを通じて、前半部（第 3 章）で分析した腹・胸・頭の身体基盤・文化基盤が、それらの身体部位詞の意味拡張に大きく影響を与えてきたことを示す。

本研究の分析の方針として、表現レベルでの分析を重視することに加え、従来認知言語学研究においてその影響が言及されながらも、深く説明される機会がなかった文化基盤の説明・解釈にも必要なだけの紙面を割くこととする。

1.2 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の定義

前節では、日本語が精神の座を心臓（胸部）に置く Cardiocentrism（心臓中心主義）の言語に分類されながらも、実際には「腹（はら）」「胸（むね）」「頭（あたま）」という身体部位詞全てが何らかの精神作用の意味を持つことを確認した。本研究では、これらの三部位を研究対象とするが、「腹」「胸」「頭」が指す身体部位は、完全に一致しないにせよ、その他の語によって指示されることもある（e.g. 「おなか」「かしら」「胸部」）。本研究では、「腹」「胸」「頭」という語に限定することなく、日本語の「はら」「むね」「あたま」が指す身体部位を〈腹〉〈胸〉〈頭〉（〈 〉で表記）と定めることで、場合によってはその他の関連語を用いて言語化される〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を論じていく。³ 調査対象語の選定方法は第 3 章の共時的分析、第 4 章での通時的分析において詳しく説明するが、ここではまず、本稿が〈腹〉〈胸〉〈頭〉と書く際に意味する「はら」「むね」「あたま」がどのような身体部位（の概念）を指すかについて確認しておきたい。

本研究では〈腹〉〈胸〉〈頭〉の基本概念を現代日本語の「はら」「むね」「あたま」が指す部位として定義づける。すなわち、胴の下半部のうち背面部（背中）を除く部位を〈腹〉、胴のうち腹よりも上の前面部を〈胸〉、胸の上の部位（首から上）の部位を〈頭〉とする。次頁に示す定義は『大辞林 第四版』の「はら（腹）」「むね（胸）」「あたま（頭）」の見出しから身体義に関する語釈を抽出したものである。

³ 凡例 15 のとおり、本稿では〈腹〉〈胸〉〈頭〉のほか、概念・概念メタファー・言語表現の意味を指す場合にも〈 〉を、語や語句など、言語形式を指す場合「 」を用いる。英語の言語表現は斜体で示し、概念・概念メタファーは小型大文字で示す（表現の意味は斜体・小型大文字以外で表記する）。ただし、引用の際はその限りではない。

(6) はら (腹)

①

㊦ 動物の体で、胴の下半部。哺乳類では胸腔（きょうこう）と骨盤の間にあって、胃や腸などの内臓を取めるところ。背の反対側となる体の表面をもいう。おなか。「―が痛い」「―をさする」

④ 消化器、ことに胃腸。「―がすく」「―が減る」「―をこわす」

㊦（「胎」とも書く）母の胎内。また、その母の胎内から生まれたこと。「一の御子は右大臣の女御の御―にて／源氏物語桐壺」

(7) むね (胸)

① 体の前面で、首と腹との間の部分。哺乳類では胴部の頭続く部分で、肋骨に囲まれ、前肢があり、他方は腹部に続く。内部も胸腔は横隔膜により腹腔と仕切られ、呼吸器や循環器がおさまっている。「―を張る」

②（女性の）乳房。「―を隠す」「―が小さい」

③ 心臓。「―がドキドキする」「―がときめく」

④ 肺。「―を病む」

⑤ 胃。

(8) あたま (頭)

①

㊦ 人や動物の首から上の部分。脳や顔のある部分。かしら。こうべ。「―をふる」

④ 顔より上の部分。脳天。「―が割れるように痛い」

㊦ 顙門（ひよめき）の古名。〔和名抄〕

㊦ 頭の毛。頭髮。また、髪。また、髪。また、髪。「―を刈る」「妙な―をしている」

「はら（腹）」「むね（胸）」「あたま（頭）」は基本的に外の身体部位を意識して用いられる語であるが、中に納められた（内臓）器官を指すこともある。上の『大辞林 第四版』の語釈において、各部位と対応する内的器官として挙げられているのは「胃・腸（を含む消化器）」（腹）、「心臓・肺（を含む呼吸器・循環器）・胃」（胸）、「脳」（頭）である。また、「胃」が「腹」と「胸」の両項目に入っていることからわかるように、〈腹〉と〈胸〉の境界線はそれほど明確ではない。たとえば、「腹が減った」と言って手を当てる部位は下腹部ではなく胃が位置するみぞおちのあたりであり、「胸焼け」といえば胃から食道にかけて込み上げる不快感を指す。これに対し、〈胸〉と〈頭〉の区別は比較的明確

である。

日本語の「腹」「胸」「頭」は内的器官に起因する感覚を表現するためにも用いられ、たとえば「心臓がドキドキする」と言う代わりに「胸がドキドキする」と表現し、「腸が痛い」と言う代わりに「腹が痛い」と表現する（「胃が痛い」とは言うが「腹が痛い」はどちらかといえば腸の不調のことである）。宮地 (1979) は「こころ」という語が元は臓器でもあり物思う所としての意味を有していたものの、臓器としての意味は早々に衰退・消失したことを指摘した上で、「しかし、一般には、喜怒悲愁につけて動悸したり痛んだりするムネのあたりやその働きが漠然とココロであると思われていたのかもしれない」(p. 93) と考察している。さらに宮地 (1979, p. 93) は、その要因の一つとして、動物の解体を日常とする牧畜民族ではなかった日本人にとって、わざわざ〈心臓〉を表すためだけの語を必要としなかったことを挙げている。

もっとも、平安中期の漢和辞典『倭名類聚抄』では「肝」に「きも（岐毛）」、「肺」に「ふくふくし（布久不久之）」、「大腸」に「はらわた（波良和太）」、「胃」に「くそわたふくろ（久曾和太布久呂）」という語を充てており、和語としての内臓語彙が存在しなかったわけではない。しかし、宮地 (1979) の論じるように（古来の）日本人にとって内臓に特化した語の必要性が低く、存在したとしてもあまり定着しなかったのだとしたら、身体の内的経験を指す際にこうした語を用いる代わりに外側の部位を指す語を用いるようになったのは自然な帰結であろう。⁴ 現代日本語では、内臓を指す場合に用いられるのは基本的に「肝臓」「大腸」などの漢語であり、内臓を指す語「きも」「はらわた」などの和語の用法はかなり限られている。これらの和語は身体義に限らず、比喻義を含めた場合であっても用法が狭く、『からだことば辞典』の項目数を見ると、「肝（きも）」は 49 件、「腸（はらわた）」は 14 件と、「腹（はら）」の 189 件、「胸（むね）」の 132 件に対して少ない。この点から見ても、日本語の場合内臓語を基準とする身体の一部を調査対象とするのではなく、本来外的部位を差しながらも内臓の意味までを包括する「腹」「胸」「頭」の語を基準に定めることには意義があるだろう。

また、本研究では人間の感情、意志、思考、性格を含むあらゆる心の働き、性質のことを指して「精神作用」、それらを司る人の非肉体的な側面を「精神」と呼ぶ。加えて、精神作用に関する言語の意味のことを「精神義」と呼ぶ。

⁴ 「こころ」がもとは〈心臓〉を指していたのだとしたら、身体義を放棄することで精神義を獲得した特殊な例であろう。これに関連して Ikegami (2008, pp. 175–176) は、精神作用に関する表現は内側の臓器に関する語よりも外側の身体部位に関する語を用いる傾向にあるのではないかという仮説を立てる中で、心臓（「こころ」）は例外的であり、鼓動は明確に聞き取ることができるためではないかと考察している。

1.3 本論文の構成と概要

次章からの論文の構成と概要は次の通りである。第2章では、本研究で援用する理論的枠組みとして、慣用句・イディオム研究と認知言語学の基本概念を整理する。慣用句・イディオム研究に関しては、特に意味的な分解可能性をめぐる議論を辿り、本研究での慣用句（のちに本研究ではこれを慣用表現と呼ぶ）の分類方法を定義する。第3章では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義を成立させる比喻とその動機づけを分析し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）の成立基盤を明らかにする。〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の成立基盤については先行研究でも繰り返し論じられてきたが、本研究では想定される一つの基盤に注目するのではなく、複数の基盤を包括的に論じる。「身体部位詞表現の階層モデル」に基づき各部位の成立基盤の全体像を示した上で、比喻の分布に基づき、その部位を特徴づけるより中心的な動機づけを結論として導く。下に示すのは結論概要である。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、五臓思想（e.g. 長谷川ほか, 2012）・丹田思想（e.g. 片渕, 2023）・本音と建前文化（Matsuki, 1995）といった文化基盤であり、特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有菌, 2007, 2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴付ける動機づけの中心にあるのは、近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか, 2012）である。

第4章では、精神作用に関する〈腹〉〈胸〉〈頭〉を指す身体部位詞の意味拡張を通時的に観察することで、第3章で行なった動機づけの分析を身体部位詞の意味拡張に適用する。ここでは、従来対照言語学的観点から取り上げられることの多かった、身体基盤と文化基盤の理論的想定をもとに、身体基盤は早期からの身体部位詞の比喻義の発生を促す役割を果たし、文化基盤はそれが普及した特定の時代において、身体部位詞の比喻義の発生を促すという仮説を立て、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開から検証する。第4章での結論概要は次の通りである。

- 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現のいずれに関しても、情緒的精神（感情）に関する意味の発生が先行する傾向にある。それが顕著なのが、感情経験に伴う身体経験が特に豊富な〈胸〉である。
- 精神のその他の側面に関わる表現が際立って現れるのは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉ともに近世以降であ

る。〈腹〉〈胸〉は近世に一通り現代に通じる精神作用との対応が出揃い、〈頭〉は一步遅れて近代以降に精神作用との対応が定着する。

- 比喩の類型のうち、感覚・運動レベル(L1)に属する比喩に加え、スキーマレベル I(L2)に属する比喩は早期に出現する傾向が見られる。これらは身体経験との共起性基盤に基づいて成立する比喩であり、身体経験が通時的に身体部位詞の比喩義の発生を動機づけるという理論的な仮説を支持するものである。
- 〈腹〉〈胸〉表現と〈頭〉表現の精神義の拡大の隔たりは、日本における心身観の転換（五臓思想から西洋医学に基づく知識への転換）と概ね対応する。このことは、文化基盤はそれが普及した特定の時代において、身体部位詞の比喩義の発生を促すという理論的仮説を支持する。その一方で、特定の文化基盤の想定される普及時期と完全には整合しない比喩義の発生もある。

最後に第 5 章では本研究の結論を示し、今後の展望を述べる。

第2章 本研究で援用する理論的枠組み

2.1 はじめに

この章では、本研究で援用する理論的枠組みとして、① 慣用句の分解可能性に基づく分類方法、② 認知言語学（認知意味論）の諸概念を概観する。慣用句はその特性上、意味論の研究対象となる機会が少なかったが、1970年代から80年代にかけて国内外で意味の分解可能性が指摘されたことで、盛んに分析が行われるようになった。中でも身体部位詞表現の多くは、字義的意味からの逸脱と形式的固定度の高さを理由に、慣用句の典型例として取り上げられることが多い。⁵ 近年、慣用句の意味分析にとりわけ大きく貢献しているのが、認知意味論の研究テーマの一つでもある比喩研究の成果である。比喩研究の知見は、慣用句の字義的意味と慣用的意味の間に、恣意的でない比喩的な関係が存在することを説明する手立てとして援用されている（e.g. Gibbs, 1994, Ch. 6; 有蘭, 2009; 庄司, 2010; 靱山, 1997, 2002）。本研究においても、慣用句研究の枠組みで各々の身体部位詞表現を観察していくが、最終目標とするのは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の身体部位詞の精神義の体系性を、それらの比喩義を支える精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解と結びつけることで、これらの身体部位がなぜそのような比喩義を持つかという根本的な問いに対する説明を与えることにある。そこで必要となるのが、言語の意味を人間の概念の問題として取り扱う認知言語学の知見である。本章では、2.2節で慣用句の意味的分解可能性をめぐる研究史を辿り、本研究での慣用句（のちにこれを慣用表現と呼ぶ）の分類法を定義する。2.3節では本研究で援用する認知言語学の重要概念を整理し、2.4節で本章のまとめを行う。

2.2 イディオムと慣用句

2.2.1 はじめに

本節では、身体部位詞研究と密接な関係を持つ慣用句研究のうち、特に意味を扱った研究に焦点を当て、慣用句の定義や特徴に関する国内外の研究史を辿る。また、本研究で援用する有蘭 (2009) による慣用句・慣用的連結句の分類を説明した上で、その定義を検討・再解釈するとともに、慣用句の分析において重要なその他の諸概念を整理する。日本語の「慣用句」に相当する言語カテゴリーは、一般に英語で「イディオム (idiom)」と呼ばれるが、後に示すように、慣用句もイディオムも定義によっ

⁵ たとえば、国立国語研究所の「日本語研究・日本語教育文献データベース」(<https://bibdb.ninjal.ac.jp/bunken/ja/>)で「慣用句」あるいは「慣用表現」に「身体」を足してキーワード検索（論文名）を行うと、合計 47 件の論文が得られる（2024年3月10日時点）。

ては狭義にも広義にもなり、また、上位・下位概念を指すための別語も作られている。⁶ 本稿では、日本国内の研究について言及する場合は日本語による用語（e.g. 「慣用句」）を用い、日本国外（英語）の研究について言及する場合は英語による用語（e.g. 「イディオム」）を用いる。⁷

2.2.2 英語のイディオム研究

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English は、idiom に “a group of words whose meaning is different from the meanings of the individual words”（個々の語の意味（の総和）とは異なる意味を持つ語群）という語釈を与えている。構成要素の意味の総和が全体としての意味と一致しないという「非合成性 (non-compositionality)」の特徴は、イディオムを定義づける要素として研究初期から重要視されてきた (Gibbs, 1990, pp. 419–422; 1994, pp. 270–273)。たとえば、Katz and Postal (1963, p. 275) は “The essential feature of an idiom is that its full meaning, and more generally the meaning of any sentence containing an idiomatic stretch, is not a compositional function of the meanings of the idiom's elementary grammatical parts.”（イディオムに不可欠な特徴というのは、その完全な意味、より一般的にいえばイディオム的な語集合を含んだあらゆる文の意味が、単純な文法的要素の意味の合成されたものにはならないことである。）と述べている。また、Fraser (1970, p. 22) は “I shall regard an idiom as a constituent or series of constituents for which the semantic interpretation is not a compositional function of the formatives of which it is composed.”（私は、イディオムをその意味解釈が形式素の合成とはならない一つの要素あるいは一連の要素とみなす。）と述べている（日本語はいずれも筆者による）。⁸

一方、イディオムという用語を非合成的な語集合以外にも適用する見方も現れてくる。Makkai (1972, pp. 24–25) は、イディオムには「解説型イディオム (idioms of decoding)」と「符号化型イディオム (idioms of encoding)」が存在すると主張している。前者は *hot potato*（〈難題〉）や *seize the bull by the horns*（〈難題・困難に立ち向かう〉）のような種類のイディオムで、その慣用的意味を知らない受信者（聞き手・読み手）が解説しても〈熱々の芋〉や〈（雄）牛の角を掴む〉という意味しか得られない。これに対し、後者のイディオムは聞き手として受け取った際に意味の解説はできるものの、コロケーションとしての選好・制約がみられる表現のことを指し、発信者としてはこういった言い回しが慣用的であるか、反対にこういった表現が不自然で使われないかを知っておく必要がある。例として、英語の前置詞 *at*

⁶ 『言語学大辞典』や『国語学大辞典』でも、「慣用句」と「イディオム」を対応させている。

⁷ イディオム・慣用句研究史を辿るにあたり、石田 (2015) や呉 (2016) を併せて参照した。

⁸ Katz and Postal (1963) および Fraser (1970) は、当時の生成統語論の枠組みでのイディオムの扱いを念頭においたものである。たとえば Fraser (1970) は、名詞化（動名詞・行為名詞）の可否、要素の抽出操作（受動化や不変性詞移動など）の可否、副詞の挿入の可否、前置詞句前置の可否といった複数の統語的操作のテストに基づき、イディオムの固定性を七段階に分けた凍結度階層構造 (frozenness hierarchy) を設け、個々のイディオムを分類している。

の用法 (*he drove AT 70 MPH*) が挙げられている。意味的にこれと同じ文を作る場合、その他大半のヨーロッパ言語では *with* に相当する語を用いるのに対し、英語では *at* が慣習的に用いられる。発信者が *at* を用いて表現をするためには、使用に関する知識を持つておく必要がある。この区分は、後に Fillmore et al. (1988) でもイディオム性を特徴づける二分法して取り上げられ、同論文を經由して国広 (1985) の「慣用句」と「連語」の区分と対応づけられることになる（年号が前後する理由は後の注 19 を参照）。

これに類似して、イディオムには合成的あるいは分解可能なものが存在するとしてイディオムを再解釈したのが Nunberg (1978) である。Nunberg (1978, Ch. 4) は、イディオムには「分解可能な (decomposable)」ものと「分解不可能な (non-decomposable)」ものがあると主張し、それらはイディオムの構成要素が全体の意味にどの程度貢献しているかで区別されると説明している（特に pp. 221–228 を参照）。⁹ 分解可能なイディオムは、構成要素の意味と全体の意味の対応が比較的はっきりしている種類のイディオムであり、例として〈結婚を申し込む（プロポーズする）〉ことを表す *pop the question* が挙げられる。このイディオムでは、*pop* が〈（結婚の申し出を）口にする〉という意味の部分を、*the question* は〈結婚の申し出（プロポーズ）〉の意味の部分に対応すると分析できる。もう一つは、構成要素の意味と全体の意味の対応がはっきりしない種類のイディオムであり、例として *kick the bucket* が挙げられる。このイディオムは〈死ぬ〉ことを表すが、*pop the question* とは異なり、構成要素の意味が全体の意味にどう貢献しているかの解釈ができない。¹⁰

Nunberg (1978) はさらに、分解可能なイディオムには「通常形で分解可能な (normally decomposable)」イディオムと「通常でない形で分解可能な (abnormally decomposable)」イディオムが存在すると述べ、後者は慣習的なメタファーの知識を通じて初めて構成要素の意味的対応が理解できると説明している

⁹ のちの Nunberg et al. (1994) において、分解可能なイディオムは *idiomatic phrase*、分解不可能なイディオムは *idiomatically combining expressions* あるいは *idiomatic combination* と呼び改められている。

¹⁰ *kick the bucket* の字義としては、〈バケツを蹴る〉のほかに〈梁を蹴る〉とも解釈することができる。後者は *bucket* がノーフォーク方言において家畜の豚を血抜きのためにくくりつける梁（はり）のことを指したことに由来すると言われており、*Oxford English Dictionary*（以降 *OED* とする）も梁あるいはくびきを指す語 *bucket* n² (“A beam or yoke on which anything may be hung or carried.”) の見出しの phrase として *kick the bucket* を登録している。*kick the bucket* の初出例としては 1785 年初版の *Classical Dictionary of Vulgar Tongue* にある同表現の定義 “To kick the bucket, to die.” が挙げられているだけであるが、*bucket* の用例として引かれた 1888 年の *New English Dictionary* の *bucket* の見出しからの引用に一部言及があるので紹介しておきたい。そこでは、“The beam on which a pig is suspended after he has been slaughtered is called in Norfolk, even in the present day, a ‘bucket’. Since he is suspended by his heels, the phrase to ‘kick the bucket’ came to signify to die.” との説明があり、おそらく *OED* はこの語釈をもとに、〈バケツ〉を表す *bucket* n¹ ではなく、〈梁〉を表す同音異義語 *bucket* n² に *kick the bucket* を登録したのだと考えられる (“bucket, n.” *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, July 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/3246350323>). 他の辞書を見ると、*kick the bucket* の語源に言及するものはそれほど多いとはいえないものの、たとえば *Oxford Dictionary of Idioms* では *kick the bucket* の項目で “The bucket in this phrase may be a pail on which a person committing suicide might stand, kicking it away before they hanged themselves. Another suggestion is that it refers to a beam on which something can be hung up; in Norfolk dialect the beam from which a slaughtered pig was suspended by its heels could be referred to as a bucket.” (p.616) と、「バケツ説」と「梁説」の両方を紹介している。余談ではあるが、死と関連する *bucket* の表現として、*bucket list* (〈死ぬまでにしたいことのリスト〉) がある。2007 年には、余命宣告を受けた二人の老人が、死ぬ前にやり残したことを成し遂げるために旅に出るというストーリーの映画 *The Bucket List* が、Jack Nicholson と Morgan Freeman 主演でアメリカで公開された。日本では『最高の人生の見つけ方』というタイトルのもと 2008 年に公開されている。

(pp. 226–228)。¹¹ たとえば *make tracks* (〈出発する, 立ち去る〉) や *carry the torch* (〈密かに恋焦がれる (憧れをいだく)〉) というイディオムにおいて, その構成要素が何を指すか, つまり *tracks* や *the torch* が何を指すかは慣習的メタファーとしてのそれらに関する知識を以て初めて理解されるものであるという (Gibbs & Nayak, 1989, p. 106; Nunberg, 1978, p. 228)。¹²

分解不可能なイディオムと通常ではない形で分解可能なイディオムは, 各々の構成要素が全体の意味とどう結びつくかが分かりにくいという点で共通するが, Nunberg (1978, pp. 228–229) によれば, 両者は構成要素の名詞句の修飾可能性など, 統語的な固定性・柔軟性に関して差がみられ, その点において両者を区別することに意義があるとしている。通常ではない形で分解可能なイディオムの場合, *make deep tracks* のように (多くはないが) 名詞句の修飾が可能であるのに対し, *kick the bucket* などの分解不可能なイディオムは *ol'* (=old) と *proverbial* のみを例外的に修飾語として受け付ける。さらに通常の形で分解可能なイディオムは様々な修飾が可能で, たとえば本カテゴリーに分類される *blaze a trail* (〈草分けとなる, 道を拓く〉) というイディオムは, *John blazed a pioneering (much-followed, important, valuable) trail in microscopy*. (Nunberg, 1978, p. 229 (下線は筆者による)) のように言うことができる。¹³

¹¹ normally decomposable と abnormally decomposable の訳は Gibbs (1994) の訳本 (辻ほか (訳) (2008)) に合わせた。

¹² Nunberg らは, 慣習的なメタファーの知識 (knowledge of conventional metaphors) とだけ述べるが, 具体的にメタファーとの関係の有無がどのように判断されるのかについての明確な説明はない。注 40 でも触れるが, 通常形で分解可能な (つまり慣習的なメタファーとは関係のない) イディオムの中には, *break the ice* (〈(集まりなどで) 座を和ませる〉) のように明らかにメタファーが関与すると考えられる表現も含まれている。

carry the torch は *carry a torch* ともいい, *OED* では “to carry (etc.) a torch for (someone), to feel (esp. unrequited) love for, to feel lingering affection for.” と説明している。この表現の初出例として挙げられている “When a fellow ‘carries the torch’ it doesn’t imply that he is ‘lit up’ or drunk, but girl-less. His steady has quit him for another or he is lonesome for her.” は, 1927 年の *Vanity Fair* (アメリカの月刊誌) の一節である (Winchell, 1927)。これは Walter Winchell (コラムニスト, ジャーナリスト) によって “A Primer of Broadway Slang” というタイトルで執筆されたブロードウェイで用いられるスラングを概説したコラムの一節であり, その説明によれば, *carry the torch* は, 付き合っている彼女が他人に鞍替えしたり, 彼女が恋しかったりして, girl-less な状態にある男性のことを意味すると説明している。また, 〈トーチ〉としての *torch* が〈愛〉と結びつけられた *OED* の用例はさらに遡ることができ, Richard Brinsley Sheridan による恋愛喜劇 *The Rivals* (1775 年初演) から “The torch of love.” というフレーズが引かれている (“torch, n.” *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, July 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/4181288836>)。なお, *OED* によるこの引用に関して補足を加えておくと, 本フレーズはエピローグの最後つまり劇全体の最後のセリフであり, 次のようになっている。

Our beaux from gallantry would soon be wise –
Would gladly light, their homage to improve,
The lamp of knowledge at the torch of love!

(*The Rivals*, 1775, Epilogue. 55-57)

女性に献身することで, 洒落男たちもじきに賢明になるでしょう。
そして, 自ら向上することを誓いつつ, 愛の灯から火を受けて,
知識のランプに嬉々として明かりをとすことでしょう!

(『恋がたき』, p.194)

¹³ 一部のイディオムは意味的に分析可能であるとする Nunberg (1978) の見方は, その三分類とともに後の研究でも引き継がれ, Raymond W. Gibbs Jr. 氏を中心とした (主に心理学的) 研究の中でも取り入れられている (e.g. Gibbs, 1994; Gibbs et al., 1989; Gibbs and Nayak, 1989; Mueller and Gibbs, 1987)。このうち, Gibbs et al. (1989) の研究を例として取り上げておきたい。Gibbs et al. (1989) は, 三種類のイディオムに関して構成要素の語を類義語に置き替えた場合, 元の慣用的意味が保持されるかを実験を通じて明らかにしている。その結果, 通常形で分解可能なイディオムと通常ではない形で分解可能なイディオムは, 分解不可能なイディオムよりも語の柔軟性が高く, 類義語による語の置き換えを行なっても元の慣用的意味が保たれる傾向が明らかになった (たとえば, *pop the question*, *carry a torch*, *kick the bucket* の名詞目的語を変更して

合成性の原理違反をイディオムの必要条件とみなさない場合、どのような定義が可能であろうか。Nunberg は、後の Nunberg et al. (1994) にてイディオムを定義することの困難さを認め、断定的かつ一つの基準で定義しようとするとは誤解を招き、後付けのものになってしまうと述べている。その上で、イディオムは実際のところ境界が曖昧 (fuzzy) なカテゴリーであると述べる。

In actual linguistic discourse and lexicographical practice, 'idiom' is applied to a fuzzy category defined on the one hand by ostension of prototypical examples like English *kick the bucket*, *take care of* NP, or *keep tabs on* NP, and on the other by implicit opposition to related categories like formulae, fixed phrases, collocations, clichés, sayings, proverbs, and allusions—terms which, like 'idiom' itself, inhabit the ungoverned country between lay metalanguage and the theoretical terminology of linguistics.

(実際の会話や辞書編集においては、イディオムは境界のはっきりしないカテゴリーとされており、一方では *kick the bucket*, *take care of* NP, or *keep tabs on* NP のような典型的な例を直接示すことで、他方では決まり文句、固定表現、コロケーション、クリシェ、格言、ことわざ、引喩などの関連カテゴリー（「イディオム」という用語自体がそうであるように、これらは一般人向けのメタ言語と言語学の理論用語の間にある統一の取れていない領域に位置する用語である）と対比させて暗示的に定義されている。）

(Nunberg et al., 1994, p. 494 [日本語訳は筆者による])

Nunberg et al. (1994) は、続けてイディオムが持つ六つの特性を挙げている。

- (9) conventionality (慣習性)
- inflexibility (固定性)
- figuration (比喩性)
- proverbiality (ことわざ性・周知性)
- informality (インフォーマル性)
- affect (情緒性)

(Nunberg (1978, pp. 492–493) をもとに作成 [日本語訳は筆者による])

pop the request, *carry a light*, *kick the pail* とすると前二つの方が三つ目よりも元の慣用的意味が保たれる)。さらに、通常の形で分解可能なイディオムと通常ではない形で分解可能なイディオムを比較すると、動詞を置き換えた場合は統計的な有意差は認められなかったが（たとえば、*pop the question*, *carry a torch* の動詞を変更して *burst the question*, *hold a torch* とする）、上のように名詞目的語を異なる要素にした場合は通常の形で分解可能なイディオムの方が元の意味を保持しやすいという結果が報告されている。Gibbs et al. (1989) は、その他三つの実験結果をもとに、イディオムの統語的な生産性・語彙的な構造には程度差があり、それはイディオムの分解可能性に基づくと結論づけている。

「慣習性 (conventionality)」とは、イディオム全体の意味や用法は、個々の構成要素の使用を決定づける慣習の知識に基づくだけでは完全には予測できないというものである。「固定性 (inflexibility)」とは、イディオムが統語的に固定されている特性のことを指し、たとえば〈雑談をする〉ことを意味する *shoot the breeze* に対し、受動化 (**the breeze was shot*) や tough 構文化 (**the breeze is hard to shoot*) するなどの操作を加えることはできない。「比喩性 (figuration)」とは、イディオムには典型的にメタファー (e.g. *take the bull by the horns*) やメトニミー (e.g. *lend a hand*), 誇張 (e.g. *not worth the paper it's printed on*) 等の比喩が関わるというものである。「ことわざ性・周知性 (proverbiality)」は、イディオムが社会的な関心の的となるような特定の状況を描写し、またそれによってその状況を暗示的に説明するために用いられるという特性を指す。「社会的な関心の的となる特定の状況」というのは、解釈が難しいものの、具体例としてソワソワすること (becoming restless) やくだけた話をする (talking informally), 秘密を明かすこと (divulging a secret) などが挙げられている。これらは壁によじ登ること (climbing walls), ガムを噛むこと (chewing a gum), 豆をこぼすこと (spilling the beans) を通じて表現される。「インフォーマル性 (informality)」は、イディオムが形式張ったものではなく、日常的・平易な会話、口承文化の中でよく用いられることを指す。最後に「情緒性 (affect)」とは、イディオムがある種の評価や情緒的態度を暗に伝えるためによく用いられるという特性である。

Nunberg et al. (1994, p. 493) は “Apart from the property of conventionality, none of these properties applies obligatorily to all idioms.” (全てのイディオムに必ず当てはまる特性は慣習性を除いて存在しない。) と述べている。単一の基準によるイディオムの定義は常にうまくいかないことを認める一方で、慣習性こそが非合成性にとって代わるイディオムの必須要素であると主張している点が特徴的である。なお、上の説明を一瞥する限りでは、Nunberg et al. (1994) のいう慣習性は用語が違えども実質的に非合成性のことを指しているように見える。¹⁴ しかし、Nunberg et al. (1994) らはこれを明確に否定し、慣習性はあくまで意味の予測可能性の問題であるとする。

The semantic characterization of idioms that we have given here in terms of conventionality amounts to a claim about the predictability of idiom meanings: the meaning of an idiom cannot be predicted on the basis of a knowledge of the rules that determine the meaning or use of its parts when they occur in isolation from one another. (ここでは慣習性 (conventionality) を以てイディオムを意味的に特徴づけているが、

¹⁴ 実際に、Nunberg et al. (1994) による「慣習性」の概念を引きながら、これが「合成性の原理違反」のことであると解説を加える研究も少なくはないので注意が必要である。Nunberg らがイディオムの共通要素であるとする「慣習性」が「合成性の原理違反」であると解釈してしまうと、イディオムには分解可能な種類のものがあると認める彼らの主張との矛盾が生じることになる。

要するにイディオムの意味の予測可能性に関して主張しているのだ。つまり、イディオムの意味というのは、その構成要素が互いに離れて生起した際の意味や用法を決定づける規則の知識をもとに予測できるわけではない。)

(Nunberg et al., 1994, p. 495 [日本語訳と下線は筆者による])

The confusion of compositionality and conventionality may stem in part from a tendency among some linguists to take assertions about the structure of language as claims about what speakers do when they produce or understand sentences. (...) In saying that an expression is compositional we were making a claim about speakers' knowledge of the language; but there is no reason why this claim has to be cashed in in terms of hypotheses about performance. We intended only the weaker claim that speakers are capable of recognizing the compositionality of a phrase like *spill the beans* after the fact, having first divided its meaning on the basis of contextual cues. (合成性と慣習性の混同は、一部の言語学者が、言語構造に関する主張を、話者が文を生み出すあるいは理解する際に行うことについての主張として捉えがちであることにも起因するかもしれない。[中略] ある表現が合成的であると述べる時、我々は話者の言語知識に関する主張をしているのだが、だからといってそれが言語運用に関する仮説の観点からの主張に利用される必要はない。我々が単に主張したいのは、話者が *spill the beans* のようなフレーズに対し、文脈上の手がかりをもとにはじめにその意味を分割することで、その合成性を認識できる能力を持つということである。)

(Nunberg et al., 1994, pp. 498–499 [日本語訳は筆者による])

つまり、Nunberg et al. (1994) のいう慣習性とは、構成要素の通常の意味に関する知識のみでは、その全体の意味を予測することまではできない（つまり、慣習的なものとして知っておく必要がある）ことを指す。その中でも、慣用的意味が与えられたとしてもその意味を分解すらできないものが Nunberg (1978) の分解不可能なイディオムにあたり、そうでないものは分解可能なイディオムとみなされるのである。

2.2.3 日本語の慣用句研究

『国語学大辞典』は、「慣用句」に対し「日本で慣用句というのは、いつでも二つ以上の単語が一続きに、または、相応じて用いられ、その結合が、全体として、ある固定した意味を表わすものをさす。」という定義を与えている。また、白石 (1977, p. 536) は、「成句・慣用句の定義については、研究社編新英英辞典の idiom の第一義が要を得ている。」と述べ、「a group of words which have a special meaning when

used together (e.g. *How do you do?*; *get away with*). (いっしょに使われて特別な意味になる一群の語。How do you do? (ごきげん, いかが。), get away with (俗語。発見されたり罰せられたりすることなしに事をするのに成功する。))」を引いて定義としている。¹⁵『国語学大辞典』の「ある固定した意味をあらわす」や白石 (1977) の「特別な意味になる」という説明には曖昧さが残るものの、慣用句の定義としては先に見た英語圏のイディオムの捉え方と概ね一致している。しかし、石田 (2015, pp. 3-4) の指摘するように、当時の「慣用句」の概念はかなり広く、たとえば白石 (1977) を収録する『国語慣用句大辞典』では、挨拶語・応答語 (e.g. 「お早うございます」), ことわざ・格言 (e.g. 「牛は牛連れ馬は馬連れ」), 連語 (e.g. 「汗をかく」), 狭義の慣用句 (e.g. 「油を売る」), 複合語・単語 (e.g. 「天下り」「恐れる」), 擬態語・擬声語 (e.g. 「こけこっこう」) といった広範囲の言語表現が見出しとして登録されている。¹⁶

1980年代になると、「慣用句」の定義が整えられ、研究対象が狭められていく (石田, 2015; 呉, 2016)。宮地 (1982) は、慣用句に対する明確な定義は定められていないとしながらも、概ね「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」(p. 238) というのが共通理解としてであると述べる。この定義は、構成要素の結びつきの強さを明言していることを除いて上の『国語学大辞典』の定義と大差はないように見えるが、「慣用句」の下位分類として挙げられているのは「連語的成句慣用句」と「比喩的慣用句」のみである。¹⁷前者は、「一般連語句」(つまり、単に一般的な異なる語同士の連結) よりも特に結合度が高いものであり、「あがき」といえば「あがきが取れない」、「雨つゆ」といえば「雨つゆをしのぐ」のように、ある語からある語への想起が容易に行われるという特徴を持つ。後者の「比喩的慣用句」は、結合度の強さに加えて比較的是っきりした比喩的意味を有するもので、「～(の)よう」「～(の)思い」などの直喩標識を伴う「直喩的慣用句」(e.g. 「手に取るよう」「断腸の思い」) と、直喩標識を伴わない「隠喩的慣用句」(e.g. 「肩を持つ」「手を焼く」) が含まれる。¹⁸

宮地 (1982) の連語的成句慣用句と比喩的慣用句は、はっきりとした比喩的意味を持つかどうかという観点から区別されているが、比喩的有無の基準はあくまで程度問題として扱われており、分類に関

¹⁵ 明確な定義を避けた言い方ではあるが、森田 (1966, p.62) に「こういった慣用表現として認められている、語の特殊な意味での使用や特定の語の組み合わせは決してまれな珍しいものではなく、むしろきわめて日常的なものであって、注意すればいくらかでもその例は見出せるのである。」といった説明もある。

¹⁶ 『国語学大辞典』も「慣用句」としてかなり雑多な表現を例に挙げており、この点については宮地 (1985, p.62) も「その雑然たることに閉口するよりほかはない」と批判している。なお、石田 (2015) では、宮地氏による批判は白石 (1977) への批判として紹介されているが、厳密には、宮地 (1985, p.62) は上の引用文を先に述べたのちに「白石大二 (1972, 1977, 1982) もこれに準ずる」と続けていることから、主に『国語学大辞典』の「慣用句」に向けた批判であると考えられる。

¹⁷ 「連語的成句慣用句」は、後の宮地 (1985) にて「連語的慣用句」と呼び改められている。

¹⁸ 本研究では、直喩・隠喩・換喩・提喩をそれぞれシメリー・メタファー・メトニミー・シネクドキーと呼ぶが、先行研究の引用の際はその引用元の呼び方に合わせる。

して研究者間で意見の不一致が生じうる表現が多く挙げられている。たとえば、宮地 (1982, p. 239) では、連語的成句慣用句に「手を染める」「手を出す」「手をかける」を含めているが、認知言語学的観点から見ると、これらの意味成立に比喩が関与していることは明らかであろう。「手を出す」を例にとると、この表現は字義的には対象に向かって〈手を出す〉という行為を表すが、この字義はメトニミーを介して〈物体に接触する〉という行為の目的へ、さらにそこから物理的接触を以て物事への関与（〈新たに（余計な）物事と関係を持つ〉）の意味を表すようになっている（有蘭, 2009, p. 143）。

反対に、比喩的慣用句については細分化の余地がある。たとえば、宮地 (1982, p. 238) は比喩的慣用句に直喩的慣用句と隠喩的慣用句を下位区分として設けているが、実際のところ後者には換喩や提喩とみなされるべき表現が含まれている。舩山 (1997, p. 33) は、宮地 (1982, p. 240) が隠喩的慣用句とする「兜をぬぐ」を例にとり、〈兜をぬぐ〉という字義的意味が〈自分の負けを認める〉ことを表すようになるには、換喩が働いていることを指摘している。

国広 (1985) は、宮地 (1982) の慣用句の定義に関して、① 語の結びつきの強さ、② 全体で決まった意味を持つことの二点が指摘されていることの重要性を述べた上で (p. 6)、これらの区別をさらに掘り下げる形で慣用句論を展開している。国広 (1985, p. 6) は、慣用句を「解釈型慣用句」と「表現型慣用句」に区別している。前者は、日本語学習者がその意味を教えてもらうまで意味解釈が不可能な種類の表現であり、後者は意味理解こそできるものの、それに接するまで自ら考え出すことはできないような種類の表現である。前者の例として「手を焼く」、後者の例として「穴が開くほど見つめる」が挙げられている。国広 (1985, p. 6) は、これらの区分が Fillmore et al. (1983) の述べる decoding idiom と encoding idiom に相当するとした上で、前者を「慣用句」、後者を「連語」と呼び改めている。¹⁹ 以下、国広 (1985) の示す定義である。

(10) 慣用句：二語（以上）の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和からは出て来ないもの。

連語：二語（以上）の連結使用が、構成語の意味ではなく慣用によって決まっているもので、全体の意味は構成語個々の意味から理解できるもの。

（国広, 1985, p. 7 [構成の都合上、二つの順番を入れ替え]）

なお、国広 (1985, p. 6) は単なる語同士の連結（宮地 (1982) でいう「一般的連語句」のこと）を「語

¹⁹ Fillmore et al. (1983) は「未発表」として参考文献一覧にあるが、これはのちに Fillmore et al. (1988) として公刊された論文であると考えられる。繰り返しになるが、Fillmore et al. (1983) の decoding idiom と encoding idiom は 2.2.2 節のはじめに言及した Makkai (1972) による idioms of decoding と idioms of encoding の概念に由来する。

連結」と呼び、連語を異なる意味で用いている。²⁰ 上の定義に基づく、国広 (1985) のいう連語と慣用句は、構成要素の固定という点では共通する一方で、合成性が保たれているかどうか（つまり、句全体の意味を構成語各々の意味から導くことができるか否か）という点で異なる。慣用句については、意味の観点から次のように分類している。

(11) (I) 構成語の意味が不透明の場合

- (i) 不透明：間に合う／お目にかかる 等
- (ii) 慣用句特有語：あぐらをかく／あっけに取られる 等

(II) 比喩の意味が発達した場合

- (iii) 原義が併存：足を洗う／頭をかかえる 等
- (iv) 原義はまれ：同じ釜の飯を食う／顔に泥を塗る 等
- (v) 最初から比喩的：顔をつぶす／腹が立つ 等

(III) 文化が関係する場合

- (vi) 動作・表情の意味：あごを出す／頭があがらない 等
- (vii) 故事に基づく：白羽の矢を立てる／元の木阿弥 等
- (viii) 風習に基づく：六日のあやめ、十日の菊／お茶をひく 等

(国広 (1985, p. 8) の分類に挙げられている例を追加)

例を挙げながら一つずつ説明していく。(I) 構成語の意味が不透明の場合のうち、(i) 不透明は、構成語の普通の意味と慣用句における意味との関係性が不透明なもので、「間に合う」「お目にかかる」などがその例である。一方、(ii) 慣用句特有語とは、構成語の一部が慣用句の中でしか用いられないもので、たとえば、「あぐらをかく」「あっけに取られる」の下線を引いた語がそれに当たる。

次に、(II) 比喩の意味が発達した場合のうち、(iii) 原義が併存と (iv) 原義はまれは、いずれも字義的解釈が可能な表現で、これらは字義的な意味での使用がどの程度残っているかで区別される。前者には「足を洗う」「頭をかかえる」が、後者には「同じ釜の飯を食う」「顔に泥を塗る」が含まれる。こ

²⁰ 語連結とは、慣用句でもなく連語でもない単なる語の連結 (e.g. 「本を読む」「本を買う」) のことを指す。また、国広 (1985) は、名称としては連語を慣用句から切り離しつつも、連語も広義の慣用句と捉え、その後も構成語同士の連結の程度に基づいて分類・論考を行なっている。「語連結」「連語」「慣用句」は、後に国広 (1997) では「用例」「連語」「成句」と呼び改められ、結合度と意味の成り立ちについて次のような比較表が示されている (p. 131)。

	結合度	意味
用例	自由	個々の語から引き出せる
連語	かなり固定	個々の語から引き出せる
成句	固定	個々の語の意味の総和とは異なる

れらとは対照的に (v) 最初から比喩的に当てはまる表現は、もともと字義的な意味が現実的には成立しない種類のもので、「顔をつぶす」「腹が立つ」が例として挙げられている。これら (iii) から (v) の分類は、句全体としての字義的意味の成立度合いに基づいているが、例からも分かるように、隠喩 (e.g. 「腹が立つ」)・換喩 (e.g. 「頭をかかえる」)・提喩 (e.g. 「同じ釜の飯を食う」) という異なる種の比喩が入り混じった状態にある。

(III) 文化が関係する場合の分類群のうち、(vi) 動作・表情の意味は、字義的には何らかの動作・表情を意味する表現が、文化的に意味づけされているものである。国広 (1985) は、「あごを出す」を例に挙げて、このしぐさは日本では「精魂尽き果てる」ことを表すのに対し、英米人にとっては「戦闘的に構える」ことを表すことを指摘している。²¹ 最後に、(vii) 故事に基づく (e.g. 「白羽の矢を立てる」) と (viii) 風習に基づく (e.g. 「六日のあやめ、十日の菊」) であるが、どちらも例のみで説明は割愛されている。

以上、宮地 (1982) から国広 (1985) にかけて、構成語同士の結びつきの強さと、句としての意味 (慣用的意味) と構成要素の意味の総和の非対応という二つの観点から、慣用句の範囲が狭められ、分類が整理された。ここで注目に値するのは、比喩の類型に基づいた分類が現れつつある点である。ただし、いずれの研究も大まかな分類を与えるに留まっており、慣用句の意味の成り立ちに深く踏み込んだわけではない。比喩研究に基づく慣用句論は、以下に述べる舩山 (1997) を待つことになる。

舩山 (1997) は、構成語の意味の総和の成立の有無、慣用的意味を成立させる比喩的動機付けの観点から、慣用句の新たな分類法を提案している。²² まず舩山 (1997) は、Cruse (1986) の伝統的なイディオムの定義と国広 (1985) による慣用句の定義に簡単に触れたのち、「慣用句」を「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連語の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの。」(p. 30) と定義する。²³ 舩山 (1997) の定義で重要なのは、構成語の単位で転義が生じている表現は慣用句として扱われないという点である。舩山 (1997, p. 30) は、宮地 (1982, p. 205) が慣用句の一つとして挙げた「目が高い」に触れ、この表現は厳密には上の慣用句の定義に当てはまらなないと述べる。この表現では、「目」という構成語が単独で〈鑑識力〉という意味へと転義を起こしており、

²¹ 小林 (1975) を参照したとある。

²² 舩山 (1997) では、ここで紹介する比喩の類型に基づく分析が認知意味論の枠組みによるとは述べていないが、後に『認知意味論のしくみ』という書名の著書 (舩山, 2002) において、慣用句に対する同様の分析を行なっている。

²³ Cruse (1986, p.37) は、idiom の伝統的定義を “...an idiom is an expression whose meaning cannot be accounted for as a compositional function of the meanings its parts have when they are not parts of idioms.” (イディオムとは、その意味を、構成要素がイディオムの一部でない時に表す意味の合成関数として説明することができない表現である。) と紹介した上で、「構成要素がイディオムでない時の意味」を考えるというのは、すでにその段階でイディオムとイディオムでない表現を弁別していることになるために、循環論に陥ってしまうという問題点を指摘している。その上で、循環論とならないためには、イディオムに語彙的な複合性 (つまり複数の語によって成り立つこと) と、意味的には単一の最小単位であることの二つの条件を求めるべきであることを論じている。

それゆえ「目」の転義とその他の構成語の意味の総和として最終的な句全体の意味が理解できるからである。また、〈鑑識力〉としての「目」の意味拡張は、「目が利く」「目が肥えている」「ものを見る目がある／ない」等の表現においても認められ、「目が高い」に限ったものではないことから裏付けられる。

以上のような定義を以て慣用句の範囲を厳密に絞った上で、初山 (1997, pp. 32–36) は、宮地 (1982), 国広 (1985) による慣用句の分類を批判的に検討している。まず、宮地 (1982) が「連語成句的慣用句」と呼び、「一般の連語句より結合度が高いだけのもの」と説明するものは、上記の(初山による)慣用句の定義にも、宮地 (1982) の慣用句の定義「単語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」(p. 238) にも適合しない。さらに初山 (1997) は、宮地 (1982), 国広 (1985) による比喩が絡む慣用句の分類を詳細に検討する必要性を説いている。具体的には、宮地 (1982) が「隠喩的慣用句」と呼ぶカテゴリーにおいて、隠喩とは言えないものが含まれていること、また、下位分類が必要であるということ、国広 (1985) において「比喩的意味が発達した場合」の「原義が併存する」ものと「原義はまれ」なものに関して、隠喩や換喩等に比喩を下位分類する余地があること、「最初から比喩的な表現」と呼ぶものは矛盾を含むものであることを指摘している。さらに、「構成語の意味が不透明」のものに含まれている慣用句としての意味のみを持つような表現は、「最初から比喩的な表現」と統合するべきであると加えている。

以上のような批判的検討を経て、初山 (1997) が新たに提案する慣用句の分類は以下の通りである。

(12) I 構成語の意味の総和としての意味が成立しない (即ち、慣用的意味のみ)

I-1 意味不明語を含む：あつけに取られる／うだつが上がらない等 (下線を施した語が意味不明語)²⁴

I-2 解釈不能：世話を焼く／腹が立つ等

II 構成語の意味の総和としての意味が成立する

II-1 構成語の意味の総和としての意味から比喩に基づき慣用的意味が成立

II-1-a 隠喩に基づく：足を洗う／骨を折る等

II-1-b 換喩に基づく：頭を抱える／言うことを聞く等

II-1-c 提喩に基づく：煮え湯を飲まされる／危ない橋を渡る等

II-1-d 二つの種類の比喩の複合に基づく

II-1-d-(1) 「換喩＋隠喩」に基づく：(計画の) 舵をとる／尻が重い等

²⁴ 引用元では「下線」は「傍線」とあるが、横書きの本稿に合わせて変更した。

II-1-d-(2)「換喩+提喩」に基づく：(ペナントレースが)幕をあける／(巨人に)軍配が上がる等

II-2 構成語の意味の総和としての意味と慣用的意味の比喩に基づく関連付けが不能：手を焼く／油を売る等

(舩山 1997, p. 42)

I は、構成語の意味の総和（粗くいえば、構成語の意味を足し合わせて得られる句全体の意味）が成立せず、慣用的意味のみを持つようなカテゴリーである。このカテゴリーは、「あっけ」や「うだつ」のように、慣用句を離れた場合に意味不明となる構成語を含むものと、意味不明語は含まないものの、構成語の総和的意味の解釈が不可能なものへと下位分類される。次に、II のカテゴリーは構成語の意味の総和（つまり、字義を足し合わせた句全体の意味）が成立するカテゴリーである。これは二つに大分され、一つは句の構成語の意味の総和から慣用的意味への転義が比喩によって動機づけられるもの、もう一つはそのような両端の意味の動機づけが識別困難なものである。

さて、舩山(1997)は、II の一つ目の下位カテゴリーを「隠喩」「換喩」「提喩」という異なる比喩の仕組みに基づいて細分化しているが、これらの説明を行う前に、三種の比喩がどのようなものかについて説明しておく。周知の通り、「隠喩」「換喩」「提喩」は英語では「メタファー (metaphor)」「メトニミー (metonymy)」「シネクドキー (synecdoche)」と訳される。端的に言うのであれば、「隠喩／メタファー」は類似性 (similarity) に基づく比喩、「換喩／メトニミー」は隣接性 (contiguity) に基づく比喩、「提喩／シネクドキー (synecdoche)」は包含関係（種と類の関係）に基づく比喩とされる。瀬戸 (1995, pp. 203–205) は、端的な日本語の例として「月見うどん」「きつねうどん」「親子丼」を挙げている。²⁵「月見うどん」はうどんの上にのせられた鶏卵を、それに形が似た月見の際の満月に見立てる隠喩（メタファー）である。「きつねうどん」は一般に油揚げを乗せたうどんを指すが、これは油揚げがきつねの好む食べ物であるという通説を利用している。きつねと油揚げの関係の近さを用いているため、これは換喩（メトニミー）である。また、「親子丼」は一般に鶏肉と鶏卵を使用したどんぶりのことを指すが、「親子」という語は人間やあらゆる生物の親と子どもの関係を指すものであり、鶏に限ったことではない。鶏卵と鶏（肉）の関係を指すためにより一般的な関係を示す語が用いられているので、この表現は提喩

²⁵ ここでは瀬戸 (1995) の例を挙げているが、日本における本格的な比喩研究の出発点は佐藤 (1978/1992) であるといえよう。瀬戸 (1995) や下に示す舩山 (2002) の比喩観は認知言語学的な要素を盛り込んだものであるが、その基本的な部分は佐藤 (1978/1992) を引き継いだものとなる。たとえば後述するように、換喩と提喩に明確な区別を設けるという佐藤 (1978/1992, 第4章) の考えは両者に引き継がれている。現代の認知言語学的比喩研究においても、西洋圏では提喩を換喩の一種と捉えようとする立場が今も強いのに対し、国内では瀬戸賢一氏による研究を筆頭に両者は本質的に異なるものであるとする考えが普及していると考えられる（詳しくは瀬戸 (2017) を参照）。

(シネクドキー) とみなされる。²⁶ 以下は舩山 (1997) が示す隠喩・換喩・提喩の定義である。なお、舩山 (2002, pp. 65, 69, 76) においては、メタファー・メトニミー・シネクドキーに対して同じ定義が与えられているため、これらの用語を追加している。

(13) 隠喩／メタファー： 二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

換喩／メトニミー： 二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

提喩／シネクドキー： より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

(舩山 (1997, p. 31) を一部変更)

これらの比喩が (12) の II-1 に分類される慣用句の意味にどう貢献するのかについて、舩山 (1997, pp. 36-42) に基づき説明を加えていく。第一に、隠喩に基づく表現 (II-1-a) の例として挙げられているのが、「足を洗う」である。この表現では〈足の汚れを落とす〉という意味（構成語の総和的意味）と、〈好ましくない仕事・行為等をやめる〉という意味（慣用的意味）が、互いの類似性に基づいて結びついている。換喩に基づく表現 (II-1-b) の一例は、本稿でものちに扱う「頭を抱える」である (3. 6. 1 節)。この表現は、〈頭を抱える〉という意味（構成語の総和的意味）と〈困り果てる〉という意味（慣用的意味）が表す二つの行為が同時に行われるという事実に基づいて成立している。このほかに、換喩に基づく表現 (II-1-b) として、「目をつぶる」(〈見なかったことにする〉) や「目に見える」(〈はっきりとわかる・確実である〉) のように「手段—目的／原因—結果」の関係によって成り立つ表現、「同じ釜の飯を食う」(〈一緒に生活する〉) のように「部分—全体」の関係によって成り立つ表現が論じられている。次に、提喩に基づく表現 (II-1-c) は「煮え湯を飲まされる」のようなものが該当する。この表現では、字義通りに解釈した場合の行為と慣用的意味である〈ひどい目に合わせる〉ことは、特殊と一般の関係にあり、慣用的意味の成立には特殊な事柄を以てより一般的なことを表すという提喩の原理が働いている。さらに舩山 (1997) によれば、比喩が二重に重なってできた表現も存在し、「換喩+隠喩」

²⁶ もちろん厳密に言うのであれば、親子丼に用いられる鶏（肉）と鶏卵に正式な親子関係はない。鶏卵から雛が孵化し、後に成鶏になるという成長の過程をもとに互いの関係が推論されることで成立した表現である。また、「月見うどん」についても、〈月見〉という見る行為から、見る対象である〈月〉へのメトニミー転移が関わっている。

と「換喩+提喩」という二種類の組み合わせがある。「舵をとる」は操船の意味だけでなく、さらに〈物事をうまく進める〉という意味として別場面でも用いられうる。この場合、換喩を介して〈舵を手にとる〉ことから〈舵を操作して船を進める〉へ、さらに隠喩を介して〈物事をうまく進める〉という意味へと転義していると考えられる。他方、「換喩+提喩」の例である「幕をあける」は、実際に幕が上がって開始される芝居などの場合は換喩の働きによって〈芝居等が始まる〉ことを表すが、それだけでなく、〈色々な催し等が始まる〉ことも意味として持つ (e.g. 「ペナントレースは先週幕を開けた」)。この場合、〈芝居が始まる〉ことから〈色々な催し等が始まる〉への転義には提喩が関わっており、〈(舞台の) 幕を開ける〉の意味と〈色々な催し等が始まる〉の意味の間には換喩と提喩の二つが介入している。

「隠喩」「換喩」「提喩」という三種類の比喩に基づき、慣用句の意味の成り立ちを詳細に論じた舩山 (1997) の研究は、慣用句研究のみならず、身体部位詞を含む比喩表現の認知言語学的研究にとって参照すべき部分が多い。しかしながら、本研究のように身体部位詞を構成要素に持つ比喩表現全体を扱う場合、対象を狭義の慣用句に限定する必要はないといえる。ここでいう狭義の意味での慣用句とは、舩山 (1997, p. 30) の「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連語の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの。」の定義に当てはまる表現を指す。この定義によれば、「目が高い」は慣用句とはみなされないため、「慣用句」を研究対象としている限り分析対象から外されてしまうことになる。しかし、転義が構成素単位であろうとなかろうと、「目が高い」の「目」が身体部位詞としての意味から〈鑑識力〉という別の領域へと意味拡張を起こしていることは確かであり、身体部位詞によって成り立つ比喩表現の研究対象から外すべき理由はない。以下、従来の慣用句に加え、構成要素が慣用的（比喩的）意味の一部を担う表現を新たに分析対象とした有蘭 (2009) の研究を見ておきたい。

有蘭 (2009) は、日本語身体部位詞を構成要素に持つ比喩表現の成り立ちを認知言語学の立場から分析した研究である。有蘭 (2009, Ch. 3) は、舩山 (1997) が「慣用句」とするものに加え、構成要素が慣用的（比喩的）意味の一部を担う表現の類を「慣用的連結句」と呼び、さらにそれらを包括する「慣用表現」というカテゴリーを設定している。これらの具体的な定義は次の通りである。

- (14) 慣用表現： その構成語の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着し

ている表現（田中, 2002a, p. 6）²⁷

慣用句： 個々の構成要素は全体の慣用的意味の一部には貢献せず、それらが連結した形で始めて全体の慣用的意味が成立するもので、それにより、複数の語の連結使用が固定した表現

慣用的連結句： 個々の構成要素が全体の慣用的意味の一部に貢献するもので、複数の語の連結使用が比較的固定した表現

（有蘭, 2009, p. 62）

言葉選びに多少の違いはあるものの、有蘭 (2009) のいう慣用句は、本質的には国広 (1985) や Cruse (1986) を経て 舩山 (1997) によって定められた慣用句の定義に対応すると考えて差し支えないだろう。慣用的連結句は国広 (1985) の連語の概念に近く（双方の違いについては後ほど説明を加える）、舩山 (1997) では慣用句ではないとして考察の対象外とされたものである。

さらに有蘭 (2009) は、慣用句と慣用的連結句について以下のような下位分類を与えている。

図 2 身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現の分類（有蘭 2009, p. 63）

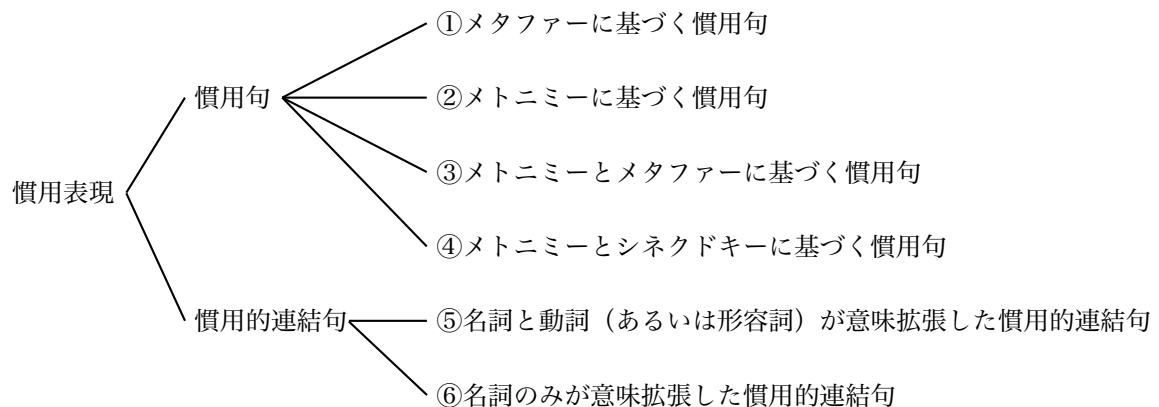


図 2 のうち、慣用句の下位分類は舩山 (1997) の (12) II-1 から提喻（シネクドキー）に基づく表現を除いたものである。²⁸ 一方、慣用的連結句は舩山 (1997) では扱われなかった種類の慣用表現であるため、以下、有蘭 (2009, pp. 73-83) の分析に従って説明しておきたい。慣用的連結句のうち、⑤の「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」は、句全体の意味の総和ではなく各々の構成要素が全体の慣用的意味の一部に貢献するもので、個々の構成要素（すなわち名詞とその他の構成要素

²⁷ 「慣用表現」の概念は田中 (2002a)（本稿でいう田中 (2002)）の「慣用表現」の定義に従うと述べられている。なお、引用頁が p. 6 とあるが、正しくは p. 5 である。

²⁸ 有蘭 (2009, pp. 63-64) はシネクドキーを除外した理由として、扱った身体部位詞による表現に該当するものがなかったためと述べている。

である動詞あるいは形容詞の両方) が意味拡張を起こしているものである。例として、「耳が肥える」という表現の成り立ちを見てみよう。本表現は、全体として〈鑑賞力(観賞力)・鑑識力が豊かになる〉さまを表すが、その構成要素である「耳」と「肥える」の意味拡張は分析的に説明することが可能である。²⁹ すなわち、「耳」はその部位が担う機能との関わりからメトニミー拡張によって〈鑑賞力〉という意味を実現しており、他方、「肥える」は本来の〈土地や生物の体格が豊かになる〉という意味から類似性に基づくメタファーによって〈能力が豊かになる〉という意味を実現している。重要なのは、「耳」のみが意味拡張を経ているのではなく、同時に「肥える」も〈能力が豊かになる〉という抽象的な事柄に対する意味へと意味拡張を起こしているという点である。これに対し、⑥の「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」の場合は、名詞のみに意味拡張が生じる。たとえば、「口が上手い」という表現では、「口」が言語行為のフレームに基づくメトニミーを介して、その行為を行う際に要求される〈方法〉つまり〈話し方〉という意味へと意味拡張している。一方、「上手い」はその語が本来持つ〈巧みである〉さまを表し、意味拡張が見られない。なお、図2では慣用句にのみ関与する比喻の類型に基づいた下位分類が与えられているが、上の説明からもわかるように、有蘭(2009)は構成要素単位での転義にも比喻が関与することを前提に分析を行なっている。

上の⑤「名詞と動詞(あるいは形容詞)が意味拡張した慣用的連結句」と⑥「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」の違いには、構成素同士の結びつきの強さも関係している。有蘭(2009, pp. 78-83)は、⑤と⑥の識別基準として、語の置き換え可能性を挙げている。⑤の「耳が肥える」という表現では、「耳」及び「肥える」がそれぞれ意味拡張を起こしているものの、「耳」を「鑑賞力」に換えて「*鑑賞力が肥える」とすると容認不可能になる。さらに、〈鑑賞力〉としての「耳」の意味は、「耳が肥える」の他に「耳が良い」といった比較的限られた要素と結びつく状況下で発現する。一方、⑥の「口が上手い」では、「口」の〈話し方〉、「上手い」の〈巧みである〉という意味に関して、いずれもその意味が発現する際の結びつく要素に強い制限がない。たとえば、「口」は「早口」「語り口」「直口(ひたくち)」でも〈話し方〉の意味を表しており、同様に「上手い」も「料理が上手い」「字の書き方が上手い」「歌が上手い」など、多くの環境で〈巧みである〉という意味として用いられる。すなわち、⑤の慣用的連結句は各々の構成要素(構成語)が意味拡張を経て句全体の慣用的意味を構成する反面、語の拡張は特定の別語と結びつくことで達成される。構成要素同士の依存度は比較的強く、形式の固定性が高いという特徴を持つのである。これに対し、⑥の慣用的連結句は、⑤よりも構成要素及び句全体の意味の実現において構成要素同士の依存性(形式の固定性)は低く、各々の意味は比較

²⁹ 有蘭(2009)では「鑑賞力」「観賞力」「鑑識力」の全てが用いられているが、以降「鑑賞力」で統一して引用する。

的さまざまな環境下（つまり、その他の要素との結びつきにおいても）で達成される。ゆえに慣用性はより低くなり、語連結（あるいは一般連語句）に近いものとなる。

2.2.4 諸研究の検討と本研究における慣用句および関連概念の定義

以上、英語圏のイディオム研究と日本における慣用句研究を追ってきた。英語圏のイディオム研究は、一部の表現に意味的な内部構造の存在を認め、その程度に応じて「分解不可能なイディオム」と「分解可能なイディオム」（その下位分類として「通常の形で分解可能なイディオム」と「通常ではない形で分解可能なイディオム」）の分類を施している。このうち、厳密な意味で非合成的なものは *kick the bucket* のようなイディオムのみで、日本語研究において国広 (1985)、靱山 (1997)、有蘭 (2009) が「慣用句」と呼ぶものに概ね相当する。一方、有蘭 (2009) が「慣用的連結句」を本格的に取り扱ったことで、意味的に分解可能な表現も研究対象に加わり、「慣用表現」という上位カテゴリーとしてまとめられた。なお、定義を見る限りでは、国広 (1985) の連語と有蘭 (2009) の慣用的連結句は近い概念を指すが、何らかの意味拡張を想定しているか否かという点で異なっている。国広 (1985) の定義では、構成要素の結合度のみを連語であることの要件としているが、有蘭 (2009) の慣用的連結句の場合、下位分類から明らかなように少なくとも一つの構成要素の意味拡張を前提としている。³⁰

さて、Nunberg や Gibbs らがいう分解不可能なイディオムと分解可能なイディオムの区別は、国広 (1985)、靱山 (1997) からの流れを経て有蘭 (2009) で確立された慣用句と慣用的連結句の区別に概ね対応し、このことは有蘭 (2009, p.62) 自身も認めている。³¹ しかしながら、各研究で扱われている表現を詳細に検討してみると、互いの区別が完全には一致しないと思われる点が見つかる。以下、Nunberg や Gibbs らの分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムと、有蘭 (2009) の慣用句・慣用的連結句を比較することで、両者の相違点を探っていく。

第一に、分解不可能なイディオムあるいは慣用句として挙げられている表現を比較した場合、前者の方がその範囲は狭いと考えられる。以下、Gibbs and Nayak (1989) が分解不可能なイディオムとして挙げた表現をみてみよう。

³⁰ より正確に言えば、定義上、国広 (1985) の連語には構成要素単位で意味拡張の生じたものも、生じていないものも含まれることになる。また、有蘭 (2009) の「慣用的連結句」の定義には意味拡張に関する言及はないものの、「慣用的意味」という表現が意味拡張の意味を包含していると解釈する。

³¹ 分解不可能なイディオムと分解可能なイディオムの区別は、Makkai (1972) や Fillmore et al. (1988) のいう解読型イディオムと符号化型イディオムの区別に概ね対応すると言われている (e.g. Croft & Cruse, 2004, p. 232)。2.2.3 節で述べたとおり、国広 (1985) は解読型イディオムと符号化型イディオムの区別を慣用句と連語の区別と対応づけており、このことから分解不可能なイディオム・分解可能なイディオム、慣用句・慣用的連結句が対応することが間接的にわかる。

(15) kick the bucket (to die 〈死ぬ〉)

chew the fat (to talk aimlessly 〈当てもなく話す〉)

cool one's heels (to wait impatiently 〈待ちあぐむ〉)

make the scene (to arrive at party 〈登場する, やってくる〉)

go for broke (to risk everything 〈一か八かやってみる〉)

raise the roof (to get angry 〈怒る〉)

give the sack (to fire from job 〈解雇する〉)

play the field (to date several people 〈複数人と付き合う〉)

shoot the breeze (to talk casually 〈雑談をする〉)

pack a punch (to be powerful 〈効き目が強い〉)

knock on wood (to hope for luck 〈幸運を祈る (うまくいきますように, 無事でありますように)〉)

give the bounce (to get rid of 〈追い出す〉)

(Gibbs & Nayak, 1989, pp.133–134 [日本語訳は筆者による])

これらは () 内の慣用的意味が与えられたとしても, 各々の構成語に基づいてイディオムの意味を分解できないとされている。これを念頭に置いて, 有蘭 (2009) が慣用句に分類している表現の一部を見てみよう。

(16) 腹に納める／腹に持つ／腹を探る／腹を見抜く／腹を割る／腹にしまう／胸にしまう／胸に納める／胸に畳む／胸がいっぱいになる／胸が膨らむ／胸に入れる／胸に刻む／胸に落ちる／胸を割る／頭がいっぱい／頭に叩き込む／頭に入れる／頭に浮かぶ

(有蘭 (2009, 第4章) より抜粋)

3.2.2.6節でも取り上げるが, 有蘭 (2009) は (16) の一連の表現が〈身体 (部位) を, 精神活動の容器として捉える〉という概念メタファーによって動機づけられると主張している。この概念メタファーでは, 〈腹〉〈胸〉〈頭〉が〈容器〉, 〈感情〉や〈思考〉等が〈内容物〉とみなされることで, 〈容器〉と〈内容物〉の関係が〈腹〉〈胸〉〈頭〉と〈精神活動〉の関係に構造的に対応づけられる。ここで注目すべきは, (16) の表現もある程度内部構造を有しているという点である。たとえば, 〈(本心などを) 他に明かさず自分だけ知るものとしておく〉という慣用的意味を持つ「腹に納める」という表現では, 「腹」が〈精神活動の容器としての心〉を指し, 「納める」というのは〈(本心などを) 明かさない〉という意味要素に概ね対応する。実際の使用では, 「このことは腹に納めておこう」のように隠される

対象も言語化されることを考えると、構成語が慣用的意味をどのように成立させているかの説明は可能である。³²もともと、この対応が構造的である限り、「腹に納める」という表現全体が表すイメージ（つまり、句全体の字義的解釈から得られるイメージ）が重要であることは変わらず、それが〈(本心などを) 心にとどめて明かさない〉という慣用的意味と対応している。しかし、(15) に挙げたような表現では、表現全体のイメージ（つまり、句全体の字義的解釈から得られるイメージ）は得られるとしても、(16) のような意味構造の分析はできない。たとえば、*kick the bucket* は〈バケツを蹴る〉あるいは〈梁を蹴る〉という字義的意味を持つ一方で、慣用的意味の〈死ぬ〉をどう分析しようと、構成語の *kick* や *(the) bucket* という部分へと意味を還元することはできない。³³

実際、Nunberg や Gibbs らの分析では、このような「腹に納める」と似た性質を持つ表現は、分解可能なイディオムとして扱われている。Nunberg (1978) や Gibbs and Nayak (1989) が（通常でない形で）分解可能なイディオムとして論じた *spill the beans* と *carry the torch* をみてみよう。³⁴ これらは〈豆をこぼす〉〈トーチを持つ〉という全体としての字義的意味を持ちながらも、各々の要素が慣用的意味の一部とも対応すると分析できる。つまり、*spill* は〈(～を) 明らかにする〉という意味要素と、*the beans* は

³² 確かに、「腹に納める」の慣用的意味を〈(何かを) 他人に知らせないで置く〉などと定義し直すことで、〈他人〉〈知らせない〉という意味要素と「腹に納める」の構成語の対応づけは難しくなる。そうすると、*spill the beans* のように *spill* (=明かす)、*the beans* (=秘密) という語と語の対応が成立する事例との区別は可能であろう。しかし、これは慣用的意味をどう記述するか形式上の問題であり、本質的な問題ではない。Gibbs and O'Brien (1990) は *spill the beans* の他に *let the cat out of the bag* (〈うっかり秘密を漏らす〉) というイディオムを扱っているが、もし語と語の対応が完全であることをイディオムの分解可能性の定義とするなら、*the cat* を〈秘密〉として説明するとしても、*the bag* は慣用的意味の何に対応するか説明がつかず、これも分解不可能なイディオムとして扱わざるを得なくなる。

³³ 誤解を受けないように述べておくと、有蘭 (2009) が慣用句として挙げる表現には、(16) 以外に分解不可能なイディオムに当たるであろう「頭を抱える」なども含まれている。

なお、このほかに有蘭 (2009) では「胸が狭い」(pp. 140, 202) や「腹が大きい」(p. 141) などの表現を慣用句に分類しているが、その後、「身体部位詞+形容詞」の形式で成り立つ表現を詳しく論じた有蘭 (2021) においては、これらは慣用的連結句（身体部位単独での意味拡張を起こした表現）として分類されている。たとえば、「胸が狭い」に対しては、「文字通りの「胸が狭い」という身体的特徴の意味から〈度量が小さい〉という意味が派生するのではなく、「胸」自体の意味が単独で〈精神活動の容器〉と捉えられ、それを描写する形容詞と連結して、句全体が〈精神的特徴〉に関する意味を表している。」(有蘭, 2021, p.36) との説明が与えられている。筆者としては、この説明自体に異議を唱えるつもりはないが、もしこの説明を採用するのであれば、同じく身体部位詞単独が〈精神活動の容器〉を指すと分析できる (16) のような表現は全て慣用的連結句に含まれるはずであり、慣用句と慣用的連結句の分類はイディオムの二分類に近い形になるであろう。

³⁴ 有蘭 (2009, 第3章) では、分解可能なイディオムの下位区分（通常形で分解可能なイディオム・通常でない形で分解可能なイディオム）の批判的検討を行うにあたり、*spill the beans* を通常形で分解可能なイディオムの例として挙げている。しかし、Nunberg や Gibbs らの研究を見ると、当該表現は通常でない形で分解可能なイディオムとして扱われており、部分的な誤読であると考えられる。たとえば、*spill the beans* の分類の根拠として、有蘭 (2009, p.58) は「Gibbs and Nayak (1989: 106), Gibbs (1994: 279) は、*spill the beans* のような通常形で分解可能なイディオムの名詞句 *the beans* は、その比喩的意味（慣用的意味の部分）とより直接的な関係を持つが、*carry a torch* のような通常でない形で分解可能なイディオムの名詞句 *a torch* は、〈トーチ〉についての我々の知識（灯りと温かい感情が結び付けられる慣習的メタファー）に基づいてのみ、比喩的意味と同定でき、名詞句自体は、慣用的意味の何らかの部分直接的には示さないと論じている。」と述べているが、引用先の同頁を確認する限り、*spill the beans* を通常形で分解可能なイディオムとする記述は見当たらない。「Idioms such as *spill the beans* are called ‘abnormally decomposable.’” (*spill the beans* のようなイディオムは「通常でない形で分解可能なイディオム」である) (Gibbs & Nayak, 1989, p.109 [訳は筆者による]) とあるように、本表現はやはり通常でない形で分解可能なイディオムに位置付けられている。通常形で分解可能なイディオム・通常でない形で分解可能なイディオムの扱いの有蘭 (2009) による批判的検討は、本来同分類であるはずの *spill the beans* と *carry the torch* の表現の対比に基づく部分が多いため、本稿ではこれ以上その検討には踏み込まない。

〈秘密〉の意味要素とそれぞれ対応している。同様に、*carry* は〈(～を) 抱く〉の意味要素と、*torch* は〈恋心〉の意味要素と対応すると解釈することができる。

しかし、*spill the beans* や *carry the torch* が意味的に分解可能だとしても、これらは全体として（字義的意味として）〈豆をこぼす〉〈トーチを持つ〉という特定のイメージを想起させる表現であることに変わりはない。実際に、*spill the beans* が英語話者にとって明確な心的イメージを持ちやすいイディオムであることは、Lakoff (1987, pp. 449–451) や Gibbs and O'Brien (1990) によって論じられている。Lakoff は、この表現によって想起されるイメージを明らかにするため、「こぼされる前の豆はどこにあったか」「容器の大きさはどのくらいか」「豆は調理されたものか、されていないものか」「こぼしたのは偶然か、意図的か」「その後豆はどこにいったか」「豆は綺麗に山積みされていたのか」「それはどこにあるはずか」「こぼれた後、簡単に元通りにできるのか」「ひどいこぼれ方か、それとも比較的綺麗か」といった質問を話者に尋ねた。その結果として、イメージを意識的には持てないとする話者でさえも、質問には回答できたという。さらに、そのイメージは部分的に共通しており、容器は人間の頭の大きさくらいで豆はそこから偶然にこぼされ、こぼれた豆はあちらこちらにばら撒かれ、もとに戻すのは決して簡単ではないのだという。Lakoff (1987, pp. 449–451) は、人々が *spill the beans* という表現に対して共通に持つこのようなイメージには、道管のメタファー (conduit metaphor) (Reddy, 1979) と、それに基づく〈心は容器である〉(THE MIND IS A CONTAINER) と〈考えは実体である〉(IDEAS ARE ENTITIES) の概念メタファーが関係していると論じている。*spill the beans* のイメージにおいては、容器は頭に相当し、そこに納められた情報が偶然外に出されてしまうことで、秘密が広まってしまう、というように道管メタファーが適用されるのである。のちに Gibbs and O'Brien (1990) は、*spill the beans* を含む様々なイディオムに対する心理学実験を行うことで、何らかの概念メタファーによって慣習的意味が動機づけられたイディオムは、話者の間で共通の心的イメージが持たれる傾向にあることを明らかにしている。これらの研究結果が示唆することは、*spill the beans* のようなイディオムの文字通りの意味が想起する心的イメージは何らかの形で生きており、それが慣用的意味とメタファー的に結びついているということである。

さて、有蘭 (2009) あるいはこれまでの日本語研究における慣用句の概念が、Nunberg や Gibbs のいう分解不可能なイディオムだけでなく分解可能なイディオムの一部を含むものとして解釈されるのであれば、慣用的連結句と分解可能なイディオムはどう区別されるべきだろうか。その違いは、程度問題であるにせよ、句全体としての字義的意味と慣用的意味の関係性を想定するかどうかにあると考えられる。上の *spill the beans* や *carry the torch* と、有蘭 (2009) が慣用的連結句として挙げた「耳が肥える」の表現を比べてみよう。前者の英語イディオム二つは、いずれも〈豆をこぼす〉〈トーチを持つ〉とい

う全体としての字義的意味を持つ一方で、有蘭 (2009) は、「目が肥える」の表現に全体としての字義的意味を想定していない（少なくとも明示的には何も述べられていない）。「耳が肥える」は「耳」と「肥える」がそれぞれ単独で意味拡張を経た表現であるとされ、表現全体をあえて字義的に解釈した場合に得られる〈耳が物理的にふくよかになる〉ことと、慣用的意味の〈鑑賞力が豊かになる〉との間に何らかの関係（たとえば類似性に基づくメタファー関係）は想定されていないのである。³⁵

上で「あえて」と述べた理由は、「耳が肥える」という表現が一般には字義的解釈の困難な不適格 (ill-formed) な表現としてみなされるからである。とはいえ、ここでは *spill the beans* や *carry the torch* と「耳が肥える」を区別するにあたり、表現の適格性 (well-formedness) (つまり、字義的意味の成立の度合い) に注目しているわけではない。³⁶ 有蘭 (2009, p. 74) が慣用的連結句として扱っている別の例「腕を上げる」を見てみよう。これは字義的な解釈（〈腕を下から上の位置へと移動させる〉こと）が可能なため、適格な (well-formed) 表現であるが、このしぐさと慣用的意味の〈技術を高める〉ことは無関係である。つまり、「腕」と「上げる」の結合は〈技術〉と〈(抽象的な程度を) 高める〉という慣用的意味要素によって動機付けられているに過ぎず、〈腕を下から上の位置へと移動させる〉という字義的意味は「腕」と「上げる」が結びついた結果として偶然生じたものとなる。³⁷ つまり、表現が適格

³⁵ 一般に、イディオムの文字通りの意味と慣用的意味の間の関連性の高さは「透明性」(transparency) と呼ばれる (e.g. Gibbs & Nayak, 1989; Nippold & Rudzinski, 1993)。「耳が肥える」を分析するとしたら、全体の意味に対する「耳」と「肥える」の意味の貢献が明確であるため分解可能性は高いが、〈耳がふくよかになる〉ことと〈鑑賞力が豊かになる〉こととの関連性は見出し難いので、透明性の低い (opaque) 表現とみなされるかもしれない。ただし、「透明性」とは元々「話者にとって当該表現がなぜそのような慣用的意味を持つのか明確かどうか」を測る尺度であるため、「耳」と「肥える」が各々に意味拡張しているのであれば、表現全体を透明性の観点から論じてあまり意味をなさないであろう。

また、大森文子先生より、「耳が肥える」の字義的意味を想定するとしたら、『日本国語大辞典 第二版』の「肥える」の第一の語釈にある「体の肉が増す。肉付きがよくなる。ふとる。」という意味ではなく、第二にある「地味が豊かになる。土地の生産力が高くなる。」のような意味をもとに句全体の字義的意味を想定し、慣用的意味と関連づけることはできないかというご指摘をいただいた。筆者としてはその可能性を完全に否定しないが、仮に〈地味が豊かになる。土地の生産力が高くなる〉のような意味を想定するとしても、それが「耳／目／舌」などと結合して表される句全体の字義的意味（慣用的意味とは区別される意味）が具体的に何かを説明し難く、すでに初めから比喩的あるいは具象性を欠いていることから、今回のような分析が妥当であると判断した。一般的に、「肥える」が〈肉付きがよくなる〉の意味で用いられる場合、主語にくるのは〈人〉であるが、Web 検索では特定の身体部位に対して用いた用例も見つかる。

先日忘年会で「少し顔が肥えた？」という言葉がショックで、私の中で”ノーマイカー実施キャンペーン中”です！動かすのは、車ではなく、頭と体だあ〜！と気合を入れて今日も元気に自転車走り回っています

(<https://smilelifeda.jugem.jp/?eid=91> [下線は筆者による])

一方、「耳／目／舌」のような身体部位詞に対して、〈肉付きがよくなる〉という解釈があてはめられるのは、これらの身体部位（特に後者二つ）の物理的大きさが、体脂肪や筋肉の増減に影響を受けない、あるいは受けにくいことに起因するであろう。

³⁶ 適格性 (well-formedness) とは、慣用句（イディオム）の字義的意味の成立度合いのことを指し、慣用句研究の一つの分析視点となっている (e.g. Gibbs & Nayak, 1989; Gibbs et al., 1989; Mueller & Gibbs, 1987)。なお、適格性 (well-formedness) は、もともと生成統語論の中で取り上げられていたものであり、文法的な適格性と意味的な適格性がある。後者については、Chomsky (1957/2002) 等で論じられた選択制限違反による逸脱文が有名である (e.g. *Colorless green ideas sleep furiously*; (Chomsky, 1957/2002, p.15))。

³⁷ 先述の通り、有蘭 (2009) は「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」の「耳が肥える」と「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」の「口が上手い」を対比させることで、前者の形容詞「肥える」が〈能力が豊かになる〉という意味を持つのは一部の名詞 (e.g. 「口」「目」「耳」) と結合した場合に限られると述べ（「*鑑賞力が肥える」）、前者の「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」の方が構成語同士の結びつきが強い

である (well-formed) か不適格である (ill-formed) かは関係なく、たとえ適格な表現であっても慣用的意味と字義の意味が全く無関係な場合もあるということである。

結局のところ、イディオムや慣用表現の分類は、既定としての慣用的意味に注目するか、慣用的意味への意味拡張（意味の獲得）に注目するかの違いによって異なってくると考えられる。つまり、分解不可能なイディオムと分解可能なイディオムの違いは、慣習的意味を形式としての構成要素に基づいて分解しようと試みた場合にそれが可能か不可能かで判断される。一方、慣用句と慣用的連結句は、当該表現が慣用的意味を獲得する段階が想定され、意味拡張が語の単位で生じたか表現全体で生じたかに基づいて区別される。「腹に納める」のような慣用句は、表現全体で〈(本心などを) 心にとどめて明かさない〉という慣用的意味を獲得したと分析されるのに対し、「腕を上げる」のような慣用的連結句は、〈腕〉から〈技術〉、〈上げる〉から〈(抽象的な程度を) 高める〉へと各々に意味拡張を経たと分析されるのである。この再解釈を示すと以下の通りになる。本稿での解釈に基づく慣用句の概念は、分解不可能なイディオムよりも広義となる。

表1 分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムと慣用句・慣用的連結句の比較（再解釈）

		意味拡張	
		全体（句単位）	構成要素（語単位）
分解可能性	不可能	分解不可能なイディオム <i>kick the bucket</i> 慣用句 「頭を抱える」	
	可能	分解可能なイディオム <i>spill the beans</i> 慣用句 「腹に納める」	（分解可能なイディオム）³⁸ 慣用的連結句 「腕を上げる」

spill the beans や「腹に納める」の種類の慣用表現と、「腕に上げる」のような慣用表現を分けるのは、句全体の文字通り（に解釈を試みた場合）の意味が、慣用的意味との結びつきにとって重要であるか否かという基準である。このように考えると、慣用的連結句にあえて句全体としての慣用的意味を想

と主張している。一方、有蘭 (2009, pp. 79-80) は、ここで扱った「腕を上げる」の「上げる」に関して、〈物理的な対象を低いところから高いところへ移す〉という意味から〈程度を高める〉という意味へと拡張しているものの、「腕」を「技術」に置き換えて「技術を上げる」としても何ら問題なく、「耳」と「肥える」のような構成要素の依存関係が見られないとしている。それゆえ、「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」と「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」の中間的な存在であるとも述べている。

³⁸ イディオム研究において、分解可能性と意味拡張の単位という二重の観点から分類した研究は管見によれば存在しないため、この欄にどのような英語の例が当てはまるかは今後の調査が必要であろう。句全体の文字通りの意味が慣用的意味にとって重要と言うのは、結局のところ両者に句レベルでのメタファー関係が存在するか否かであると考えられるが、もしそうだとしたら、*pop the question* のような「通常の形で分解可能なイディオム」として扱われている英語表現がここに該当するかもしれない。

定する必要はなく、「腕」が〈技術〉、「上げる」が〈(抽象的な程度を) 高める〉という比喩的な意味を独立して獲得しているのであって、「腕」と「上げる」の結合を想定することに意義はないと考えることもできる。しかしながら、「腕」と「上げる」の結びつきが単なる語連結（一般連語）よりも少なからず強いことを考えると（e.g. 「*腕を高める」），句という単位での分析を行うことには意義があるだろう。また、有蘭 (2009, p. 82) で述べられているように、構成語同士の結びつきは「耳が肥える」でより強く、〈鑑賞力〉という「耳」の意味は「肥える」と共起する場合に活性化され、同時に〈能力が豊かになる〉という「肥える」の意味も、「耳」と共起することで活性化される。つまり、各々の構成語の慣用的意味は、もう片方の構成語によって活性化されるのであって、この限りにおいて句という単位で分析することには意義がある。³⁹

以上のような分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムと慣用句・慣用的連結句の対比は、あくまで Nunberg や Gibbs らの一連の研究と有蘭 (2009) の各分類で扱われている表現およびその分析から筆者が間接的に導いたものであり、後続の研究である有蘭 (2009) において Nunberg や Gibbs らの考えとの違いが明言されているわけではない。有蘭 (2009, pp. 128–129) 自身、慣用的連結句の意味分析を行う意義づけとして、先に言及した Lakoff (1987, pp. 449–451) や Gibbs and O'Brien (1990) による *spill the beans* の例を引き、分解可能なイディオムの慣用的意味の成立にメタファーによる動機づけが存在することに触れている。Lakoff らの研究への言及は、一見すると慣用的連結句の句全体の字義の意味と慣用的意味の関連性を示す意図があるように思われるが、その後の説明では、「慣用的連結句は、慣用句とは異なり、構成要素の意味が慣用的意味の一部を担うため、全体の意味を扱わずとも、構成要素の意味に注目することによって、慣用的意味の特徴を捉えることができると考えられる。」（有蘭, 2009, p. 251）と述べており、この説明では全体の意味を扱うことが否定されている。分解不可能なイディオ

³⁹ もっとも、あらゆる語の意味はそれと結びつく語句ないし用いられる構文、そして言外のコンテキストが与えられて初めて一つに定まるのであって、ここでの説明は語連結との明確な区別を保証するわけではない（庄司, 2010, pp. 11–12）。しかし、「肥える」が〈能力が豊かになる〉という意味として用いられるのは「耳／目／舌」といった一部の身体部位詞のみであり、その意味で「本を買う」における「買う」のように、比較的自由な他の語との連結環境で活性化される意味とは程度問題として識別可能である。

ここで「肥える」について少々補足を加えておきたい。『日本国語大辞典 第二版』の「こ・える【肥】」の見出しを確認する限り、「肥える」は「体の肉が増す。肉付きがよくなる。ふとる。」や「地味が豊かになる。土地の生産力が高くなる。」のような意味での使用が最も早く（それぞれの語義の初出は「万葉集」と「日本書紀」より）、続いて「植物がよく生育する。」という意味での用例が近世に現れている。ここで問題としている「（「目、舌、耳などがこえる」の形で）多くの経験によって、感じ方や理解力などが豊かになることをいう。」の語義として挙げられている初出は、語義の中では最も遅く、近代の落語の台詞からである（「落語（おはなし）も年々に上品（ぢやうび）で参り、お客さまのお耳が漸々（だんだん）発達（こへ）て入らっしゃいました上に」（落語・恵方詣 1890 〈三代目三遊亭円遊〉））。しかし、「め【目・眼】」の子見出しとして登録されている「目が肥（こ）える」の初出を見ると、中世末～近世初期の狂言作品からの用例が挙げられており（「人の、目のこゑぬやうにと思ふて、こがね刀を、つとにしておいたと云て、取出す」（天理本狂言・腥物 室町末～近世初）），こちらを〈能力が豊かになる〉という意味での初出例としてみなすべきであろう。

ム・分解可能なイディオムと慣用句・慣用的連結句の二分類が同一のものか否かは、これ以上議論しても推測の域を越えることはないであろう。このような理由から、Nunberg や Gibbs らの分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムと有蘭 (2009) の慣用句・慣用的連結句の対比についてはこれ以上踏み込まないこととし、本研究での再解釈としての慣用表現の区分法を後に説明することとする。

最後に、Nunberg や Gibbs らの研究で分解可能なイディオムの下位分類とされていた「通常の形で分解可能なイディオム」と「通常ではない形で分解可能なイディオム」が、有蘭 (2009) の慣用的連結句の下位分類（「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」および「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」）とどう異なるのかについて述べておきたい。まず、通常の形で分解可能なイディオムと通常ではない形で分解可能なイディオムは、構成要素の名詞句の指示対象がメタファーを介して特定されるのか否かで区別されている。これに対し、有蘭 (2009) の分類はメタファー（あるいは広く比喻）の関与の有無で決まるものではない。通常の形で分解可能なイディオムと通常ではない形で分解可能なイディオムの区別には、名詞句の要素の意味拡張（それがメタファーか否か）ばかりが注目されていたが、「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」と「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」の区別は、もう一つの構成要素である動詞あるいは形容詞にも意味拡張が認められるかどうかに基づいてなされる（有蘭, 2009, p. 60）。また、名詞や動詞・形容詞の意味拡張はメタファーに限定されるわけではない。たとえば、先述の通り、「耳が肥える」における「耳」の〈鑑賞力〉の意味は、その身体部位が担う典型的機能との関わりからメトニミー拡張によって生じている。

本研究では、英語圏のイディオム研究における三分類ではなく、日本における慣用句（広義としては慣用表現）の概念を現時点で集成した有蘭 (2009) による分類を援用するが、それは次に述べる理由による。第一に、慣用的意味の成立に対し、メタファー・メトニミー・シネクドキーの概念を用いた具体的な分析手段が整理されているためである。すなわち、有蘭 (2009) の分類は Nunberg (1978) に始まるイディオムの分解可能性の概念を取り入れつつ、比喻研究の知見に基づく具体的な分析の手段を粕山 (1997) より引き継いでいる。また、粕山 (1997) は狭義の慣用句に対してのみメタファー・メトニミー・シネクドキーに基づく分析を加えていたが、先述の「耳が肥える」の例からも明らかなように、比喻の関与は有蘭 (2009) が慣用的連結句と呼ぶ類の慣用表現においても認められる。第二に、Nunberg (1978) に端を発する分解不可能なイディオム・通常の形で分解可能なイディオム・通常ではない形で分解可能なイディオムの三分類を設けたとしても、通常の形で分析可能なイディオムに該当する表現は本研究では得られず、実質的に二分類となることが見込まれるためである。本研究は〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞を含む表現のうち、精神作用に関する比喻義を持つものを研究対象として

いる。したがって、表現の慣用的意味は全て〈精神〉という抽象的意味領域に属するものであり、〈身体〉から〈精神〉という意味領域への比喩的な転義は扱う全ての表現に共通するはずである。⁴⁰ 具体的にいえば、ある表現が意味的に分解可能な場合、構成要素となる身体部位詞には必然的に身体義から精神義への転義が生じることになる。第三に、有蘭 (2009) の「耳が肥える」の分析からわかるように、分解可能な表現であっても構成要素の名詞句の意味だけでなく動詞や形容詞の意味にも拡張が生じることがしばしばある。

なお、「慣用句」および「慣用的連結句」という用語が示すように、これらは「句」であることが前提とされている。ここで問題となるのは、対象を句に絞ることで、身体部位詞による一部の言語表現（「腹立ち」や「胸算用」のように分類上は語として扱われるもの）が除外されてしまうことである。しかし、慣用的な言語表現は句に限ったことではない。『言語学大辞典』では、イディオムを「句イディオム」と「語彙的イディオム」に分け、後者の例として「親知らず」「猿滑り」「腰抜け」などを挙げている。⁴¹ また、宮地 (1985) は「慣用句」の周辺に位置付けられるカテゴリーの一つとして「複合語」を考察している。宮地 (1985) によれば、「手の裏を返す」「役に立つ」のような動詞慣用句、「人聞きがわるい」「胸くそがわるい」のような形容詞慣用句は格助詞の省略により、「手の裏返した（やりくち）」「役立つ」「人聞きわるい（話しだ）」「胸くそわるい（残酷な場面）」のように複合動詞化・複合形容詞化する（したようになる）場合がある。さらに動詞慣用句は、「意地を張る」が「意地っぱり」、「命をかける」が「命がけ」になるなど、複合名詞化することもある。本研究では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の意味拡張およびその背景にある身体の比喩的理解を明らかにするという趣旨のもと、このような複合語に加え、「胸糞」（〈気分が悪いこと〉）のような派生語を合わせた「合成語」についても調査対象に含めることとする。

以上より、本研究では田中 (2002) による「慣用表現」、有蘭 (2009) による「慣用句」「慣用的連結句」の用語及び概念を援用しつつ、一部不明瞭さが残る慣用句・慣用的連結句の定義を本研究での定義として再解釈することで、分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分法との差別化を図る。また、本研究での対象範囲を合成語まで広げ、慣用表現、慣用句、慣用的連結句、慣用句あるいは慣用的連結句の特徴を持つ合成語を次のように定義づける。

⁴⁰ これは Nunberg (1978) による通常の形で分解可能なイディオム・通常ではない形で分解可能なイディオムの定義上の区別に従った場合の話である。ただし、Nunberg (1978) およびこの区分法を継承する Gibbs らの研究においては (e.g. Gibbs et al., 1989), 通常の形で分解可能なイディオムに分類されている表現でも何らかの比喩（メタファー）による転義が生じていると感じられるものが多く含まれる。たとえば、*break the ice* は通常の形で分解可能なイディオムに分類されているが、少なくとも英語の非母語話者の感覚としては、ここでの *ice* は物理的な〈氷〉から抽象的な〈堅苦しい空気・雰囲気〉という意味へ拡張しており、メタファーが働いているように思われる。

⁴¹ これらは Katz and Postal (1963) による phrasal idiom (e.g. *kick the bucket*) と lexical idiom (e.g. *tele+phone*; *bari+tone*) の分類に沿ったもの考えられる。

(17) 慣用表現：

個々の構成要素の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を全体として表し、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している句。あるいは個々の構成要素の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を全体として表す合成語

慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語：

慣用表現のうち、意味拡張が表現全体で生じることで慣用的意味を獲得したと考えられる句あるいは合成語

慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語：

慣用表現のうち、全体としての結びつきを保ちつつ意味拡張は構成要素単位で為されることで、慣用的意味を獲得したと考えられる句あるいは合成語

「慣用句」と「慣用的連結句」は有蘭 (2009) から借用した用語であり、基本的な考えは引き継いでいるが、筆者による再解釈に基づき定義を改めている（「慣用表現」は田中 (2002) の定義をもとにしている）。上の定義に基づけば、「慣用句」として分類される表現には、「頭を抱える」のように句全体での意味拡張が生じることで、構成要素単位へのこれ以上の意味の分解ができないもの（つまり、分解不可能なイディオムに該当するもの）のみならず、「腹に納める」のように句全体での意味拡張を経つつも、構成要素ごとの意味の分析可能性が多少なり残されているもの（つまり、分解可能なイディオムに該当するもの）も含まれる。また、慣用的連結句の下位区分については、有蘭 (2009) による「名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句」と「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」を援用する。

本研究での慣用句・慣用的連結句の区別は、ある慣用表現に対して句単位での比喩の分析が適切か否か（通用するか否か）を判断するために設けられた基準である。これは慣用表現をどう区分するかの単なる基準の問題であり、慣用句・慣用的連結句の二分法が、分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分法よりも一般的優位性を持つと主張するわけではないことを断っておく。

なお、本研究では〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞を含む慣用表現を調査対象とするが、それらを指す際は「〈腹〉（〈胸〉〈頭〉）の慣用表現」、あるいは短縮して「〈腹〉（〈胸〉〈頭〉）表現」と表記する。慣用表現の下位分類を意図して述べる場合、正確に表記する（e.g. 〈腹〉の慣用的連結句）。

2.3 認知意味論

2.3.1 はじめに

前節では、慣用表現の意味に焦点を当てた先行研究をたどり、分解可能性の観点から本研究での身体部位詞表現の分類方法を定義づけた。杣山 (1997) や有蘭 (2009) の研究では、慣用表現の成立に比喻が深く関わることが体系的に論じられている。特に有蘭 (2009) は、認知言語学の理論を援用し、身体部位詞を含む慣用表現の意味の形成を認知プロセスの観点から詳述している。認知言語学では、比喻は単なる言葉の飾りではなく、人間の認知の問題として扱われる。これにより、慣用表現の慣用的意味は恣意的なものではなく、特定の認知プロセスによって動機づけられていると説明することができる。本研究でも、認知言語学の理論を援用することで、「腹」「胸」「頭」等の身体部位詞表現の意味が、比喻を含む様々な認知プロセスに支えられて成立していることを論じていくが、第3章における具体的な議論に入る前に、この節では、身体部位詞表現の分析に必要な認知言語学の言語観や基本概念を整理する。

認知言語学 (Cognitive Linguistics) とは、人間に備わった一般的な認知能力およびそれに基づく認知プロセスを手立てに、言語のありようを解釈・説明しようとする言語研究領域のことを指す。特に言語の意味がどのように生じ、どのように理解されるかについて研究する分野は、認知意味論 (Cognitive Semantics) と呼ばれる。⁴² 認知言語学でいう「認知」とは広義の認知のことを指し、山梨 (2000) は次のように説明している。

認知言語学で問題とする「認知」は、外部世界の主体的な解釈と意味づけ、空間認知、運動感覚をはじめとする身体的な経験に根ざす、ひろい意味での <認知能力> を問題としている。(せまい意味での認知ないしは知覚のプロセスにかかわる能力は、この意味での認知能力の一部に含まれる。) 認知言語学のアプローチは、この広義の認知能力の観点から、言語現象を動的に捉えていくアプローチを意味する。

(山梨, 2000, p.8)

認知意味論においては、言語の意味はあらかじめ客観世界に存在するのではなく、人間と世界との関わりの中で動機づけられるとみなしている。言語の意味とは、人間が外界をどう捉えているか (どう認識しているのか) を反映するものであり、概念的なものである (松本, 2003, p. 5)。そして、こうした言語の意味につながる世界の認知、概念形成には、以下に説明する人間の一般的な認知能力・認知

⁴² ただし、認知意味論ではないからといって言語の意味が研究対象から外されるようなことはない。

プロセスが重要な役割を果たしていることが明らかにされてきている。以下では、本研究で援用する認知意味論とその関連分野の諸概念として、メタファー (2.3.2 節)、メトニミー (2.3.3 節)、メタフトニミー (2.3.4 節)、イメージスキーマ (2.3.5 節)、プロトタイプシナリオ (2.3.6 節)、身体基盤と文化基盤 (2.3.7 節)、文化モデル (2.3.8 節) を概観する。

2.3.2 メタファー

2.3.2.1 概念メタファーの体系性と写像

これまでの認知意味論研究において、比喩というものが人間の重要な認知能力の一つであり、言語の意味の発生を動機づける重要な役割を果たしていることが明らかにされてきた。前節で引いた舩山 (1997) からの引用 (下に再掲) に関して注目すべきなのは、いずれの定義にも「概念」という語が含まれているという点である。これは本研究の枠組みとなる認知言語学 (より狭くは概念メタファー理論に端を発する) の比喩に対する見方に基づいている。

(18) 隠喩／メタファー： 二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

換喩／メトニミー： 二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩。

提喩／シネクドキー： より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表すという比喩。

(= (13))

伝統的な修辞学においては、メタファーをはじめとする比喩はことばの綾とみなされていた。⁴³ アリストテレスは、しばしば比喩の古典として引かれる『詩学』(三浦 (訳) (2019)) の中で、転用語 (metaphora) を「事物の類似を見て取ること」(p. 172 [1459a]) と述べる一方で、それを語法の一部として論じ、「ある物事に対して本来的に使われる語が、比喩として別の物事に適用される場合を指す」(p. 158 [1457b]) と説明している。⁴⁴ また、現代の語用論研究の一派では、メタファーが字義的意味からの

⁴³ 以降、本研究では「隠喩」「換喩」「提喩」の代わりに「メタファー」「メトニミー」「シネクドキー」という用語を用いる。ただし、引用する先行研究が「隠喩」「換喩」「提喩」という用語を用いている場合はその限りではない。

⁴⁴ アリストテレスは、転用語を ①「類」から「種」への転用、②「種」から「類」への転用、③「種」から別の「種」への転用、④「類比」での転用という四種の型に分けている。ここでの転用語 (metaphora) とは、広義のメタファーを指

逸脱を伴うという見方が取られ (e.g. Grice, 1975, p. 53), メタファーは loose use と呼ばれる言葉の使用 (語の意味がアドホックに緩められる現象) の一例として説明される (e.g. Carston, 2002, pp. 349–359; Sperber & Wilson, 1986/1995, pp. 231–237)。一方, Lakoff and Johnson (1980/2003) に始まる概念メタファー理論は, メタファーをはじめとする比喩は言葉の表面上の問題ではなく, 本質的に思考や行動に根差したものであるという一貫した見解をもとに, 比喩研究に新たな一石を投じた。⁴⁵ 次の表現を見てみよう。

- (19) a. Is that the *foundation* for your theory? (それがあなたの理論の土台なのか。)
b. The theory needs more *support*. (その理論にはもっと支えが必要だ。)
c. We need to *buttress* the theory with *solid* arguments. (堅固な議論でその理論を補強する必要がある。)
d. The arguments *collapsed*. (その議論は崩壊した。)
e. They *exploded* his latest theory. (彼らは彼の最新理論を打ち砕いた。)
f. So far we have put together only the *framework* of your theory. (ここまでは, 理論の骨組みを組み立てたにすぎない。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 46 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, pp. 70–71) による])

(19) はいずれも理論に関して述べた表現であるが, 土台 (*foundation*), 支え (*support*), 堅牢な (*solid*), (控え壁で) 支える (*buttress*), 倒壊する (*collapse*), 爆発 (破裂) させる (*explode*), 骨組み (*framework*) といった一般に建造物に対して用いられる語が用いられている。概念メタファー理論は, こうした一連の表現を観察することで〈理論 (と議論) は建築物である〉(THEORIES (and ARGUMENTS) ARE BUILDINGS) のような認識レベルでのメタファーの存在を主張する。〈建築物〉のように我々にとって具体的で捉え易い概念領域は「起点領域 (source domain)」と呼ばれ, 〈理論 (議論)〉のように抽象的で捉えにくい領域は「目標領域 (target domain)」と呼ばれる。⁴⁶ これらが概念 (領域) レベルで結びついたものは「概念メタファー (conceptual metaphor)」と呼ばれ, 上述の通り〈理論 (と議論) は建築物である〉(THEORIES (and ARGUMENTS) ARE BUILDINGS) のような形で定式化される。これにより, (19) は

し, 実質的に (13) で挙げた比喩を全て含む。

⁴⁵ メタファー研究の歴史については, Gibbs (1994, Ch. 5), 高尾 (2003) などを参照。なお, Lakoff and Johnson (1980/2003) のメタファー理論はコミュニケーションに関する表現にメタファー (「道管メタファー」 (conduit metaphor)) が遍在していることを論じた Reddy (1979) に着想を得ており, Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 3) でも道管メタファーのことが言及されている。

⁴⁶ Lakoff and Johnson (1980/2003) では, domain という語は随所に出てくるものの, source domain と target domain という用語は全体を通じて見当たらない。これらが認知言語学の一般的な用語として広まったのは Lakoff (1987) あたりかと思われる。たとえば, 注 48 の Lakoff (1987, p. 276) からの引用では, すでに source domain と target domain の用語の使用が確認できる。

〈理論（と議論）は建築物である〉という認識レベルの理解（概念メタファー）に基づいて産出されたメタファー表現とみなされることになる。⁴⁷

以降、概念メタファーは、日本語では〈A は B（である）〉あるいは〈A を、B として捉える〉という形式、英語では A IS B という形式で示す。また、概念レベルでのメタファーと言語表現レベルでのメタファーを区別し、前者を「(概念) メタファー」、後者を「メタファー表現」と呼ぶ。

さて、後に Lakoff (1993) はメタファーを次のように定義している。⁴⁸

(20) Metaphors are mappings across conceptual domains. (メタファーは概念領域間の写像である。)

(Lakoff, 1993, p. 245 [日本語訳は筆者による])

この定義が意味するのは、概念メタファーは起点領域の要素と目標領域の要素の構造的な対応を指すということである。ここで、概念領域間の構造的対応が見られる例をもう一つ見てみよう。

(21) a. You make my *blood boil*. (おまえには腹わたが煮えくりかえる (←おまえは俺の血を煮えたぎらせる))

b. *Simmer down!* ((そう怒ってばかりいず) 頭を冷やせ (←熱を冷ませ))

c. His pent-up anger *welled up* inside him. (鬱積した怒りが彼の心 (の中) に湧き上がってきた) ⁴⁹

d. I could barely *contain* my rage. (私は怒りを内に抑えておくのがやっとだった)

e. He *turned his anger inward*. (彼は怒りを (外に出さないよう) 内に向けた)

f. When I told him, he just *exploded*. (彼に言ったら、彼は怒りを爆発させた (←爆発した))

g. She *blew up* at me. (彼女は私に怒りをぶちまけた (←爆発させた))

(Lakoff, 1987, pp. 383–385 [日本語訳は池上ほか (訳) (1993, pp. 467–470) による]) ⁵⁰

(21) は〈怒り〉(ANGER) に関して述べた表現であるが、*boil* (煮える), *simmer* ((とろ火で) 煮る), *well up* (湧き上がる), *contain* ((容器などの中に) ~を含む), *turn ... inward* (~を中に向ける), *explode/ blow up* (爆発する), のように、一般に物理的事象に対して用いられる語 (句) が含まれている。より具体的には、これらは流動体の状態変化や移動、容器の中への内容物の収容、内圧による容

⁴⁷ 凡例 15 や 1.2 節での説明の通り、本研究では先行研究に倣い、概念 (領域) や概念メタファーを指すものを山括弧〈 〉付き (日本語) もしくは小型大文字 (英語) で表記する。

⁴⁸ cf. “Each metaphor has a source domain, a target domain, and a source-to-target mapping.” (Lakoff, 1987, p. 276)

“(…) metaphors are mappings from one conceptual domain to another.” (Lakoff & Turner, 1989, p. 112)

⁴⁹ 訳本では「湧」の代わりに「沸」が用いられているが、「沸」はどちらかといえば沸騰を想起させるため、*well* の語義をもとに「湧」へと差し替えた。

⁵⁰ 今回は、日本語訳の文献と揃えるために Lakoff (1987) から引用したが、同じ例は Kövecses (1986, pp.14–16; 1990, pp. 53–55), Lakoff and Kövecses (1987, pp. 198–199) でも挙げられている。

器の爆発を表すために用いられる語（句）である。Kövecses (1986, Ch. 2; 1990, Ch. 4), Lakoff (1987, Case Study 1), Lakoff and Kövecses (1987) は、これらの表現を挙げながら〈怒りは容器中の流動体の熱である〉(ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER) という概念メタファーの存在を主張し、〈怒り〉と〈容器中の流動体の熱〉の間には、以下のような要素の対応関係が見られることを論じている。⁵¹

(22) 起点：〈容器中の流動体の熱〉	目標：〈怒り〉
〈容器〉	〈身体〉
〈流動体の熱〉	〈怒り〉
〈熱の尺度〉	〈怒りの尺度〉
〈容器の熱〉	〈身体の熱 [体温]〉
〈容器中の圧力〉	〈身体内部の圧力〉
〈流動体と容器が揺れること〉	〈身体の動揺〉
〈容器が熱による圧力に耐えうる限界点〉	〈怒りの尺度の限界点〉
〈爆発〉	〈制御を失うこと〉
〈爆発の危険性〉	〈制御を失うことの危険性〉
〈流動体が冷えていること〉	〈怒りがないこと〉
〈流動体が静まっていること〉	〈動揺がないこと〉

(Lakoff (1987, p. 387) をもとに作成)

上の対応は、概念領域間のもの (entity) 同士の対応であり、これは「存在的対応関係 (ontological correspondence)」と呼ばれる (Kövecses, 1986, p. 17; 1990, p. 56; Lakoff, 1987, p. 387; 1993, p. 207; Lakoff & Kövecses, 1987, p. 201)。さらに概念メタファーでは、領域間の知識 (knowledge) にも対応が見られることが指摘されている。知識の対応が意味するのは、起点領域のものに関する推論が、目標領域のものに関する推論として通用するということであり、この対応は「認識的対応関係 (epistemic correspondence)」と呼ばれる (Kövecses, 1986, p. 17; 1990, p. 56; Lakoff, 1987, p. 387; 1993, p. 207; Lakoff & Kövecses, 1987, p.

⁵¹ Kövecses (1986, Ch. 2; 1990, Ch. 4), Lakoff (1987, Case Study 1), Lakoff and Kövecses (1987) は、いずれもアメリカ英語の〈怒り〉の比喩表現を扱った研究であり、一部用語の差異や内容の追加・削除が見られるものの、実質的に同じである。また、ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER の日本語訳として、fluid はしばしば「液体」と訳されることがあるが（例えば、Lakoff (1987) の訳本（池上ほか（訳）(1993)）でも「液体」という語が充てられている）、厳密には fluid は「流体、流動体」であり、液体 (liquid) と気体 (gas) の総称語である (cf. solid 「固体」)。 (21) の通り、このメタファーの分析では、boil (沸騰する) のような液体に対して用いられる語句のみならず、explode (爆発する) のように、中身が液体・気体のいずれの場合にも用いられる語句を含む表現が観察対象とされており、それゆえメタファーの定式化の際に上位語である fluid という語が選択されたのだと考えられる。本稿では、英語で書かれた文献を引用する際、fluid は全て「流動体」と訳すが、日本語で書かれた文献を引用する際は、各々の文献が使用する用語に従う。

201)。〈怒りは容器中の流動体の熱である〉の概念メタファーにおける知識の対応を見てみよう。たとえば、我々は〈容器中の流動体の熱〉(起点領域)に関して、「流動体が強く加熱することがもたらす影響は、容器の加熱、内部の圧力の増大、それに流動体(液体)が沸き立ち揺れることである」という知識を持っている。この知識は、「強い怒りがもたらす影響は、体温の上昇、体内の圧力の増大、それに心身の動揺である」という〈怒り〉(目標領域)の知識と結びつく。さらに、「流動体がある限界点を越えて加熱されると、圧力は容器の爆発点にまで高まる」という〈容器中の流動体の熱〉の知識は、「怒りがある限界点を越えて強まると、圧力は人が制御を失う点まで高まる」という〈怒り〉の知識と結びつく。

以上のように、概念メタファー理論は、我々が日常的に用いる言語の中にも多くのメタファー表現が隠れており、一連の表現は特定の概念メタファーによって体系性を与えられていることを明らかにしたという点で新規的であった。ただしあらゆるメタファーがこうした豊かな構造を内包しているというわけではなく、異なる仕組みを持つメタファーの存在も明らかにされてきている。(19) で見た〈理論(と議論)は建築物である〉のようなメタファーは、Lakoff and Johnson (1980/2003) が「構造のメタファー (structural metaphor)」と呼んで分析しているものである。彼らは同著の中で、これとは別に「方向づけのメタファー (orientational metaphor)」と「存在のメタファー (ontological metaphor)」と呼ばれる種類のメタファーを論じている。方向づけのメタファーとは、その名の通り空間的な方向が関係するメタファーである。たとえば、(23)(24) はいずれも垂直(〈上・下〉)の方向が特定の対立概念〈楽・悲〉〈多・少〉と規則的に結びついている。

(23) 〈楽しきは上、悲しきは下〉 (HAPPY IS UP; SAD IS DOWN)

- a. I'm feeling *up*. (気分は上々だ。)
- b. That *boosted* my spirits. (それが私の元気を押し上げてくれた (=元気をかきたててくれた)。)
- c. My spirits *rose*. (元気が立ち昇ってきた (=元気が出てきた)。)
- d. I'm feeling *down*. (気持が沈んでいる。)
- e. I'm *depressed*. (落胆している。)
- f. He's really *low* these days. (彼は最近本当に沈んでいる。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 15 [日本語訳は渡部ほか(訳) (1986, p. 19) による])

(24) 〈より多きは上、より少なきは下〉 (MORE IS UP; LESS IS DOWN)

- a. The number of books printed each year keeps going *up*. (毎年印刷される本数は上昇し続けている)

- b. His draft number is *high*. (彼の徴兵番号は高い。) ⁵²
- c. My income *rose* last year. (私の収入は昨年上昇 (=増加) した。)
- d. The amount of artistic activity in this state has gone *down* in the past year. (この州の芸術活動の量は昨年下落 (=減少) した。)
- e. The number of errors he made is incredibly *low*. (彼のおかした間違いの数は信じられないくらい低い (=少ない) だ。)
- f. His income *fell* last year. (彼の収入は昨年落ちた。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, pp. 15–16 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, p. 22) による])

次に、存在のメタファーを見てみよう。

(25) 〈知力は機械である〉 (THE MIND IS A MACHINE)

- a. My mind just isn't *operating* today. (私の頭は今日は全然作動して (=働いて) いない。)
- b. Boy, the *wheels are turning* now! (おやおや、(頭の) 回転がいいねえ (=冴えてるねえ) だ。)
- c. I'm a *little rusty* today. (今日はちょっと頭がさびつている (=若干血のめぐりが悪い) だ。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 27 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, p. 42) による]) ⁵³

(26) 〈容器〉 (CONTAINER) のメタファー ⁵⁴

- a. Are you *in* the race on Sunday? (race as CONTAINER OBJECT) (君は日曜の競走の中にはいるか (=競争には参加するか) だ。) —— (競走は「容器としての物体」とみなされる。)
- b. *In* washing the window, I splashed water all over the floor. (窓洗いの最中に、私は床いっぱいに水をまき散らしてしまった。)
- c. How did Jerry *get out of* washing the windows? (どうやってジェリーは窓洗いから逃げ出したのか。)
- d. He's *coming out of* the coma. (彼は昏睡状態から徐々に抜け出しかけている。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, pp. 31–32 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, pp. 48–49) による])

存在のメタファーとは、抽象的な物事を実体を有する具象物と捉えるメタファーであり、一般性・汎用性が極めて高いとされている。(25) の例では、〈知力〉 (MIND) という抽象的な概念が具象物である

⁵² 「ベトナム戦争中に米国政府が考え出した一種のくじ引きによる徴兵のやり方から生まれた表現。draft number が高いとは徴兵される見込みが少いこと」(渡部ほか (訳), 1986, p. 22)

⁵³ MIND に対する訳を「知力」から「心」に改める方が望ましいようにも考えられるが、例文では「頭」が用いられており、これらを「心」に置き換えるのはやはり不自然である。したがって、メタファー名についても「知力」のままとした。

⁵⁴ 原著ではこのメタファーに対する AISB の定式化は与えられていない。

⁵⁵ 訳本にはない「彼は」を補った。

機械の作動や材質が劣化した状態（錆びついた状態）を通じて理解されている。また、(26) のようなメタファー表現では、同じく実体を持たない〈行為〉(ACTION) や〈活動〉(ACTIVITY) あるいは〈状態〉(STATE) が有形の〈容器〉に見立てられ、人がその内部に位置したり、抜け出すものとして理解されている。〈容器〉のメタファーは、Johnson (1987) 等によってイメージスキーマ（後述）として再分析され、先述の〈怒りは容器中の流動体の熱である〉を含む多くのメタファーの構成要素として関与することが明らかにされている。

2.3.2.2 メタファーの認知基盤

認知言語学（概念メタファー理論）のもう一つの新たなメタファー観は、メタファーが類似性のみに基づく比喩でないという見方である。Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 22) は、メタファーは経験間の「相互関係 (correlation)」から生じると述べ、特に方向づけメタファーのような種類のメタファーを動機づける相互関係は「経験的共起性 (experiential cooccurrence)」であると主張している (p. 155)。(23) の〈楽しきは上、悲しきは下〉のメタファーは、人が悲しかったり憂鬱であったりする際にうなだれた姿勢になり、反対に元気が漲っている時はまっすぐな姿勢になるという経験の同時性にに基づいている。(24) の〈より多きは上〉(MORE IS UP) のメタファーは、何か物を追加していくと、それに伴って嵩が増していくという相関性を人間が経験的に見出すことで成り立つものである。これらの経験間には、客観的類似性というものは存在しない。一方、構造のメタファーのように、ある物事に関する一連の経験と別の物事に関する一連の経験の間に類似性が見出される場合もあり、彼らはこの二つの経験の相互関係を「経験的類似性 (experiential similarity)」と呼んでいる (Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 155)。⁵⁶

方向づけのメタファーに対して論じられた共起性基盤は、従来メタファーの特徴づけや定義に用いられてきた「類似性」とは異なる基盤がメタファーを成立させることを示している。概念メタファー理論では、のちにこの共起性がメタファーの動機づけの一つとして確かな地位を獲得していくことになるが、その代表となるのが Grady (1997a, 1997b) によって提案された「プライマリー・メタファー (primary metaphor)」の考えである。Grady (1997a, Ch. 2; 1997b) は Lakoff and Johnson (1980/2003) が構造のメタファーとして扱った〈理論は建築物である〉を取り上げ、[1] この定式化では写像の欠け (poverty of mapping) が多いこと、[2] 両領域を結ぶ経験的動機付けが欠如していること、[3] 〈理論〉以外にも複数の目標領域が〈建築物〉を起点領域とするメタファー関係にあること、また反対に、〈建築物〉は〈理

⁵⁶ ただし後に示すように、〈怒りは容器中の液体の熱である〉のような構造的メタファーでも間接的な共起性基盤が重要な役割を果たしている。

論〉以外の目標領域の起点領域となりうることの三つを主な問題点として挙げている。⁵⁷ [1] の具体例を示すと、〈理論は建築物である〉メタファーでは (27) のような表現が成立するにも関わらず、(28) のような表現は (通常) 意味をなさない。

(27) a. Is that the *foundation* for your theory? (それがあなたの理論の土台なのか。) (= (19)-a)

b. The theory needs more *support*. (その理論にはもっと支えが必要だ。) (= (19)-b)

(28) a. ?This theory has *French windows*. (その理論にはフランス式窓がある。)

b. ?The *tenants* of her theory are behind in their *rent*. (彼女の理論の入居者は家賃を滞納している。)

(Grady, 1997a, p. 40 [日本語訳は筆者による])

Grady (1997a, Ch. 2; 1997b) はこうした問題の解決策として〈理論は建築物である〉の再定式化を唱え、この概念メタファーは実際のところ、プライマリー・メタファーと呼ばれる基本的で経験的基盤の明確なメタファーが統合 (unification) されたものであると主張する。こうして出来上がったメタファーは「複合メタファー (complex metaphor)」と呼ばれる。

(29) 〈理論は建築物である〉 (THEORIES ARE BUILDINGS) の分解

〈組織は物理的構造である〉 (ORGANIZATION IS PHYSICAL STRUCTURE)

〈存続可能性は直立性である〉 (VIABILITY IS ERECTNESS)

(Grady (1997a, p. 45) をもとに作成) ⁵⁸

(27) のように、〈理論は建築物である〉のメタファーでは主に建築物の構造が写像の対象となるが、写像の動機付けは (29) のプライマリー・メタファーによって説明される。一方、(28) で用いられているのは〈建築物〉に固有の概念要素であり、(29) からは導き出されない。こうして、(28) の表現の不成立は自然な帰結として説明される。

⁵⁷ ここでいう経験的な動機付けとは、〈理論〉と〈建築物〉の間には何ら直接の相関関係を認識できる訳ではないということである。Grady (1997a, pp. 33–34) は〈より多きは上、より少なきは下〉 (MORE IS UP/LESS IS DOWN) のメタファーと〈恋愛は旅である〉 (LOVE IS A JOURNEY) のメタファーを対比させ、前者は量の増減と嵩の変化という相関を繰り返し経験することがこのメタファーの根底にあるのに対し、後者を説明できるようなこうした相関経験の存在を見出すことは難しいとしている。Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 22) はメタファーが類似性を創造すると主張する反面 (注 59 も併せて参照されたい)、二つの経験に一貫性を見出すのはそれらに構造上の類似性が存在するからであるとも述べており、人間の見出す構造的類似性もメタファー成立の経験基盤として認めているが、Grady のいう経験基盤とはより狭義であるといえよう。ただし、その後の Grady (1999) においては共起性 (co-occurrence) に対して類似性 (resemblance) に基づくメタファーの存在が認められ、*Achilles is a lion*. (アキレウスはライオンだ) のような属性メタファーを含む、類似性で説明すべき (とする) 何種類かのメタファーが論じられている。なお、similarity ではなく resemblance という語をあえて使用しているのは、伝統的なメタファー観である「メタファーに用いられる類似性とは、客観世界に存在する」という見方に対峙することを明確化するためのものであると Grady は述べている (Grady, 1999, pp. 88–90)。

⁵⁸ Grady (1997b) では、VIABILITY IS ERECTNESS が PERSISTING IS REMAINING ERECT (〈持続することは直立し続けること〉) とされている。

Grady (1997a, pp. 26–27) は、プライマリーメタファーの起点概念は身体的な知覚 (perception) あるいは感覚 (sensation) と結びついた概念内容を持つと述べている。たとえば、痛覚、形・重さ・距離の認識、動きの検知などの経験は全て身体や周囲環境の直接的な知覚である。これらの経験は具体的な心的イメージを形成し、このイメージ内容の存在が起点概念を特徴づけるものとなる。一方、楽しさや困難の達成など、プライマリーメタファーの目標概念となるものには、そのようなイメージ内容が欠けている。Grady は、これらの目標概念が世界の直接的な知覚ではなく、知覚に対する認知的な反応を指すものであると述べている。これは、Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 22) が方向づけのメタファーなどの基盤として経験的共起性 (experiential cooccurrence) と呼んでいたものに相当する。たとえば Grady (1997a, p. 66) によれば、上の〈存続可能性は直立性である〉というプライマリーメタファーは、人間が自身の身体を含む物体が直立していることと、それが機能したり健康であつたりすることの間に相関関係があることを見出すことで発生する。また、〈組織は物理的構造である〉というプライマリーメタファーの発生は、複雑な物体を操ることと、その部分の論理的関係の心的表象を形成することの間に相関関係を見出すことに基づくという。

Grady (1997a, 1997b) の分析は、いわば概念メタファーの構成性 (compositionality) を意識したものであり (谷口, 2003, pp. 116–117)、還元主義的である (鍋島, 2003a, pp. 73–74; 2011, p. 52)。この方針を突き詰めると、〈理論は建築物である〉のような概念メタファーはプライマリーメタファーの共起性基盤から説明されることとなり、メタファーの一般的定義にも用いられている「類似性」の汎用性を見直すことも必要となるであろう。⁵⁹ しかし谷口 (2003, pp. 116–117) の述べるように、(29) のような構成性の観点のみでは説明が困難な〈理論〉と〈建築物〉のゲシュタルト的側面もあり、プライマリーメタファーの導入によってメタファーの構造的な類似性や複合メタファーの価値が否定されるとは言い難い。Lakoff and Johnson (1999) も Grady (1997a, 1997b) の研究を受けてプライマリーメタファーを大きく取り上げ、その一章 (Ch. 5) で複合メタファー〈愛は旅である〉(LOVE IS A JOURNEY) が複数のプライマリーメタ

⁵⁹ もっとも、概念メタファー理論は当初から経験的類似性を客観的に存在する類似性と明確に区別し、類似性とはあくまで主観的な経験の中で見出されるものであると述べている (Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 155)。さらに Lakoff and Johnson (1980, Ch.22) は、メタファーが「類似性を創造する」とまで主張しているが、谷口 (2003, pp. 37–41) の述べるように、これは条件つきで解釈されるべきである。Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 22) が述べるメタファーによる主な類似性の創出は、おおまかには次のようにまとめられる。

1. 相関関係 (たとえば仕事に要する時間量と仕事を成し遂げるのに要する労働量の間の相関関係) に基づくメタファー (〈時間〉〈労働〉を〈資源〉とみなす) が概念を規定し、それに基づいて類似性が認識される。
2. あるメタファーが別のメタファーから生ずる類似性に基づいている。例：〈考えは食べ物である〉(IDEAS ARE FOOD) は〈考えは物体である〉や〈知能は容器である〉という存在のメタファー・方向づけのメタファーに基づいており、ここから〈考え〉と〈食べ物〉の間に類似性が与えられる。
3. 新しいメタファーが、ある経験領域を浮き立たせ、その浮き立たせた経験の全領域に対して構造的な類似性を規定する。例：〈恋愛は芸術作品の合作である〉(LOVE IS A COLLABORATIVE WORK OF ART) は芸術作品の合作における作業 (WORK)・創造 (CREATION)・目標を追い求めること (PURSUING GOALS)・構築 (BUILDING)・助けること (HELPING) という側面を通じて恋愛の能動性を際立たせ、反対にそれ以外の側面を隠す (類似性を規定する)。

ファーから成ることを論じているが、複合メタファー自体の概念的な存在を否定しているわけではない。⁶⁰ その後の研究においても、呼び方は違えど複合メタファーに相当するメタファーはプライマリーメタファーとは別に確かな地位を与えられ続けている (e.g. Kövecses, 2002/2010, Ch. 10; 谷口, 2003, 第4章, 第7章; 鍋島, 2003a; 2011, 第4章)。

本稿でも複合メタファーの地位を認め、無理にメタファーの還元を試みることはしない。しかしながら、Grady (1997a, 1997b) によるプライマリーメタファーと複合メタファーの関係性の分析からもわかるように、概念メタファーが (完全な構成性を持たないにせよ) 複数のメタファーに基づいている可能性を認識するのは特に重要である。先に挙げた〈怒りは容器中の流動体の熱である〉を例にとると、Kövecses や Lakoff は、このメタファーが〈怒りは熱である〉(ANGER IS HEAT) というメタファーと〈身体は感情の容器である〉(THE BODY IS A CONTAINER FOR THE EMOTIONS) というメタファーの組み合わせによって成り立つことを指摘している (Kövecses 1986, p. 14; 1990, p. 53; Lakoff, 1987, p. 383; Lakoff & Kövecses, 1987, p. 198)。以上の先行研究をもとに、本研究ではメタファーの認知基盤 (動機づけ) を論じるにあたり、次のような基本的見方をとる。

- メタファーの中には、従来の定義の中で示されてきた類似性のみならず、共起性に基づいて成立するものがある (cf. (13))。⁶¹
- あるメタファーの成立に、複数のメタファーが関与する場合がある。⁶²
- それゆえ、あるメタファーの成立に複数の動機づけが働いている可能性がある。

共起性の概念は、次に述べるメトニミーの基盤とされる隣接性の概念とも対応し、従来区別されてきたメトニミーとメタファーの間に関係性が見出されることになる。以降、まずは次の 2.3.3 節にて概

⁶⁰ 谷口 (2003, pp. 117–118) でも同様の指摘がなされている。Lakoff and Johnson (1999) での複合メタファーに対する見解に補足を加えると、たとえば、第5章 (Ch. 5) は次のように始まっている。この引用では、複合メタファーにはプライマリーメタファー以外に文化モデル、民衆理論、信念などの文化的知識が関与すると述べられている。

This chapter is about how complex, everyday metaphors are built out of primary metaphors plus forms of commonplace knowledge: cultural models, folk theories, or simply knowledge or beliefs that are widely accepted in a culture. (本章は、いかにして複合的で日常的なメタファーが、プライマリー・メタファーによく知れ渡った知識形態—ある文化の中で広く受け入れられている文化モデル、民衆理論、あるいは簡単に言えば知識もしくは信念—をプラスして出来上がっているかに関するものである。)

(Lakoff & Johnson, 1999, p. 250 [日本語訳は筆者による])

⁶¹ このほかに、鍋島 (2011, pp. 102–117) では、「無垢な」「汚れた政治家」のような表現がプラス・マイナスという評価性基盤を持つこと、また、「アキレスはライオンだ」のような表現がカテゴリー性基盤を持つ可能性が示されている (これらの論考の元となった鍋島 (2003a, b) も参照)。このうち、評価性に関する基盤は 3.4.3.2 節での分析に部分的に関係するのでその際に取り上げる。

⁶² 鍋島 (2003a, 2011) では、様々なレベルのメタファーの合成がありうるという考えが提唱され、メタファー同士の衝突によって可能な表現に制約がかかる場合もあることが論じられている。本稿では詳しく取り上げないが、これによって生じるのが、一般にメタファー写像の不完全性 (「まだら問題」) と呼ばれる現象である。

念メトニミーについて説明し、その後 2.3.4 節にてメトニミーとメタファーの相互作用（メタフトニミー）の概念について整理する。

2.3.3 メトニミー

2.3.3.1 メトニミーと隣接性

Lakoff and Johnson (1980/2003) は、著書の一章分 (Ch. 8) を割いて、メトニミーも本質的には概念上の操作であり、メトニミーによって成り立つ概念もメタファーによって成り立つ概念のように体系性を有することを論じている。代表的なメトニミーのパターンとして挙げられている〈部分が全体を表す〉(THE PART FOR THE WHOLE) の例を見てみよう。

(30) THE PART FOR THE WHOLE (〈部分が全体を表す〉)

- a. Get *your butt* over here! (こちらに尻をもってこい! (=こちらに来てすわれ!))
- b. We don't hire *longhairs*. (長髪 (の人) は雇わない)
- c. The Giants need a *stronger arm* in right field. (ジャイアンツはライトの守備にもっと強い肩 (の選手) が必要だ)
- d. I've got a new *four-on-the-floor V-8*. (新フロア型四段変速 V-8 型 (の車) を手に入れた)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 38 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, p. 57) による])

Lakoff and Johnson (1980/2003) は、上の〈部分が全体を表す〉を含むメトニミーを様々な挙げてはいるが、概念メタファーほどの深い考察には至らずそれらの列挙に止まっている。しかしその後、メトニミーもメタファーと並んで認知言語学内での研究が進められることで、現在までに様々なタイプの存在や認知基盤が明らかにされてきた。認知言語学におけるメトニミー研究の傾向としては、伝統的にメトニミーの特徴・本質とされてきた隣接性に焦点を当て、事物間の隣接関係を再定義・類型化する試みと、隣接性の認知的側面に注目し、同一概念領域内の転義という観点から説明する流れがある。

⁶³ 以下、本研究の分析に関わるメトニミーの隣接関係を中心に整理したのち、認知言語学においてメトニミーがどのような認知基盤を持つと説明されているかを述べる。

メタファーが類似性 (similarity) に基づくのに対し、メトニミーは隣接性 (contiguity) に基づく比喻である対比されるようになったのは、失語症研究の中で両者を論じた Jakobson (1956/1971, pp. 239–259) あたりからと言われている (大田垣, 2009, p. 23)。⁶⁴ 一方、メトニミーの分類の歴史はもう少し古く、佐

⁶³ このような近年のメトニミー研究の二分は山本 (2006) でも見られる (田中 (2021) も参照されたい)。

⁶⁴ Jakobson (1956/1971, p. 250) によると、隣接性 (contiguity) は失語症患者の語の取り違えに影響することがあり、たとえ

藤 (1978/1992, pp. 151–152) は、デュマルセ (C. Ch. Du Marsais) の『比喩論』(Des Tropes) (1730 年刊) に次のようなメトニミーの類型が挙げられていることを指摘し、日本語の例を付記している。

- (31) a. 〈原因〉によって、〈結果〉を表現する：手があがる (文字 (の上手さ)) / 筆を執る (執筆)
b. 〈結果〉によって、〈原因〉を表現する：涙・うなだれる・なげく・泣く (悲しみ)
c. 〈容器〉によって、〈内容〉を表現する：銚子・こもかぶり (酒) / せいろ (そば) / 財布 (金銭)
d. 〈産地の名称〉によって、〈産物〉を表現する：大島 (大島紬) / 九谷 (九谷焼)
e. ものごとの〈記号〉によって、その〈ものごと〉を表現する：のれん (店) / 横綱 (力士) / 黒帯 (有段者)
f. 〈抽象名〉によって〈具体物〉を表現する：かせぎ (金銭) / 大小 (二本の刀) / 九寸五分 (短刀)
g. 情念や内的感情の発生する場所と見なされる〈身体の部分〉によって、〈感情〉を表現する：心臓が強い / 腹が立つ / 頭がおかしい
i. 〈家の主人の名称〉によって、家〔建物や組織〕をも表現してしまう：フォード (自動車) / 観音さま・弁天さま (建造物)

(佐藤 (1978/1992, pp. 151–152) をもとに作成)

佐藤 (1978/1992, p. 152) はこの分類に対し「大した根拠もなく、ただ思いつきで列挙したような分類で、まことに心細い。」と述べるが、〈原因〉と〈結果〉、〈容器〉と〈内容物〉のように、後代に続くメトニミー関係がすでに指摘されているのは注目に値する。メトニミーの関係は現代までに様々に挙げられ、のちに言及する Radden and Kövecses (1999) では 60 を超える分類が施されている。一方、主に日本の研究ではメトニミーをいくつかに大分した上で、より詳細な分類の議論に移る傾向が見られる。この大分で度々取り上げられるのが「空間的隣接性」に基づくメトニミーと、「時間的隣接性」に基づ

ば本来 *knife* であるはずが *fork* に置き換わって表現され、また、*table* が *lamp* に置き換えられるという。

なお、Koch (1999, pp. 140–141) は、事物間の隣接性 (近接性ともいう) に言及したメトニミーの定義が、すでに紀元前 80 年代後半の *Rhetorica ad Herennium* (『ヘレニウスに宛てたる修辞法』: キケロ (Cicero) の著作と言われるが不詳) の中で見られることを指摘している。そこでメトニミーは *dēnōminātiō* (cf. *dēnōminō* 〈命名する〉) と呼ばれ、おおむね “a trope that takes its expression from *near and close* things and by which we can comprehend a thing that is not denominated by its proper word.” (近接・接近関係にあるものから表現を得て、本来の語によっては表されないものを我々が理解するための言葉の綾) (Koch, 1999, p. 141 [日本語訳は筆者による]) のような意味の定義が与えられているという。Caplan (Trans.) (1954, p. 335) では、同箇所は “Metonymy is the figure which draws from an object closely akin or associated an expression suggesting the object meant, but not called by its own name.” と英訳されている。また、*Rhetorica ad Herennium* のこの後に続く例を見ると、〈創造主〉によってその〈創造物〉を表すメトニミーが挙げられており、wine (ワイン) を通じて Liber (豊穡と生産の神、酒神) を表す例や、wheat (小麦) を通じて Ceres (農耕・穀物の女神) を表す例が示されている。

くメトニミーである (e.g. 瀬戸, 1997; 舩山, 2002, 2010; 舩山・深田, 2003; 山梨, 1988/2007)。⁶⁵ 本研究の身体部位詞表現においても、空間的隣接性と時間的隣接性の区分が重要となるため、以下では瀬戸 (1997), 舩山 (2010) の挙げる例と説明を中心に、これらの区分に基づいた隣接性の特徴を整理する。

まず、空間的な隣接性のうち、一般的な隣接関係に基づいて成立するメトニミー表現をみてみよう。

- (32) a. 黒板を消す (〈黒板が黒板に書かれている文字を表す〉)
 b. テーブルを片付ける (〈テーブルがテーブルの上にあるものを表す〉)
 c. 背中を流す (〈背中が背中についている汚れや石鹸を表す〉)

(舩山 (2010, p. 45) の例に基づいて作成)

(32) は互いに異なる事物の空間的な隣接関係に基づいて成立している。このような空間的な隣接に主従関係が加わったのが (30) の Lakoff and Johnson (1980/2003) の例でも見た〈部分〉と〈全体〉の関係に基づくメトニミーである。

- (33) a. 扇風機が回っている (〈扇風機が扇風機の羽を表す〉)
 b. 冷蔵庫が開いている (〈冷蔵庫が冷蔵庫のドアを表す〉)
 c. 手が足りない (〈手が人間の体全体を表す〉)⁶⁶
 d. 頭数をそろえる (〈頭が人間の体全体を表す〉)

(舩山 (2010, pp. 45–46) の例に基づいて作成)

(33)-a, b は〈全体〉を指す語を用いて〈部分〉を表すメトニミー表現, (33)-c, d はその逆で〈部分〉を指す語を用いて〈全体〉を表すメトニミー表現である。この種のメトニミーは (32) と似ているが、片方がもう片方の一部である点異なる。

瀬戸 (1997, p. 127) は、〈部分〉と〈全体〉のメトニミーが〈身体部位〉と〈身体〉の間で生じやすいことを指摘し、(34)(35) のような例を挙げている。(34) は〈顔〉から〈身体 (人物)〉への転義で (33)-c,

⁶⁵ 山梨 (1988/2007) では、メトニミーの関係として以下の六種を挙げており、大きな分類を設けているわけではないが、議論の前提として「問題となる二つのものの間の関係は、空間的な隣接性や近接性、共存性による関係であったり、また時間的な関係、因果的な関係であったりする。」(p. 92) と述べている。

容器－中身	材料－製品	主体－手段
主体－付属物	作者－製品	原因－結果

(山梨, 1988/2007, p. 94)

⁶⁶ ただし、「手が足りない」については、単に物理的な存在としての〈身体〉を指すというよりは〈身体〉が何らかの労働を担い、労働の際に最も重要とされるのが〈手〉であるというフレーム的知識が前提となっている。有蘭 (2009, pp. 264–268) はこのような観点から、〈(手を用いて行う) 行為〉のフレームを設定し、〈道具〉としての〈手〉を出発点とする「手」の意味拡張について論じている。

dと同様である。⁶⁷ 一方, (35)は〈身体(人物)〉から〈顔〉への転義であり, (33)-a, bと同様である。

(34) A: By the way, is this face familiar to you? (ところで, この顔に見覚えありますか)

B: Yes, I think I met him somewhere before. (ええ, 彼には以前どこかであった気がします)

(瀬戸, 1997, p.128)

(35) McGraw turned red again. (マクグローは再び赤くなった)

(瀬戸, 1997, p. 128)

2. 3. 3. 3 節で述べるように, メトニミーで利用されるのは認知的に際立つ事物・概念であるが, 〈身体部位〉→〈身体〉の型のメトニミーでは視覚的に注目されやすい部位が選択されと考えられる。本研究で扱う〈頭〉もそのうちの一つであろう。後の3. 6. 1 節で論じるが, (36)のような表現は姿勢を通じて何らかの態度・心情を表すことに加え, 〈頭〉の位置を通じて〈身体〉の姿勢を表す例であり, 〈部分〉と〈全体〉の空間的隣接性と時間的隣接性の共存するメトニミーである。

(36) a. 頭(ず)が高い

b. 頭が上がらない

c. 頭が下がる

第三の空間的隣接のタイプは, (37)に示す〈容器〉と〈内容物〉の関係である。〈容器〉と〈中身〉は互いに異なる事物でありながらも, 包含関係によって位置関係が指定されている。(38)に示すように, この種の転義は, 身体部位を精神作用の〈容器〉と見なすメタファー表現の中でも生じる。

(37) a. 押し入れをかきまわす。

b. 一升瓶を飲みほす。

c. 鍋が煮える。

d. 私はドンブリが好きだ。

e. 僕は一年中鍋を食べている。

(山梨, 1988/2007, p. 95)

(38) a. {腹/胸}が煮える

b. 腹が黒い

⁶⁷ Bの回答がhimであることからわかるように, 厳密には単に〈身体〉への転義というよりは〈人物〉が意識されたメトニミー表現といえるだろう。

メトニミーに関わる〈容器〉とは、我々が典型例として思い浮かべるコップや鍋などの容器に限らず、何かと包含関係を作り上げるスキーマ的なカテゴリーのことを指す（このような〈容器〉の特性は2.3.5節のイメージスキーマの説明において詳しく取り上げる）。瀬戸(1997)は以下のような表現も〈容器〉と〈内容物〉の関係に基づくメトニミーの例であると述べている。

- (39) a. The lecture hall burst into laughter. (ホールはどっと沸いた)
b. The whole village rejoiced. (村全体が喜んだ)
c. Teddy ate the whole plate. (テディーは1皿ペロりと平らげた)

(瀬戸, 1997, pp. 38–39)

(39)-a は大きな空間としての *hall* (〈ホール〉) が〈容器〉となり、その中に収容された〈聴衆〉を指している。(39)-b は場所を表す *village* (〈村〉) が〈容器〉となり、その中に居る〈村人〉を指している。(39)-c は〈平皿〉を指す *plate* が用いられており、典型的な〈容器〉とは形状が異なるが、二次元的な〈皿〉に〈食べ物〉が収まっているという解釈がなされる。

次に空間的隣接性とは区別される時間的隣接性に基づくメトニミー表現を見てみよう。

- (40) a. 頭を抱える (〈頭を抱える動作が困り果てることを表す〉)
b. 胸を撫で下ろす (〈胸を撫で下ろす動作が安心することを表す〉)
c. 言うことを聞く (〈相手の言葉を聴覚で捉えることが言葉の内容に従って行動することを表す〉)
d. お手洗い (〈手を洗うことが用便を表す〉(さらには〈用便をするところ〉を表す))

(舩山(2010, pp. 46–47)の例に基づいて作成)

舩山(2010, pp. 46–47)はこれらを出来事の同時性と連続性に基づいて区別し、(40)-a, b は同時に生じる出来事の関係性、(40)-c, d は連続する出来事の関係性に基づく述べている。「頭を抱える」しぐさと「胸を撫で下ろす」しぐさはそれぞれ誘因となる特定の心情が先行することから、これらと(40)-c, d の境界線は必ずしも明確ではない。とはいえ、「頭を抱える」しぐさと「胸を撫で下ろす」しぐさを行う際はそれぞれ〈困り果てた状態〉や〈安心した状態〉が継続しているはずなので、その意味で同時性を有すると言えるだろう。⁶⁸

⁶⁸ 瀬戸(1997)は、時間的隣接性に基づくメトニミーを論じるにあたり、出来事をはじめから別々に分けるのではなく、全体 *w* とその一部としての部分 *p* に分け、〈部分〉と〈全体〉の時間的關係に基づくメトニミーも分析している。この *w* と *p* の関係は並列的隣接と直列的隣接に分けられ、前者は全体 *w* の出来事の中で複数の出来事 *p* が同時進行するという関係、後者は全体 *w* の過程を複数の出来事 *p* に分けた場合の両者の関係を指す。前者の例として、*He is reading for his first*

ここまで挙げた空間的隣接性・時間的隣接性の区分については、(日本人の)研究者間で概ね見解が一致していると考えられるが、次に取り上げるタイプのメトニミーは扱いが異なる。

(41) Bさんは口がかたい

原因：口がかたく閉じられている

結果：(容易に言葉が口から出ない→) 秘密などを守る

(舩山, 2010, p. 47)

(42) お説教はもうたくさんだ

原因：(すでに) 十分になされている

結果：これ以上はやめてほしい

(舩山, 2010, p. 47)

これらは〈原因〉を通じて〈結果〉を表すメトニミー表現である(この反対のパターンとして舩山(2010, p. 48)は「二の句を継げない」を挙げている(〈言葉が出てこない〉ことを通じてその要因である〈あきれかえる〉という心情を表す))。舩山(2010, pp. 47–48)は(41)(42)のような例が時間的な隣接関係からさらに進んだタイプのメトニミー表現であると述べる一方で、後述の「さまざまな関連性」の一種とし、時間的隣接にまとめることを避けている。これに対し、瀬戸(1997)は〈原因〉と〈結果〉のタイプを時間のメトニミーに分類し、時間的な前後関係と因果関係に関して次のように述べている。

因果関係は、時間的な前後関係が特化したものにすぎない、と私は考える。時間的に先行する出来事とそれに後続する出来事との間にとくに強い結び付きを感じる時、私たちは、そこに因果関係を読み込む。ある一連の出来事(p)とそれに後続する出来事(p)との間に、もし先行する出来事(p)が起これなければ、後続する出来事(p)も起これなかっただろうと推論するとき、両者の間に因果関係を認める。時間的前後関係は、つねに因果関係に転じる可能性を持つ。

(瀬戸, 1997, pp. 150–151)

degree. (彼は学部生である)(瀬戸, 1997, p.145)が挙げられている。*read*は英語では〈大学で勉強する〉ことを表す。ここでは、〈大学で勉強すること〉のうち、その代表的な一部である〈読むこと〉を指し、出来事の〈全体〉と〈部分〉の関係成している。一方、直列的隣接に基づくwからpへのメトニミーは稀であるとし、代わりに別々のpとpが結びつく場合が主であると述べている。pとpは別の出来事であり、その点では従来の時間的隣接性に基づくメトニミーの考え方と同様であるが、瀬戸(1997)はpとpを包括する全体の出来事wの存在を重視している。この考えに基づく、(40)のような例で示される二つの出来事も一つの場面としての背景的知識があり、そこからメトニミーが生じるとも考えられる。このような発想は、のちに示すICM(理想化認知モデル)に基づいたメトニミー分析にも通じるところがあるだろう。

上の引用は、因果関係をかなり広く解釈した見方であるが、少なくとも本研究の分析対象とする精神作用を表す身体部位詞表現の性質を考慮するに、的を射た指摘であると思われる。たとえば、先に挙げた「頭を抱える」や「胸を撫で下ろす」も元々は何らかの心因によって生じるしぐさを指しており、〈結果〉を通じて〈原因〉を表すメトニミーとしても分析できる。したがって、本研究では因果関係を伴う時間的隣接性に対し、あえて因果関係を伴わない時間的隣接性という分類を設けることをせず、両者をまとめて扱う。

空間的隣接性と時間的隣接性は、その性質は異なるものの、「隣接性」という従来のメトニミーの定義に則したものであった。一方、Lakoff and Johnson (1980) が挙げるメトニミーの中には、一見隣接性の定義には収まらないように思われるものも含まれている。

(43) PRODUCER FOR PRODUCT (〈製造者が製品を表わす〉) cf. (31)-i

- a. I'll have a *Löwenbräu*. (レーヴェンブロイ (のビール) を飲もう。)
- b. He bought a *Ford*. (彼はフォード (社製の車) を買った。)
- c. He's got a *Picasso* in his den. (彼は書齋にピカソ (の作品) をもっている。)
- d. I hate to read *Heidegger*. (ハイデッガー (の著書) は読みたくない。)

(Lakoff & Johnson, 1980/2003, p. 38 [日本語訳は渡部ほか (訳) (1986, p. 57) による])

舩山 (2010, p. 48) は、(43) のタイプに相当する日本語のメトニミー表現 (e.g. 「漱石を読む」「トヨタに乗っている」) を挙げ、それらが「関連性」に基づくメトニミーであると述べている。一方の瀬戸 (1997, pp. 157–158) は、〈生産者〉(上でいう〈製造者〉) と〈製品〉の関係性に基づくメトニミーは、〈生産者〉が〈原因〉であり、〈製品〉が〈結果〉であると捉えることで両者は因果関係 (時間的隣接関係) にあると論じている。確かに、これらは〈自動車の生産〉という出来事の枠内で捉えるとすれば、その一部をなす出来事と結びつく実体 (人間や物) が結びついていると解釈することもできよう。さらに瀬戸 (1997, pp. 160–164) は、空間的隣接性・時間的隣接性のほかに「特性」という概念を持ち出し、「特性のメトニミー」と呼ぶ種の表現を分析している。たとえば、*11-year-olds* が〈年齢〉を通じて〈その年齢の人物〉を指し、*regulars* が〈常連であること〉を通じて〈常連である人物〉を指すような場合である。ただし瀬戸 (1997) は、「モノ」とは出来事やその他抽象物を含む広義の意味であり、「モノ」として存立できるものすべてを指すと述べ (e.g. *have a belief* (信念を持つ)) (pp. 118–122), 「特性」の概念も結局のところ世界の中での「モノ」と「モノ」の隣接関係であるという立場を取っている (pp.

典型的な隣接関係に当てはまらないタイプを関係性として呼び改めるか、引き続き隣接性の枠に収めるかで初山(2010)、瀬戸(1997)の立場は異なるものの、従来の定義とされてきたメトニミーの隣接性の概念は、広義の解釈が必要であることがわかる。そこには空間的な近さや時間的な共起・連続のみならず、抽象的な結びつきが含まれる。本稿では、メトニミーの「隣接性」の概念を抽象物・特性の関係性にまで広げて解釈し、「隣接性」という用語を一律で用いていく。このような広義の隣接性、関連性が認知的にどのような意味を持つのかについては、2.3.3.2節、2.3.3.3節で説明する。

次項に移る前に、しばしば争点になってきたメトニミーとシネクドキーの区別に関して触れておきたい。Lakoff and Johnson (1980/2003, p. 36) は、(30) のような〈部分が全体を表す〉タイプが伝統的にシネクドキーと呼ばれてきたと述べ、メトニミーとして扱っている。ただし、本稿でシネクドキーとするのは、佐藤(1978/1992, 第4章)や瀬戸(1997)が論じるような範疇的な関係つまり「タクソノミー(taxonomy)」に基づく比喻のみである(これに対し、実体の関係に基づくものは「パートノミー(partonomy)」と呼ばれる)。この意味でのシネクドキー表現は Lakoff and Johnson (1980/2003) においては挙げられていないものの、後の研究においてメトニミーの一種として扱われている。

(44) A CATEGORY FOR A MEMBER OF THE CATEGORY : *the pill* for “birth control pill” (〈カテゴリーがその成員を表す〉:「ピル」が経口避妊薬を表す)

A MEMBER OF A CATEGORY FOR THE CATEGORY : *aspirin* for “any pain-relieving tablet” (〈カテゴリーの成員がそのカテゴリーを表す〉:「アスピリン」が鎮痛用錠剤を表す)

(Radden & Kövecses, 1999, p. 34)

シネクドキーはその存在が認められながらも、メトニミーと統合すべきかどうかについての議論や、そもその定義(たとえば、種と類の関係に加え、部分と全体の関係に基づく比喻もシネクドキーに含めるのかなど)の議論は未だ決着がついていない。⁷⁰ 本研究では、異なる見解の存在を認めた上で、先述の初山(1997)に基づく定義(13)に基づき、包含関係(タクソノミー)に基づく比喻をシネクドキーとして扱い、メトニミーと区別する。

⁶⁹ 挙げられている例からもわかるように、「モノ」とは要するに存在のメタファーを介して具象化された抽象物を含む広いカテゴリーを指している(瀬戸, 1997, p. 161)。

⁷⁰ シネクドキーの位置付けの問題を含むメトニミーの研究史については、瀬戸(2017)が特に詳しい。

2.3.3.2 メトニミーと概念領域・ICM

前項では、メトニミーがさまざまな隣接性あるいは関連性によって成立することをみたが、そもそも二つの事物が隣接あるいは関連するとは果たして認知的にどういった意味を持つのであろうか。これに関して、メトニミーの隣接関係を概念領域内で生じる転義として説明を試みる流れがある (e.g. Croft, 1993/2002; Kövecses, 2002/2010; Kövecses & Radden, 1998; Lakoff, 1987; Lakoff & Turner, 1989; Radden & Kövecses, 1999)。たとえば、以下の定義はその考えが明確に反映されたものである。

- (45) *Metonymy* involves only one conceptual domain. A metonymic mapping occurs within a single domain, not across domains. (換喩は一つ概念領域にしか関わらない。換喩的な意味の転移は異なる領域間ではなく、単一の領域内で起きる。)

(Lakoff & Turner, 1989, p. 103 [日本語訳は大堀 (訳) (1994, p.115) による])

上の定義では隣接性に関する語句は用いられておらず、その代わりにメトニミーの転義が同一の概念領域内で生じることが述べられている。重要なのは、メタファーは異なる領域間の写像であるのに対して、メトニミーは単一の領域の中で生じる写像と述べられている点である。⁷¹したがって、従来メトニミーの本質とされてきた隣接性とは、二つの事物が同じ領域内にあることで、片方を通じたもう片方への心的アクセスを実現する概念上の近さのことを指す。

Croft (1993/2002) は、メトニミーは厳密には単一のドメイン・マトリックス (domain matrix) の中で生じると論じている。ドメイン・マトリックスとは、ある概念の成立の背景には、複数の概念領域が (部分的に) 重なり合って存在しているという考え方であり、たとえば〈物体〉 (PHYSICAL OBJECTS) は、〈物質〉〈形状〉〈位置〉などの概念領域が重なりあってドメイン・マトリックスを構成することで成り立っている (Croft, 1993/2002, p. 168)。この考えに基づく、*Proust is tough to read*. (プルースト (の著作) は読みにくい) という表現が、なぜ〈人物〉から〈著作〉へと移行するのが説明される。プルーストは人間であるという事実に比べると、著作物というのは周辺的な概念の一部であるが、このプルーストの百科事典的人物像のドメイン・マトリックスの中には〈創作活動〉 (CREATIVE ACTIVITY) という概念領域が含まれている。プルーストの名声は作家であることであり、彼の作品は〈創作活動〉の領域における重要な要素であるため、このメトニミー転移は自然なものとして説明される (Croft,

⁷¹ 訳本では“metonymic mapping”を「換喩的な意味の転移」と訳しているが、原文に忠実に従うとすれば「換喩的 (メトニミー的) な写像」となるであろう。しかし、「写像 (mapping)」という語の数学的意味〈ある集合の要素を別の集合の要素に一つずつ対応させること〉を考慮すると、単一概念領域での一組の概念要素の転移を指して「写像 (mapping)」と呼ぶのは不自然である (筆者の管見では、この件に関して Lakoff and Turner (1989) は何も説明を与えていない)。訳本で「意味の転移」と意識されているのは、そのような理由によるのかもしれない。

1993/2002, pp. 178–179)。

Croft (1993/2002) によるドメイン・マトリックスを援用したメトニミー研究に対し、類似のアプローチによってメトニミーの類型を精緻化したのが Kövecses and Radden (1998) と Radden and Kövecses (1999) である。⁷² Kövecses and Radden (1998), Radden and Kövecses (1999) は、Lakoff (1987, p.287) が “A metonymic mapping occurs within a single conceptual domain, which is structured by an ICM.” (メトニミー写像は単一の概念領域で生じるが、その領域は ICM によって構造化されている) と主張したことに基づき、「理想化認知モデル (Idealized Cognitive Model: ICM)」を援用したメトニミーの分析を行っている。⁷³ Lakoff (1987) によって提案された理想化認知モデルとは、我々が日常の様々な経験をもとにそれらを構造化した知識モデルのことを指す (特に Chapter 4 を参照)。理想化認知モデルにおいては、知識は単純化・理想化されて一つのゲシュタルト構造を成しており、我々は言語表現を理解したり使用したりする際にも理想化認知モデルを参照している。言葉の意味づけが理想化認知モデルに基づいてなされることで、ある経験にその言葉を適用しようとした際に、それが合致するかしないかでその程度に応じてプロトタイプ効果 (prototype effect) が生じることもある。たとえば、*bachelor* という語は「未婚の男性」として定義さるが、婚活中の「ターザン」や「ローマ教皇」などのように、定義に当てはまりながらも即座に *bachelor* であるとも言い難い例がある。これは *bachelor* という語が、背景知識としての理想化認知モデル (すなわち結婚という制度と典型的な結婚年齢が定められた社会における単純化・理想化された知識構造) を通じて意味づけされているからである。このような理想化認知モデルの知識によく当てはまる事例と当てはまらない事例が、中心的事例・周辺的事例として弁別されることで、プロトタイプ効果が生じる (Lakoff, 1987, pp. 69–71)。

話を戻そう。Kövecses and Radden (1998), Radden and Kövecses (1999) は、ICM の構造の関係に基づいてメトニミーの関係を以下の通り分類している。

(46) Whole ICM and its part(s) (ICM 全体と部分)

Parts of an ICM (ICM の部分同士)

(Kövecses and Radden, 1998, p. 49; Radden & Kövecses, 1999, p. 30 [日本語訳は筆者による])

これらは結局のところ〈部分〉と〈全体〉の関係、〈部分〉と〈部分〉の関係のことを指しており、本質的な部分では従来の隣接性に基づくメトニミー分析に通じる。〈部分〉と〈全体〉の要素は、従来の空間的な事物関係 (具象物の関係) と時間的な事物関係 (出来事同士の関係) の両者を含む概念と

⁷² 第一著者・タイトルは異なるが、Radden and Kövecses (1999) は Kövecses and Radden (1998) の改訂版である。

⁷³ 池上ほか (訳) (1993) では、「理想認知モデル」と訳されている。

して扱われている。Kövecses and Radden (1998) は、この類型を詳細に記述することで、彼らがメトニミー産出関係 (metonymy-producing relationship) (メトニミーが成立する関係) と呼ぶものを 40 タイプ以上挙げているが、その後の Radden and Kövecses (1999) では 60 タイプ以上に増えている。このうち、「行為の ICM」の中で成立するメトニミーとして Radden and Kövecses (1999) が集約したものを挙げる。〈行為〉の ICM には以下の通り〈行為者〉〈道具〉〈様態〉〈手段〉などの様々な要素が含まれるが、それらの要素は〈行為〉を表したり、反対に〈行為〉が要素を表したりする。また、場合によっては要素が別の要素を表すことができる。

(47) a. AGENT FOR ACTION: *to author* a new book; *to butcher* the cow

(〈行為者が行為を表す〉: 新著を執筆する／牛を解体する)

b. ACTION FOR AGENT: *writer*; *driver*

(〈行為が行為者を表す〉書き手／運転手)

(48) a. INSTRUMENT FOR ACTION: *to ski*; *to hammer*

(〈道具が行為を表す〉スキーをする／金槌で叩く)

b. ACTION FOR INSTRUMENT: *pencil sharpener*; *screwdriver*

(〈行為が道具を表す〉鉛筆削り／ドライバー)

(49) a. OBJECT FOR ACTION: *to blanket* the bed; *to dust* the room

(〈ものが行為を表す〉ベッドに毛布を敷く／部屋の埃を払う)

b. ACTION FOR OBJECT: *the best bites*; *the flight* is waiting to depart

(〈行為がものを表す〉最高の軽食／飛行機は出発待ちだ)

(50) a. RESULT FOR ACTION: *to landscape* the garden

(〈結果が行為を表す〉庭園を美化する)

b. ACTION FOR RESULT: *the production*; *the product*

(〈行為が結果を表す〉製作物／製品)

(51) MANNER FOR ACTION: *to tiptoe* into the room

(〈様態が行為を表す〉忍び足で部屋に入る)

(52) MEANS FOR ACTION: he *sneezed* the tissue off the table.

(〈手段が行為を表す〉彼はくしゃみでテーブルからティッシュを吹き飛ばした)

(53) TIME FOR ACTION: *to summer* in Paris

(〈時間が行為を表す〉夏をパリで過ごす)

(54) DESTINATION FOR MOTION: *to porch* the newspaper

(〈到達点が移動を表す〉新聞をポーチに投げ入れた)

(55) INSTRUMENT FOR AGENT: *the pen* for ‘writer’

(〈道具が行為者を表す〉ペンが「著者」を表す)

(Radden & Kövecses, 1999, p. 37 [日本語訳は筆者による])

上記の例の中には、(*pencil sharpener*) のように形態的な変化 (付加) を起こした語 (派生語) が含まれる一方で、その多くが名詞から動詞へ、あるいは動詞から名詞への品詞転換 (ゼロ派生) を起こしている。⁷⁴ 名詞→動詞への派生・品詞転換は典型的には〈行為〉に關与する〈具象物〉(〈行為者〉〈道具〉〈もの〉(〈結果〉)) から〈行為〉へ、動詞→名詞の派生・品詞転換は典型的には〈行為〉から關与する〈具象物〉(〈行為者〉〈道具〉〈もの〉〈結果〉) へのメトニミー転移である。⁷⁵

Kövecses and Radden (1998), Radden and Kövecses (1999) のようにメトニミーにおける転移を ICM の枠組みで説明する試みは、従来の隣接関係を認知言語学の枠組みにおける概念と接合したという意味で一つの成熟を見せたといえよう。ただし繰り返しになるが、これらは結局のところ〈部分〉と〈全体〉の関係、〈部分〉と〈部分〉の関係のことを指しており、本質的な部分では先に紹介した舩山 (2010) や瀬戸 (1997) 等の「隣接性」あるいは「関係性」の概念を継承したメトニミー分析と対峙するものではない。本研究では、メトニミーの分析において従来の「空間的・時間的隣接性」の解釈を基本としつつ、上記のような ICM (あるいは概念領域) 内部の要素の関係を捉えることでより詳細な説明が可能となるものについては、適宜それを援用しながら分析を進めていく。

2.3.3.3 メトニミーの認知基盤

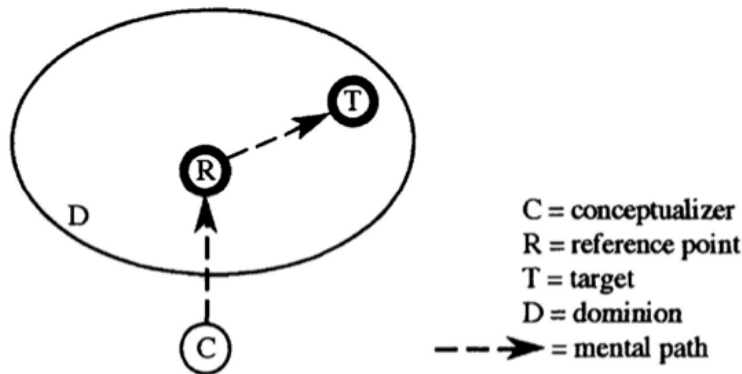
メトニミーによって結ばれる概念要素が同じ領域内にあるとはいえ、メトニミーの媒体 (vehicle) となる要素はどう選択されるのだろうか。Langacker (1993/1999, Ch. 6) は、メトニミーを人間の一般的認知能力とされる「参照点能力 (reference-point ability)」が反映されたものであると論じている。参照点能力とは、人間が何かの対象に心的アクセスを試みる際、それが困難な場合でも別のアクセスしやすい対象を経由して対象にたどり着くという能力である。Langacker (1993/1999, Ch. 6) はこの参照点を経由

⁷⁴ 一般にこのような種類の品詞転換は英語でとりわけ多いと言われる (『新英語学辞典 縮刷版』)。日本語の場合、語形を完全に保ったまま品詞と意味の両方に転換を行うことが難しく、(47)–(55) の訳も転換を適切に反映したものとはなっていないことを断っておきたい。

⁷⁵ (51) の *tiptoe* はもともと〈つま先〉という意味であり、〈様態〉の前に〈つま先〉から〈つま先立ちして歩く〉への転義が生じているはずである。また、(52) はいうまでもなく結果構文である。(54) については、〈(新聞を)ポーチに投げ入れる〉という *porch* の意味から判断するに、なぜこの例のみが ACTION ではなく MOTION とされているかが不明である。(55) は名詞間の転義で、唯一品詞の変化がない例である。

した対象の認知構造を以下のような図によって表している。

図3 参照点構造 (Langacker, 1993/1999, p. 174)



C は概念化をする主体 (conceptualizer) を指し、波線の矢印は心的アクセスがどのような経路をたどるか (mental path) を表す。C からのアクセスはまず、本質的あるいは文脈によって認知的際立ち (cognitive salience) を備えた対象 R、すなわち参照点 (reference point) に到達する。これにより、R の属する概念支配領域 D (dominion) の要素が活性化可能となる。最終的にこの D 領域から目標であった対象 T (target) が選択され、心的アクセスが達成される (Langacker, 1993/1999, pp. 173–174)。

Langacker (1993/1999, p. 199) は、*She bought Lakoff and Johnson, used and in paper, for just \$1.50.* (彼女は Lakoff and Johnson を中古本でたった 1.5 ドルで購入した) のようなメトニミー表現において、なぜ指示対象のずれが生じて私たちが混乱しないのかについて、それはメトニミーが根本的には参照点現象であるからだとし、“Metonymy is prevalent because our reference point ability is fundamental and ubiquitous, and it occurs in the first place because it serves a useful cognitive and communicative function.” (メトニミーが広く行き渡っているのは、我々の参照点能力が基本的で遍在するものであるからであり、そもそもメトニミーが生じるのは、それが有用な認知的・コミュニケーション的機能を果たしているからである) (Langacker, 1993/1999, p. 199 [日本語訳は筆者による]) と述べている。⁷⁶

⁷⁶ ここでの「機能」が何を意味するかについて、Langacker (1993/1999) は次のように続けている。

What is this function? Metonymy allows an efficient reconciliation of two conflicting factors: the need to be accurate, i.e. of being sure that the addressee's attention is directed to the intended target; and our natural inclination to think and talk explicitly about those entities that have the greatest cognitive salience for us. By virtue of our reference point ability, a well-chosen metonymic expression lets us mention one entity that is salient and easily coded, and thereby evoke—essentially automatically—a target that is either of lesser interest or harder to name. (その機能とは何か。メトニミーは対立する二つのことを効率的に調和してくれるのだ。すなわち、正確であること、つまり、受け手の注意を確実に意図された目標に向けさせることの必要性和、我々が自らにとって一番の認知的際立ちを持つ実体について明確に考えたり話したりしたいと思う自然な傾向である。参照点能力によって、我々は適切に選択されたメトニミー表現を用い、際立ちを有しコード化されやすい実体に言及することができる。それによって、それほど関心が高くないか、名付けにくい対象を(基

Langacker (1993/1999) の参照点能力に基づくメトニミーの分析の特徴は、メトニミーを一般的な認知能力に基づいて説明したという点にある。⁷⁷ 参照点能力による説明においては、参照点としての媒体は「本質的にあるいは文脈によって認知的な際立ち (cognitive salience)」を有しているという (Langacker, 1993/1999, p. 174)。また Langacker (1993/1999) は、メトニミーにおいてある事物が参照点となりやすい法則 (つまりある事物が認知的な際立ちを有しやすい法則) として、次のようにまとめている。

(56) 人間以外 (nonhuman) よりも人間 (human)

部分 (part) よりも全体 (whole)

抽象 (abstract) よりも具象 (concrete)

見えない (non-visible) よりも見える (visible)

(Langacker (1993/1999, pp. 199–200) をもとに作成)

認知的な際立ちによってメトニミーの媒体 (参照点となる事物) が選択されるというこのような考えを追求した研究として、再び Kövecses and Radden (1998), Radden and Kövecses (1999) が挙げられる。Kövecses and Radden (1998, pp. 63–69), Radden and Kövecses (1999, pp. 44–50) は、メトニミーの媒体の選択に働く認知的な傾向として、人間の経験に由来するもの、知覚の選択性に由来するもの、文化的な選好性に由来するものがあると論じている。これらをまとめたものが (57)–(59) である。

(57) 人間の経験に由来するもの

HUMAN OVER NON-HUMAN (〈人間以外よりも人間〉) / CONCRETE OVER ABSTRACT (〈抽象よりも具体〉) / INTERACTIONAL FOR NON-INTERACTIONAL (〈非相互作用的なものよりも相互作用的なもの〉) / FUNCTIONAL OVER NONFUNCTIONAL (〈非機能的なものよりも機能的なもの〉)

(58) 知覚の選択性に由来するもの

IMMEDIATE OVER NON-IMMEDIATE (〈非直接的なものよりも直接的なもの〉) / OCCURRENT OVER NON-OCCURRENT (〈現在生じていないものよりも現在生じているもの〉) / MORE OVER LESS (〈少ないものよりも多いもの〉) / DOMINANT OVER LESS DOMINANT (〈非優勢なものよりも優勢なもの〉) / GOOD GESTALT OVER POOR GESTALT (〈ゲシュタルト性が乏しいものよりもゲシュタルト性のあるもの〉) / BOUNDED OVER UNBOUNDED (〈境界がないものよりも境界があるもの〉) / SPECIFIC OVER GENERIC (〈一般的なものよりも特定のもの〉)

本的には自動的に) 呼び起こすことができるのだ (Langacker, 1993/1999, p. 199 [日本語訳は筆者による])

⁷⁷ 実際、メトニミーの分析の前では所有表現や日本語の「は」を用いた話題化構文が参照点能力の概念を援用して説明されている。

(59) 文化的な選好性に由来するもの

STEREOTYPICAL FOR NONSTEREOTYPICAL (〈非ステレオタイプのなものよりもステレオタイプのものの〉) / IDEAL OVER NON-IDEAL (〈非理想的なものよりも理想的なもの〉) / TYPICAL OVER NONTYPICAL (〈非典型的なものよりも典型的なもの〉) / CENTRAL OVER NONCENTRAL (〈非中心的なものよりも中心的なもの〉) / BASIC OVER NONBASIC (〈基本的でないものよりも基本的なもの〉) / IMPORTANT OVER LESS IMPORTANT (〈重要性の乏しいものよりも重要性のあるもの〉) / COMMON OVER LESS COMMON (〈あまり見られないものよりもよく見られるもの〉) / RARE OVER LESS RARE (〈希少性の乏しいものよりも希少性のあるもの〉)

(Kövecses & Radden (1998, pp. 64–69), Radden & Kövecses (1999, pp. 45–50) をもとに作成)

Kövecses and Radden (1998), Radden and Kövecses (1999) は, (57) の「抽象よりも具体」に関して特に身体部位が頻繁に人間の様々な事柄に対して参照されると指摘している。特に〈身体的なもの〉(BODILY) が優位になる場合として, 以下の四種を挙げている。

(60) 〈情緒的なものよりも身体的なもの〉 (BODILY OVER EMOTIONAL)

e.g. *heart* が〈優しさ〉 (kindness) を表す

〈行動に関するものよりも身体的なもの〉 (BODILY OVER ACTIONAL)

e.g. *hold your tongue* が〈話すのをやめること〉を表す

〈知的なものよりも身体的なもの〉 (BODILY OVER MENTAL)

e.g. *brain* が〈知性〉 (intellect) を表す

〈知覚的なものよりも身体的なもの〉 (BODILY OVER PERCEPTIONAL)

e.g. *good ear* が〈優れた聴力〉を表す

(Kövecses & Radden (1998, pp. 64–65), Radden & Kövecses (1999, pp. 45–46) をもとに作成)

この指摘により, 本研究の考察対象でもある身体部位は, メトニミーの媒体として利用される認知的な際立ちを持つことが示唆される。ここで注意しなければならないのは, これらの認知的際立ちの傾向が, 特定の身体部位と精神作用・行動のメトニミー的結びつきの動機を説明する道具立てにはならないという点である。たとえば, (60) の〈知的なものよりも身体的なもの〉の例として挙げられている〈脳〉と〈知性〉の対応を考えてみよう。これらが結びつきは, 両者が同一の ICM (あるいはドメインマトリックスでもよい) 内に置かれていることが前提となっている。しかし, そもそもなぜ身体部位であるはずの〈脳〉が, 〈知力〉に関する概念領域をドメインマトリックス内に含んでいるのだ

ろうか。なぜ〈身体〉全体ではなく〈脳〉が選択されるのだろうか。これは本研究が明らかにしようとしている問いの一つでもある。

2.3.4 メタフトニミー

2.3.2 節での説明の通り、概念メタファー理論は Lakoff and Johnson (1980/2003) から Grady (1997a, 1997b) のプライマリーメタファー研究を経ることで、メタファーの成立には類似性のみならず共起性という経験基盤が極めて重要な役割を果たしていることを明らかにしてきた。これは、メトニミーの伝統的定義でもある隣接性、より厳密に言えば事象間の時間的隣接性に相当するものであり、従来別物として扱われてきたメタファーとメトニミーが実は接点を有することを示唆している。また、メタファーとメトニミーが認識レベルの存在であるということは、一つの言語表現が生み出されるまでに両者が共同して働く場合があることも示唆される。これに関して、言語表現およびその表現を支える認知プロセスにおいて、メタファーとメトニミーが頻繁に共存・共同することを裏付けたのが Goossens (1990/1995/2002) による研究である。Goossens (1990/1995/2002) は、メタファーとメトニミーが相互作用する現象を指して「メタフトニミー (metaphonymy)」と呼び、言語 (相互) 行為を目標領域、身体部位、音、暴力行為を起点領域とする比喻に基づく言語表現を観察することで、相互作用のパターンを以下の四つに分けている。

(61) metaphor from metonymy (メトニミーからのメタファー)

metonymy within metaphor (メタファー内のメトニミー)

demetonymization within metaphor (メタファー内部の脱メトニミー化)

metaphor within metonymy (メトニミー内のメタファー) ⁷⁸

第一のパターンは、「メトニミーからのメタファー (metaphor from metonymy)」と呼ばれるものである。これは、ある一つの場面にて二つの物事の共起性 (隣接関係) によって成立していたメトニミーに基づき、二つの物事が乖離した後のメタファーが成り立つというものである。Goossens (1990/1995/2002, pp. 356–357) は、その例として動詞 *giggle* を用いた表現を挙げ、以下のような説明を加えている。この語は、〈くすくすと笑う〉ことを表すが、““Oh dear,” she giggled, “I’d quite forgotten.”” という場合、この動詞は〈くすくすと笑いながら喋る〉と解釈される。また、〈あたかも (*as if*) くすくすと笑うかのような

⁷⁸ 日本語訳は全て谷口 (2003) に従う。これらの日本語訳はほかにも何種類もあり、たとえば、Deignan (2005) の訳本 (渡辺ほか (訳) (2010, p. 74)) では metaphor from metonymy は「メトニミー由来のメタファー」、有蘭 (2021, p. 35) では「メトニミー基盤のメタファー」と訳されている。

にして発話内容を述べる」という別の解釈も可能である。後者の場合、〈くすくすと笑う〉という行為領域と〈発話〉という行為領域の横断が見られるため、これはメタファー表現として扱われる。本パターンのメタフトニミーに関して重要なのは、言語表現の解釈の文脈依存性が高く、ある場合はメトニミー、ある場合はメタファーとして解釈される場合があるという点である。上の例において、もし本当にくすくすと笑いながらそれを発話したとしたら、メトニミーの解釈が生じ、そうでない場合はメタファー（メトニミーからのメタファー）として解釈される。⁷⁹

第二のパターンは、「メタファー内のメトニミー (metonymy within metaphor)」と呼ばれるものである。比喩表現の中には、全体がメタファー表現でありながらも、その中にメトニミーによる解釈を受ける要素を含むという場合が少なくない。Goossens (1990/1995/2002, p. 363) はその例として *bite one's tongue off* (〈直前に言ったことに対して申し訳なく感じる〉) という表現を挙げている。この表現は字義的には〈舌を噛み切る〉ことを表すが、実際には舌を噛み切る行為は日常生活の中での経験と直接結びつくものではないため、何らかの誇張された自己処罰を表すとみなすことができる。これが言語行為へと写像されることで、〈自らの発話能力を奪う〉といったメタファー的意味が生じるが、ここでの〈発話能力〉という解釈は、*finger* などの他の身体部位詞ではなく、*tongue* が用いられているからこそ得られる。つまり、メトニミーによって〈舌〉が〈発話器官〉を指している。Goossens (1990/1995/2002, p. 363) は、調査対象とした身体部位、音、暴力行為に関するデータのうち、このタイプのメタフトニミーは身体部位に関するデータでのみ事例が得られたと報告している。

第三のパターンは、「メタファー内部の脱メトニミー化 (demetonymization within metaphor)」と呼ばれるものである。Goossens (1990/1995/2002, p. 365) は、収集したデータのうち「少なくとも一つが該当する」として *pay lip service* (〈言葉の上では支持するが、実際にはその逆。言葉では忠誠や興味を示すが、考えていることはその反対〉) という表現を挙げている。*lip* が〈唇〉から〈話すこと〉へとメトニミー的な意味拡張をしていることから、一見、この表現はメタファー内のメトニミーのように見えるが、Goossens (1990/1995/2002, pp. 365–366) はさらにメトニミーの分離を考える必要があると述べている。つまり、*lip service* は〈唇だけであるかのようなサービス〉と言い換えられるはずであり、元々〈部分〉を通じて〈全体〉を指していたものが〈部分〉のみ分離したことがわかれると述べている。⁸⁰

⁷⁹ Goossens (1990/1995/2002, p. 356) は、前者の解釈がメトニミーであると述べながらも、〈部分〉が〈全体〉を指す意味拡張であるとし、これをシネクドキー関係であると述べている。これは、Goossens (1990/1995/2002, p. 351) が〈部分〉－〈全体〉関係のことをシネクドキーとして扱っているためであり、種と類の関係に基づくシネクドキーの捉え方は異なっていることに注意されたい。

⁸⁰ 何が脱メトニミー化しているのかという点について、Goossens (1990/1995/2002) はこれ以上具体的な説明を与えておらず、Goossens (1990/1995/2002) に言及した文献もその説明は「解釈」的となっている。谷口 (2003, p.163) は同表現を挙げて「Goossens は、(15) [=pay lip service] の用例をよりの確に捉えると、lip service が「唇でのみの支持であるかのような」というメタファーであり、「唇」と「話すこと」のメトニミー的關係が分離しているという。これが「メタファー内部の

第四のパターンは、「メトニミー内のメタファー (metaphor within metonymy)」と呼ばれるものである。Goossens (1990/1995/2002, p. 366) は、収集したデータのうちこのパターンに該当するものは *be/get on one's hind legs* の一例しか見つからなかったと述べている。この表現は字義的には〈(四足歩行の動物が) 後ろ脚で立つ／立ち上がる〉ことを表すが、一方で〈(特に公の場で) 何かを言ったり論じたりするために立ち上がる〉という比喻義を持つ。何かを述べることとそのために立ち上がることの間にはメトニミー関係が成立するが、*hind* という語があることで、動物が二足で立つという解釈が強いられ、メタファーの要素が入り込む。動物が二足で立つ様子から、より大変でより大きな注目を集める事象であることが暗示されるが、結局それができて当たり前の人間が行うので、そのオチとして頓降法的 (bathetic) な効果が生じると Goossens は述べている。⁸¹

Goossens (1990/1995/2002) の研究は、一つの言語表現の中に複数の比喻が関与しうることを具体例とその詳細な分析を以て示した重要な研究であり、メタフトニミーは本稿で扱う身体部位詞を含む慣用表現の多くに適用される概念である。また、第一のメタフトニミーのパターンであるメトニミーからのメタファーが示唆するように、従来は隣接性と類似性に基づく別々の比喻とみなされていたメトニミーとメタファーが、場合によっては近い関係にある（連続性を有する）ことを示した点も重要であろう。⁸²

Goossens (1990/1995/2002) の掲げたメタフトニミーの概念は、その後も追求されることでメタファーとメトニミーが働く順番はより柔軟であることや他のパターンの存在が明らかにされてきている (Deignan, 2005; Dirven, 2003; Radden, 2000; Ruiz de Mendoza Ibáñez & Díez Velasco, 2003)。たとえば、

脱メトニミー化」である。」と説明しているが、実際にこの表現では〈唇〉を使い、かつ〈話すこと〉が前提となっているはずであり、なぜ両者が分離しているのかよくわからない。また、分離するのが〈唇〉と〈話すこと〉だとしたら、Goossens (1990/1995/2002, p. 366) による “the part is dissociated from the whole for which it was made to stand in the earlier processing stage, it is “demetonymised”” の the part と the whole が何を意味するのかが十分に説明されない (〈唇〉と〈話すこと〉は〈部分〉と〈全体〉の関係ではないはずである)。したがって、本稿では、脱メトニミー化している〈部分〉－〈全体〉の関係とは、〈言葉の上で支持すること〉と〈言葉の上で支援し、かつ実際に心の中で支持すること〉この関係を示しており、本来前者を通じて後者を指していたものが、前者である部分のみを表すようになったことを指すと解釈する。この〈部分〉と〈全体〉の関係は、先述の通り Goossens (1990/1995/2002) が *giggle* のメトニミー的な解釈から、メトニミーからのメタファーとしての解釈へ移行することの説明でも用いられており、辻褄が合う。ただし、もし *lip service* が〈話すこと〉に限らず、〈(発話を伴わない) うわべの振る舞い〉に対しても用いられるのだとしたら、谷口 (2003) のような解釈も妥当であろう。

⁸¹ 修辞法の一つで、言葉や観念を段階的に高めて強めたり、反対に段階的に低めて弱めたりする手法のことを「漸層法 (gradation/climax, incrementum)」と呼ぶが (『レトリック辞典』『漸層法 (gradation/climax, incrementum)』)、特に後者を「漸降法 (anti-climax)」さらにそれが急なものを「頓降法 (bathos)」などと呼ぶ。ただし、この辺りの用語の使用は研究者によって異なる。

⁸² Goossens (1990/1995/2002) がメタファーという用語をかなり曖昧な定義で用いている点は注意しておくべき点である。たとえば、Goossens (1990/1995/2002, p. 362) は *close-lipped* (〈無口な、口数が少ない〉) という表現を説明するにあたり、もし実際に黙った状態のことを描写するためにこの表現を使うのであれば、これはメトニミー表現であり、よく話すか聞き出したい肝心な事柄については話さない人に対してこの表現を用いる場合はメタファーであると述べている。この場合、何を以てメタファーとみなされるのかが説明されていないが、おそらく異領域間の対応 (たとえば〈行為〉と〈属性〉) という捉え方をしていると考えられる。

Deignan (2005, p. 66) は、メトニミーからのメタファーの例である *keep an eye on* (〈〜を見張る, 監視する〉) を挙げ、この表現は実際の「身体的な見る行為 (the act of watching)」を伴うメトニミー表現としての例、その行為を伴わないメタファーからのメタファー表現としての例、両者の判別がつきにくい例のいずれもがコーパス中で観察されることを指摘している。一方、Deignan (2005, pp. 67–69) は、純粋なメトニミーとメトニミーからのメタファーの間に見られるような曖昧さがほとんどない類のメタフトニミーも存在するとして、それを「メトニミーに基づくメタファー (metonymy-based metaphor)」と呼んでいる。たとえば *warm* という語は、字義的な意味での物理的な温かさだけでなく、比喩義として肯定的で親しみのこもった感情を叙述するために用いられるが、コーパスの事例を観察すると、概ね周辺の共起語によって、いずれかの意味を表すかが特定される。*water/air/weather* などの語と共起する場合は字義的な物理的温度、*welcome/hearted* は比喩義としての精神的な暖かさを表すとすぐに判別できるという。Deignan (2005) がメトニミーに基づくメタファーと呼ぶものは、従来共起性基盤を持つとして挙げられてきたプライマリー・メタファーが広く該当すると考えられる。⁸³

2.3.5 イメージスキーマ

人間は世界の対象に対する様々なイメージ (image) を形成している。それらの中には、特定の事物と結びつく具体的なイメージもあれば、複数のイメージに共通する特性が抽出された一般性の高いイメージも存在する。後者のように抽象化された認知図式は「イメージスキーマ (image schema)」と呼ばれ、我々の世界の理解、言語の意味形成に重要な役割を果たすことが明らかにされてきた (e.g. Clausner & Croft, 1999; Johnson, 1987; Lakoff, 1987; 山梨, 2000, 2012)。Johnson (1987) によるイメージスキーマの定義を下に示す。

⁸³ ただし、メトニミーに基づくメタファー (metonymy-based metaphor) の概念は Deignan (2005) に先立って Radden (2000) が同用語を用いて提唱している。Deignan (2005) が Radden (2000) の存在を認知していたのかは不明であるが、少なくとも参考文献には挙がっていない。

Metonymy-based metaphor is a mapping involving two conceptual domains which are grounded in, or can be traced back to, one conceptual domain. (メトニミー基盤のメタファーとは、一つ概念領域に基盤を持つ、あるいは起源を遡ることが可能な二つの領域の関与する写像である。)

(Radden, 2000, p. 95 [日本語訳は筆者による])

Radden (2000) がメトニミーに基づくメタファーとして挙げているのは、〈より多きは上、より少なきは下〉 (MORE IS UP; LESS IS DOWN) に基づく *high prices* や *rising prices* のような例である。その説明によれば、〈金銭〉と空間的な〈上下〉の共起経験は通常起こらないため、一般的な認知言語学的説明では異なる領域間の対応 (つまりメタファー) として扱われる。しかし株式報告などの場面では、価格の上下は図として可視化され実際に現れることがあり、この限りで価格の図示と価格は同一の領域に属している。この意味で、〈金銭〉と〈上下〉の概念は共通の経験的基盤を持つメトニミー基盤のメトニミーとして扱われるべきであるという。Radden (2000) による分析の妥当性はここでは追求しないが、上の定義と事例を通じた分析を観察する限り Deignan (2005) と Radden (2000) の「メトニミー基盤のメタファー」の概念は同一ではないが近いといえよう。

An image schema is a recurring, dynamic pattern of our perceptual interactions and motor programs that gives coherence and structure to our experience. (イメージ図式とは、われわれの知覚的相互作用と運動プログラムに、繰り返し現れる動的パターンであり、これによってわれわれの経験に首尾一貫性と構造とが与えられる。)

(Johnson, 1987, xiv [日本語訳は菅野・中村 (訳) (1991, p. 17) による])

The view I am proposing is this: in order for us to have meaningful, connected experiences that we can comprehend and reason about, there must be pattern and order to our actions, perceptions, and conceptions. *A schema is a recurrent pattern, shape, and regularity in, or of, these ordering activities.* These patterns emerge as meaningful structures for us chiefly at the level of our bodily movements through space our manipulation of objects, and our perceptual interactions. (私は次のような見解を提唱したい。理解したり推理したりすることのできる、有意味で互いに結合された経験を持つためには、行動、知覚、概念作用がパターンと秩序をそなえなくてはならない。図式とは、これらの動的な秩序づけの活動にそなわる、反復されるパターン、形、規則正しさのことである。これらのパターンは、われわれにとって意味ある構造として、主として空間中でなされる身体運動、対象の操作、知覚的相互作用の水準に創発する。)

(Johnson, 1987, p.29 [日本語訳は菅野・中村 (訳) (1991, pp. 99–100) による])⁸⁴

上の Johnson (1987) による定義にあるように、イメージスキーマとは、周囲の環境との知覚的相互作用、身体運動、対象（物体）の操作などの身体経験の反復を通じて現れてくる抽象的なパターン、形状、規則性のことを指す。第一の定義では、イメージスキーマが動的 (dynamic) であると述べられているが、Johnson (1987, pp. 29–30) によれば、これは次の二点を意味する。第一に、人間はイメージスキーマを通じて経験を秩序づけ・構造化することができる。イメージスキーマは、こうした主体的な認知プロセスの手立てとして用いられる。第二に、イメージスキーマは一定の柔軟性を保ち、様々な文脈での個別事例に順応して適用される。同一ではないが互いに似た経験を束ね、それらを関連付け、構造や秩序を与えることができるのである。

⁸⁴ (image) schema は菅野・中村 (訳) (1991) では「(イメージ) 図式」と訳されているが、現在ではそのまま「イメージスキーマ」と訳されることが多いと考えられる。本稿ではここでの引用を除いて「イメージスキーマ」の訳を採用する。なお、Johnson (1987) による二つ目の定義では image schema ではなく schema という語が単独で用いられているが、Johnson は以下の断りを入れた上で image schema と同一の理論的概念を指す用語として schema および embodied schema を用いている。

In what follows, I shall use the terms “schema,” “embodied schema,” and “image schema” interchangeably.” (以下で私は、「図式」、「身体化された図式」、「イメージ図式」を互いに置き換えうる用語として用いる。)

(Johnson 1987, p. 23 [日本語訳は菅野・中村 (訳) (1991, p. 91) による])

イメージスキーマの例としては、3.3.1 節で本研究の分析の道具立てとしても取り上げる〈容器〉(CONTAINER) スキーマ、〈バランス〉(BALANCE) スキーマ、〈垂直性〉(VERTICALITY) スキーマ (〈上下〉(UP/DOWN) スキーマ) に加え、〈経路〉(PATH) スキーマや〈リンク〉(LINK) スキーマがある。イメージスキーマの包括的なリストは完成しておらず、従来存在が指摘されてきた全てのイメージスキーマの実在について理論内で合意があるわけではないものの (Oakley, 2007, p. 229), たとえば, Johnson (1987, p. 126) は主要な 27 種のイメージスキーマを含むリストを作成している。一方で、スキーマ同士の関係性や分類の整理を試みた研究も存在する。Clausner and Croft (1999) は、それまでに論じられたイメージスキーマと一部新たに加えたイメージスキーマを集約し、(62) のようなグループ分けを提案している。左に配置されたイメージスキーマは、右で示されるより具体的なイメージスキーマを包括している。

(62) SPACE	UP-DOWN, FRONT-BACK, LEFT-RIGHT, NEAR-FAR, CENTER-PERIPHERY, CONTACT
(空間	上一下, 前ー後, 左ー右, 近ー遠, 中心ー周辺, 接触)
SCALE	PATH
(尺度	経路)
CONTAINER	CONTAINMENT, IN-OUT, SURFACE, FULL-EMPTY, CONTENT
(容器	包含, 内ー外, 表面, 実ー虚, 内容物)
FORCE	BALANCE, COUNTERFORCE, COMPULSION, RESTRAINT, ENABLEMENT, BLOCKAGE, DIVERSION, ATTRACTION
(力	バランス, 対抗力, 強制, 抑制, 力の可能性, 妨害, 転換, 牽引)
UNITY/MULTIPLICITY	MERGING, COLLECTION, SPLITTING, ITERATION, PART-WHOLE, MASS-COUNT, LINK
(単一性／複数性	合併, 集めること, 分裂, 反復, 部分ー全体, 集合ー個体, リンク)
IDENTITY	MATCHING, SUPERIMPOSITION
(同一性	適合, 重ね合わせ)
EXISTENCE	REMOVAL, BOUNDED SPACE, CYCLE, OBJECT, PROCESS
(存在	除去, 有界空間, 循環, 物体, プロセス)

(Clausner & Croft, 1999, p. 15 [日本語訳は筆者による])

イメージスキーマの例として、本研究の分析の要ともなる〈容器〉(CONTAINER) スキーマ (特に〈包含〉(CONTAINMENT) スキーマ) を取り上げ、その動機づけと機能を見ていく。Johnson (1987, p. 21) は、このイメージスキーマの経験基盤として以下の三点を挙げている。一つは、食物・水・空気が身体に取り込まれ、反対に食物や水の排泄物・空気、血液が出ていくという、人体そのものが三次元的な容

器であるがゆえの経験基盤である。第二に、私たち人間が部屋・衣服・乗り物などの中に入出入りするという経験基盤である。第三に、対象をコップや箱などの容器に出し入れするという経験基盤である。第一・第二の経験基盤では、身体が容器あるいは中身（内容物）に対応するのにに対し、第三の経験基盤では、身体とは別の存在物が容器や中身に対応する。これらの異なる経験の反復によって生じた〈容器〉スキーマは、図4のように示される。

図4 〈容器〉(〈包含〉) スキーマ (Johnson, 1987, p. 23)

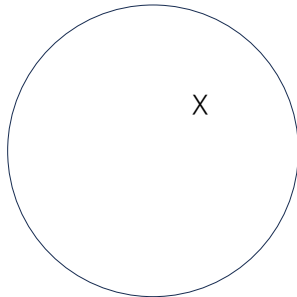


図4が示す通り、イメージスキーマはアナログで非命題的な心象であるが (Johnson, 1987, p.23), その一方で以下のような含意 (entailment) を伴う。

- (63) i. The experience of containment typically involves protection from, or resistance to, external forces.
(包含の経験には概して外の力からの防護, ないしそれにたいする抵抗が伴う。)
- ii. Containment also limits and restricts forces within the container.
(包含はまた容器の内部に力を制限し限定する。)
- iii. Because of this restraint of forces, the contained object gets a relative fixity of location.
(力がこのように制限されるために, 包含された対象がその位置を相対的に固定される。)
- iv. This relative fixing of location within the container means that the contained object becomes either accessible or inaccessible to the view of some observer.
(容器内で位置を相対的に固定されるということは, 包含された対象が観察者に見えるようになったり, 見えなくなったりすることを意味する。)
- v. Finally, we experience transitivity of containment. If B is *in* A, then whatever is *in* B is also *in* A.
(最後に, 包含の推移性が経験される。もし B が A の中にあれば, B の中にあるものはやはり A の中にある。)

(Johnson, 1987, p.22 [日本語訳は菅野・中村 (訳) (1991, p. 89) による])

Johnson (1987) や Lakoff (1987) 以降、メタファーによって目標領域の一連の抽象的な経験が組織化される際に、起点領域のイメージスキーマが構造を与えるという考えが、概念メタファー理論内で浸透していく。ここで取り上げている〈容器〉スキーマに関しても、多くのメタファー表現を動機づけることが明らかにされている。⁸⁵ たとえば (64) に示すように、当スキーマの関与は精神作用に関する〈腹〉〈胸〉〈頭〉の比喩表現でも見られる。

- (64) a. 腹に据えかねる
b. 胸に納める
c. 頭に入れる

(64) の表現では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉という身体部位がそれぞれ〈怒り〉〈内心・本心〉〈情報・知識(記憶)〉という〈内容物〉を納める〈容器〉に対応づけられている。これらの表現は、(63) に挙げた〈容器〉スキーマの含意(特に ii-iv) を通じて有意味なものとなる。「腹に据えかねる」において〈怒り〉を〈腹〉に据えようと試みるのは、そうすることで〈怒り〉が表出するのを防げるからであり、〈怒り〉が〈腹〉に留まり続ける限り、外(他人)に知られないで済む。同様に、〈内心・本心〉を〈胸〉に納めておけば、外(他人)から知られることはない。また、〈頭〉に〈情報・知識(記憶)〉を入れることで、その存在場所を定め、後に必要に応じて取り出すことが可能となる。(64) の表現が特定の精神を〈隠す〉あるいは〈(将来のために) 保持する〉という意味を持つことができるのは、人間が経験的に作り上げた〈容器〉(あるいは〈包含〉) というイメージスキーマの持つ含意がメタファー写像を通じて目標領域でも機能するからである。2.3.2.1 節において、概念メタファーでは起点領域と目標領域の概念要素が対応する(i.e. 存在的対応)のみならず、起点領域の推論が目標領域における推論として対応づけられる(i.e. 認知的対応)ことを述べたが、上で述べたようなイメージスキーマの持つトポロジー構造および含意の継承が、この種の対応の実現に一役を担っていると考えられる。⁸⁶

イメージスキーマの概念を援用して言語表現の意味の成り立ちを考える際、具体的に当該スキーマのどのような側面に焦点が当たっているかを考えることで、分析が深まることがある。山梨(2000, pp.143-146; 2012, pp. 27-30) は、イメージスキーマによる意味拡張においては、言語主体の視点も重要

⁸⁵ イメージスキーマとメタファーの関係に関する議論は Johnson (1987, Ch. 2, 4, 5) や Lakoff (1987, Ch.16, 17) を参照。

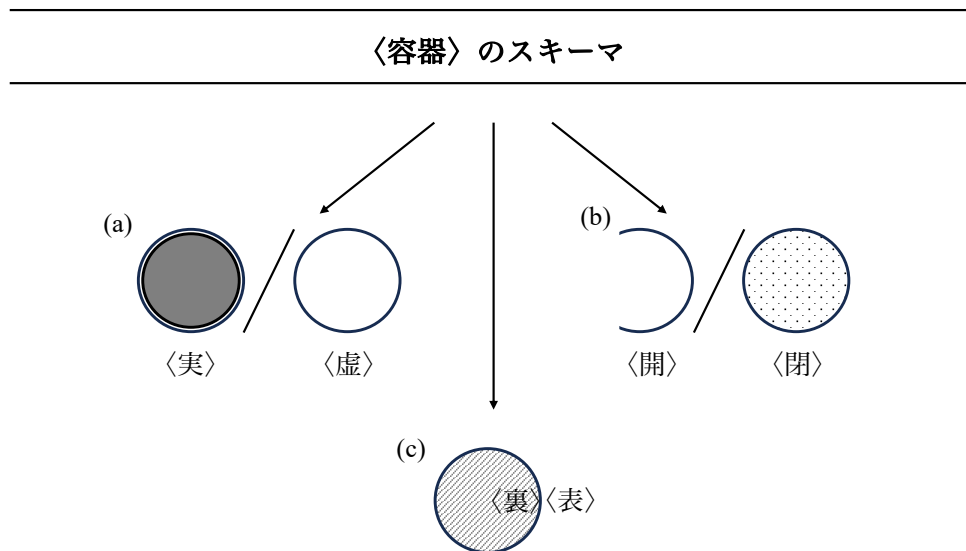
⁸⁶ これに関連して、メタファー写像におけるイメージスキーマの役割を明文化したのが、下に示す Lakoff (1993) の「不変性原理(invariance principle)」である。

Metaphorical mappings preserve the cognitive topology (that is, the image-schema structure) of the source domain, in a way consistent with the inherent structure of the target domain. (メタファー写像においては、目標領域に内在する構造に矛盾しない形で、起点領域の認知トポロジー(すなわち、イメージスキーマ構造)が保持される。)

(Lakoff, 1993, p. 215 [日本語訳は筆者による])

になることを論じている。(62) で挙げた〈容器〉スキーマのグループに複数のスキーマが属していることから示唆されるように、〈容器〉スキーマは〈包含〉以外のスキーマを含んでいる。山梨 (2000, 2012) によれば、〈容器〉スキーマは主体の視点に応じて、その下位スキーマである〈実・虚〉(図 5-a), 〈開・閉〉(図 5-b), 〈表・裏〉(図 5-c) のスキーマと結びつく。

図 5 〈容器〉スキーマと言語主体の視点 (山梨, 2000, p. 145)



〈実・虚〉スキーマ、〈開・閉〉スキーマ、〈表・裏〉スキーマに基づく表現例は (65)–(67) の通りである。

(65) 〈実・虚〉

- a. 彼の頭はからっぽだ。
- b. あの本は内容が豊富で面白い。
- c. 彼女の頭にはアイデアがいっぱい詰まっている。
- d. あの政治家の講演は中身がなかった。

(山梨, 2000, pp. 144–145)

(66) 〈開・閉〉

- a. 彼女は内向的な人だ。
- b. 彼はこもっている。
- c. あの人はオープンな人だ。
- d. 鈴木さんはとても外向的だ。

(山梨, 2000, p. 145)

(67) 〈表・裏〉

- a. この人物には表裏がない。
- b. 相手の裏を読む。
- c. 彼女には裏がある。
- d. あの男はあけっぴろげだ。

(山梨, 2000, p. 145)

(65)-a, c では「頭」を用いた例が挙げられているが, (68) の通り 〈実・虚〉の視点は「腹」や「胸」を含む表現でも確認される。〈実・虚〉が問題とされる場合, 〈頭〉の内容物は知的精神 (〈知識〉や〈思考〉) であるのに対し, 〈腹〉や〈胸〉の場合, 原則として情緒的精神 (感情) である点にも注目されたい。

(68) 腹一杯⁸⁷／胸が一杯になる／胸がすく

また, (66)(67) から読み取れるように, 〈開・閉〉スキーマは人物の外向性に関する意味を, 〈表・裏〉スキーマは性格上の裏表 (うらおもて) や心の隠し立てに関する意味を実現している。〈表・裏〉スキーマに基づくこのような意味は, (69) のように, 特に〈腹〉と〈胸〉において実現されていると考えられる。⁸⁸

(69) 腹の中／胸の内

一方, 〈開・閉〉スキーマに基づいて外向性を表す表現は, 本研究での調査の限り, 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のいずれにおいても該当例が存在しないと考えられるが, 関連表現として〈考え・意図〉や〈内心・本心〉を明かすことを表す (70) のような例が挙げられる。これらは外向性の度合いを表す表現ではないものの, 〈開く〉ことを通じて〈考え・意図〉や〈内心・本心〉を公にし, 他人と隠し立てのないやりとりを行うことを表している。

⁸⁷ 〈満足〉の意味。この表現は 3.4.3.2 節の (125) で取り上げる。

⁸⁸ 勿論「頭の中」とも言えるが, ここで問題としている裏表の対立を前提に用いられることは稀と考えられる。ただし全く存在しないとは言いきれず, たとえば以下の用例では, 言葉には出さないという意味で裏表の対立が隠れている。

そして, 多少気にいらぬお客さんがいても,
「このクソ忙しい時に来るんじゃないやねえよ」

と, 入り口でお待ちの何十人のお客さんに, 頭の中で悪態をついていても, 「平和」な場所で働けて, 平和な風景を見られることに, 幸せを感じずにはられないのです。

(https://note.com/tasty_dill899/n/n4e61c302d7b5 [下線は筆者による])

(70) 腹を割る／胸を開く

〈容器〉スキーマの例からわかるように、一連の言語表現にある特定のイメージスキーマの関与が認められる場合、当該スキーマのどのような側面に焦点が当たるか（どのような下位スキーマが用いられるか）、それによってどのような意味が実現するかを考えることが重要である。本稿では、イメージスキーマの概念を用いて〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を分析するにあたり、このような観点を必要に応じて取り入れていく。

2.3.6 プロトタイプシナリオ

我々は物事を理解する際、経験に基づいて得られた様々な背景知識を利用している。その中には物事に関わる一連の事象を結びつける時系列的な流れ、すなわち「シナリオ (scenario)」(あるいは「スクリプト (script)」) と呼ばれる知識も含まれる。Kövecses (1986, Ch. 2; 1990, Ch. 4), Lakoff (1987, Case Study 1), Lakoff and Kövecses (1987) は、アメリカ英語の〈怒り〉(ANGER)に関するメタファー・メトニミーのパターンを分析した上で、それらが複数の段階から成る (71) のようなシナリオへと統合されることを論じている。

(71) Stage 1: Offending event (怒りを引き起こす出来事)

Stage 2: Anger (怒り)

Stage 3: Attempt at control (制御の試み)

Stage 4: Loss of control (制御の失敗)

Stage 5: Act of retribution (報復の行為)

(Lakoff (1987, pp. 397–398) をもとに作成 [日本語訳は池上ほか (訳) (1993, pp. 487–488) による])

89

(71) の段階を言語化した例として、(21) であげた〈怒りは容器中の流動体の熱である〉のメタファー表現を抜粋し、対応づけたものが (72) である。⁹⁰

⁸⁹ 同一のシナリオが Kövecses (1986, pp. 28–29; 1990, pp. 67–68), Lakoff and Kövecses (1987, p. 211) でも示されている。

⁹⁰ Kövecses らは Stage 1–5 の段階を示してはいるものの、それまでに論じた各々の表現が具体的にどの段階に配置されるのかについて明確な説明を与えてはいない。(72) は Kövecses らの説明をもとに筆者が対応づけたものである。

(72) Stage 1: Offending event (怒りを引き起こす出来事)

- a. You make my *blood boil*. (おまえには腹わたが煮えくりかえる (←おまえは俺の血を煮えたぎらせる)) (= (21)-a)

Stage 2: Anger (怒り)

- b. His pent-up anger *welled up* inside him. (鬱積した怒りが彼の心 (の中) に湧き上がってきた) (= (21)-c)

Stage 3: Attempt at control (制御の試み)

- c. I could barely *contain* my rage. (私は怒りを内に抑えておくのがやっとだった) (= (21)-d)

Stage 4: Loss of control (制御の失敗) / Stage 5: Act of retribution (報復の行為)

- d. When I told him, he just *exploded*. (彼に言ったら、彼は怒りを爆発させた (←爆発した)) (= (21)-f)
- e. She *blew up* at me. (彼女は私に怒りをぶちまけた (←爆発させた)) (= (21)-g)

Kövecses と Lakoff によれば, (71) のようなシナリオは「プロトタイプシナリオ (prototype scenario)」として典型化されている (Kövecses, 1986, p. 28; 1990, p. 67; Lakoff, 1987, p. 397; Lakoff & Kövecses, 1987, p. 211)。〈怒り〉の場面での一連の行動が典型化されたシナリオに適合する限り, それは普通のこととしてみなされ, 特別な注目を引くことはない。一方, 振る舞いがプロトタイプシナリオから逸脱する場合, 非プロトタイプのシナリオを辿っているとして注意が向けられる (たとえば, 制御を失う前から〈怒り〉を発散させるなど)。このように, シナリオは言語主体が単に〈怒り〉を理解するためではなく, 次に起こるはずの事態を予測したり, 適切に行動したりするための指標としても機能する。⁹¹

シナリオの段階のうち, 特に感情の誘因 (Stage 1) や制御 (Stage 3) の段階は, 文化的な要因によって言語間の差異が生じやすいと言われている (楠見・米田, 2007, p. 68)。3. 2. 2. 2 節で詳しく取り上げる

⁹¹ Kövecses (1990, Ch. 11) は *emotion* や *feeling* などの感情一般を指す語 (特定の感情を指さない語) を用いた比喩表現等を手掛かりに, 感情全般に当てはまるようなシナリオとして以下のモデルを提案している。ただし, このシナリオは明らかに Kövecses 自身や Lakoff による研究で扱った〈怒り〉のシナリオを意識したものであり, 果たして本当に全ての感情を平等に見た場合のプロトタイプシナリオと言えるのかについては疑問が残る。実際に Kövecses (1990, p.187) では, 〈怒り〉が感情のプロトタイプに位置付けられるかもしれないという言及があり, 〈怒り〉を軸に作成されたシナリオであることは確かであろう。

Stage 0: State of emotional calm (感情が落ち着いている状態)

Stage 1: Cause (誘因)

Stage 2: Emotion exists (感情の発生)

Stage 3: Control (コントロール)

Stage 4: Loss of control (コントロールの喪失)

Stage 5: Action (行動)

Stage 0: Emotional calmness (感情の落ち着き)

(Kövecses, 1990, pp. 184–185 [日本語訳は筆者による])

が、日本語の〈怒り〉のメタファーを分析した Matsuki (1995) の研究では、日本語にも (71) に相当する〈怒り〉のシナリオが存在する一方で、制御 (Stage 3) がより精緻化されていることが指摘されている。

本研究は、〈腹〉〈胸〉〈頭〉という特定の身体部位を通じた精神作用の理解を分析対象としており、〈怒り〉のような特定の精神作用の比喩的理解を扱う研究とは方向性が異なる。(71) のように、ある精神作用が辿るシナリオを明らかにしたいのであれば、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する表現のみを観察することで、その目的を達成できるとはいえないだろう。しかし 3.2.2 節で概観するように、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の各部位と結びつく精神作用には何らかの傾向があることが先行研究によって指摘されている。たとえば、〈腹〉には〈怒り〉や〈不満〉といった負の感情や、利害関係の絡む〈考え・意図〉が結びつく傾向にある (e.g. Matsuki, 1995; 有蘭, 2007; ケキゼ・田中, 2004; 田中, 2003)。日本社会において、これらの精神作用は他人に知られないよう隠すべきという認識があると考えられる。〈怒り〉〈不満〉〈考え・意図〉に共通するこのような認識は、〈腹〉と結びつく精神を特徴づけるものでもあり、各部位に結びつく精神作用という観点から、部位固有のプロトタイプシナリオを探ることは有意味である。また、ある部位に複数の精神作用が結びつくのだとしたら、それらの精神作用が必ず同じシナリオを共有するのか、それとも別のシナリオを有するのかを考えることは重要である。以上の理由から、本研究では精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解を分析するにあたり、シナリオの概念を導入する。

2.3.7 身体基盤と文化基盤

この 2.3.7 節とこの後に続く 2.3.8 節では、第 3 章からの議論に先立ち、1.1 節でも導入した本研究の重要概念である身体基盤と文化基盤、文化モデルを改めて取り上げ、その具体的な特徴や認知言語学におけるこれらの概念の取り扱いを整理する。

認知言語学における主要な言語観の一つとして、「身体性(embodiment)」がある。1.1 節で述べたように、認知言語学では、言語の意味はあらかじめ客観世界に存在するのではなく、人間が世界と相互作用する中で主観的に構築していくものと考えられている。こうした世界との相互作用を可能とするのは、我々人間を物理的な存在たらしめている身体にほかならない。認知言語学における身体性とは、身体を媒介とした経験が、人間の概念形成や言語表現を動機づける重要な基盤として働いているとみなす経験基盤主義的な言語観である (e.g. Gibbs, 2005, Ch. 1; Johnson, 1987, Ch. 1; Lakoff, 1987, Ch. 16; Lakoff & Johnson, 1999, Ch. 22; Rohrer, 2007; 山梨, 2000, 第 4 章; 2012, 第 3 章)。本稿では、身体を通じた人間の経験を「身体経験」、身体経験に基づく動機づけのことを「身体基盤」、身体基盤が概念形成や言語表現の成立に大きな影響を及ぼす仕組みとその考え方を「身体性」と呼ぶ。

人間が持つ身体基盤として、具体的にどのような経験があるだろうか。山梨 (2012) は、日常言語に

関する概念体系の基盤となる身体経験として、(73)に示す四種の経験+その他の経験を挙げている。

(73) 空間認知に関わる経験：上・下，高・低，前・後，遠・近，左・右，等

五感に関わる経験：視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚

運動感覚に関わる経験：速度，バランス，等

体感に関わる経験：軽・重，寒・暖，等

その他の経験：内臓感覚，圧覚，痛覚，筋肉感覚

(山梨 (2012, pp. 61, 96) をもとに作成) ⁹²

身体性は，概念メタファー理論において殊に重視されてきた。その理由の一つは，身体経験に根差した数多くの概念メタファーの存在が明らかにされてきたことにある。中でも，共起性基盤に基づくメタファーとして扱われる事例の多くは，(73)に示したような身体経験に直接関わる概念領域を起点領域としている。この種のメタファーが Grady (1997a, 1997b) によってプライマリーメタファーとしての地位を与えられたことは，既に 2.3.2.2 節で述べた通りである。Grady (1997a) がプライマリーメタファーとして挙げている例をもとに，共起性基盤を持つメタファーにどのような身体経験が見られるのかを観察してみよう。

表 2 共起性基盤を持つメタファーと身体経験 (Grady (1997a, Appendix) をもとに作成)

プライマリーメタファー	基盤	表現例 (日本語訳は筆者による)
〈楽しきは上〉 (HAPPY IS UP)	楽しい (幸せな) 状態と真っ直ぐの姿勢の相関，あるいは高い位置に居ることと安全や支配感を感じることの相関	I was feeling <i>low</i> yesterday but the good weather has really <i>picked me up</i> . (昨日は気分が落ち込んでいたが，天気が良いので気分が上がってきた。)
〈知ること／理解することは見ること〉 (KNOWING/UNDERSTANDING IS SEEING)	視覚的知覚と情報認識の相関	I <i>see</i> what you mean. (あなたの言いたいことはわかります。) ⁹³
〈変化は移動〉 (CHANGE IS MOTION)	自らの位置と感じ方の相関，動きを知覚することと，周囲の状態が変化することを認識することの相関	My car has <i>gone from bad to worse</i> lately. (最近，私の車は悪い状態から余計悪い状態に向かっていく。)
〈愛情は温かさ〉 (AFFECTION IS WARMTH)	身体の接触によって得られる温感と愛情の相関	They greeted me <i>warmly</i> . (彼らは私を温かく出迎えてくれた。)

⁹² これら四種の経験は山梨 (2000, pp. 119–120) でも挙げられている。「その他の経験」(内臓感覚，圧覚，痛覚，筋肉感覚)とあるものは，山梨 (2012, p. 96) の脚注で補足された身体経験であるが，これらも広い意味での体感に関わる経験とみなすことができると述べられている。

⁹³ *see* の視覚的な意味を日本語で自然に表現し難いが (「*あなたの言いたいことは見える。」)，「あなたの言いたいことが見えてこない。」などのように，一部を操作することで容認度は上がると考えられる。「勝利の兆しが見える」や「言語学に明るい人」などの表現は，同じく〈知ること／理解することは見ること〉のメタファーに基づくであろう。

表2の四種のプライマリーメタファーは、(73)で挙げた身体経験のいずれかに基づくと考えられる。つまり、〈楽しきは上〉は空間的な経験、〈知ること／理解することは見ること〉は五感のうち視覚に関する経験、〈変化は移動〉は運動に関する経験、〈愛情は温かさ〉は体感のうち熱感に関する経験に基づいており、これらが各メタファーの起点概念を形成している。⁹⁴

プライマリーメタファーのような共起性に基づくメタファーのみならず、いわゆる構造のメタファーにあたるメタファーに関しても、身体経験による動機づけが明らかにされている。2.3.2.1節で言及したように、Kövecses (1986, Ch. 2; 1990, Ch. 4), Lakoff (1987, Case Study 1), Lakoff and Kövecses (1987) は、アメリカ英語の〈怒り〉に関する(74)のようなメタファー表現に基づき、〈怒りは容器中の流動体の熱である〉(ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER)という概念メタファーを設定している。

- (74) a. You make my *blood boil*. (おまえには腹わたが煮えくりかえる (←おまえは俺の血を煮えたぎらせる))
b. *Simmer down!* ((そう怒ってばかりいず) 頭を冷やせ (←熱を冷ませ))
c. His pent-up anger *welled up* inside him. (鬱積した怒りが彼の心(の中)に湧き上がってきた)
d. I could barely *contain* my rage. (私は怒りを内に抑えておくのがやっとだった)
e. He *turned his anger inward*. (彼は怒りを(外に出さないよう)内に向けた)
f. When I told him, he just *exploded*. (彼に言ったら、彼は怒りを爆発させた (←爆発した))
g. She *blew up* at me. (彼女は私に怒りをぶちまけた (←爆発させた))

(=(21))

彼らによれば、このメタファーは熱(heat)、内圧(internal pressure)、心身の動揺(agitation)という三つの身体基盤に動機づけられている(Kövecses, 1986, p. 13; 1990, pp. 52–53; Lakoff 1987, p. 383; Lakoff & Kövecses, 1987, p. 197)。重要なのは、これらの身体経験が同時に〈怒り〉のメトニミーをも動機づけるという点である。次頁に示す(75)では、a, bが熱(体温)を、c, dが内圧(血圧)の上昇に起因する血管の破裂を、eやfは身体や精神の動揺を描写しているが、これらは全て〈怒り〉を表す表現として用いることができる。

⁹⁴ 山梨(2000, p. 120; 2012, p. 61)の述べるように、四種の身体経験は各々が独立して存在するとは言い難い。たとえば、〈変化は移動〉メタファーの動機づけには、移動の運動感覚のみならず、移動に伴う視界の変化(視覚情報)が含まれると考えられる。

- (75) a. Don't get *hot under the collar*. (かつかとするな (←首筋をほてらせるな))
 b. Billy's a *hothead*. (ビリーはすぐかつとする (←ビリーの頭はほてっている))
 c. When I found out, I almost *burst a blood vessel*. (私はそれを知って、(怒りのあまり) ほとんど血管が切れそう (←破裂しそう) になった)
 d. He almost had a *hemorrhage*. (彼は (怒りのあまり) ほとんどプツッリいきそうだった (← (脳内) 出血をおこしそうだった))
 e. She was *shaking* with anger. (彼は怒りに震えていた)
 f. He's *all worked up*. (彼はすっかり興奮して (怒って) いた)

(Lakoff, 1987, p. 382 [日本語訳は池上ほか (訳) (1993, pp. 465–466) による])⁹⁵

〈容器中の流動体の熱〉という概念領域は、一見すると身体とは縁遠いように思われるが、(75) のようなメトニミー表現を観察することで、なぜこのメタファーにおいては容器中の内容物が熱や内圧を持ち、安定性を欠いた流動体として描写されるのかが説明される。つまり、メトニミーを動機づける〈怒り〉の身体基盤 (生理的変化) は、〈怒りは容器中の流動体の熱である〉というメタファーとの整合性を保っている。身体基盤はメトニミーを動機づけることに加え、構造のメタファーにおける起点領域の選択を動機づけるのである。

しかしながら、体温・体感として感じる内圧・心身の動揺は、全て身体に起こる生理的変化として経験されるものである。このような身体経験が〈容器中の流動体の熱〉のような別領域の性質 (流動体の熱・容器の内圧・内容物の不安定な状態) として適用される際には、何らかの抽象化が生じていると考えられる。3.3.1 節で詳しく説明するが、楠見 (1996, pp. 42–47)、楠見・米田 (2007, pp. 65–67) は、日本語の〈怒り〉を例に取り、物理的領域の変化を通じた感情の比喩が、身体経験に動機づけられた複数のイメージスキーマ — 〈容器〉スキーマ、〈垂直性〉スキーマ、〈バランス〉スキーマ、〈コントロール〉スキーマ — によって一貫性を与えられることを論じている。⁹⁶ 〈容器〉スキーマのもとでは、〈怒り〉は身体という容器の中で「煮えくり返る」液体として描かれ、さらに〈垂直性〉スキーマによって「こみあげる」などと表現される。感情生起によって心身のバランスが崩れ (〈バランス〉スキーマ)、自己制御が働くと (〈コントロール〉スキーマ)、〈怒り〉は制御の対象とみなされ、「怒りを抑える」のような表現が生まれる。楠見 (1996, p. 47)、楠見・米田 (2007, p. 62) はさらに、イメージスキーマ

⁹⁵ 同じ例は Kövecses (1986, pp. 12–13; 1990, p. 52), Lakoff and Kövecses (1987, p. 197) でも挙げられている。

⁹⁶ 楠見 (1996) は Kövecses (1990), Lakoff (1987), Lakoff and Kövecses (1987) を引用し、彼らが「怒り」感情に関するイメージスキーマを明らかにしている (p. 42) と述べている。しかし、Kövecses と Lakoff によるこれらの著作の中では、少なくとも〈怒り〉のメタファー・メトニミーの分析において「イメージスキーマ (image schema)」という用語は出現しないので注意されたい。

マが身体経験に動機づけられていることに触れ（本稿の 2. 3. 5 節を参照），このようなイメージスキーマに基づく感情の比喩表現が，日英語を含む異文化間で共通する傾向にあることを指摘している。

以上のように，認知言語学における比喩研究では一貫して身体性を重視し，比喩成立の動機づけとしての身体経験を明らかにしてきた。しかし忘れてはならないのは，人間の言語は文化的営みの一部でもあり，言語はまた様々な文化的影響のもとで成り立っているということである。認知言語学における比喩研究においても，身体基盤と並行して文化的要因（本稿では「文化基盤」と呼ぶ）が果たす役割を追求する流れがある（e.g. Gibbs, 1999; Kövecses, 2005; Matsuki, 1995; Sharifian et al., 2008a; Yu, 1995, 1998, 2003, 2008），認知言語学の比喩研究にとって争点となるのは，「比喩の動機づけとしての身体基盤と文化基盤の関係性はいかなるものか」という問いである。

この問いをめぐっては，多くの場合対照言語学的アプローチが採られている。たとえば Yu (1995; 1998, Ch. 3) は，Kövecses や Lakoff によって論じられたアメリカ英語の〈怒り〉のメタファー・メトニミーを比較対象に置き，中国語の〈怒り〉のメタファー・メトニミーを分析している。中国語では (76)-a のような熱，(76)-b のような内圧，(76)-c のような動揺に基づくメトニミー表現が観察され，これらは英語で観察された (75) のような表現と対応している。

- (76) a. 我 气 得 脸上 火辣辣 的。
 Wo qi de lian-shang huo-lala de.
 私 氣（怒る） COM 顔面 火-（ヒリヒリと）熱い PRT
 （私は怒って顔が火照っている。）
- b. 别 把 肺 给 气 炸 了。
 Bie ba fei gei qi zha le.
 するな PRT 肺 PRT 氣 破裂する PRT
 （氣（憤怒）で肺を破裂させるな。）
- c. 她 气 得 浑身 发抖。
 Ta qi de hun-shen fadou.
 彼女 氣（怒る） COM 全身 震える
 （彼女は激怒して全身が震えていた。）

（Yu (1998, pp. 56–58) をもとに作成 [漢字表記は同文献の Appendix に基づく]）⁹⁷

⁹⁷ 同じ例は Yu (1995, pp. 67–68) でも挙げられている（ただし一部変更あり）。分節とグロスの略語（COM＝補語標識 (complement marker), PRT＝小辞・助詞 (particle) は Yu (1998) に従った。日本語に改める際は，中岡深雪先生，許慧先生に

Yu (1995, p. 65; 1998, p. 54) はさらに、中国語には (76) で示されるような身体経験に基づく概念メタファー〈怒りは容器内の熱い気体である〉(ANGER IS THE HOT GAS IN A CONTAINER) が存在すると主張し、その証拠として (77) に示すような一連の表現を挙げている。

(77) a. 她 脾气 很大.

Ta pi-qi hen da.

彼女 脾臓-気 とても 大きい

(彼女は脾臓の気がとても大きい (←彼女は癩癩持ちである)。)⁹⁸

b. 他 最近 肝气 郁结.

Ta zuijin gan-qi yujie.

彼 最近 肝臓-気 鬱積する

(彼は最近肝臓の気が鬱積している (←彼は最近イライラしがちだ)。)

c. 她 气势 汹汹.

Ta qi-shi xiongxiong.

彼女 氣勢 洶洶 (騒がしい)

(彼女は氣勢が洶洶としている (←彼は憤怒で荒れ狂っている)。)

d. 他 拿 我 出气.

Ta na wo chu-qi.

彼 取る 私 出る-気

(彼は私に気をぶつけた (←彼は私に怒りをぶちまけた)。)

e. 他 怒气 冲天.

Ta nu-qi chong-tian.

彼 怒気 天高くのぼる

(彼は怒気が天を衝いている (←彼は激怒している)。)

(Yu (1998, pp. 55–56) をもとに作成 [漢字表記は同文献の Appendix に基づく])⁹⁹

確認のご協力を賜った。

Yu (1995, 1998) は (76)-b を身体の体感としての内圧を述べるメトニミー表現として分類しているが、「破裂する (炸)」とあるように、〈容器〉のメタファーとしての性質がかなり強いと考えられる。また、(76)-a, c では、「気」の〈怒る〉という動詞の意味が表されている。

⁹⁸ 中国語では「脾气」で〈人の性質・質〉を表し、「脾气大」で〈短気である〉ことを表す。『中日辞典 第三版』の「脾气」の説明によれば、「“脾气”は人や動物の性質・気性をさし、“性格”は人の性格以外に、民族や集団にも用いる」。

⁹⁹ 同じ例は Yu (1995, pp. 64–65) でも挙げられている (ただし一部変更あり)。

このメタファーでは、〈怒り〉は物理的な大きさを持ち ((77)-a)、中に鬱積して内圧を高めるものとして理解される ((77)-b)。また、(77)-c のように激しく不安定で、内圧が高まると外に放出されたり ((77)-d)、勢いよく出たりする ((77)-e)。Yu (1995, p. 65; 1998, p. 58) は、上で挙げたようなメタファーが、内圧・破裂の危険性という要素を含むという点で Kövecses や Lakoff の論じたアメリカ英語の〈怒りは容器中の流動体の熱である〉メタファーと本質的には共通すると述べている（熱の要素は言語的に明示されてはいないものの、内圧を高める要因として関与する）。このような異言語間の類似性は、〈怒り〉のメタファーが生理的な経験に動機づけられていることに起因する (Yu, 1995, p. 80; 1998, p. 70)。

一方、(77) の全てにおいて「气 (qi)」という語が用いられていることから分かるように、中国語の容器メタファーで内容物にあたるのは〈流動体〉(FLUID)ではなく〈気体〉(GAS)である。Yu (1995, pp. 80–82; 1998, pp. 70–73) は、〈気〉の概念が中国の伝統的な陰陽五行説（詳しくは 3.3.4.1 を参照されたい）に端を発することを指摘し、陰陽五行に基づく二通りの説明を加えている。第一に、陰陽五行説における気とは、身体を構成する三つの基本要素 — 気・血・津液（血以外の体液） — のうちの一つである。三種の要素のうち最も重要なのが気であり、血は気と混ざることによって活動力を発揮し、体内の経路をめぐる。体内で気血の循環が滞ると様々な不調が生じるが、こうした気の活動力を妨げる要因の一つが〈怒り〉を典型とする負の感情であり、ここに〈気〉と〈怒り〉の概念の結びつきが見出される。第二に、陰・陽の対立概念において、気は火とともに陽に分類され、液体とその他全ての流体は陰へと分類される。陰・陽の対立には熱・冷の対立も含まれ、気・火はともに陽の極を通じて熱と関係付けられる。それゆえ、中国語では〈怒りは熱である〉の下位メタファーとして、冷の性質を持つ液体ではなく、熱の性質を持つ気を用いた〈怒りは容器内の熱い気体である〉のメタファーが生じたのだという。

Yu (1995, 1998) による中国語・英語の対照研究から明らかなように、比喩の成立において身体基盤と文化基盤は同時に役割を果たしており、特に身体基盤は英語・中国語の比喩表現の共通性を導く動機として、文化基盤は中国語の比喩表現の固有性を生む動機として機能している。Kövecses (1995; 2000, Ch. 8; 2005, Ch. 3; 2015, Ch. 5) は、自身と Lakoff によるアメリカ英語の〈怒り〉の研究と、日本語、中国語、ハンガリー語、ウォロフ (Wolof) 語を含む他言語の〈怒り〉表現に関する諸研究を比較することで、人類に普遍的な身体経験が比喩の共通性・類似性を導き、当該言語に結びついた社会・文化的経験が比喩の相違性・多様性をもたらすという次頁 (78) の二大傾向を一般化している。

(78) *Universal embodiment can lead to potentially universal metaphors.*

(普遍的な身体性は、潜在的な普遍性を有するメタファーを生じさせる可能性がある。)

Differential social-cultural experiences and differential cognitive processes can lead to variation in metaphors.

(異なる社会・文化的経験や異なる認知プロセスが、メタファーに差をもたらす可能性がある。)

(Kövecses, 2005, p. 293 [日本語訳は筆者による])

本研究で分析対象とするのは〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞を用いた比喻表現である。これらは身体の一部を指す語を含んでおり、全てが何らかの身体基盤に動機づけられていることは言うまでもない。しかしながら、上で言及した中国語が例証するように、身体そのものに対する理解さえ文化によって異なる場合がある。Yu (2015) は次のように述べる。¹⁰⁰

(...) the mind is not shaped universally because the body itself may take different 'shapes' in different cultural models in the first place. Cultures may construe the body and bodily experiences differently, attributing different values and significances to various body parts and organs and their functions.

(そもそも身体自体が異なる文化モデルにおいて別の「形」をとるかもしれないのだから、心が普遍的に形作られるわけではない。文化によって身体や身体体験の解釈は異なり、さまざまな身体の部位や器官、そしてそれらの機能に異なる価値や意義が帰属されるかもしれないのだ。)

(Yu, 2015, p. 227 [日本語訳は著者による])

上の引用が示唆するように、たとえ本研究が身体部位を通じた精神作用の理解を扱うのだとしても、全てを身体経験・普遍性のもとで片づけることはできない。身体が文化によって規定される一面を持つ以上、文化基盤を無視して身体部位詞表現の議論を進めることは不可能であり、不適切である。本

¹⁰⁰ 同様の視点からの指摘が Gibbs (1999) でも見られる。

Scholars cannot, and should not assume, that mind, body, and culture can somehow be independently portioned out of human behavior as it is only appropriate to study particular "interactions" between thought, language, and culture, respectively. Theories of human conceptual systems should be inherently cultural in that the cognition which occurs when the body meets the world is inextricably culturally-based. What is missing from the psycholinguistic work, and from aspects of the work on metaphor in cognitive linguistics, is an explicit acknowledgment of culture and its important, perhaps defining, role in shaping embodiment and, consequently, metaphorical thought.

(学者らは心、身体、文化を人間の行動から独立した形で切り離すことはできないし、そう仮定すべきではない。思考、言語、文化それぞれの間で起こる特定の「相互作用」を研究することが唯一適切であるからである。人間の概念体系に関する理論は、身体が世界と出会うときに生じる認知が互いに不可分なほどに文化に基盤を持つという点で、本質的に文化的なものであるべきだ。心理言語学研究、そして認知言語学におけるメタファー研究に欠けているのは、文化という存在をはっきりと認識すること、また、身体性が具現化され、さらにその結果としてメタファー的思考が具現化される際の、文化の果たす重要でおそらく決定的な役割をはっきりと認識することである。)

(Gibbs, 1999, p. 153 [日本語訳は筆者による])

研究ではこのような考えのもと、身体基盤・文化基盤が相互作用しながら、精神作用と〈腹〉〈胸〉〈頭〉を結ぶ比喩を動機づけ、それらが次節で説明する精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉理解の文化モデルを構成すると考える。

なお、Kövecses (2005) が (78) で social-cultural という語を用いているように、「文化的 (cultural)」という語はしばしば「社会・文化的 (social-cultural/sociocultural)」と表現されることがある。本稿では便宜上「文化」や「文化的」という表現を用いるが、文化と社会を何らかの基準で分離し、文化のみに焦点を当てるという意図はないことを断っておきたい。したがって、本稿でいう「文化」、「文化的」とは「社会・文化」、「社会・文化的」と表現する場合と同義である。

2.3.8 文化モデル

我々人間が言語を通じてコミュニケーションを行うことができるのは、言語が記号体として形式と意味を有しているからである。自然言語は程度差こそあれ、形式と意味の組み合わせに関する使用集団の無意識の合意のもとで成り立っている。たとえば人生について語る場合、「行き詰まる」という形式を通じて〈どうにもならない状態になる〉ことを指すことができるのは、話し手と聞き手、あるいは話し手と読み手の間に、形式と意味の対応に関する共通認識が存在するからである。加えて、認知言語学においては、言語の意味が概念的であり、世界に対する人の認識を反映するとみなされることを先に述べた (2.3.1 節を参照)。これら二つの前提を組み合わせると、言語の意味が、個人のみならず、その使用集団で共有された世界の認識 (上の例であれば、〈人生〉を〈旅〉とみなすメタファー的認識) を反映する一面を持ち合わせているという考えを導くことができる。本研究では、このような考えに基づき、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の精神義を扱うことは、日本 (日本語文化圏) で培われ、共有されてきた精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解を探究することに相当するとみなす。

上で述べたような特定の言語文化集団に共有された世界に関する認知モデルは、「文化モデル (cultural model)」と呼ばれる (e.g. D'Andrade, 1987; Quinn, 1987, 1991; Quinn & Holland, 1987)。¹⁰¹ 1.1 節で見たとおり、Quinn and Holland (1987, p. 4) は文化モデルを次のように定義する。¹⁰²

¹⁰¹ 以降の文化モデルの概念の整理にあたっては、その研究史を辿るために Dirven et al. (2007) による概説も参照した。

¹⁰² このほかに、D'Andrade (1987) は文化モデルを以下のように定義している。

“A cultural model is a cognitive schema that is intersubjectively shared by a social group.” (文化モデルとは、ある社会集団に間主観的に共有された認知スキーマのことである。)

(D'Andrade, 1987, p. 112 [日本語訳は筆者による])

D'Andrade (1987, p. 113) によれば、「間主観的に共有された」状況とは、以下三つの条件が満たされている時のことを言う。3の条件は、自分が知っていると他人に知られていることを自覚することを指す。メタ認知に関する3までが満た

Cultural models are presupposed, taken-for-granted models of the world that are widely shared (although not necessarily to the exclusion of other, alternative models) by the members of a society and that play an enormous role in their understanding of that world and their behavior in it. (文化モデルとは、(必ずしも代わりとなる他のモデルを排除するわけではないが) ある社会の成員によって広く共有された、世界についての前提化した、また当然視されたモデルのことであり、社会の成員がその世界を理解し、その中で行動する際に大きな役割を果たすモデルでのことである。) (=4)

文化モデルの記述は研究者によってさまざまであるが、Quinn (1987, p. 179) は各々の文化モデルが複数のスキーマ (Quinn はこれらを独自に「命題スキーマ」(proposition-schema) と呼んでいる) から成ると主張している。Quinn (1987) は、アメリカの〈結婚〉(MARRIAGE) に関する文化モデルを例に、アメリカ人夫婦へのインタビューに基づく談話分析を通じて (79) に挙げる八つのスキーマを抽出した。

(79) MARRIAGE IS ENDURING	(結婚とは永続的である)
MARRIAGE IS MUTUALLY BENEFICIAL	(結婚は双方にとって有益である)
MARRIAGE IS UNKNOWN AT THE OUTSET	(結婚は初めは行先が見えない)
MARRIAGE IS DIFFICULT	(結婚には困難が付きまとう)
MARRIAGE IS EFFORTFUL	(結婚は努力を要する)
MARRIAGE IS JOINT	(結婚は共同によって成り立つ)
MARRIAGE MAY SUCCEED OR FAIL	(結婚はうまくいくかもしれないし、失敗におわるかもしれない)
MARRIAGE IS RISKY	(結婚には危険が伴う)

(Quinn, 1987, p. 179 [日本語訳は筆者による])

これらは、アメリカにおいて〈結婚〉というものがどう捉えられているかを示すものである。Quinn (1987) によれば、これらのスキーマはアメリカ人が結婚について語る際のメタファーと結びついている。例えば、インタビューにおいて、〈結婚とは永続的である〉(MARRIAGE IS ENDURING) というスキーマと、〈結婚はうまくいくかもしれないし、失敗に終わるかもしれない〉(MARRIAGE MAY SUCCEED OR FAIL) というスキーマは、〈結婚というものは、長期間続く旅である〉(MARRIAGE IS AN ONGOING JOURNEY) という

されることで、文化モデルに基づくある物事の解釈が、当該集団の中で自明のこととして扱われるようになるという。

1. スキーマのことを当該集団の成員全員が知っている。
2. 自分以外の成員がスキーマのことを知っていることを、全員が知っている。
3. 上二つの状況を、全員が知っている。

メタファーを通じて頻繁に現れた。例えば、夫婦は一緒に「良いことも悪いことも経る」(*go through the good and bad*) 二人として語られ、結婚生活が失敗に終わる様子は、「立ち止まる」(*stop*)、「(それ以上) 進み続けることができない」(*unable to continue*)、「別れて別の方向に進み始める」(*split and start going in a different direction*) などと表現されていたという (Quinn, 1987, pp. 175–176)。

Quinn (1991, pp. 64–65) は、文化モデルがメタファーに先行して存在し、メタファーはそれを反映するという見方をとるが、Zoltán Kövecses 氏を中心とする認知言語学者らは、メタファーが抽象的事柄に関する文化モデルの形成にまで関与することを論じている (e.g. Gibbs, 1994, pp. 192–206; Kövecses, 1999; 2005, Ch. 9)。たとえば、Kövecses (1999, pp. 183–184; 2005, pp. 219–220) は、〈結婚〉の文化モデルのうち〈結婚とは永続的である〉のスキーマは、〈結婚は二つの要素から成る物理的および／または生物学的な単一体である〉(MARRIAGE IS A PHYSICAL AND/OR BIOLOGICAL UNITY OF TWO PARTS) というメタファーに基づいていることを指摘し、さらにこのメタファーは、より一般性の高いメタファー〈非物理的な一体性は物理的一体性である〉(NON-PHYSICAL UNITY IS PHYSICAL UNITY) から生じていることを論じている。本研究では、認知言語学の立場に基づき、メタファーが文化モデルを形成するという Kövecses らの考えを支持する。さらに本研究では、文化モデルの一部はメトニミーによって構成され则认为る (3. 4. 5 節, 3. 5. 6 節, 3. 6. 5 節を参照)。

文化モデルの概念は、本研究と同様に身体部位詞を扱った比喩研究においてもすでに導入されている。Yu (2003) は、中国語の〈勇氣〉の概念に関する文化モデルが、中国医学（陰陽五行説）に基づく以下二種類のメタファーを中心に成立していることを論じている。

(80) COURAGE IS *QI* (GASEOUS VITAL ENERGY) IN GALLBLADDER / GALLBLADDER IS CONTAINER OF COURAGE

（〈勇氣は胆嚢の中の気（気体の生命エネルギー）である〉／〈胆嚢は勇氣の容器である〉）

a. 胆气 (dan-qi)

胆嚢-気（←勇氣）

b. 胆量 (dan-liang)

胆嚢-量（←勇氣, 度胸, 胆っ玉）

c. 胆大 (dan-da)

胆嚢-大きい（←度胸がある, 大胆である）

d. 胆壮 (dan-zhuang)

胆嚢-強い・丈夫だ（←度胸がある, 肝っ玉が大きい）

(Yu (2003, pp. 19, 20, 22) をもとに作成 [語の意味は『中日辞典 第三版』に基づく])

一方、1.1 節でも言及した通り、Niemeier (2000) は、英語の感情の座としての〈心臓 (心)〉 (HEART) の文化モデルが複数の下位モデルから成るとし、*heart* に関する表現を以下の四種のメトニミー・メタファーのカテゴリーに分類している。

(81) *Heart as a metonymy for the person* (人物を表すメトニミーとしての心臓)

- a. *set one's heart on somebody* (誰かに心臓を置く (←誰かに心を寄せる))

The *heart as a LIVING ORGANISM* (〈生命体〉としての心臓)

- b. *make one's heart bleed* (心臓を流血させる (←辛い気持ちになる))

The *heart as an OBJECT OF VALUE* (〈価値あるもの〉としての心臓)

- c. *to win someone's heart* (誰かの心臓を勝ち取る (←誰かの愛を勝ち取る))

The *heart as a CONTAINER* (〈容器〉としての心臓)

- d. *a heart overflowing (with gratitude)* ((感謝で) 溢れる心臓 (← (感謝で) 溢れる心))

(= (5))

これらの研究は、身体部位詞 (厳密には内臓語) を扱う点で共通しているが、何に関する文化モデルを分析対象とするかで方向性が異なっている。Yu (2003) の場合、〈勇気〉という感情の概念に関する文化モデルの一部として〈胆嚢〉のメタファーを扱っている。一方、Niemeier (2000) は全て感情に関する表現を扱いながらも、分析対象を〈心臓〉という身体部位 (内臓) に据えている。本研究は、Niemeier (2000) の研究と同様に身体部位に関する文化モデルを分析対象とするが、同時に Yu (2003) の研究のように、特定の精神作用との対応にも着目していくこととする。

2.4 第2章のまとめ

本章では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の分析で援用する理論的枠組みとして、慣用句 (本研究でいう慣用表現) の分解可能性に基づく分類法、認知意味論の諸概念を整理した。2.2 節では、イディオム・慣用表現の意味に焦点を当てた国内外の先行研究をたどり、分解可能性の観点から本研究での身体部位詞表現の分類方法を定義づけた。Nunberg (1978) 等による分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分と、有蘭 (2009) による慣用句・慣用的連結句の二分は、分解可能性に基づくという点では共通するが、下位区分に関して両者の見解は異なっている。本研究では、分解可能なイディオムに関して名詞の意味拡張のみに注目する Nunberg (1978) 等の分析に対し、名詞以外の構成要素の意味拡張にま

で対象を広げることで、分解可能な慣用表現（＝慣用的連結句）の新たな下位分類を実現した有蘭 (2009) の二分法を採用することを述べた。一方、有蘭 (2009) が Nunberg (1978) 等による分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分に相当すると述べる慣用句・慣用的連結句の分類に関して、一部相違が見られることを指摘し、要因を明確にした。この相違は、句全体の慣用的意味を見た際に、その意味要素と構成語それぞれが持つ意味との対応づけの可否を判断基準とするのか、それとも句が慣用的意味を得る際に意味拡張が生じた単位（語かそれとも句か）を判断基準とするのかで生じると考えられる。本稿では、後者の基準をもとに慣用句・慣用的連結句の概念を再解釈し、さらに分析対象を合成語にまで広げることで、次のような慣用表現の下位区分を定義づけた。

(82) 慣用表現：

個々の構成要素の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を全体として表し、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している句。あるいは個々の構成要素の基本的な意味（典型例あるいは日常の身体経験に基づいて早い時期に習得される意味）から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を全体として表す合成語

慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語：

慣用表現のうち、意味拡張が表現全体で生じることで慣用的意味を獲得したと考えられる句あるいは合成語

慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語：

慣用表現のうち、全体としての結びつきを保ちつつ意味拡張は構成要素単位で為されることで、慣用的意味を獲得したと考えられる句あるいは合成語

(= (17))

2.3 節では、本研究で援用する分析の枠組みである認知言語学の重要概念として、メタファー (2.3.2 節)、メトニミー (2.3.3 節)、メタフトニミー (2.3.4 節)、イメージスキーマ (2.3.5 節)、プロトタイプシナリオ (2.3.6 節)、身体基盤と文化基盤 (2.3.7 節)、文化モデル (2.3.8 節) を順に概観した。これらの理論的概念について、第3章以降の分析で特に重要となる点を次の通り再掲する。

【メタファー】

- メタファー（特に構造のメタファー）には概念要素の対応（存在的対応）と概念要素の知識に関す

る対応（認識的対応）が存在する。

- メタファーの認知基盤には、類似性のみならず、共起性が含まれる。
- あるメタファーが複数のメタファーによって成り立つ場合がある。それゆえ、ある一つのメタファーの動機づけとして複数の基盤が働く可能性がある。

【メトニミー】

- メトニミーの隣接性には大きく分けて空間的隣接性と時間的隣接性（共起性）がある。
- メトニミーに関わる二つの事物・概念が隣接関係にあるというのは、認知的な観点から言えば両者が同じ概念領域（あるいはドメインマトリックスや ICM）の中に存在するという意味である。
- メトニミーの媒体として事物・概念が選択されるというのは、心的アクセスのしやすさから目標の事物・概念を捉えるための参照点として選択されているという意味である。また、認知的な要因から、参照点として選択されやすい事物・概念が存在する。

【メタフトニミー】

- メトニミー・メタファーが同時に働いて一つの比喩表現を形成する場合がある。
- メトニミーの時間的隣接性とは、メタファーでいう共起性基盤に相当する。この点において、メトニミーとメタファーは連続的である。

【イメージスキーマ】

- イメージスキーマはその構造のみならず、論理的含意をメタファーに提供する。
- イメージスキーマの持つ特性のうち、主体の視点によって何が言語表現に用いられるかが変化する。

【プロトタイプシナリオ】

- あるメタファーに基づく一連の表現は、その物事に関する時系列的な流れ（シナリオ）の知識をもとに構造化されている場合がある。

【身体基盤と文化基盤】

- 比喩表現の動機づけには身体基盤と文化基盤がある。
- 身体基盤はプライマリーメタファーのような共起性に基づくメタファーのみならず、構造的な対応関係からなるメタファーの基盤の一部ともなりうる。

- 身体を通じた精神の理解は必然的に身体基盤を持つが、身体そのものの理解が文化に影響される場合がある。

【文化モデル】

- ある物事に関する一連の言語表現は、文化モデルとよばれる言語文化集団で共有された世界の認識を反映する。
- メタファーが文化モデルの形成に寄与しうるとすれば、研究対象（本研究であれば精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解）に関するメタファーさらにはメトニミーを体系的に明らかにすることで、その文化モデルを完全でないにせよ部分的に示すことができる。

第3章 現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉

3.1 はじめに

本章では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を比喩的な成り立ちに基づいて分類・分析することで、それらの表現を成立させる比喩の仕組みと動機づけ（基盤）、ならびに精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）の各々の成立基盤を明らかにする。これら三部位を指す語は、精神義を持つ主要な身体部位詞として多くの認知言語学的研究が行われてきた。〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する従来の認知言語学研究は、それらの身体部位を指す語を含む比喩表現（特に慣用表現）の観察を通じて① 各々の部位と結びつく精神作用の記述・特徴付け、②（慣用）表現の比喩の仕組みの分析、③ 各々の部位と精神作用の結びつきをもたらす動機づけの考察を行うものに大分され、どの研究も①～③の複数の視点を取り入れている。しかしながら、③は各々の研究が独自に巨視的な考察を加えるにとどまる傾向にあり、複数の基盤を想定した体系的な分析はおこなわれてきていない。本章では、これまでに比較的研究がよく進んでいる①の視点を残しつつ、②と③を組み合わせたアプローチにより、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の成立基盤に関する説明を再検証・精緻化する。②と③を統合するための枠組みとして、楠見・米田(2007)の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を分析手法として導入する。このモデルは、精神作用に関する身体部位詞表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけを帰納的に明らかにし、他部位との比較を可能とするものである。本章では、この「身体部位詞表現の階層モデル」を活用することで、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解が成立基盤の観点から次のように特徴付けられることを結論づける。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、五臓思想（e.g. 長谷川ほか, 2012）・丹田思想（e.g. 片淵, 2023）・本音と建前文化（Matsuki, 1995）といった文化基盤であり、特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有蘭, 2007, 2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴付ける動機づけの中心にあるのは、近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか, 2012）である。

本章の構成は以下の通りである。3.2節では精神作用に関する〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を扱った先行研究を概観し、問題提起を行う。3.3節では、本研究で援用する楠見・米田(2007)の「感情言語の階層モデル」に加え、身体部位詞表現に関わる比喻の具象性・二重性を検討した上で、2.2節で示した慣用表現の分類を組み合わせた新たな身体部位詞表現の分類・分析方法（身体部位詞表現の階層モデル）を提案する。3.4節から3.6節にかけては、それらの分類基準に基づき『日本国語大辞典 第二版』を主なデータソースとした〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の観察・分析を行なっていく。3.7節では、上の①から③の視点を総合した〈腹〉〈胸〉〈頭〉の比較検討を行うことで、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルを支える比喻とその動機づけを特徴づける。3.8節では本章での分析の総括を述べる。

3.2 先行研究と問題の所在

3.2.1 佐竹(1984)

佐竹(1984)は、『日本国語大辞典(初版)』から〈腹〉〈胸〉に関する表現を網羅的に収集し、各項目の語釈に基づいてまとめている。〈腹〉表現を10に、〈胸〉表現を15にそれぞれ分類することで各身体部位が担う意味を明らかにしており、いわば〈腹〉と〈胸〉に関する表現の辞書的著作として位置付けることができる。以下は佐竹(1984)の章構成を引いたものであるが、太字で示した通りその分類の多くが精神作用に関するものであり、〈腹〉および〈胸〉と精神の強い結びつきが見て取れる。

第一章 腹に宿るころ

- (一)「**腹を立てる**」という表現をめぐって
- (二) 満腹・空腹など飲食や腹具合などに関係のある表現について
- (三) 腹の病気(腹痛・下痢・赤痢)
- (四) 切腹・刑罰(死刑)
- (五) 妊娠・出産前後の腹痛・出産・血族・氏族
- (六) 笑止・おかしくてたまらない・馬鹿らしい
- (七) 内心・本心・考え・気持ち
- (八) 胆力・度胸・度量・包容力
- (九) はらぐろ(腹黒)とはらじろ(腹白)
- (十) 決心・覚悟, その他

(付) 腹の虫

第二章 胸に棲むところ

- (一) 「むね (胸)」はところである
- (二) 「むね (胸)」は気分・気持である
- (三) 「むね (胸)」は性質・性格・気だてであり、また、そのような性格の人である
- (四) 怒り・憤り・憎しみ
- (五) 苦しみ・悩み
- (六) 心配・気苦労・不安および恐怖
- (七) 悲哀・嘆き・爽快・喜び
- (八) 病気と症状
- (九) 考え・思案・推量など
- (十) 決心・決断・覚悟
- (十一) 心の動揺・落ち着かぬ状態
- (十二) 期待・興奮
- (十三) 驚き・びっくりする・どきりとする
- (十四) 恋慕・執着
- (十五) その他

次項で取り上げるように、〈腹〉〈胸〉と結びつく精神作用の解明はその後の認知言語学研究でも重要な研究テーマの一つとなっている。「胸」の項目において、(一) から (三) およびそれ以降のラベリング方針が異なっている点、(十一) の心の動揺・落ち着かぬ状態とその他の分類の区別がつきにくい点 (たとえば (六) の心配・気苦労・不安および恐怖や (十二) の期待・興奮) など、分類の根拠が不明瞭な点が一部残るものの、以降の認知言語学研究と比較しても最も多くの表現を対象に詳細な分類を施した研究であり、参考にすべき点が多い。

3.2.2 認知言語学的アプローチ

3.2.2.1 はじめに

「腹」「胸」「頭」という身体部位詞は、その比喩義 (特に精神義) の豊富さから認知言語学内外で繰り返し取り上げられてきた。「腹」「胸」「頭」から成る表現は慣用表現や比喩表現の例として示されることも多く、それらの研究を含める場合、先行研究の数は膨大である。ここでは特に本研究に関係

する先行研究を年代順に概観し、その他の研究は3.4節からのデータ観察・分析において必要に応じて言及する。本章の冒頭（3.1節）でも述べたように、「腹」「胸」「頭」の身体部位詞表現に関する従来の認知言語学的分析の視点は、以下の三種に分類できる。

(83) 視点1：各々の部位と結びつく精神作用の記述・特徴付け

視点2：（慣用）表現の比喩の仕組み（比喩義への意味拡張プロセス）についての分析

視点3：各々の部位と精神作用の結びつきをもたらす動機づけ（身体基盤・文化基盤）の特定

上の視点1から3のうち、各先行研究で扱われた項目をあらかじめ表3にまとめる。いずれの研究も複数の項目を分析対象としているが、何に重点を置くかは先行研究間で差が見られる。部分的・間接的な分析がある場合は(✓)とした。

表3 「腹」「胸」「頭」表現を扱った認知言語学研究の分析項目

	研究対象	①	②	③
Matsuki (1995)	腹・胸・頭 (怒り中心)		✓	✓
McVeigh (1996)	腹・胸・頭	✓		✓
Shinohara and Matsunaka (2003)	腹・胸・頭 (怒り中心)		✓	✓
田中 (2003) ケキゼ・田中 (2004)	腹・胸・頭	✓	(✓)	✓
有蘭 (2007)	腹・胸・頭	✓	(✓)	✓
有蘭 (2009)	腹・胸・頭 (身体部位全般)	(✓)	✓	✓

表から明らかなように、これまでの研究によって視点1から3全てに対する分析が施されている。以下、3.2.2.2節から3.2.2.6節にかけて各研究の論点を概観したのち、3.2.3節でそれらを集約し、問題点を指摘する。

繰り返しになるが、本研究では概念あるいは言語表現の意味を表す場合〈 〉を、個別の語を表す場合「 」を用いる。以下、腹・胸・頭については〈 〉と「 」の両方を混ざって用いるが、これは先行研究の多くが各々の部位に対し「腹（はら）」「胸（むね）」「頭（あたま）」という特定の語レベルでの観察・分析を基本としているためである。もっとも、認知言語学は言語の意味を概念の問題として扱うことを大前提としているが、ここでは便宜上、先行研究が特に特定の語を問題としている場合は「 」を、分析や考察が言語表現以上の問題に及んでいる場合は〈 〉を用いる。

3.2.2.2 Matsuki (1995)

日本語を対象とした認知言語学研究において、身体部位詞による精神義の比喩表現を研究対象として本格的に取り上げたのは Matsuki (1995) が最初であろう。¹⁰³ Matsuki (1995, pp. 140–141) は英語との比較を通じて、日本語にも熱や内圧などの生理反応に基づくメトニミーに加え、〈身体は感情の容器である〉のメタファー (THE BODY IS THE CONTAINER FOR THE EMOTIONS) (Kövecses, 1986) や〈怒りは容器の中にある流動体の熱である〉のメタファー (ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER) (Kövecses, 1986) などが存在すると述べている (e.g. 「腸が煮えくり返る」「怒りが腹の底をぐらぐらさせる」)。さらに Matsuki (1995) によれば、〈怒り〉の経験に関するプロトタイプシナリオに関しても、日本語は Kövecses (1986) によって提案された英語のモデル (84) と概ね対応する。¹⁰⁴

(84) Stage 1: Offending event (怒りを引き起こす出来事)

Stage 2: Anger (怒り)

Stage 3: Attempt at control (制御の試み)

Stage 4: Loss of control (制御の失敗)

Stage 5: Act of retribution (報復の行為)

(Kövecses, 1986, pp. 28–29; Matsuki, 1995, p. 145 [= (71)])

日英語で差異が表れるのは Stage 3 である。Matsuki (1995, pp. 145–146) によれば、日本語のシナリオは Stage 3 の Attempt at control がより重視されており、〈怒り〉は身体全体のみならず〈腹〉〈胸〉〈頭〉という個別の身体部位と対応づけられる。日本版のシナリオモデルによれば、〈怒り〉が生じると「腹が立つ」が、〈怒り〉は外に出ないように制御されることで〈胸〉まで上昇し (e.g. 「胸がむかつく」)、さらに勢いを強めて〈頭〉に到達し (e.g. 「とうとう頭に來た」)、結果的に制御できなくなるという。Matsuki (1995, p. 144) は、日本語で〈怒り〉の制御が重視されるのは、それが「本音と建前」という文化的コンテキストのもとで成り立っているためであると論じている。つまり、本音はその表出が社会規範や常識にそぐわないと判断された場合、建前と切り離され、安易に表に出さないよう内に留められる。この仕組みをもとに、本音としての〈怒り〉も表出が不適切と判断されることで制御され、う

¹⁰³ ただし、Matsuki (1995) 以前にも認知言語学の枠組みで部分的に〈腹〉〈胸〉〈頭〉が取り上げられることはあった。たとえば山梨 (1988/2007, p. 54) では、〈心は機械〉という概念メタファー (引用先では「存在論的比喩」と呼ばれている) の例として「彼は頭の回転がはやい。」という表現が挙げられている。このほかに後で取り上げるが、イディオムの意味の慣用化の階層を論じるにあたり、「頭にいれる」「胸がいたむ」「腹のうちをよむ」など「頭」「胸」「腹」を含む表現が扱われている (山梨, 1988/2007, pp. 77–78)。

¹⁰⁴ Matsuki (1995) では、“Kövecses (1987)” とあるが、該当文献は 1986 年出版であるので改めた。また、(84) は (71) でも引用したシナリオであり、Kövecses (1990, pp. 67–68), Lakoff (1987, pp. 397–398), Lakoff and Kövecses (1987, p. 211) で示されているものと同じである。

わべ（建前）では笑ってやり過ごそうとされるのである。

3.2.2.3 McVeigh (1996)

McVeigh (1996) は、精神活動が経験的で身体に根差したものであるという認知言語学的 (Lakoff 的) 心身観の立場から、日本語の心理語彙 (psychological lexicon) の多くが比喩的で身体に根付いたものであることを論じている。¹⁰⁵ McVeigh (1996, pp. 33–34) はまず、日本語の心理語彙が、① 身体部位や自然現象といった具象物を指すもの、② 本来は比喩的であったが、抽象化を経て現在は字義となったもの (e.g. 「思う」「考える」「忘れる」)、③ 西洋言語からの借用や、中国語の表意文字 (つまり漢字) から作られたもの (e.g. 「感情」「動機」「態度」) に分類されるとしている。このうち、心理語彙の中心となるのは①のタイプであり、中でも特に「気」を含む表現が多く、身体部位としては「心」「腹」「胸」「頭」「目」「肝」といった語を含む表現 (慣用句) が挙げられる。

McVeigh (1996, pp. 38–40) は、身体部位詞のうち特に「腹」に注目することで、日本語の「腹」は〈心〉(mind/heart) 〈意志〉〈根性〉〈勇気〉といった広い意味を持つことを指摘している。さらに、「腹」は社会的なやりとりや人格形成が関わるような意味までも担うとし、Dürckheim (3.3.4.2 節のデュルクハイム (1954/2003) を参照) の研究を引くことで、Matsuki (1995) とは異なる文化的観点から〈腹〉という部位の重要性を論じている。その説明によると、日本人は内なる自己・精神・身体を中心を〈腹〉に位置付けており、起立した姿勢や〈腹〉の保ち方は、精神的・道徳的な成熟度を示すという伝統的な認識を持っている。そのため、「腹の据わった人」というのは、〈腹〉の成熟した人であり、高い自己修養の域に達した人であることを意味する (McVeigh, 1996, p. 39)。これは、3.3.4.2 で詳しく説明する〈腹〉の文化的な理解である。

3.2.2.4 Shinohara and Matsunaka (2003)

上の二つの先行研究は、日本語の身体部位詞による表現の特徴を文化的要因に求めた研究である。これに対し、日本人に特有の身体的特徴を以て身体部位詞を含む表現の動機を説明した研究として Shinohara and Matsunaka (2003) がある。この研究では、日本語には先行研究で取り上げられてきた〈容器の中の熱流体〉ばかりでなく、〈消化物〉を起点概念とする〈怒りは消化器系の中にある胃内容物である〉のメタファー (ANGER IS GASTRIC CONTENTS IN THE DIGESTIVE SYSTEM) があることが主張されている (e.g. 「怒りを飲み込む」「彼の態度にむかつく」「怒りがこみあげる」)。さらに Shinohara and Matsunaka

¹⁰⁵ ここでは psychological lexicon の訳として心理「語彙」としたが、句以上のものも考察されている。

(2003, pp. 9–11) は、Matsuki (1995) による〈怒り〉のシナリオモデルに対し、必ずしも〈怒り〉がその程度に比例して上昇するわけではなく、(85)(86)のように〈頭〉よりも〈腹〉の方が強い〈怒り〉を表す例があることを指摘した上で、これらが〈消化物〉に基づくメタファーに動機づけられている可能性を論じている。摂取した食べ物が消化の十分でないまま下降すると、消化不良や下痢の症状を引き起こす。上昇ではなく、むしろ下降することが悪化を意味するのである。この身体経験をもとに、(85)(86)のような「腹」(あるいは「腸」)表現が、なぜ「頭」を用いた表現よりも〈強い怒り〉を表すことがあるかが説明されるというものである。

(85) a. 頭には来たが、腸が煮え繰り返るほどではなかった。

b. *腸が煮えくり返ったが、頭に来るほどではなかった。

(86) a. 頭には来たが、腹の虫がおさまらないほどではなかった。

b. *腹の虫がおさまらなかったが、頭に来るほどではなかった。

(Shinohara & Matsunaka, 2003, pp. 9–10 [日本語表記に変更])

Shinohara and Matsunaka (2003, p. 9) は、日本語特有の〈消化物〉メタファーが存在する要因として、日本人が胃腸を壊しやすく、消化器官に意識を向ける傾向にあることを挙げている。この研究は、日本語の特徴を日本人固有の身体的特徴と結びつけた研究として位置付けることができる。

3.2.2.5 田中 (2003), ケキゼ・田中 (2004)

本研究の対象である〈腹〉〈胸〉〈頭〉を初めて同時に精査した認知言語学研究として、田中 (2003) が挙げられる。田中 (2003) は、日本における「心としての身体」という大きな文化モデルを設定し、それが日本語表現の中にどう反映されているかを探ることを目的に、特に精神作用と密接に結びつく身体部位〈腹〉〈胸〉〈頭〉の概念化を論じている。この研究の特徴は、「腹」「胸」「頭」という語が慣用表現の中で表す精神作用の意味を詳述しているという点であり、これは後に紹介する有蘭 (2007) に先立ったものである。田中 (2003) による「腹」「胸」「頭」を含む慣用表現の分類は、次のとおりである(引用元では、「頭」「胸」「腹」の順番であるが、本論文に合わせて「腹」「胸」「頭」とした)。

(87) 「腹」

(I) 感情

- (i) 【怒り】：腹が立つ／腹を立てる，腹が煮える（腸が煮えくりかえる），腹に据えかねる，腹（の虫）がおさまらない
【怒りの解消】：腹が癒える／腹を癒やす，腹が居る
- (ii) 【笑いを生む感情】：腹がよじれる・腹（の筋）をよる，腹を抱える

(II) 感情を伴う思考

- (i) 【理解（納得）】：腹に落ちる（腑に落ちる）
- (ii) 【理解力・包容力】：腹が大きい，腹が太い
- (iii) 【意図・本音】：腹の内，腹に一物，腹を合わせる，腹を探る，腹を読む，腹を見抜く，腹を割る，腹を見られる，腹が黒い
- (iv) 【決意・覚悟】：腹を固める，腹を決める，腹が据わる，腹ができる，腹を括る，腹を据える

(88) 「胸」

(I) 感情

- (i) 【怒り】：胸が煮える，胸に据えかねる
【怒りの解消・抑制】：胸が癒える，胸をさする
- (ii) 【悲しみ・悩み・不安・悔恨】：胸が騒ぐ／胸騒ぎがする，胸を痛める／胸が痛い（痛む），胸が張り裂ける，胸が（に）つかえる，胸が潰れる・胸を潰す，胸が塞がる，胸がつまる，胸を冷やす，胸をえぐる，胸に応える，胸に余る，胸に納める
- (iii) 【悩み・不安などの解除】：胸が晴れる／胸を晴らす，胸をなで下ろす【喜び・感動・期待・憧れ】：胸が熱くなる／胸を熱くする，胸が一杯になる，胸を打つ，胸に迫る，胸が躍る／胸を躍らせる，胸がとどろく／胸をとどろかせる，胸がときめく／胸をときめかせる，胸が弾む／胸を弾ませる，胸が膨らむ／胸を膨らませる，胸が焦がれる／胸を焦がす

(II) 感情を伴う記憶・思考

- (i) 【銘記・納得（理解）】：胸に刻む，胸に畳む，胸に聞く，胸に手を置く，胸に当たる，胸に落ちる
- (ii) 【理解力・包容力】：胸が狭い，胸が広い
- (iii) 【意図・本音】：胸の内，胸に一物，胸を割る，胸に秘める

(iv) 【評価】：胸が悪い／胸が悪くなる，胸がすく

(89) 「頭」

(I) 感情

【怒り】：頭に来る，頭に血がのぼる，頭から湯気を立てる

【怒りの抑制】：頭を冷やす

(II) 感情を伴う思考

(i) 【心配不安を伴う思考】：頭が痛い／頭を痛める，頭を抱える

(ii) 【評価】頭が下がる，頭が上がらない

(III) 思考

(i) 【思考作用・記憶】：頭を使う，頭で理解する，頭をほぐす，頭をひねる，頭を絞る，頭を悩ます，頭にある，頭に浮ぶ，頭に入る／頭に入れる，頭の中が白くなる

(ii) 【思考能力】：頭がいい／悪い，頭が切れる，頭が鋭い，頭が鈍い／頭が鈍る，頭の回転が速い／遅い

(iii) 【思考のタイプ】：頭がかたい，頭が古い，頭でっかち

(田中, 2003, pp. 114–117)

上の分類のように、〈腹〉〈胸〉〈頭〉は対応する精神が部分的に重なる一方で、情緒的精神（感情）と理性的・論理的精神との棲み分けは〈胸〉〈腹〉と〈頭〉の間で区別される傾向にある。また、田中 (2003, p.118) は、情緒的精神と結びつきやすい〈胸〉〈腹〉について、前者には「共感を呼びやすい」感情、「複雑で微妙な」感情が結びつき、後者はそれとは異なる「自己保存的な」感情が結びつくとして述べる。「自己保存的」というのはその言葉のみでは解釈し難いが、同論文では、(87) (I-ii) の〈笑いを生む感情〉のリストから漏れた「腹で笑う」という表現を取り上げ、この表現は他者との利害の対立を含む感情を表しやすいと指摘している。また、(87) (II-iii) の【意図・本音】のリストにある表現についても「我々の自己保存の欲求に根ざす感情，利害にからむ自他对立的・打算的な傾向が読み取れる」（田中, 2003, p.117）という。田中 (2003) は、上のような〈腹〉の性質に関して、人間の生命維持に欠かせない食物摂取を担う部位としての〈腹〉の特徴をもとに、要因の説明を試みている。

このような腹モデルの特徴は、身体部分としての腹の機能や性格と無関係であるとは思われない。腹は食物摂取という生命維持活動に直接関わる身体部分であり、同じく生命維持活動に関わる胸（心臓）よりも、日常生活の中で意識されやすい身体部分である。胸よりも腹に身体性の概念が顕著であり、また精神化される場合も、自己保存の欲求に基づいた利己的な感情が腹

と結びつけられるのは、身体部分としての腹のそうした特徴の反映として理解できる。また別の面から見れば、生存にとって中心的な部分である腹は本音のありかとして捉えられるということにもなる。さらに、障害に立ち向かうとき、人が力を入れる部分が腹であることも無関係ではないであろう。(田中, 2003, p. 118)

上の考察では、人間の生命維持に不可欠な食物摂取を担う部位（消化器官が位置する部位）としての〈腹〉の特徴と、そこに宿る精神（自己保存の欲求に基づいた利己的な感情）の特徴が関連付けられている。この分析の妥当性については後に 3. 2. 3 節で検討するが、Shinohara and Matsunaka (2003) で指摘された消化器官としての〈腹〉の身体基盤を、〈怒り〉以外の精神作用との対応に適用した説明として捉えることができる（ただし、Shinohara and Matsunaka (2003) のように、人種による身体的特性を持ち出していない点で異なる）。

田中 (2003) によって明らかにされた〈腹〉〈胸〉〈頭〉と精神作用の結びつきをもとに、ケキゼ・田中 (2004) はより緻密な特徴づけに踏み込んでいる。ケキゼ・田中 (2004) は、日露語の身体と精神の概念を特徴づけることを目的に、慣用表現の対照言語学的分析を試みた研究である。ただし、著者らは表面的な言語形式の対応・非対応の羅列では不十分であるとし、言語表現から読み取ることのできる日露言語文化圏の概念体系、いわば文化モデルの考察にまで踏み込んでいる。日本語に関しては引き続き「腹」「胸」「頭」が扱われているが、そこで展開されている分析は、各部位が担う精神に関する次のような象徴的特徴づけである。

(90) 〈頭〉：非現実性、社会的未熟性

〈胸〉〈腹〉：受動性、閉鎖性、不透明性、個人性、身体性

(ケキゼ・田中 (2004, pp. 66–75) の考察をもとに作成)

ケキゼ・田中 (2004) の議論に基づき、〈頭〉の「非現実性」「社会的未熟性」から順に説明を加えていく。田中 (2003) の指摘するように、〈頭〉は精神の知的側面と結びつくが、時にその過剰は現実性の欠如や社会性の未成熟の証として批判的に捉えられることがある (e.g. 「頭でっかち」)。ここから見えるのは、知識や理屈一辺倒では不十分であるという日本の社会文化的価値観である。こうした〈頭〉による知識・理屈を超越するのが〈腹〉や〈胸〉である (e.g. 「頭ではわかるが、{胸／腹} では納得しない」) (ケキゼ・田中, 2004, pp. 66–69)。

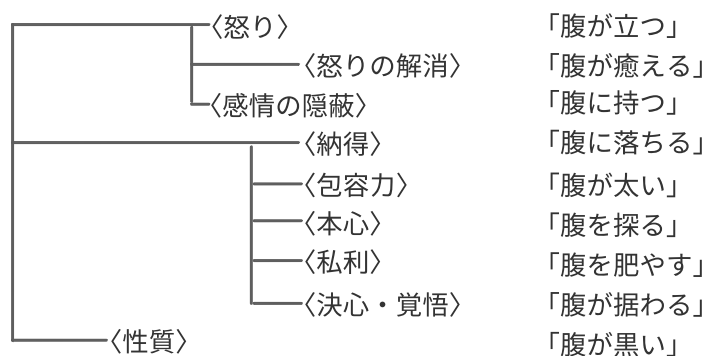
〈胸〉〈腹〉については、より多くの象徴性を持つことが論じられている (ケキゼ・田中, 2004, pp. 69–74)。まず「受動性」とは、〈胸〉や〈腹〉が外的刺激に対する反応として生じる精神作用（感情）

と結びつく部位であり、たとえば〈悲しみ〉や〈不安〉によって「胸」は「騒ぎ、痛み、張り裂け、潰れ、塞がり、つまる」。〈腹〉についても、「腹が立つ」「腹の虫がおさまらない」などの表現が表す〈怒り〉は、何らかのきっかけによって生じる状態変化として捉えることができる。「閉鎖性」「不透明性」とは、「胸」「腹」が「おさめる」「たたむ」や「見抜く」「明かす」という語と共起することからわかるように、〈胸〉〈腹〉が閉ざされ、外からは見えない部位として概念化されていることを指している。また著者らは、こうした特徴が〈胸〉〈腹〉が身体という物理的存在としての特徴（「身体性」）を強く残していることを示すと述べ、実体としての〈腹〉〈胸〉が他人と明確に切り離された一人の個人に属するものと解釈されることで、「個人性」という特徴が現れると論じている。さらに、〈胸〉と〈腹〉を比べた場合、〈腹〉には〈覚悟〉〈決断〉〈本音〉といった精神作用が結びつくことを指摘し、「個人の人格にとって決定的に重要な諸概念を包括し、いわば個人の人格の核ともいうべきものとして〈胸〉をも超える概念である。」（ケキゼ・田中, 2004, p. 81）と結論づけている。

3.2.2.6 有菌 (2007, 2009)

田中 (2003) と同様に、「腹」「胸」「頭」という語が表す精神作用を論じた研究として有菌 (2007) が挙げられる。有菌 (2007, pp. 317–318) は、精神作用を情緒的側面と知的側面に大分した上で、両者の明確な線引きはし難いと認めながらも「腹」が特に（負の）情緒的側面を、「胸」が両方の意味を、「頭」が知的側面の意味を担う傾向にあることを指摘している。¹⁰⁶ 具体的な分類は田中 (2003) と部分的に重なるが、異なる点もあるので下に示す（本論文に合わせて「腹」「胸」「頭」の順を入れ替えた）。

図6 「腹」を含む表現の表す意味（有菌, 2007, p. 314 [本文の用例に従い表現を追加]）



¹⁰⁶ 〈腹〉〈胸〉〈頭〉を扱った同時期の論文として松井 (2007) が挙げられる。この論文では、〈心〉の存在場所に関して日英語対照に基づく身体部位の分析がなされており、感情・考え・知性という精神作用の分類に基づいてそれぞれの対応が論じられている。日本語において感情と考えは三部位全て、知性は頭に宿ることが結論づけられており、田中 (2003) や有菌 (2007) の結論とは一部異なる。

図7 「胸」を含む表現の表す意味（有蘭, 2007, p. 312 [本文の用例に従い表現を追加]）

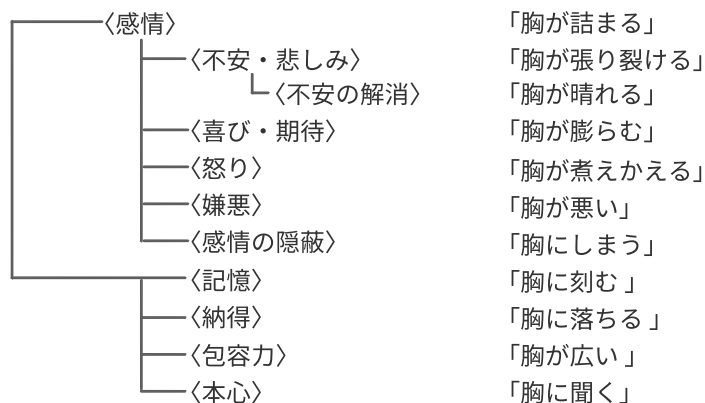
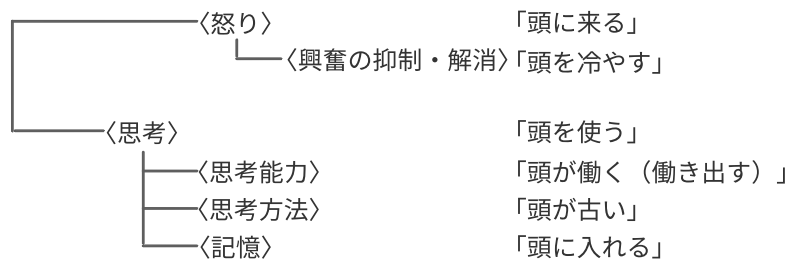


図8 「頭」を含む表現の表す意味（有蘭, 2007, p. 311 [本文の用例に従い表現を追加]）



有蘭 (2007, p. 317) は、「胸」と「腹」は共通点が多い一方で、「胸」が正負問わず広く感情を表すのに対し、「腹」は「うらみを腹に持つ」「腹に謀略を持つ」のように、負の感情に特化していることを指摘している。¹⁰⁷ また、「頭」と「胸」を比較する中で、両者の意味拡張の動機が異なることを指摘している。その説明によれば、「頭」は〈思考〉という行為のフレームの枠内で、メトニミーを通じて拡張した〈能力〉(e.g. 「頭が働き出す」), 〈方法〉(e.g. 「頭が古い」) といった意味を持つのに対し（これに関しては、下の有蘭 (2009) への言及にて改めて説明を加える), 「胸」は感情経験に伴う動悸や閉塞感という生理反応によって、広く情緒的精神との対応を実現している（有蘭, 2007, pp. 316–318）。

「腹」「胸」「頭」を含む表現は、有蘭 (2009) でも多く取り上げられている。有蘭 (2009) は、有蘭 (2007) の基本的な考えを引き継ぎつつも、精神作用の体系的記述ではなく、2.2.3 節で取り上げた慣用表現の分類に基づき、各慣用表現の成り立ちを詳細に論じている。「腹」「胸」「頭」の慣用表現が扱われている慣用句・慣用的連結句のカテゴリーを抽出し、以下の通り例とともにまとめる。

¹⁰⁷ 情緒的な要素の存在は否定できないものの、「腹に謀略を持つ」の「謀略」はどちらかと言えば知的精神活動の一種であると考えられる。

(91) 慣用句

(I) 人間の行為を表す慣用句

- (i) 概念メタファー：〈思考を、摂食を通して捉える〉

腹に落ちる，胸につかえる，胸が焼ける

(II) 人の精神状態を表す慣用句

- (i) メトニミー：〈身体（部位）の状態（の変化）によって，精神状態（の変化）を捉える〉

頭に血が上る，頭を下げる

- (ii) 概念メタファー：〈身体（部位）を，精神活動の容器として捉える〉

（〈身体（部位）を，情緒的精神活動の容器として捉える〉）

（〈身体（部位）を，知的精神活動の容器として捉える〉）

腹が据わる，腹を据える，腹に納める，腹に持つ，腹が立つ，腹が居る，腹が癒える，腹に落ちる，腹が太い，腹を探る，腹を見抜く，腹を割る，腹にしまう，胸にしまう，胸に納める，胸に畳む，胸がいっぱいになる，胸が詰まる，胸に余る，胸が膨らむ，胸が晴れる，胸が張り裂ける，胸が裂ける，胸が押しつぶされる，胸が潰れる，胸に入れる，胸に刻む，胸に落ちる，胸が広い，胸が狭い，胸を割る，頭がいっぱい，頭に叩き込む，頭に入れる，頭に浮かぶ，頭の奥

- (iii) 身体部位の温度の変化

概念メタファー：〈感情の高揚を，容器内の流動体の熱を通して捉える〉

腹が煮えくり返る（煮える），胸が煮えたぎる，胸が沸く，頭を冷やす（，頭に血が上る）

概念メタファー：〈恐れや（恐れを伴う）驚きを，流動体の冷たさを通して捉える〉

胸を冷やす

概念メタファー：〈感情の高揚を，固体の燃焼を通して捉える〉

胸が燃える，胸を焼く，胸を焦がす

- (iv) 価値的類似性に基づくメタファー

胸を痛める，頭を痛める

（有蘭（2009, 第5章）より抜粋）

(92) 慣用的連結句

(I) 行為のフレームに基づくメトニミー

(i) 思考行為に関わる部位（「頭」）

頭が弱い，頭を切り替える

(II) 容器と内容物の隣接関係に基づく意味拡張

腹が黒い，腹を決める，腹を固める，腹を括る，腹が合う（合わせる），胸を決める，胸に聞く，胸が合う

（有蘭（2009, 第5章）より抜粋）

有蘭 (2009) による分析は、本章での〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の分析において繰り返し参照することになるので、細部の引用は後に回し、ここでは各々の分類について説明を加える（以下は全て有蘭（2009, 第5章）での説明に基づく）。まず、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現は、慣用句（意味的に分解不可能な表現）と慣用的連結句（意味的に分解可能な表現）に分類される（詳細は2.2.3節での有蘭 (2009) への言及を参照）。慣用句はさらに、各々の慣用的意味に基づいて (I) 「人の行為を表す慣用句」と、(II) 「人の精神状態を表す慣用句」に分類される。前者は字義的意味が身体による「行為」を表し、慣用的意味も同じく何らかの「行為」を表すが、この二つの行為の結びつきが複数の表現によって構造化されているものである。一方、後者は、主に字義的意味が身体の何らかの「状態（変化）」を表し、慣用的意味としては「精神の状態（変化）」を表す。

(I) 「人の行為を表す慣用句」のうち〈腹〉と〈胸〉が関わるとして挙げられているのが、〈思考〉という行為を〈摂食〉という行為に準えた概念メタファー（〈思考を、摂食を通して捉える〉）に基づく表現である。たとえば摂食に関する「かみ砕く」「咀嚼する」「呑み込む」といった表現は精神作用に対して用いられうるが、同様に「腹に落ちる」「胸につかえる」のように「腹」や「胸」を用いた表現もこのメタファーに基づく（これらの表現は、次の〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉でも再び取り上げられている）。

(II) 「人の精神状態を表す慣用句」には、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現（特に〈腹〉と〈胸〉）が多く含まれる。その下位分類のうち、(i) は〈身体（部位）の状態（の変化）によって、精神状態（の変化）を捉える〉というメトニミーが働いた表現である。たとえば、「頭を下げる」ことが〈感心する〉という慣用的意味を持つのは、〈感心する〉ことと〈頭を下げる〉ことの間に関係が見出されたことに因る。

(II) 「人の精神状態を表す慣用句」第二の下位分類である (ii) 〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉のメタファーには、〈腹〉〈胸〉〈頭〉を感情や思考などの精神作用を納める容器とみなす表現が含まれる。このメタファーでは、〈容器〉と〈内容物〉の関係と〈腹〉(あるいは〈胸〉や〈頭〉)と〈精神作用〉の関係、さらにそれらの関係の状態 (変化) が構造化されて対応している。たとえば、〈胸〉には〈精神作用〉を「しまう」「納める」ことができるが、その容量にも限度があり、「いっぱい」になることがある。また、内容物が増えると時には容器が膨張して「膨らむ」ことや、内側からの圧力に耐えきれず「張り裂ける」こともある。

(II) 「人の精神状態を表す慣用句」第三の下位分類は、文字通りの意味が身体部位の温度変化を表すメタファーである。これはさらに三分され、うち二つは上で述べた〈容器〉のメタファーに〈温度〉の要素が統合して出来た〈感情の高揚を、容器内の流動体の熱を通して捉える〉のメタファーと〈恐れや (恐れを伴う) 驚きを、流動体の冷たさを通して捉える〉のメタファーある (e.g. 「腹が煮えくり返る」「胸が沸く」「胸を冷やす」) (cf. Matsuki, 1995)。第二に、温度変化に関するメタファーには、身体部位を〈容器〉ではなく〈固体〉とみなすものが存在し、〈感情の高揚を、固体の燃焼を通して捉える〉と定式化されている。このメタファーに該当する表現を持つのは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の中では〈胸〉のみである (e.g. 「胸が燃える」)。

最後に、(iv) 「価値的類似性に基づくメタファー」とは、身体と精神作用についての二つの経験の価値的類似性に基づいてのみ成立するものである (価値的類似性・評価性に基づくメタファー、評価性基盤 (鍋島, 2003b, 2011))。有蘭 (2009) では、(91) に挙げた「胸を痛める」「頭を痛める」に対する説明は行われていないため、具体的な分析のある別の身体部位詞表現「耳にたこができる」を例に取り説明する。この表現では、文字通りには〈耳にたこができる〉ことを、慣用的意味としては〈何度も同じことを聞いて飽き飽きする〉ことを表すが、この結びつきの背景には上で説明したような構造的な概念領域間の対応は見られない。これらの意味を対応づけるのは、両者の情緒的な類似性、すなわちこれらの身体的・精神的経験がともに不快な出来事であるという共通性である。¹⁰⁸

価値的類似性に基づくメタファーの介入は、有蘭 (2008) で「胸」のその他の表現に対しても論じら

¹⁰⁸ 「耳にたこができる」は有蘭 (2009) のような説明も可能であるが、成立の動機を別の観点から説明することも可能である。そもそもたこ (胼胝) とは繰り返しの刺激によって角質化し、固く厚くなった皮膚のことを指す。「耳にたこができる」がこうした「たこ」の性質と共通しているのは、何かの刺激 (言葉としての刺激) を繰り返し受けた結果、そのような状態になるという点であり、この「反復性」が両者をつなぐ重要な役割を担っていると考えられる。耳にたこができたなら身体的に不快であろうという観点から〈飽き飽きする〉という情緒的不快さの意味が得られるのは確かであるが、〈同じことを何度も聞いて〉という原因の部分の含意はやはり、「たこ」ができることの要因に基づいているのではないだろうか。また、たこができることで外的刺激への感覚 (痛みや熱を感じる感覚) が鈍くなるが、この性質も「耳にたこができる」という表現の〈対象への関心や感動が薄まる〉という含意に繋がっているだろう。このように考えると、本表現は構造的な対応を内包したメタファーに基づく表現であるといえる。なお、ここでの考察は渡辺秀樹先生からいただいたご指摘および『日常語の意味変化辞典』の同項目の説明に着想を得てまとめたものである。

れている。有蘭 (2008, pp. 268–269) によれば、「胸が裂ける」「胸が張り裂ける」「胸がつぶれる」「胸が押しつぶされる」には、〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉というメタファーのみならず、〈不都合な状態を、身体部位の不快な状態を通して捉える〉という価値的（情緒的）類似性に基づくメタファーが関与している。さらに、この価値的類似性が見出される動機として〈身体部位の状態によって、感情を捉える〉というメトニミー基盤が想定される。

(92) の慣用的連結句（意味的に分解可能な表現）は、(I) 「行為のフレームに基づくメトニミー」と、(II) 「容器と内容物の隣接関係に基づく意味拡張」に分類される。前者には、「頭」という語の意味拡張が〈思考〉という行為のフレーム内の要素関係に基づいて生じた表現が該当する（同様の分析として有蘭 (2021) も参照）。〈頭〉（厳密には脳）は〈思考〉を司る部位であるが、この〈思考〉という行為のフレームにおいて〈道具〉となるのが〈頭〉であり、さらに行為に必要な〈能力〉と対応するのが〈思考力〉、行為に必要な〈方法〉と対応するのが〈思考方法〉である。この行為のフレームの要素関係にメトニミー操作が働くことで、〈道具〉としての〈頭〉は〈能力〉（「頭が弱い」）や〈方法〉（「頭が古い」）に関する意味をも担うことができる。次に、「容器と内容物の隣接関係に基づく意味拡張」は、その土台として (91) で示した〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉というメタファーがある。このカテゴリーに分類される表現では、「腹」あるいは「胸」が、〈容器〉と〈内容物〉の隣接関係に基づいて〈精神作用〉へとメトニミー的意味拡張を起こしている。さらに、その他の構成要素についても単独で意味拡張を経ているものがあり、たとえば有蘭 (2009, p. 304) は、「腹を固める」について、「腹」が〈意志〉へと、「固める」が〈(物体を) 固くする〉ことから〈(抽象物を) 確かなものにする〉ことへと意味拡張を起こしていると分析している。

なお、以上のような (91) の慣用句の分類では、メトニミーあるいは（概念）メタファーという単独の比喩に基づいた分類がなされているが、実際にはメタファーの分類に入る表現でも、メトニミーに動機付けられている場合が多い。有蘭 (2009, pp. 216–217) は、〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉という概念メタファーにより、〈胸〉は正負問わず様々な感情を表すが、この背景には感情経験に伴う動悸や胸の閉塞感といった生理的反応（〈身体（部位）の状態（の変化）によって、精神状態（の変化）を捉える〉というメトニミー基盤）が動機付けとして想定されることを指摘している。

3.2.3 問題提起

3.2.2 節での概観の通り、精神作用に関する〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現は先行研究によって多くのことが明らかにされてきた。認知言語学の枠組みに基づいたこれまでの身体部位詞研究の成果は、その視点に基づいて三項目に大分される。

(93) 視点1：各々の部位と結びつく精神作用の記述・特徴付け

視点2：(慣用) 表現の比喩の仕組み(比喩義への意味拡張プロセス)についての分析

視点3：各々の部位と精神作用の結びつきをもたらす動機づけ(身体基盤・文化基盤)の特定

(=83))

視点1は、日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉にはどのような精神作用が結びつくのかという、いわば比喩義の記述・特徴づけを目的とするものである。視点2は、それらの比喩義がどのような種類の比喩を通じて意味拡張を達成するのかという、認知プロセスの解明を目的とするものである。視点3は、表現の意味拡張に関わる比喩を動機づける経験基盤(身体基盤・文化基盤)の特定を目的とするものである。下に表3を再掲する通り、3.2.2節で概観した先行研究は、視点1から3のうち複数を論じているが、何に重点を置くかで異なっている。

表3 「腹」「胸」「頭」表現を扱った認知言語学研究の分析項目

	研究対象	①	②	③
Matsuki (1995)	腹・胸・頭 (怒り中心)		✓	✓
McVeigh (1996)	腹・胸・頭	✓		✓
Shinohara and Matsunaka (2003)	腹・胸・頭 (怒り中心)		✓	✓
田中 (2003) ケキゼ・田中 (2004)	腹・胸・頭	✓	(✓)	✓
有蘭 (2007)	腹・胸・頭	✓	(✓)	✓
有蘭 (2009)	腹・胸・頭 (身体部位全般)	(✓)	✓	✓

Matsuki (1995) や Shinohara and Matsunaka (2003) は、〈怒り〉の感情比喩に焦点を当てた研究であり、感情の概念化を支える概念メタファーに身体(部位)がどう関わるかを論じている(視点1)。日本語に見られる固有の動機付けとして、Matsuki (1995) は「本音と建前」という文化的要因を以て、また Shinohara and Matsunaka (2003) は日本人の胃腸に関する身体的特性を以て説明を加えている(視点3)。

McVeigh (1996), 有蘭 (2007), ケキゼ・田中 (2004), 田中 (2003) は、本研究と同様に身体部位詞を研究対象としたものである。〈腹〉と〈胸〉については先駆けの研究として佐竹 (1984) があることを3.2.1節で述べたが、有蘭 (2007) や田中 (2003) は、〈頭〉を含めた三部位の精神義の分類や特徴づけを認知言語学的視点を取り入れて行なっている(視点1)。ケキゼ・田中 (2004) は、日露語の対照研究により、〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用の分類に留まらず、各部位がその言語文化圏においてどのように概念化されているのかについて踏み込んだ考察を加えている(視点1)。また、視点3に関して、

McVeigh (1996) は日本の腹文化の影響 (Dürckheim による研究) を、田中 (2003) は食物摂取という観点から〈腹〉の身体性の際立ちを、有蘭 (2007, 2009) は動悸や閉塞感といった〈胸〉の身体性の際立ち等を指摘している。

上に挙げた研究のうち、視点 2 に重点を置いた研究は有蘭 (2009) である。¹⁰⁹ 有蘭 (2009) は、イディオム・慣用句研究の知見と認知言語学的知見を組み合わせることで、「腹」「胸」「頭」やその他の身体部位詞を含む慣用表現の意味分析を行っている。その結果、慣用表現の意味の成立が句単位で為されるものと語単位で為されるものがあること、また、それらの意味拡張は恣意的ではなく (概念) メタファー・メトニミー・シネクドキーという認知プロセスとしての比喻を通じて為されることを明らかにしている。

以上のとおり、日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現に関してはすでに多くの研究成果が上がっていると言えるだろう。しかしながら、それらの研究成果を精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解 (文化モデル) に関する分析として見た場合、依然として (94) に示す点が不十分である。

(94) 問題 1: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を動機づける身体基盤・文化基盤の解明 (視点 3) に関して、各研究で分析が錯綜しており、統合が図られていない。

問題 2: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を成立させる比喻 (視点 2) に関して、再検討が必要と思われる分類や、まだ十分に分析が及んでいない種類の表現が存在する。

問題 3: ある精神作用と身体部位の結びつきを動機づける複数の身体基盤・文化基盤を体系的に論じることを可能にするモデルが確立されていない。

以下、各問題を具体的に説明していく。

【問題 1】〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を動機づける身体基盤・文化基盤の解明 (視点 3) に関して、各研究で分析が錯綜しており、統合が図られていない。

〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を動機づける身体基盤・文化基盤については各研究で様々に分析されており、統合・統一を見ることがない。この不統一の要因の一つは、各研究が基盤に関して独自に巨視的な分析を施しがちな点にある。有蘭 (2009) による (91) の分類が示すように、〈腹〉〈胸〉〈頭〉と精神作用を繋ぐ比喻は一つではなく複数種存在する。これらの比喻は、場合によっては共通する基盤を持ちながらも、それぞれ異なる基盤 (の組み合わせ) によって動機づけられていると考えられる。〈腹〉〈胸〉

¹⁰⁹ 田中 (2003) では〈怒り〉のメタファーに関する批判的検討が、ケキゼ・田中 (2004) では消化に関するメタファーの存在の一部指摘がある。有蘭 (2007) でも、有蘭 (2009) による比喻の分析が部分的に含まれている。

〈頭〉という大きな単位のみならず、各々の比喩を念頭に動機づけを論じない限り、想定される基盤の建設的な議論が困難となる。〈腹〉を例にすると、田中 (2003) は食物摂取という〈腹〉の身体基盤を持ち出すことで、「胸よりも腹に身体性の概念が顕著」である (p. 188) と述べているが、表現レベルで〈腹〉〈胸〉の身体性の度合いが比較されているわけではない。また、〈腹〉に関して別の観点から「障害に立ち向かうとき、人が力を入れる部分が腹であることも無関係ではないであろう」(p. 188)とも述べているが、その基盤が食物摂取の基盤とどう異なり、具体的にどの範囲の表現に反映されているのかについての踏み込んだ説明はない。後者の説明は、McVeigh (1996) による日本の腹文化の影響 (Dürckheim による研究) に相当すると考えられるが、一方の McVeigh (1996) も、この文化的影響を挙げるのみで、田中 (2003) の指摘するような〈腹〉の身体基盤に関する言及はない。想定される複数の基盤の共存を認めつつ、それらを統合的に考えていくのであれば、大局的な説明のみならず、個別の言語表現やそれを支える比喩単位での微視的な分析のアプローチが必要である。そのためには、有蘭 (2009) のように表現の成り立ちそのものを分析する手立てが不可欠である。一方で、有蘭 (2009) も、表現の比喩的成り立ちに関する詳細な分析を加えているが、基盤については〈胸〉の身体経験 (動悸・苦しさ) の指摘など、部分的言及に留まっており、身体部位として体系的に論じるまでは至っていない。基盤に着目した比喩の分類については、検討の余地が残っている。

【問題 2】〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を成立させる比喩 (視点 2) に関して、再検討が必要と思われる分類や、まだ十分に分析が及んでいない種類の表現が存在する。

〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を支える比喩の類型は、その多くが既に有蘭 (2009) で論じられており、本章で展開する分析も有蘭 (2009) の研究に負うべきところが大きい。ただし、有蘭 (2009) は研究の性質上、その他の部位を含む身体部位詞全般の意味拡張プロセスの類型を見ており、〈腹〉〈胸〉〈頭〉という特定の部位に焦点を当てる本研究の立場からすると、各部位の比較・特徴づけのために分類の再検討が必要と思われる分類や、新たに観察対象に含めるべき種類の表現が存在する。第一に、分類を再検討すべき項目として、(91) の〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉という概念メタファーに分類された〈胸〉表現をもう一度見てみよう。

(95) 情緒的精神作用：胸に納める，胸に畳む，胸がいっぱいになる，胸が詰まる，胸に余る，胸が膨らむ，胸が晴れる，胸が張り裂ける，胸が裂ける，胸が押しつぶされる，胸が潰れる

(情緒的側面を持つ) 知的精神作用：胸に入れる，胸に刻む，胸に落ちる，胸が広い，胸が狭い

有蘭 (2009) は有蘭 (2007) の議論を継承し、〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉のメタファーにおける内容物を情緒的精神・知的精神に区分している。しかしながら、情緒的精神作用として分類されている表現を見ても、「胸に納める」「胸に畳む」などの表現と「胸が張り裂ける」「胸が潰れる」などの表現では、後者の方が〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉〈驚き〉といったより情動らしい精神作用を表しており、それに伴って〈胸〉の描写も異なっている。下で述べるように、動機づけの観点から言えば、後者は情動経験に伴う身体経験 (胸の苦しさ・閉塞感) がより明確に反映されている。これらの表現を〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉というメタファーでまとめる限り、その差異を説明することはできない。

第二に、有蘭 (2009) で扱われている慣用句としてのメトニミー表現は、〈身体 (部位) の状態 (の変化) によって、精神状態 (の変化) を捉える〉として (91) で挙げられた「頭に血が上る」と「頭を下げる」のみであり、メタファー表現に比べて数が限られている。しかし、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の中には、他にも観察に値する多くのメトニミー表現が存在すると考えられる。これに関して、有蘭はのちの有蘭 (2021) で「身体部位詞+形容詞」の慣用句を分析する中で、「身体部位の〈感覚〉から〈精神状態〉へ」というメトニミーとして下のような例をあげている。

(96) 頭が痛い、耳が痛い、胸が痛い、片腹が痛い、胸が苦しい、胸が熱い、尻がこそばゆい

(有蘭, 2021, p. 41)

例の中に「腹 (片腹)」「胸」「頭」の全てが含まれていることからわかるように、精神作用のメトニミー基盤となる感覚は〈腹〉〈胸〉〈頭〉という部位と密接に関係している。有蘭 (2021, p. 41) は、「頭が痛い」という表現を取り上げ、これが思考によって生じる感覚として〈悩ましい〉という意味を表すと分析している。しかし、その他の部位の痛みは別の心的要因によって生じる (と一般的に考えられている) ものであり、例えば「片腹が痛い」「腹が痛い」は一般に〈可笑しさ (笑止千万)〉を指す痛みである。「痛い」など共通の語によって表現される感覚がどのような精神作用と結びつくのか、また各部位で固有の感覚はあるのかについて更なる分析の余地がある。

メトニミー表現の観察は、その部位におけるしぐさや生理的感覚・反応といった身体経験を明らかにするという意味で非常に重要である。Kövecses や Lakoff が、アメリカ英語の〈怒り〉の分析において、メトニミーを動機づける怒りの生理的経験が、〈熱流体〉のメタファーの動機づけにもなると論じたことを思い出してほしい (詳しくは本稿の 2. 3. 7 節を参照)。有蘭 (2009) は〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉等の概念メタファーを論じるにあたり、〈胸〉の動悸や閉塞感といった身体

経験の影響を指摘しているが、上の「胸が苦しい」などの表現は分析から外されている。¹¹⁰ これらを観察することで、メトニミー表現を手がかりに、メタファー表現を動機づける身体基盤の分析に繋げることができる。上述の通り、有菌 (2009) は、「胸に納める」「胸に畳む」などの表現と「胸が張り裂ける」「胸が潰れる」などの表現を〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉のメタファーとしてまとめているが、苦しさ（胸の閉塞感）という身体基盤を共有するという点で「胸が苦しい」というメトニミー表現と「胸が張り裂ける」「胸が潰れる」というメタファー表現の関係性を捉えることができるはずである。

【問題 3】ある精神作用と身体部位の結びつきを動機づける複数の身体基盤・文化基盤を体系的に論じることが可能なモデルが確立されていない。

身体部位詞表現の精神義およびその背後にある文化モデルは、複数の身体基盤・文化基盤によって成立していると考えられる。複数の基盤が想定される場合、それらを体系的・総合的に説明するための分析の手立てがモデルとして確立していない。

以上より、本章では日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を再検討することで、以下二つのリサーチクエスション（RQ）に対する回答を得ることを目的とする。

(97) RQ 1: 現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。

RQ 2: 身体基盤・文化基盤のうち、現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喩の基盤となるものは何か。

前述の通り、身体基盤・文化基盤については、〈腹〉〈胸〉〈頭〉それぞれの部位に対して巨視的な説明を加えたところでその妥当性を得ることはできない。一方、個別の表現に説明を加えるのみでは他表現との関係性を見失いかねないだろう。そこで本研究では、想定される複数の身体基盤・文化基盤が作用する適切なレベルを見極めるため、次節で説明する楠見・米田 (2007) の「感情言語の階層モデル」に加え、「身体部位詞表現の具象性」(伊藤, 1999a, 1999b), 「身体部位詞表現に見られる比喩の二重性」に基づく表現の分類を組み合わせた分析を試みる。

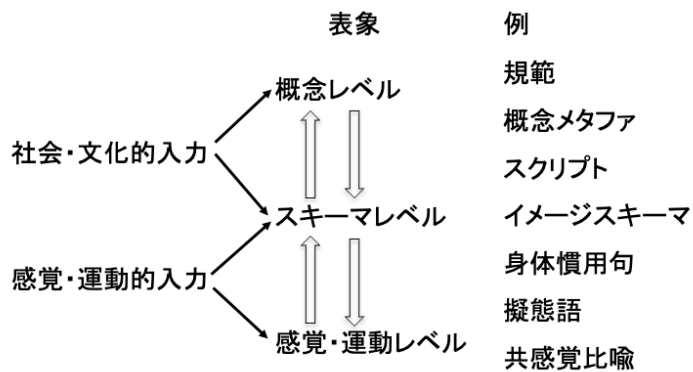
¹¹⁰ ただし、(96) では「胸が苦しい」が含まれている。本研究では、これを〈胸〉の具体的な意味分析の中に組み込む。

3.3 分析の枠組みと調査方法

3.3.1 感情言語の階層モデル：楠見 (1996), 楠見・米田 (2007)

本研究では、分析の枠組みの一つとして楠見・米田 (2007) によって提案された「感情言語の階層モデル」を援用する。本モデルは、感情を表す様々な種類の言語表現を説明するために、感情経験から言語表現が生成される表象の階層を図9のように分けたものである。以下、楠見・米田 (2007) に加え、内容的に重なる部分の多い楠見 (1996) を参照しながら説明を加えたのち、本研究での身体部位詞に対する分析のために必要な改訂を施したモデルを構築する。

図9 感情言語の階層モデル (楠見・米田, 2007, p. 56)



「感覚・運動レベル」と呼ばれる第一の表象レベルは、身体経験に基づく入力によって、「感覚語による感情表現（共感覚比喩）」(e.g. 「明るい気分」「重い気分」), 「擬態語による感情表現（音喩）」(e.g. 「どきどき」「うきうき」「いらいら」), 「表情や身体部位による慣用句（換喩）」(e.g. 「目を見張る」「眉をしかめる」「手がわなくて」「肩を落とす」) などが成立するレベルである。このうち、身体部位詞に関わるのは「表情や身体部位の慣用句による感情表現（換喩）」であるが、この表現は、文字通りの表情や姿勢の変化を感情描写のために利用したものであり、〈原因〉と〈結果〉の時間的隣接性や〈部分〉と〈全体〉の空間的隣接性に基づくメトニミー操作によって成立する（換喩（＝メトニミー）については2.3.3節を参照）。¹¹¹

第二の中間的な表象レベルである「スキーマレベル」には、第一の表象レベルで見たような感覚・運動的入力や、生理的喚起によって形成された表象が抽象化を経て成立した言語表現が当てはまる。

¹¹¹ ここでは、動機として〈原因〉と〈結果〉の時間的隣接性と〈部分〉と〈全体〉の空間的隣接性があげられているが、表情や姿勢の変化によって感情を表す場合、前者の時間的隣接性が必須条件となると考えられる。空間的隣接性については、実際の姿勢の変化をある特定の部位を描写する場合が当てはまると思われるが(e.g. 「肩を落とす」), この場合も時間的隣接関係（つまり、落胆に伴って姿勢が変化すること）が意味成立にとって必須である。

ここでは「内臓の慣用句による感情表現（換喩）」が挙げられており、本研究の対象となる「腹」「胸」「頭」による表現もその多くが含まれている。¹¹²たとえば、〈胸〉は〈心の容器〉というイメージスキーマによって捉えられることで、その中の〈感情〉が「騒ぐ」「あふれる」「熱くなる」などと表現される。¹¹³また、〈心の容器〉が〈固体〉として捉えられると、「焦がす」「締め付ける」「つぶれる」のように表現される。これらの表現を支える内的な身体経験を直接描写する固有の語は限られているため、身体領域の変化（e.g. 体温や血圧の上昇）を物理領域の変化（e.g. 温度や圧力の上昇）で説明する比喩・類推が用いられることになる。

ここでの表現に一貫性・体系性を与えているのが、上でも述べた〈容器〉スキーマを含むイメージスキーマである（イメージスキーマについては2.3.5節を参照）。楠見・米田（2007）は〈怒り〉を例にとることで、この感情に関わる四種のイメージスキーマを挙げている。

(98) a. 〈容器〉スキーマ

b. 〈垂直性〉スキーマ

c. 〈バランス〉スキーマ

d. 〈コントロール〉スキーマ

（楠見・米田（2007, pp. 65–67）をもとに作成）

これら四種のイメージスキーマは、Johnson（1987）から続く〈容器〉〈垂直性〉〈バランス〉のスキーマに、〈コントロール〉スキーマを追加したものである（2.3.5節（62）を参照）。¹¹⁴（b）の〈垂直性〉スキーマとは、空間的上下の方向と感情の変化を対応づけるスキーマである。たとえば、「頭に来る」「怒りがこみあげる」「逆上する」「いきり立つ」といった表現は、〈心の容器〉における〈感情の液体〉が沸騰して上昇するイメージに基づくと分析され、これは血圧の上昇（e.g. 「頭に血がのぼる」）などの生理的経験と対応している。（c）の〈バランス〉スキーマは、感情発生によって失われた生理的・心理的なバランス（動揺）を記述・説明するためのもので、たとえば〈心の容器における感情の液体〉の温度や圧力は、上昇による物理的なバランスを喪失したものとして捉えられ、それによって心身の動揺が表現される。（d）の〈コントロール〉スキーマは、バランススキーマと同時に働き、 balan

¹¹² 楠見・米田（2007）が「内臓」と言いながらも「腹」「胸」「頭」を含めているのは、ここで扱う慣用句が身体の内的な感覚に基づくことを意図しているためであると考えられる（楠見（1996, p. 41）では同分類の表現を「身体の内的・生理的变化に基づく感情表現」と呼んでいる）。また、「換喩」（メトニミー）とあるが、実際はメタファーに分類すべき表現が多く含まれている。

¹¹³ 「心の容器」という表示は引用元（楠見・米田，2007, p. 64）に合わせたが、イメージスキーマを指す場合「心」を外して「容器」とする方がより適当であろう。

¹¹⁴ 〈コントロール〉スキーマは、（62）で言えば〈力〉（FORCE）スキーマの一種として見なすことができるであろう。

スを失った状態を取り戻す試み（自己の感情コントロール）を体系的に記述・説明するものである。このスキーマでは、〈怒り〉は制御の対象とみなされる（e.g. 「怒りを抑える」「怒りを鎮める」）。

第三の表象レベルである「概念レベル」は、第一・第二のレベルの感情言語が社会・文化的な影響を受けながら構造化されるレベルである。このレベルは、感情を生じさせる典型的な状況やそのコントロールに関するプロトタイプシナリオとしての「スクリプト」が関わる段階とされ、Kövecses や Lakoff らによる〈怒り〉のプロトタイプシナリオ (Kövecses, 1986; Lakoff, 1987; Lakoff & Kövecses, 1987) もそれに該当する（プロトタイプシナリオについては 2.3.6 節を参照）。楠見・米田 (2007) は、〈恐怖〉のスクリプトとして以下の五段階を挙げている。

- (99) 1. 危険予感：不安が高まり、心拍数が増加し、震えがはじまる（例：ドキドキする、身震いする）
2. 危険発見：恐怖を引き起こす危険なできごとが起き、驚くとともに戦慄が走る。心臓が速く鼓動し、一瞬、息や姿勢が止まる（例：悪寒が走る、心臓が止まりそうになる）
3. 回避、克服の試み：逃げようとする。（バランス回復のために恐怖心をコントロールして）落ち着こうとする（例：心を静める）
4. 回避失敗→恐怖喚起：身体が硬直して逃げられないと、顔の各部位も固まる（例：足がすくむ、顔を引きつらせる、目を見開く、唇がこわばる、蒼白になる）
5. 回避成功→安心、高揚感：恐ろしいできごとが過ぎ去ったときは、恐怖が低減し、バランスを回復し安心する（例：ほっとする）

（楠見・米田, 2007, p.68）

ここで重要なのは、(99) が感覚・運動レベル、スキーマレベルの身体的な変化やイメージスキーマを含んでいる点である（e.g. 身震いする、心臓が止まりそうになる、心を静める）。したがって、スクリプトとは感覚・運動レベルやスキーマレベルでの要素が構成要素の一部として引き継がれ、時系列的に構造化・配置された「統合体」であり、「言語表現」そのものではないといえる。¹¹⁵

こうしたスクリプトにおいては、感情の生理的反応パターンや、（回避などの）行為やその準備段階に関する要素は文化普遍性が出やすい。一方、感情表出に関する段階のものはそれがコントロールすべきものかどうかという社会的な表出規則・規範に影響を受けやすく、文化的差異が出やすいと述べられている（e.g. 「怒りを押し殺す」「喜びを噛み締める」）。ここでの楠見・米田 (2007) による指摘は、

¹¹⁵ 図 9 の「例」において「共感覚比喩」「擬態語」「身体慣用句」といった言語表現の上に、「イメージスキーマ」「スクリプト」「概念メタファ」「規範」という次元の異なる項目が配列されていることにも注目されたい。

「本音と建前」文化による日本語の〈怒り〉のコントロール段階の精緻化を説明した Matsuki (1995) の分析に対応すると考えられる。¹¹⁶

以上を要するに、楠見・米田 (2007) の「感情言語の階層モデル」は、感情言語表現の成立レベルを場面依存的で比較的単純な感覚・運動レベルから、一般化・抽象化が進んだスキーマレベル、それらが統合・複雑化した概念レベルという三層に分け、各層への身体基盤、社会・文化基盤の影響を示したものである。本モデルは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉という身体部位の文化モデルが、どのような身体基盤、社会・文化基盤をもとに構築されるかを明らかにしようとする本研究の目的にとって、特に適したものといえる。しかし、楠見・米田 (2007) のモデルを本研究で援用するにあたり、解決・明確化しておかなければならない四つの問題がある。

(100) 問題 1：内的変化に関する身体慣用表現の分類基準を改める必要がある。

問題 2：スキーマレベルと概念レベルの境界が曖昧である。

問題 3：スキーマレベルに性質の異なる種類の表現が含まれている。

問題 4：知的（あるいは理性的・論理的）精神に対する適用を考える必要がある。

【問題 1】内的変化に関する身体慣用表現の分類基準を改める必要がある。

楠見・米田 (2007) は、感情を表す身体慣用表現を二種類に分け、表情や身体部位（外的部位）による表現を感覚・運動レベルの議論の中で、内臓の感覚（内的変化）の表現をスキーマレベル以上の議論の中で取り挙げている。このうち、「腹」「胸」「頭」を含む表現は「胸を張る」「腹の皮をよじる」などの姿勢の表現やその他とされる表現を除いて全て後者に位置付けられているが、感覚・運動レベルに分類すべき内的変化の表現も存在すると考えられる。一つは、動悸に関する表現（e.g. 「胸が高鳴る」）である。楠見・米田 (2007) は、第一のレベルに動悸由来の擬態語「どきどき」をあげているが、同じく動悸を指す「胸が高鳴る」（楠見・米田 (2007) では扱われていない）も「どきどき」と同じ感覚・運動レベルに位置付けられるはずである。¹¹⁷ 「胸が苦しい」「胸が痛い」などの感覚形容詞による表現も、慣用的意味としては心的経験を表す一方で、文字通りには生理的感覚を指しており、第一の

¹¹⁶ 焦点が逸れるために割愛するが、楠見・米田 (2007) はこの後に、身体的影響だけでなく、人間関係を規定する社会や文化の影響が大きい〈愛〉の感情を例にとり、その言語表現をささえる比喻と規範を明らかにするための実験を行っている。複数の実験により、「愛」という語によって連想される事柄には文化差があること、また、恋愛に関する規範（「同性愛禁止」「一対一恋愛（二股をかけない）」「先取り権尊重（横取りしない）」）の支持・不支持によって、〈愛〉という概念を結びける比喻に個人差が見られたことが報告されている。

¹¹⁷ ただし、「胸が高鳴る」については、表現の慣用化が進んだことで心的要因による動悸以外には用いられないと考えられる（「??エレベーターが故障していたので階段を使って 10 階まで登ったら、胸が高鳴った」）。

レベルに含められるであろう。

【問題2】スキーマレベルと概念レベルの境界が曖昧である。

上で述べた通り、楠見・米田 (2007) は、内臓の慣用句による感情表現をスキーマレベルに位置付けているが、中には図9の概念レベルに配置されているはずの概念メタファーを想定したと考えられる説明が含まれている。たとえば、楠見・米田 (2007) は〈胸〉が心の座として捉えられていることを指摘した上で、「ここで、「胸」は「心の容器」というイメージスキーマでとらえられ、そのなかの感情という「液体」が「騒ぐ」(不安), 「あふれる」(喜び), 「熱くなる」(感激), 「むかつく」(怒り) という表現がある。」(p. 64) と説明している。〈容器〉スキーマの関与が指摘されているが、同時に液体への言及もあることから、実際には〈感情は容器内の液体である〉などの概念メタファーが想定されていると考えられる。また、(98) において〈怒り〉に関する四種のイメージスキーマが挙げられているが、〈怒り〉の理解においては、これらが独立しているというより全体の一要素として相互依存的に機能していると考えられる。この点について、楠見・米田 (2007, p. 65) も次のように述べている。

たとえば、「怒り」は前述の「心の容器」イメージスキーマにおける液体の沸騰、「垂直性」スキーマにおける液体の水位の上昇、「コントロール」スキーマと「バランス」スキーマによる心のバランスのコントロール、そして、コントロール不能になり爆発するといったイメージスキーマは、感情の領域に体系的な構造を与え、一貫した比喩表現を生成する (Johnson, 1987; Lakoff, 1987; Lakoff & Johnson, 1999)

(楠見・米田, 2007, p. 65)

「感情の領域」や「液体」という語句を含むように、ここでもやはり概念（領域）としての構造化された対応関係が想定されている。したがって、楠見・米田 (2007) がスキーマレベルの感情表現として扱うものは、従来認知言語学が概念メタファーに基づく表現として説明してきたものを含んでいる。

では、なぜ概念メタファーが図9の概念レベルに配置されているのだろうか。次のように解釈することができる。先に、スクリプトが特定の言語表現ではなく、感覚・運動レベルやスキーマレベルの要素が構成要素として引き継がれ、時系列的に構造化・配置された「統合体」を指すことを述べた。概念メタファーは、一般に〈AはB（である）〉や〈Aを、Bとして捉える〉(e.g. 〈感情は容器内の液体である〉〈感情を、容器内の液体として捉える〉) のように定式化されるが、スクリプトと同様に個別の言語表現を指すわけではない。2.3.2.1節で述べた通り、AとBは概念領域を指し、起点領域Aと目標領域Bの対応関係は、概念要素同士の対応（存在的対応）のみならず、それらに関する知識の対応

(認知的対応) を内包している (Kövecses, 1986, p. 17; 1990, p. 56; Lakoff, 1987, p. 387; 1993, p. 207; Lakoff & Kövecses, 1987, p. 201)。併せて、概念メタファーにおける一連の認知的対応は、時系列的にまとめられることで典型的なスクリプト (シナリオ) として登録されている。したがって、個別の言語表現がある特定のイメージスキーマに基づく表現として分析されたとしても、その表現はより大きなスクリプトや概念メタファーの構成要素 (が言語化されたもの) でもあるとみなされうる。「(喜びで) 胸があふれる」のような表現は、〈容器〉スキーマに基づく表現でもあり、さらに〈容器〉スキーマを構成要素とする〈感情は容器内の液体である〉という概念メタファーの具現化した例でもあるということである。このように捉えると、スキーマレベルの表現であり、同時に概念レベルの表現であるものは、いわばスキーマレベル以上の位置付けとなる (これは感覚・運動レベルの表現も同様であろう)。一つの表現のみを取り上げて、それがスキーマレベルのものか概念レベルのものを議論することは的外れなのかもしれない。¹¹⁸

【問題 3】スキーマレベルに性質の異なる種類の表現が含まれている。

上のような解釈に基づくと、スキーマレベル以上に位置する表現は相当数に及ぶことになるが、その一方で、楠見・米田 (2007) がスキーマレベルに含める表現の中には感覚・運動レベルの表現に近いものもある。たとえば、上で「感情という液体」として説明されていた表現のうち、〈液体〉でなければならない表現は「あふれる」のみであり、「熱くなる」や「むかつく」はむしろ生理感覚を説明するメトニミー表現として位置付けることができる。¹¹⁹ さらに、「液体が騒ぐ」という表現の文字通りの意味は成立しないため、「胸が騒ぐ」が〈液体〉メタファーに基づく表現であるとは言い難い。「胸が高鳴る」や「胸が躍る」という表現の存在を考慮するに、「胸が騒ぐ」はあえて〈感情は液体〉というメタファーを想定せずとも、感情経験に伴う動悸が抽象化されることで、人間が出す騒音に喩えられたメタファー表現として説明すべきであると考えられる。

「胸が騒ぐ」と「(喜びで) 胸があふれる」はいずれもメタファー表現であるが、成立の基盤に基づいて異なる分類を与えるべきである。前者のタイプの場合、修辭性は認められるものの、その主な基盤となるのは感情経験と時間的隣接関係にある動悸であり場面依存的である。これに対し、「(喜びで) 胸があふれる」のような表現は、時間的隣接関係にある経験というよりは〈感情は容器内の液体であ

¹¹⁸ ただし、スキーマレベルを広く解釈することで、身体部位詞慣用句が全てスキーマレベル以下で説明可能というわけではない。楠見・米田 (2007) が、感情のシナリオのうち特に表出段階は社会的な表出規則・規範に影響を受けやすい (e.g. 「怒りを押し殺す」「喜びを噛み締める」) と述べていたように、概念レベルで影響を受ける表現が存在する。

¹¹⁹ 「入場ゲートに人が溢れている」のように、固体がイメージスキーマ的な〈連続体〉として捉えられることで「あふれる」が用いられる場合もある (鍋島, 2011, p. 105)。

る〉のような概念メタファーを通じて生じうる。2.3.2.2節で述べた通り、概念メタファー理論は、メタファーの二大基盤として共起性と類似性を掲げてきた（e.g. Kövecses, 2002/2010, Ch. 10; 谷口, 2003, 第4章, 第7章; 鍋島, 2003a; 2011, 第4章）。〈感情は容器内の液体である〉メタファーは構造のメタファーの一例であり、〈心の中の感情〉と〈容器内の液体〉に関する二つの経験の間に構造的な類似性を捉えることで成立する。もちろん、このような概念メタファー（あるいはイメージスキーマ複合体）の発生を辿ると、生理的感覚・反応という経験にも帰着するであろうが、それらの経験は抽象化・統合を経ることで場面依存性を（完全ではないにせよ）失っている。「(喜びで) 胸があふれる」の表現に意味が与えられるのは、起点領域の概念要素である〈液体〉および〈容器〉とそれらの関係性が、目標領域の概念要素である〈感情〉と〈心(胸)〉の関係と対応づけられることによる。¹²⁰「容器の中の液体の量が増すことで水位が上昇し、容積を超えた段階で液体が溢れ出る」という知識（あるいは推論と呼ばれる）を通じて「喜びの感情が増大した結果、ある時点で心(胸)に留めて置けないほどになる」ことが理解され、「(喜びで) 胸があふれる」という言語表現が成り立つのである。このような構造のメタファーに基づくメタファー表現の成立は、下でみる「腹に納める」「腹を割る」のような情動とは異なる精神作用のメタファー表現の成立と同様である。

本研究が共起性基盤と類似性基盤の区別の必要性を説くのは、後者がそれだけでは身体部位と精神作用の比喩的な対応を完全には保証しないからである。たとえば、「胸が高鳴る」「胸が騒ぐ」のように動悸を通じて感情を理解する場合、〈胸〉と〈感情〉の結びつきの動機は動悸が胸(心臓)で起こるという経験的事実によって保証される。一方、「(喜びで) 胸があふれる」という表現が〈感情を、容器内の液体として捉える〉という概念メタファーによって生じているのだとしても、この概念メタファー自体、〈心〉が〈胸〉という容器であることは何も指定していない。つまり、「(喜びで) 胸があふれる」というメタファー表現を説明するには、〈心は胸という容器である〉という別のメタファーの存在を想定しなければならない。このようなメタファーの発生は、感情経験の度に動悸を含む胸部の生理的变化が生じることで、繰り返し〈胸〉への意識が向けられることに由来すると考えられる（勿論、のちに取り上げるようにこれが全てではない）。したがって、〈心は胸という容器である〉というメタファーの成立を促すのは「胸が高鳴る」「胸が騒ぐ」で見たような身体経験であり、そうしてできた〈心は胸という容器である〉という理解が、今度は「(喜びが) 胸あふれる」という言語表現の成立を間接的に動機づけるのである。

¹²⁰ ここで〈心(胸)〉とあるように、「(喜びで) 胸があふれる」の表現を説明するには、〈容器〉から〈胸〉、〈胸〉から〈心〉という二重のメタファーを考えなければならない。この点については、後の3.3.3節で詳しく論じる。

【問題4】知的（あるいは理性的・論理的）精神に対する適用を考える必要がある。

これは、楠見・米田 (2007) のモデルに内在する問題ではなく、本研究の分析に応用する上での問題である。楠見・米田 (2007) のモデルは、感情に関する言語表現の説明を意図して作られている。本モデルの知的精神への応用可能性を考えるにあたり、感情との経験基盤の差異を考えなければならない。このうち、上で論じたような感情経験に伴う生理的感覚・反応は共起性基盤に分類され、ある感情が発生した際にその生理的感覚・反応がある部位で生じていると知覚されることで、時間的隣接性を以て両者の結びつきが認識される。一方、知的精神作用においては、そのような共起性基盤の候補となるような即時的な生理的感覚・反応は比較的生じにくい。知的精神作用を表す表現は、「頭をひねる」などのしぐさ・姿勢に関する表現を除いて感覚・運動レベルに該当するものが想定し難いことから、少なくともスキーマレベル以上の表現に位置付けられると考えられる。例として、「腹に納める」「腹を割る」という表現を考えてみよう。これらの表現は、「(喜びで) 胸があふれる」と同様に〈精神作用を、容器内の内容物として捉える〉という概念メタファーに基づく表現であると考えられる。「腹に納める」が〈物事を他に知らせず自分だけにとどめておく〉ことを、「腹を割る」が〈隠し立てをせず他に知らせる〉ということを表す表現として成り立つのは、我々が、「容器に物を入れると外から見えなくなり、反対に容器を割る（開く）ことで中にあるものが見えるようになる」という〈容器〉と〈内容物〉の関係についての知識（推論）を、〈腹（心）〉と〈精神作用〉の関係に適用するからである。これを動機づけるのは、〈容器の中に何かを隠す、それを晒す〉行為と〈心に何かを隠し立てる、打ち明ける〉ことの間に見出される構造的な類似性である。このような比喩は、〈心は腹という容器である〉というメタファー的理解抜きにしては生じ得ない。¹²¹

なお、ここでの議論は知的精神作用に関する表現の身体基盤を否定するものではない。〈容器〉スキーマの経験基盤の一つは、身体が本質的に容器的であるという事実に基づいて、呼吸や摂食活動によって経験的に創造されるものである（本稿 2.3.5 節を参照）。また、(91) で有蘭 (2009) が「腹に落ちる」「胸につかえる」「胸が焼ける」という表現を〈思考を、摂食を通して捉える〉という概念メタファーの例に含めていたように、〈摂食活動〉という身体活動が〈思考〉の理解のために利用されることもある（cf. 〈アイデアは食べ物である〉 (IDEAS ARE FOOD) (Kövecses, 2002/2010, pp. 6–7; Lakoff & Johnson, 1980/2003, pp. 47–48)）。

しかしながら、〈思考を、摂食を通して捉える〉というメタファーにおいて二つの領域を結ぶ動機と

¹²¹ Jäkel (1995) は、〈思考〉や〈理解〉といった能動的に行われる精神活動を *mental activity* とし、〈精神活動は操作である〉 (MENTAL ACTIVITY IS MANIPULATION) という概念メタファーを提案している。ここでの議論の視点から見ると、それらの対応関係は全て構造的基盤に動機づけられたものである。

なっているのは、〈思考〉行為と〈摂食〉行為の構造的な類似性であり、共起性基盤ではない。思考と摂食が同時に行われることは稀であり、両者の時間的隣接性は認め難いといえる。この意味において、共起性基盤としての身体基盤とそれ以外の身体基盤は分けて考えるべきである。

では、楠見・米田 (2007) らのモデルを援用するにあたり、知的精神をどう位置付けるべきであろうか。以上の話に基づく、知的精神と〈腹〉〈胸〉〈頭〉を結びつける共起性基盤の存在は見出し難く、知的精神に関する表現は共起性基盤とは異なる動機によって形成された〈心（の在り処）としての腹・胸・頭〉というメタファー的理解に基づいて生み出されていると考えられる。より正確に言えば、〈心（の在り処）としての腹・胸・頭〉というメタファーを前提に、上で説明したような構造的類似性によるメタファーが加わることで、「腹に納める」「腹を割る」のような表現が成立する。また、「腹に納める」「腹を割る」などの一連の表現の対応には、スクリプトを含む領域要素の対応が関わってくるはずである。したがって、知的精神作用に関する表現は、原則として楠見・米田 (2007) らのモデルにおいて主に概念レベルに位置付けられると考えられる。

以上より、本研究では楠見・米田 (2007) のモデルを〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用表現の分析に援用するにあたり、次のような解釈・変更を加える。

- 「胸が痛い」「胸が高鳴る」のように、文字通りの意味が何らかの生理的感覚・反応を表す表現を、「感覚・運動レベル」に分類する。
- 「胸が騒ぐ」のように、メタファー表現として分類されるが、その動機として共起性基盤（感情経験に伴う生理的感覚・反応）が想定される表現を、感覚・運動レベルに近いスキーマレベルⅠとして分類する。
- 何らかのイメージスキーマ（e.g. 〈容器〉スキーマ）に基づいており、特定の生理的感覚・反応との関係が希薄化した表現を、スキーマレベルⅡとして配置する。ただし、このカテゴリーでは、その他の表現との関係を見た場合に何らかの構造的性を持つ概念メタファー（e.g. 〈感情を、容器内の液体として捉える〉）を設定することができる場合が多いため、スキーマレベルⅡとその上の概念レベルを並行して論じる。

イメージスキーマと概念メタファーを統合して論じる必要があるもう一つの理由は、イメージスキーマが抽象度を維持したままではなく、〈液体〉のようにより具体的な事物に適用されることで言語化されることが多いためである（e.g. 「あふれる」「込み上げる」）。これに関連して、Kövecses (2000, Ch. 5) は、〈感情〉を目標領域にとる一連の概念メタファーの根底には、〈感情は力である〉(EMOTIONS ARE FORCE) という「マスターメタファー」(master metaphor) が存在すると主張している。〈感情は力であ

る〉というメタファーは、〈感情は容器内の圧力である〉(EMOTION IS PRESSURE INSIDE A CONTAINER) や 〈感情は敵である〉(EMOTION IS AN OPPONENT) のような具体レベルのメタファーを抽象化したものであり、ここでいうイメージスキーマの集合と実質的に対応すると考えられる。このような一般性の高いメタファーは、複数の概念メタファーを捉える際には有効であるが、実際の言語表現の観察・分析においては、結局のところ、上のような理由から具体レベルの概念メタファーを参照することが多い。

3.3.2 身体部位詞表現の具象性

データの観察に移る前に、本研究での分析の重要概念となる身体部位詞表現の具象性について説明しておく必要がある。伊藤 (1999a) は、慣用表現の意味が成立する要因を「比喩性」「具象性」の観点から三種に分類している。一つ目は、ある構成要素の比喩的意味が全体の慣用的意味の中核となる種類の表現で、伊藤 (1999a, p. 188) は「鼻が利く」を例に挙げている。この表現では、「鼻」という語自体が〈ある事柄を敏感に感じ取る器官〉という比喩性を持っており、全体の意味である〈隠し事などを鋭く感じる、利益の得られそうなことに敏感である〉の中核的役割を担っている

第二のタイプは、慣用表現が表す文字通りの意味の具象性に基づいて慣用的意味が生じているものである。具象性とは、慣用表現の表す文字通りの意味に着目した概念であり、「慣用句の中でそれぞれの構成要素が、その文字通りの意味により表している事柄」(伊藤, 1999b, p. 97) と定義される。¹²² 伊藤 (1999a, pp. 191–192) は「目を丸くする」という慣用句を挙げ、この表現の慣用的意味は、文字通りの意味が示している事柄の具象性に基づいて生じたものであると述べている。つまり、「目を丸くする」の〈大きく目を見開く〉という文字通りの意味には具象性があり、これをもとに〈びっくりして目を大きく見開く〉という慣用的意味が成立している。

三つ目は、構成要素の比喩性と全体の文字通りの意味の具象性の両方が関与している場合で、「尻尾をつかむ」「尻尾を出す」が例として挙げられている。伊藤 (1999a, pp. 193–194) は、これらの表現の「尻尾」という構成要素には〈隠し事、悪事〉という比喩的意味を設定することができるが、それと同時に「つかむ」「出す」という動詞も慣用的意味において重要な役割を果たしていると述べている。

123

¹²² 伊藤 (1999a) では「慣用句」という用語を用いているが、その対象範囲は本研究でいう慣用表現（つまり、慣用句と慣用的連結句を合わせたもの）に相当するため、直接引用の箇所を除いて「慣用表現」と改める。ただし、「具象性」の概念を論じるにあたり、対象となっているのは慣用句のみである。

¹²³ 本表現は、(多くの) 動物にはあって本来人間にはないはずの身体部位「尻尾」に言及した表現である。『日常語の意味変化辞典』では「尻尾を出す」の項目において「ごまかしていたことがばれる。化けの皮がはげる。化けていた狐や狸が尻尾を出したために正体がばれることから、隠し事が暴露されることにいう。尻尾には、隠し事・ごまかし・ばろなどの意味が含まれている。江戸自体の『諺苑』に「尻尾を出す 化のあらはるるを云う」と記される。「尻尾を掴む」は、隠していた秘密や悪事の証拠を握ることで、化けていた狐や狸の正体を見破ることからいう。「尻尾を巻く」は負け

伊藤 (1999a) による一つ目と二つ目の慣用表現の分類は、構成要素が単独で意味拡張を生じさせているかどうかを分類基準とする有蘭 (2009) の慣用的連結句・慣用句の区別に近い (有蘭 (2009) による慣用的連結句・慣用句の区分は 2. 2. 3 節を参照)。三つ目のタイプについては、同じく身体部位詞が比喻性を持つ一つ目のタイプとの明確な識別方法が示されていないものの、要するに具象性の程度の決定要因となるのは用言要素 (と身体部位詞の組み合わせ) であると解釈できる。伊藤 (1999a, p. 188) が例としている「鼻が利く」の文字通りの意味に具象性がないとは言い難いため、ここでは「鼻が利く」と同じタイプの慣用表現として伊藤 (1999b, pp. 96–97) が挙げる「腕がいい」を例にとる。この表現では、「腕」が〈技能・技術〉という比喩的意味を持つのに対し、「いい」は文字通りの解釈が活きており、全体としての具象性は薄い。この種の表現は、実質的に有蘭 (2009) の「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」に相当する。

伊藤 (1999b) は、具象性の概念を広く観察することで、身体部位詞による慣用句の具象性を以下のよう分類している。¹²⁴

(101) ① 身体部位の形 (状態) の変化 = 感情の変化

目を丸くする, 目を皿にする, 目が飛び出る, 開いた口がふさがらない

② 身体部位の特徴 = 性格・性質

骨と皮だけである, 口が軽い, 口が重い, 口が悪い, 手が長い, 腹が黒い, 尻の穴が小さい

③ 身体部位の自由な動きを封ずる = 妨害・困難

手も足もでない, 足を引っ張る

④ 身体部位の不快感 = 不都合な状態

顔がつぶれる, 顔に泥を塗る, 耳が痛い, 逆風が吹く (顔に対して)

⑤ 身体部位の温度の上昇 = 怒り・興奮

身体部位の温度の下降 = 冷静・冷淡

血が沸く, 腸が煮えくり返る, 頭を冷やす

で逃げる形容で、負け犬の動作に基づく。」とある。『日本国語大辞典 第二版』の「しつぽ【尻尾】」の見出しを見ると、語釈の一つとして「(5) 隠し事, ごまかしなどが表面に現われるいとぐち。ぼろ。」とあり、挙げられている用例の中で最も古いものは近世後期の滑稽本からのものである。また、動物の身体部位に準えたものは定かではないが、類義表現としては「化けの皮が剥がれる」「尻が割れる」も挙げられるだろう。さらに「馬脚を露わす」という表現もあるが (渡辺秀樹先生のご指摘に基づく), こちらは芝居の中で馬の脚の役者の姿が見えてしまうということに基づく中国由来 (元代の古典劇由来) の表現である (『日本国語大辞典 第二版』)。

¹²⁴ 伊藤 (1999a, 1999b) による具象性の概念は、先に見た Lakoff (1987) や Gibbs and O'Brien (1990) による *spill the beans* 等のイディオムの心的イメージの概念に近いと考えられる。

⑥ 身体部位の上昇＝自慢・自信（過剰）

身体部位の下降＝落胆・意気消沈

鼻が高い，鼻っ柱が高い，肩を落とす

⑦ 身体部位を開く＝身体部位の典型的な機能の開始

身体部位を閉じる＝身体部位の典型的な機能の停止・遮断

目をつぶる，口をつぐむ，耳を塞ぐ，口を開く

⑧ 身体部位を汚す＝否定的な仕事を行う

身体部位を汚さない＝否定的な仕事を行わない

手を汚す（汚さない）

（伊藤（1999b, pp. 99–113）をもとに作成）¹²⁵

伊藤（1999b）はさらに，慣用的意味には身体部位が担う典型的機能が関係づけられる場合があると述べている。たとえば，〈顔〉という身体部位は「体面・面目」という典型的な機能を担う部位とみなされている。この認識をもとに，(101)-④ に挙げた「顔がつぶれる」「顔に泥を塗る」において，「つぶれる」「泥を塗る」といった不快な状態（くさまざまな抵抗にあって難しい状況にある）ことが描かれることで，〈体面・面目を失いかねない状態〉という慣用的意味が成立する。

伊藤（1999a, 1999b）による具象性の概念は，認知言語学的な身体部位詞研究にとって特に重要な観点である。というのも，この具象性の概念は，慣用表現の文字通りの意味が活きていることを認めることに等しく，文字通りの意味と慣用的意味が恣意的でない動機によって結び付くことを示唆しているからである。伊藤（1999b）は，(101)の「＝」で結ばれた文字通りの意味と慣用的意味の対応がいかになにに成立するかについて詳細には論じていないが，この点については，有蘭（2009）が伊藤（1999b）による分類を援用することで，認知言語学的知見からその認知プロセスとしての比喩の仕組みを論じている（3.2.2.6節での有蘭（2009）の（91）の分類は，伊藤（1999b）による（101）の分類を一部参考にしたものである）。

3.3.3 身体部位詞表現に見られる比喩の二重性

前項で述べたように，伊藤（1999a, 1999b）による慣用表現の具象性は，文字通りの意味と慣用的意味の対応の動機を探るための重要な視点である。一方で，伊藤（1999a, 1999b）が挙げる例の中には，「目をつぶる」のように文字通りの意味が成立するものと，「目を皿にする」のように文字通りの意味が成立しないものが混在している。これに関連して，山梨（1988/2007, pp. 76–79）は，慣用句の中には文字通り

¹²⁵ 伊藤（1999a, 1999b）は，日本語の他にドイツ語の慣用表現も扱っているが，ここでは日本語の例のみを抜粋している。

の意味をなすものだけでなく、文字通りの意味が成立せず、比喩としての解釈に限られるもの、それらの中間に位置し、具体性が薄れたもの、抽象化を経たものが存在することを指摘している。

(102) ①文字通りの意味が成立するもの

手をにぎる、目をつぶる、口をとがらせる、手をあわせる、足をあらう、肩をもつ、舌をだす、顎をだす、あぐらをかく、胸がいたむ、首をたてにふる、顔に泥をぬる

②具体性が薄れたもの

鼻にかける、舌をまく、足がすくむ、耳を傾ける、頭をかかえる、腰をすえる、尻ごみする、目をつりあげる、胸をふくらませる、肩をおとす、あげ足をとる、耳をかす

③抽象度がさらに増したもの

小耳にはさむ、耳を澄ます、手がふさがる、腰を浮かせる、身をいれる、顔がきく、鼻をあかす、二の足をふむ、手をこまねく、頭にいれる、頭に置く、腹のうちをよむ、目に浮かべる、腹のうちをさぐる、胸にしまっておく

④隠喩的な見立てが含まれるもの

足が棒になる、舌つづみを打つ、口車に乗る、齒に衣を着せない、腹の虫がおさまらない、喉から手がでる、へそで茶を沸かす、目から鱗がおちる、目から火がでる、肩で息をする、腹わたが煮えくりかえる

(山梨 (1988/2007, pp. 76–79) をもとに作成)

山梨 (1988/2007) は ④ にのみ隠喩的な見立てが含まれると述べているが(「足が棒になる」の「棒」など)、③ にも他の具象物が言語化されていないだけで、何らかの喩えが関わっていると考えられる。たとえば、「耳を澄ます」の「澄ます」は水や空気に関する動詞「澄む」に基づいており、「腹のうちをよむ」の「よむ」は本来文字に対して用いられる語である。また、① と ② の分類は、何らかの違いこそ感じられるかもしれないが、その基準は明確にされてはいない。(102) を大分するとしたら、次に示すとおり、文字通りの意味が現実世界で成立可能なものと、文字通りの意味が現実世界で成立し難く何らかの喩えが関わるものに二分されるだろう。

(103) ①文字通りの意味が現実世界で成立可能なもの

手をにぎる，目をつぶる，口をとがらせる，手をあわせる，足をあらう，肩をもつ，舌をだす，顎をだす，あぐらをかく，胸がいたむ，首をたてにふる，顔に泥をぬる，鼻にかける，舌をまく，足がすくむ，耳を傾ける，頭をかかえる，腰をすえる，尻ごみする，目をつりあげる，胸をふくらませる，肩をおとす，あげ足をとる，小耳にはさむ，手をこまねく，二の足をふむ

②文字通りの意味が現実世界で成立し難く，何らかの喩えが関わるもの

耳を澄ます，手がふさがる，腰を浮かせる，頭にいれる，頭に置く，腹のうちをよむ，目に浮かべる，腹のうちをさぐる，胸にしまっておく，足が棒になる，舌つづみを打つ，口車に乗る，歯に衣を着せない，腹の虫がおさまらない，喉から手がでる，へそで茶を沸かす，目から鱗がおちる，目から火がでる，肩で息をする，腹わたが煮えくりかえる

※文字通りの意味が特に曖昧で，①と②の判断が困難なもの

耳をかす，身をいれる，顔がきく，鼻をあかす

「腹のうちをさぐる」や「頭に入れる」のような表現の文字通りの意味は，外科手術などの特殊な文脈を設定する限り解釈が可能かもしれないが，日常生活の中で人々が経験するような事象ではないため，仮想的である。また，「腰を浮かせる」や「手がふさがる」などは，「浮かせる」「ふさがる」の文字通りの意味をどう解釈するかで分類が変わる可能性がある。以上をまとめ，本研究の分析対象である〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を例に当てはめると次のようになる。

(104) ①文字通りの意味が現実世界で成立可能なもの

腹を抱える，腹を切る，胸が高鳴る，頭が痛い，頭が上がらない，頭が高い，腹が大きい，胸が狭い，頭でっかち

②文字通りの意味が成立し難く，何らかの喩えが関わるもの

胸が騒ぐ，頭を砕く，腹の底を打ち割る，胸が晴れる，頭の回転が速い

注意すべきこととして，分類上は(104)-①に該当する表現であっても，慣用的意味と結びつく際に喩えが働く場合がある。たとえば，「腹を切る」は，（これも稀ではあるが）切り傷をつけるという意味で現実世界で遭遇しうる事象を指すことができるため，分類上は(104)-①に含まれる。しかし，慣用的意味の〈大笑いする〉（〈可笑しいこと〉）と結びつく際に，「腹を切る」の使用を動機づけるのは笑うことで生じる腹筋の痛みであり，〈痛み〉と〈切る〉の間には喩え（メタファー）の関係が存在する。

したがって、身体部位の描写に喩えが働くか否かは、慣用的意味を参照することで初めて決定されるものであり、(104)のような二分が絶対的な基準とはならない。

重要なのは、「腹を切る」などの慣用表現の意味を分析するにあたっては、少なくとも二つの比喩の関与を考えなければならないということである。一つは、上に述べたような身体部位の作用・性質を理解・描写するための比喩であり、もう一つは、比喩によって表された身体部位に関する作用・性質を、慣用的意味と結びけるための比喩である。「腹を切る」という表現の慣用的意味は、次の比喩の組み合わせによって成立している。

(105) 「腹を切る」の意味を成立させる比喩

〈腹（腹筋）の痛みを、腹を切ることとして捉える〉メタファー
＋ 〈可笑しさを、腹（腹筋）の痛みによって捉える〉メトニミー

ここで、(105)で示した〈腹（腹筋）の痛みを、腹を切ることとして捉える〉メタファーをA、〈可笑しさを、腹（腹筋）の痛みによって捉える〉メトニミーをBとする。(104)はAに関する分類であったが、Bの分類についてはどうであろうか。例として、「腹を抱える」（〈大笑いする〉）と「腹が大きい」（〈度量が大きい〉）を比べてみよう。これらはいずれも喩えを想定せずとも文字通りの意味が成り立つため、(104)では一つ目のタイプ①に分類されるが、両者はBの段階が異なっている。「腹を抱える」は、大笑いする際に腹部の筋収縮が生じ、そこに意識を向けて手を当てるという動作に基づいたメトニミー表現であり、具象性を持つ文字通りの意味が慣用的意味への転義に直接関係している。¹²⁶ 一方、「腹が大きい」の文字通りの意味である〈腹が大きい〉ことと、慣用的意味である〈度量が大きい〉ことの間には直接的な関係があるわけではない。有菌 (2021, pp. 36–37) の論じるように、この表現は〈腹を、精神作用の容器として捉える〉という概念メタファーによって成り立っており、「大きい」は〈精神作用の容器の大きさ〉を指している。したがって、「腹が大きい」は具象性を持ちながらも、その具象性が慣用的意味とは直接結びつかず、メタファーを介して初めて結びつく種類の表現とみなされる。

ここで、Aの段階を「身体部位の作用・性質に対する比喩」、Bの段階を「精神作用に対する比喩」と呼称する。想定されるAとBの比喩の組み合わせをまとめると以下のようなになる。

¹²⁶ 笑い (laughter) による腹筋運動の活性化は経験的に明らかであるが、これは科学的にも証明されている。Wagner et al. (2014) は、笑いヨガの実践による体幹筋の活性化度合いをクランチエクササイズやバックリフティングエクササイズの実践時と比較している。その結果、外斜筋については笑いヨガがクランチエクササイズやバックリフティングエクササイズと同等、内腹斜筋についてはそれらのエクササイズ以上の筋活性を生じさせると報告している。

表 4 精神作用に対する比喩 × 身体 の作用・性質に対する比喩

	精神作用 に対する比喩	身体 の作用・性質 に対する比喩	例	メタフトニミーの分布 (Goossens, 1990/1995/2002)
①	メトニミー	なし	腹を抱える, 胸が高鳴る, 頭が痛い	メトニミーからのメタファー
②	メトニミー	メトニミー	頭が上がらない, 頭が高い	
③	メトニミー	メタファー	腹を切る, 胸が騒ぐ, 頭を砕く	メトニミー内のメタファー
④	メタファー	なし	腹が大きい, 胸が狭い, 頭でっかち	(メタファー内のメトニミー)
⑤	メタファー	メトニミー	(該当なし)	
⑥	メタファー	メタファー	腹の底を打ち割る, 胸が晴れる, 頭の回転が速い	

① は、文字通りの意味が表す事象と慣用的意味が表す事象の間に、時間的隣接性に基づくメトニミー関係（共起性基盤）が認められる慣用句である。この表現は、楠見・米田 (2007) が感覚・運動レベルに位置付けていた表情や身体部位による慣用句に加え、そこでは取り上げられていなかった内的感覚に基づく慣用句が含まれる。② は、① と同様に文字通りの意味が表す事象と慣用的意味が表す事象の間に、時間的隣接性に基づくメトニミー関係（共起性基盤）が認められる慣用句である。「頭が上がらない」や「頭が高い」と言う場合、文字通りの意味が成立するが、ここではさらに身体 の最上部に位置する〈頭〉の位置を通じて〈身体〉の姿勢・位置を指すというメトニミーが働いている。③ は身体 の作用・性質の描写にメタファーが働くが、① や ② と同様にその部位における場面依存的な共起経験に動機づけられた表現である。

① から ③ の慣用句に対し、④ から ⑥ に分類されるものは、身体部位と精神作用との結びつきが構造的な類似性に基づくメタファーによって成立しているものである。この種の慣用句は① から ③ の表現とは異なり、心的経験と時間的隣接関係にある身体経験（メトニミー基盤）が特定し難い。場面依存的というよりは、概念メタファーの要素間の対応に基づいて表現が成り立つと考えられ、一連の表現の意味と形式に論理的な一貫性が見られるという特徴がある（e.g. 「腹が大きい」（〈度量が大きい〉）と「腹が小さい」（〈度量が小さい〉））。

⑤ については理論上想定される組み合わせではあるものの、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の中では該当する表現が見つからなかった。該当する可能性のある例を挙げるとすれば、3.6.3.3 節で例外として取り上げる「頭を擡（もた）げる」がある。この表現は、〈考え〉を擬人化することで、〈頭を起こす・持ち上げる〉という視覚的イメージから〈考えが目立つようになる〉という意味が生じたものと考えられる。この場合、注意が向けられるのは〈頭〉ではあるが、もし〈頭〉を参照点として〈全身〉の動きが指示されるという分析をするのであれば、これは〈部分（頭）〉と〈全体（全身）〉の隣接関係に基づいて（メトニミー）、〈存在が目立つようになる〉という文字通りの意味から〈考えが目立つようになる〉という精神義へと意味拡張（メタファー）した例として⑤に分類されるであろう。

「頭が痛い」を含む①の表現はすべてメトニミー表現であるが、文脈次第で Goossens, (1990/1995/2002) の挙げたメトニミーからのメタファー (e.g. ““Oh dear,” she giggled, “I’d quite forgotten.””) に変容する (メタフトニミーについては 2.3.4 節を参照)。たとえば、実際には頭痛がしないのに〈あれこれと考えあぐねる〉ことを意味して「頭が痛い」と言う場合、それはメトニミーではなくメタファー表現である。また、「胸が騒ぐ」を含む③の表現は、Goossens (1990/1995/2002) がデータ中で *be/get up on one’s hind legs* の一例しか見つからなかったと報告したメトニミー内のメタファーに相当すると考えられる。Goossens (1990/1995/2002) はこのほかにメタファー内部の脱メトニミー化 (*pay a lip service*) とメタファー内のメトニミー (*bite one’s tongue off*) という二種類のメタフトニミーを挙げているが、前者については Goossens (1990/1995/2002) が報告した例も一件のみであり、今回の調査でも該当するものがなかった。後者については、*tongue* (〈舌〉→〈発話能力〉) のように、メタファー表現内の構成要素である身体部位がその典型機能とメトニミー関係を結ぶものである。それゆえ、①から⑥の分類に則して当てはまるものではなく、潜在的には④から⑥の中に分布するものと考えられる。たとえば、「頭が固い」という表現は表4の④に当てはまるメタファー表現であるが、この表現では〈頭〉がその典型機能である〈思考行為〉とメトニミーによって結びついている (この件に関する有蘭 (2007; 2009, 第5章; 2021) の議論は本稿の 3.2.2.6 節と 3.6.3.3 節を参照)。¹²⁷

以上、①から⑥までの分類は伊藤 (1999a, 1999b) が「文字通りの意味に具象性を伴う」とした種類の慣用表現であり、具象性を持たず身体部位詞単体の比喩的意味が慣用的意味に活かされた表現 (e.g. 「頭がいい」) は含まれていない。この種の表現は、楠見・米田 (2007) らのモデルにおいてどこに位置付けられるであろうか。身体部位詞が単独で意味拡張を生じさせているということは、その身体部位が精神作用と関係するという認識が存在することを意味する。「頭がいい」において、「頭」が〈思考力〉を表すことができるのは、〈頭〉が思考活動を担う身体部位であるという前提理解が存在するからである。このような認識を定式化するとしたら、〈頭は思考活動の座である〉のようになるであろう。前節で挙げた〈心 (という容器) は腹である〉というメタファーと同レベルの認識であり、少なくともスキーマレベルⅡ以上に位置づけられると考えられる。

「頭がいい」のような慣用表現は、有蘭 (2009) が「名詞のみが意味拡張した慣用的連結句」としていたものである。もう一つの「慣用的連結句」である「名詞と動詞 (あるいは形容詞) が意味拡張し

¹²⁷ メタファー内のメトニミーに関して、有蘭 (2009, pp. 73–74) は「腕を上げる」のような名詞と動詞 (あるいは形容詞) が意味拡張した慣用的連結句が対応すると述べているが、*bite one’s tongue off* のようなメタファー内のメトニミー表現は、身体部位詞のメトニミー的意味拡張のみならず句全体の字義的な意味が句全体の比喩義の解釈と関係しており、両者は完全に対応するわけではない。また、有蘭 (2021, p. 36) の述べるように、「腹が大きい」などの表現においては、「腹」が単独で〈精神活動の容器〉のことを指していると分析できるが、〈腹〉と〈精神活動の容器〉の対応はメトニミーというよりはメタファーであると考えられる。

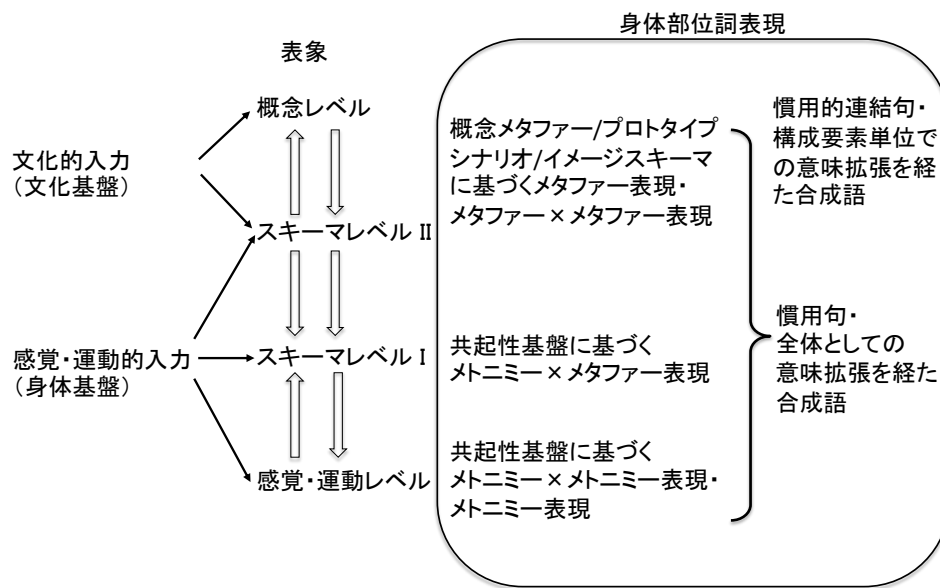
た慣用的連結句」の例としては「腹が出来る」が挙げられるだろう。この表現では、「腹」が〈考え・意図〉へと意味拡張を起こしているが、それだけでなく、「出来る」も〈決まる〉に近い〈変化のない状態となる〉といった意味へと拡張を起こしていると考えられる。いずれにせよ、本表現は〈腹〉と〈考え・意図〉の結びつきを前提に成立しており、「頭がいい」のような名詞のみが意味拡張した慣用的連結句と同じくスキーマレベルⅡ以上に位置づけられるだろう。

以上、「身体部位の作用・性質に対する比喩」と「精神作用に対する比喩」という二つの観点をもとに、本研究では身体部位詞慣用表現を表5のように七分類する。これらをもとに、本研究では楠見・米田(2007)らの階層モデルを図1(1.1節であらかじめ示したものを再掲)のように応用修正する。

表5 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用表現の分類

	表象レベル	身体部位詞表現の分類	表4との対応	(17)での慣用表現の分類との対応	例
L3	スキーマレベルⅡ～概念レベル	身体部位詞とその他の要素が意味拡張した慣用的連結句・合成語		慣用的連結句(名詞のみが意味拡張した慣用的連結句・名詞と動詞(あるいは形容詞)が意味拡張した慣用的連結句)・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	腹が出来る 頭が弱い
		身体部位詞のみが意味拡張した慣用的連結句・合成語			頭がいい 胸算用 腹を合わせる
		メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	⑥	慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語	腹の底を打ち割る 胸の霧 頭の回転が速い
		メタファーによる慣用句・合成語	④		腹が大きい 胸が狭い 頭でっかち
L2	スキーマレベルⅠ	メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	③		腹を切る 胸騒ぎ 頭を砕く
L1	感覚・運動レベル	メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	②		頭が上がらない 頭が高い
		メトニミーによる慣用句・合成語	①		腹を抱える 胸が高鳴る 頭が痛い

図1 身体部位詞表現の階層モデル



楠見・米田(2007)の階層モデル(図9)が身体慣用句(本研究でいう身体部位詞表現)を感覚・運動レベル～スキーマレベルで扱っていたのに対し、図1では全てのレベルに身体部位詞表現が関与することを想定している。また、分類上はメタファー表現であっても、精神作用との結びつきにおいて共起性基盤を持つ慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語を位置付けるため、新たにスキーマレベルIを設け「腹を切る」のような表現を配置している。本研究では、感覚・運動レベルをL1、スキーマレベルIをL2とした。また、スキーマレベルII～概念レベルでは、共起性基盤ではなく、構造的な類似性に基づいて身体部位と精神作用の対応が成立する慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語が配置される。また、慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語は、身体部位と精神作用が対応するという前提のもと、語単位で精神義を得ていると考えられるため、すべてスキーマレベルII～概念レベルに配置している。スキーマレベルII～概念レベルは言語表現としては区別が難しいため、これらをまとめてL3とする。

なお、メトニミー・メタファーに基づく慣用句の細分化は、靱山(1997)や有蘭(2009)によるメトニミー・メタファー・シネクドキーに基づく慣用句の分類((12), 図2)に対応するわけではない。たとえば靱山(1997)は、文字通りの意味が成立する慣用句のみ(つまり、表4で言えば①④, 表5で言えば「メトニミーによる慣用句」「メタファーによる慣用句」)を三種の比喩に基づく分析の対象としており、「腹が立つ」などの表現は「構成語の意味の総和としての意味が成立しない(即ち、慣用的意味のみ)」慣用句として分析対象から外している。有蘭(2009)も、(91)の分類・分析においては慣用句として表4に含まれるような全ての種類の表現を扱っているものの、図2の分類と表現の例示の際には、

初山 (1997) と同様に文字通りの意味が成立するもののみを扱っている。したがって、表 5 の「メトニミーによる慣用句・合成語」「メタファーによる慣用句・合成語」は、精神作用との結びつく際に中心的となる一つの比喩（メトニミーあるいはメタファー）に基づいた分類であり、表現によっては精神作用に対する比喩（つまり表 4 の左）としてその他の比喩が重なって働く場合がある。そのような事例については、次節より具体的な意味拡張プロセスの分析を行う中で適宜言及していく。また、シネクドキーに関わるものについては、本研究のデータにおいては一部の特殊な事例に限り、意味拡張の動機にパターン（類型）を見出すことができない。ここでは一分類として設けることはせず、同じく具体的な事例の分析の中で言及していくこととする。

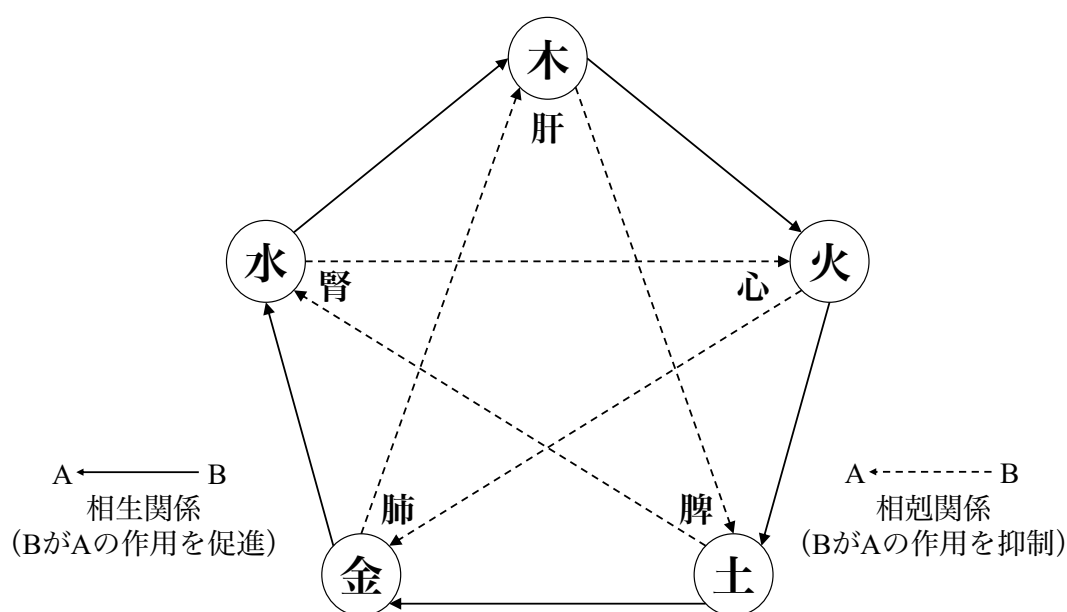
3.3.4 〈腹〉〈胸〉〈頭〉をめぐる日本の心身観

3.3.4.1 五臓思想

〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の分析に移る前に、日本において〈腹〉〈胸〉〈頭〉がどのような地位を与えられてきたのかについて文化的観点からまとめておく。周知のとおり、日本の伝統的な心身観は「五臓思想」（長谷川ほか, 2012）に大きな影響を受けている（e.g. 酒井, 1997, 2004; 長谷川ほか, 2012; 三浦, 1996; 宮地, 1979, 第 4 章）。ここでいう五臓思想とは、五臓（心・肝・脾・肺・腎）の働きを通じて人間の生命活動を理解・説明する東洋医学の理論であり、その五臓を納める〈腹〉と〈胸〉は生命の中心として位置付けられてきた。以下は、仙頭 (2018), 平馬ほか (2014), 三浦 (1996) に基づいた五臓思想の基本概念の概観である。

東洋医学における五臓は、西洋医学での内臓とは異なるもしくはそれ以上の役割を与えられ、その働きは単に生理作用のみならず精神作用までを含むものとして捉えられる。各々の臓は、万物を系統化する五行論に基づき、火・木・土・金・水のいずれかの性質を持つものとして分類される。たとえば、「木」とは樹木に象徴されるしなやかでよく伸びるような事物の性質を表すが、その性質を有する「肝」は「木」のように気血を十分に全身へとめぐらせる役割を担うとみなされている。五臓思想においては、互いの臓がその働きを促進する相生関係、反対に互いがその働きを抑制する相剋関係を五行論から継承している（仙頭, 2018, pp. 18–19; 平馬ほか, 2014, pp. 40–41; 三浦, 1996, pp. 42–47）。五行と五臓の関係は、次ページの図 10 としてまとめられる。

図 10 五行と五臓（三浦 (1996, pp. 42, 45) をもとに作成）



さらに五臓は、同じく東洋医学の基礎をなす陰陽論によって陰の性質を与えられ、陽の性質を持つと言われる六腑（小腸・胆・胃・大腸・膀胱・三焦）と組をなす（仙頭, 2018, pp. 40–41, 64–65; 平馬ほか, 2014, pp. 64–65; 三浦, 1996, pp. 57–61）。

表 6 五臓六腑（三浦 (1996, p. 59) をもとに作成）

五行	火	木	土	金	水	(火)
臓【陰】	心	肝	脾	肺	腎	
腑【陽】	小腸	胆	胃	大腸	膀胱	三焦 ¹²⁸

東洋医学における人間の生命活動とは、根源的なエネルギーとなる「気」、気に物質的な基盤を提供し、気のエネルギーを介して全身に運搬され、各器官に栄養を与える「血」と血以外の体液である「津液」（水）が体内をめぐりながら作用することを指す。精気が満ち、気血水といった生命活動に必要なものの生成を担うのが五臓であり、六腑は空洞で五臓の生成物を通過させる役割を担う（仙頭, 2018, pp. 22–23; 平馬ほか, 2014, pp. 46–47; 三浦, 1996, pp. 54–57）。¹²⁹ 三浦 (1996) は五臓による気血の生成から運搬と貯蔵に至るしくみを次のようにまとめている。

¹²⁸ 仙頭 (2018, pp. 64–65), 平馬ほか (2014, p. 25), 三浦 (1996, p. 64) によれば、三焦は西洋医学に相当するものがない腑であり、東洋医学でも具体的な特定器官を指すのかどうかについて見解が一致していない。おおむね気や水液の通路のことを指すと言われている。その名の通り、位置に応じて上焦（舌から胃の入り口）・中焦（胃の入り口から臍）・下焦（臍から陰部）の三つに分けられる。三焦は五臓と対応はしないものの、心を覆う心包と組をなすと言われることから、五行のうちの火に配当される。

¹²⁹ 「精気」：精と気。気が身体を動かすエネルギー源であるのに対し、精は成長や発育などにも関わるより根本的な生命エネルギーの基本物質。腎に貯蔵され、必要に応じて気に変換される（平馬ほか, 2014, pp. 60–61; 三浦, 1996, p. 75）。

飲食物は、まず脾の働きで消化吸収され、精微物質となり肺に運ばれます。肺では、吸い込んだ空気と合成されて気がつくられ、肺と肝の作用でスムーズに全身に送られます。一方、心で血が形成され、脾で漏れがないようにチェックされながら、心と肝の働きで滞りなく配られます。そして、余った血は肝に、気は腎に貯蔵され、必要に応じて利用されるというわけです。

(三浦, 1996, p. 67)

東洋医学においては、精神作用も五臓の機能として説明される。まず、東洋医学における精神は神・魂・魄・意・志という五種類の神気(「五神」)へと分けられる(平馬ほか, 2014, p. 30; 三浦, 1996, pp. 79-80)。¹³⁰

表7 五神とその特徴 (平馬ほか (2014, p. 30) をもとに作成)

五神	特徴
神	心に宿り、ほかの神を総括する。呼吸・知覚・表情・動作を含むあらゆる活動を支配する。
魂	肝に宿り、人間の本性を司る。魂(と魄)が離れると夢や幻覚を見る。
魄	肺に宿り、無意識になされる本能的な活動や注意力の持続に関わる。
意	脾に宿り、単純な記憶や思考を組み立てることを司る。
志	腎に宿り、目的や目標を据えて具体的に考える。

一方、精神の情緒面は喜・怒・思・悲・憂・恐・驚の「七情」へと分類される。七情は、以下の通り各々の臓と対応づけられる(仙頭, 2018, pp. 104-105; 平馬ほか, 2014, p. 87; 三浦, 1996, pp. 79-81)。

表8 五臓と七情 (平馬ほか (2014, p. 87) をもとに作成)

五臟	心	肝	脾	肺		腎	
七情	喜	怒	思	悲	憂	恐	驚

東洋医学では、人間の精神状態は体調と密接に関係し合うという心身相関・心身一元論的な考えが徹底されている。これを実現するのが身体と精神の両側面にまたがる五臓六腑の機能と体内をめぐる気血水(特に気)の循環の仕組みである。上の七情は、五臓の作用や気血水の循環を乱し、様々な身体の不調を引き起こす「内因」になりうると信じられている。たとえば、過度な喜びが続くとそれを司る心が傷つき、気が散った(緩んだ)状態になる。一方で怒りが度を過ぎると肝が傷つき、気は通

¹³⁰ ここでの五神の分類は『素問』宣明五氣篇第二十三に「五蔵といって、五臓にはそれぞれ内蔵している精神的要素がある。肝は魂、心は神、脾は意、肺は魄、腎は志をしまっている。」とあることによるが、場合によっては「精」を足して「六神」、さらに「智」を足して「七神」とされることもある。また、長谷川ほか(2012)は近世中期の『和漢三才図絵』を引いて五神として志・魂・魄・精・神の五つが挙げられていることを紹介している。なお、六神はそれぞれの組で統合することで、現代にも残る「精神」「魂魄」「意志」という語を形成している点が興味深い。もっとも、現代日本語におけるこれらの語義はもとの六神と厳密に対応する訳ではなく、本稿のタイトルでもある「精神」という語も現在では人間の様々な心の働きの総称として用いられている。

常の上から下への流れに逆らって逆上する。臓が過度な七情によって傷つけられると身体にも不調が現れ、たとえば『素問』拳痛論篇第三十九では、怒りによる肝の負傷は吐血や下痢などを引き起こすと述べられている（長谷川ほか, 2012, p. 114）。このように、過度な感情はそれを司る臓を傷つけ、気の循環異常をもたらすが、反対に五臓の働きや気の状態が精神の状態を規定すると考えることもできる。つまり、五臓に気が充実することで各臓は正常に働き、均衡のとれた精神状態が保たれるが、気の状態に異常が生じると五臓の働きが乱れ、精神にも支障をきたすというものである。

ここまでの五臓思想の概観から明らかなように、(現代) 西洋医学において精神活動を司るとされる脳は五臓六腑の中には含まれていない。東洋医学において、脳は五臓六腑のいずれにも属さない奇恒(きこう)の腑の一つとして数えられ、その機能は顔面の五官(目・舌・口・鼻・耳)の働きと四肢の運動や感覚を司と考えられていた(平馬ほか, 2014, pp. 78-79)。すなわち、東洋医学においては精神作用を含む人間の生命活動の中樞は頭部ではなく、胸部や腹部に位置する五臓に置かれていたのである。

このことを考慮すると、東洋医学に支えられた日本の伝統的心身観が、精神作用の座を〈頭〉ではなく〈胸〉や〈腹〉に求めてきたこと、それが言語表現としても反映されていることは自然な帰結である(Vasiljevic & Graham, 2020; 長谷川ほか, 2012, 第4章)。五臓は、その位置関係に基づいて腹の臓(肝, 脾, 腎)と胸の臓(心, 肺)に分けられるが、上の七情の配当と結びつけると〈腹〉には〈怒〉〈思〉〈恐・驚〉の感情が、〈胸〉には〈喜〉〈悲・憂〉の感情が宿ることになる。たとえば(106)(107)に示すように、〈腹〉と〈怒〉、〈胸〉と〈喜〉〈悲・憂〉の結びつきは現代日本語の〈腹〉表現、〈胸〉表現でも反映されている。

(106) 〈怒〉: 腹が立つ／腹が煮える／腹を据えかねる

(107) 〈喜〉: 胸が躍る／胸が高鳴る／胸を脹らます

〈悲・憂〉: 胸が痛い／胸がはり裂ける／胸が塞がる

ただし、日本の心身観において、〈腹〉と〈胸〉の機能と五臓の機能に精緻な対応が見られるとまでは言い難く(長谷川ほか, 2012, p.183), 五臓思想を以て精神作用の座としての〈腹〉や〈胸〉の理解の成り立ちを全て説明できるわけではない。上で示した七情のうち、〈腹〉と〈思〉〈恐・驚〉の結びつきを裏付ける言語表現は得られておらず(下で述べる「きも」表現を除く), むしろ〈胸〉と結びついて表現される場合がある(e.g. 「胸の霧」「胸を冷やす」「胸が潰れる」)。また、「{腹／胸}が煮える」のように〈胸〉と〈腹〉で互換性を持つ表現も存在する。

1.2節でも触れたように、現代日本語では、心臓・肝臓をはじめとする五臓六腑の漢語はもっぱら身

体義として用いられ、精神義を持つことは稀である (Ikegami, 2008, p. 170), 内臓を指す語「きも」「はらわた」などの和語についても、その用法は比較的限られている。『からだことば辞典』の項目数を見ると、「肝(きも)」は49件、「腸(はらわた)」は14件と、「腹」の189件、「胸」の132件に対して比較的少ない。¹³¹

Vasiljevic and Graham (2020, pp. 32–33) は、「肝(きも)」と「腹」のメトニミー関係を以て五臓思想の〈腹〉表現への影響を指摘しているが、内臓語と「腹」や「胸」は、精神作用との対応に関して完全な包含関係にないことが指摘されている (Goto, 2017; Ikegami, 2008; 後藤, 2016; 長谷川ほか, 2005)。たとえば次のように、「肝」「腸」と「腹」は部分的に重なる精神義を持ちながらも、「肝」「腸」とのみ結びつく精神作用もある。

(108) 〈胆力・度胸〉: {肝／腹} が大きい

〈覚悟〉: {肝／腹} を据える

〈怒り〉: {腹／腸} が煮える

〈考え・意図〉: {腹／腸} を探る

(後藤 (2016) より抜粋, 一部変更)

(109) 〈記憶〉: 肝に銘じる (*腹に銘じる)

〈驚き〉: 肝が潰れる (*腹が潰れる)

〈恐怖〉: 肝を冷やす (*腹を冷やす)

〈感銘〉: 腸にしみる (*(?) 腹にしみる)

〈悲しみ・辛さ〉: 肝が砕ける (*腹が砕ける) / 腸がちぎれる (*腹がちぎれる) ¹³²

(後藤 (2016) より抜粋, 一部変更)

「きも」は「胆」とも書き、「肝」の臓とそれに対応する「胆」の腑の漢字両方を充てた和語である。Yu (2003) が中国語の「胆」表現を観察することで、〈勇氣は胆嚢の中の気(気体の生命エネルギー)である〉、〈胆嚢は勇氣の容器である〉という概念メタファーを提案しているように (2.3.8節参照)、「きも」の〈胆力・度胸〉や〈驚き〉〈恐怖〉などの意味は、部分的に中国語の「胆」の影響を受け、さら

¹³¹ 唯一の例外が、〈心臓〉の意から身体義が消失した「こころ」である。「こころ」と「胸」の対比については、長谷川ほか (2005) や後藤 (2020) を参照されたい。

¹³² 「腸がちぎれる」は中国語の「断腸」に由来。本表現に関しては、「世説新語」の故事を基にしており、『日本国語大辞典 第二版』の「だん-ちょう..チャウ【断腸】」には、「中国、晋の武将、桓温が三峡を旅した時、従者が猿の子を捕えた。母猿は悲しんで岸を追うこと百余里、ついに船にとびうつることができたが、そのまま息絶えた。その腹をさいて見ると、腸がずたずたに断ち切れていた」とある。また、「腹がちぎれる」は〈笑い〉の意味で言えば「腹がちぎれるほどに笑う」と表現できるかと思われる。

にそれが部分的に「腹」へと継承されたと見ることもできる (e.g. 「腹が大きい」)¹³³。ただし、日本語の「きも」は〈肝／胆〉に限らず内臓の総称としての意味を持ち、「{肝／胸} が潰れる」「{肝／胸} を冷やす」など、「胸」との互換性を持つ場合も少なくない。

五臓六腑の精神作用と「腹」「胸」の精神義は厳密な対応関係になく、また、内臓に関する和語の精神義と「腹」「胸」の精神義の間にも一部相違が見られることを考慮すると、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉の理解全てが五臓思想に支配されているとは言い難い。したがって、本研究では〈腹〉表現と〈胸〉表現の分析において、始めから全て五臓思想に依拠した説明を試みることはしない。

3.3.4.2 丹田の鍛錬と腰肚文化

日本の伝統的心身観の礎として、もう一つ挙げられるのが下腹部（丹田）の鍛錬を重視する身体文化である。丹田とは、本来道教における用語であり、内丹術の基盤をなす概念のことを指す（片渕, 2023, p. 178）。辞書的には「臍より少し下のあたり」（『日本国語大辞典 第二版』「丹田」）を指すことから、「臍下（せいか）丹田」とも言われる。丹田は下腹部のおおよその位置を指し、解剖学的にそこに何か特別な器官が位置するわけではないが、古来よりその部位に気を集中させることで心身の健康・安定が得られると言われてきた（浅見・平井, 1994; 片渕, 2023, 第6章）。¹³⁴ 片渕 (2023, pp. 183–186) の指摘するように、丹田は呼吸法と結びつけた記述が歴史的にも多く、たとえば、貝原益軒による『養生訓』（1713）の中では次のような記述が見られる。

臍下（せいか）三寸を丹田（たんでん）と云（いう）。腎間（じんかん）の動気ここにあり。難経（なんけい）に「臍下腎間の動気は、人の生命也。十二経（けい）の根本也」といへり。是（これ）人身の命根（めいこん）のある所也。養気の術つねに腰を正しくすゑ、真気を丹田（たんでん）におさめあつめ、呼吸をしづめてあらくせず、事にあたつては、胸中より微気をしばしば口に吐き出して、胸中に気をあつめずして、丹田に気をあつむべし。如^レ此すれば気のぼらず、むねさはがずして身に力あり。貴人に対して物をいふにも、大事の変にのぞみいそがはしき時も、如^レ此すべし。もしやむ事を得ずして、人と是非を論ずとも、怒気にやぶられず、浮気（うわぎ）ならずしてあやまりなし。或〔は〕芸術をつとめ、武人の槍（やり）・太刀（たち）をつかひ、敵と戦ふにも皆此法を主とすべし。是（これ）事をつとめ、気を養ふに

¹³³ 「肝が大きい」と「腹が大きい」は、後者が〈度量・包容力〉の意味を併せ持つ点で異なる。

¹³⁴ 厳密には、道教における丹田は上丹田（眉間）・中丹田（胸）・下丹田（下腹）の三部位からなるが、齋藤 (2000, p. 147) によれば、日本ではインドや中国と比較して特に三つ目の下丹田（臍下丹田）が重視されるようになった。丹田とのみ表記される場合は、基本的にこの臍下丹田のことを指す。齋藤 (2000, p. 147) は、日本において臍下丹田が重要視されることになった経緯として、坐の文化の影響を指摘している。

益ある術なり。凡〔は〕技術（ぎじゆつ）を行なふ者、殊に武人は此法をしらずんばあるべからず。又―道士（どうし）の気を養ひ、比丘（びく）の坐禅するも、皆真気を臍下におさむる法なり。是―主静（しゆせい）の工夫（くふう）、術者の秘訣（ひけつ）なり。

（臍から下三寸を丹田といいます。左右の腎臓の動く気はここにあります。『難経』に「臍下腎間の動気は、人の生命也。十二経の根本也」と書かれてあります。ここが人のからだの命の根本がある場所です。気を養う術はつねに腰を正しくすえて、気を丹田におさめ集めて、呼吸を鎮めて荒くせず、事にあたっては、胸の中から微かに気を何度も吐き出して、胸の中に気を集めないようにして、丹田に気を集めます。このようにすれば、気がのぼらず、胸がさわがず、からだにちからが生じます。貴人にたいして物をいうときにも、大事変にのぞんで落ちつかないときにも、このようにするのがよいのです。もし、やむを得ず、人とぜひを論じるときも、怒気のために傷つけられず、軽率にならずに間違いをしません。あるいは、武芸や武術につとめ、武士が槍や刀を使って敵と戦うときにも、みなこの法を主とするべきです。これは、事をつとめ、気を養うのに有益な術です。およそ、技術を行なおうとする者、とくに武士はこの法を知らなくてはなりません。また、道士が気を養い、修行僧が坐禅をするのも、みな気を臍の下におさめる法です。これは人の静なる工夫であり、術者の秘訣です。）

（『養生訓』巻第二総論下〔日本語訳は蓮村（編訳）（2014）による〕）

上の引用は、丹田に生命の根源が存在することの指摘から始まっている。気を養うにあたり、丹田に気を集中すること、腰を据えること、呼吸の作法が重要であるという。呼吸を通じて丹田に気を集めることで、その気が体内の他の場所に移らず、身体に力が得られ、さらに精神的な安定が保たれる。そして、これらは武芸・武術・武士の身のこなしや道士の気の鍛錬、修行僧の坐禅においても求められる作法であると述べられている。このように、丹田思想はかつての日本の様々な社会・文化的営みにおいて必要とされたものであった。

こうした身体文化を、近現代にも続く通俗化・民衆化した文化として再解釈したであろう研究が齋藤（2000）である。¹³⁵ 齋藤（2000, p. 4）は、日本文化では腰・腹の感覚が特に重視されてきたことを論じ、それを「腰肚文化」と呼称する。¹³⁶ 齋藤（2000）によれば、日本では古来より適切な姿勢を習得することで心身の安定を得ることができると信じられてきた。適切な姿勢とは、身体感覚の中心が臍下丹田

¹³⁵ 齋藤（2000, p. 147）では古来の丹田思想に関する言及は一部見られるものの、腰肚文化の歴史的成り立ちについての確証的な説明はない。ここで「再解釈したであろう」と述べたのはその理由による。

¹³⁶ 齋藤（2000）やデュルクハイム（1954/2003）では、「腹」の代わりに「肚」という文字も併用されている。この文字も「腹」と同じく〈人や動物の腹部〉および〈内心・心のうち〉という意味を持つ（『全訳漢辞海 第四版』）。

に置かれた状態のことである。このような腰・腹を軸とする姿勢は、外交官として戦後の日本に滞在したドイツの哲学者デュルクハイムによって次のように描写されている。¹³⁷

私は大勢の人が集まったパーティのことを覚えている。(…) そのとき、日ごろの私の関心事を知っている一人の日本人が私のところへ来て、言った。「いいですか、ここに居合わす西洋人は、もし後ろから押されるとすぐに転ぶ姿勢をしています。日本人の中には、押してもバランスを崩す人はいないでしょう」と。この安定性は どうしたら生まれるのだろうか。重心は上に向かって移らずに、中心に、臍のあたりに保たれている。すなわち、腹を引っ込めず自由に、軽く張って押し出す。肩の部分は張らずに力を緩めるが、上体はしっかりとしておく。ゆえに、直立の姿勢は上に引っぱられた姿の結果ではなく、信頼すべき基盤のうえに立ち、自分自身を垂直に保ち、枝分かれする前の幹の姿なのである。人が太っていようと痩せていようと、関係はない。

姿勢よく、どっしりと、そして落ち着いて、これが、その意味を正しく受け取っている日本人にとって特徴的で、かつ全体として肚の存在を表現する姿勢の三原則である。

(デュルクハイム, 1954/2003, p.44 [下線は筆者による])

こうした身体感覚は、各人に先天的に備わったものではなく文化の中で後天的に習得される技術である。齋藤 (2000) は次のように述べる。

ここで重要なのは、「身体感覚の技化」ということである。身体感覚は、通常は何かの刺激に対して反応する一回性のものだと考えられがちである。しかし、身体感覚も文化的なものであり、習慣によって形成されるものである。腰や肚に関する感覚はその典型であり、生活の中で何度も訓練され、身につけられた一つの技である。

(齋藤, 2000, p.6)

この腰と肚の構えは、まず純粋に身体技術的なものである。身体技術的であるという意味は、具体的なやり方があり、練習によって身につけられるものだということである。

(齋藤, 2000, pp.144-145)

本研究にとって最も重要なのは、「腰肚文化」が単なる身体作法ではなく、精神領域に及ぶものであ

¹³⁷ 齋藤 (2000, pp. 34-62) はここで取り上げられる「立ち」の姿勢のみならず、「歩く」「座る」といった日常の行為の中にも腰肚文化が根付いていることを指摘している。このうち、臍下丹田に重心を置いた座り方は禅の坐法に大きく影響を受けたものであると述べている。

ったという点である。心身一如の思想が根付いた日本文化のもとでは、この「腰腹の鍛錬」とはすなわち、身体と心の総合的な成熟を目標としたものであった。齋藤 (2000) は次のように述べる。

腰や肚ができていくかどうかは、たんに身体を中心感覚だけではなく、心の揺るがなさをも含んでいる。当時の人々にとっては、心とからだは切り離すことのできないものであった。へっぴり腰でありながらも、揺るがないしっかりとした心をもっているというようには考えられなかった。

(齋藤, 2000, p.5)

齋藤 (2000) は、こうした伝統的な腰肚の身体感覚が現代日本人から失われつつあることに警告を発しているが、後の〈腹〉表現でみるように、その文化的身体観は今なおも言語に反映されている。

以降、本稿では齋藤 (2000) による「腰肚文化」を、その前身であると考えられる「丹田思想」と同義的に用い、原則として後者の用語を優先する。また、丹田の考えが中国の道家から来ているように、その源流を辿っていくとそれは五臓思想と同じ源流にたどり着くことは確かであるが、本稿では特に下丹田（臍下丹田）に意識を向ける身体観を「丹田思想」と呼び、東洋医学的な五臓思想と区別する。

138

3.3.4.3 近代西洋医学と頭

3.3.4.1 節で見た通り、伝統的な東洋医学（漢方医学）では、精神作用は心臓（心）を中心とした五臓の働きと体内を循環する気血水のバランスによって説明されていた。東洋医学においては、精神作用を含む人間の生命活動の中核は頭部ではなく、胸部や腹部に位置する五臓に置かれていたのである。東洋医学は少なくとも中国との交流が盛んになった 6-7 世紀ごろに日本に伝えられ（三浦, 1996, p. 6）、古くから日本の知識人らはそれを学び、のちに一般人へも広がっていった（宮地, 1979, pp. 87-90）。戦国時代の医学書『針間書』（1568 年頃）において現れる「体内に棲む虫」は五臓思想を支えとしているが、日本において独自に発達した見方であることが長野 (2007, pp. 84-85) によって指摘されているように（注 149 も参照されたい）、五臓思想はすでに中世までに広まり、その概念に手を加えるまでに至っていたようである。

一方、3.3.4.1 節で述べた通り、東洋医学において脳は五臓六腑のいずれにも属さない奇恒の腑であり、精神作用の中核とはみなされていなかった。事実、香山 (2010, p. 243) によれば、日本最古の医学

¹³⁸ 道家と医家では心身観が微妙に異なる。その比較は石田 (1987, pp. 71-84) を参照。例えば、医家で心・腎について重視される脾は道家では地位が低く見られるという。また、医家と比べ、道家では五臓よりも気そのものを重視する。

書である『医心方』（984 年刊）でも、脳は頭蓋や頭蓋内の物質として触れられているに過ぎないという。¹³⁹ しかし、近世（特に 18 世紀半ば以降）に西洋医学（蘭方医学）が伝えられたことで、日本人は初めて頭（脳）の働きを知ることになる（酒井, 1997, 2004; 長谷川ほか, 2012, 第 9 章; 宮地, 1979, pp. 90–96）。伝統的な東洋医学に対し、近代西洋解剖学は頭について次のように明言する。

(110) 夫頭者。円居_二一身之上_一。意識府也

（頭は円形で、全身の上にある精神作用の中心となる場所である）

（解体新書 1774 卷之二第六 [現代語訳は酒井（訳）（1998, p. 85）による]）

(111) 頭之所_レ蔵者。脳及意識也

（頭之所蔵（しょぞう）するものは、脳（のう）と意識である）

（解体新書 1774 卷之二第六 [現代語訳は酒井（訳）（1998, p. 87）による]）

これにより、日本史上初めて頭（脳）の働きが理解された（酒井, 1997, pp. 449–450; 2004, pp. 88–90）。なお、酒井 (2004, p. 89) によれば、(110) は原文では「内外の知覚 (zinnen) が働く場所である」とあり、厳密には意識に関する記述ではない。未知の事柄について書かれた文章を翻訳するために杉田玄白らは苦心し、結果的に仏教用語としての「意識」を充てたという。誤訳だったかもしれないが、ここで初めて従来とは異なる見方が導入された。その後、宇田川玄真による『医範提綱』（1805 年刊）の中で、脳の働きの説明に「精神」という用語が用いられた（酒井, 2004, p. 91; 長谷川ほか, 2012, p. 362）。

酒井 (1997, p. 453; 2004, p. 87), 長谷川ほか (2012, 第 10 章), 宮地 (1979, p. 93) によれば、実際に西洋医学が一般へと普及するまでにはもう少し時間を要したようである。酒井 (1997) は次のように述べる。

西洋医学の導入によって、人々は伝統医学が軽視してきた「脳」を、伝統医学の「心」に変わって一身の宗として重視し、脳と神経を中心にした身体観を形成した。しかし、これはあくまで蘭学者の身体観であり、漢方医はいうにおよばず庶民すべてがこの見方を受け入れたのでは

¹³⁹ ただし、脳と精神の関係の記述が東洋医学において皆無であったかという点、そうではないようである。解剖学的知識の高まった江戸中期、西洋医学とそれによって覆されつつある従来の東洋医学を折衷しようとする動きが生じた。青木 (2012, p. 157) によれば、近江の医師であった三谷公器は、解剖学による知識を五臓六腑説に付会した『解剖発蒙』（1813）において、脳を精神の座とする西洋医学的認識は、一部の古医書にある説明と合致すると説明し、『春秋元命包』の「人精在脳」や『脈要精微論』（『素問』）の「頭者精明之府」を引いて脳には精神の精（陽の霊気、神経液）が宿ると説いたという。

さらに、脚注 134 でも言及したように、道教では丹田を上丹田・中丹田・下丹田に分け、それぞれを頭部・胸部・腹部に位置付けている。上丹田は泥丸（「ニルヴァーナ（涅槃）」の音訳と言われる）とも呼ばれ、眉間奥の脳に位置するが、道教では根源的な三種の気である「神」「氣」「精」のうち、「神」は上丹田に宿るとされていた（石田, 1987, p. 83）。また、東洋医学とは異なり、生命の知的な側面に関することは全て上部（頭部と腕）に属し、生理的機能の主たるものは中部（胸）・下部（腹と脚）におかれるという、東洋医学とは部分的に異なった見方もあったようである（マスペロ, 1978）。ただし、このような上丹田の概念が日本でどの程度周知されていたかは現時点で不明である。事実、3.3.4.2 節で引用した『養生訓』でも、「丹田」と読んで下丹田のことを指している。

ない。脳中心の身体観が常識になるのは、明治維新後、西洋医学の知識が普及した後のことである。
(酒井, 1997, p. 453)

こうして日本人は、西洋医学の流入を経て、腹・胸（五臓）中心の心身観から頭（脳）中心の心身観への移行を経た。それにも関わらず、現代日本語は〈頭〉に関する語の精神義のみならず、〈腹〉〈胸〉に関する語の精神義を豊かに残している。これらの精神義はどのような基盤のもとで成立しているのだろうか。次項では、本章での具体的な調査手順を説明する。

3.3.5 調査対象語とデータ収集法、および分類基準

身体部位詞を研究対象とする際、第一に考えなければならないのは観察対象とする語彙である。たとえば、『分類語彙表 増補改訂版』では、〈頭〉に関する語として「頭部」「頭（あたま）」「頭（かしら）」「かぶり（頭）」「こうべ」「頭（ず）」「ヘッド」「おつむ」「つむり」「頭蓋」の10項目を載せている。これらは全て〈頭〉に関する語であるが、身体部位詞としての指示範囲や身体義以外の意味の差、単純語と合成語、位相差・文体差、和語・漢語・その他外来語の区別など、様々な観点で異なる。表9は、〈頭〉に〈腹〉〈胸〉を加え、『分類語彙表 増補改訂版』に記載の語を集計したものである。()内では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の長単位検索・短単位検索結果の頻度を示した。

表9『分類語彙表 増補改訂版』に記載の〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における頻度（左が短単位、右が長単位）¹⁴⁰

〈腹〉	腹部 (701/471), 腹 (5682/5180), おなか (4003/3651), ぽんぽん (1/1) ¹⁴¹ , 太鼓腹 (0/17), 布袋腹 (1/1), しわ腹 (3/3)
〈胸〉	胸部 (419/123), 胸 (9637/9265), 胸郭 (75/45), 胸中 (220/206), 胸腔 (92/14), はと胸 (7/7)
〈頭〉	頭部 (817/657), 頭（あたま）(23423/21824), 頭（かしら）(111/36), かぶり（頭）(295/257), こうべ (10/10), 頭（ず）(0/0), ヘッド (1438/394), おつむ (53/45), つむり (0/0 (「おつむり」0/2)), 頭蓋 (475/70)

上の語のうち、従来の身体部位詞研究がもっぱら取り上げてきた語は、「はら」「むね」「あたま」で

¹⁴⁰ 「胸」は「むな」とも読むが、これは「むね」が転じたものである。『分類語彙表 増補改訂版』は読みによって「胸」を分けていないが、『日本国語大辞典 第二版』では「むね【胸】」と「むな【胸】」の両見出しを設けている。ただしその説明にあるように、「むな」の独立での使用は稀で、通常は「胸（むな）騒ぎ」などのように別の語と熟して用いられる。

また、表9に記載のものを含め、〈頭〉を指す語については音韻交替、接頭語の追加などによる変化形が多い。たとえば、「おつむ」は「おつむり」の略であり、「おつむり」は「つむり」に接頭語「お（御）」がついたものである。また、「つむり」は「つぶり」の変化したものである。表にはふくまれていないが、「かぶり」が音韻交替した結果、「かむり（冠）」ともいう（ただし、『日本国語大辞典 第二版』では「かぶり」に関して「かぶり【被・冠】」（「かぶる」の連用形の名詞化）と「かぶり【頭】」の見出しを分けており、後者と「かむり」の関係は確実ではない）。

¹⁴¹ 〈腹〉を指す名詞のみの用例数。〈丸い飾り玉〉としての「ポンポン」は除いた。

ある。各々の部位を指す語のうち、これら三語は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』中で最も頻度の高い語となっている。また、その意味も幅広く、多くの慣用表現に入ることできざまな精神作用を表す。一方、その数は限られるものの、他の語についても精神義を持つ場合がある（e.g. 「頭（かしら）」）。本章では、表 9 にある身体部位詞のうち、何らかの精神作用に関する慣用表現を構成する語については、原則全て調査対象とした。合成語についても取り上げるが、熟字漢語については本章での調査対象には含めない。ただし、これらの漢語については現代日本語への歴史的な影響を考慮して次章で取り上げることとする。

従来の身体部位詞研究では、表現収集の手段として辞書が利用される場合、主に『広辞苑』『大辞林』などの中型辞書や慣用句辞典、『からだことば辞典』が用いられている（e.g. 楠見, 1996; 楠見・米田, 2007; 庄司, 2010; 田中, 2003）。また、近現代（明治～）の小説中の用例や Web 上の用例が引かれることも多い（e.g. 有蘭, 2007, 2009; ケキゼ・田中, 2004; 田中, 2003; 馬場, 2012）。後者の場合、その多くは辞書にも記載された表現であるが、中には日常でよく耳にするにも関わらず、辞書見出しとして登録されていないものも存在する（有蘭, 2021, p. 27）。本研究では、日本語としては最多の項目を収録する大型辞書『日本国語大辞典 第二版』（以下、『日国』とする）を主なデータソースとし、必要に応じて以下の辞書や慣用句辞典から表現を補った。また、辞書項目としては得られないが、日常的によく見聞きする表現については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』や Web での検索を行い、用例の確認が取れたものを挙げることにする。

『からだことば辞典』『感情表現辞典』『新選国語辞典 第八版』『大辞林 第四版』『日本語大辞典 第二版』

ただし、『日国』はその性質上すでに現代日本語では用いられない古語を多数収録している。本章では『日国』に限り、近代以降（1868-）の用例が記載された表現を抜粋して観察する。これが可能なのは、『日国』が最も古いと思われる用例から現代での用例に至るまで、各時代の文献から得られた用例を幅広く収録し、かつ各用例の出典を明記するという特徴を持った辞書であるためである。『広辞苑』や『大辞林』のような中型辞書も古語にあたる表現を多く収録していることは確かであるが、『日国』のように挙げられている用例を古語かどうかの判断基準として用いることは難しい。したがって、『日国』以外の辞書から得られた表現については、挙げられている用例が近世以前のものに限る場合は現代語表現として取り上げない（ただし、明らかに現代でも使うような表現については、コーパスや Web 検索で使用を確認した上で取り上げる場合がある）。

表現の収集手順として、各辞書の（子 [小]）見出しから表 9 のいずれかの語を含み、何らかの精神

作用に関する意味を持つ表現を抽出した。『日国』については JapanKnowledge Lib のデータベース版を用い、部分一致あるいは前方一致検索・後方一致検索機能を用いて、各身体部位詞の見出しとは別に登録された項目も抽出した。それによって得られたのは、主に複合語（合成語）である（e.g. 「太っ腹」）。構成要素の一部に当該の身体部位詞を含み、かつ精神作用に関する慣用的意味を持つが、本研究の対象である〈精神作用の座としての身体部位〉の理解の考察とは直接結びつかないようなことわざ類に関しては観察対象から省いた（e.g. 「へびは百足（むかで）の足知らず百足は蛇の腹知らず」（蛇も百足もそれぞれ相手の隠れた部分を知らないことから）人の心の中を知ることが困難だということとえ『日国』）。

表現の観察にあたっては、当該表現の意味を〈 〉内で簡潔に示した。左に文字通り（に解釈を試みた場合）の意味、右に慣用的意味（精神義）を配置し、矢印で結んだ。各表現が表す精神作用の表示は原則『日国』の語釈に基づいたが、特に〈胸〉の感情表現についてはその用途が広く、ある表現が表す感情を排他的・包括的に列挙することはいずれも難しい。というのも、語釈に「期待」「不安」などの具体的な感情名を含むものがある一方で、「悲しみなどの感情」と特定を避けた語釈も数多く存在するからである。今回、『日国』に記載された用例中の意味やコーパス検索で得られた用例中の意味をもとに、中心的と考えられるものを当てはめた。併せて、佐竹(1984)を中心とする2.2.3節で取り上げた先行研究の分類も参考にしたが、先行研究の間でも大きな差異があり、特定の分類に従ったものでもないことを断っておきたい。〈悲しみ・辛さ・不安〉など、一つの表現に共通して結びつきやすい精神義は分類上まとめたが、各表現の観察においては実際の精神義に応じ、〈悲しみ・辛さ〉などと減じて表記していく。精神作用の分類と表現例をまとめたものを p. 145 の表 10 に示す。

各表現の表記には、以下の基準を適用する。これに従うと、たとえば『日国』の「おなかの皮（かわ）を＝振（よじ）る [= 縊（よ）る]」の見出しは「おなかの皮を振る [縊る]」と示される。

- 辞書見出しに置き換え可能な要素が示されている場合、[] 内で並記する。
- 使用漢字については原則見出しに従う。漢字の訓みについては、特殊なものわかりにくいものは（ ）内に残し、それ以外は全て省略する。
- 送り仮名についても各出典に従う。ただし、『日国』では（複合）語として登録された見出しでは送り仮名が省略されているため（e.g. 「むな-づもり【胸積】」）、現代で一般的と考えられるものを充てる（e.g. 「胸積もり」）。
- 「はら（ばら／ばら）」「むね」「あたま」と読むものは全て「腹」「胸」「頭」と漢字表記し、「かしら」などのそれ以外の読みは全てかな表記とする。

表 10 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用と表現例（現代日本語）

精神作用	〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
〈可笑しさ〉	腹を振る		
〈不満〉	腹ふくる		
〈満足〉	腹一杯		
〈恨み〉	腹に持つ		
〈嫌悪・怒り〉	腹が立つ	胸糞が悪い	頭に来る
〈悲しみ・辛さ・不安〉		胸が塞がる	
〈苦悶・恋慕〉		胸を焦がす	
〈恐怖〉		胸を冷やす	
〈喜び・期待〉		胸が躍る	
〈驚き〉		胸が潰れる	
〈感銘〉		胸に応える	
〈感動〉		胸が熱くなる	
〈感情の高ぶり〉		胸が一杯になる	頭に血が上る
〈感情の抑制〉		胸を摩る	
〈感情の解消〉		胸が取まる	
〈興奮の抑制〉			頭を冷やす
〈機嫌〉	腹具合		
〈内心・本心〉	腹に納める	胸に秘める	
〈考え・意図〉	腹を探る	胸に一物	頭に浮かぶ
〈理解・納得〉	腹に落ちる	胸に落ちる	
〈信念・覚悟・決心〉	腹を括る		
〈記憶〉		胸に刻む	頭に入れる
〈思考〉		胸に聞く	頭を使う
〈思考（苦悶）〉			頭を砕く
〈思考力〉			頭が切れる
〈思考方法〉			頭が固い
〈度量・包容力〉	腹が大きい	胸が狭い	
〈人格〉	腹が黒い		

次節からは、p. 130 の表 5 で定めた分類基準（次頁に再掲）に従い、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を「感覚・運動レベル (L1)」「スキーマレベル I (L2)」「スキーマレベル II～概念レベル (L3)」に三分類し、各表現を比喩的な成り立ちと動機づけの観点から分析していく。観察は L1 から開始し、その後順に L2, L3 と順に進める。L3 に関しては、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の概念化として〈容器〉と〈具象物〉という共通の区分を認め、それらを分けて観察する。

各表現の分類に際しては、3.3.3 節で取り上げた身体部位詞表現の比喩の二重性に注目し、① 身体部位の描写に関わる比喩、② 身体部位と精神作用を結びつける比喩という二つの観点から判断する。② の観点においては、何らかの身体経験との時間的隣接性に動機づけられている（メトニミー基盤を持つ）と考えられる表現は L1 あるいは L2 に分類する。また、① の基準に基づき L1 にはメトニミー表現を、L2 にはメタファー表現を分類する。② の基準により、時間的隣接性による動機づけが明確でなく、類似性によって動機づけられていると判断されるものは L3 に分類する。ただし、時間的隣接性による

動機づけが認められる場合であっても、その部位に固有の身体経験として認め難いもの（たとえば、「胸を焦がす」などの体温変化に基づく一部表現）については、それとは別に〈腹〉〈胸〉〈頭〉を結ぶ概念上の前提認識が背後にあるとみなし、L3 の事例として扱う。慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語については、慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の観察を終えたのちにまとめて取り上げる。

表5 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用表現の分類

	表象レベル	身体部位詞表現の分類	表4との対応	(17)での慣用表現の分類との対応	例
L3	スキーマレベルⅡ～概念レベル	身体部位詞とその他の要素が意味拡張した慣用的連結句・合成語		慣用的連結句（名詞のみが意味拡張した慣用的連結句・名詞と動詞（あるいは形容詞）が意味拡張した慣用的連結句）・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	腹が出来る 頭が弱い
		身体部位詞のみが意味拡張した慣用的連結句・合成語			頭がいい 胸算用 腹を合わせる
		メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	⑥	慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語	腹の底を打ち割る 胸の霧 頭の回転が速い
		メタファーによる慣用句・合成語	④		腹が大きい 胸が狭い 頭でっかち
L2	スキーマレベルⅠ	メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	③		腹を切る 胸騒ぎ 頭を砕く
L1	感覚・運動レベル	メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	②		頭が上がらない 頭が高い
		メトニミーによる慣用句・合成語	①		腹を抱える 胸が高鳴る 頭が痛い

3.4 現代日本語の〈腹〉表現

本節では、現代日本語の〈腹〉表現の精神義を階層モデルに基づいて分析することで、精神作用の座としての〈腹〉の文化モデルが、どのような身体基盤・文化基盤と比喻を通じて成立しているのかを明らかにする。以下は分析結果の要点を先立ってまとめたものである。

- 感覚・運動レベル (L1) とスキーマレベルⅠ (L2) に該当する表現は比較的少なく、〈可笑しさ〉や〈怒り〉に関するメトニミー表現・時間的隣接性に基づくメタファー表現のみが当てはまる。
- スキーマレベルⅡ～概念レベル (L3) では、〈腹〉の概念化として〈容器〉と〈具象物〉の類型があ

り、後者は〈心身の安定を司る腹〉という〈腹〉の文化モデルを特徴付ける。前者の場合〈内容物〉の種類とその動き・状態（内から外への移動・外から内への移動・常在）に応じて〈特定の精神作用を納める腹〉〈物事を受け容れる腹〉〈人格を納める腹〉という下位区分をすることができる。中でも〈特定の精神作用を納める腹〉は〈精神を隠す腹〉という文化モデルを特徴づけている。

- 〈腹〉で観察される身体経験は、共起性基盤としての腹筋の痛み・腹のむかつき・体温変化に加え、摂食活動を通じて得られる〈容器〉としての経験など、比較的限られている。
- 〈具象物〉としての〈腹〉の理解には、丹田思想（腰肚文化）（McVeigh, 1996; 片渕, 2023; 齋藤, 2000; デュルクハイム, 1954/2003）が特に影響しており、それが〈具象物としての腹〉と〈精神の安定性〉を結びつける主要因となる。
- 〈容器〉としての〈腹〉の理解は、精神を表に出さないという文化的価値観 (Matsuki, 1995) に、消化器官を内蔵する〈腹〉の身体的特徴（田中, 2003）が結合することで、他人との対立を生む精神作用を「隠す」部位としての特徴を生じさせている。

3.4.1 感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語，メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語

慣用句の観察にあたっては、表現の文字通りの意味とその慣用的意味に基づいて類似表現をまとめ、左に〈文字通り（に解釈した場合）の意味〉を、右に〈慣用的意味〉を示し、矢印「→」で結ぶ。¹⁴² はじめに扱うのは、文字通りの意味が生理的感覚や反応を表し、それが時間的隣接性によるメトニミーを通じて感情に関する意味を表すようになった慣用句・合成語である。〈腹〉の場合、身体描写自体にメトニミーが関与する表現（メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語）は得られなかった。ここで扱う表現は全て、文字通りの意味が表すしぐさ・感覚が精神作用へとメトニミーによって転じた「メトニミーによる慣用句・合成語」である。

(112) 〈腹が痛い〉→〈可笑しい〉

片腹痛い／片腹痛さ

¹⁴² 身体部位詞を用いた慣用句の中には、「腹が立つ」と「腹を立てる」のように、自動詞表現・他動詞表現の両形式が存在するが、他動詞表現が再帰的な性質を持ち両者の意味がほとんど変わらないものがある。そのような表現については、〈 〉内での意味表示は自他で区別することなく、自動詞形で統一する（ただし、「腹が据わる」に対する「腹を据える」のように、他動詞表現に少なからずの意図性が伴う場合についてはその限りではない）。なお、このような身体部位詞表現の特徴に関しては脚注 165 でも触れる。また、動詞表現や形容詞表現が名詞化したもの（e.g. 「片腹痛し」から「片腹痛さ」）については、〈 〉内での意味表示は動詞表現・形容詞表現の意味で代表させる。

(113) 〈腹を抱える〉→〈可笑しがる〉

横っ腹を抱える

(112) は、大笑いの際に腹筋運動の活性化が誘発する感覚に基づいた表現である（同様の意味を表す「腹が痛い」という表現は『日国』では近世の用例のみ）。また、(113) は (112) のような痛みを知覚した結果、腹部に意識を向けて手を当てるという動作に基づいて成立した表現である。これらは具体性を持つ文字通りの意味が慣用的意味への転義に直接関係している。

『日国』によれば、「片腹痛い」は「かたわらいたし（傍痛）」に由来するが、「傍」が「片腹」として解釈されることで生じた。もともと「傍痛し」は発音・表記ともに「かたはらいたし」であり、音の一致から「片腹痛し」として意識されたという。さらに「傍痛し」には〈そばで見聞きして見苦しい・みつともない〉という意味があるが、『古語大辞典』によれば、この意に含まれる〈気の毒・笑うべし〉の滑稽感が強くなることで語源感が「片腹」へと転じたという。「片腹痛し」は「傍痛し」が再分析されることで成立した表現であるものの、その再分析が〈笑い〉と〈腹〉の感覚の関係性に動機づけられていることから、ここでの表現に含めている。

また、辞書項目としては存在しないが、腹部の生理感覚と関連すると思われる表現として以下のような例が見つかる。田中 (2003, pp. 119–120), 馬場 (2001, pp. 200–203) でも指摘されているように、今では心理的な意味（腹立たしさ）を指して頻繁に用いられる「ムカつく」も、(115) のような生理感覚に由来する表現である。「胃がムカつく（*腸がムカつく）」あるいは「胸がムカつく」というように、「ムカつき」は主に胃（から上）の感覚に由来するものであろう。

(114) 龍吉は、誰か村を出て行く、ときくと、その度に腹がムカ／＼してきた。

(BCCWJ: PB29_00378, 35290)

(115) せっかくの金曜だつてのに若干腹がムカムカしており、なんか悪いもの食ったつけ。朝のベースブレッドと社食としか食ってないんだけども。

(<https://senkutsu.hatenablog.com/entry/2022/03/18/194315>)

3.4.2 スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語

次に扱うのは、身体部位の感覚・運動が喩えを通じて描写された表現である。ここで扱う表現はメタファー表現であるが、精神作用との結びつきは感覚・運動レベルの表現と同様に時間的隣接性によって成立している。〈腹〉の場合、〈笑い〉と結びつく痛みがメタファー化した表現が該当する。

(116) 〈腹が振れる〉→〈可笑しがる〉

おなかの皮を振る [繕る] / 腹の皮が振れる [繕れる] / 腹の皮 [筋] を繕る [振る] / 腹を
繕る [振る]

(117) 〈腹を切る〉→〈可笑しがる〉

腹を切る

ここでは腹筋の痛みが捻れ(「振る・繕る」)や、切ること(「切る」)によって表現されており、いずれも〈可笑しくて大笑いする様子〉を表している。「振る・繕る」については「おなか」や「はら」に「皮」が後続する場合とそうでない場合があるが、後者については腹を抱えて笑う際に身体を振る(曲げる)様子を描写しているとも考えられるだろう。その解釈を採用する場合、「はらを=繕(よ)る [=振(よじ)る]」はしぐさの表現として(113)と同じメトニミーによる慣用句に分類される。

3.4.3 スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語，メタファー
×メタファーによる慣用句・合成語

3.4.3.1 〈容器としての腹〉と〈具象物としての腹〉

今回の調査で時間的隣接性に基づく〈腹〉表現として得られたのは、(112)(113)や(116)(117)に挙げた〈可笑しさ〉の表現や、(114)に挙げた〈怒り〉の表現のみであった。次に扱うのは、〈腹〉と精神作用の結びつきが何らかの類似性によって動機づけられたメタファー表現である。類似性に基づくメタファー表現では領域間の構造的対応が重要であり、のちに示すように、多くの場合起点領域・目標領域間の存在的対応・認識的対応(2.3.2.1節を参照)を有している。ここではまず、スキーマ・レベルⅡ～概念レベルの〈腹〉の理解を支えるイメージスキーマ，メタファーとして、一般性が高く重要なものを見直しておく。¹⁴³一つは〈容器〉スキーマ，もう一つは存在のメタファーである。

第一に、これまでも繰り返し言及してきた〈容器〉スキーマは、〈腹〉表現にも遍在している。〈容器〉スキーマが〈腹〉に適用されることで、〈内容物〉としての精神作用(e.g. 〈感情〉〈考え〉)が〈腹〉という特定の身体部位に納められることになる(e.g. 「この企みは腹に納めておこう」)。〈容器としての腹〉の理解が存在することを裏付ける表現としては、以下のようなものがある。¹⁴⁴

(118) おなかの中／腹の内／腹の底／腹の中

¹⁴³ ここでの存在のメタファー・〈容器〉スキーマの整理に関して小葉哲哉先生にご助言いただいた。

¹⁴⁴ (118)はいずれも〈容器〉の内部を指す表現であるが、実際の使用においては〈容器〉と〈内容物〉の空間的隣接性に基づくメトニミーが働くことで、〈内容物〉としての精神作用(〈本心〉)を表すことになる。

(119) 腹に一物／腹に納める／腹を割る

しかし、〈腹〉が常に〈容器〉として描写されるわけではなく、非容器的な〈腹〉の理解に基づく表現も存在している。

(120) 腹が立つ／腹を固める

本研究では非容器的な〈腹〉の理解を〈具象物〉と呼ぶが、〈具象物〉としての〈腹〉の理解にとって重要なのが2.3.2.1節でみた存在のメタファーである。存在のメタファーは抽象物を物理的な存在物に喩える汎用性の高いメタファーであり (Lakoff & Johnson, 1980/2003, Ch. 4), 物理的な状態変化・動き・性質・働きかけを通じた物事の理解が可能となる。無論, 身体は本来に物理的な存在であり, 一見するとメタファーを介した議論は必要ないように思われるが, ここであえて存在のメタファーを持ち出すのは, 〈腹〉が身体部位としての存在にとどまらず, 別の物理的存在物 (擬人化を含む) としての概念化を受ける場合があるためである。上で見た「腹が立つ」「腹を固める」などの表現が文字通りの意味として表すのは, 普通は身体部位としての〈腹〉には生じない事象であり, 文字通りの意味が何を表すか直ぐに解釈し難い。¹⁴⁵ なお, このような身体部位としての性質からの逸脱を可能とする存在のメタファーは, 一つ前のレベルの「メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語」でも適用される場合がある。たとえば, (116) で取り上げた「腹の皮が振れる」は, 〈腹〉を曲がりくねるほどにねじれる物体とみなす喩えが働いていると分析することができよう。

Lakoff and Johnson (1980/2003, Ch. 4) において〈容器〉のメタファーが存在のメタファーの一種として論じられていたように, 〈容器〉としての〈腹〉の理解も存在のメタファーに基づいている。たとえば, (119) の「腹を割る」という表現において〈腹〉は〈本心〉を納める〈容器〉として機能しているが, 〈内容物〉としての〈本心〉は〈容器〉を物理的に割ることで初めて外に表れ出る。これは〈腹〉と〈本心〉がどちらも物理的存在として認識されているからこそ実現する表現である。一方, 存在のメタファーが働きながらも〈容器〉スキーマが関与しない場合, 〈具象物〉としての〈腹〉そのものに生じる状態変化・動き・性質・働きかけに目が向けられる。

ここで扱う全ての表現に存在のメタファーが働いているかといえは, 必ずしもそうではない。「腹に納める」や「腹を括る」のような表現は, 〈(食べ物を) 腹に入れる〉〈腹を (紐などで) 括る〉のように, 身体部位に生じうる事象を表すことが可能である。これらは〈内心・本心を隠す〉や〈覚悟・決心する〉という慣用的意味として用いられる限りメタファー表現であるが, 状況によっては文字通り

¹⁴⁵ あえて言うならば, 「腹を固める」は〈腹筋を固める〉という意味では言えるかもしれない。

の意味が成立するという点で「腹を割る」や「腹を固める」とは異なる。これらを表としてまとめると、次のように四分類される。

表 11 存在のメタファー×〈容器〉スキーマ

	容器	非容器
存在のメタファーの関与あり	① 腹を割る	② 腹を固める
存在のメタファーの関与不明	③ 腹に納める	④ 腹を括る

本研究での分類にあてはめると、「腹に納める」「腹を括る」のような表現に存在のメタファーの関与を想定しない場合、「メタファーによる慣用句・合成語」にあたり、「腹を割る」「腹を固める」のような種の表現は「メタファー×メタファーによる慣用句・合成語」にあたる。存在のメタファーの介入の有無を判断し、①②と③④を弁別的に論じることが可能であるが、①③は内容物の収容・開示、②④は不動性・安定性を問題としており、意味的な関連性を有している。本研究ではこのような意味的な関連性を重視し、分析に有意味な場合を除いて両者を区別することはしない。

後にみるように、〈容器〉スキーマや存在のメタファーの適用は、〈腹〉に限らず〈胸〉や〈頭〉に関しても同様に認められる。さらに言えば、これらのメタファーは〈身体（部位）〉と〈精神〉の関係に限らず、様々な抽象物の比喩的理解に汎用的に用いられており (Johnson, 1987, Ch. 2; Lakoff & Johnson, 1980/2003, Ch. 4)、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体経験のみがその発生を動機付けているわけではない。しかし、〈容器〉スキーマに関していえば、飲食物の摂取・排出や呼吸など、人間の身体そのものが本質的に容器の一種として機能している (Johnson, 1987, p. 21)。その点において、〈容器〉スキーマが身体に対して（特に摂食活動・呼吸と密接に関係する〈腹〉と〈胸〉に対して）適用されるのはある意味当然の成り行きである。

3.4.3.2 〈容器としての腹〉

〈容器〉スキーマに基づくメタファーでは、〈容器〉と〈内容物〉の関係が〈腹〉と〈精神作用〉の関係に対応づけられる。有蘭 (2009) は、〈身体（部位）を、情緒的精神活動の容器として捉える〉という概念メタファーを分析するなかで、起点領域としての〈容器〉と目標領域である〈身体（部位）〉の間に成立する存在的対応（概念要素の対応）と認識的対応（概念要素に関する知識の対応）を次のようにまとめている。¹⁴⁶

¹⁴⁶ 有蘭 (2009) は ontological correspondence を「存在論的対応」と呼んでいるので (121) ではそのまま引用した。

(121) 存在論的対応

起点領域：	目標領域：
容器	身体（部位）
内容物	感情
内容物の量	感情の程度
容器の容量	感情の限界
内容物による圧力	身体（部位）における内的圧力
外部からの圧力	身体（部位）における外的圧力
容器の破損	自己制御力の欠如

（有蘭, 2009, pp.199–200）

(122) 認識的対応

- a. 起点領域：容器に内容物を収容することによって、それを他者に見えないようにすることができる
目標領域：感情を身体（部位）に収容することによって、それを他者に知られないようにすることができる
- b. 起点領域：容器には深さがあり、収容した内容物が容器の底に近いほど、他者の目に触れにくい
目標領域：身体（部位）には深さがあり、収容した内容物が容器の底に近いほど、他者の目に触れにくい
- c. 起点領域：容器には容量があり、内容物の量はその容量を超えると収容不可能になり、容器が詰まったり、内容物が容器から溢れてしまったりする
目標領域：身体（部位）には感情を収容できる限界があり、感情の程度がその限界を超えると収容不可能になり、身体（部位）が詰まったり、感情が溢れてしまったりする
- d. 起点領域：容器内の内容物が増えすぎると、その内的圧力により、自己制御力が欠如する
目標領域：身体（部位）内の感情が大きくなりすぎると、その内的圧力により、自己制御力が欠如する
- e. 起点領域：容器に強い外的圧力が加えられると、容器は破損する
目標領域：外的要因により感情が著しく大きくなると、自己制御力が欠如する

（有蘭, 2009, p.200）

有蘭 (2009) の示す (121) の対応関係では目標領域に〈身体 (部位)〉が位置しており、〈身体〉と〈感情〉という二つの領域が混在しているが、厳密にはこの対応は〈心〉の在り処が〈身体 (部位)〉であるというもう一つの比喩的な認識 (〈心としての身体〉のメタファー (The Mind-as-Body metaphor) (Sweetser, 1990, p. 28)) を前提としているはずである。したがって、本項で観察する表現は、〈心は精神作用を納める容器である〉と〈心は腹である〉という二重のメタファーによって動機付けられている。各要素の厳密な対応関係を示すと (123) のようになる。

(123) 〈容器〉→〈腹〉→〈心〉

〈内容物〉→〈精神作用〉

また、有蘭 (2009) によってまとめられた (121)(122) は〈感情〉に関する概念メタファーの存在的関係・認識的対応関係を詳述したものであるが、精神作用全般の〈腹〉表現に広く適用できると考えられる。有蘭 (2009) は、本研究の考察対象に関する概念メタファーの存在論的対応・認識的対応として、(121)(122) のほか、〈身体 (部位) を、知的精神活動の容器として捉える〉というメタファーに対する対応 (3. 6. 3. 2 節 (270)(271))、〈感情の高揚を、固体の燃焼を通して捉える〉というメタファーに関する対応 (3. 5. 3. 3 節 (242)(243) で言及) などを定式化している。以後、本研究では、それらを引用しながら〈腹〉〈胸〉〈頭〉という部位毎の対応に改め、さらに精神作用毎の差別化を図るために必要に応じて細分化を図る。

以下、(121)(122) をもとに必要に応じて新たな存在的関係・認識的対応関係を追加しながら〈腹〉表現を観察していきたい。まずは〈腹〉に何らかの〈感情〉が納められていることを表す一連の表現を見てみよう。

(124) 〈腹に内容物を留める〉→〈恨みを抱く〉

腹に持つ

(125) 〈腹が内容物で満ちている〉→〈思う存分 (満足に)〉

腹一杯

(126) 〈腹の内容物が増え、腹が膨張する〉→〈不満が増長する〉

おもう事言わねば腹ふくる

(127) 〈腹に内容物を留めておけない〉→〈怒りを制御できない〉

腹に据えかねる

(125) の「腹一杯」は〈容器〉が〈内容物〉で一杯であることを表し、(126) の「腹ふくる」はさらに

そのせいで〈容器〉が膨張してしまうことを表している。¹⁴⁷ 肯定的感情である〈満足〉ではなく、〈不満〉がこのような〈容器〉への影響を与えると解釈される点が興味深い。これは、〈不満〉に「表出が躊躇われる感情であり、内部に留めるべきである」という認識が備わっているからである。同じ認識は、〈怒り〉に関する(127)「腹に据えかねる」の表現からも窺える。

また、特定の感情ではないものの〈機嫌〉を表す表現として(128)がある。これは、〈容器〉の形状を観察することで、その中の様子を推し量ることに基づくと考えられ、上で見た「腹ふくる」との関係が窺える。

(128) 〈腹の形〉→〈心中の様子(機嫌)〉

腹形(はらなり)

〈腹〉に宿る〈怒り〉は、その激しさと制御の困難さが、業火・沸騰する液体・暴れる虫の描写を通じて表現される場合もある。

(129) 〈腹の内容物が{煮える／燃える}〉→〈怒る〉

業腹(ごうはら)がる／腹が煮える[煮え立つ]

(130) 〈腹の中の虫(が暴れ、制御できない)〉→〈怒り(を制御できない)〉

腹の虫[中の虫]／腹の虫が治まらない[承知しない]

このうち、(129)では〈熱〉の概念が新たに適用されており、〈怒りの程度〉との存在的対応関係を結んでいる。3.2.2.2節で言及したように、Matsuki (1995)は Kövecses や Lakoff の論じた〈怒り〉のメタファーを日本語に当てはめることで、日本語の〈怒り〉メタファーは英語と共通する部分を持つ反面、〈腹〉という部位に結びつく点が特徴的であると述べている。Kövecses と Lakoff によると、〈怒りは熱である〉(ANGER IS HEAT)のメタファーが流動体に適用されると〈怒りは容器内の流動体の熱である〉(ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER)というメタファーが、固体に適用されると〈怒りは火である〉(ANGER IS FIRE)というメタファーが成立する(Kövecses, 1986, p. 13; 1990, p. 52; Lakoff 1987, p. 383; Lakoff & Kövecses, 1987, p.197)。液体に関する「煮える」を用いた「腹が煮える」は前者の例として、「業火(ごうか)が腹の中で燃える」(『日国』)という意味を持つ「業腹がる」は後者の例とみなすことができよう。¹⁴⁸ 「腹が煮える」では「煮える」が「腹」を主語に取っているが、これは〈内容物〉

¹⁴⁷ 「腹一杯」の表現については、文字通りの〈腹が満たされた状態〉から〈満足〉の意味が生じたとも考えられ、その場合身体経験に由来する表現として分析できる。さらにいえば、摂食活動による生理的充足感から様々な事柄に対する〈満足〉の意味へ拡張していることから、シネクドキーの関与が考えられる。

¹⁴⁸ 「業腹がる」は『日国』の語釈に基づいて「業火」として解釈したが、「業が煮える」「業が沸く」という表現があ

と〈容器〉の隣接性に基づくメトニミーが働いたものであると考えられる。

有蘭 (2009) による(121)(122) は一般性の高いレベルで設定された存在的対応・認識的対応であるが、本稿では〈腹は感情を納める容器である〉の概念メタファーに絞り、存在的対応関係・認識的対応関係を次のようにまとめる。

(131) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	腹（心）
内容物（液体／火／虫）	感情（怒り／不満／恨み／満足）
内容物の量／熱／活動力	感情の程度
容器の容量	感情の限度
容器の形状	感情の具合（機嫌）

(132) 認識的対応

- a. 起点領域：容器に内容物を収容しておくことによって、それを他者に見えないようにすることができる
- 目標領域：感情を腹（心）に収容しておくことによって、それを他者に知られないようにすることができる
- b. 起点領域：容器には容量があるが、内容物の量がその容量に達したとしても、容器を膨張させてまでなおも収容することができる場合がある
- 目標領域：腹（心）には感情を収容できる限界があるが、感情の程度がその限界に達したとしても、我慢をして自己の内に止めることができる場合がある

(130) の「腹の虫」については、五臓思想に基づく特殊な成り立ちゆえに詳細な説明を加えておかねばならない。この表現は、〈怒り〉のみならず〈空腹感〉の意味を持つが、これは食欲や感情という主体の意志による制御が困難な経験を、自由意志を備えた別の存在（虫）のしわざとする理解を前提としている。長野 (2007) や長谷川ほか (2012) の論じるように、このような見方は、かつての日本において心身の変調が体内に棲む虫によって引き起こされると信じられていたことに由来する。昔は人の体内に回虫類が寄生することも珍しくはなかったが、腹の虫は回虫に等しいわけではなく、現実に

るように、「業」の要素が〈火〉とは限らない。なお、有蘭 (2009, pp. 221, 228) は Kövecses や Lakoff らの研究に基づき、〈感情の高揚を、容器内の流動体の熱を通して捉える〉と〈感情の高揚を、固体の燃焼を通して捉える〉という日本語のメタファーを設定している。

はその多くが想像によって作り出された概念であった（ただし過去の日本人にとっては、体内に棲む虫は単に観念的なものではなく、あくまで実在する生物として信じられていた）。こうした〈虫〉概念の形成の支えとなったのが古来の東洋医学における五臓思想であり、虫が心身を総括する五臓に巣くうことで、その営みを攪乱すると捉えられていたのである。¹⁴⁹ 〈虫〉の概念は、身体に留まらず五臓思想における心身一如の考えを通じて精神にまで及び、日本人は自らの精神状態を度々腹の中に棲む虫に帰することで理解していた。そして、〈怒り〉を〈虫〉として客体化したことが、ある意味日本語における〈怒り〉の表現方法として適していたとも考えられる。「腹の虫が承知しない」という表現から〈怒り〉を他人事として扱う態度が窺えるように、〈怒り〉を自分ではなく己の中に棲む虫の仕業として表現することで、伝える（表出する）ことが躊躇われる本音としての〈怒り〉(Matsuki, 1995) を間接的に報告することができていたのである。¹⁵⁰

さて、〈腹〉に納められる精神作用は〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉などの感情に限らない。以下は〈内心・本心〉と広く定義される、あるいは〈考え・意図〉と限定して定義される精神作用である。¹⁵¹

(133) 〈腹に内容物 {がある／を留める}〉→ 〈内心・本心・考え・意図 {がある／を明かさない}〉

腹に一物／腹に納める

(134) 〈腹の中を {探る／探られる}〉→ 〈相手の考え・意図を知ろうとする／相手から考え・意図を探られる〉

いたくない腹を探られる／ない腹を探られる／腹決り／腹を探る

¹⁴⁹ 実際、鍼灸の治療法を扱った戦国時代の医学書『針間書』（1568年頃）では、体内に棲む六十三種の虫がその姿を描いた挿絵ともに記載されており、そのうちの多くが五臓に寄生すると説明されている（長野, 2007）。なお、このような虫観は五臓思想を支えているが、日本において独自に発達した見方であることが指摘されている。長谷川ほか（2012, pp. 308-311）や長野（2007, p. 84）によると、体内に巣くう虫として中国から「三尸の虫」（道教由来）が日本に伝えられ、それにまつわる風習が平安時代の記録にも残されているが、三尸の虫はどちらかといえば鬼神や魂霊的な性質を持つ存在であった。それが時代を経て、元々観念上の存在であった虫が、いつの間にか本当に体内に棲む虫として人々に解釈され、様々な病気の要因と結び付けられるようになったという。長谷川ほか（2012, 第7章・第8章）は、虫を病因とするみなす考えは、医学の歴史としても重要な役割を果たしたことを論じている。平安時代に代表されるように、かつての日本では病因は「もののけ」の憑依による霊因が有力で、その治療は宗教者の加持祈禱に頼っていた。その後、病因が霊から虫へと移行することで、宗教や呪術から独立した医学の自律性が高まり、病は投薬等による具体的な駆虫によって解消することができるようになった。すなわち、霊因から虫因への移行によって、病は不可思議なものから現実世界で合理的に対処できるものへと変容を遂げたのである。

¹⁵⁰ 「腹の虫が承知しない」に関し、長谷川ほか（2012, p.186）でも同様の主旨の言及がなされている。

怒りの感情を起こす「腹の虫」は、その掴みがたいものを、主体意識と対立する意思体として人格化したものと言えるだろう。「腹の虫」を想定することによって、「自分は承知しても、腹の虫が承知しない」というように、主体意識と「腹の虫」とを分離し、動揺や当惑からいくらかでも主体意識を防護するという対処が、可能となる。「腹の虫」は、心身を攪乱するいたずらものであると同時に、適応機能をも発揮するという両義的な性格を持っている。

¹⁵¹ 有菌（2007）は、情緒的精神・知的精神のうち〈腹〉には特に情緒的精神（のうち、負の感情）が結びつくとしている。確かに〈腹〉には情緒的な要素を一切排除した知的精神が結びつくとは言い難いかもしれないが、〈怒り〉などの感情と、ここで示す「腹に一物」のような表現が表す精神作用はある程度区別可能である。

(135) 〈腹の中を見る〉→〈相手の考え・意図を知る〉

腹を見抜く／腹読み／腹を読む¹⁵²

(136) 〈腹を割る〉→〈内心・本心・考え・意図を知らせる〉

腹の底を打ち割る／腹を割る

〈容器〉メタファーに基づく〈腹〉表現が焦点化するのには、他人に明かしたくない精神作用を隠すという行為であり、その本質となる部分は (126) で見たような抑圧された〈怒り〉(や (127) のような〈不満〉) を述べる表現と (133)–(136) との間で共通している。ただし、〈怒り〉という感情は、主体の意図とは関係なくあるいはそれに反して増長し (e.g. 「腹が煮える」), 制御を突破し (e.g. 「腹の虫が治まらない」), 外に出ようとする性質を有するものとして認識されているのに対し (e.g. 「腹に据えかねる」), (133)–(136) の表現が表す精神作用からはそのような性質は窺えない。何もなければそのまま内に留まり外に出ることはないが、利害関係上の理由から他者が外から〈腹〉を探ったり、抉ったりすることでその中身の〈考え・意図〉が暴かれるのである。¹⁵³ また、(136) の表現も〈考え・意図〉の表出を表すが、これは共謀などのために主体が他人に〈考え・意図〉を知られることに意義を見出すことで、主体自らの意思によってなされる表出である。¹⁵⁴ 〈怒り〉の感情と〈考え・意図〉のこうした違いは、メタファーにおいて焦点化される〈容器〉〈内容物〉の側面にも差を生じさせている。2. 3. 5 節でも触れたように、山梨 (2000, pp.143–146; 2012, pp. 27–30) は、イメージスキーマによる意味拡張においては、言語主体の視点も重要になることを論じている。ここで Johnson (1987, p. 22) の挙げた〈容器〉スキーマの性質 (論理的含意) を再掲する。

(137) i. The experience of containment typically involves protection from, or resistance to, external forces.

(包含の経験には概して外の力からの防護、ないしそれにたいする抵抗が伴う。)

ii. Containment also limits and restricts forces within the container.

(包含はまた容器の内部に力を制限し限定する。)

¹⁵² 「読む」という語は本来〈文字〉に対して用いられるため、この表現については、〈容器〉と〈内容物〉の関係が、〈記録物〉と〈文字〉の関係に転じている。また、「読む」のは本来「文字」であるが、「本を読む」ということができるように、〈文字〉から〈記録物〉へのメトニミー転移を考える必要があるだろう。

¹⁵³ 「いたくない腹を探られる」という表現はその成り立ちからして注目に値するだろう。この表現は〈人からあらぬ疑いをかけられて詮索される〉ことを表すが、「腹を探る」に「いたくない」という感覚形容詞がつくことで、他人が実際に〈腹〉に触れ、探り回されるという身体感覚的イメージが鮮明化している。「腹を探る」は〈腹を診察する〉という意味も持つが、これはかつて内臓の病気の発見のために腹部の触診が行われていたことに由来する。

¹⁵⁴ これが現実の行為として顕在化したものが切腹文化である。現在、腹切りの本質は、腹中の潔白を証明することで自らの名誉を挽回・維持して天命を全うする儀式であったという解釈が主流となっている (e.g. 千葉, 1994, 第 3 章; 新渡戸, 1899/2005, 第 10 章)。

iii. Because of this restraint of forces, the contained object gets a relative fixity of location.

(力がこのように制限されるために、包含された対象がその位置を相対的に固定される。)

iv. This relative fixing of location within the container means that the contained object becomes either accessible or inaccessible to the view of some observer.

(容器内で位置を相対的に固定されるということは、包含された対象が観察者に見えるようになったり、見えなくなったりすることを意味する。)

v. Finally, we experience transitivity of containment. If B is *in* A, then whatever is *in* B is also *in* A.

(最後に、包含の推移性が経験される。もし B が A の中にあれば、B の中にあるものはやはり A の中にある。)

(=(63))

山梨 (2000, 2012) の論考をここでの議論に当てはめると、「おもう事言わねば腹ふくる」「腹に据えかねる」のような感情表現では、主に〈容器〉スキーマの ii と iii に関する性質が用いられている。ii と iii の性質は、〈容器〉と〈内容物〉の関係を捉えるための〈力〉に関するスキーマと統合することで (〈バランス〉スキーマ, 〈コントロール〉スキーマ (楠見, 1996, p. 45; 楠見・米田, 2007, pp. 65–66)), 〈容器〉と〈内容物〉のバランスの喪失、それに伴う制御が描写される。また、そのような〈腹〉での制御を動機づけるのは、〈容器〉の「外からの内容物の視認を妨げる」という iv の性質である (cf. 閉鎖性・不透明性 (ケキゼ・田中, 2004, pp. 71–72))。一方で、(133)–(136) に挙げたような表現からは、〈容器〉と〈内容物〉の〈力〉の相反は伺えない。これらの表現では、〈容器〉の「外からの内容物の視認を妨げる」という iv の性質に焦点が絞られていると考えられる。

有蘭 (2009) による (121)(122) の感情に関する存在的対応・認識的対応を参考に、〈内心・本心〉〈考え・意図〉について新たに次のような対応を追加する。これらの対応では、感情に対して適用した (131)(132) とは異なり、〈力〉の要素やその対立関係が含まれていないことに注目されたい。

(138) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	腹 (心)
内容物	内心・本心・考え・意図

(139) 認識的対応

- a. 起点領域：容器に内容物を収容しておくことによって、それを他者から見えないようにすることができる
- 目標領域：内心・本心・考え・意図を腹（心）に収容しておくことによって、それを他者に知られないようにすることができる
- b. 起点領域：所有者以外の他人が容器の中を探ることで、収容された内容物はその人に見える状態になる
- 目標領域：主体以外の他人が腹（心）を詮索することで、考え・意図はその人に知られた状態になる
- c. 起点領域：所有者自らが意図的に容器を破壊することで、内容物を外に晒して他人に見せることができる
- 目標領域：主体自らが意図的に内心・本心・考え・意図を他人に知らせることができる

しかしながら、(133) の「腹に納める」のような表現は「腹に据えかねる」のような〈力〉の相反こそ表さないが、〈隠す〉という意味を通じて〈怒り〉に対しても用いられることがある。

(140) 弟子である好の助の襲名問題について、怒りを腹に納めそれを笑いに変えた師匠好楽のすごさを認識するとともに、根岸の横暴についてとんでもない話と改めて認識したところです。

<https://bookmeter.com/books/18910502>

(133)や(136)に挙げた表現に対して〈考え・意図〉のほかに〈内心・本心〉をつけた理由は、これらの表現が常に〈考え・意図〉のことを表すわけではないためである。「内心」や「本心」は、ある精神作用に対する態度に基づいた名付けであり、情緒的精神と知的精神に次ぐ第三の精神でもなければ、情緒的精神あるいは知的精神のいずれに従属するものでもない。したがって、〈怒り〉のように情緒的な〈内心・本心〉もあれば、〈考え・意図〉のような知的精神寄りの〈内心・本心〉もあるということである。そして〈内心・本心〉という性質の精神作用こそが、〈腹〉に宿る情緒的精神と知的精神をつなぐ役割を果たしている。知的精神寄りの〈内心・本心〉を表す「腹の中」の用例 (141) をみてみよう。

(141) 知盛は水軍を率いて一行の御守護の役につき得意であった。雅子も夫と共に随行した。このとき、後白河は清盛の手厚い奉仕を機嫌良く受けるふりをしながら、腹の中ではあれこれ目論んでいたのである。〈清盛めは蔓延り過ぎた。刈り取らねばなるまい。何かいい手立てを考えよう〉（BCCWJ: PB52_00091, 15710）

(141) の「腹の中」では、主体（後白河）にとって考えを隠すという行為は、将来的に相手（清盛）を失脚させると同時に自らを有利な方向に導くという目的によって動機付けられている。この場合の〈内心・本心〉とは、いわゆる「目論見」や「企て」と呼ばれるものであり、一見すると、〈腹〉と結びつく情緒的精神である〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉とは何ら接点が無いようにも思われる。しかし、〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉の隠蔽を動機付ける要因へと目を向けることで、両者の間に一つの共通性が浮かび上がる。すなわち、〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉とは〈驚き〉〈恐怖〉〈悲しみ〉などの感情とは異なり、主に対人関係の中で生じ、他者へと向けられる感情であり、そこには常に自分以外の人間との衝突が伏在している。換言すれば、〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉とは主体がそれを明かすことで周りとの円満な関係性を脅かし、究極的には主体の社会的立場が揺らぐ危険性を孕む感情である。この意味において、〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉を内に留めておくという行為は、社会的な不利益を回避するための一種の防衛手段として位置付けられるだろう。従って、〈腹〉に納められる〈内心・本心〉とは、単に企みの実現のような私利の獲得のみならず、それを伝えることで己の社会的立場が揺さぶられるのを防ぐという不利益の回避を見据えたものでもあり、両者は社会的かつ主体志向型の性質を共有している。ここでの主体志向型の性質とは、田中 (2003) の述べる「自己保存的な欲求を司る腹」の特徴とも整合するものであろう。〈内心・本心〉に関する表現はのちの〈胸〉でも多く見られるが、このような特徴は少なくとも現代日本語においては〈腹〉に宿る〈内心・本心〉で顕著であり、反対に言えばこの特徴を有する一部の感情（〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉）と〈考え・意図〉こそが〈腹〉と結びつけられるにふさわしい精神作用なのである。〈内心・本心〉としての〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉や〈考え・意図〉をつなぐのが、(137)-iv で示した〈容器〉の不透明性なのであろう。

さて、〈腹〉には特定の精神作用ではなく、人の〈性格〉も写し出される。

(142) 〈腹の内容物が {汚い／黒い}〉 → 〈性格が悪い〉

腹が汚い／腹が黒い／腹黒い／腹黒さ

〈内心・本心・考え・意図〉の表現において、〈容器〉の「外からの内容物の視覚認識を妨げる」という不透明性の性質が利用されていると上で述べたが、「腹が黒い」でも視覚的な特徴が用いられている。¹⁵⁵ これに関連して、鍋島 (2003b, p. 14; 2011, p. 285) は次の表現を挙げることで、価値的類似性・評価性に基づいた〈善は白・悪は黒〉という概念メタファーの存在を指摘している。

¹⁵⁵ なお、「腹が白い」という表現は現代語では成立しないものの、過去には「腹黒」の対義語として「腹白」が用いられていたようである（『日国』）。「汚い」に関しても、評価性の含意から説明が可能である。

「腹が黒い」の「黒い」も、不透明性を表すのみならず〈善は白・悪は黒〉のメタファーを通じて〈悪〉の評価と結びついていると考えられる。ただし、「黒い」とみなされているのはおそらく言語化された「腹」ではなくその〈内容物〉であり、〈容器〉と〈内容物〉の空間的隣接性に基づくメトニミーが働いている (Matsuki, 1995, p. 143; 有蘭, 2009, p. 303)。

なお, 3. 2. 2. 6 節で言及したように, 有蘭 (2009) は (142) のような〈容器〉と〈内容物〉の関係に基づく表現を, 身体部位詞が単独で何らかの精神作用の意味を担うとして慣用的連結句に分類している。本研究では (17) の慣用句・慣用的連結句の再解釈に基づき, 句全体としての文字通りのイメージ (たとえばお腹の中身が黒いというイメージ) が慣用的意味の実現に貢献しているとみなされる事例については, 慣用句に分類し, 文字通りの意味との関係から分析を加えていく。

次に, 〈性格〉に関連して〈度量・包容力〉を表す表現を見てみよう。

(144) 〈腹が {大きい／太い／小さい}〉→〈度量・包容力が {ある／ない}〉¹⁵⁶

腹が大きい／腹が小さい／腹が太い／腹太 (はらぶと) ／太っ腹／太腹 (ふとばら)

これらの表現の成り立ちは, 外からの物事を受け容れるという〈容器としての腹〉の別の側面が利用されている。つまり, 〈容器〉が何かを収容するという点では共通しているが, この〈内容物〉にあたるものが〈怒り〉などの主体を発生源とする精神作用なのか, それとも外から与えられるもの (他人の言動) なのかで異なっている。〈怒り〉に関する表現が〈内容物〉の内から外への方向性を指向するとすれば, 後者は外から内への指向性を持つといえよう。この方向性がより明確であるのが次の〈理解・納得〉に関する表現である。

(145) 〈腹に内容物 {を入れる／が入る}〉→〈理解・納得する〉

腹に入 (い) る／腹に入れる／腹に落ちる

(144)(145) に基づき, 〈物事を受け入れる容器〉としての〈腹〉のメタファーの存在的対応, 認知的対応を次のようにまとめる。

¹⁵⁶ のちに挙げるようにこれらの表現には〈度胸・胆力〉という意味もあるが、『日国』では近代以降の明確な用例が挙げられておらず, かつその他の辞書も〈度量・包容力〉に関する語釈を基本としている。

(146) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	腹（心）
内容物	考え（他人の言動）
容量の容積	度量・包容力

(147) 認識的対応

起点領域：容器に内容物が入ることで、その内容物は留まり続ける

目標領域：（他人の）考えが腹（心）に入ること、主体が受け入れた考えとして定着する

(145) については、単に外から内へという方向性から特徴づけるだけでは不十分である。これらの表現は食物摂取という〈腹〉の身体機能に基づいて成り立っており、〈食物を体内に取り入れる〉という生理活動が〈物事を受け入れて自分のものにする〉という精神作用へと対応づけられている。この対応づけを促すのが、〈アイデアは食べ物である〉(IDEAS ARE FOOD) という概念メタファーである (Kövecses, 2002/2010, pp. 6–7; Lakoff & Johnson, 1980/2003, pp. 47–48; 有蘭, 2009, pp. 163–171)。食物摂取器官としての〈腹〉の特徴は、次のような表現にも表れている。本表現は精神状態（〈機嫌〉）を生理的状态（特に〈空腹感〉）に喩えたメタファーである。¹⁵⁷

(148) 〈腹の状態〉→〈機嫌〉

腹具合

最後に、身体全体から見た〈腹〉の位置に基づいた表現を挙げておく。

(149) 〈腹から〉→〈心底〉

腹から

「腹から」は「腹」に起点を表す助詞「から」がついたもので、全体で〈心底から、本心から〉という意味を表す。『日国』では、この用例として「腹から残念に思った」（赤西蠣太 1917 〈志賀直哉〉）を挙げている。¹⁵⁸ 〈腹〉は（〈腹〉〈胸〉〈頭〉の中でいえば）最下層に位置しており、精神的にも〈心

¹⁵⁷ Shinohara and Matsunaka (2003) の分析に基づき、ここでの〈腹の生理的状态〉が心因に基づいて変動するという経験に基づいていると分析するのであれば、これはメトニミー基盤のメタファーとして解釈できよう。

¹⁵⁸ 同音で〈同母の兄弟姉妹〉のことを表す「同胞（はらから）」という語もあるが、『日国』では見出しが分けられており、「はら」は腹、「から」は「うから（族）」「やから（輩）」「ともがら」などの「から」と同じく、血族・一族を意味すると思われる。」との補注がある。この説明に基づくと、本文で挙げた「はらから」と「同胞（はらから）」では「から」の由来が異なることになる。

の深淵」に位置している。これには、有蘭 (2009) による (122) の認識的対応のうち、b に基づく推論「容器には深さがあり、収容した内容物が容器の底に近いほど、他者の目に触れにくい」が関わっていると考えられるが、さらに、〈内容物〉が他からの影響を受けない深淵に位置することで、純粹に自己に起因するありのままの精神であることを表している点が興味深い。このような意味は「胸」や「頭」を用いても出てこない (e.g. 「{?胸/?頭} から」)。

3.4.3.3 〈具象物としての腹〉

次に取り上げるのが、〈腹〉を〈具象物〉として捉え、主にその物理的安定性に注目することで精神の (不) 安定を表す慣用句・合成語である。ここでいう〈具象物〉とは、〈腹〉が〈身体 (部位)〉としての概念領域を逸脱して、〈容器〉以外の〈具象物〉 (〈物体〉や〈生物 (人)〉) としての概念化を受ける場合があることを意味する。この種のメタファーは、従来の認知言語学研究において〈容器〉メタファーの一種として扱われてきた。たとえば、有蘭 (2009) は以下に扱う一連の表現を〈身体 (部位) を、精神活動の容器として捉える〉のメタファーに含めている (3.2.2.6 節を参照)。本稿では、〈腹〉の安定性に関する丹田思想 (腰肚文化) に基づき、非容器的な〈腹〉の理解の独立した地位を認め、〈容器〉を介さない〈具象物としての腹〉のメタファーの存在を主張する。

〈腹〉の安定性と結びつく精神の安定性は、二種類に大分される。まずは〈腹の不安定〉を通じて〈怒り〉を理解する表現を見てみよう。

(150) 〈腹が立つ〉→〈怒る〉

腹が立つ／腹立つ／腹を立てる [立つ]

(151) 「腹が立つ」の関連表現

腹立たしい／腹立たしげ／腹立たしさ／腹立ち／腹立ちっばい

(152) 〈腹を安定させる〉→〈怒りを制御する〉

腹を据える (通例, 「腹を据えかねる」と打消の語句を伴って使用される)

(153) 〈腹 {を癒す／が癒える}〉→〈怒り {を晴らす／が収まる}〉

腹癒せ／腹が癒える／腹を癒す

(150)–(152) はいずれも安定性の喪失 (〈バランス〉スキーマ (楠見, 1996; 米田・楠見, 2007)) を前提としているが、(150) の「立つ」は特に垂直方向への位置変化が描かれている (〈垂直性〉スキーマ (楠見, 1996, p. 44; 米田・楠見, 2007, p. 65))。 (153) は現代語の「癒」の意味に基づいて〈治癒〉を意図した意味表示を行ったが、『日国』によれば、歴史的には「腹癒 (い) せ」は「腹を居させる」に由来する

と言われており（「腹が居る」などの関連表現は古語として次章で取り上げる）、そのように解釈すると〈立つ〉と〈居る〉が〈怒り〉と〈怒りの解消〉に規則的に対応づけられていることがわかる。

また、〈腹〉の安定性と結びつく別の精神の安定性として〈胆力・度胸〉が挙げられる。

(154) 〈腹が太い〉→〈胆力・度胸がある〉

腹が太い／腹太（はらぶと）／太腹（ふとばら）

この表現は先の (144) でも〈度量・包容力〉の意味として挙げたが、その場合、〈腹〉は〈物事を受け容れる容器〉として理解されていると考えられることを述べた。一方で〈胆力・度胸〉の場合、〈太さ〉は規模として解釈され、〈水平方向に大きい物体は物理的に安定する〉という推論を通じて安定性と結びついていると考えられる。

さらに、〈腹〉の安定性は〈覚悟・決心〉〈信念〉とも結びつく。

(155) 〈腹 {が安定する／を安定させる}〉→〈覚悟・決心する〉

腹が据わる／腹を据える／腹を括る

(156) 〈腹 {が固い／を固める}〉→〈信念が変わりにくい／覚悟・決心する〉

腹が堅い／腹を固める¹⁵⁹

先ほど、「腹癒（い）せ」は「腹を居させる」に由来するとも言われていることを述べた。「据わる」「据える」と「居る」は字義的には類似する行為を表すといえるが、両者が前提とする前後の状態は異なっている。すなわち、「居る」はあくまで「腹が立つ」ことで不安定になった精神状態が再び元に戻る段階を述べるのであるが、対する〈覚悟〉としての「据わる」「据える」は、将来の出来事に対する「構え」を述べる。前者は〈怒りの発生〉から〈怒りの鎮静〉までのシナリオの中で意味付けられ、後者は将来の事態によって精神の動揺が生じるまでのシナリオの中で意味付けられるのである。また、〈決心〉については〈覚悟〉と重なる部分があるものの、具体的な将来の方針としての〈意志〉を生む精神作用である点が異なる。ここでの安定の概念は、〈意志〉の不変性と結びつけられている。「腹が堅い」は『日国』の語釈に合わせて〈信念〉としたが、言動の基礎となる考え方のことであり、〈意志〉よりもより安定したものである。

ここで話を戻し、「腹が立つ」の成り立ちをめぐる議論について言及しておきたい。本表現についてはこれまでも様々な分析が与えられてきたが、大まかに分けて二つの立場が存在する。第一の立場

¹⁵⁹ ここでは「堅」と「固」が使い分けられているが、『日国』の「腹が堅い」の用例を見ると「固」の漢字が用いられている。

は、Matsuki (1995) から始まる分析の系統である。Matsuki (1995, pp. 144–145) は〈腹は怒りの容器である〉(HARA IS THE CONTAINER OF ANGER) という日本語メタファーの存在を提案した上で、「腹が立つ」もこのメタファーに基づいて分析を行っている。ただし、「立つ」のが〈内容物〉なのかそれとも〈容器〉なのかは曖昧であるとし、〈容器〉と〈内容物〉の隣接性に基づくメトニミーの存在を指摘しつつも、明確な結論を出さずに終えている。Nagai and Hiraga (2011, p. 159) は Matsuki (1995) の〈容器〉メタファーに基づく解釈を引き継ぎつつも、「煮え立つ」のような「立つ」の用法を引き合いに出し、〈流動体としての怒り〉が煮えて揺れ動き、〈腹〉の中の嵩が上昇することで〈怒り（や不満）〉といった不快な感情が経験されると論じている。¹⁶⁰ つまり、「立つ」は〈内容物としての怒りの上昇〉を表すという解釈である。同様に田中 (2003, pp. 120–121) も、「腹が居る」との対称性に基づき「腹が立つ」全体が〈腹の安定性の喪失〉を表すと論じている。この分析では「立つ」に〈垂直方向への移動（位置変化）〉の意味を想定しているが、それだけでなく、〈容器を立てることで中身の感情が動揺する〉といった〈容器〉のメタファーに基づく分析をも含んでいる。Nagai and Hiraga (2011) は、「立つ」は〈流動体としての怒りの上昇〉を表すとしたが、田中 (2003) は〈容器〉自体の移動がその中にある〈感情〉の状態変化を引き起こすと解釈している点が異なるであろう。また有蘭 (2009, pp. 205–206) は、田中 (2003) の分析を援用しながらも、「立つ」に垂直方向の移動（位置変化）の意味を与えることはせず、「立つ」に〈動きが起こる〉、「居る」に〈静止状態にある〉というスキーマ的意味を設定している。

第二の立場は、「立つ」を〈意識化される状態への変化〉と解釈する立場（馬場, 2002, pp. 37–38）である。馬場 (2002) は、「雲が立つ」「さざ波が立つ」のような自然現象において、「立つ」がその〈目に見えない状態から知覚される状態になること〉を表すことに注目し、この意味と自己の内的な〈意識化〉を結びつけている。馬場 (2002) は、〈腹〉を〈精神的研鑽を積んだ内的自己が宿る場所〉と特徴付けた上で、そこが何らかの事態への反発によって〈意識化された状態になる〉ことこそが〈怒る〉ことであると主張している。これらの諸説のうち、「立つ」を〈安定性の喪失〉と結びつけているのが（Matsuki (1995) の〈容器〉メタファーの分析の流れを汲んだ）Nagai and Hiraga (2011) や有蘭 (2009), 田中 (2003) であり、〈意識化〉と結びつけているのが馬場 (2002) である。

本稿では、上で観察した「立つ」以外の様々な安定性に関わる〈腹〉表現の存在を考慮し、第一の立場をとるが、この安定性の概念化については新たな視点からの考察が可能である。ここまで〈具象物としての腹〉の理解に基づく表現として観察してきた一連の表現の多くは、中身が言語化されはし

¹⁶⁰ “What boils in the belly should be a fluid, not a solid. Thus, the fluid boils and churns, and its surface levels rises.”（腹の中で煮えるのは流動体であり、固体ではない。このようにして、流動体が沸騰し、揺れ動くことで、その嵩が上昇するのである。）（Nagai and Hiraga, 2011, p. 159 [日本語訳および下線は筆者による]）のように、fluid が用いられているため、「流動体」と訳した。

ないものの、〈容器〉で〈内容物〉（あるいは〈容器〉で〈内容物と容器〉）を表す空間的隣接性に基づくメトニミーによって成立する表現として分析されてきた。¹⁶¹ この分析には、〈精神としての内容物〉ありきの〈腹〉の動揺という考えが大前提としてある。確かにこのように考えることで〈容器〉メタファーへの一元化を達成することができ、さらに上で〈具象物〉メタファーとして扱った表現と 3.4.3.2 節で挙げた〈容器〉メタファーに基づく表現との関連性を見出すこともできるだろう。ただし 3.3.4.2 節でも取り上げたように、日本文化では腰腹に身体を中心感覚が置かれ、この身体的安定は心身一如の考えをもとに精神的安定とともに捉えられてきた。安定性に関する〈腹〉表現をこのような心身観に照らし合わせると、〈腹の安定〉と〈精神の安定〉という結びつきの背後に次のような直接的結びつきを想定することもできるのではないだろうか。

(157) a. 〈身体の安定を通じて、心身の安定を捉える〉メトニミー

（あるいは〈身体の安定を通じて、精神の安定を捉える〉メタファー）

b. 〈腹が身体を表す〉メトニミー

つまり、〈身体の安定を通じて、心身の安定を捉える〉メトニミーを前提に、その安定性の中心部位を腰腹に置く文化の後押しを受けて、〈腹の安定〉－〈身体の安定〉－〈心身の安定〉というメトニミー連鎖が成立するというものである。現在では西洋の心身二元論的な考えの普及により、(157)-a の〈精神（心）〉と〈身体〉は分離して捉えられる（括弧内で示したように異領域間の対応としてメタファー的に捉えられる）ことが多いと考えられるが、伝統的な心身観のもとでは〈精神の不安定〉というのは文字通り〈身体不安定〉を伴うものとして人々に信じられ、実際にそう知覚されていた可能性が高い。だからこそ 3.3.4.2 節で概観したような具体的な身体技法が発達したのであろう。また、このように (157)-a の発生段階を重視するのであれば、本項で見た表現に場面依存的な時間的隣接関係のメトニミーが働いているとみなし、一つ下のスキーマレベル I に配置することもできるかもしれない。

また、腰肚文化が丹田への気の集中という発想に由来するであろうことを考慮するのであれば、〈腹〉の安定はそこに〈内容物としての気〉が集まることを意味する。その場合、ここで扱った表現も〈容器〉メタファーの一種とみなすことができるため、先行研究による〈容器〉の解釈を否定することはできない。ただし、ここでいう〈気〉の概念が〈腹の中の内容物としての感情〉と対応するわけではない点に注意されたい。〈気〉はあくまで心身の両領域にまたがる概念であり、その場合〈感情は気である〉というメタファーを想定する必要があるだろう。

¹⁶¹ このほかの先行研究（e.g. 松井, 2007）でも〈容器〉と〈内容物〉の隣接性に基づくメトニミーの指摘に関する記述が見られる。

以上の観察・考察をもとに、精神の安定を司る〈腹〉の理解を概念メタファーとして定式化すると、次の(158)のようにまとめられるだろう。

(158) 存在対応：

起点領域：	目標領域／起点領域：	目標領域：
具象物（物体・生物）	腹（身体）	心
具象物の安定性	腹（身体）の安定性	心の安定性

ここでは複数の比喩の関与を想定している。まず、(158)の二列目と三列目の対応は(157)-aを反映したものであり、〈精神の安定〉が〈身体の安定〉を通じてメタファー的に理解されていることを示している。繰り返しになるが、もとは〈心身の安定〉が〈身体の安定〉とメトニミー的に結びついていたであろう。また、(158)二列目の対応「腹（身体）」が示すように、〈身体の安定〉は〈腹の安定〉を通じて理解される。これは(157)-bのメトニミーに基づく。

一方、(158)の一行目と二列目の対応は、〈腹の安定〉が何に喩えられるかを示すものである。ここまで見てきた共起語を挙げると、主に〈生物〉に対して適用される「立つ」「癒える（居させる）」、主に〈物体〉に対して適用される「固める」「堅い」「括る」「据える」などがある。ただし、「立つ」「癒える（居させる）」は〈人〉に対して用いられる語であることから、擬人化ではなく〈腹〉と〈身体〉が〈部分〉－〈全体〉に基づくメトニミー関係をなしているとも分析できよう。また、腹帯・腹巻きなどで文字通り「腹を括る」状況を想定できるように、〈腹の（不）安定〉の描写は全てが存在のメタファーを介しているとは言い難い（3.4.3.1節を参照）。歴史的に見た場合、腹帯・腹巻きなどで「腹を括る」という行為は現実には心身の安定を目指して実践されていた慣習であり（齋藤, 2000, pp. 24-27）、その場合「腹を括る」という行為は身体に対する文字通りの行為であったと考えられる。それでもあえて存在のメタファーを介するものとみなして記述する場合、次のような対応を想定することができる。

(159) 認識対応：

- a. 起点領域：生物が立つことで、物理的に不安定な状態となる。反対に、生物が座ることで物理的な安定性は高まる
- 目標領域：腹の位置が上がることで、精神的に不安定となる（怒りが生じる）。腹の位置が下がることで、精神的な安定性が高まる（怒りが収まる）

b. 起点領域：物体を固定すると、物理的力が加わっても動きにくくなる

目標領域：腹が動かない状態にしておくと、将来の事態に対して精神的に動揺しにくくなる
／考えや意志が変わりにくくなる

c. 起点領域：物体が固まると、変形しにくくなる

目標領域：腹が変形しにくい状態になると、将来の事態に対して精神的に動揺しにくくなる
／考えや意志が変わりにくくなる

d. 起点領域：物体が太い（水平方向に広い）と、物理的力が加わっても動きにくくなる

目標領域：腹が太いと、将来の事態に対して精神的に動揺しにくくなる

(159) は〈生物〉あるいは〈物体〉としての〈具象物〉を起点領域に定めた対応関係である。目標領域の記述から明らかなように、この目標領域は〈腹の安定・不安定〉を通じた〈精神の安定・不安定〉のメタファー的理解も内包している。「腹を括る」のような表現に存在のメタファーの介入を認めない場合、目標領域に内包されたメタファーのみで心身の安定に関する〈腹〉のメタファーの説明が可能である。

最後に、「腹が立つ」は辞書見出しとしても多くの派生表現を収録しているため、下にまとめて示す。

(160) a. 薄腹（うすばら）が立つ／薄腹（うすばら）立つ／大腹立ち／小腹を立つ [立てる]

b. 腹立ち顔／腹立ち声

c. 腹立つ坊

d. 腹立ち紛れ／負腹立ち／負け腹を立てる [立つ] ／向っ腹（むかっばら）立ち／向腹（むかばら）立ち

(160)のうち、aは〈怒り〉の程度、bは〈怒り〉の表出方法、cは〈怒り〉を持つ主体、dは〈怒り〉の要因やその表出に関する情報が付加された表現である。ここで注目すべきは、(160)-aの表現において慣用句としての全体性が薄れる傾向が窺えるという点である。「薄腹」「大腹」「小腹」の「薄」「大」「小」は全て「腹」のみを形容していると考えられるにも関わらず、これらの語は全体としての慣用的意味のうち〈怒り〉の程度の意味部分に貢献している。¹⁶² その意味で、下で挙げる慣用的連結句への移行の中間段階と言えるかもしれない。

¹⁶² 「大腹立ち」については「大」が「腹立ち」全体を修飾しており、「腹立ち」が〈怒り〉と「大きい」が〈程度〉と対応すると分析することができよう。ただし、「薄腹が立つ」や「小腹が立つ」など「腹」の後に助詞を挟んだ表現では、「薄」「小」という造語要素が句全体を修飾すると分析するのは難しい。

3.4.3.4 慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語

最後に慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語を見ていく。本項で示すのは、句や合成語の身体部位詞（とその他の構成要素）が、各々の意味拡張を経たと考えられる表現である。まずは、「腹」が単独で〈腹立ち〉（〈怒り〉）を表す表現を見てみよう。これらは(160)でみた「腹立ち」の派生表現から「立つ」が脱落したものである。

(161) 「腹」が単独で〈腹立ち〉（〈怒り〉）を表す例

聞腹（ききばら）／きけば聞腹／中っ腹／向っ腹／向腹／むしゃくしゃ腹／むちゃくちゃばら腹／自棄っ腹（やけっぱら）／自棄腹・焼腹（やけばら）／自棄腹紛・焼腹紛（やけばらまぎれ）／焼餅腹（やきもちばら）

(162)は「腹」が単独で〈心中〉を表す表現である。「積もり」はそれが単独で〈見積もり〉を表し、この語は「腹」を離れてもその意味を表すこともできる（e.g.「明日は出かけるつ（積）もりだ」）。

(162) 「腹」が単独で〈心中〉（心中での／心中の）を表す表現

腹組み¹⁶³／腹積もり／腹に決める

最後に、「腹」が単独で〈考え・意図〉に関する表現として(163)を挙げる。

(163) 「腹」が単独で〈考え・意図〉を表す例

腹が無い／腹が決まる／腹が出来る／腹を合わす〔合わせる〕／腹を決める

(17)の定義で述べた通り、本研究では慣用的連結句を「意味拡張が構成語ごとに（独立して）生じたもの」と考えているが、慣用句との境界線は必ずしも明確ではない。一部の語の置き換え可能性によって判断する場合、慣用句として取り上げた「腹を固める」「腹が堅い」のような表現は慣用的連結句としての分析も可能となる。つまり、これらを「意志を固める」「信念が堅い」とパラフレーズし、「腹」から〈意志〉〈信念〉へ、「固める」「堅い」から〈確かな・変わりにくい（ものにする）〉へ意味拡張が独立に生じたと考えることで、〈腹を固めることで安定性が確保される〉という句全体の字義的意味から得られるメタファー的イメージを想定せずとも、済んでしまうであろう。実際のところ、有蘭(2009, p.304)では「腹を固める」の表現を慣用的連結句として扱っている。しかしながら、ここま

¹⁶³ 「組」の解釈が難しいが、もし〈腹〉の中の内容物がまとめられて一つの組織（＝組）になるというイメージから〈考え・意図〉の意味が発生しているのであれば、句全体としてのイメージが保たれて慣用的意味と結びつくという点で慣用句とみなすことができる。

で観察してきたように、「固める」と結びつく〈安定〉の概念は「腹を据える」「腹を括る」をはじめとするその他の慣用句が描く〈腹の安定性〉と整合している。その意味において、「腹を固める」が全体として〈腹を固めることで物理的な安定を得られる〉という心的イメージに基づく表現であると分析することには、少なくとも本研究の趣旨に照らし合わせると意義があると考ええる。以降、本研究では慣用的連結句の解釈が可能な場合であっても、文字通りの解釈に何らかの物理的イメージが備わっており、それが特に他の表現との一貫性を有している場合、慣用句としての分析を優先する。上の「決まる」（「物事がある状態に定まって、変わらないようになる。」『日国』）のように、抽象的な物事に対する意味を元来有し句全体としての物理的イメージも比較的薄いものや、「ない」などかなりの程度抽象化を経ている語については慣用的連結句として扱う（ただし、やはりこれらも慣用句としての分析の可能性は完全には払拭できない）。

3.4.4 観察のまとめ

以上の観察をもとに、現代日本語の〈腹〉の慣用句の類型を表12のようにまとめる。左のL1,L2,L3はそれぞれ「感覚・運動レベル」「スキーマレベル I」「スキーマレベル II～概念レベル」を指している。L3については、〈腹〉が〈容器〉(CONTAINER)と理解されているか (L3-C), 〈具象物〉((CONCRETE) OBJECT) として理解されているか (L3-O) で下位分類を行った。

表 12 現代日本語の〈腹〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）

		字義的意味		慣用的意味（精神義）		例
L1	1	しぐさ	腹を抱える	可笑しがる	可笑しさ	横っ腹を抱える
	2	痛み	腹が痛い	可笑しい		片腹痛い
	3	不快感	腹が不快だ	怒りを覚えるような	怒り	腹がムカムカする
L2	4	振れ	腹を振る	可笑がる	可笑しさ	腹を繕る
	5	切付け	腹を切る	可笑しがる		腹を切る
L3-C	6	内容物の増量・ 乱れ・制御	腹が内容物で満ちている	思う存分（満足に）	満足	腹一杯
	7		腹の内容物が増え、腹が膨張する	不満が増長する	不満	おもう事言わねば腹ふくる
	8		腹の内容物が {燃える／煮える}	怒る	怒り	腹が煮える、業腹がる
	9		腹の中の虫（が暴れ、制御できない）	怒り（を制御できない）		腹の虫（が治まらない）
	10		腹に内容物を留めておけない	怒りを制御できない		腹に据えかねる
	11		腹の形	機嫌	機嫌	腹形
	12		腹の状態（具合）	機嫌		腹具合
	13	内容物の存在・ 保持	腹の内部	内心・本心	内心・本心	腹の内
	14		腹に内容物 {がある／を留める}	内心・本心・考え・意図 {がある／を明かさ ない}	内心・本心・考え・意図	腹に一物、腹に納める
	15			恨みを抱く	恨み	腹に持つ
	16	内容物の探索・ 露呈	腹の中を {探る／探られる}	相手の考え・意図を知ろうとする／ 相手から考え・意図を探られる	考え・意図	腹を探る、いたくない腹を 探られる
	17		腹の中を見る	相手の考え・意図を知る		腹を見抜く
	18		腹を割る	内心・本心・考え・意図を知らせる	内心・本心・考え・意図	腹を割る
	19	対象の受容	腹に内容物 {が入る／を入れる}	理解・納得する	理解・納得	腹に入る、腹に入れる
	20	容器の規模	腹が {大きい／太い／小さい}	度量・包容力が {ある／ない}	度量・包容力	腹が大きい、腹が太い、腹 が小さい
	21	内容物の性質	腹の内容物が {汚い／黒い}	性格が悪い	性格	腹が汚い、腹が黒い
L3-O	22	安定	腹が立つ	怒る	怒り	腹が立つ
	23		腹を安定させる	怒りを制御する		腹を据えかねる
	24			覚悟・決心する	覚悟・決心	腹を括る
	25		腹 {が固い／を固める}	信念が変わりにくい／覚悟・決心する	信念・覚悟・決心	腹が堅い、腹を固める
	26		腹が太い	胆力・度胸がある	胆力・度胸	腹が太い
	27	治癒	腹 {が癒える／を癒す}	怒り {が収まる／を晴らす}	怒り	腹が癒える、腹を癒す

L1 から明らかなように、〈腹〉に関しては比喩表現として用いられる場面依存的な身体経験が少なく、時間的隣接性に基づくメトニミー基盤として利用されるものは [2] の〈笑い〉に伴う腹部の痛覚と [1] の腹部へ手を添えるしぐさである。また、[3] の不快感（ムカつき）が〈怒り〉に対して転用されることをみた。L2 では、L1 での笑いに伴う腹筋の痛みがメタファー的に描写されることで、[4] の〈腹の振れ〉や [5] の〈腹の切付け〉によって表現されている。

L3 では〈精神作用の容器としての腹〉〈具象物としての腹〉の二種類のメタファー的理解をもとに、情緒的精神・知的精神との対応が確認される。〈精神作用の容器としての腹〉のメタファーが活用されるのは、主に〈精神作用をうちに隠す〉ことの理解・表現のためである。さらに、〈腹〉の中に納められる精神作用に応じて焦点化される〈容器〉と〈内容物〉の側面にも差が見られ、〈怒り〉を中心とした情緒的精神に関しては、〈腹〉の中で増長し、外に出ようとする感情を内に留めようとするシナリオが適用される (Matsuki, 1995)。ここで言語化されるのは、〈内容物〉の増量や乱れ、〈容器〉と〈内容物〉の力関係のバランスの喪失（収容力の限界と容器の変形）と制御に関する [7], [8], [10] のようなカテゴリーである。あるいは [9] のように〈内容物〉が〈虫〉とみなされた場合、主体から独立した意思を持つ存在が描かれることで、〈怒り〉の制御の困難さが表現される。一方、〈腹〉に納められた〈考え・意図〉の場合は、精神作用自体に外へ向かおうとする指向性は内在していない。〈腹の中に隠した〉状態を脅かすのは、精神作用自体ではなく他者であり ([16], [17])、閉鎖され不透明な〈容器〉を他者が探り、見透かすことで初めて〈内容物としての精神作用〉が他者に認知される。また、[18] のように主体自らが〈容器〉を割り、他人とその中身を示し合わせることもある (e.g. 「腹を割って話し合う」)。ここで利用されるのは〈容器〉と〈内容物〉の力関係ではなく、視覚的な側面である。

これらの考察をもとに、〈腹〉に納められる〈怒り〉を典型とする負の感情と〈考え・意図〉のシナリオを次頁(164)(165)のように想定する。Matsuki (1995) の設定したシナリオは〈怒り〉に関するものであったが (3. 2. 2. 2 節を参照)、本研究では〈不満〉を含む負の感情に適用した。また、従来の研究で論じられることのなかった〈考え・意図〉を対象とした〈腹〉のシナリオを新たに設定している。その存在が想定されるが、今回の調査で慣用表現としての証拠が得られなかったステージは () で示した。(164) と (165) を比較すると、上で述べたように表出にいたるまでの段階が負の感情と〈考え・意図〉とで異なることが分かる。

(164) 〈腹〉に納められる負の感情に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：きっかけとなる事態の経験)

ステージ2：感情が主体の腹の中に発生する「腹に持つ」

(ステージ3：主体がその感情を腹の中に留めようとする)

ステージ4：感情が増大する（と同時に腹が膨張する）「腹が煮える」「腹ふくる」

ステージ5：主体は制御を失い、腹の中に感情を留めておけなくなる「腹に据えかねる」

(ステージ6：主体が感情を表出する)

(165) 〈腹〉に納められる〈考え・意図〉に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：主体が腹の中で考え・意図を生み出す)

ステージ2：主体が腹の中に考え・意図を止める「腹に一物」「腹に納める」

ステージ3-1：他人がその考え・意図を察知し、腹の中を探る「腹を探る」

ステージ3-2：他人がその考え・意図を察知し、腹の中を見通す「腹を見抜く」

ステージ3-3：主体が腹を割る「腹を割る」

(ステージ4：他人にその考え・意図が知られる)

一方、[20]のように外から対象を取り込むという〈容器〉の一面が利用されることもある。この場合、〈容器の規模（容積）〉は他人の言動を受け受け容れることのできる能力、つまり〈度量・包容力〉と対応づけられる（e.g.「腹が大きい」）。同様に、〈理解・納得〉を表す表現も外から物事を取り込み留めるという〈容器〉の性質を利用したものである（[19]）。取り込まれた物事が身体（胴体）の中での最下部に位置する〈腹〉に落ちることが、それを真に受け容れること、すなわち〈納得する〉こととして理解されるのである。ここまでは、〈容器〉の内から外への移動、外から内への移動という〈内容物〉の流動性を前提とした精神作用の理解であったが、[21]のように〈容器としての腹〉の中に常時貯蔵された〈内容物〉の性質が言語化されることがある。「黒い」や「汚い」によって形容される〈内容物〉の性質は、主体の〈人格〉を決定づけるものである。

L3でのもう一つの〈腹〉のメタファー的理解では、〈具象物としての腹〉の安定性（バランス）の喪失と維持の試みが焦点化されることをみた。それによって言語化されるのは、主に [22], [23], [27] のカテゴリーに関する〈怒り〉の発生と鎮静である。〈容器〉のメタファーでは、〈怒り〉の制御はそれの中に留めておこうとする試みによって表現されるのに対し、〈具象物〉のメタファーでは動揺する〈腹〉そのものを安定させようとする力が働く。安定を回復しようとするこの試みは、現下ではなく将来の動揺を予測した上での「備え」としても理解されることで [24], [25] の〈覚悟〉と結びつく。〈覚

悟〉と類似した〈決心〉も将来を見越した精神作用であるが、その安定性は具体的な〈意志〉の不変性と結びつけられる点異なる。さらにこの安定性が常態化したものが [25] や [26] にあたる〈信念〉〈胆力・度胸〉である。本研究では、〈怒り〉と〈覚悟〉の違いを示すため、両者の典型シナリオを次のように設定・比較する。その存在が想定されるが、今回の調査で言語表現としての証拠が得られなかったステージは（ ）で示した。

(166) 〈腹の安定〉を通じた〈怒り〉の理解に対して想定されるプロトタイプシナリオ

（ステージ1：きっかけとなる事態の経験）

ステージ2：腹が不安定な状態になり、主体が精神の安定性を失う「腹が立つ」

ステージ3：主体が怒りを発散する「腹を癒す」

ステージ4：腹が安定性を取り戻し、主体が精神の安定性を取り戻す「腹が癒える（居る）」

(167) 〈腹の安定〉を通じた〈覚悟〉の理解に対して想定されるプロトタイプシナリオ

（ステージ1：主体が将来の見込みを立てる）

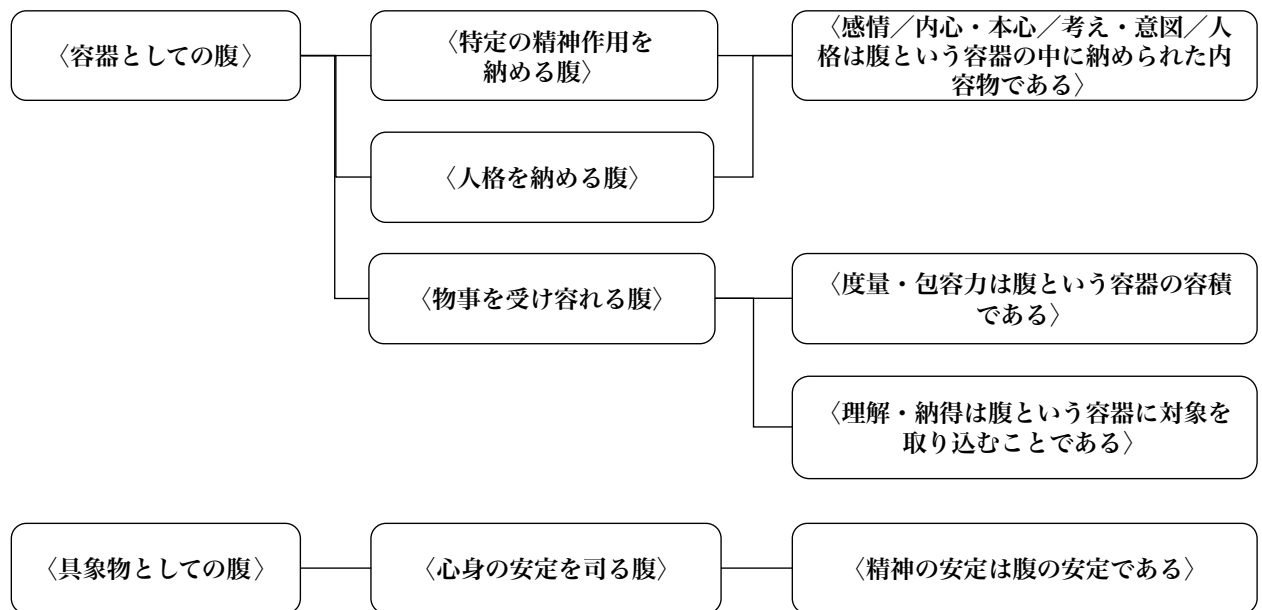
ステージ2：主体が腹を固定する「腹を括る」「腹を固める」

（ステージ3：動揺を誘う事態の経験）

ステージ4：腹の安定性が維持され、精神の安定も保たれる「腹が堅い」

以上をまとめると、〈腹〉の文化モデルは〈可笑しさ〉と結びつく感覚・運動のメトニミー・メタファー、〈容器としての腹〉のメタファー、〈具象物としての腹〉のメタファーの三要素によって構成されており、三つ目は〈心身の安定を司る腹〉という〈腹〉の理解を特徴付ける。二つ目の場合〈内容物〉の種類とその動き・状態（内から外への移動・外から内への移動・常在）に応じて〈特定の精神作用を納める腹〉〈物事を受け容れる腹〉〈人格を納める腹〉という三つの下位区分をすることができる。これらの〈腹〉の理解をもとに、〈精神〉を目標領域に据えた概念メタファーを定式化して次のように対応づける。

図 11 精神作用に関する現代日本語の〈腹〉の理解と概念メタファー



3.4.5 〈腹〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤

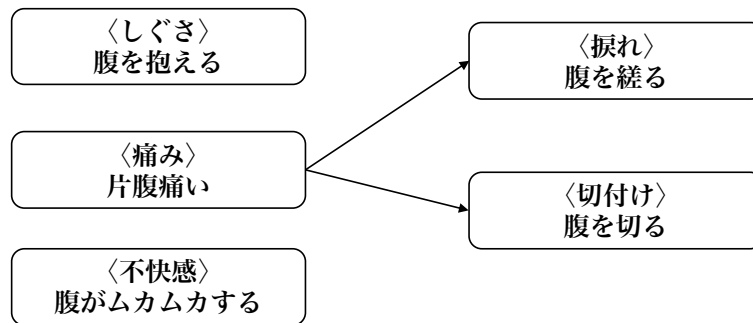
3.3.4.1節で概観した通り、五臓思想に影響を受けた日本の伝統的心身観においては、五臓は心身の両機能を総括する存在であった。それらを納める〈腹〉および〈胸〉が〈精神作用の座〉として理解されていたことは、ある意味当然の成り行きであるといえよう。ただし五臓思想が日本での〈腹〉の理解に忠実に反映されているとまでは言い難く、たとえば五臓思想における腹の臓（肝，脾，腎）と腹の機能に正確な対応関係が見られるわけではない。肝と怒が結びつくことは、〈腹〉に〈怒り〉に関する表現が多いことと整合するが、腎と結びつく恐・驚や、脾と結びつく思に関する意味は、少なくとも本節で観察した表現からは見出すことができない。したがって、〈腹〉と〈精神〉の結びつきの根底に五臓思想があることは確かであるが、本節で観察してきたような各々の精神作用との対応に関して、その他の動機づけを想定することには意義があろう。ここでは、〈腹〉の文化モデルがどのような身体基盤・文化基盤に基づいて成立しているかについて、先行研究の知見を踏まえながら再検討を試みる。

表 12 の L1, L2 で見た通り、表現として確認される〈腹〉の場面依存的な身体経験は主に〈可笑しさ〉に伴う腹筋の痛みと〈怒り〉に伴う不快感である。これらについて想定される L1, L2 での関係は次のように図示される。矢印はメタファーによる身体経験の描写の拡張を示している。

図 12 〈腹〉におけるメトニミー表現（L1）とメトニミー×メタファー表現（L2）の対応

L1: 感覚・運動レベル

L2: スキーマレベルI



時間的隣接性（共起性）に基づく比喩表現を動機づける〈腹〉の身体経験は限定的であり、図 12 のみを以ては、L3 で観察される〈精神の座としての腹〉のメタファー的理解を動機づける〈腹〉の身体性を十分に見出すことはできない。一方、田中 (2003) の論じるように、腹部には摂食活動にとって不可欠な消化器官（内臓）が位置しており、自己保存の欲求に基づいた利己的な精神が〈腹〉と結びつくのは、こうした身体的特徴と整合する。また、〈怒り〉や〈不満〉といった感情についても、それを隠すことはしばしば自己の社会的立場を維持するためという点で主体志向的であり、利己的な精神と同じ〈腹〉に収容されるのは合理的である。さらに有菌 (2009) が論じるように、「腹に落ちる」のような表現は〈理解・納得〉の過程を〈摂食活動〉に準えて理解するメタファーに基づく表現であると分析することができる。

ただしここで注意すべきなのは、上のような身体基盤は二種類に区別されるという点である。すなわち、概念メタファー理論が初期より直接的な身体基盤として位置付けてきたのは〈笑いに伴う腹筋の痛み〉と〈可笑しさ〉の間にみられるような共起性（時間的隣接性）に基づく基盤であり、上で述べた残りの特徴は〈腹〉に関する身体的な特徴ではあるが、厳密には共起性ではなく類似性として〈精神作用〉と結びつけられるものである。

では、L3 のメタファーに関係する共起性基盤としての身体基盤は存在するのであろうか。その手がかりとなるのが、「腹がムカ／＼してきた」という用例でみたような感情経験に伴う内臓の生理的感覚である。この場合のムカつきは主に胃に関する感覚を指すと考えられるが、近年、腸を含む内臓の働きが精神と密接に関係することが言語学外でも議論されている（e.g. 西原, 2002; 福土, 2007; 三木, 2013）。たとえば、ストレス性の心因が内臓に作用することで引き起こされる疾患の一つに「過敏性腸症候群」がある（福土, 2007）。本疾患は、大腸および小腸には潰瘍や腫瘍などの異常は確認されないにも関わらず、腹部の不快感・膨張感・痛みなどの症状と下痢・便秘といった便通の慢性異常が生じた病気で

あり、心的ストレスや自律神経失調等によって腸が刺激に対する知覚過敏状態になることによって引き起こされると言われている（厚生労働省, n.d.; 福土, 2007, 第一章）。¹⁶⁴ Shinohara and Matsunaka (2003, p. 9) が日本語の〈怒り〉のメタファー〈怒りは消化器系の中にある胃内容物である〉を提案するにあたり、日本人が相対的に胃腸を壊しやすい人種であり、消化器官に意識を向ける傾向にあることを基盤の一つとして論じていたように、消化器系の生理的感覚が〈精神作用〉と〈腹〉を結びつける身体基盤の一つとして機能していることが考えられるだろう。

また、このほかに「腹が煮える」で見たような〈怒り〉表現の根底に、体温変化という共起性基盤が想定されることは先行研究で論じられてきた通りである。ただし、「血が煮えたぎる」のような表現があるように（有蘭, 2009, p. 222）、感情の高揚に伴う体温変化が腹部に固有の経験であるかと言えばそうではなく、この点において上で挙げた痛みや内臓感覚の基盤とは異なっている。

一方、文化基盤にも目を向けると、こうした腹部への意識の集中は日本の伝統的な身体感覚とも整合する。3.3.4.2節で説明した通り、日本では下腹部（丹田）の鍛錬が重視され、身体感覚の中心を丹田に置く適切な姿勢を習得することで心身の安定を得ることができると信じられてきた（e.g. 片渕, 2023; 齋藤, 2000; デュルクハイム, 1954/2003）。これらは具体的な身のこなしを伴うという点で明確な身体性を持つことに間違いはないが、特異なのは文化の中で後天的に習得される技術であるという点である。Yu (1995, 1998) が陰陽五行説に基づいて中国語の〈怒り〉メタファーを分析し、文化が身体そのものの理解を規定すると論じたように（本稿 2.3.7節参照）、日本の腰肚文化は「文化の中で培われた身体性」を〈腹〉の文化モデル形成の基盤として提供する存在と言えるだろう。

腰肚文化に基づく分析は、なぜ「腹」という語が〈怒り〉だけでなく〈覚悟・決心〉など、精神的な安定に関する表現の中に頻繁に現れるかを直接に説明する手立てともなる。3.4.3.3節でも論じたように、〈腹〉の安定を得ることは〈身体〉の安定を得ることを意味し、さらに心身一如の心身観を伝統として有する日本人にとって、〈身体〉の安定を達成することは〈精神〉の安定を達成することに等しいのである。さらに〈腹〉を中心に置いた〈身体〉の理解は、〈腹〉に〈本音（本心）〉（「腹の内」）や〈人格〉（「腹が黒い」）が置かれることとも整合する。部分としての〈腹〉が全体としての〈身体〉の中心部位であるとしたら、〈精神〉の中核もそこに置かれるはずであり、その〈精神〉の中核にあたるのが〈本音〉や〈人格〉であると考えられるからである。

ここまでの考察をもとに、〈腹〉の文化モデルの成立を動機づける身体基盤・文化基盤を次のように

¹⁶⁴ 福土 (2007) は、ストレスが直接腸の不調を引き起こし、その内臓感覚が情動形成を引き起こすという仮説を立てている。これは、「悲しいから泣く」ではなく、「泣くから悲しいと感じる」というように、通常考えられている情動とその生理的反応の因果関係を逆転させた「ジェームス・ランゲ説」の流れを引く考え方である（ジェームス・ランゲ説とその反対の説（つまり、「悲しいから泣く」）である「キャノン・バード説」については船橋 (2007) などを参照）。

まとめることで、3.2.3節で定めたRQ1「現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。」に対する一つ目の回答とする。

図 13 現代日本語の〈腹〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

	L1	L2	L3
	感覚・運動レベル	スキーマレベル I	スキーマレベル II
	メトニミー表現	メトニミー× メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・ イメージスキーマ
	痛み「腹が痛い」 不快感「腹がムカ／＼する」 しぐさ「腹を抱える」	振れ「腹を振る」 切付け「腹を切る」	〈容器〉「腹の内」 〈垂直性〉「腹が立つ」 〈バランス〉〈コントロール〉 「腹に据えかねる」
表象・例			〈感情／内心・本心／ 考え・意図／人格は腹 という容器に納められ た内容物である〉 〈度量・包容力は腹と いう容器の容積であ る〉 〈理解・納得は腹とい う容器に対象を取り込 むことである〉 〈精神の安定は腹の安 定である〉
基盤	痛み、内臓感覚（、体温変化）		摂食活動、腹の身体感 覚の文化的強調
認知操作	メトニミー操作（共起的相関）	抽象化・類推（メタファー）	統合・複雑化

3.5 現代日本語の〈胸〉表現

本節では、現代日本語の〈胸〉表現の精神義を〈腹〉と同じ手順で分析することで、精神作用の座としての〈胸〉の文化モデルが、どのような身体基盤・文化基盤と比喩を通じて成立しているのかを明らかにする。分析結果の要点を先立ってまとめたものを下に示す。

- 感覚・運動レベル (L1) やスキーマレベル I (L2) に該当するメトニミー表現・メタファー表現が多く、これらは〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉〈苦悶・恋慕〉〈喜び・期待〉〈驚き〉を含む多様な感情を表す。
- スキーマレベル II～概念レベル (L3) では、〈胸〉の概念化として〈具象物〉と〈容器〉の類型があり、〈腹〉と共通するが、より具体的なレベルで観察すると〈胸〉は〈腹〉と異なる点が多い。〈容器としての胸〉のメタファーでは、部分的に抑圧あるいは隠蔽を前提としない感情や、他者との対立を前提としない〈内心・本心〉が特徴づけられる。〈具象物としての胸〉のメタファーでは、〈胸〉は刺激に繊細に感応し燃焼する存在物として描写され、情動と結びつく。

- 〈胸〉には、胸痛・動悸・苦しさ（呼吸）・不快感（内臓感覚）・体温変化といった豊かな共起性基盤が認められる（有蘭, 2009）。これらの身体経験がL1, L2の〈胸〉表現を個別に、さらにはL3以上の〈精神の座としての胸〉という概念上の理解の成立を強く動機づけていると考えられる。

3.5.1 感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語、メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語

はじめに、文字通りの意味が生理的感覚や反応を表し、それが時間的隣接性によるメトニミーを通じて感情に関する意味を表すようになった慣用句・合成語を観察する。このレベル（L1）に該当する表現は〈腹〉の場合と比べて〈胸〉の方が多。

感覚・運動レベルに分類される第一の〈胸〉表現として、文字通りの意味が〈痛み〉を表す（168）を見てみよう。

(168) 〈胸が痛い〉→〈悲しい・辛い・不安だ〉

胸が痛む／胸を痛める¹⁶⁵

3.2.2.6節で触れたように、有蘭（2009）は「胸を痛める」を価値的な類似性に基づくメタファーに基づく表現として扱っている。その分析においては、身体的な辛さと精神的な辛さとの間に〈辛い〉という否定的評価の共通点が見出されることで、「痛める」の使用が動機付けられることになる。一方、「胸が傷む」はのちの有蘭（2021, p. 41）において、「身体部位の〈感覚〉から〈精神状態〉へ」というメトニミーの一例として扱われている。本稿では有蘭（2009）のいう身体的・精神的な痛み（〈辛さ〉）の価値的な類似性の存在に賛同しつつも、有蘭（2021）と同様にメトニミーとして扱い、その根拠として以下に説明する共起性基盤が存在することを示す。

精神作用と胸部の身体反応の関係性については、近年の「たこつぼ症候群」と呼ばれる疾患研究によって注目が集まっている。桐ヶ谷・木村（2021, pp. 31–32）によれば、本疾患は一種の心臓の一過性収縮障害であり、胸痛（約 80%）をはじめとして、呼吸困難・動悸・全身倦怠感等が自覚症状として挙

¹⁶⁵ これに関連して、[身体部位詞] + 「ヲ」 + [動詞] の形式で病理・生理現象を表す構文については、これまでに再帰性の観点から分析がなされている（e.g. 片山, 2005; 村木, 1991）。この構文は「ヲ」格名詞を含むが、動詞の他動性が欠けている代わりに再帰的な性質が認められ（村木, 1991, p. 25）, 「ヲ」で結ばれる身体部位詞は主体に属する必要があるという特徴を持つ（e.g. 「太郎が胸を痛めた」「*太郎が花子の胸を痛めた」（片山, 2005, pp. 351–353））。片山（2005, p. 353）は、このような構文はほとんど意味を変えずに自動詞構文として置き換えることができると述べている（e.g. 「太郎は胸を痛めた」→「太郎は胸が痛んだ」）。このような特徴から、本稿では「胸を痛める」のような再帰的な他動詞構文を自動詞構文（〈～と感じる〉の意味を表す[身体部位詞] + 「ガ」 + [自動詞] の構文）と等しく扱い、すべて〈 〉内での意味を自動詞の意味として記述する。さらに、「胸が痛い」のように形容詞構文が存在する場合、すべて〈 〉内での意味を形容詞構文に集約して記述する。

げられる。¹⁶⁶ 身体的ストレスや精神的ストレス（あるいはその両方）が主要因とされており、あるデータでは精神的ストレスのうち配偶者との死別といった負のストレスが誘因の大半（96%）を占める一方で、誕生パーティーといった喜ばしい出来事によるストレス誘因も 4%程度報告されているという（英語の呼称として、前者は broken heart syndrome、後者は happy heart syndrome と呼ばれる）。¹⁶⁷ 古島ほか (2021) は、過去の研究をもとに本疾患の誘因をまとめている。このうち、具体的な精神的ストレス誘因は以下の通りである。

表 13 たこつば症候群の精神的誘因（古島ほか (2021, p. 88) より抜粋）

悲しみ	うつ、近親者の病気、自殺企図、離婚、PTSD
恐怖	スピーチ、強盗、手術／入院、転居
緊張	転職、失業、退職、仕事量の増大
経済的損失	借金、多額の損失、破産
死	家族・近親者・恋人・ペットとの死別
怒り	近親者・恋人・上司・家主とのいさかい
災害・公害	洪水、地震、台風、航空機の騒音
負傷	自動車事故、転落
歓喜	宝くじの当選、誕生日会、孫の誕生、結婚、コンサート、昇進

たこつば症候群はあくまで一疾患として扱われるべきであり、「胸が痛い」のような表現の使用が全てこのような身体の異常によって動機付けられているとは言い難いが、上で述べたような心因が胸部の身体反応と密接な関係にあることが示唆される。上述の通り、たこつば症候群の症状として呼吸困難も挙げられているが、関連する言語表現に「胸が苦しい」がある。『日国』では「胸苦し」の項目の語釈に精神義としての語釈があるが、挙げられているのは中古の用例のみであり、類語の「胸苦しい」「胸苦しき」等の項目についても、語釈は全て身体義のみ（つまり、文字通りの〈苦しさ〉のみ）となっている。そこで、Web 検索やコーパスから得た用例を見てみよう。

(169) しかし、二年前の春、新型コロナウイルスが世界中を脅かし、それ以降、学校は休校や分散登校、そして学校行事や部活動の内容を大きく制限されるという、かつて経験したことのない事を幾度となく繰り返しました。昨年度、諸君らが二年生の六月に、学校は再開しましたが、体育祭、合唱祭、部活動の大会や文化部のコンクール、そして二年生最大の行事であるスキー教

¹⁶⁶ 心臓の異常によって起こる胸痛ばかりでなく、肺に誘因を持つ胸痛もある。より厳密に言えば、肺には知覚神経は存在しないため、肺に関係する胸痛とは肺の病変が隣接組織（胸膜や肋骨）に波及することで生じる痛みである（『日本大百科全書』「胸痛（きょうつう）」）。

¹⁶⁷ 英語で broken heart と言うように、英語でも〈胸〉（〈心臓〉）の身体経験は多くが比喩化している。broken heart は本研究でいうスキーマレベル I の事例であると考えられるが、より直接的に胸痛を述べる場合、heartache（〈悲痛〉）ということもできる。後藤(2018)では、本稿で感覚・運動レベルやスキーマレベル I の表現として扱うメトニミー基盤の〈腹〉〈胸〉表現について、日英語で多くの共通点が観察されることを指摘し、身体基盤の普遍性に対応づけている。

室などがことごとく中止となりました。当時一つ年上の先輩方がそのような状況下でも、しなやかにそして粘り強く中学校生活を送っている姿を見て、幼さの垣間見える諸君も健気に過ごしていたこと、そして、当時まだ中学二年生であった君達にも我慢を強いてしまったことは、とても胸の苦しい日々だったことを鮮明に覚えています。

(https://schit.net/kasukabe/jhiinuma/blogs/blog_entries/view/12/4fe0715def4f2f453bdce745a9b860ed?frame_id=9)

(170) 私はもう誰が死んでも葬式には出ないことにしてるんだけど、柳橋さんのときは出て行って弔辞を読んだんだ。読んでるうちに、いろんなことが思い出されてね、胸が苦しくなっちゃったよ。でも、最後まできちんとやりたかったからね、娘につきそわれてだったけど、頑張っちゃった。(BCCWJ: OC09_02237, 3580)

(171) 先生は短く園の説明したあと、とにかく教室を見学しませんか、というので、先生の後について教室へ。その教室に入った途端、ショックを覚えた。確かに病院では、何人ものいろいろな病気の子どもを見てきた。が、ここには、由輝とは違う病気の子どもたちがいた。胸が苦しくなり、呼吸が速くなった。誰かに肩でも叩かれたら泣き出しそうになった。(BCCWJ: PB19_00167, 8640)

感覚・運動レベルの表現の用例では、(171)の「呼吸が速くなる」「泣き出す」のように、身体反応に関する別の描写が周辺で同時に観察される場合が多い。このような用例においては、精神的な意味を表しつつも、胸部に感じる苦しさ（閉塞感）としての体感的意味が強く示される。

また、精神作用に用いられる他の〈胸〉の身体感覚・反応として、動悸と不快感が挙げられる。

(172) 〈胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する〉→〈不安を覚える〉〈喜ぶ・期待する〉

胸が高鳴る／胸が轟く／胸を轟かす

(173) 〈胸が不快だ〉→〈(心理的に)不快だ・怒りを覚えるような〉

胸糞（むねくそ）が悪（わる・わり）い／胸悪（むねわる）／胸悪い／胸悪さ

「胸が痛い」や「胸が苦しい」とは異なり、(172)の「胸が轟く」は実際の動悸を指しながらも、現代日本語では心因性による心拍の変化に対してのみ用いられると考えられる。同様に、(173)の「胸悪い」は生理的な不快感（吐き気、胸焼け）のことも指すが、特に「胸糞」（「胸糞」は「胸」を卑しめた表現）を用いる場合、現代日本語においては心理的な不快の意味に限られるであろう。このように、感覚や運動に基づく表現の中には、比喩的用法の慣用化が進んだものも含まれている。

また、感覚に関する語を含みながらも、扱いが難しい表現として〈温度変化〉を表す表現がある。

(174) 〈胸の温度が下がる〉→〈恐れる〉

胸を冷やす

(175) 〈胸の温度が上がる〉→〈感動する〉

胸が熱くなる

確かに、〈冷〉は〈恐れ〉と結びつきやすい身体感覚であり、日本語には(174)の「胸を冷やす」のほかに「背筋が凍る」「肝を冷やす」「寒気がする」などの表現が存在する (cf. 〈体温低下が恐怖を表す〉 (DROP IN BODY TEMPERATURE STANDS FOR FEAR) (Kövecses, 2000, p. 24; cf. Kövecses, 1990, p. 71))。しかし、このような他の表現の存在からも明らかなように、〈恐れ〉に対して〈冷たい〉と感じるのは〈胸〉に固有の経験ではなく、広く身体に対して当てはまる経験である。この意味で、〈冷〉と〈胸〉の結びつきには精神の座としての〈胸〉の理解が前提として関わっていると考えられ、「胸が苦しい」のような部位固有の感覚とは区別されるべきであろう。また、(175)の「胸が熱くなる」の場合、〈熱い〉という感覚が温度に由来するものかは定かではなく、筆者の管見では「胸が熱くなる」ことが胸部の体温変化に由来することを裏付ける研究は見つからない。¹⁶⁸ 本研究では、これらが「冷やす」「熱くなる」という温度感覚と関係する語を含むことから、感覚・運動レベルに属する表現として分類するが、「胸が痛い」や「胸が苦しい」よりも胸部の身体基盤としての固有性は低いと言える。

最後に、〈感情の抑制〉や〈感情の解消〉を表すしぐさの表現を挙げる。(176)は情緒的興奮によって乱れた鼓動や呼吸を整えることを意図したしぐさとして分析でき、心臓や肺・横隔膜が位置する〈胸〉の身体的特徴に動機付けられている。〈感情の解消〉の意味は、このようなしぐさ（抑制）の結果としての段階を時間的隣接性に基づくメトニミーによって述べたものであろう。「胸に手を当てる」は単に落ち着きを取り戻す・保つことだけでなく、その後の思考行為をも意味に含んでいる点に注目されたい。(177)のように「胸に手を当てて考える」という形で使用されることが多いと考えられる。

(176) 〈胸を手で触る〉→〈(不安などの)感情を抑制する〉〈(不安などの)感情が解消する〉

胸に手を当てる／胸を摩(さす)る／胸を抱(だ・いだ)く／胸を撫でおろす [=撫でる]

¹⁶⁸ たとえば、「熱いものが込み上げてくる」というが、これはいわゆる胸焼けの感覚と同種の経験として分析することも可能である。英語では、〈胸焼け〉を *heartburn* と表現し、さらに *heartburning* の形で〈不満〉や〈嫉妬〉のことを表す。一方で、「胸が熱くなる」に相当する英語の表現は *be touched/be moved* であり、〈胸(あるいは心臓)の温度変化〉と〈感動〉の対応は見られない。「胸を冷やす」についても同様で、〈胸〉と〈冷〉の対応は英語では見当たらない (*cold-hearted* という表現があるが、これは「心が冷たい」と同義であり、恐怖のことではない)。このような日英語比較については、脚注 167 で触れた後藤(2018)を参照。

(177) 「人生上の勝ち負けを決める、己の基準は何だろう？」

胸に手を当てて冷静に考えた時、私は「これを妻に話したら軽蔑や非難されるかも」といった恐れを抱きました。次に、取るに足らないプライド、長年引きずっているコンプレックスに気づかされて、ちょっと恥ずかしくもなりました。

(<https://www.itmedia.co.jp/bizid/articles/1101/20/news086.html>)¹⁶⁹

一方、次の表現についてはどうであろうか。

(178) 〈胸を反らす(しぐさ)〉→〈自信を示す〉

胸を張る

(178) は〈胸〉という部位のしぐさを通じて体を反った全身の姿勢を描写し、さらにそこから〈自信〉の誇示へと転義を起こしたメトニミー×メトニミーの例である。たしかにこの表現は「胸」を用いて〈自信〉の意味を表すが、〈胸〉はあくまで姿勢を指すための視覚的な参照点として機能しているに過ぎず、(176) とは違って〈胸〉という部位に精神作用との直接的な結びつき（心臓が位置するゆえの動悸など）が見出されるわけではない。本稿では、(178) のような表現を他の表現とは異なる種類のものとして考察から除外する。

3.5.2 スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語

感覚・運動レベルで見たような胸部の身体感覚・運動は、喩えを通じてさらに多様な形式で言語化されている。ここでは、〈胸〉の描写がメタファー的でありながら、精神作用との結びつきが身体経験との時間的隣接性によって動機づけられた表現を扱う。観察に際しては3.5.1節でのメトニミー表現を適宜参照し、メタファー化する前の感覚・運動を探っていく。

(179)(180) に挙げるのは、(172) で見た「胸が轟く」のような動悸とその解消に由来すると考えられる表現である。

(179) 〈胸が動揺する〉→〈不安を覚える〉〈喜ぶ・期待する〉

むな騒(さや)ぎ／胸躍り／胸が躍る／胸が騒ぐ／胸が弾む／胸を躍らす [=躍らせる]／胸をときめかす／胸を弾ませる

¹⁶⁹ この用例から示唆されるように、胸に手を当てる行為は単に心臓の落ち着きを保とうとするだけでなく、そこに心が存在するという認識のもと、自省を図るしぐさとしても分析可能である。のちに概念レベル(L3-O)で取り上げる「胸に聞く」との関係が窺えるだろう。

(180) 〈胸の動揺が収まる〉→〈(不安などの) 感情が解消する〉

胸が収まる¹⁷⁰

(179) の表現には、人間を含む生物が〈大きな声や音を立てて活動する〉ことを表す「騒ぐ」や、生物あるいは物体の（典型的に垂直方向の）活発な運動に対して用いられる語「弾む」「躍る」が含まれている。¹⁷¹ 現代日本語では「騒ぐ」は特に人間を典型とする生物に対して用いられ、無生物に対して用いると擬人化の比喩性をまとうことになるが（e.g. 「今日は風が強く、波も騒いでいる」）、『日国』の用例を見る限り、元々生物・無生物分け隔てなく用いられていたようである。このような語史を考慮した場合、「胸が騒ぐ」も感覚・運動レベル (L1) に配置することができるであろう。また、「胸が躍る」や「胸が弾む」は明らかに心臓の収縮運動のことであり、視覚では通常捉えられない心臓の動きを、その音や振動の体感から推測して表現したものであると考えられる。

次に、「胸が苦しい」と同じ苦しさ（胸の閉塞感）から生じたと考えられる表現を見てみよう。

(181) 〈胸が {つまる／塞がる}〉→〈悲しい・辛いと感じる・不安を覚える〉〈感情や思いが高ぶる〉

むな支 [痞] え／胸がつかえる／胸がつまる／胸が塞がる

(182) 〈胸が空く〉→〈(不安などの) 感情が解消する〉

胸がすく

(183) 〈胸が圧迫される〉→〈悲しい・辛いと感じる・不安を覚える〉〈驚く〉

胸が潰れる／胸を絞る／胸を潰す／胸を締め付けられる

(181) は、胸の苦しさをその要因である閉塞（塞がること、あるいはつまること）を通じて表現したものである。我々は咀嚼が不十分なまま食べ物を飲み込むことで、それが喉や食道につかえ呼吸がしづらくなる、あるいは呼吸ができなくなることを経験的に知っている。(181) のような状況は、このような食事の文脈とは無関係であるが、食べ物のつかえによって生じる苦しいという感覚を、心因によって引き起こされた苦しいという感覚の喩えとして用いた表現として分析することができる。このよ

¹⁷⁰ 「胸が収まる」の「収（おさ）まる」は、「乱れや騒ぎなどがしずまる。」という意味のほかに「物が整頓された状態で中にはいる。また、物事があるべき所に落ち着く。終わりになる。」という意味を持つ（『日国』「おさま・るをさまる【治・修・納・収】」）。後者の意味に基づいた場合、〈内容物としての感情が胸の中に収まり切る〉という解釈をすることもできる。この場合、〈容器〉のスキーマに基づく表現としてスキーマレベルⅡ～概念レベルに分類されるだろう。

¹⁷¹ 「おどる」は辞書の見出しで使用された漢字を見れば「躍る」つまり *leap/jump* の意味であることがわかるが、現代の比較的多くの日本人にとって、「踊る」つまり *dance* の意味で解釈されていると考えられる（同様の指摘が Ikegami (2008, p.187) でも見られる）。実際、Google フレーズ検索（2023 年 10 月 6 日）では「胸が躍る」は約 116,000 件、「胸が踊る」は約 98,900 件と大差ない（「胸が躍った」は約 11,600 件、「胸が踊った」は約 84,600 件）。このような点を考慮し、本表現はスキーマレベルⅠに配置した。

うなつかえの解消を表したのが (182) の「すく」であろう。¹⁷² 一方、(183) は苦しさを外圧として描写したと考えられる表現である。

(181)–(183) に示したような表現が体感と強く関係することを裏付ける証拠として、下に示す用法が挙げられる。スキーマレベル I の語の多くは、精神作用に対してではなく何らかの生理的体感を喩えるためにも使用される点が特徴的である。

(184) 妊娠 6 ヶ月位から耳管開放症に悩まされ始め、8 ヶ月に入った位からそれプラス心臓が苦しい感じの症状と、胸が詰まって息ができない感じの症状に悩まされるようになりました。

(<https://komachi.yomiuri.co.jp/topics/id/617724/all/>)

(185) 眠れません、どのような姿勢をとろうとも、胸をしめつけられているような息苦しさで、うなされるのです。浅い眠り以外、できないのです。思わず呻いておりますと、妻が背中をさすってくれます。咳きこんで、ついには吐気を催したりすることもあります。(BCCWJ: OB1X_00002, 4710)

(183) のうち、「潰れる」「潰す」は単なる圧迫ではなく、物の形状が損なわれることも表す語である。これに関連して、文字通りの意味が〈胸の損傷〉を表す (186) を見てみよう。

(186) 〈胸が裂ける〉→〈悲しい・辛いと感じる〉

胸が裂ける／胸がはり裂ける

(187) 〈胸を傷つける〉→〈悲しい・辛いと感じる〉

胸に釘／胸を噛む

「はり裂ける」が示唆するように、(186) によって表される損傷は内圧による膨張がその要因となっており、閉塞感との関係が窺える。一方、(187) はどちらかと言えば局所的な刺撃であり（第 4 章で見えるように、歴史的には類似の表現として「胸に釘打つ」「胸に釘針刺す」などがある）、苦しさ（閉塞感）とは結びつけ難い。これが表す〈胸の損傷〉は、「胸が痛い」で見たような胸痛が主な基盤となっていると考えられる。

さらに、突然の出来事による鼓動の急激な変化は、胸部への瞬間的な衝撃として描かれる。

¹⁷² 『日国』での本表現の初出例は身体義としての使用である（「唐がらしは物の出来るにまいるなといへど、胸がすくとして隠しそばめてあがります」（浮世草子・好色産毛 1695 頃 五・二））

(188) 〈胸に衝撃を与える〉→〈驚く〉〈不安を覚える〉〈感銘を受ける〉

と胸を突く／胸をつく／胸を打つ

「と胸」は接頭辞「と」がついて「胸」が強まった言い方であるが、実際の用例では以下のように「吐胸」と書くことがある。さらに擬音語「はっと（ハッと）」が付く場合が多いことから、この表現には急な事態の動悸のみならず、驚きによる一時的な呼吸の乱れ・停止も関係していると考えられる。

(189) 「奥様（これ）、どこへござらっしゃる。」

と不意に背後（うしろ）より呼留められ、人は知らずと忍び出でて、今しもようやく戸口に到（いた）れる、お通はハッと吐胸（とむね）をつきぬ。（琵琶伝 1896〈泉鏡花〉三 青空文庫）

また、下に挙げる (190) は身体的苦痛に由来すると考えられる表現である。「鑢を掛く」は「釘打つ」と比べて時間をかけて対象の広い範囲を損なわせる行為であり、慣用的意味としての〈苦悶〉の持続的な苦しみに適合している。一方、(191) は上と同じ刺撃に関する語「刺す」を用いているが、精神義から判断するに、その刺撃がもたらす傷ではなく衝撃が焦点にあり、(188) に近いと考えられる。

(190) 〈胸を削る〉→〈苦悶する〉

胸に鑢を掛く

(191) 〈胸を傷つける〉→〈感銘を受ける〉

胸を刺す

ここまで見てきた慣用句・合成語は、いずれも感情経験に伴う〈胸〉の感覚や生理的反応の共起的経験に強く動機づけられた表現であると考えられるが、次に示す二つの理由から、見方によっては L3 に分類すべき場合があることを述べておく。第一に、(181) の「むな支〔痞〕え」「胸がつまる」「胸が塞がる」や (186) の「胸がはり裂ける」は、動詞の意味として〈内容物〉の存在を含意するため、これらを〈感情を納める容器としての胸〉の概念メタファーから生じた表現として分析することが可能である。この見方をとるのが、3.2.2.6 節で言及した有蘭 (2009) である。有蘭 (2009, p. 200) は「胸が { つまる／はり裂ける }」を概念メタファー〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉の事例として扱い、下に再掲する (121) の存在的対応と (122)-c, d の認識的対応を通じて説明している。ここでは、〈身体（部位）〉は〈胸〉に置き換わるだろう。

(192) 存在論的対応

起点領域：	目標領域：
容器	身体（部位）
内容物	感情
内容物の量	感情の程度
容器の容量	感情の限界
内容物による圧力	身体（部位）における内的圧力
外部からの圧力	身体（部位）における外的圧力
容器の破損	自己制御力の欠如

(=(121))

(193) c. 起点領域：容器には容量があり、内容物の量はその容量を超えると収容不可能になり、容器が詰まったり、内容物が容器から溢れてしまったりする

目標領域：身体（部位）には感情を収容できる限界があり、感情の程度がその限界を超えると収容不可能になり、身体（部位）が詰まったり、感情が溢れてしまったりする

d. 起点領域：容器内の内容物が増えすぎると、その内的圧力により、自己制御力が欠如する

目標領域：身体（部位）内の感情が大きくなりすぎると、その内的圧力により、自己制御力が欠如する

(=(122)-c, d)

「胸がつまる」や「胸がはり裂ける」は、「感動で胸がつまる」「悲しみに胸がはり裂ける」のように、「[感情語]で胸が {つまる／はり裂ける}」という形式で用いられることが多い。これらはデ格を取ることから、必ずしも「感動」や「悲しみ」が詰まったモノを指すとは言い切れないが、(194)に示す用例ではそのような分析が妥当性を帯びる。(194)では、「込み上げる思い」によって〈胸〉が詰まる様子が描かれており、〈感情の高ぶり〉を〈流動体の上昇〉によって捉える概念メタファーが働いている。「胸に込み上げる」ともいうように、〈流動体〉としての感情が量を増して〈胸〉まで上がり「詰まった」状態になるのである。

(194) ハルトマン少佐は、運ばれてきた老人の横に立った。無帽で、いつもいたずらっぽくユーモアを湛えているその目からは、衷情があふれていた。エドワーズは片手を、馴れ馴れしくも愛おしそうに椅子にかけていた。とはいえ、こみ上げる思いに胸が詰まり、口も利けなくなっていた。(BCCWJ: LBq9_00102, 8010)

第二に、「胸をつく」「胸を打つ」「胸を刺す」など、衝撃や刺撃に関する他動詞を含む表現は、実際の使用では感情の要因が動作主として言語化される場合が多い。以下の例では、「母の言葉」「(カトリック信徒たちの) 姿」「罪の意識」がそれぞれ動作主として表現されている。このような場合、〈胸〉への物理的な衝撃・刺撃は感情を引き起こす非物理的な要因を通じて抽象化されている。

(195) 「そうか。ならばめでたい。頭殿もご無事か」母の言葉に、常磐ははっと胸をつかれた。母はいつの戦さのことを云っているのであろう。とうに亡くなった左馬頭義朝の身を、気づかっているのである。(BCCWJ: LBd9_00020, 3510)

(196) 浦上のカトリック信徒たちは多くの家族を失ったが、復興への祈りを込め、がれきを片付ける姿が胸を打つ。これらの写真を掲載した「カラー写真でみる『原爆』秘録」がK Kベストセラーズから出版される。(BCCWJ: PN1b_00020, 6880)

(197) 布を再利用して、いろいろなアイテムに変えていくことはうれしい。何を作ろうかと考えることもうれしい作業である。とはいえ、布に鉄を入れるときは、胸がチクチク痛む。買ったときの戸惑い、身に着けたときの高揚感、痛んでいないのに流行遅れというだけで、こうして処分する罪の意識が胸を刺す。(BCCWJ: PB15_00163, 11290)

(195)–(197) の用例では、感情や感情の要因を物理的存在に見立てる存在のメタファーが働いており、それが身体部位に対する作用を表すメタファーと結合することで、全体の構造的性が成立している。これらを L3 の概念メタファーとして捉え、存在的対応と認識的対応を示すのであれば次のようになる。

(198) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
物体／人	感情の要因
(具象物)	胸 (心)
衝撃・刺撃の強さ	感情の程度

(199) 認識的対応

- a. 起点領域：あるものに外から衝撃が加わると、その対象が物理的に動揺する
目標領域：印象の強い物事を経験すると、胸 (心) が精神的に動揺する
- b. 起点領域：あるものに外から刺撃が加わると、その対象が物理的に動揺したり、傷ついたりする
目標領域：印象の強い物事を経験すると、胸 (心) が精神的に動揺したり、傷ついたりする

しかしながら、全ての用例に上のようなメタファーの対応関係を見出せる訳ではなく、より体感に即した用例も存在する。たとえば、(200)(201)に示す例において「胸がつまる」は何らかの心因によって生じた呼吸のし辛さを描写しており、(194)とは違って極めて写実的である。

(200) でも 手抜きでも 出来そうならば やっておけるならば、と 作り終え、布団に 戻ってきてみて、ちょっと PCを いじくったりしていたのだけれど、ごぶんが 出勤する時間になってくると また 息が しんどい。 なんだ、これ。全く 原因が わからない。 また 胸が詰まる。喉が 詰まっている。気分も 一気に 鬱モードへと 落ち込み、これは、ダメだ、と もう1度 寝ることに。幸い、睡眠障害は ない。(BCCWJ: OY07_00083, 11080)

(201) 「叔母さんの家を追いだされると、どこへもいくところがないと思って、怖かった…。ウーッ、ウーッ」彼女は苦しそうに胸をつまらせて泣きだした。「一人ぼっちになるのが怖かった。ウーッ、ウーッ」(BCCWJ: PB19_00136, 82460)

加えて、下に挙げる (202) の例では、「胸がつまる」の後に声が出なかったことが述べられている。発声には正常な呼吸が必要であり、それが阻害された様子を「胸がつまる」と表現している。ここでもやはり、身体経験としての苦しさがはっきりと見て取れる。

(202) 最終回の収録についても語り「最終回の収録は、忘れもしません、1月27日でした。最後のセリフを言わなくてはいけない時、これを口にしたらサトシを表現する事が終わってしまう。そう思うと胸が詰まって、声が出ませんでした。(https://www.oricon.co.jp/news/2273058/full/)

また、〈胸〉への刺撃・衝撃を表す語についても、体感をより意識した用例が見つかる。下の(203)(204)の例では、瞬間的な激しい動悸を表す擬音語「ドキッ」や「ズキン」が「胸をつく」「胸を打つ(胸を打たれる)」を形容している。¹⁷³ (197)で示した「胸を刺す」の例では、前文脈で「胸がチクチク痛む」とあったように、これも体感を意識した例と見ることができるかもしれない。¹⁷⁴

(203) クスッと笑い、ホロリと泣かせ、はたまた ドキッと胸を突く。さらには、謎めいた伏線が最後には感動へ。福岡らしいあたたかな人間味に溢れたドラマを展開します！

(https://bangumi.org/tv_events/Aig9wwleEAM?overwrite_area=63)

¹⁷³ 「ズキン」は強い痛みを形容する語でもあるが、ほかに「急にある物事に驚いたり感動したりして、激しく動悸が打つさまを表わす語。どきん。ずきり。」(『日国』)という意味がある。

¹⁷⁴ 裁縫に関することを話題とした用例であり、「チクチク」は裁縫の縁語のように用いられているかもしれない。

(204) 母親と息子と思われるが、会話が弾んでいるようには見えなかった。

息子の方は、ソバを焼いたり、お好み焼をひっくり返したりと、甲斐甲斐しく世話を焼いているように見受けられた。

お好み焼も無事に焼けて暫くすると・・・「これおいしいね」「うん！おいしいね」と聴こえた。その瞬間ズキンと胸を打たれた。

その声がとてつもない幸せ感を含んでいたのだ！

<https://ameblo.jp/ginzo-rock/entry-12457993348.html>

以上を要するに、スキーマレベルⅠ(L2)として扱ってきた「胸がつまる」や「胸をつく」などは、本来感覚・運動レベルで見たような身体経験と感情経験との経験的相関に基づいて成立した表現であると考えられるが、事例によっては体感としての意識が薄れ、メタファー性が増すと考えられる。本研究ではこれらをL2に配置するが、L3との違いは程度問題であり明確な線引きはし難いことを認める。

3.5.3 スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語，メタファー×メタファーによる慣用句・合成語

3.5.3.1 〈容器としての胸〉と〈具象物としての胸〉

次に、身体部位と精神作用の結びつきが類似性に基づくメタファーによって動機づけられた慣用句・合成語を扱う。前節での〈腹〉の観察では、〈腹〉を〈容器〉とみなす理解様式と〈具象物〉（非容器）とみなす認知様式が存在することを述べたが、〈胸〉でも同様の二区分が可能である。〈容器としての胸〉の存在は、以下の表現の存在によって裏付けられる。

(205) 胸の内／むな底／胸の中／胸の奥

ここでは、(206)のような表現を〈容器としての胸〉のメタファー表現例として、(207)のような表現を〈具象物としての胸〉のメタファー表現例として順番に観察していく。

(206) 胸に秘める／胸に落ちる／胸を割る

(207) 胸を焦がす／胸を据える／胸に応える

3.5.3.2 〈容器としての胸〉

〈腹〉が〈容器〉スキーマを通じて〈精神作用を納める容器〉として理解されていたように、〈胸〉

においても同様の理解様式に基づくメタファー表現が観察される。〈胸〉の場合、〈内容物〉には感情のみならず、〈考え・意図〉〈記憶〉のような知的精神も選択される。まずは感情に関する表現を見てみよう。以下は3.5.2節で観察した「胸がつまる」のような表現とは異なり、精神作用とは関係のない生理的感覚の描写に用いられることが（ほとんど）なく、動機付けとなる共起的な身体経験が相対的に特定しにくい表現である。

(208) 〈胸に内容物が満ちる〉→〈感情や思いが高ぶる〉

胸一杯／胸が一杯になる／胸が迫る／胸に迫る

(209) 〈内容物が胸に収まり切らない〉→〈感情や思いが高ぶる〉

胸に余る

(210) 〈胸の内容物が増え、胸が膨張する〉→〈喜ぶ・期待する〉

胸を脹（ふく）らます

これらは必ずしも共通の感情を表すわけではないものの、〈内容物〉の量が〈感情〉の程度に対応している。(208)の「胸が迫る」については二通りの解釈が可能である。一つは、〈容器〉としての〈胸〉の中で感情が増え、切迫してくる様子を表す「胸に迫る」をもとに、〈容器〉と〈内容物〉の隣接性に基づくメトニミーが働くことで〈容器〉であるはずの〈胸〉が切迫してくる様子として描写されたものと解釈する方法である。もう一つは、「迫る」が〈胸〉の狭（せば）まりとして描写されるというものである。後者の場合、〈内容物〉としての感情を意識せず、苦しいという体感（圧迫感）を〈胸〉の萎縮として描写した L2 の表現として位置付けられるだろう。本研究では「胸に迫る」の存在を考慮し、前者の解釈を採用している。

さて、(208)–(210) では、〈感情〉の程度が〈内容物〉の量と対応しているが、下に挙げるのは〈内容物〉の熱が〈感情〉の程度と対応した表現である。

(211) 〈胸の内容物が煮える〉→〈怒る〉

胸が煮える [煮え返る／煮えくら返る]

(212) 〈胸の中で燃える火〉→〈恋慕〉

胸に焚く火

これらの表現をもとに、有蘭 (2009) による (121) の存在的対応は、〈身体（部位）〉を〈胸〉に限定して (213) の通りまとめることができる。

(213) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	胸（心）
内容物（液体／火）	感情
内容物の量／熱	感情の程度
容器の容量	感情の限度

(213) は〈腹〉と〈容器〉の対応とも共通するが、一方で部分的な差異を見出すこともできる。たとえば、〈腹〉と〈感情〉の結びつきにおいては、外へ出ようとする〈内容物〉を〈容器〉の中に留めることで隠すという認識的対応が見られた一方で（e.g. 「おもう事言わねば腹ふくる」「腹に据えかねる」）、(210) の「胸を脹らます」はそのような主体による抑圧を含意しない。(208) や (214) の通り、〈胸〉の〈感情〉は「一杯」になり、そのまま「溢れる」こともある。

(214) お父様の命令だけを聞いてフレディ殿下のために尽くすだけだった今までの私の人生では、決して感じることの出来なかったであろう喜びと期待で胸が溢れた。

<https://ncode.syosetu.com/n3941hs/23/>

また、(215)(216) に示す通り、〈胸〉には柊山（2006, 第 4 章）が〈人間の心の状態（の変化）を、天気（の変化）を通して見る〉と定式化したメタファーに基づく表現が観察される（cf. 有蘭, 2009; 松浦, 2017）。

(215) 〈胸の中の視覚を遮る天候〉→〈不安〉

胸の霧

(216) 〈胸の中の天候が解消し、視覚を遮るものが消える〉→〈(不安などの) 感情が解消する〉

胸が霽れる／胸を晴らす

第 4 章で観察するが、「胸」は「霧」のほかに「雲」と結びつくことで、〈解消しない不安〉などの意味を表すことができる。霧と雲に共通するのは、それらが視覚によるモノの認識を遮る天候（あるいは明暗の状態）であるという点であり、「晴れる」はそれらの解消を表すと解釈することができる。また、霧や雲は正体がつかみにくく、はっきりとしない存在であり（松浦, 2017, p. 72）、日本文化においては好ましくない天候としての評価を受ける傾向にある（柊山, 2006, p. 70）。このような性質が、類似性を通じてそれと同様の性質を持つ負の感情（典型的には〈不安〉）と結びつき、表現が成立している。

さらに、〈不安〉が将来の出来事に対する恐れ感情であることを考慮すると、これらの表現には時空間メタファー (e.g. Lakoff, 1993, pp. 216–218; Lakoff & Johnson, 1980/2003, Ch. 9; 1999, Ch. 10) の関与も考えられるだろう。霧や雲は空間的に先にある存在を視覚的に捉えることを妨げる存在である。これが〈時間〉という領域に適用されることで、〈霧〉〈雲〉としての〈不安〉は将来訪れる〈出来事〉を見通すことを妨げる存在となるのである。

以上のように、天候に関する表現では、〈胸〉が〈空間〉として認識されている点が「胸が煮える」のような表現と異なっている。しかし (217) の存在的対応が示すように、〈胸〉と〈感情〉の包含関係は〈容器〉メタファーのそれと共通していることから、天候に関する表現も〈容器〉スキーマに基づくメタファーの一種あるいは変種としてみなすことができるであろう。

(217) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
空間	胸（心）
遮蔽物（霧／雲）	感情

(218) 認識的対応

起点領域：空間に霧や雲が存在すると、先にあるものが見えず迷いがちになる。それが消える（晴れる）ことで、遠くを見ることができ迷うことがなくなる

目標領域：胸（心）に不安が存在すると、将来に迷いがちになる。不安が解消することで、将来に迷うことがなくなる

さらに、次に挙げる表現も〈空間〉としての〈胸〉の理解を前提とすると考えられる。

(219) 〈刺激に胸が反響する〉→〈感銘を受ける〉

胸に響く

「響く」は字義的には〈音が空間に大きく広がり伝わる〉ことを表すが、「胸に響く」は、物事が忘れられないほど強く感情に訴えるさまを、物理的作用としての音が反響し余韻を残すさまになぞらえた表現であろう。存在的対応・認識的対応として、次のようにまとめる。

(220) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
空間	胸（心）
物理的刺激	感銘の要因
音	感銘
音の大きさ	感銘の強さ（持続性）

(221) 認識的対応

起点領域：閉じられた空間で何らかの物理的衝撃により大きな音が鳴ると、その音は反響して残ることがある。

目標領域：印象の強い物事を経験すると、胸（心）が感応して余韻として残る。

次に、〈胸〉の内部を表す表現、〈内心・本心・考え・意図〉を〈胸〉に留め隠すことを表す表現をみてみよう。

(222) 〈容器の内部・部分〉→〈内心・本心〉

むな底／胸三寸¹⁷⁵／胸の内

(223) 〈腹に内容物 {がある／を留める}〉→〈内心・本心・考え・意図 {がある／を明かさない}〉

胸三寸に畳む [=納める] ／胸にある／胸に一物／胸に納める／胸に畳む／胸に包む／胸に秘める

(224) 〈胸の中を晒す〉〈胸を割る〉→〈内心・本心を知らせる〉

胸を明かす／胸を開く／胸を割る

これらの存在的対応・認識的対応は次のようにまとめられる。

(225) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	胸（心）
内容物	内心・本心・考え・意図

¹⁷⁵ 「三寸」は約9.09cmで、短いことのたとえで用いられる。胸の表面から内部への距離を指すか、もしくは精神作用が胸の限られた狭い範囲に収められていることを指すかのいずれかであろう。ここでは前者の解釈を取り、〈容器の内部・部分〉に分類した。

(226) 認識的対応

a. 起点領域：容器に内容物を収容しておくことによって、それを他者から見えないようにすることができる

目標領域：内心・本心・考え・意図を胸（心）に収容しておくことによって、それを他者に知られないようにすることができる

b. 起点領域：所有者自らが意図的に容器を開いたり、破壊したりすることで、内容物を外に晒して他人に見せることができる

目標領域：主体自らが意図的に内心・本心・考え・意図を他人に知らせることができる

(225)(226) とともに〈腹〉で示した (138)(139) と類似する一方で、二つの違いを指摘できるであろう。一つは、(223) に関して〈内容物を留める〉ことを表す表現が多様であるという点である（〈腹〉で観察したのは「腹に納める」のみ）。もう一つは、〈腹〉で見たような他人による詮索の行為（e.g. 「腹を探る」）が、本研究の調査に基づく限り〈胸〉とは結びつかないという点である。これは、〈腹〉と〈胸〉に隠される精神作用の性質が異なることに由来すると考えられる。先に、〈腹〉に納められる〈内心・本心〉とは、単に企みの実現のような私利の獲得のみならず、それを伝えることで己の社会的立場が揺さぶられるのを防ぐという不利益の回避を見据えた性質を持つことを論じた。これに対し、〈胸〉に納められる〈内心・本心〉は、社会的衝突の文脈によって特徴付けられるとは言い難い（「胸に一物」を除く）。¹⁷⁶ 田中 (2003, p.118) が〈胸〉と結びつく感情を「悲しみや感動など共感を呼びやすい感情、また複雑で微妙な感情」と説明したように、〈胸〉に納められる精神作用はむしろそれを明かすことで他人の同情を誘うものである。これに関して、下の用例を見てみよう。

(227) 「いったい、自分は何（誰）と戦っているのだろうか。」そのようなマイナスの考え方が自分を支配し、自問自答する時間が過ぎていったときのことだった。信頼できる知人にはじめて胸の内を明かした。その知人は私に、

「人はつねに生まれ変わることができるよ。でもそれは自分次第だけだね。」

と、アドバイスし、さらに次のような言葉を続けた。

https://juutaku.co.jp/company/contribute_1-7.html

「腹の内を明かす」が〈企みを他人に知らせる〉ことを表すのに対し、「胸の内を明かす」が典型的

¹⁷⁶ 「胸が一物」という表現は、現代では「腹に一物」と比べて使用頻度が低いと考えられる。Google フレーズ検索によれば、「腹に一物」が約 43,400 件、「胸に一物」が約 19,300 件である（2023 年 12 月 3 日時点）。

には〈悩みや不安を他人に知らせる〉ことを表すように、〈胸〉に納められた〈内心・本心〉は、それを明かすことで他人からの援助や歩み寄りを得られることもあろう。それでも明かすことに主体が抵抗を感じるのは、他人にどのような反応をされるか確証を持ってないからである。一方、他人にとっては自身に関わる利害が絡むことがないために、無理に自分からその人物の「胸を探る」必要はないのである。¹⁷⁷

さて、このほかに〈腹〉と共通する〈胸〉表現として、〈度量・包容力〉や〈理解・納得〉に関するものがある。

(228) 〈胸が {広い／狭い}〉 → 〈度量・包容力が {ある／ない}〉

胸が広い／胸が狭い

(229) 〈胸に内容物が入る〉 → 〈理解・納得する〉

胸に落ちる

また、下に挙げるのは、〈腹〉では観察されなかった〈記憶〉に関わる表現である。

(230) 〈胸に内容物が浮上する〉 → 〈記憶が想起される〉 (〈考えを思いつく〉)

胸に浮かぶ

内容物が一度容器の中に入ると中に留まり続けるが、時間とともに奥に収容されて取り出しにくくなることもある。有蘭 (2009, pp. 187–188) が「頭に浮かぶ」の表現に対して考察しているように (詳細は 3. 6. 3 節で言及する)、容器の奥にあった内容物が再び上層部に浮かび上がってくことで、意識される状態になるのである。(228)–(230) の表現に基づく存在的対応・認識的対応は次のようにまとめられる。

(231) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	胸 (心)
内容物	考え (他人の言動) / 知識・情報 (記憶)
容量の容積	度量・包容力

¹⁷⁷ 田中 (2003, p. 116) でも、「腹の探り合い」はあるが「胸の探り合い」はないことが指摘されている。

(232) 認識的対応

a. 起点領域：容器に内容物が入ることで、その内容物は留まり続ける

目標領域：(他人の) 考えが胸（心）に入ることによって、主体が受け入れた考えとして定着する

b. 起点領域：容器の奥底に入り込んだ内容物が上層部に浮かび上がることで、所有者が再び視認できるようになる。

目標領域：胸（心）の奥底に入り込んだ知識・情報が上層部に移動することで、主体が再び意識できる状態になる

最後に、〈容器〉と〈内容物〉の関係が、石板のような〈記録物〉と〈文字〉の関係に拡張した表現を挙げる。

(233) 〈胸に銘刻する〉→〈記憶する〉

胸に刻む／胸に彫り付ける

(233) が特に強い〈記憶〉の意味を持つのは、石板などに一度刻まれたり、掘り付けられたりした文字は半永久的に除去できないという〈銘刻〉に関する知識を我々が持っているためと考えられる。これらの対応関係についてもまとめておこう。

(234) 存在的対応

起点領域：

目標領域：

記録物（石板／木版など）

胸（心）

文字

知識・情報（記憶）

(235) 認識的対応

起点領域：石板や木版に文字を彫りつけると、その文字は半永久的に残り続ける

目標領域：知識・情報を胸（心）に彫りつけることによって、それは忘れがたい記憶になる

3.5.3.3 〈具象物としての胸〉

次に、〈胸〉が〈容器〉とは異なる〈具象物〉として理解されたメタファー表現を観察する。〈腹〉がそうであったように、〈胸〉にも〈身体（部位）〉の性質を逸脱した〈具象物〉としての概念化を受けた表現が見つかる。スキーマレベル I (L2) で見た表現も多くが〈胸〉の身体経験を何らかの物事に喩

えたメタファー表現であったが、ここで示すのは L2 よりも表現の成立を促す共起経験が比較的不明瞭で特定が困難なものである。しかし、以下に観察する表現も体感としての動機づけが完全に消失しているとは言い難い。

まず下に示すのは、〈胸〉に何らかの外的な衝撃が加わり、それに対して〈胸〉が何らかの反応を示す表現である。句全体の意味としては〈感銘を受ける〉ことを表す。

(236) 〈物体が胸に接触する〉→〈感銘を受ける〉

胸に当たる

(237) 〈胸が刺激を強く感じる〉→〈感銘を受ける〉

胸に応える

このうち、(237)の「胸に応える」の「こたえる」は、現代では〈刺激などを受け、それを強く感じる〉という意味を持つ。『日常語の意味変化辞典』や『日国』によれば、この語は「答える」と同源で、上代より〈返事する・回答する・反応する〉の意味を持ち、元々他からの働きかけに応じることを表していたという。これが中世（鎌倉時代）ごろより、「失敗が身に応える」のように、〈刺激を身に染みて感じる〉という意味として用いられるようになった（『日常語の意味変化辞典』）。「胸に応える」は、「応える」の後者の意味をもとに、「胸」をその感応部位として明示した表現であると考えられるが、いずれも〈胸〉が刺激に対して敏感に反応する部位としての理解を前提としている。特定の身体経験は不明であるが、感覚・運動レベルやスキーマレベル I でみたように、喜怒哀楽するにつけて何らかの生理的変化が生じる〈胸〉の身体性に支えられた表現であることは確かであろう。

(236)(237)に基づく存在的対応・認識的対応を(238)(239)に示す。「当たる」「応える」のみを以て〈胸〉が別の〈具象物〉に喩えられているとは言い難いため、起点領域における〈胸（心）〉との対応概念を「(〈具象物〉)」と表記した。もし「胸」が文字通り〈身体部位〉とみなされているとすれば、〈胸〉を目標領域の〈心〉から分離して起点領域に配置することができるであろう。

(238) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
物体	感銘の要因
(具象物)	胸（心）
刺激の強さ	感銘の強さ（持続性）

(239) 認識的対応

起点領域：物体が何かに接触することで、刺激が伝わる。

目標領域：印象の強い物事を経験すると、胸（心）がそれを敏感に感知する。

このような外的刺激に敏感な部位としての〈胸〉の理解は、安定性に関する〈腹〉表現にも通じるところがある。たとえば、「腹を括る」や「腹を据える」という表現は、将来何らかの出来事（刺激）によって〈腹〉が安定性を失わないよう備えることを表す。しかし、安定性の概念と結びつく〈胸〉表現は、今回の調査で得られたものとしては下に示す(240)のみであり、この表現も現代で使用されることは極めて稀であろう。

(240) 〈胸を安定させる〉→〈覚悟・決心する〉

胸を据える

Google フレーズ検索（2023 年 12 月 3 日時点）によれば、「腹を据える」「腹を据えた」がそれぞれ約 16,800 件、8,080 件であるのに対し、「胸を据える」「胸を据えた」はそれぞれ約 6 件、約 4 件である。

「胸」を用いた用例が極めて少なく、現代日本語表現としては扱うべきではないかもしれない。「胸を据える」は「腹を据える」の表現をもとに、〈胸〉と〈腹〉の空間的な隣接性によって生じた表現ではなかろうか。

次に、〈胸〉が〈燃焼物〉に喩えられた表現を観察してみよう。

(241) 〈胸が燃焼する〉→〈(恋慕で) 苦悶する〉

胸が焦がれる／胸を焦がす／胸を焼く

(212) で見た「胸に焚く火」では、〈容器〉としての〈胸〉と〈内容物（火）〉としての〈恋慕〉の感情が分離した要素として捉えられていたのに対し、(241) では〈胸〉そのものが〈燃焼物〉とみなされている。これらの表現は明らかに〈愛は火である〉(LOVE IS FIRE) (e.g. Kövecses, 2000, p. 26) のメタファーに基づいており、さらにいえば〈恋慕〉の感情経験に伴う〈熱〉の感覚（体温変化）を身体基盤としている。その意味ではスキーマレベル I に配置することも可能であるが、3. 5. 1 節でも述べたように、情動経験に伴う体温変化は胸部固有の経験とまでは言い難い。つまり、体温変化に加えて〈感情の座としての胸〉という概念レベルでの理解が大前提となり、表現の成立を動機づけていると考えられる。このような理由から、(241) の表現をスキーマレベル II～概念レベルとして分類した。

(241) で注目すべきは、「焦がす」「焼く」など〈胸〉を〈燃焼物〉として消耗し、損なわせることを

含意する語が用いられているという点である。「胸を焦がす」などが単に〈恋慕〉だけでなく、それに伴う〈苦悶〉までを表すのはそのためである。これらの理解に関わる認識的対応は有蘭(2009, p.229)が〈感情の高揚を、固体の燃焼を通して捉える〉メタファーを論じる中でも説明しているので、それを参考に〈胸〉表現に限定し、適用する。

(242) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
物体	胸（心）
火	恋慕
火の大きさ	恋慕の強さ

(243) 認識的対応

起点領域：燃焼によって火のついた物体（燃焼物）は消耗され、損なわれる。

目標領域：恋慕の感情によって、胸（心）が損なわれ、精神的に苦悶する。

最後に、〈胸〉を〈考え〉（あるいは意志）を司る主体として擬人化する表現を示す。

(244) 〈胸に尋ねる〉→〈自問する〉

胸に聞く

この表現は、〈胸〉を自己から分離することで自らを顧みてよく考えること、すなわち〈自問する〉ことを表す際に用いられる。先に見た「胸に手を当てる」とともに使用されることも多く、たとえば以下の用例では、「聞いた」あとに返答の「声」が返ってくる様子が描写されている。「心の内は見えにくい」とあるように、自らの一部である〈胸（心）〉は時に客観的に見つめ直す必要があるのである。

(245) 胸に手をあてて聞いてみた。私の胸から聞こえる声は、感謝の声より愚痴の声の方が多いように思えた。心の内は見えにくいし醜い。そんな私だなと、しみじみ思った。しかし、自分を知ることが大切なことだと思う。<http://yuurinji.com/?p=2046>

3.5.4 慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語

最後に、句や合成語の身体部位詞（とその他の構成要素）が、各々の意味拡張を経たと考えられる表現を挙げる。

(246) 「胸」が単独で〈心中〉(心中での／心中の)を表す例

むな勘／むな勘定／むな算用

(247) 「胸」が単独で〈気持ち・考え・意図〉を表す例

胸次第／胸が決まる／胸を定(さだ)める

(246) の「勘(定)」 「算用」は単独で精神義を持つ構成要素であり、それに「むな」が加わることで、句全体で〈心のうちでの見積もり・計画(考え・意図)〉を意味する。ここでの「胸」「むな」は精神そのもの、あるいは精神活動を行う部位としての意味を単独で担っているといえよう。また、(247) の「胸を定める」は意味的には「胸を据える」と同分類であるが、「定める」の物理的な固定の原義は「据える」よりも薄く、歴史的にみても初期から〈決定する〉といった抽象的な意味で用いられている(『日国』「さだ・める【定】」)。

3.5.5 観察のまとめ

以上の観察をもとに、現代日本語の〈胸〉の慣用句の類型を次のようにまとめる。L3 については、〈腹〉表現の分析と同様に、〈胸〉が〈容器〉(CONTAINER)と理解されているか(L3-C)、〈具象物〉((CONCRETE) OBJECT)として理解されているか(L3-O)で下位分類を行った。

表 14 現代日本語の〈胸〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）

		字義的意味		慣用的意味（精神義）		例
L1	1	しぐさ	胸を手で触る	（不安などの）感情を抑制する・ （不安などの）感情が解消する	感情の抑制・解消	胸を撫で下ろす
	2	痛み	胸が痛い	悲しい・辛い・不安だ	悲しみ・辛さ・不安	胸が痛い
	3	苦しさ （閉塞感）	胸が苦しい	悲しい・辛い・不安だ	悲しみ・辛さ・不安	胸が苦しい
	4	動悸	胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する	不安を覚える・喜ぶ・期待する	不安・喜び・期待	胸が高鳴る
	5	不快感	胸が不快だ	不快だ・怒りを覚えるような	嫌悪・怒り	胸悪い
	6	体温変化	胸の温度が上がる	感動する	感動・恐怖	胸が熱くなる
	7		胸の温度が下がる	恐れる		胸を冷やす
L2	8	動揺・鎮静	胸が動揺する	不安を覚える・喜ぶ・期待する	不安・喜び・期待・感情の 解消	胸が騒ぐ
	9		胸の動揺が収まる	（不安などの）感情が解消する		胸が収まる
	10	衝撃	胸に衝撃を与える	驚く・不安を覚える・感銘を受ける	驚き・不安・感銘	胸をつく
	11	損傷	胸を傷つける	悲しい・辛いと感じる・感銘を受ける	悲しみ・辛さ・感銘・苦悶	胸を刺す
	12		胸が裂ける	悲しい・辛いと感じる		胸が裂ける
	13		胸を削る	苦悶する		胸に鑢を掛く
	14	圧迫	胸が圧迫される	悲しい・辛いと感じる・不安を覚える・驚く	悲しみ・辛さ・不安・驚き	胸が潰れる
	15	閉塞・ 閉塞の解消	胸が {塞がる／つまる}	悲しい・辛いと感じる・不安を覚える・感情や思い が高ぶる	悲しみ・辛さ・不安・感情 の高ぶり・感情の解消	胸が塞がる 胸がつまる
	16		胸が空く	（不安などの）感情が解消する		胸がすく
L3-C	17	内容物の 増量・乱れ	胸に内容物が満ちる	感情や思いが高ぶる	感情の高ぶり	胸が一杯になる
	18		内容物が胸に収まり切らない	感情や思いが高ぶる		胸に余る
	19		胸の内容物が煮える	怒る	怒り	胸が煮える
	20		胸の内容物が増え、胸が膨張する	喜ぶ・期待する	喜び・期待	胸を脹らます
	21		胸の中の火	苦悶・恋慕	苦悶・恋慕	胸に焚く火
	22	空間の視界を遮 る天候とその解 消	胸の中の視界を遮る天候	不安	不安・感情の解消	胸の霧
	23		胸の中の天候が解消し、視界を遮るものが 消える	（不安などの）感情が解消する		胸が霽れる
	24	反響	刺激に胸が反響する	感銘を受ける	感銘	胸に響く
	25	内容物の存在・ 保持	胸の内部	内心・本心	内心・本心	胸の内
	26		胸に内容物 {がある／を留める}	内心・本心・考え・意図 {がある／を明かさない}	内心・本心・考え・意図	胸に一物 胸に納める
	27	内容物の露呈	胸 {を割る／の中を晒す}	内心・本心を知らせる	内心・本心	胸を割る 胸を明かす

		字義的意味		慣用的意味（精神義）		例
L3-C	28	対象の受容	胸に内容物が入る	理解・納得する	理解・納得	胸に落ちる
	29	内容物の浮上	胸に内容物が浮上する	記憶が想起される（考えを思いつく）	記憶	胸に浮かぶ
	30	銘刻	胸に銘刻する	記憶する		胸に刻む
	31	容器の規模	胸が {広い／狭い}	度量・包容力が {ある／ない}	度量・包容力	胸が広い 胸が狭い
L3-O	32	刺激と感知	物体が胸に接触する	感銘を受ける	感銘	胸に当たる
	33		胸が刺激を強く感じる	感銘を受ける		胸に応える
	34	燃焼	胸が {焦がれる／燃える}	（恋情で）苦悶する	苦悶・恋慕	胸が焦がれる 胸を焼く
	35	問いかけ	胸に尋ねる	自問する	思考	胸に聞く

表から明らかなように、〈胸〉は比喩表現として用いられる場面依存的な身体経験が多い。L1（感覚・運動レベル）に示す通り、時間的隣接性に基づくメトニミー基盤として利用される生理的感覚・反応には、[2] 痛み・[3] 苦しさ（閉塞感）・[4] 動悸・[5] 不快感・[6], [7] 体温変化が含まれる。また、情緒変化によって乱れた呼吸や鼓動を鎮めるために、手で胸に触れる [1] しぐさの表現も L1 に配置される。さらに、このような身体経験が別の事象へと喩えられることで、L2（スキーマレベル I）のメタファー表現が生み出される。

L3（スキーマレベル II～概念レベル）では、大きく分けて〈精神作用の容器としての胸〉（L3-C）、〈具象物としての胸〉（L3-O）の二種類のメタファー的理解が確認される。前者はさらに [17]-[27], [29] の〈特定の精神作用を納める胸〉と [28], [30]-[31] の〈物事を受け容れる胸〉という二つの下位区分が可能であろう。一方、〈具象物としての胸〉は該当する表現数が少ないため必要十分な一般化をし難いものの、[32]-[34] の〈情動的感応・反応を司る胸〉と [35] の〈思考を司る胸〉とに分けられると考えられる。

L3 には L2 と比べて相対的にメトニミー基盤を想定し難い感情表現（精神作用に伴う即時的な身体経験を見出し難いもの）や、〈考え・意図〉〈記憶〉などの情緒面以外に関する表現が含まれるが、これらの表現は背後にある概念メタファーの起点領域と目標領域の知識の構造的対応に基づいて成立している。たとえば、[22], [23] に関する「胸の霧」「胸が霽れる」という表現は、〈胸は精神作用の容器である〉と〈人間の心の状態（の変化）を、天気（の変化）を通して見る〉（杣山, 2006, 第 4 章）という概念メタファーに基づく対応によって成立している。つまり、〈空間に霧や雲が存在すると、先にあるものが見えず迷いがちになる〉ことと〈それが消える（晴れる）ことで、遠くを見ることができ迷うことがなくなる〉という事象関係は〈不安〉と〈不安の解消〉という関係に対応づけられる。¹⁷⁸ ただし、L3 に分類される表現の全てにおいて、L1, L2 で見たような生理的感覚・反応の動機づけが認められないわけではない。たとえば〈具象物としての胸〉のうち、[34] の燃焼に関する表現（e.g. 「胸を焦がす」）には体温変化が動機付けとして想定される。

また、L2 の中には生理的感覚をメタファー的に表現したものなのか、それとも概念メタファーに基づくものなのか判別し難いカテゴリーも存在する。本稿では [10], [11] 衝撃・刺撃（損傷）や [15] 閉塞を表す表現を 3.5.2 節で取り上げ、場合によっては概念メタファー（L3-C, L3-O のレベル）として扱うべき可能性を完全に排除できるものではないことを指摘した上で、それでも L2 に分類される表現に体感としての身体経験が強く残存することを論じた。

¹⁷⁸ 3.5.3.2 節(215)で説明した通り、この場合の〈胸〉は厳密には〈空間〉とする方が正確であるが、〈霧・雲〉と〈空間〉の関係は〈容器〉と〈内容物〉の包含関係と同様に分析できることから、〈容器〉のメタファーとして分類している。

〈胸〉を〈腹〉と比較すると、〈容器〉としての理解と〈具象物〉としての理解の二様式は〈腹〉と共通しており、さらに〈容器としての胸〉の理解の三種の下位分類のうち、〈特定の精神作用を納める胸〉と〈物事を受け容れる胸〉は〈腹〉と共通している。¹⁷⁹しかし、より具体的なレベルで観察すると、〈胸〉は〈腹〉と異なる点が多い。たとえば、〈容器としての胸〉の理解のうち、〈胸〉を〈空間〉に見立て、天候に関する描写を通じて〈不安〉などの感情を表す [22], [23] のカテゴリー、〈胸〉を木版・石板などの〈記録物〉に見立て、そこへの銘刻によって〈記憶〉を表す [30] のカテゴリーは〈胸〉特有である。これらは身体部位に対する見立てだけでなく、それによって表現される精神作用も〈胸〉に固有のものである。

また、身体部位に対する描写は似ていても、それによって表現される精神作用に違いが見られる場合もある。たとえば、[17], [18] のように内容物が増える・一杯である様子を描写する場合でも、その容器が〈腹〉の場合、〈満足〉や〈不満〉といった感情が表されるのに対し (e.g. 「腹一杯」「腹ふくる」)、〈胸〉の場合は種類が厳密に特定されない〈感情の高ぶり〉あるいは〈喜び・期待〉が表される (e.g. 「胸一杯」「胸を脹らます」)。

加えて、〈精神作用の容器としての腹〉の理解は、精神作用を隠すことを表すために活用されやすいことを述べたが、[18], [20] の「胸を膨らます」「胸が溢れる」(〈喜び・期待〉) や「胸に余る」(〈感情の高ぶり〉) などの表現のように、感情の抑圧・隠蔽を前提としない〈胸〉表現が存在する。[26] に関する「胸に秘める」のように〈内心・本心を隠す〉という意味を持つ表現も存在するが、その性質は〈腹〉に隠される〈内心・本心〉とは異なっている。〈腹〉に〈内心・本心〉(〈考え・意図〉や〈怒り〉〈不満〉を含む) を隠すのは、他者との関わりの中で自らの利益達成や社会的不利益の回避を意図したものであり、対人的・社会的でありながら主体志向の性質を有している。つまり、田中 (2003) のいう「自己保存的」な精神である。一方で、〈胸〉に納められる〈内心・本心〉は、それが明かされることで他に不利益が及ぶようなものではない。複雑さ・繊細さ (田中, 2003) を持つ〈内心・本心〉であり、主体としては表出が躊躇われるが、他人に知られることで同情や援助を得られる可能性を持つものである。これらの違いは、他者による探索を表す表現に限り〈胸〉で用いられにくいという形で言語的にも反映されている (e.g. 「{腹/*胸} を探る」)。ここで、本研究では新たに複雑さ・繊細さを持つ〈内心・本心〉のプロトタイプシナリオを次頁 (248) に定める。〈内心・本心〉として、(227) で見たような情緒的な要素を含みつつ具体的な思考内容を伴う精神作用を想定し、「思い」という語を用いる。存在が想定されるが、今回慣用表現としての証拠が得られなかったステージは () で示した。

¹⁷⁹ 〈人格を納める胸〉としての理解様式は現代日本語では見つかりにくい、「胸汚し」など、歴史的に見るといくつか該当する表現がある。詳しくは第4章で取り上げる。

(248) 〈胸〉に納められる〈内心・本心〉に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：きっかけとなる事態の経験)

(ステージ2：思いが主体の胸の中に発生する)

ステージ3：主体が(傷つくことを恐れ)その思いを胸の中に留める「胸に秘める」

(ステージ4：主体が一人でその思いを処理しきれなくなる)

ステージ5：主体が覚悟を決め、胸の中を明かす「胸を明かす」

ステージ6：他人にその思いが知られる (cf. (227))

これに対し、「胸一杯」や「胸が溢れる」などの表現が基本的に〈感情が甚だしい〉さまを表すのみで、必ずしも表出までを意味しないことから示唆されるように、〈胸〉に納められる感情のなかにはその存在や程度にのみ焦点が絞られ、表出はそもそも問題とされないものが含まれる。そのような感情については、(248)とは別に下のようなプロトタイプシナリオを想定する必要がある。

(249) 〈胸〉に納められる隠す必要のない感情に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：きっかけとなる事態の経験)

(ステージ2：感情が主体の胸の中に発生する)

ステージ3：感情が増大する(と同時に胸が膨張する)「胸一杯」「胸が膨らむ」

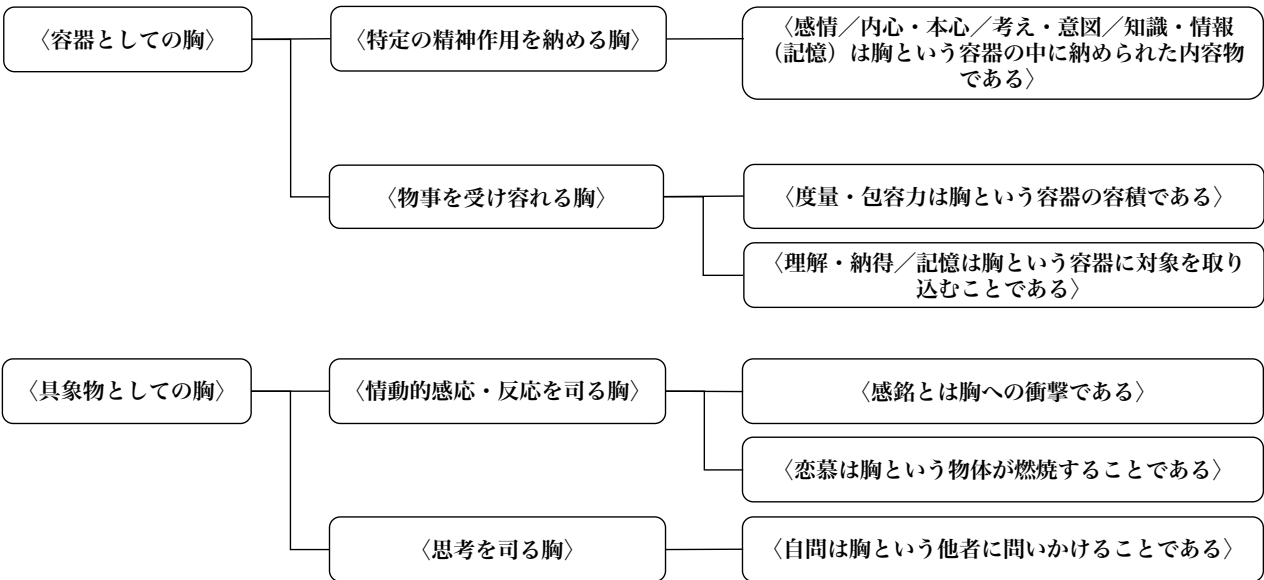
(249)で重要なのは、感情が増大しても主体はそれを抑圧しないが、かといって意図的に表出を試みるわけでもないという点である。つまり、主体は感情の表出に意識的な介入をしないと考えられ、その理由からシナリオの中では表出のステージと主体への言及を一切省いている。ただし、このシナリオについては、一つのステージに対する言語表現のみしか得られていないため、現時点では独立したシナリオを設定する妥当性が低い。今後の追加調査が必要である。

最後に〈具象物〉としての理解に目を向けると、〈胸〉と〈腹〉で重なる部分は見られない。〈腹〉では〈怒り〉(e.g.「腹が立つ」)や〈覚悟・決心〉(e.g.「腹を据える」)を表現するための安定性維持の概念が特に重要視されていたのに対し、〈胸〉はそのような傾向が見られず、[32], [33]のように刺激に対して呼応し、[34]のように燃焼する具象物として描かれることで感情と結びついている。¹⁸⁰ また、「胸に聞く」の一例が該当するのみであるが、独立意志を持つ存在として〈胸〉を客体化することで、思考を司る部位として捉える[35]のような理解様式も見られる。

¹⁸⁰ 〈胸〉はL2において、動揺し、傷つく生物・物体として描かれる表現が豊富に含まれる。L3との違いは、それらの背景に時間的隣接性に基づく特定の身体経験が比較的明確に認められるかどうかである。

以上を要するに、〈胸〉の文化モデルは L1 の生理的感覚・反応に基づくメトニミー、そこから派生した L2 のメタファー、さらにその上に位置する L3 の〈容器としての胸〉のメタファー、〈具象物としての胸〉のメタファーによって構成されている。L3 のメタファーは一般性の高いレベルでは〈腹〉と共通しているが、具体的なレベルでは差別化が可能である。先に述べた〈容器としての胸〉のメタファー、〈具象物としての胸〉のメタファーの各々の下位分類に基づき、〈精神〉を目標領域に据えた概念メタファーを定式化して次のように対応づける。

図 14 精神作用に関する現代日本語の〈胸〉の理解と概念メタファー



さらに図 14 のうち〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報（記憶）は胸という容器の中に納められた内容物である〉と〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉のメタファーについては、〈内容物〉が具体化された下位レベルのメタファーが確認される。表 15 は〈内容物〉が具体化された〈容器〉メタファーを抽出し〈腹〉と〈胸〉で比較したものである。

表 15 〈内容物〉が具体化された〈容器としての腹〉〈容器としての胸〉の下位メタファー

	〈腹〉〈胸〉共通	〈腹〉のみ	〈胸〉のみ
〈...は {腹／胸} という容器の中に納められた内容物である〉	〈怒りは {腹／胸} の中にある熱流体である〉 cf. 〈感情の高揚を、容器内の流動体の熱を通して捉える〉 (有蘭, 2009)	〈怒りは腹の中に棲む虫である〉 〈怒りは腹の中で燃える火である〉	〈恋心は胸の中で燃える火である〉 〈不安は胸という空間の視界を遮る天候である〉 〈感銘は胸という空間に音が反響することである〉
〈...は {腹／胸} という容器に対象を取り込むことである〉			〈記憶は胸という物体に銘刻することである〉

〈腹〉〈胸〉ともに〈内容物〉を〈火〉とするメタファーは共通して見られるものの、それが〈怒り〉と対応するか、〈恋心〉と対応するかで相違する点に注目されたい。〈虫〉を〈怒り〉とみなす表現については、歴史的に見ると〈腹〉だけでなく〈胸〉においても存在するが(e.g.「胸の虫」)、この点については次章での歴史的調査にて報告する。

3.5.6 〈胸〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤

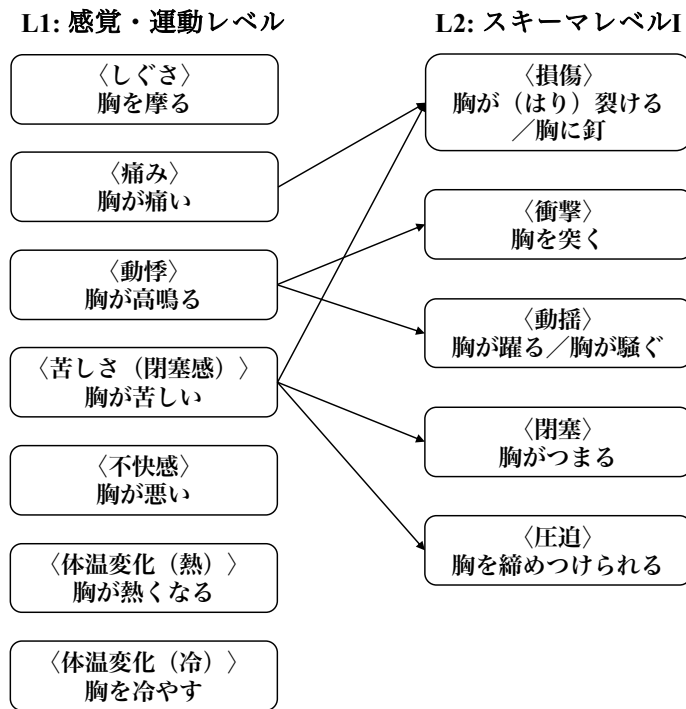
〈胸〉の文化モデルがどのような身体基盤・文化基盤に基づいて成立しているかについて、引き続き〈腹〉との比較を交えながら検討していこう。表 14 で示した通り、精神作用を表す〈胸〉の慣用表現最大の特徴は、L1 や L2 に分類されるような時間的隣接性に基づくメトニミー表現・メタファー表現が豊富であるという点である。本調査で観察された生理的感覚・反応には、痛み・動悸・苦しさ(閉塞感)・不快感・体温変化が含まれる。これらの感覚・反応は、「胸が痛い」「胸が苦しい」のようにその体感を文字通り描写するメトニミー表現としてのみならず(L1)、「胸が騒ぐ」「胸がつまる」のように喩えを通じて表現される(L2)。次頁 図 15 に示す通り、L1 で観察される感覚・反応は L2 の特定のカテゴリーとの大まかな対応が想定される(図の矢印はメタファーによる身体経験の描写の拡張を表す)。¹⁸¹

L1 のうち、しぐさは動悸や呼吸の乱れを整えるためのものであり、同じ L1 の動悸や苦しさの経験と互に関係性を持っている。また、L1 の不快感と体温変化については L2 で対応するものがない。3.5.3.3 節で述べた通り、体温変化は「胸を焦がす」や「胸を焼く」などの燃焼に関する表現を動機づけることは確かであろうが、感情経験に伴う体温変化を胸部固有の経験として位置付けるための生理学的根拠は乏しく、表現の成立には〈胸〉を精神の座とみなす概念レベルでの理解が必要になると考えられる。さらに「胸焼け」が「胸が悪い」と同じ〈(胃酸過剰による)突き上げるような不快感〉を意味を持つことからわかるように、「焼く」を支える身体基盤が体温変化である、あるいは体温変化のみであるとは言い切れない。また、L2 の分析において、「胸がつまる」などの表現に体感の強く反映された用例と、感情が〈内容物〉と対応し、構造的成立したメタファー表現として用いた用例が存在す

¹⁸¹ L1 と L2 の対応付けに関して示唆的と思われる研究を紹介しておきたい。楠見ほか(2010)は、痛みを表す言語表現(比喩表現(直喩)、擬態語)を対象に質問紙による評定データを取り、身体部位、身体感覚的特徴、認知的評価の対応関係を明らかにしている。興味深いことに、調査対象となった痛みの比喩表現(直喩)リストには、破壊に関する比喩(e.g.「突き刺すような」「えぐられるような」)のみならず、本研究であればそれぞれ苦しさ(閉塞感)・体温変化(熱)と結びつけて考えるような圧迫に関する比喩(e.g.「締めつけられるような」)と、燃焼に関する比喩(e.g.「焼き焦げるような」「焼けるような」)も含まれ、これらの表現クラスは胸部の痛みを描写する表現として用いられやすいことが報告されている。本稿では、精神作用と結びつく生理的感覚・反応を分け、かつそのメタファーとして図 15 のような大まかな対応を想定するが、楠見ほか(2010)の研究が示唆するように、比喩表現を支える身体感覚に対し、こうした分析的なアプローチがどこまで妥当であるのかについては検討の余地がある。

ることを述べた。このような表現は、場合に応じて L3 として扱われるべきである。

図 15 〈胸〉におけるメトニミー表現 (L1) とメトニミー×メタファー表現 (L2) の対応



L1 や L2 に該当する感情の共起経験としての生理的感覚・反応の豊富さは、〈腹〉では見られなかった〈胸〉の大きな特徴であり、感情経験のたびに繰り返されるこのような〈胸〉の場面依存的経験こそが、〈精神の座としての胸〉という L3 での〈胸〉の一般化された理解の成立・定着を促す重要な身体基盤として機能すると考えられる。有菌 (2009) が述べた〈胸〉の身体経験の豊かさは、今回のメトニミー表現、共起性基盤を持つメタファー表現 (メトニミー×メタファー) の観察を通じて具体的に裏づけられる結果となるだろう。

また、〈胸〉には気管や肺などの呼吸器官に加え、食道や胃などの摂食活動に関わる器官が位置しており、空気の取り込み、排出や飲食物の取り込みが行われている。¹⁸² 〈腹〉と同様に、本来容器としての性質を持つ〈胸〉が〈容器〉スキーマと結びつき、L3 での〈容器〉メタファーを形成するのはある意味当然の帰結である。

もちろん、〈精神の座としての胸〉の文化モデルがこのような身体基盤のみによって成立していると

¹⁸² 解剖学的には、「胸腔」と「腹腔」の境は横隔膜であるとされ、胃は横隔膜よりも下すなわち腹腔に収まる臓器として扱われている (『日本大百科全書』「横隔膜 (おうかくまく)」)。しかし 1.2 節で見たように、言語的には「腹」だけでなく「胸」も〈胃〉の意味を持つことから、このような通俗的な理解を前提に、ここでは〈胸〉には「食道や胃などの摂食に活動に関わる器官が位置」とした。

は言い難い。五臓思想において、〈胸〉は〈腹〉と同様に五臓を納める重要な身体部位であり、さらに言えば五臓の中心となる心（の臓）が位置するのは〈胸〉である。〈胸〉に位置する心や肺には、〈喜〉〈悲・憂〉の感情が対応づけられていることも、今回確認された〈胸〉の精神作用と整合性を有している。〈胸〉は上で論じたような身体基盤に加え、五臓思想およびその根底にある心身一如の考えとしての文化基盤の支えを得ることで、精神の座としての理解を得たと言えるだろう。しかしながら、言語表現の特徴から判断する限り、多くの〈胸〉表現を支えているのは身体経験に動機づけられた比喩である。精神の座としての〈胸〉の文化モデルの中心にあるのは、身体性を通じた感情の座としての〈胸〉の理解ではないだろうか。

ここまでの考察をもとに、精神作用に関する〈胸〉の文化モデルの身体基盤・文化基盤を図 16 にまとめ、3.2.3 節で定めた RQ1「現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。」に対する二つ目の回答とする。

図 16 現代日本語の〈胸〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

	L1	L2		L3
	感覚・運動レベル	スキーマレベルⅠ	スキーマレベルⅡ	概念レベル
	メトニミー表現	メトニミー × メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・ イメージスキーマ	シナリオ・ 概念メタファー
	しぐさ「胸を撫で下ろす」		〈容器〉	〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報（記憶）は胸という容器に納められた内容物である〉
	痛み「胸が痛い」	動揺「胸が騒ぐ」	「胸に畳む」	〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉
	苦しさ「腹が苦しい」	鎮静「胸が収まる」	〈垂直性〉	〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉
	動悸「胸が高鳴る」	衝撃「胸をつく」	「胸に込み上げる」	〈感銘は胸への衝撃である〉
	不快感「胸が悪い」	損傷「胸が裂ける」	〈バランス〉	〈恋慕は胸という物体が燃焼することである〉
	体温変化「胸が熱くなる」「胸を冷やす」	圧迫「胸が潰れる」 閉塞「胸がつまる」 閉塞の解消「胸がすく」	「胸が煮える」	〈自問は胸という他者に問いかけることである〉
表象・例				
基盤	痛み、動悸、苦しさ 不快感（内臓感覚）（、体温変化）		摂食活動、呼吸	五臓思想
認知操作	メトニミー操作（共起的相関）	抽象化・類推（メタファー）		統合・複雑化

(164) (下に再掲) で示したように、スキーマレベルⅡに配置したイメージスキーマのうち、〈バランス〉と〈コントロール〉は〈腹〉では〈バランスの喪失〉→〈コントロール（制御）〉という連続する過程の中で関係づけられていたことを思い出されたい。

(250) 〈腹〉に納められる負の感情に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：きっかけとなる事態の経験)

ステージ2：感情が主体の腹の中に発生する「腹に持つ」

(ステージ3：主体がその感情を腹の中に留めようとする)

ステージ4：感情が増大する（と同時に腹が膨張する）「腹が煮える」「腹ふくる」

ステージ5：主体は制御を失い、腹の中に感情を留めておけなくなる「腹に据えかねる」

(ステージ6：主体が感情を表出する)

(=(164))

今回の調査で得られた表現に基づく限り、〈胸〉の場合は両者が連続するシナリオを想定することが難しい。というのも、「胸が溢れる」や「胸が煮える」などのように、度を超した感情を描写する表現はあるものの、その後の制御を言語化した表現は現代語としては見つからないからである。〈内心・本心を心中に留めておく〉ことを表す表現として「胸に秘める」「胸に畳む」などがあるが、これらは上に挙げた表現とは異なるシナリオの中で理解されると考えられる。(248) (下に再掲) で示したように、「胸に秘める」「胸に畳む」という表現などで表される〈内心・本心〉は、〈怒り〉の感情のように主体による制御がない限り外に出ていこうとする指向性を備えておらず、主体が理性を以て抗うような制御を含意しない。その意味で、精神作用に関する現代日本語の〈胸〉表現と〈コントロール〉スキーマとの関係は限りなく弱いと言えるだろう。

(251) 〈胸〉に納められる〈内心・本心〉に対して想定されるプロトタイプシナリオ

(ステージ1：きっかけとなる事態の経験)

(ステージ2：思いが主体の胸の中に発生する)

ステージ3：主体が（傷つくことを恐れ）その思いを胸の中に留める「胸に {秘める／畳む}」

(ステージ4：主体が一人でその思いを処理しきれなくなる)

ステージ5：主体が覚悟を決め、胸の中を明かす「胸を明かす」

ステージ6：他人にその思いが知られる (cf. (227))

(=(248))

3.6 現代日本語の〈頭〉表現

本節では、現代日本語の〈頭〉表現の精神義を〈腹〉〈胸〉と同じ手順で分析することで、精神作用の座としての〈頭〉の文化モデルが、どのような身体基盤・文化基盤と比喩を通じて成立しているのかを明らかにする。下に分析結果の要点を示す。

- 感覚・運動レベル (L1) やスキーマレベル I (L2) に該当するメトニミー表現・メタファー表現は〈胸〉よりも少なく〈腹〉と同程度で、〈怒り〉を含む情緒的興奮・抑制と、過度な〈思考〉を表す表現のみが該当する。
- スキーマレベル II～概念レベル (L3) では、〈頭〉の概念化として〈具象物〉と〈容器〉の類型があり、〈腹〉〈胸〉と共通しているが、より具体的なレベルでは〈頭〉は〈腹〉〈胸〉と異なる。〈容器としての頭〉のメタファーでは、内容物にあたるのは〈怒り〉を除いて知的精神である。〈具象物としての頭〉のメタファーを通じて理解されるのも知的精神であり、〈頭〉を思考のための道具（有蘭, 2009）（あるいは人や機械）に喩えることを通じて、思考行為から思考様式にいたる精神作用が表現される。
- 〈頭〉の想定される共起性基盤は痛み（頭痛）・頭重感・血液の集中・体温変化（・赤面）であるが、〈胸〉ほど多様な感覚・運動レベル (L1) やスキーマレベル I (L2) の表現を動機づけるわけではない。痛み・頭重感はスキーマレベル II～概念レベル (L3) での知的精神作用との結びつきを部分的に動機づけると考えられるが、そのほかの身体基盤は L3 では不明確である。
- L3 以上に関わる〈頭〉の文化モデルは、〈腹〉や〈胸〉の文化モデルが伝統的な五臓思想の影響を受けたのと同様に、脳の機能に関する近代西洋医学における解剖学的知見の影響（長谷川ほか, 2012）を受けて形成されたと考えられる。

3.6.1 感覚・運動レベル：メトニミーによる慣用句・合成語，メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語

感覚・運動レベル (L1) として、文字通りの意味が生理的感觉や反応を表し、それが時間的隣接性によるメトニミーを通じて感情に関する意味を表すようになった〈頭〉の慣用句・合成語を観察する。(252)(253) に示すのは、姿勢を通じて相手に対する畏れ・敬意の有無や表示を指すメトニミー表現である。これらの表現では相手との垂直方向（上下）の位置関係が問題とされており、畏れ・敬意を抱くものはその対象となる相手よりも低い位置に存在する、あるいはすべきであるという方向づけのメタ

ファーが働いていると考えられる (cf. 〈高い位は上, 低い位は下〉 (HIGH STATUS IS UP, LOW STATUS IS DOWN) (Lakoff and Johnson, 1980/2003, p. 16))。このメタファーを通じて, 身体全体の姿勢を低く保つことで相手への畏れ・敬意を示すだけでなく, 反対に姿勢を高く保つことで不敬・横柄な態度を示すことができる。また, 〈頭〉は身体全体の姿勢を表すための参照点としても機能しており, メトニミーの関与が認められる。

(252) 〈頭の位置を低く保つ〉→〈相手に畏れ・敬意を抱く (示す)〉

頭が上がらない¹⁸³／頭が下がる／頭を下げる／頭を垂れる／ずが上がらぬ

(253) 〈頭の位置を高く保つ〉→〈相手に {敬意を払わない／横柄な態度を取る}〉

ず-たか【頭高】／ずが高い

確かにこれらの表現は〈頭〉に関する語を含み, 精神作用に関する慣用的意味を表すが, 〈頭〉と〈精神〉の結びつきは間接的である。〈畏れ・敬意〉を表すのに重要なのは身体全体の姿勢であって, 単に首から上の部分をどう構えるかというわけではない。¹⁸⁴ 〈頭〉が参照点として用いられるのは, 身体之最上部がどこに位置するかを伝達するのに最も効率的な部位であるからであろう。

同様に, 何らかの精神作用に伴うしぐさを用いたメトニミー表現のうち, 〈頭〉について述べた表現として以下のものが挙げられる。

(254) 〈頭の向きを変える〉→〈思考 (苦悶) する〉〈疑問に思う〉

頭を拈 (ひね) る／かしらを傾 (かたぶ・かたむ) ける／こうべを傾 (かたぶ・かたむ) く

(255) 〈頭に両手を当てる〉→〈困り果てる〉

頭を抱える／頭を丸める¹⁸⁵

(256) 〈頭を搔く〉→〈恥じる・恥ずかしく思う〉

頭を搔く

(254)–(256) は, (252)(253) の表現と比べて局所的に為されるしぐさを描写する表現である。しかし, これらは〈頭〉に関する語を含むが, 動悸をなだめるために行う「胸を撫でる」のしぐさのように,

¹⁸³ 『日国』の見出しとしては「頭が上がる」の形であるが, 実際の使用においては「頭が上がらない」と用いられるのが一般的である。今回の併用辞書でも「頭が上がらない」で見出しが登録されているため, 否定形で揃えた。

¹⁸⁴ たとえば, 首を折るだけのお辞儀が一般的に無礼な振る舞いとしてみなされるのは, 本来身体全体を低く保つべき場面で, 形だけの敬意の表明であるように映るからであろう。しかしながら, 〈頭〉が人の尊厳にとって最も重要な部位とみなされていることも確かである。少なくとも日本文化において, 相手の肩や腕を叩くことに比べて, 頭を叩くことはたとえ親しい間柄であっても禁忌とされる行為である。

¹⁸⁵ 『日国』では, 「「あたま (頭) を抱 (かか) える」に同じ。」とある。おそらく, 「頭を抱える」際に頭部を曲げ前傾姿勢をとった姿を描写する表現であろう。

精神作用と〈頭〉との間に何らかの固有の経験的相関が存在するわけではない。たとえば、「頭を掻く」という表現が〈恥じる・恥ずかしく思う〉という慣用的意味を持つ一方で、「頭を掻く」という行為が恥じらいの経験によって頭部に生じる何らかの生理現象に動機づけられているかといえ、定かではない。¹⁸⁶

さらに、次の表現を見てみよう。

(257) 〈頭から水を浴びる〉→〈驚く〉

頭から水を浴びたよう [打ちかけられたよう]

直喩標識「よう」が付いていることからわかるように、(257)によって表される〈頭から水を浴びる〉という行為は〈驚き〉を生じさせる行為の分かりやすい例えであり、時間的隣接性（因果関係）に基づくメトニミーに加え、種と類の関係に基づくシネクドキーの関与が認められる。さらに「頭から」「浴びる」と表現することで、頭上から足先まで全身の濡れる様子が推論によって伝えられる。ここでもやはり、「頭」の使用は〈頭〉が身体の最上部に位置するという特徴によってのみ動機づけられており、〈驚き〉と何らかの直接的関係を持っているわけではない。本研究では、精神義を持つものの〈頭〉と精神作用の直接的な関係を見出し難い(252)–(257)の一連の表現について、精神作用の座としての〈頭〉の文化モデルとは直接結びつかないと考え、以下に挙げる他の表現とは別物として扱う。

以上のような表現に対し、精神作用に伴う〈頭〉固有の生理的感覚に基づいて成立したと考えられる表現として、頭痛に関する(258)、頭重感に関する(259)が挙げられる。これらのうち、再帰的な他動詞表現「頭を痛める」を除く「頭が痛い」「頭が重い」は、精神作用とは関係のない身体的な不調を指す際にも用いられる表現である。

(258) 〈頭痛がする〉→〈苦心して考え悩む〉

頭が痛い／頭を痛める

(259) 〈頭が重く感じる〉→〈苦心して考え悩む〉

頭が重い

¹⁸⁶ 赤面が恥じらいによって生じる生理現象の一つであるように、血流が速まることで体温が上昇し、頭皮の痒みが生じるという身体経験を動機づけとして想定することはできだろう（大森文子先生のご示唆に基づく）。しかし、今回の調査ではそのような説を支持する科学的根拠を得ることができなかったため、今後の追跡調査を要する。なお、英語の *scratch one's head* は〈自己嫌悪・困惑・とまどい・いらだち・不満〉などを表し、同じしぐさでも日本語の照れ隠しの「頭を掻く」とは異なる。これに関連して、『しぐさの英語表現辞典 新装版』(*scratch one's head*) では、英語の *scratch one's head* の方が心理的不安定に起因する霊長類の「めかし」(*displacement grooming*) の習性に動機づけられた本能的行為であることが述べられている。日本語の「頭を掻く」については、文化内での対人的な低姿勢表示の一つで「叩頭」の簡略版であるという見方が紹介されている。

なお、これらの表現が表す感覚は、単なる〈思考〉ではなく〈過度に考え悩む〉ことで得た生理的感覚である。「頭を使う」等の表現が純粹に知的な〈思考〉を表すとすれば、これらの表現は情緒的要素を孕み、身体的な変調を引き起こす〈思考（苦悶）〉を表すといえよう。¹⁸⁷ 下に挙げる (260) は、慣用句としての用例とは言い難いものの、実際に慣用句の成立を動機づける頭重感と過度に考え悩むことが同時に経験された重要な例である。

(260) マンションに住んでいるのですが上の住民がドンドンうるさいんです もう5回くらい管理人さんを通したり直接言いに行ったりしているのですが一向に改善してくれません 分譲マンションなんで簡単に引越し出来ないのが困ってます 頭とか重くなる感じもするし精神的にもつまらなくなってきました こういう場合は法に委ねることって出来ますか？(BCCWJ: OC14_03150, 1080)

一方、(261) の「頭に血が上る」が文字通りの意味として表す〈血が頭へと集中（上昇）する〉状況は、情緒的な興奮に因る場合が大半であろう。我々は自らの頭部に血が上る様子を視覚的に観察することはできないが、内感覚（血圧や熱感覚）としてそれを経験している。さらに、他人が興奮し赤面する様子を目撃した際に、過去の自らの内感覚の経験と照らし合わせることで血液の集中を推論していると考えられる。¹⁸⁸

(261) 〈血が頭に集中（上昇）する〉→〈感情が高ぶる〉

頭に血が上る

また、(261) との関係で説明が可能な表現として、〈興奮の抑制〉を表す (262) が挙げられる。

(262) 〈頭を冷却する〉→〈興奮を抑制する〉

頭を冷やす

この表現は、「一旦、頭を冷やさない」「頭を冷やしてよく考えよう」のように意図性を伴う行為を表すことができる。この表現が成立するのは、情緒的興奮によって頭部に血液が巡ると熱が上がる感覚（顔の火照り）を覚え、興奮が収まるとその感覚が解消することを我々が経験的に知っているからであり、それに基づいて、意図的に熱を下げることで興奮が収まると推論するのである。

¹⁸⁷ これに関連して、有蘭 (2007, p. 316) では「頭を痛める」を「思考の結果生じる不安をも含意する」と説明している。

¹⁸⁸ 情緒的興奮とは関係のない「頭に血が上る」の使用例の存在は、馬場 (2012) によって確認されている。馬場 (2012, p.30) は、「生理現象としての「頭に血が上る」は、「(通常量の血液ならば知覚されることはないが) 通常よりも多量の血が頭に到達することによってそれを知覚し、不快を感じる」ことであると言える。」と述べている。

3.6.2 スキーマレベルⅠ：メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語

次に、感覚・運動レベルの身体経験がメタファーを通じて言語化された慣用句・合成語を観察する。

〈腹〉や〈胸〉における痛みを表す表現が別の事象に喩えられていたのと同様に、(258) でみたような頭痛の感覚はメタファーによって (263) のように表現される。実際、「砕く」の自動詞形「砕ける」は (264) のように度を越した頭痛を指して用いられることがある。¹⁸⁹

(263) 〈頭を破壊する〉→〈苦心して考え悩む〉

頭を砕く

(264) 帰宅後は、体調がすぐれないからすぐさま寝てしまった金曜の夜。

休日となった次の日の朝も体はだるく発熱は一向に治らない。

おまけに頭が砕けるように痛い、痛過ぎる！！

私の体はもう限界に達しようとしていました。

(<https://note.com/matul215/n/nbbbe55d61eb6>)

次に、〈怒り〉を表す (265) の表現を見てみよう。

(265) 〈頭に湯気が立つ〉→〈怒る〉

頭から湯気を立てる

この表現に関しては馬場 (2012, pp. 26–29) による分析が明確であるので、それに基づいて説明を加える。馬場 (2012) は、本表現が感情とは関係のない生理現象を指して用いられる場合があることを指摘し、その場合、「寒い戸外での運動や入浴という外部要因によって体温が上昇し、上気した体の一部である頭から湯気が立ち上るさま」(p. 28)を表すと述べている。さらに、このような生理現象として湯気が立つ状況では、通常心拍の増加や顔の赤らみが同時に生じている。人間が〈怒り〉を経験する際に、文字通り「頭から湯気を立てる」ことはないものの、顔の赤らみを視覚的な手がかりとし、上述の生理現象として「頭から湯気を立てる」状況で同時に経験される体温の上昇・心拍の増加と、〈怒り〉の経験によって生じる同様の生理的变化（顔の赤らみ・体温の上昇・心拍の増加）を対応させることで、〈怒り〉では生じない湯気が立つ様子にまで誇張して当てはめるのである。

馬場 (2012) の分析を要するに、「頭から湯気を立てる」という表現は、運動後や入浴後だけでなく

¹⁸⁹ これに関連して、山梨 (1988/2007, p.182) は強意的直喩 (intensifying simile) という修辞法を説明するにあたり、「頭が割れるように痛い」という表現を挙げている。強意的直喩とは「問題の対象の性質、形状、様態の度合いを修辭的に特別に強める直喩」(山梨, 1988/2007, p. 182) のことを指す。

〈怒り〉の経験でも観察される顔の赤らみを第一の手がかりに、これらの異なる経験で共通して生じる生理的变化（体温変化・心拍の増加など）を対応させるだけでなく、〈怒り〉の状況では通常生じ得ない湯気を立つという現象まで誇張して喩えることで成立していると考えられる。ここで重要なのは、〈赤面〉という要素を手がかりに、運動や入浴後に生じる生理的变化と〈怒り〉に伴う生理的变化という二つの異なるゲシュタルト的経験を対応させているという点であり、〈頭から湯気を立つ〉という要素が、〈怒り〉の生理的経験にまで適用されるようになるのは誇張であり、かつ類推に基づくメタファーであると考えられる。¹⁹⁰

3.6.3 スキーマレベルⅡから概念レベルへ：メタファーによる慣用句・合成語，メタファー×メタファーによる慣用句・合成語

3.6.3.1 〈容器としての頭〉と〈具象物としての頭〉

次に、〈頭〉と精神作用の結びつきが類似性に基づくメタファーによって動機づけられた慣用句・合成語を扱う。〈腹〉〈胸〉の場合と同様に、〈頭〉にも〈容器〉としての理解様式と〈具象物〉（非容器）としての理解様式が存在する。(266)は〈容器としての頭〉の内部を指す表現である。

(266) 頭の内／頭の中／頭の奥底¹⁹¹

本項では、下に示す(267)のような表現を〈容器としての頭〉のメタファー表現例として、(268)のような表現を〈具象物としての頭〉のメタファー表現例として順番に観察していく。

(267) 頭に入れる／頭に浮かぶ／頭に来る

(268) 頭が働く／頭が回る／頭が柔かい

3.6.3.2 〈容器としての頭〉

〈腹〉や〈胸〉と同様に、〈頭〉にも〈容器〉スキーマに基づくメタファー表現が確認される。まず、唯一の感情表現である次の表現を見てみよう。

¹⁹⁰ 「二つの異なるゲシュタルト的経験を対応」させるという特徴は概念メタファーと共通しているが、今回の場合、〈怒り〉に伴う一連の身体経験と運動・入浴に伴う一連の身体経験の間に写像が生じているわけではない。つまり、赤面・体温変化・心拍の増加はその要因が異なるだけで経験としては同一である。ただし、「頭から湯気を立てる」が運動や入浴によって実際に上気する様子ではなく、沸騰する液体を入れた容器の蓋から蒸気が漏れ出す様子に準えることで成立した表現だとしたら、これは〈怒りは容器中の流動体の熱である〉(ANGER IS THE HEAT OF A FLUID IN A CONTAINER)の概念メタファーによる分析が適用される。この場合、スキーマレベルⅡ～概念レベル(L3)の表現として扱われることになるが、著者としてはいずれの分析も妥当性を持つと考えている。

¹⁹¹ 〈頭〉の内部を指す名詞表現は辞書見出しとしては見つからないため、Web検索にて実例を確認の上ここで挙げる。

(269) 〈頭に内容物が到達する〉→〈怒る〉

頭に [=へ] 来る

「頭に来る」は、先行研究でも繰り返し扱われてきた表現である。3. 2. 2. 2 節で言及した通り、Matsuki (1995) は英語との比較を通じ、日本語の〈怒り〉はその度合いに応じて〈腹〉から〈胸〉まで上昇し、最終的に〈頭〉にまで到達するという独自のシナリオモデルを提案している。このうち、〈頭〉の具体例として挙げられているのが「頭に来る」である。「来る」は本来〈上昇〉の意味を持つわけではないが、これは〈頭〉よりも下側にあったはずの〈怒り〉が、身体の最上部に位置する〈頭〉へと移動するという解釈に基づいている。この成り立ちとして、感覚・運動レベルで見た「頭に血が上る」のような身体経験が基盤となり、〈垂直性〉スキーマを動機づけていると考えられる。¹⁹²

さて、有蘭 (2007, 2009)、田中 (2003) などの先行研究ですでに指摘されている通り、〈頭〉については精神の知的側面に関する表現がその大半を占めている。有蘭 (2009) は〈頭〉と知的精神の対応の比喩的な成り立ちを論じるにあたり、〈身体（部位）を、精神活動の容器として捉える〉という概念メタファーの下位メタファーとして〈身体（部位）を、知的精神活動の容器として捉える〉を設定し、次のような存在的対応・認識的対応を提案している。

(270) 存在論的対応

起点領域：	目標領域：
容器	身体（部位）
内容物	思考・知識・情報
内容物の量	思考・知識・情報の量
容器の容量	思考・知識・情報の限界

(有蘭, 2009, p. 188)

(271) 認識的対応

a. 起点領域：容器に内容物を収容することによって、それを貯えておくことができる

目標領域：身体（部位）に思考・知識・情報を収容することによって、それを記憶できる

¹⁹² 〈怒り〉がその度合いに応じて〈腹〉から〈頭〉まで上昇するという Matsuki (1995) のモデルに対する批判的検討は、田中 (2003, pp. 119–122) や Shinohara and Matsunaka (2003, p. 6) を参照。Vasiljevic and Graham (2020) は〈怒り〉のモデルも五臓思想の影響の一部として説明すべきという見解を示している。有蘭 (2009, p. 223) も、〈怒り〉が〈頭〉まで上昇するという説明を加えてはいるが、〈怒り〉が最も強まることで〈頭〉に到達するとは述べていない。さらに有蘭 (2009, p. 223) は、〈頭〉が独立した〈怒り〉の〈容器〉なのではなく、〈身体〉が〈容器〉なのであって（つまり〈頭〉は単にその最上部にすぎない）、〈頭〉はあくまで知的精神作用のための〈容器〉であるという主張を行なっている。また、有蘭 (2007, p. 311) や馬場 (2012, p. 37) では「頭に血が上る」等の表現の存在を踏まえ、「頭に来る」のは血であるという異なる観点からの説明を加えている。

- b. 起点領域：内容物が容器の底に近い所に収容されているほど、それを取り出しにくい
 目標領域：思考・知識・情報が身体（部位）の奥にあるほど、それを思い出しにくい
- c. 起点領域：容器には容量があり、内容物の量がその容量を超えるとそれ以上収容することは不可能になる
 目標領域：身体（部位）には思考・知識・情報を収容できる限界があり、思考・知識・情報の量がその限界を超えるとそれ以上考えたり記憶したりすることが不可能になる
- d. 起点領域：古いもの、あまり使わないものは容器の奥にしまわれ、新しいもの、頻繁に使うものはその上に納められる
 目標領域：古い思考・知識・情報、あまり使わない思考・知識・情報は、身体（部位）の奥にしまわれ、新しい思考・知識・情報、頻繁に使う思考・知識・情報は、その上に納められる

（有蘭, 2009, p. 188）

本研究では有蘭 (2009) による (270) の存在的対応, (271) の認識的対応を基本的に援用するが、さらに内容物の種類を〈思考〉と〈知識・情報〉とに区別することで、〈頭〉に蓄えられる以前の段階として二種類のシナリオを想定する。第一に、〈知識・情報〉とされているものは基本的に外から得られるため、〈頭〉に蓄えられる前のシナリオとして想定されるのは〈取り込み〉である。一方、〈思考〉とされるものは主体由来であり、自己の内部で〈創造〉されるものである。以下の観察では、〈頭〉に納められる知的精神として、これらの〈取り込み〉と〈創造〉という観点から観察していく。

はじめに〈取り込み〉に関する〈記憶〉の表現を見てみよう。〈腹〉や〈胸〉で観察した〈理解・納得〉〈記憶〉の表現と同様に、ここで用いられるのは内容物を取り込み、保存するという〈容器〉スキーマの性質である。〈記憶〉の対象である〈知識・情報〉は (272) のように〈頭〉に取り込まれる。

(272) 〈頭に内容物 {を入れる／が入る}〉→〈記憶する〉

頭に入れる／頭に入る

「頭に入れる」と「頭に入る」で対比されるように、〈記憶〉は意図的に行われる場合と非意図的に行われる場合がある。後者の中には、主体の意思に反して定着する〈記憶〉も存在するが、そこで用いられる喩えが (273) に示す〈付着〉である。

(273) 〈頭に内容物が付着する〉→〈物事を忘れられなくなる〉

頭に付く

また、記憶されるはずの〈知識・情報〉が〈容器〉としての〈頭〉の容積を超えると、次のように収容しきれない状態になる。

- (274) 消化と吸収についての学習をしていると、「覚える要素として新しい名称が沢山出てくるので、頭に入りきらない。頭に入りきらない量を覚えようとするのでそもそもくり返して確認する気にならないので、ますます覚えられない。」という、悪循環に入ってしまうことがあります。

(https://www.chugakujuken.com/koushi_blog/katsuyama/up-14.html)

さらに有蘭 (2009) は、次のような用例をもとに〈記憶〉の新旧に応じて内容物の容器内の位置が変わること ((271)-d の認識的対応) を指摘している。

- (275) 気がつけば、ミシガンに留学したころから、すでに5年半の月日が流れた。早いものである。当時の記憶はいろいろと残ってはいるものの、時が経てば、頭の奥の方へとしまい込まれて行く。
(有蘭, 2009, p. 189) ¹⁹³

このような対応関係に基づく場合、上層部にあるものは記憶したばかりのものとなるが、(276) の「頭に浮かぶ」のように、内容物の移動によってその位置関係が入れ替わることがある。

- (276) 〈頭に内容物が浮上する〉→〈記憶が想起される〉〈考えを思いつく〉

頭に浮かぶ

ここで考えなければならないのは、なぜ内容物が上層部に移動することが〈記憶の想起〉を表すのかという点である。有蘭 (2009, p. 187) は、(271)-b で起点領域の知識〈内容物が容器の底に近い所に収容されているほど、それを取り出しにくい〉と目標領域の知識〈思考・知識・情報が身体(部位)の奥にあるほど、それを思い出しにくい〉を対応づけることで、内容物の使用という観点から、上層部に存在する方がすぐに取り出して利用できるという説明を行っているが、もう一つの可能性として、主体の意識が及ぶ範囲という観点から説明できるであろう。つまり、容器が透明でない限り、我々は容器の奥に存在する内容物よりも上層部に存在する内容物を容易に視認できるのであって、特に表面に浮かび上がってきた内容物に関してはその存在を視覚で確実に捉えることができる。手にとって利用することがなくても、内容物が上層部に存在する限り、それが意識の及ぶ範囲に保たれるのであって、それが奥に移動すると、意識が及ばなくなるのである。

¹⁹³ 出典の URL (<http://www.honya.co.jp/contents/squid/index.cgi?20050123>) が挙げられているが、リンク切れのため有蘭 (2009) より引用した。

さて、「頭に浮かぶ」は(277)のように〈記憶が想起される〉ことだけでなく、(278)のように〈考えを思いつく〉ことを表す場合がある。

(277) 『なるほどね。』と、わたしも、もう一度、その役をひきうけることにした。だが、そのとき、わたしの頭にうかんだことがあった。それは、まえに街の上をとんだとき、すぐちかくの公園の森の上へもまわっていったが、その森の木のかげに、カラスが巣をつくっていて、ひなたちに、えさをはこんでいるところを見たのだった。(BCCWJ: LBcn_00025, 28210)

(278) 学校への帰り道、まず頭に浮かんだのは、担任に何から話をしていこうかということだった。《一度本人の気持ちを聞いてやる必要があると思います》《親には電話じゃなく、会って話した方がいい》とにかく、しばらくは話し相手になり来ようと思った。(BCCWJ: PB13_00774, 11860)

この場合、内容物としての〈思考〉あるいは〈考え〉(以降、本稿では〈思考活動〉の意味での〈思考〉との混同を避けるために〈考え〉とする)は内部で生じているはずであり、使用のため保管していたものを取り出すというシナリオを前提とする(271)の認識的対応では十分な説明を与えることができない。この意味での「頭に浮かぶ」では、その内容物は過去に取り込んだ古いものではなく、むしろ主体にとって新しい存在である。ここで、上で新たに提案した主体の意識という観点に基づく説明を取り入れることで、「頭に浮かぶ」が持つ〈考えを思いつく〉という意味の成り立ちを説明することができる。つまり、「頭に浮かぶ」は〈考え〉の前段階として無意識下にあったものが上層部に出てくることで具体化され、意識される状態になる過程を指している。上にあったものが古くなるにつれて下に追いやられていたわけではなく、元々下にあり意識の及ばない潜在化した状態にあったということである。(279)の例では、そのような潜在的な〈考え〉を引き出す方法が述べられている。

(279) まずは、近隣の高校についての知識を与える、
もしくは調べてもらってから教育コーチングを行います。
生徒の頭の奥底にある考えを引き出すためには、
生徒自身にある程度の知識が必要です。

(<https://edcoac.com/201207-2/>)

このように〈考え〉については内部で生じるのであるが、一旦生じてしまえば、あとは外から取りこまれた〈知識・情報〉と同様に〈記憶〉として扱われる場合もある。

(280) 自分の頭の中にある記憶やアイデアは、すべて自分自身の唯一無二のものだし、これを読んで
いる人の頭の中にあることも、一人ひとりが持っている唯一無二のものだ。

(<https://note.com/liberty0201/n/nc2abe16f73e>)

以上の考察をもとに、本研究では〈考え〉(有蘭 (2009) のいう〈思考〉) と〈知識・情報〉に関する
〈容器としての頭〉のメタファーの存在的対応・認識的対応を次のように再定式化する。

(281) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
容器	頭 (心)
内容物	考え・知識・情報 (記憶)
内容物の量	考え・知識・情報 (記憶) の量
容器の容量	考え・知識・情報 (記憶) の限界

(282) 認識的対応

- a. 起点領域：容器に内容物を取り込むことで、その内容物を留めることができる
目標領域：頭 (心) に知識・情報を取り込むことによって、それを記憶できる
- b. 起点領域：容器の奥底に存在した内容物が上層部に浮かび上がることで、所有者が視認できるようになる。
目標領域：頭 (心) の奥底に存在した潜在的な考えが上層部に移動することで、主体に新たな考えとして認識される
- c. 起点領域：容器に内容物を収容し続ける限り、それを保持することができる
目標領域：頭 (心) に考え・知識・情報を収容し続ける限り、それを覚えておくことができる
- d. 起点領域：内容物が容器の底に近い所に収容されているほど、それを取り出しにくい
目標領域：考え・知識・情報が頭 (心) の奥にあるほど、それを思い出しにくい
- e. 起点領域：容器には容量があり、内容物の量がその容量を超えるとそれ以上収容することは不可能になる
目標領域：頭 (心) には考え・知識・情報を収容できる限界があり、考え・知識・情報の量がその限界を超えるとそれ以上考えたり記憶したりすることが不可能になる¹⁹⁴

¹⁹⁴ この対応に限っては、〈考え〉は記憶の限界ではなく、それ以外の思考が働かないという意味が適用される (e.g. 「私は今研究のことを考えてばかりで頭がいっぱいいっぱいだ」)。

f. 起点領域：古いもの、あまり使わないものは容器の奥にしまわれ、新しいもの、頻繁に使うものはその上に納められる

目標領域：古い考え・知識・情報、あまり使わない考え・知識・情報は、頭（心）の奥にしまわれ、新しい考え・知識・情報、頻繁に使う考え・知識・情報は、その上に納められる

g. 起点領域：容器に内容物が付いてしまうと、なかなか取り除くことができない

目標領域：頭（心）の中に考え・知識・情報が付いてしまうと、なかなか忘れ去ることができない

h. 起点領域：容器の奥底に入り込んだ内容物が上層部に浮かび上がることで、所有者が再び視認できるようになる。

目標領域：頭（心）の奥底に入り込んだ考え・記憶・情報が上層部に移動することで、主体が再び意識できる状態になる

(282) は有蘭 (2009) の立てた認知的対応に基づきながらも、a のように外から〈知識・情報〉を取り込むことで記憶化される段階の対応関係と、b のように内容物が上層部に浮上することで新たな〈考え〉が生じる段階の対応関係で分けている。さらに c では、これら〈知識・情報〉〈考え〉が容器の中に収容され続けることで、いずれも〈記憶〉として残り続けることの対応関係を示している。

次に、〈容器〉のメタファーに基づきながらも、特殊な意味を持つ (283) の表現を見てみよう。

(283) 〈頭が（相対的に）大きい〉→〈思考がよく働くが実践を伴わない〉

頭でっかち

「腹が大きい」「胸が広い」のように〈度量・包容力〉を表す場合、〈腹〉や〈胸〉の容積が問題とされるのに対し、「頭でっかち」は〈頭〉の中に〈知識〉がすでに納められていることを前提としている。この表現は単に〈知識が多く賢いこと〉を表すのではなく、〈思考がよく働くが実践を伴わない〉という意味を持っている。他の部位との不釣り合いという含みから理屈一辺倒というネガティブな意味合いを得ており、興味深い。この表現が成立する背景には、〈頭〉が知的精神を司る一方で、具体的な行動をするにあたって用いられるのはその他の部位であるという前提理解がある。ケキゼ・田中 (2004, p. 67) の言葉で言えば、〈頭〉の「非現実性・社会的未熟性」である。

「頭でっかち」は分類上〈思考力〉に関する意味を持つが、その意味の成り立ちについては上で観察した〈記憶〉と関連づけて論じることが可能である。つまり、この表現において〈頭〉の中に入っているとみなされるのは〈知識〉であるが、これは過去に外から取り込まれ、それまで蓄積されてき

た〈知識〉の総体である。そして、〈容器〉である〈頭〉の規模から推測される〈知識量〉が、その人物の〈思考力〉を決定するのである。

さて、ここからは典型的な容器からは外れるが〈容器〉スキーマに基づく表現として分類され则认为られる残りの表現を観察していく。

(284) 〈頭を搾る〉→〈苦心して考え悩む〉

頭を搾る

(284) の「搾る」はいわゆる鍋やコップなどの容器に対して用いられる語ではなく、水分を含んだ物体に対して用いられ、〈締め付けて蓄えられた液体を外に出す〉ことを表す。典型的な容器からは大きく外れるが、〈内容物を留める〉という〈容器〉スキーマの性質を保有しており、しぼり出される〈水分〉と〈考え〉あるいは〈知恵〉が対応して解釈されている。さらに、この表現が単なる〈思考〉ではなく、〈苦心して考え悩む〉という意味を持つのは、「搾る」の〈物体に圧力をかけることで、物体に留まり続けようとする液体を人為的に外に出す〉という意味に由来すると考えられる。¹⁹⁵

また、次の例は〈頭〉の中を空間的な情景として捉えたと考えられる表現である。

(285) 〈頭の中が空白になる〉→〈思考の停止〉

頭の中が真っ白になる

「空白」や「白紙に戻す」というように、日本語には〈白〉を〈無〉の概念と結びつけるメタファーが存在すると考えられるが、(285) ではこの対応関係に基づき〈頭〉の中の思考内容が全て消失することが表現されている。同様に、〈頭〉を空間的に捉えた以下の表現を見てみよう。

(286) 〈生物・物体が頭を通過する〉→〈記憶が想起される〉〈考えを思いつく〉

頭を過（よぎ）る

「過る」は〈(生物や自律的に動く物体が) ある場所を通過する〉という意味を持つ語である。句としての慣用的意味は先に観察した「頭に浮かぶ」と類似しており、〈記憶が想起される〉あるいは〈考えを思いつく〉ことを表す。「浮かぶ」と異なるのは、「過る」の場合〈考え〉が外来的であるという点であろう。つまり、〈考え〉が主体の内部で創造され、〈知識・記憶〉が外から取り込まれるという

¹⁹⁵ 「搾る」は「絞る」とも書き、この場合ひねる動作を典型とすることから、先に挙げたしぐさの表現「頭を拵る」と同類として分析することもできよう。ただし、「知恵をしぼる」という表現の存在を加味し、今回のような解釈に至った。

対照性はこの場合成立しない。さらに、「頭を過る」は〈記憶の想起〉の意味として用いられることがあり (e.g. 「あの時の記憶が頭を過った」), 〈記憶〉が〈頭〉の中で保持され続けるという分析はこの表現では通用しない。

このように、「頭を過る」では〈内容物を留める〉などの〈容器〉スキーマの性質は希薄化していると考えられるのであるが、ここでの分析の鍵となるのが、主体の意識が及ぶ範囲である。〈容器〉スキーマが作り出す〈内〉と〈外〉という境界は、主体の意識が及ぶ領域・及ばない領域の区別へと適用されると考えられる。「過る」は対象がその場に止まらないことを意味として含むが、比喩的にも記憶の想起や発想の一過性が継承されている。つまり〈(新しい) 考え〉や〈記憶〉が〈頭〉という空間領域を通過する瞬間はそれが主体に強く意識されるのであるが、〈頭〉を離れていくと、再び意識から外れるのである。このメタファーの存在的対応・認識的対応は次のように示すことができる。

(287) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
空間	頭 (心)
生物・移動物体	考え・知識・情報 (記憶)
知覚者との距離	考え・知識・情報 (記憶) に対する主体の意識の強さ

(288) 認識的対応

起点領域：生物・移動物体は知覚者を通過する瞬間に最も接近し、その後遠ざかっていく

目標領域：考え・知識・情報は頭 (心) を通過する瞬間に最も意識され、その後意識が薄れていく

3.6.3.3 〈具象物としての頭〉

〈頭〉に関しても、その部位を〈具象物〉として捉え、状態 (変化)・性質等の描写を通じて何らかの精神作用を表す表現がある。3.2.2.6節で言及した通り、有蘭 (2007, 2009, 2021) は Radden and Kövecses (1999) による行為の ICM (Action ICM) に基づくメトニミー分析を参考に、身体部位詞「頭」の慣用表現の意味拡張には行為のフレームに基づくメトニミーが関与することを論じている。本節では、「頭」という身体部位詞の意味拡張に行為フレームが関与するという有蘭の分析を援用しつつも、2.2.4節で再定義した慣用句・慣用的連結句の区別に基づき、慣用的意味の実現に表現全体のイメージ (つまり、句全体の字義的解釈から得られるイメージ) の貢献が認められるもの (慣用句) とそうでないもの (慣用的連結句) とに区別する。前者は新たにメタファーとして分析していく。

まずは〈思考〉(思考行為)を表す表現を見ていこう。有蘭(2007, 2009, 2021)が分析するように、〈頭〉を〈道具〉として用いることで、〈思考〉という行為が理解される。

(289) 〈頭を使う〉→〈思考する〉

頭を使う

また、〈頭〉は〈道具〉としてだけでなく擬人化(あるいは有生物化)されることで、自律的に活動する存在として理解される場合もある。(290)(291)では、「働かす」「悩ます」のように自動詞使役文が用いられている点に注目されたい。

(290) 〈頭 {が働く／を働かす}〉→〈思考が働く／思考する〉

頭が働く／頭を働かす

(291) 〈頭を悩わす〉→〈苦心して考え悩む〉

頭を悩ます

(292) 〈頭の休憩〉→〈思考の中断〉

頭休め

〈頭〉表現で特徴的なのは、このように自律性を以て動く存在として、〈頭〉をモーターを備えた〈機械〉のようなものに喩えるメタファーが観察されることである。¹⁹⁶

(293) 〈頭が回転する〉→〈思考が働く〉

頭が回る

同様のメタファーに基づくと考えられる表現として、(294)が挙げられる。

(294) 〈頭の作動(回転)が {速い／遅い}〉→〈思考力が {高い／低い}〉

頭が切れる／頭が鋭い／頭の回転が速い¹⁹⁷／頭が遅れる／頭が鈍い

(294)のうち、「切れる」「鋭い」は現代日本語では〈切れ味が良い〉こと〈鋭利である〉ことを表し、いずれも物体の質感つまり触感を述べるために用いられる語であるが、これらは運動上の俊敏性を表

¹⁹⁶ 山梨(1988/2007, p.54)では、〈心は機械〉というメタファーの例として「彼は頭の回転がはやい」という表現に加え、「今日はどうも頭が働かない。」という表現を挙げている。ここでは「働く」が本来〈人間〉に対して用いられる語であることを考慮し、擬人化のメタファーとして扱っている。

¹⁹⁷ 『日国』では「早」の漢字が使われているが、作動速度のことを指す場合、通常は「速」であり、『日国』以外の他の辞書も「速」を充てている。本稿では、第4章の『日国』の歴史的調査の際を除いて「速」を用いる。『日国』の「早」の使用については、考えられる事情を脚注261で説明した。

すこともある (e.g. 「動きが {切れる／鋭い}」)。ここでは「頭の回転が速い」という表現の存在を加味し、「切れる」「鋭い」は〈俊敏性〉を指すと捉えて分類している。¹⁹⁸

こうした〈機械としての頭〉の理解においては、〈頭〉は主体から切り離され、客体化されていると考えられる。この理解様式に基づき、〈頭〉を新しいものに交換するという (295) の表現が生じる。¹⁹⁹

(295) 〈頭を新しいものに交換する〉→〈考え方をを変える〉

頭を切り替える

〈機械としての頭〉のメタファーに関する存在的対応・認識的対応は次のようにまとめられる。

(296) 存在的対応

起点領域：	目標領域：
機械	頭 (心)
機械の回転力・俊敏性	思考力

(297) 認識的対応

a. 起点領域：機械を作動させることで、目的達成のための道具として用いることができる

目標領域：頭 (心) を作動させることで、思考のために用いることができる

b. 起点領域：機械を別のものと交換することで、それまでとは異なる方法で新たな成果・産物を得ることができる

目標領域：頭 (心) を別のものと交換することで、それまでとは異なる思考様式で新たな考えを導くことができる

¹⁹⁸ 興味深いことに、『日国』の語釈に基づいて「鋭 (するど) い」の歴史的な発展を観察すると、最も古い用例として挙げられているのは「勇ましくてつよい。精鋭である。」という人の性格に関する意味での使用である。そして物理的な意味としては、「はやい。物事が支障なく速やかに行なわれる。」という俊敏さに関する意味での使用が先行しており (近世)、その後「とがっている。鋭角的である。鋭利である。」という意味が近代に現れている。一方、「切れる」の形容詞的語義については、「刃物などで、力を加えて、物を分け離すことができる。鋭い切れ味をもつ。」という物理的な意味での使用と「物事をうまく処理できる。また、そういう頭脳・手腕をもつ。」という抽象的な意味での使用はいずれも『日葡辞書』からの初出例が挙げられている。さらに、「鈍い」は「鋭い」よりも早くから用いられており、鋭利さに関する意味での使用と俊敏性に関する意味での使用はいずれも中古から観察される。なお、第4章の歴史的調査で観察するように、これらの語について、「頭」とともに用いられるようになるのはいずれも近代以降である。余談であるが、英語でも *keen* という語は「鋭い」と同じように抽象義から始まったと考えられている。*OED* を見ると、語釈として初めに登場するのは “Wise, learned, clever.” (obsolete) の意味であり、古英語期の *cene* の用例が挙げられている。鋭利さの意味 (“Of weapons, cutting instruments, and the like: Having a very sharp edge or point; able to cut or pierce with ease. Also of an edge or point: Extremely sharp.”) としての用例は中英語期の *kene* が初出である (“Keen, Adj. & Adv.” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, November 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/6045990377>).

¹⁹⁹ 「エアコンを冷房から除湿に切り替える」というように「切り替える」は複数の作動方式を備えた機械に対しては、その作動方式を変更することを表すために用いられる場合がある。ここでの「切り替える」はそのように分析することもできるだろう。

次に示すのは、〈固体〉としての〈頭〉の固さを述べるものである。〈腹〉ではその固さが〈意志・信念の強さ〉と対応していたが、ここでの〈頭の固さ〉は〈頑固さ〉や〈思考の融通が利く度合い〉と対応している。

(298) 〈頭が {固い／柔らかい}〉 → 〈頑固で思考の融通がきかない／柔軟で思考の融通がきく〉

石頭／頭が固い／頭が柔らかい

(299) 〈頭を解す〉 → 〈思考を柔軟にする〉

頭を解す

(298)(299) の仕組みを捉えるには、(297) とは別に (300) のような存在的対応・認識的対応を想定する必要がある。認識的対応が示すように、「腹が堅い」と「頭が固い」では慣用句としての意味が異なるものの、〈固さ〉に働く推論は共通すると言って良いであろう。すなわち、〈物質的な固さ〉が〈形状維持の度合い〉と推論で結ばれ、それが〈信念の不変性〉あるいは〈思考の不変性〉と対応する。

(300) 存在的対応

起点領域：

目標領域：

物体

頭（心）

形状

思考の様態

認識的対応

a. 起点領域：物体が固いと、容易に形を変えることができない

目標領域：頭（心）が固いと、物事の捉え方や考え方を状況に応じて変化させることはできない

b. 起点領域：固い物体を解すことで、形を変えやすくなる

目標領域：頭（心）を解すことで、物事の捉え方や考え方を状況に応じて変化させやすくなる

次に、これまでの表現とは異なった比喩的な成り立ちを持つ〈頭〉表現を挙げる。以下の表現は、〈思考の対象〉を〈液体〉に見立てることで、〈頭〉を浸し、そのことばかりを考える状況に自らを追いやることを表す表現である。

(301) 〈頭を（水に）浸す〉 → 〈一つのことに集中してよく考える〉

頭を浸す

「日本の文化に浸る」「感傷に浸る」などと言うように、「浸る」という語は〈ある境地や心境に没入する〉ことを指すが、「頭を浸す」では敢えて〈頭〉という部位のみを浸すと描写することで、〈思考を一つの物事に限定する〉といった意味が成立している。この表現が成立するには、〈頭〉が思考を司るという理解が大前提として必要である。

最後に、思考を司る部位としての〈頭〉の理解とは直接結びつかない表現をあげておく。

(302) 頭を上げる／頭を擡（もた）げる [=持ち上げる]

「頭抜ける」「頭角を現す」という表現があるように、〈頭〉はその位置的な特徴により、周りから抜きん出て目立つようになることを表す際に参照されるが、(302) はこれが〈考え〉に適用された表現であろう。つまり、〈考え〉を擬人化することで、〈身体之最上部に位置する頭を起こす・持ち上げる〉という視覚的イメージから〈考えが目立つようになる〉という意味が生じたものと考えられる。したがって、「頭」が精神作用を表す表現に含まれるのを動機づけているのは、その身体部位の位置的な特徴であり、思考を司る部位としての〈頭〉の理解ではない。

3.6.3.4 慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語

〈頭〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語に関しては、慣用句との区別が難しい。ここでは、様々な名詞に対して用いられうるという点で意味的一般性の高い形容詞・接辞を用いた表現のみを分類している。ただし、これらが〈具象物としての頭〉としての句全体のイメージを持たず、各語あるいは「頭」のみが単独で意味拡張を経ているとは断定しがたい。たとえば、「頭が足りない」という表現では、「頭」〈思考力〉が「足りない」〈不十分である〉という語彙的な意味拡張に留めた分析を加える以外に、〈(思考の道具としての) 頭が不足する〉という意味から〈思考力が不十分である〉という意味が生じたとする句単位での分析も可能である。同様に、「頭が古い」という表現に関しても「頭」〈考え方〉が「古い」〈古い（時代遅れである）〉と個別に分析すること以外に、〈(機械としての) 頭が旧式である〉という句としてのイメージから、〈古い（時代遅れの）考えしか生み出せない〉という意味が生じたと分析することも可能であろう。

(303) 「頭」が単独で〈思考力〉を表す例

頭が足りない [=足らない・足りぬ] ／頭がよい (いい) ／頭が弱い／頭が悪い／へぼ頭

(304) 「頭」が単独で〈考え方〉を表す例

頭が変だ (変になる) ／頭がおかしい／頭が古い

3.6.4 観察のまとめ

ここまでの観察に基づき、現代日本語の〈頭〉表現を表 16 の通り分類する。L3 については、これまでと同様に〈頭〉が〈容器〉(CONTAINER)と理解されているか (L3-C), 〈具象物〉((CONCRETE) OBJECT)として理解されているか (L3-O) で下位分類を行った。

表 16 現代日本語の〈頭〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（字義的意味固定）

		字義的意味		慣用的意味（精神義）		例
L1	1	痛み	頭痛がする	苦心して考え悩む	思考（苦悶）	頭が痛い
	2	頭重感	頭が重く感じる	苦心して考え悩む		頭が重い
	3	血液の集中	血が頭に集中（上昇）する	感情が高ぶる	感情の高ぶり	頭に血が上る
	4	体温変化	頭を冷却する	興奮を抑制する	興奮の抑制	頭を冷やす
L2	5	蒸気	頭に湯気が立つ	怒る	怒り	頭から湯気を立てる
	6	損傷	頭を破壊する	苦心して考え悩む	思考（苦悶）	頭を砕く
L3-C	7	内容物の上昇	頭に内容物が到達する	怒る	怒り	頭に来る
	8		頭に内容物が浮上する	記憶が想起される／考えを思いつく	記憶・考え	頭に浮かぶ
	9	対象の受容	頭に内容物 {が入る／を入れる}	記憶する	記憶	頭に入る, 頭に入れる
	10	内容物の定着	頭に内容物が付着する	物事を忘れられなくなる		頭に突く
	11	内容物の搾出	頭を搾る	苦心して考え悩む	思考（苦悶）	頭を搾る
	12	容器の規模	頭が（相対的に）大きい	思考がよく働くが実践を伴わない	思考力	頭でっかち
	13	通過	生物・物体が頭を通過する	記憶が想起される／考えを思いつく	記憶・考え	頭を過る
	14	白	頭の中が空白になる	思考の停止	思考	頭の中が真っ白になる
L3-O	15	使用	頭を使う	思考する	思考	頭を使う
	16	労働	頭 {が働く／を働かす}	思考が働く／思考する		頭が働く, 頭を働かす
	17	休憩	頭の休憩	思考の中断		頭休め
	18	煩い	頭を煩わす	苦心して考え悩む	思考（苦悶）	頭を悩ます
	19	作動	頭が回転する（作動する）	思考が働く	思考	頭が回る
	20	作動速度	頭の作動（回転）が {速い／遅い}	思考力が {高い／低い}	思考力	頭の回転が速い 頭が遅れる
	21	切替	頭を新しいものに交換する	考え方を変える	思考方法	頭を切り替える
	22	固さ	頭が {固い／柔らかい}	頑固で思考の融通がきかない／柔軟で思考の融通がきく		頭が固い 頭が柔らかい
	23		頭を解す	思考を柔軟にする		頭を解す
	24	沈水	頭を（水に）浸す	一つのことに集中してよく考える	思考	頭を浸す

〈頭〉は先に観察した〈胸〉と比べて L1 に該当する表現が少なく、時間的隣接性に基づくメトニミー基盤として利用されるものは苦しみを伴う思考の際に経験される [1] 頭痛・[2] 頭重感と、[3] の情緒的な興奮に伴う血液の頭部への集中、その抑制のための [4] の冷却（体温変化）に関する身体経験である。[1] の頭痛は、L2 において〈頭〉の破壊に喩えられる ([6])。また、L2 の [5] は怒った人物の赤面を頭部から湯気が立つ様子に喩えるメタファーである。L1, L2 に当てはまるこれらの表現はいずれも情緒的な精神に関するものであり、〈思考（苦悶）〉に関する [6] の「頭を砕く」についても、純粋な〈思考〉ではなく〈過度に考え悩む〉ことを表す。〈頭〉の情緒的精神との結びつきは、このほかに L3 [7] の「頭に来る」（〈怒り〉）で確認されるのみであり、残りはもっぱら知的精神との対応である。

〈腹〉〈胸〉と同様に、L3 では〈頭〉を〈容器〉として捉えるメタファーの存在が認められる ([7]-[14])。このメタファーで特徴的なのは、〈考え〉や〈情報・知識〉を将来のために保管したり、想起したりすることを表す [8], [9] の存在である。「腹に納める」「胸に秘める」などの表現のように、〈頭〉では対人的文脈の中で特徴づけられる〈精神作用を隠す〉こととの結びつきは確認されない。〈考え〉と〈知識・情報〉を観察すると、〈頭〉に収まる前の段階に違いが見られ、〈考え〉は〈頭〉の内部で生じ、それが浮上することで主体に意識されるようになる（新しい〈考え〉となる）。一方の〈知識・情報〉は外部由来であり、〈頭〉に入ることによって主体の新たな所有物となる。これらの違いを (305)(306) に示すプロトタイプシナリオとして対比させる。今回の調査で慣用表現としての証拠が得られなかったステージは（ ）で示した。実例としてのみ証拠が得られたステージの表現は、例文番号を併記する。

(305) 〈頭〉に納められる〈考え〉に対して想定されるプロトタイプシナリオ

ステージ 1：潜在的な考えが主体の頭の下層に存在する「頭の奥底にある考え」(279)

ステージ 2：潜在的な考えが浮上し、主体に意識されるようになる「頭に浮かぶ」

ステージ 3：考えが頭の中で保持される「頭の中にあるアイデア」(280)

（ステージ 4：考えが時間の経過とともに再び下層へと移っていく）

ステージ 5：考えが再び表層に浮上することで、想起される「頭に浮かぶ」

(306) 〈頭〉に納められる〈知識・情報〉に対して想定されるプロトタイプシナリオ

ステージ 1：知識・情報が頭に取り込まれる「頭に入れる」

ステージ 2：知識・情報が頭の中で保持される「頭の中にある記憶」(280)

ステージ 3：知識・情報が時間の経過とともに下層へと移っていく「記憶が頭の奥の方へとしまい込まれて行く」(275)

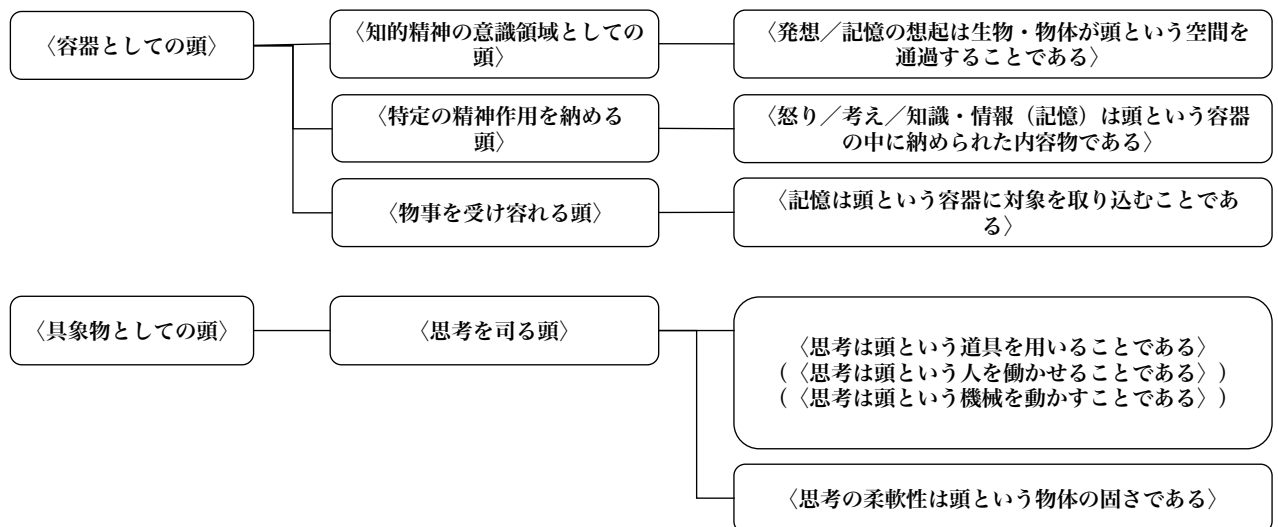
ステージ 4：知識・情報が再び表層に浮上することで、想起される「頭に浮かぶ」

この例外となるのが、〈生物・物体の通過〉を通じて〈発想〉〈記憶の想起〉を表す [13] のメタファーである。該当表現は「頭を過る」のみであり、確定的な一般化はし難いものの、〈考え〉〈知識・情報〉ともに外来的であり、〈頭〉の中に留まることなく過ぎ去る。この表現において、〈頭〉は新しい〈考え〉や古い〈考え〉〈知識・情報〉を意識するための領域として認識されており、その領域から外れることで、再び主体の意識から薄れていくのである。

さて、L3 では〈頭〉を〈具象物〉として捉えるメタファーの存在も認められる ([15]-[24])。〈具象物〉としての〈頭〉は〈思考〉のための〈道具〉とみなされ (有蘭, 2007, 2009, 2021), 時には [16], [17] のように〈人間〉 (e.g. 「頭を働かす」「頭休め」) として表現され, また [19] の〈機械〉 (e.g. 「頭が回る」) のように自律的に動く存在として表現される。[20] のように、〈機械としての頭〉では性能 (作動速度) が重視される。また, [22], [23] の〈頭〉の物質的な〈固さ〉に注目する比喩は〈腹〉と共通するが (e.g. 「腹が堅い」「腹を固める」), 〈頭〉では〈思考方法〉へと適用されることで、固いことよりもむしろ柔らかいことが望ましいという解釈を受ける。

以上を要するに、〈頭〉では感情および情緒的な要素を含む思考に対する L1 の生理的感覚・反応に基づくメトニミー、L2 のメタファーが観察されるが、文化モデルの中心に据えられるのは知的精神に対して適用される L3 のメタファーである。L3 は、〈腹〉〈胸〉と同様に〈容器としての頭〉のメタファー、〈具象物としての頭〉のメタファーによって構成されている。これら二種類のメタファーの下位分類に基づき、〈精神〉を目標領域に据えた概念メタファーを定式化して次のように対応づける。

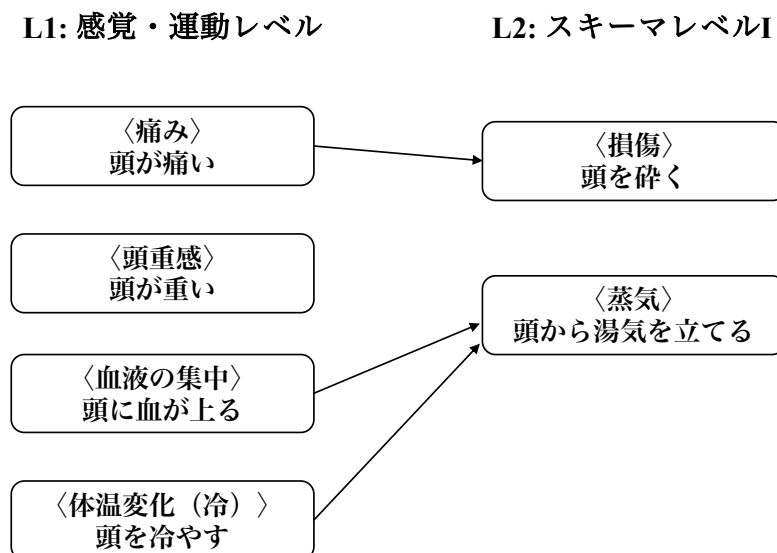
図 17 精神作用に関する現代日本語の〈頭〉の理解と概念メタファー



3.6.5 〈頭〉の文化モデルと身体基盤・文化基盤

〈頭〉の文化モデルを支える身体基盤のうち、精神作用に伴う共起性基盤として用いられるのは痛み（頭痛）・頭重感・血液の集中・体温変化・赤面である。赤面を「頭」を用いて直接述べるメトニミー表現は今回の調査では見つからなかったものの、L2 で観察した「頭から湯気を立てる」において、その成立基盤として顔の赤らみが想定されることを指摘した。〈腹〉や〈胸〉でも説明したように、感情経験に伴う体温変化は局所的な現象ではないものの、〈頭〉の場合、血が集中する感覚と相まって頭部に熱を感じるという経験的な際立ちはあるかもしれない。L1,L2 の間で想定される身体経験の関係は図 18 のように示される。矢印はメタファーによる身体経験の描写の拡張を表している。

図 18 〈頭〉におけるメトニミー表現（L1）とメトニミー×メタファー表現（L2）の対応



精神作用に伴う生理的感覚・反応に基づいた L1,L2 のカテゴリーは 6 項目で、分類数としては〈腹〉の 5 項目より多く、〈胸〉の 16 項目より少ない。L1 や L2 でそれと結びつく精神作用や表現は限られており、〈頭〉の文化モデル形成に時間的隣接性によるメトニミー基盤（共起性基盤）が中心的役割を果たしているとは言えないだろう。

また、〈容器〉スキーマに基づく表現が L3 で確認されることを考慮するに、〈頭〉を〈容器〉とみなす身体基盤が存在するはずである。〈頭〉には〈腹〉や〈胸〉のように食物摂取・呼吸に関わる内臓が位置していないため、一見すると飲食物・糞尿や空気の出入りという観点から〈容器〉としての反復経験を説明することはできないように思われる。しかしながら、飲食物を取り込む口や空気が出入りする鼻（と口）は〈頭〉に位置しており、その意味では〈頭〉も〈容器〉としての経験基盤を有して

いる。

もう一つ身体基盤の可能性として考えられるのが、〈頭〉に目や耳が位置するという〈頭〉の身体的特性である。「{目／耳}に入る」「目に飛び込んできた」などと言うように、目・耳を通じた情報獲得にも〈容器〉のメタファーが関係している。視覚情報・聴覚情報は人の外界認識にとって特に重要であり、〈頭〉はそのような器官を位置づける部位でもある。「目に入った光景を頭に叩き込んでおく」という表現は、視覚とその情報記憶が連続して捉えられている。こうした知覚経験と記憶は、一種の共起性基盤とみなすことができるかもしれない。²⁰⁰

以上のように、〈頭〉にも精神作用の座としての理解を得る身体基盤が一部認められるけれども、それのみを以ては L3 特に L3-O の〈具象物〉メタファーを含む精神作用との豊かな結びつきを十分に説明することはできない。〈頭〉が〈思考〉の道具として様々な意味へと拡張するには、〈頭〉を精神の座とみなす確立した認識が存在しているはずである。このことを考慮するに、〈頭〉の文化モデルは、〈腹〉や〈胸〉の文化モデルが伝統的な五臓思想や丹田思想の影響を受けたのと同様に、3.3.4.3節で言及した脳の機能に関する西洋医学的知見の影響を受けて成り立っていると考えられる。ここで重要なのは、こうした知見が、上で論じた身体基盤のような直接の経験基盤には当たらないという点である。確かに、脳が精神作用を司る中枢器官であるという知見は実証科学によって導かれたものであるわけだが、人々にとってそれは知識として得られるものであり、身体を介して直接的に経験されるわけではない。このような知識もまた、五臓思想と同じ文化基盤の一種として扱われるべきであり、概念レベルでの〈頭〉の理解に対する基盤として位置付けられる。²⁰¹

ここまでの議論をもとに、精神作用に関する〈頭〉の文化モデルの成立を動機づける身体基盤・文化基盤を次頁図 19 のようにまとめることで、3.2.3節で定めた RQ 1「現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。」に対する三つ目の回答とする。

²⁰⁰ 大森文子先生のご示唆に基づく。

²⁰¹ 松井(2007, p. 43)は「事故などで頭部を損傷すると精神的な機能が影響を受けるというような経験が、頭を知性の容器とみなすメタファーの経験的基盤となっていると思われる」と述べ、知的精神と頭部の結びつきを個人が直接経験する共起性基盤に求めようとしている。確かにこのような分析も可能であろうが、歴史的にみた場合、こうした経験が慣用表現の成立を促すほど頻繁に繰り返されたかに関して疑問が残る。現代のような発達した医療が存在し得なかった時代において、頭部に損傷を受けたのに精神的な機能が損なわれながらも生き長らえるという状況は一般民衆の間では極めて稀であったと考えられ、少なくとも「胸が高鳴る」のように頻繁に経験する生理現象と比べると、共起性としての説明力は劣る。

図 19 現代日本語の〈頭〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

L1		L2		L3
感覚・運動レベル		スキーマレベルⅠ	スキーマレベルⅡ	概念レベル
メトニミー表現		メトニミー×メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・イメージスキーマ	シナリオ・概念メタファー
痛み「頭が痛い」 頭重感「頭が重い」 血液の集中「頭に血が上る」 冷却「頭を冷やす」		損傷「頭を砕く」 蒸気「頭から湯気を立てる」	〈容器〉 「頭に入れる」 〈垂直性〉 「頭に来る」	〈発想／記憶の想起は生物・物体が頭という空間を通過することである〉 〈怒り／考え／知識・情報（記憶）は頭という容器の中に納められた内容物である〉 〈記憶は頭という容器に対象を取り込むことである〉 〈思考は頭という道具を用いることである〉 〈思考の柔軟性は頭という物体の固さである〉
表象・例				
基盤		痛み、頭重感、血液の集中、体温変化（、赤面）	摂食活動、呼吸（、頭部の感覚器官の経験）	西洋医学における解剖学的知見
認知操作		メトニミー操作（共起的相関）	抽象化・類推（メタファー）	統合・複雑化

3.7 考察

本章では、現代日本語における精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を成立させる身体基盤・文化基盤を明らかにするため、「身体部位詞表現の階層モデル」に基づき慣用表現を分析してきた。ここで、3.2.3節で設定したリサーチクエスションを再度示す。

(307) RQ 1: 現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。

RQ 2: 身体基盤・文化基盤のうち、現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喩の基盤となるものは何か。

(=97))

このうち、RQ 1 に対する回答としては、各部位の分析の最後に「(各部位の) 文化モデルを支える身体基盤・文化基盤」として図 13, 図 16, 図 19 を示した。ここでは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の各々の分析結果を比較し、身体基盤・文化基盤の観点からそれぞれの部位の特徴を明確にすることで、RQ 2 への回答を得る。

全体の概観として、本章で設けた身体部位詞表現の階層モデルに基づき、各レベルに対する部位ご

とのカテゴリー数を一覧として示す。カテゴリーは表 12, 表 14, 表 16 の分類をもとにしている。

表 17 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の階層ごとのカテゴリー数（慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語）

	〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
感覚・運動レベル (L1)	3	7	4
スキーマレベル I (L2)	2	9	2
スキーマレベル II～概念レベル： 〈容器〉 (L3-C)	16	15	8
スキーマレベル II～概念レベル： 〈具象物〉 (L3-O)	6	4	10
【合計】	27	35	24

表 17 で数値として反映した各々のカテゴリーは本調査で帰納的に定めたものであり、客観的な設定基準が存在するわけではない。したがって、あくまで一つの目安に過ぎないが、表 17 に基づく〈腹〉〈胸〉〈頭〉の特徴として、次の二点を指摘することができる。

- L1 と L2 に該当するカテゴリーは、〈胸〉で 16 項目と最も多く、〈腹〉の 5 項目と〈頭〉の 6 項目で同程度である。
- カテゴリー数で言えば、〈腹〉〈胸〉〈頭〉ともに L3 の項目が最も多い。特に〈腹〉と〈胸〉は、〈容器〉スキーマに基づくメタファーに分類されるカテゴリー数が、非容器的な〈具象物〉のメタファーに分類されるカテゴリー数よりも特に多い。

また、上の表は慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語のカテゴリー数であるため、慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の結果を別途次のようにまとめる。

表 18 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語

	【身体部位詞の意味】	【例】
〈腹〉	腹立ち（怒り）	「自棄っ腹」
	心中（の／での）	「腹積もり」
	考え・意図	「腹が決まる」
〈胸〉	気持ち・考え・意図	「胸次第」
	心中（の／での）	「むな算用」
〈頭〉	思考力	「頭が弱い」
	思考方法	「頭が古い」

慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語では、〈腹〉と〈怒り〉、〈頭〉と〈思考〉のように、それぞれの部位に特徴的な精神作用が結びつく傾向にあるといえる。特に「腹」が単独で〈腹立ち（怒り）〉の意味を表す表現は非常に多く、語レベルでの精神義の確立は、ある特定の精神作用とその部位の結びつきが慣習化・定着していることを示す証拠になるのかもしれない。

次に、精神作用ごとに表 12、表 14、表 16 で対応するカテゴリー数を数えたものを次頁の表 19 として示す。一つのカテゴリーで複数の精神作用が当てはまる場合、たとえば、〈胸の動揺〉(e.g. 「胸が騒ぐ」) が〈不安〉と〈喜び・期待〉のいずれとも対応するような場合については、〈不安〉と〈喜び・期待〉の両方でカウントした。そのため、〈腹〉〈胸〉〈頭〉全てに関して表 17 の合計項目数との差が見られる。特に〈胸〉で表 17 と表 19 の項目数の差が大きい (35 項目 対 44 項目 [35+9 項目]) のは、ある表現を通じて異なる感情が表現されることが度々あるためである。²⁰² また、情緒的精神とその他の精神は区別し難いものの、特に情動や気分と呼べるような種類の精神作用とそれ以外の精神作用に二分し、各々の件数を合計した。

表 17 と同様に、表 19 で数値として反映した各々のカテゴリーは本調査で独自に定めたものであり、一つの目安であるが、以下の通り、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関して先行研究 (3. 2. 2 節を参照) で指摘されてきたことと同様の傾向が反映されていることを確認したい。

- 〈腹〉を特徴づけるのは、〈怒り〉〈不満〉〈恨み〉といった対人的な負の感情 (有蘭, 2007, 2009) である。また、〈内心・本心〉〈考え・意図〉のカテゴリー数から判断するに、内と外 (本音と建前) が意識される精神作用 (Matsuki, 1995; ケキゼ・田中, 2004; 田中, 2003) との結びつきが強い。〈信念・覚悟・決心〉との対応も固有の特徴である。
- 〈胸〉を特徴づけるのは、様々な感情との対応 (有蘭, 2007, 2009) である。ただし、〈腹〉のような対人的な感情との結びつきは〈怒り〉と〈苦悶・恋慕〉のみである。
- 〈頭〉は感情との対応が弱く、反対に知的精神との対応 (有蘭, 2007, 2009; 田中, 2003) が突出している。

また、三部位を総合的に見た場合、精神作用の座は〈腹〉〈胸〉〈頭〉のいずれかに集約されるものではなく、各精神作用は相補的に分布していると言えるだろう。興味深いことに、感情のうち日本語メタファー研究で繰り返し取り上げられている〈怒り〉のみが〈腹〉〈胸〉〈頭〉全てと結びついている。感情全体で見た場合、〈怒り〉はある意味特殊な事例とすることができるだろう。

²⁰² これはおそらく、同じ身体感覚・反応が、異なる感情によって度々引き起こされることに起因している。たとえば、動悸についてはほとんどの感情経験によって生じるはずであり、むしろ、どのような感情経験でも生じうる身体感覚・反応を、一部の範囲の感情に当てはめて言語化することの要因を考えていくべきなのかもしれない。同様の問題意識が Ungerer and Schmid (1996/2006, pp. 133–135) でも述べられているが、この件については筆者の中での考察が及んでいないため今後の課題としたい。示唆的な現象の一つとして、第 4 章での通時的観察において「胸が躍る」が過去に〈喜び・期待〉のみならず、〈不安〉(＝胸騒ぎ)の意味を表していたことを報告する (4. 4. 5 節)。「胸が躍る」は動悸に基づく表現であると考えられるが、動悸を伴う複数の感情に適用されていた表現形式が、慣用化あるいはその他の要因によって、意味を狭めた事例として分析できるかもしれない。

表 19 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用と対応するカテゴリー数

	〈腹〉		〈胸〉		〈頭〉	
【精神作用】	【項目数】	【例】	【項目数】	【例】	【項目数】	【例】
〈可笑しさ〉	4	腹を振る				
〈不満〉	1	腹ふくる				
〈満足〉	1	腹一杯				
〈恨み〉	1	腹に持つ				
〈嫌悪・怒り〉	7	腹が立つ	2	胸糞が悪い	2	頭に来る
〈悲しみ・辛さ・不安〉			10	胸が塞がる		
〈苦悶・恋慕〉			3	胸を焦がす		
〈恐怖〉			1	胸を冷やす		
〈喜び・期待〉			3	胸が躍る		
〈驚き〉			2	胸が潰れる		
〈感銘〉			5	胸に応える		
〈感動〉			1	胸が熱くなる		
〈感情の高ぶり〉			3	胸が一杯になる	1	頭に血が上る
〈感情の抑制〉			1	胸を摩る		
〈感情の解消〉			4	胸が収まる		
〈興奮の抑制〉					1	頭を冷やす
〈機嫌〉	2	腹具合				
【合計】	16		35		4	
〈内心・本心〉	3	腹に納める	3	胸に秘める		
〈考え・意図〉	4	腹を探る	1	胸に一物	2	頭に浮かぶ
〈理解・納得〉	1	腹に入る	1	胸に落ちる		
〈信念・覚悟・決心〉	2	腹を括る				
〈記憶〉			2	胸に刻む	4	頭に入れる
〈思考〉			1	胸に聞く	6	頭を使う
〈思考（苦悶）〉					5	頭を砕く
〈思考力〉					2	頭が切れる
〈思考方法〉					3	頭が固い
〈度量・包容力〉	1	腹が大きい	1	胸が狭い		
〈人格〉	2	腹が黒い				
【合計】	13		9		22	

ここからは、階層モデルに基づく詳細な分析に移る。L1 や L2 に分類されるのは、共起的な生理的感覚・反応の身体基盤に基づくメトニミー表現あるいはメタファー表現である。これらの身体経験が〈胸〉で特に顕著であることは、3.5 節での〈胸〉の個別の観察・分析で指摘した通りである。ここで注目したいのは、L1 や L2 の表現が表す精神作用の範囲に関しても、〈胸〉と〈腹〉〈頭〉で大きな差が見られるという点である。次頁に示す表 20 の通り、L1 において、〈胸〉は [1] 動悸や呼吸の乱れの回復に基づくしぐさ・[2] 痛み・[3] 不快感・[4] 苦しき・[5] 動悸・[6], [7] 体温変化を通じて〈感情の解消・抑制〉〈悲しみ・辛さ・不安〉〈嫌悪・怒り〉〈不安・喜び・期待〉〈感動〉〈恐怖〉といった多岐にわたる感情との対応を実現している。これに対し、L1 で〈腹〉と対応するのは [1]（腹筋の痛みに基づく）しぐさ・[2] 痛みに基づく〈可笑しさ〉や [3] 不快感に基づく〈怒り〉の感情のみである。また〈頭〉に関しても、[7] 体温変化・[9] 血液の上昇に基づく〈興奮の抑制〉〈感情の高ぶり〉と [2] 痛み・[8] 頭

重感に基づく〈思考（苦悶）〉との対応のみである。

身体経験の種類に注目すると、山梨 (2012) の挙げた様々な身体経験のうち (2.3.7 節 (73) を参照)、L1 では軽・重 ([8] 頭重感)、寒・暖 ([6], [7] 体温変化) といった体感の経験に加え、「その他」に分類されていた内臓感覚 ([3] 不快感)、圧覚 ([4] 苦しさ (閉塞感))、痛覚 ([2] 痛み) が用いられている。²⁰³ 痛み・体温変化は全身で経験されうる感覚であるため、〈腹〉〈胸〉〈頭〉の全てあるいは二部位で該当するが、苦しさ (閉塞感)・動悸といった身体経験は、呼吸器官や心臓が位置する胸部に固有の経験である。このように、〈胸〉は解剖学的観点からも身体経験の豊かさが保証されている。

表 20 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の感覚・運動レベル (L1) のカテゴリーの比較

		〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
	【感覚・運動】	【精神作用・例】		
1	しぐさ	可笑しさ 「腹を抱える」	感情の解消・抑制 「胸を摩る」	
2	痛み	可笑しさ 「腹が痛い」	悲しみ・辛さ・不安 「胸が痛い」	思考 (苦悶) 「頭が痛い」
3	不快感	怒り 「腹がムカムカする」	嫌悪・怒り 「胸悪い」	
4	苦しさ (閉塞感)		悲しみ・辛さ・不安 「胸が苦しい」	
5	動悸		不安・喜び・期待 「胸が轟く」	
6	体温変化 (熱)		感動 「胸が熱くなる」	
7	体温変化 (冷)		恐怖 「胸を冷やす」	興奮の抑制 「頭を冷やす」
8	重感覚 (頭重感)			思考 (苦悶) 「頭が重い」
9	血液の集中			感情の高ぶり 「頭に血が上る」

対応する精神作用の種類は、L1 での身体経験をメタファー的に描写する L2 (次頁表 21) にも概ね引き継がれている。L2 で観察される〈胸〉の精神作用は、表 20 の L1 でも確認された〈喜び・期待〉、〈悲しみ・辛さ・不安〉〈喜び・期待〉〈感情の解消〉の感情と対応しており、追加されているのは [6] の損傷 (「胸を刺す」) で表現される〈感銘〉、[7] の圧迫 (「胸が潰れる」) で表現される〈驚き〉である。²⁰⁴ 〈腹〉の場合、L2 に当てはまるのは [1] 捩れ・[2] 切付けに基づく〈可笑しさ〉のみである。〈頭〉は [10] の蒸気を通じた〈怒り〉が加わっているが、これは L1 でみた [7] 体温変化や [9] 血液の集

²⁰³ 「頭が重い」の頭重感とは、実際に頭部の重量が変化するわけではなく、主観的に〈重い〉と感じる感覚であるといえよう。

²⁰⁴ 反対に、L1 からの継承がないものは、表 20 の [6], [7] 体温変化に基づく〈感動〉〈恐怖〉と、表 20 の [3] 不快感に基づく〈嫌悪・怒り〉である。〈感動〉と〈感銘〉は類似する精神作用であるが、本稿では後者がどちらかといえば受動的な情動経験であるのに対し、前者をより能動的な情動経験として捉え、区別している。「感銘する」よりも「感動する」がより一般的であり、「感銘を受ける」とは言えるが、「?感動を受ける」とは言い難い。また、「?感銘で胸が熱くなる」というのもあまり一般的ではない。

中から、間接的にその身体基盤が判断されるカテゴリーである。

表 21 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベル I (L2) のカテゴリーの比較

		〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
	【身体的作用】	【精神作用・例】		
1	振れ	可笑しさ 「腹を締る」		
2	切付け	可笑しさ 「腹を切る」		
3	動揺		不安・喜び・期待 「胸が騒ぐ」	
4	動揺の鎮静		感情の解消 「胸が収まる」	
5	衝撃		驚き・不安・感銘 「胸をつく」	
6	損傷		悲しみ・辛さ・感銘・苦悶 「胸に鑢を掛く」 「胸を刺す」 「胸がはり裂ける」	思考（苦悶） 「頭を砕く」
7	圧迫		悲しみ・辛さ・不安・驚き 「胸が潰れる」	
8	閉塞		悲しみ・辛さ・不安・感情の 高ぶり 「胸がつまる」	
9	閉塞の解消		感情の解消 「胸がすく」	
10	蒸気			怒り 「頭から湯気を立てる」

本研究で L2 に分類した 〈胸〉 の表現の中には、「胸がつまる」「胸をつく」など、見方によっては L3 の表現として捉えるべき用例を持つものも含まれるが、このような L1 と L2 の対応を見る限り、L3 に配置する場合であっても身体基盤と無縁の表現として扱うことはできないだろう。共起経験としての身体基盤に関しては、〈腹〉〈胸〉〈胸〉の中では〈胸〉が最も顕著であるということができ、これは〈胸〉の身体経験の豊富さを指摘した有蘭 (2009) の考察を具体的に裏付けるものである。

ここまで論じた身体基盤は、精神作用の経験と共起することでメトニミー的に比喻を動機づけるものであった。これに対し、スキーマレベル II～概念レベル (L3) に配置される基盤は場面依存的な動機づけとは異なり、一般性が高く広範囲の表現の成立に影響すると考えられる。まず、3.4 節から 3.6 節までの個別部位の分析で観察した L3 の概念メタファーを一覧として表 22 に示す。表 22 の〈容器〉メタファーのうち、〈X は Y という容器の中に納められた内容物である〉型のものについては、精神作用ごとに細分化し、カテゴリー数を数えた。[] 内は、細分化によって元々一つにまとめられていたものが二分されたカテゴリー数である (e.g. 〈内心・本心・考え・意図〉→〈内心・本心〉〈考え・意図〉)。

表 22 スキーマレベル II～概念レベル (L3) のメタファー

			【概念メタファー】	【項目数】
容器 L3-C	〈腹〉	A	〈感情は腹という容器の中に納められた内容物である〉	怒り 4 機嫌 2 満足 1 不満 1 (合計 8)
		B	〈内心・本心は腹という容器の中に納められた内容物である〉	3 [2]
		C	〈考え・意図は腹という容器の中に納められた内容物である〉	4 [2]
		D	〈人格は腹という容器の中に納められた内容物である〉	1
		E	〈度量・包容力は腹という容器の容積である〉	1
		F	〈理解・納得は腹という容器に対象を取り込むことである〉	1
			【合計】	18 [2]
	〈胸〉	G	〈感情は胸という容器の中に納められた内容物である〉	感情の高ぶり 2 感情の解消 1 喜び・期待 1 苦悶・恋慕 1 怒り 1 不安 1 感銘 1 (合計 8)
		H	〈内心・本心は胸という容器の中に納められた内容物である〉	3 [1]
		I	〈考え・意図は胸という容器の中に納められた内容物である〉	2 [2]
		J	〈知識・情報（記憶）は胸という容器の中に納められた内容物である〉	1 [1]
		K	〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉	1
		L	〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉	2
			【合計】	17 [2]
	〈頭〉	M	〈怒りは頭という容器の中に納められた内容物である〉	1
		N	〈考えは頭という容器の中に納められた内容物である〉	3 [1]
		O	〈知識・情報（記憶）は頭という容器の中に納められた内容物である〉	2 [1]
		P	〈発想／記憶の想起は生物・物体が頭という空間を通過することである〉	1
		Q	〈記憶は頭という容器に対象を取り込むことである〉	2
			【合計】	9 [1]
具象物 L3-O	〈腹〉	R	〈精神の安定は腹の安定である〉	6
			【合計】	6
	〈胸〉	S	〈感銘とは胸への衝撃である〉	2
		T	〈恋慕は胸という物体が燃焼することである〉	1
		U	〈自問は胸という他者に問いかけることである〉	1
			【合計】	4
	〈頭〉	V	〈思考は頭という道具を用いることである〉	8
		W	〈思考の柔軟性は頭という物体の固さである〉	2
			【合計】	10

〈腹〉〈胸〉〈頭〉は共通して〈容器〉のメタファー (L3-C), 〈具象物〉のメタファー (L3-O) の類型を持つ。表 22 の通り, 〈具象物〉メタファーはほとんど一致する点が見られないのに対し, 〈容器〉メタファーについてはパターンが共通している。〈容器〉メタファーの場合, 〈腹〉の A/B/C, 〈胸〉の G/H/I/J, 〈頭〉の M/N/O のように, 容器内に内容物を保管する・隠す一面や, 内容物の量の増減に注目するものがカテゴリー数として最も多い。また, 〈腹〉の E/F, 〈胸〉の K/L, 〈頭〉の Q など, 内容物を受け容れる一面に注目するものも三分位で共通している。このように, L3-C に関してはメタファー

で用いられる〈容器〉の性質に共通する部分があるので、それを詳細化したカテゴリーを表 23 の通り一覧として示す。表 23 では、表 22 の各メタファーの分類を示す英語アルファベットを対応づけた。

表 23 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベル II～概念レベル (L3-C) のカテゴリーの比較

	【容器の状態】	〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
		【精神作用・例】		
1	内容物で満ち(てい)る	満足 (A) 「腹一杯」	感情の高ぶり (G) 「胸が一杯になる」	
2	内容物が増え、膨張する	不満 (A) 「腹ふくる」	喜び・期待 (G) 「胸を膨らます」	
3	内容物が収まりきらない		感情の高ぶり (G) 「胸に余る」	
4	内容物が燃える	怒り (A) 「業腹がる」	苦悶・恋慕 (G) 「胸に焚く火」	
5	内容物が煮える	怒り (A) 「腹が煮える」	怒り (G) 「胸が煮える」	
6	虫 (が暴れ、制御できない)	怒り (A) 「腹の虫 (が治まらない)」		
7	内容物を留めておけない	怒り (A) 「腹に据えかねる」		
8	形	機嫌 (A) 「腹形」		
9	状態 (具合)	機嫌 (A) 「腹具合」		
10	視界を遮る天候		不安 (G) 「胸の霧」	
11	天候の解消		感情の解消 (G) 「胸が霽れる」	
12	反響		感銘 (G) 「胸に響く」	
13	内容物が到達する			怒り (M) 「頭に来る」
14	内部	内心・本心 (B) 「腹の内」	内心・本心 (H) 「胸の内」	(「頭の内」) ²⁰⁵
15	内容物 {がある／を留める}	内心・本心・考え・意図 (B, C) 「腹に {一物／納める}」	内心・本心・考え・意図 (H, I) 「胸に {一物／納める}」	
16	中を探る／探られる	考え・意図 (C) 「腹を {探る／探られる}」		
17	中を見る	考え・意図 (C) 「腹を見抜く」		
18	割る／中を晒す	考え・意図 (C) 「腹を割る」	内心・本心 (H) 「胸を割る」「胸を明かす」	
19	内容物が浮上する		考え・記憶 (I, J) 「胸に浮かぶ」	考え・記憶 (N, O) 「頭に浮かぶ」
20	搾る			思考 (苦心) (N) 「頭を搾る」
21	空白になる			思考 (N) 「頭の中が真っ白になる」
22	内容物が入る／入れる	理解・納得 (F) 「腹に {入る／入れる}」	理解・納得 (L) 「胸に落ちる」	記憶 (Q) 「頭に {入る／入れる}」
23	銘刻する		記憶 (L) 「胸に刻む」	
24	内容物が付着する			記憶 (Q) 「頭に付く」
25	規模	度量・包容力 (E) 「腹が {大きい／小さい}」	度量・包容力 (K) 「胸が {広い／狭い}」	思考力 (O) 「頭でっかち」
26	内容物が汚い／黒い	性格 (D) 「腹が汚い」「腹が黒い」		
27	生物・物体が通過する			考え・記憶 (P) 「頭を過る」

²⁰⁵ 脚注 191 で述べたとおり頭の内部を指す名詞は辞書見出しにはないが、一般的に用いるので () で示した。

表23を見ると、同じあるいは類似する描写であっても、〈容器〉が〈腹〉〈胸〉〈頭〉のいずれであるかによって対応する精神作用が異なる場合がある。いくつか挙げると、[1]の「腹一杯」(〈満足〉)と「胸が一杯になる」(〈感情の高ぶり〉)、[2]の「腹ふくる」(〈不満〉)と「胸を脹らます」(〈喜び・期待〉)、[25]の「腹が{大きい／小さい}」「胸が{広い／狭い}」(〈度量・包容力〉)と「頭でっかち」(〈思考力〉(理屈一辺倒))などである。また、[22]「腹に{入る／入れる}」「胸に落ちる」(〈理解・納得〉)と「頭に{入る／入れる}」(〈記憶〉)も意味的には類似しながら異なっている。[25]と[22]の〈腹〉〈胸〉と〈頭〉の対比から見えるのは、知的精神の座としての〈頭〉の理解である。

〈腹〉と〈胸〉は意味的にも類似する共通カテゴリーが多いものの、[16],[17]の「腹を見抜く」「腹を探られる」や[26]「腹が汚い」の人格に関するカテゴリーなどが特有であり、際立っている。また、有菌(2007)が〈胸〉に情緒的精神と知的精神の両方が結びつくことを指摘しているように(本稿3.2.2.6節を参照)、〈胸〉は[19]「胸に浮かぶ」(〈考え・記憶の想起〉)(cf.「頭に浮かぶ」)や、[23]「胸に刻む」(〈記憶〉)など、〈腹〉に見られない精神作用との結びつきがある。〈胸〉については、[10]「胸の霧」(〈不安〉)、[12]「胸に響く」(〈感銘〉)など、〈空間〉として捉えられる場合もあり、このことは(慣用的意味として)「*胸が{大きい／小さい}」ではなく「胸が{広い／狭い}」と言うこととも関係しているだろう。

ここで、L3の身体基盤・文化基盤として3.4節から3.6節までに言及したものを表24として集約する。

表24 〈腹〉〈胸〉〈頭〉のスキーマレベルⅡ～概念レベル(L3)の基盤

	〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
身体基盤	摂食活動	摂食活動, 呼吸	摂食活動, 呼吸 (頭部の感覚器官の経験)
文化基盤	五臓思想 腹の身体感覚の文化的強調 本音と建前文化	五臓思想	西洋医学における解剖学的知見

上の表で挙げた摂食活動や呼吸の身体基盤は、それらを司る臓器・器官が位置する〈腹〉〈胸〉を〈容器〉のスキーマと結びつける動機として働くと考えられる。一方の〈頭〉に関しても、〈容器〉メタファーが確認されるように、何らかの容器的経験基盤があるはずである。3.6.5節では、この可能性として、〈頭〉に飲食物・空気の入口(・出口)である口や鼻が位置することに加え、耳・目という感覚受容器官も位置することを述べた。ただし、表17の〈腹〉〈胸〉に関して、L3-OよりL3-Cの項目数が多いことから判断するに、〈容器〉としての認識は〈頭〉よりも〈腹〉〈胸〉の方が強いと考えられる。

文化基盤に目を向けると、五臓思想 (e.g. 長谷川ほか, 2012) は〈腹〉〈胸〉と精神作用の結びつきを L3 で広く動機づけながらも、その影響は表 23 の [6]「腹の虫」(〈怒り〉) のように特定の表現に強く残っている。3.3.4.1 節で述べたように、〈腹〉と〈怒り〉の結びつきは、五臓思想において肝が〈怒り〉の臓と見なされていることとも関係するだろう。また、丹田思想 (e.g. 片渕, 2023) あるいは腰肚文化 (齋藤, 2000) に基づいて〈腹〉の安定性が意識化され (〈バランス〉スキーマ)、〈精神の安定は腹の安定である〉という〈具象物〉メタファーが成立している (表 22 [R])。もう一つ言及した〈腹〉の文化基盤として、本音と建前文化 (Matsuki, 1995) がある。この文化基盤は、〈腹〉が自己保存のための摂食活動の中心部位 (田中, 2003) であり、さらに三部位の中でも最下部に位置する (有蘭, 2009) という身体的特徴と結合することで、表 23 の [7]「腹に据えかねる」(〈怒り〉), [15]「腹に {一物／納める}」(〈内心・本心・考え・意図〉), [16]「腹を {探る／探られる}」(〈考え・意図〉), [17]「腹を見抜く」(〈考え・意図〉) などによって特徴付けられるような、他者に知られたいくない対人的・利己的な精神の一面を位置付ける動機として働くと考えられる。このように、〈腹〉は L1 や L2 の共起的な身体経験に限られる一方で、L3 での複数の文化基盤の支えにより、部位としての特徴を発現していると考えられる。このような観点から、本章では〈腹〉の文化モデルを特徴付けるのは文化基盤であると結論づける。

ここで、先行研究における議論の統合を図ることができる。腰肚文化・丹田思想の影響は McVeigh (1996) の研究で、本音と建前の文化基盤は Matsuki (1995) の研究で指摘されていたことであるが、これらは互いに関係しながらも、L3-O と L3-C という異なる〈腹〉の文化モデルの側面を特徴づけている。また、田中 (2003) の指摘した食物摂取を司る〈腹〉の身体基盤は、L3-C における〈容器〉スキーマの秘匿性の性質を媒介として、Matsuki (1995) による本音と建前という文化基盤と融合するものであると考えられる。

一方の〈胸〉に関しては、L1 や L2 における身体経験が抽象化・一般化されることで、〈胸〉を精神の座とみなす概念レベル (L3) の理解の成立を促進すると考えられる。この意味で、L1 や L2 における身体経験は、L3 の表現を間接的に動機づけている。ただし、3.5.6 節でも述べたように、五臓思想において〈胸〉は〈喜び〉や〈悲しみ・憂い〉といった感情を司る心と肺が位置する部位でもあり、さらに心は情緒的精神・知的精神を含む全ての精神活動を統率する臓でもある。このような特徴はここまでに観察してきた〈胸〉の特徴と整合するものであり、五臓思想の影響を軽視すべきはないであろう。

最後に、〈頭〉については〈腹〉と同様に L1, L2 の該当表現が少なく、L3 以上でのカテゴリー数が多い。〈腹〉と〈胸〉のような L3-C (〈容器〉) と L3-O (〈具象物〉) の偏りはなく、また、L3 では「頭に来る」の〈怒り〉表現を除き、すべて知的精神を表す。このような知的精神と〈頭〉を結びつける身

体基盤は、L1の頭痛・頭重感に基づく〈思考（苦悶）〉のみが言語的証拠であり（怒りに関する身体経験を除く）、あとは上で述べた〈頭〉の容器的経験が想定されるのみである。このような理由から、知的精神との結びつきが際立つ〈頭〉の文化モデルは、〈腹〉〈胸〉に対する五臓思想の影響のように、脳の機能に関する西洋医学的知見の支えを通じて成立していると考えられる。

以上をまとめると、「身体基盤・文化基盤のうち、現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喻の基盤となるものは何か。」という RQ 2 に対して次のような回答を与えることができる。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、五臓思想（e.g. 長谷川ほか, 2012）・丹田思想（e.g. 片渕, 2023）・本音と建前文化（Matsuki, 1995）といった文化基盤であり、特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有蘭, 2007, 2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴付ける動機づけの中心にあるのは、近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか, 2012）である。

3.8 第3章のまとめ

本章では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義を成立させる比喩とその動機づけを分析し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）の成立基盤を明らかにすることを目的とした。〈腹〉〈胸〉〈頭〉については、これまでも認知言語学的なアプローチによる研究が行われてきたが、従来の研究が論じる視点のうち、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の獲得を促す動機づけ（基盤）については、各々の研究が巨視的な考察を加えるにとどまる傾向にあり、具体的・体系的な説明は与えられてこなかった。そこで本章では、以下二つの RQ に対する答えを得るため、楠見・米田(2007)の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を新たに導入し、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の帰納的分析を行なった。

(308) RQ 1: 現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を構成する比喩は、それぞれどのような身体基盤・文化基盤によって成立しているか。

RQ 2: 身体基盤・文化基盤のうち、現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喩の基盤となるものは何か。

(=97))

「身体部位詞表現の階層モデル」は、精神作用に関する一連の身体部位詞表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけを帰納的に明らかにすることを可能とするモデルである。本章ではまず、伊藤(1997a, 1997b)、山梨(1988/2007)を参考に、身体部位詞表現を、① 身体部位の描写に関わる比喩、② 身体部位と精神作用を結びつける比喩という二つの観点から七種へ分類した。これらを「感覚・運動レベル (L1)」「スキーマレベル I (L2)」「スキーマレベル II～概念レベル (L3)」へと分類することで、各部位の表現が特にどのレベルに分布し、どのような種類の基盤（身体基盤・文化基盤）によって特徴づけられるかを分析した。

以下、RQ 1 に対する回答としては、「現代日本語の〈頭〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤」として示した図 13、図 16、図 19 を再掲し、その要点を示す。

〈腹〉の文化モデルのまとめ

- 〈腹〉で観察される身体経験は、L1, L2 における共起性基盤としての腹筋の痛み・腹のむかつき・体温変化に加え、L3 の摂食活動を通じて得られる〈容器〉としての経験など、比較的限られている。
- 〈具象物〉としての〈腹〉の理解には、L3 における丹田思想あるいは腰肚文化（McVeigh, 1996; 片渕, 2023; デュルクハイム, 1954/2003; 齋藤, 2000）とよばれる文化基盤が特に影響しており、それが〈精神の安定は腹の安定である〉というメタファーを成立させる主要因となる。
- 〈容器〉としての〈腹〉の理解は、精神を表に出さないという文化的価値観 (Matsuki, 1995) に、消化器官を内蔵する〈腹〉の身体的特徴（田中, 2003）が結合することで、他人との対立を生む精神作用を「隠す」部位としての特徴を生じさせている。

図 13 現代日本語の〈腹〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

	L1	L2	L3
	感覚・運動レベル	スキーマレベル I	スキーマレベル II
	メトニミー表現	メトニミー× メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・ イメージスキーマ
	痛み「腹が痛い」 不快感「腹がムカ／＼する」 しぐさ「腹を抱える」	振れ「腹を振る」 切付け「腹を切る」	〈容器〉「腹の内」 〈垂直性〉「腹が立つ」 〈バランス〉〈コントロール〉 「腹に据えかねる」
表象・例			シナリオ・ 概念メタファー 〈感情／内心・本心／ 考え・意図／人格は腹 という容器に納められ た内容物である〉 〈度量・包容力は腹と いう容器の容積であ る〉 〈理解・納得は腹とい う容器に対象を取り込 むことである〉 〈精神の安定は腹の安 定である〉
基盤	痛み, 内臓感覚 (, 体温変化)		摂食活動, 腹の身体感 覚の文化的強調
認知操作	メトニミー操作 (共起的相関)	抽象化・類推 (メタファー)	統合・複雑化

〈胸〉の文化モデルのまとめ

- 〈胸〉には、胸痛・動悸・苦しさ（呼吸）・不快感（内臓感覚）・体温変化といった豊かな共起性基盤が認められる (cf. 有蘭, 2007, 2009)。これらの身体経験が L1, L2 の〈胸〉表現を個別に、さらには L3 以上の〈精神の座としての胸〉という概念上の理解の成立を強く動機づけていると考えられる。
- 〈胸〉の〈容器〉メタファーの豊富さは、摂食活動や呼吸に基づいた容器的な身体経験（L3 での身体基盤）が〈胸〉で顕著であることに起因すると考えられる。
- 一部の知的精神の座としての〈胸〉の理解や〈喜び〉〈悲しみ・辛さ〉といった感情との強い結びつきは、〈胸〉に位置する心臓や肺の五臓思想 (e.g. 長谷川ほか, 2012) における特徴と整合する。

図 16 現代日本語の〈胸〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

	L1	L2	L3
	感覚・運動レベル	スキーマレベル I	スキーマレベル II
	概念レベル		
	メトニミー表現	メトニミー × メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・イメージスキーマ
	しぐさ「胸を撫で下ろす」		〈容器〉
	痛み「胸が痛い」	動揺「胸が騒ぐ」	「胸に昼む」
	動悸「胸が高鳴る」	鎮静「胸が収まる」	〈垂直性〉
	苦しさ「腹が苦しい」	衝撃「胸をつく」	「胸に込み上げる」
	不快感「胸が悪い」	損傷「胸が裂ける」	〈バランス〉
	体温変化「胸が熱くなる」「胸を冷やす」	圧迫「胸が潰れる」	「胸が煮える」
表象・例		閉塞「胸がつまる」 閉塞の解消「胸がすく」	
			〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報（記憶）は胸という容器に納められた内容物である〉
			〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉
			〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉
			〈感銘は胸への衝撃である〉
			〈恋慕は胸という物体が燃焼することである〉
			〈自問は胸という他者に問いかけることである〉
基盤	痛み, 動悸, 苦しさ 不快感 (内臓感覚) (, 体温変化)	摂食活動, 呼吸	五臓思想
認知操作	メトニミー操作 (共起的相関)	抽象化・類推 (メタファー)	統合・複雑化

〈頭〉の文化モデルのまとめ

- 〈頭〉の想定される共起性基盤は痛み（頭痛）・頭重感・血液の集中・体温変化（・赤面）であるが、〈胸〉ほど多様な L1 や L2 の表現を動機づけるわけではない。
- 飲食物・空気の入口（出口）が位置することから、〈頭〉にも容器的な経験基盤（L3 での身体基盤）が認められる。
- L3 以上に関わる〈頭〉の文化モデルは、〈腹〉や〈胸〉の文化モデルが五臓思想の影響を受けたのと同様に、脳の機能に関する近代西洋医学における解剖学的知見の影響（e.g. 長谷川ほか, 2012）を受けて形成されたと考えられる。

図 19 現代日本語の〈頭〉の文化モデルを支える身体基盤・文化基盤

	L1	L2	L3
	感覚・運動レベル	スキーマレベル I	スキーマレベル II
	メトニミー表現	メトニミー×メタファー表現 (存在のメタファー)	存在のメタファー・イメージスキーマ
	痛み「頭が痛い」 頭重感「頭が重い」 血液の集中「頭に血が上る」 冷却「頭を冷やす」	損傷「頭を砕く」 蒸気「頭から湯気を立てる」	〈容器〉 「頭に入れる」 〈垂直性〉 「頭に来る」
表象・例			シナリオ・概念メタファー 〈発想／記憶の想起は生物・物体が頭という空間を通過することである〉 〈怒り／考え／知識・情報（記憶）は頭という容器の中に納められた内容物である〉 〈記憶は頭という容器に対象を取り込むことである〉 〈思考は頭という道具を用いることである〉 〈思考の柔軟性は頭という物体の固さである〉
基盤	痛み、頭重感、血液の集中、体温変化（・赤面）	摂食活動、呼吸（・頭部の感覚器官の経験）	西洋医学における解剖学的知見
認知操作	メトニミー操作（共起的相関）	抽象化・類推（メタファー）	統合・複雑化

以上の特徴づけは、主に慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の観察をもとに導いたものである。今回の調査では慣用的連結句の例は多くは得られなかったが、「腹」が単独で〈怒り〉（腹立ち）を表す例（e.g. 「自棄っ腹」）、「頭」が単独で〈思考力〉を表す例（e.g. 「頭が弱い」）のように、L1 から L3 までに慣用句あるいは全体としての意味拡張を経た合成語の意味として特徴付けられる精神作用

を身体部位詞単独で担う傾向が見られる。語レベルでの精神義の確立は、ある特定の精神作用とその部位の結びつきが慣習化・定着していることを示す証拠になる可能性がある。

また、RQ 2「身体基盤・文化基盤のうち、現代日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）を最も特徴づける比喩の基盤となるものは何か。」に関しては、3.7 節の三部位の比較を通じた特徴づけにより、次の結論を導いた。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、五臓思想（e.g. 長谷川ほか, 2012）・丹田思想（e.g. 片渕, 2023）・本音と建前文化（Matsuki, 1995）といった文化基盤であり、特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有蘭, 2007, 2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか, 2012）である。

この章では、本研究が「身体部位詞表現の階層モデル」と呼ぶ分析方法を用いることで、精神作用に関する一連の身体部位詞表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類し、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけを帰納的に明らかにした。本章で論じた〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関わる基盤の多くは、先行研究ですでに指摘されてきたものである。しかし本研究では、想定される一つの基盤に注目するのではなく、複数の基盤を包括的に扱った上で全体像を示し、その上で部位を特徴づける中心的な動機づけを明らかにした。このようなプロセスを経たことで、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の動機づけとして従来論じられてきた基盤の裏付けがなされた点に本章の結論の意義が見出される。身体部位詞など、それ一つで様々な意味に関する比喩表現を構成する語（語群）を対象に、比喩義の動機づけを論じるにあたっては、まずは各々の表現の比喩の仕組みを捉え分類・分析した上で、適切なレベルで動機づけの説明を与えるべきである。このような表現レベルでの微視的視点に加え、それらの表現の共通項である構成語（身体部位詞）に対する巨視的な分析を施すことで、その身体部位詞の背後にある身体の文化モデルを把握することができると考えられる。

第4章 日本語における精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の史的展開

4.1 はじめに

本章では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の展開を歴史的に観察することを通じて、第3章で分析した〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルがそれぞれの部位に関わる身体基盤・文化基盤の影響を受けながら現代までに発展してきたことを明らかにする。

4.1.1 先行研究

比喩言語の認知言語学的分析は、今や世界中に広がりを見せているが、個別言語を対象とする研究であっても、当該言語の表現の記述・分析に留まらず、他言語との比較を含む場合が多い (e.g. Sharifian et al., 2008b)。そこで明らかになるのは、普遍的な身体経験に因る比喩義や表現様式の類似性であり、また、言語固有の文化的要因による比喩義・表現様式の多様性である (e.g. Kövecses, 2005)。たとえば、第3章でも挙げたように、人体を容器とし、〈怒り〉をその中で煮え立つ液体に喩える *He is boiling with anger* (「怒りで煮え繰り返る」) などの表現は、血圧の上昇、体温変化といった人類普遍の生理現象に基づき、多くの言語で類似表現が観察されることが指摘されている (e.g. Kövecses, 1995, 2000, 2005)。一方、より詳細なレベルで見た場合、各言語に固有の表現も存在し、その固有性の説明にはしばしば当該言語の文化基盤が持ち出される。3.2.2.2 節で言及した通り、Matsuki (1995) は日本語にも英語と類似する〈怒り〉の表現様式が存在するとした上で、日本語の〈怒り〉は本音と建前文化の影響下で特に制御の段階が精緻化されており、それが言語表現としても反映されていると論じている。このように、比喩表現の研究においては、身体基盤・文化基盤という二種類の動機付けの想定のもとに、言語間の共通性・相違性が一つの論点とされてきた (身体基盤・文化基盤の詳細については本稿 2.3.7 節を参照されたい)。

このような通言語的 (あるいは対照言語学的) 視点に対し、特に近年増えつつあるのが通時的視点を取り入れた比喩表現の研究であり、この傾向は身体部位詞研究に関して特に当てはまる (e.g. Geeraerts & Gevaert, 2008; Mischler, 2013; Swan, 2009)。たとえば、Geeraerts and Gevaert (2008, pp. 322–323) は、古英語の *heart* (*heort*) を含む複合語を観察することで、当時の *heart* はもっぱら感情の座という訳でなく、現代でいう *mind* と *soul* の座として理解されていたことを明らかにしている。同様のことが、古英語から初期近代英語までの *heart* の精神義を追った Swan (2009, p. 469) によっても報告されており、*heart* は知的精神の座としての意味が初期近代英語期まで観察されることが明らかにされている。Niemeier (2008, p. 366) によれば、このような *heart* と理性的精神との対応は伝統的な体液説の中でも保

たれていた見方であるが、デカルト的二元論が西洋に普及することで、知性・理性の座 *head/mind* に対する感情の座としての *heart* の理解が定着していったという。²⁰⁶ Swan (2008, pp. 467–468) はさらに、古英語の *heart* が現代と同じ感情の座としても理解されていた一方で、倫理的・宗教的な文脈で使用されることが多かったこと（現代英語の *soul* が持つ意味に近い）を指摘している。現代では一般的な *heart* と男女間の恋愛感情 (romantic love) は、時代を経て発展したものであり、当初は宗教的な文脈での神に対する愛・崇拝と結びついていたという。

Mischler (2013) は、〈怒り〉を表す *spleen* (脾臓) 表現を通時的に観察することで、体液説の影響のもと *spleen* が感情のメタファー表現を形成していることを論じている。第7章 (Ch. 7) の19世紀の用例の観察においては、SPLEEN には典型的には流動体が納められ、その流動体となるのは〈怒り〉(ANGER) 〈悲しみ〉(SADNESS) 〈狂気〉(MADNESS) 〈嫌味〉(SARCASM) 〈陽気〉(MIRTH) などの様々な感情であると報告している。また、Mischler (2013, pp. 173, 175) はここでの流動体は圧力を纏うものの基本的には熱を伴わないとし、Kövecses (1986, Ch. 2; 1990, Ch. 4), Lakoff (1987, Case Study 1), Lakoff and Kövecses (1987) などの共時的研究によって非プロトタイプ的な〈怒り〉に位置付けられてきた〈冷たい怒り〉は、単に熱流体のメタファーから見た非プロトタイプなのではなく、歴史的には別カテゴリーとしてのメタファーによって動機づけられている可能性があることを論じている。

このような歴史的視点を取り入れた認知言語学的な比喩研究が西洋言語を中心に増えつつある一方で、日本語を対象とした研究はまだ少ないのが現状である。特に本研究の対象である身体部位詞については、筆者の管見では歴史的観点からの認知言語学研究は存在しない。以下では、認知言語学的枠組みではないものの、特定の時代の「腹」と「胸」の精神義を調査した示唆的な研究として、長谷川

²⁰⁶ Niemeier (2008) の研究は歴史的研究ではないものの、現代英語表現の説明に歴史的な背景を持ち出している。なお、「(心身) 二元論」とは、延長を本質とする身体と非延長を本質とする精神を分断する哲学的立場であり、一般的に古代ギリシャのプラトン哲学にまで遡ると言われている。デカルトは両者を独立した実体とみなしつつも、それらが脳 (の松果体) において相互作用すると考えた。また、デカルトは理性と感情 (厳密にはその受動的な性質から、「情念 (passion)」と呼ばれる) を区別した上で、前者が後者を支配することが道徳律であると考え、理性とその座としての脳を重要視している。なお、Niemeier (2008, pp. 357–359) では、デカルトが感情の座を心臓に置いたという誤解を招きかねない説明がなされているが、この点については『情念論』で「心臓に情念を感じるからといって、精神が心臓において直接にその機能を果たすという必要はない (p.33)」と明確に否定されている。したがって、理性・知性の座としての *head*、感情の座としての *heart* の理解は、分け隔てなく *heart* に位置付けられていた精神作用のうち、理性・知性に関するもののみが二元論によって *head* に移行したという過程を想定すべきである。

また、体液説 (The Humoral Theory) とは、ヒポクラテスの影響を受けた古代ギリシアの医師ガレヌス (Galēnos/Galen) によって提唱され、中世ヨーロッパの心身観に大きな影響を与えた医学理論のことである。この説によれば、人間は「黄胆汁 (yellow bile)」「黒胆汁 (black bile)」「血液 (blood)」「粘液 (phlegm)」という四種の体液 (The Four Humors) で構成されていると考えられている。これらの体液はそれぞれ熱冷・乾湿の二つの特性を有しており、黄胆汁は熱・乾 (火)、黒胆汁は寒・乾 (土)、血液は熱・湿 (空 [気])、粘液は寒・湿 (水) の特性によって特徴付けられる。また、これらは各々が肝臓 (と胃)・脾臓・心臓・脳 (と膀胱) と対応づけられる。四種の体液のバランスが崩れることと心身の不調が結びつくという考え方をとり、黄胆汁の余剰な人は短気で怒りっぽく、黒胆汁の余剰な人は神経質で鬱傾向に、血液の余剰な人は社交的・楽観的に、粘液の余剰な人は沈着で無機質な性向にあると言われる (以上、Geeraerts and Grondelaers (1995), Ibarretxe-Antuñano (2008), Mischler (2013, Ch. 5) に基づく)。

ほか (2005, 2012) をやや詳しく紹介する。

長谷川ほか (2005) は、江戸中期～後期の浄瑠璃、歌舞伎、草双子から「腹」「胸」さらに他の関連部位の身体部位詞を含む表現を幅広く収集することで、それらの身体部位詞が持つ意味を「身体義」(身体に関わる表現)、「心理義」(心の働きに関わる表現)、「人格義」(人物評価に関わる表現)の三区分に基づいて観察している。以下、各分類を例とともに引用する(用例の表記は全て引用元に従う)。

(309) 「腹」の意味

身体義：【飲食欲求の場】はらがぺこぺこする 【痛みの場】あとばらいたむ 【金銭にかかわる場】かみがたばら 【武士にとっての自死の場】鉄砲腹 【子を孕む場、出生、出自】はらから²⁰⁷

心理義：【感情生成の場】[怒り] まけばらたち／[笑い] はらのかわをよる 【感情制御の場】はらにすえる 【主体意識の核(本心)の所在およびこころの働きの根本にかかわる場】はらががてんしない／はらにあう

人格義：はらぎたなし／はらぐろい

「胸」の意味

身体義：【精神の緊張や感情の激変による動悸】むねがどきつく／むねのどうきがおさまらぬ 【吐き気】むねがわるい

心理義：【感情生成の場】[苦痛としての感情] むねがくだける／[恋愛の苦しみ] むねのほのお(ほむら) 【感情制御の場】むねをはらす／むねをなでおろす 【主体意識の核(本心)の所在およびこころの働きの根本にかかわる場】たがいにいわぬむねとむね／むねにこたえがある／むねのかがみ 【知的営みの行われる場所】むねのちょうめん

人格義：きたないむね

(長谷川ほか (2005) をもとに作成)

長谷川ほか (2005) の研究は、近世の重要な心身観である「虫」観を多角的に探った学際的研究(のちに長谷川ほか (2012) として集成)の一環として、「虫」の所在とされた〈腹〉〈胸〉のイメージを明らかにすることを目的としたものである。したがって、〈腹〉や〈胸〉と結びつく精神作用を詳述したものではないが、豊富な表現が挙げられており、近世において〈腹〉〈胸〉に関する豊かな心身観が確立していたことが示されている。また、「身体義」を見ると、「むねがどきつく」などの表現は【精神の緊張や感情の激変による動悸】と示されているように、何らかの精神作用との繋がりが想定されて

²⁰⁷ 【子を孕む場、出生、出自】とあるように、この「はらから」は、「同胞(はらから)」の意であろう。「はらから」については脚注 158 の説明を参照されたい。

いる。事実、長谷川ほか (2005, p. 78) は「これらの表現は、「身体」にかかわる即物的な事象をいうことによって人間の「こころ」を表現する手法となっている」と述べており、時間的隣接性に基づくメトニミーに相当する考察が加えられている。このほか、「心理義」とする表現においても「即物的」「体感的」といった用語をもとに胸部の身体経験を想定した記述が目立つ。このような長谷川ほか (2005) の記述から、通時的研究においても、比喩表現の成り立ちという観点から表現を体系的に整理していくことの可能性と必要性が窺える。

また、同著者らは長谷川ほか (2012, 第 9 章) において、近代化における「虫」観解体の様子を探るため、近代文学作品の表現の観察を行なっている。その観察によれば、二葉亭四迷、田山花袋、夏目漱石といった知識人による文章の中では、医学分野外の一般読者が想定されながらも、「神経」「頭」「脳」「頭脳」といった語を含む表現が積極的に用いられている。挙げられている例として、「幸（さ）ひは）ひ頭（あたま）と違（ちが）つて、身体（からだ）の方（ほう）は善（よ）く動（うご）くので」（それから 1909 〈夏目漱石〉）や、「頭脳（あたま）が烈（はげ）しく動揺（どうよう）した」（生 1908 〈田山花袋〉）のように、〈頭〉が精神を司るという認識に基づいて作られた表現のみならず、「頭（あたま）の中（なか）へ現（あら）はれる画（ゑ）を何枚（まんまい）となく眺（なが）めた」（門 1910 〈夏目漱石〉）のように、より創造的に〈頭〉を解釈して内面を描くものも見られる。長谷川ほか (2012) の研究は、近代の〈頭〉の精神義の分類や意味拡張の説明を意図したものではないが、〈頭〉と精神の結びつきが近代で確実に現れていたことを裏付けている。

4.1.2 本章の目的と構成

以上の事例研究が示唆するように、歴史的視点を取り入れることで見えてくるのは、ある言語内の身体部位詞の比喩義が通時的に不変であるとは限らないこと、また、時代毎の文化的影響を強く受けるという点である。²⁰⁸ 歴史的研究のこのような観点の重要性は否定できないが、その反面、現代語と比較した場合の相違点、その文化的要因にばかり注目することで、認知言語学が理論初期から重要視してきた身体性から目が離れるきらいがあることも事実である。一方で、理論研究の立場からは比喩

²⁰⁸ 比喩研究において歴史的視点とともに文化基盤が強調される基礎を作ったのは、Geeraerts and Grondelaers (1995) であろう。Geeraerts and Grondelaers (1995) は、身体性を強調してアメリカ英語の〈怒り〉のメタファーを分析した Lakoff and Kövecses (1987) の見解に異を唱えた研究である。具体的には、Geeraerts らは欧米言語文化圏の〈怒り〉の概念化（特に容器内の熱流体としての〈怒り〉のメタファー）は、生理的感覚・反応によって直接的に動機づけられているというよりは、中世ヨーロッパで興隆した体液説 (The Humoral Theory) の名残を現代まで引きずっていると主張する（脚注 206 を参照）。たとえば、Geeraerts and Grondelaers (1995, p. 167) は体液説による説明の優位性として、人体を〈容器〉とみなした場合に、なぜ熱せられた内容物が gas や solid でなく fluid とみなされるのかについて、体液説の方が明確な説明を与えてくれると述べている。この見解に対し、Geeraerts and Grondelaers (1995) と同じ論文集に収録された Kövecses (1995) では、英語の〈怒り〉表現が他言語文化圏の〈怒り〉表現と偶然とは言い難い類似性を持つという証拠をもとに、身体基盤の重要性が引き続き主張されている。

表現の歴史的な消長における身体基盤と文化基盤の相互の影響は整備されつつある (e.g. Kövecses, 2005; Trim, 2015)。すなわち、感情経験に伴う動悸などの普遍的な身体基盤は、時代を問うことなく「胸が高鳴る」のような比喩表現を動機づける傾向にあり、反対に 4.1.1 節で挙げたデカルト的二元論のような文化的要因は、その普及によって初めて特定の時代の比喩表現（たとえば、知性・理性に関する *head* 表現）を動機づけるというものである。²⁰⁹ 今後はこれら両方の観点を平等に組み込んだ多くの事例研究による検証が必要となる。

本章では、認知言語学における日本語身体部位詞の歴史的調査の欠如、身体基盤・文化基盤の両観点を取り入れた比喩表現研究の事例研究（検証）の不足という二つのリサーチギャップを埋めるため、以下のリサーチクエスションの達成を目的とした歴史的調査を行う。

(310) RQ 1: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用は歴史的にどのように広がっていったか。

RQ 2: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を支える比喩の展開にどのような特徴が見られるか。

RQ 3: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開に身体基盤・文化基盤はどのように影響したか。

RQ 3 に関しては、上で述べた比喩表現の歴史的な消長における身体基盤と文化基盤の想定に基づき、それを身体部位詞表現に適用することで、次のような仮説を設定することができる。

(311) I. 身体基盤は通時的に（すなわち早期からの）身体部位詞の比喩義の発生を促す。

II. 文化基盤はそれが普及した特定の時代において、身体部位詞の比喩義の発生を促す。

3.3.4.3 節で述べたように、日本において、古来五臓を中心に捉えられてきた身体と精神との結びつきは、近代西洋医学の影響によって脳中心の捉え方への移行を迫られた。仮説 II に基づいた場合、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の精神義は、〈腹〉〈胸〉と〈頭〉とで発展時期が異なるはずである。したがって、本章では〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の史的展開を観察する上で部位同士の比較の視点を取り入れ、また、日本における近代西洋医学に基づく脳の知識の一般への普及前後（近世末～近代）に、〈頭〉の精神義に変化が見られたかについて注目していく。

次節からの構成は次のとおりである。4.2 節で調査方法を説明したのち、4.3 節から 4.5 節にかけて精神作用を表す〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の歴史的な拡大を調査する。4.6 節で身体基盤・文化基盤の観点から精神義の展開に考察を加えたのち、4.7 節で本章のまとめを行う。

²⁰⁹ ここで挙げた例は、あくまで *head* に知性・理性とのつながりを動機づける身体基盤がなく、それまでも *head* と知性・理性を関係づける別の文化基盤が存在しなかったと仮定した場合の話である。

4.2 調査方法

4.2.1 調査対象語：日本語身体部位詞の語彙史

日本語学研究において、身体部位詞は複数の語が消長・交替を経たことが確認されており、特に〈頭〉は他の身体部位と比べてその傾向が強いと言われている（宮地, 1979, 第1章）。宮地（1979, 第1章）によれば、「あたま」という語は中古から存在したが、元はひよめき（新生児の頭蓋骨が縫合していない段階で、前頂部に見られる骨と骨の隙間）を指して用いられていた。その後、室町末期～近世初期までに指示対象を広げ、近世には〈頭〉の代表語としての地位を得たと推定される。古代において、現代語の「あたま」に相当する語として用いられていたのは「かしら」であり（文体的・位相的にも幅広く用いられ、〈頭髮〉などの派生的意味を有していた）、その次に「こうべ」が現代の「頭部」に近い形で、漢文訓読文を始まりとして和歌や女流仮名文を除く文中で用いられた。²¹⁰ 従来の認知言語学研究では「あたま」のみが取り上げられており、その他の語を扱った研究は管見の限り存在しないが、このような語彙史を考慮するに、〈頭〉の精神作用への意味拡張を辿るにあたり、「かしら」「こうべ」を含む複数の語を調査対象とする必要がある。このことは、〈頭〉ほど多くの語の消長・交替がなかったと考えられる〈腹〉〈胸〉についても同様である。

本研究における調査対象語の選定は次の手順による。まず、『現代語古語類語辞典』を参考に、「はら」「むね」「あたま」に加え、歴史的に〈腹〉〈胸〉〈頭〉を指す語として用いられてきた（いた）語を大まかな候補として抽出した（次頁表 25）。次に、それらの語を『日国』で引き、（親）見出しの語釈、子見出しの慣用表現の語釈をもとに、精神作用への意味拡張が認められるかどうかを確認した。見出しの語釈あるいは子見出しの慣用表現の語釈の中で、精神作用に関する説明が確認された語として表 26 に示す 14 項目を得た。

表 26 のうち、本章で調査対象としたのは「こころ（心／情／意）」「くび（首・頸）」を除いた 12 項目である。宮地（1979, 第4章）で論じられたように、「こころ」は〈胸〉あるいは〈心臓〉としての身体義が早くに希薄化ないし消失しており、その精神義をその他の身体部位詞の精神義と同列に扱うことは難しい。「くび」については、本章で〈頭〉とする「首から上の部分」を指す場合があるが、「切り取られた頸部から上の部分」という意味として派生したものであり、あくまで「頸部」としての第一義が変化することなく現代に至る（宮地, 1979）。比喩表現としても「くびを捻る」など、後に見るしぐさ・姿勢の表現が該当するに過ぎない。身体義を持ちながらも第一義が〈頭〉とは言い難いゆえ

²¹⁰ 「かしら」と「こうべ（かうべ）」について、『日国』では「平安時代は「かしら」は主に和文資料で、「かうべ」は漢文訓読資料で用いられた。その後室町時代に「あたま」が頭部の名称として用いられるようになり、その勢力が伸びるにつれて「かしら」は人間以外の頭部を指す場合や、慣用的な表現に残って用いられるようになっていった。」とある。

に、調査対象から外した。

表 25 〈腹〉〈胸〉〈頭〉を指す語（『現代語古語類語辞典』に基づく）とおおよその使用開始時代

	〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
上代	はら（腹／肚）	こころ（心），たかむなさか（高胸坂），むな（胸），むなわけ／むねわけ（胸別），むね（胸）	かしら（頭）
中古		しんきょう（心胸）	いただき（頂），くび（首／頸），なづき（脳／髄）
中世	おなか（御中／御腹）	きょうかく（胸膈）	あたま（頭），かうべ（頭／首），かぶ（頭），くし（串），ちやうもん（頂門），つぶり／つむり（頭），とう（頭）
近世	ふくぶ（腹部），ほて，ぽんぽん，肝の束ね	きょうおく（胸臆），きょうぶ（胸部），ブレスト(breast)	おつむ（御頭），かぶり（頭），かみかしら（髪頭），づ（頭），てんてん（天天），なうてん（脳天），びんた，笠の台
近代	ふくかう（腹腔）		つむ（頭），ヘッド(head)

表 26 親見出し・子見出しの語釈に精神義を含む〈腹〉〈胸〉〈頭〉の身体部位詞²¹¹

〈腹〉	〈胸〉	〈頭〉
はら（腹／肚），おなか（御中），ほて	こころ（心／情／意），むね（胸），むな（胸） ²¹² ，きょうおく（胸臆），しんきょう（心胸），きょうかく（胸膈）	かしら（頭），くび（首・頸），こうべ[かうべ]（首・頭），あたま（頭・天窓），ず[ヅ]（頭）

表 26 の〈胸〉のうち，「きょうおく（胸臆）」「しんきょう（心胸）」「きょうかく（胸膈）」は「胸」に別の形態が加わった漢語である。そもそも漢語については，予め精神義を備えて日本へ流入したものが多いと考えられ，『大漢和辞典 修訂第二版』では，「胸臆」「心胸」「胸膈」の精神義としての使

²¹¹ 各語の主要（古）辞書記載状況は以下の通り（『日国』に基づく）。

	中古	中世	近世	近代
はら（腹／肚）	字鏡・和名・名義・色葉	和玉・文明・明応・天正・饅頭・黒本・易林	日葡・書言	ヘボン・言海
おなか（御中）			日葡	ヘボン・言海
ほて	（なし）			
むね（胸）	和名・名義・色葉	和玉・文明・天正・饅頭・黒本・易林	下学・日葡・書言	ヘボン・言海
むな（胸）				言海
きょうおく（胸臆）			日葡・書言	言海
しんきょう（心胸）	（なし）			
きょうかく（胸膈）				ヘボン・言海
かしら（頭）	和名・名義・色葉	和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・易林	下学・日葡・書言	ヘボン・言海
こうべ（首・頭）	和名・名義・色葉	和玉・文明・饅頭・黒本	日葡・書言	ヘボン・言海
あたま（頭・天窓）	和名・名義・色葉	和玉・文明・饅頭・易林	日葡・書言	ヘボン・言海
ず（頭）			日葡・書言	ヘボン・言海

²¹² 厳密には，「むな（胸）」は見出しの語釈は精神義に関する説明はなく，補注にて「独立の例は少なく，多くは名詞，動詞，形容詞などと熟して用いられる。「むないた」「むなさわざ」「むなわく」「むなぐるしい」など。」とあるのみである。補注にあるこれらの表現は，子見出しこそ立てられてはいないが，明らかに浸透した表現であることを鑑みて，独立した見出しとして収録されていると見越し，調査対象とした。

用は、全て漢籍からの出典が確認される。日本での使用を見ても、『日国』の「胸臆」「心胸」の初出は、身体義つまり身体部位としての〈胸〉ではなく、精神義としての例である。和語による表現と漢語による表現を区別せずに身体部位詞の精神義への意味拡張を通時的に辿ることは無論不適切であり、また、用例出典資料の文体も同時に考慮していく必要がある。たとえば、日本では奈良時代から平安時代中期にかけて漢文訓読文体・和文体・記録体（変体漢文体）という三種の文体が形成されたが、当時はそれぞれが独自の語彙体系を有していた（藤原, 1995, p. 159）。しかし、初めは外国語でしかなかった漢語が国語化していくにつれて、和語による表現が漢文の読み下しによって直接的に、また、漢語表現から窺える身体の比喩的な理解様式によって間接的に影響を受けてきたであろうことは無視できない。特に中古末期～中世初期（院政鎌倉期）の和漢混淆文の出現によって、漢語による表現の発想と和語による発想が混ざり合う環境が一層整えられ、その影響は強まったと考えられる。以上を踏まえ、〈胸〉の「きょうおく（胸臆）」「しんきょう（心胸）」「きょうかく（胸膈）」に加え、〈頭〉の「ず（頭）」については、漢語として和語と区別しつつ、本章での調査対象に含めるべきであると判断した。

漢語については、「腹」「胸」「頭」を含む熟字の多くが表25の候補語の選定段階で抜け落ちていると考えられる。たとえば、「心胸」の「胸」が「腹」に置き換わった「心腹」という熟字は、『日国』では「胸と腹」という意味で身体義の語積こそあるものの、表25には含まれていない。精神義を主とするために『現代語古語類語辞典』への記載が避けられたのではなかろうか。「腹」「胸」「頭」を構成要素に持ち、精神作用を表す熟字の存在を想定し、本章では上述の12項目に加え、「腹」「胸」「頭」という字を持つ表現を追加調査した。

4.2.2 データ収集法

本章の調査は以下の手順に従って実施した。初めに、『日本国語大辞典』で表26の「こころ（心／情／意）」「くび（首・頸）」を除く12項目の子見出しを調べ、精神作用を表す表現の初出例を抽出した。さらに、上述の「心腹」のように、表26から抜け落ちている可能性のある漢語（熟字）や、子見出しとしては収録されていない表現（親見出しとして登録されている可能性のあるもの）を網羅的に収集するため、JapanKnowledge Libの検索機能を用いて「腹」「胸」「頭」のいずれかの字を含む見出し全てを検索し、上と同様に初出例の有無を確認した。表26のうち、「おなか（御中）」「ほて」については、かな検索によって子見出しから外れた表現がないかを確認した。

調査対象語のうち、子見出しとして記載された表現を数えたものが表27、JapanKnowledge Libの検索機能を用いて抽出された、「腹」「胸」「頭」のいずれかを見出しの構成要素に含む項目は表28の通りで

ある（「字音音素」を除く）。表 28 では読みに基づいて分類を行っている。和訓については一形態の語として『日国』の見出しとして登録されているものを一単位として分類した。ただし、見出しとしては登録されているが、他の見出しの参照指示がある音についてはその参照先の項目と合算した（たとえば、「つぶる」の項目は「つぶり」の項目の参照指示があるのみ）。音は『全訳漢辞海 第四版』に登録された音に基づいて分類したが、「ふく（腹）」に対する「ぶく（腹）」など変化形とみなされるものはまとめた。

表 27 調査対象語の子見出しに収録された精神義を持つ表現

	語	子見出し数	精神義を持つ表現	初出例のある表現
〈腹〉	はら（腹／肚）	117	70	62
	おなか（御中）	4	2	2
	ほて	2	1	1
	【計】	123	73	65
〈胸〉	むね（胸）	130	117	115
	むな（胸）	0（子見出しとしてはなし）		
	きょうおく（胸臆）	2	2	2
	しんきょう（心胸）	0（親見出しの語釈において精神義の説明があるのみ）		
	きょうかく（胸膈）	0（親見出しの語釈において精神義の説明があるのみ）		
	【計】	132	119	117
〈頭〉	かしら（頭）	33	3	3
	こうべ（首・頭）	11	4	3
	あたま（頭・天窓）	71	38	32
	ず（頭）	5	3	3
	【計】	120	48	41

表 28 「腹」「胸」「頭」のいずれかを見出しの構成要素に含む項目

	読み	検索結果数	精神義を持つ表現 (表 27 の項目を除く)	初出例のある表現 (表 27 の項目を除く)
「腹」	はら	712	170	140
	ふく	188	38	32
	〔その他〕	4	0	0
	【計】	904	208	172
「胸」	むね	225	42	37
	むな	103	31	22
	きょう	110	39	35
	く	1	1	1
	〔その他〕	1	1	1
	【計】	440	114	96
「頭」	あたま	208	8	8
	かしら	495	4	4
	かぶ	7	0	0
	かぶり	5	0	0
	かみ	60	0	0
	こうべ・こべ	18	2	2
	たま	2	0	0
	つぶり・つぶる・つぼろ	16	0	0
	つぼり	1	0	0
	つむ	3	0	0
	つむり	4	0	0
	つもり	1	0	0
	ず	354	16	12
	とう	905	16	15
	と	51	0	0
	ちゅう	146	0	0
	〔その他〕	78	0	0
	【計】	2354	46	41

本章では、表 27、表 28 の「初出例のある表現」を観察対象とするが、以下の他資料からも一部補填した。ただし、他資料からの項目は、原則としてある精神作用との対応を裏付ける表現が『日国』よりも早い時代で得られた場合に限り、取り上げる。表現の異なり認定は使用辞書の（子 [小]）見出しに基づいた。

『江戸時代語辞典』、『江戸語辞典』、『時代別国語大辞典 上代編』、『古語大鑑』（1・2 巻）『古語大辞典』、『角川古語大辞典』、『近世上方語辞典』、『江戸語大辞典』、『時代別国語大辞典 室町時代編』、長谷川ほか (2005)

このほかに、下に挙げたコーパス・データベースを参照した。『日国』と上記の文献から得られたデ

ータにさらに補填すべき表現を、用例単位で適宜取り上げる。

『日本語歴史コーパス』、『日本古典文学大系本文データベース』

なお、漢語については辞書見出しとして得られた項目のみを観察・分析対象とする。したがって、辞書見出しとしての登録はないが、コーパス・データベースに含まれる（正格・変体）漢文資料から得られた「腹」「胸」「頭」の比喩的用法・意味は原則として本章では取り上げない（ただし、辞書見出しとして得られた漢語の用例確認・補足調査が必要な場合はその限りではない）。漢文資料中の身体部位と精神作用の比喩的結びつきについては、今後改めての調査が必要である。

4.2.3 観察方法

本章での観察方法は以下の通りである。

- 得られた項目は上代 [-793]・中古 [794-1191]・中世 [1192-1602]・近世 [1603-1867]・近代 [1868-1944]・現代 [1945-] の時代区分に振り分けて観察していく。各表現の意味（精神作用の種類）・慣用表現としての成り立ち・比喩的な振る舞いに基づいて分類することで、身体部位詞を含む慣用表現の史的展開の特徴を探る。
- 各表現が表す意味（精神作用）の分類は、原則『日国』の語釈や用例中の意味に基づいて行う。ただし、特に〈胸〉の感情表現についてはその用途が広く、ある表現が表す感情を排他的・包括的に列挙することはいずれも難しい。というのも、語釈に「期待」「不安」などの具体的な感情名を含むものがある一方で、「悲しみなどの感情」と特定を避けた語釈も数多く存在するからである。今回、『日国』に記載された用例中の意味や『日本語歴史コーパス』『日本古典文学大系本文データベース』で確認した同時代の用例中の意味をもとに、中心的と考えられるものを当てはめた。併せて、3.2.2節で言及した先行研究も参考にしたが、先行研究間でも分類に大きな差異があり、いずれかの分類法に従ったものでもないことを断っておきたい。
- 分類方法については〈腹〉〈胸〉〈頭〉で異なるため、各部位の観察の前に説明を加える。
- 漢語のうち、『日国』の用例に漢籍の出典があるものには下線を施す。²¹³

²¹³ 『日国』では漢語に対して漢籍から得られた用例も載せており、記載がある場合、中国古典に起源の語であることが示唆される。ただし、用例の有無が絶対的な判断基準とはならない（金子, 2022）。

4.3 〈腹〉表現の史的展開

4.3.1 分類方法

データの観察にあたっては、まず〈腹〉と結びつく精神作用の通時的な広がりをはっきりとさせるために、各表現の精神義に基づいた分類を行う。その後、第3章での分析結果をふまえ〈精神作用の座としての腹〉の理解様式がどのような変遷を経たのかについて、各々の精神作用との対応を踏まえた分析を試みる。

表 29 は〈腹〉の理解様式に基づいて分類を加えた表 12 (字義的意味を固定したもの) から、精神作用の種類に基づいた分類に組み替えたもの (慣用的意味を固定したもの) である。ここで、各精神作用がどのような〈腹〉の理解を通じて表現されるのかについて、表 29 をもとに簡単に振り返っておこう。〈可笑しさ〉のうち、[1]–[3] は笑いに伴う腹筋の痛みに基づいたメトニミー・メタファー (「腹が痛い」「腹を振る」「腹を切る」)、[4] は笑う際の腹部へのしぐさに基づくメトニミー (「腹を抱える」) である。感覚・運動レベル (L1) およびスキーマレベル I (L2) に配置される〈腹〉表現は、これらと [8] の不快感を通じた〈怒り〉の表現 (「腹悪し」) のみで、残りはスキーマレベル II~概念レベル (L3) として分類される。[5] 以下の精神作用と結びつく〈腹〉の理解様式には、〈腹〉を〈容器〉として捉える様式 (L3-C) と、〈具象物〉として捉える様式 (L3-O) の二種類が存在することを論じた。感情 (〈不満〉〈満足〉〈恨み〉〈怒り〉〈機嫌〉) を表す [5]–[17] のうち、[5]–[7] (「腹が膨れる」「腹一杯」「腹に持つ」)、[9] (「腹が煮える」)、[10] (「腹に据えかねる」)、[16] (「腹形」)、[17] (「腹具合」) は〈容器としての腹〉、[12]–[15] (「腹が立つ」「腹に障える」「腹を据える」「腹を癒す」) は〈具象物としての腹〉としてのメタファー的理解である。〈信念・覚悟・決心〉に関する [18] (「腹を据える」)、[19] (「腹を固める」) では、〈具象物としての腹〉の安定性が精神の安定と結びつけられる。[20] 以降は再び〈腹〉を〈容器〉として捉えたものである。特定の精神内容が〈腹〉に収まるとみなす [20]–[24] (〈内心・本心・考え・意図〉) のみならず (e.g. 「腹に納める」「腹に一物」)、[25] の〈理解・納得〉 (「腹に入る」) や [28] の〈度量・包容力〉 (「腹が小さい」) のように、外からの物事の受け容れについて述べるもの、[31] の〈性格〉 (「腹汚い」) のように、〈腹〉に人格が宿るとみなすものがある。まとめると、精神作用に関する〈腹〉の文化モデルは〈容器としての腹〉の理解と〈具象物としての腹〉の理解があり、前者には〈特定の精神作用を納める腹〉〈物事を受け容れる腹〉〈人格を納める腹〉という三種の下位メタファーが従属することを想定している。

また、慣用的連結句、構成要素単位での意味拡張を経た合成語としては、「腹」とその他の〈腹〉の類語が単独で表す精神義として表 30 のようにまとめた。左列の番号は表 29 から続く分類番号である。

なお、本章での観察のために前もって新しく追加したカテゴリー（表 29、表 30 の下線参照）として、[13]の〈怒り〉（「腹に障える」）、[26]、[27]の〈嗜好〉（「腹に味わう」「腹に嵌る」）、[30]の〈胆力・度胸〉（「剛腹」）、[35]の〈性格〉（「腹に惚れる」）のカテゴリーがある。これらは漢語表現であるか、あるいは『日国』で古語の用例（近世以前の用例）のみが挙げられており、かつその他の日本語辞書の見出しとしても得られなかったという理由で第3章での観察対象とならなかった表現群である。同様の理由で、[14]、[21]、[31]のカテゴリー内の要素も一部追加した。これらの意味分析は以降のデータ観察において適宜行っていく。

表 29 〈腹〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（慣用的意味固定）

*L1: 感覚・運動レベル L2: スキーマレベルⅠ L3: スキーマレベルⅡ～概念レベル (L3-C: 〈容器〉／L3-O: 〈具象物〉)

精神作用	分類	*レベル	字義の意味	慣用的意味（精神義）	表現例
可笑しさ	1	L1	腹が痛い	可笑しい	腹が痛い
	2	L2	腹を振る	可笑しがる	腹を振る、かた腹を捻る
	3	L2	腹を切る	可笑しがる	腹を切る、切腹
	4	L1	腹を抱える（しぐさ）	可笑しがる	腹を抱える、腹を捧ぐ
不満	5	L3-C	腹の内容物が増え、腹が膨張する	不満が増長する	腹が脹れる
満足	6	L3-C	腹が内容物で満ちている	思う存分（満ちに）	腹一杯
恨み	7	L3-C	腹に内容物を留める	恨みを抱く	腹に持つ
怒り	8	L1	腹が不快だ	怒りを覚えるような	腹悪し
	9	L3-C	腹の内容物が {燃える／煮える}	怒る	業腹、腹が煮える
	10	L3-C	腹に内容物を留めておけない	怒りを制御できない	腹に据えかねる
	11	L3-C	腹の中の虫（が暴れ、制御できない）	怒り（を制御できない）	腹の虫（が承知しない）
	12	L3-O	腹が立つ	怒る	腹が立つ、腹を立てる
	13	L3-O	腹を害する	怒りを覚えるような	腹に障える
	14	L3-O	腹 {が安定する／を安定させる}	怒り {が収まる／を晴らす／を制御する}	腹が居る、腹を居る、腹を据える
	15	L3-O	腹 {が癒える／を癒す}	怒り {が収まる／を晴らす}	腹が癒える、腹を癒す
機嫌	16	L3-C	腹の形	機嫌	腹形
	17	L3-C	腹の状態（具合）	機嫌	腹具合
信念・覚悟・決心	18	L3-O	腹を安定させる	覚悟・決心する	腹を据える、腹を括る
	19	L3-O	腹 {が固い／を固める}	信念が変わりにくい／覚悟・決心する	腹が堅い、腹を固める
内心・本心 考え・意図	20	L3-C	腹の内部	内心・本心	腹の内、腹の底、腹の中、腹中
	21	L3-C	腹に内容物 {がある／ <u>がない</u> ／を留める}	内心・本心・考え・意図 {がある／ <u>がない</u> ／を明かさない}	腹に一物、腹藏ない、腹に納める
	22	L3-C	腹の中を {探る／探られる}	相手の考え・意図を知ろうとする／相手から考え・意図を探られる	腹を探る、いたくない腹を探られる
	23	L3-C	腹の中を見る	相手の考え・意図を知る	腹を見抜く
	24	L3-C	腹を割る	考え・意図を知らせる	腹を割る
理解・納得	25	L3-C	腹に内容物 {が入る／を入れる}	理解・納得する	腹に入る、腹に落ちる

精神作用	分類	*レベル	字義的意味	慣用的意味（精神義）	表現例
嗜好	26	L3-C	腹で内容物を味わう	対象を玩味する	腹に味わう
	27	L3-C	腹に {合う／嵌る}	対象を好む	腹に合う, 腹に嵌る
度量・包容力	28	L3-C	腹が {大きい／太い／小さい}	度量・包容力が {ある／ない}	腹が小さい, 腹が太い, 大腹中
人格	29	L3-O	腹が太い	胆力・度胸がある	腹が太い, 太腹
	30	L3-O	固い (強い) 腹	胆力・度胸がある	剛腹
	31	L3-C	腹の内容物が {汚い／黒い／白い}	性格が {悪い／いい}	腹汚い, 腹黒い, 腹白

表 30 〈腹〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型

分類	「腹」および類語が表す意味	表現例
32	腹立ち (怒り)	急腹, 中つ腹, 聞き腹, 公腹
33	心中 (の／での)	腹積もり
34	考え・意図	腹を合わす [合わせる], 腹が無い, 腹を決める
35	性格	腹悪し, 腹に惚れる

4.3.2 〈腹〉と精神作用が間接的に関係する表現

はじめに, 4.3.3 節から観察する表現とは区別し, 考察対象外とする表現を示す。

(312) 〈憂い・悩み〉

中世～：ふくしん＝の病 (やまい) [=の患 (わずら) い・＝にある病 (やまい)]

(313) 〈後悔〉

近世～：はらかく

『日国』によれば, (312) の「腹心の病」(漢語では「腹心之疾」) は本来〈腹や心 (=胸) にある重い病〉のことを表す。このような身体的な患いが, 〈救いがたい憂い・深刻な悩み〉といった心理的な患いの意に転じたと考えられる。語全体としては精神義を持つものの, その意味拡張のプロセスを考慮すると〈腹〉に精神があるという理解様式から生まれたものとは必ずしも言えない。また, (313) 「腹かく」の由来は不詳である。おそらく「かく」は「搔く」で, 全体として〈腹を搔きむしって悔しがる〉の意であると考えられる。そうだとしたらこれはしぐさの表現であるが, 搔くという行為が腹部に対して行われることが, 〈悔しい〉という感情が誘発する何らかの生理感覚に基づくとは考え難い (cf. 「腹を抱える」の腹筋の痛み)。つまり, 〈悔しい〉という感情経験が腹部を搔く誘因となる痒みを誘発するとは考えられない。本章では, このように精神作用の座としての〈腹〉の理解に基づいているとは断言し難く, かつそのような理解を動機づける身体経験であるとも言い難い表現を引き続き分けて扱っていく。

4.3.3 上代

ここからは、〈腹〉と各々の精神作用の結びつきが日本語史においていつ頃から、どのような順序で現れてきたのかを『日国』内の用例の初出を主な手がかりとして観察していく。各表現は表 29 と表 30 に基づいて分け、該当する分類番号を[]内以示す。

〈腹〉表現のうち、上代の初出として唯一得られたのは〈内心・本心〉としての心のうちを表す漢語「心腹」「腹心」である。『大漢和辞典 修訂第二版』をみると、「心腹」「腹心」は身体的な意味（〈胸と腹〉）、精神的な意味（〈まごころ〉）、さらには〈心から親しくする・頼みにする人物〉という語釈と用例が載せられている。岩下 (2003, p. 103) によれば、「腹心」という熟字は『世説新語』を通じて日本へ入ったのだという。また、「心腹」については『漢書』（趙広漢伝）の「吏見者皆輸写心腹、無所隱匿」が知られており、現代でも「心のうちを全て打ち明ける」ことを表す「輸写心腹」という四文字熟語として残っている。この語の成り立ちは分析し難いものの、「腹」と「心（胸）」という構成要素を見る限り、（古代中国において）精神作用の座として捉えられていた五臓をおさめる部位〈腹〉〈胸〉を指す語を並べることで成立した表現であろう。

(314) 〈内心・本心〉 [33]

[33] しん-ぶく【心腹】²¹⁴／ぶく-しん【腹心】

上代では、精神義として用いられた和語による〈腹〉表現はないのであろうか。その可能性が残る用例として、(315) に示す『日本書記』の歌で用いられた「腹内」が挙げられる（「波邏濃知（はらぬち）」と読み、「腹の内」の変化形と言われている）。この歌は、反乱を起こした忍熊王（おしくまのみこ）陣営の一人が、敵対する神功（じんぐう）皇后勢の武内宿禰（たけうちのすくね）と建振熊（たけふるくま）を迎え討つ際に敵の武内宿禰（内の朝臣）に言及して読んだものである。一般に、「敵の腹の中に小石（いさご）が詰まっているはずはない」と直接的に訳される当該箇所は、「矢を遮るような砂は詰まっていない」と解釈されているが、この解釈に対して懐疑的な立場をとる研究も存在する。たとえば、山路 (1962) は「虚心にこの句を解すれば、〈腹の中には交りものがない〉ということであろう」(p. 11) 「(...) 六朝にわたり棟梁の臣としてお仕え申した武内宿禰の忠誠心を具体的にあらわした表現とみるのが妥当なところらしい。」(p. 12) と述べている。もし後者の解釈が通るのであれば、この例は和語による〈腹〉表現の精神的な意味での最古の用例の一つとみなされるだろう。

²¹⁴ 本章での扱う表現には古語も多く含まれるため、表記は全て出典辞書の見出しのままとした。

- (315) 彼方（をちかた）の あらら松原（まつばら） 松原に 渡（わた）り行（ゆ）きて 槻弓（つくゆみ）に まり矢（や）を副（たぐ）へ 貴人（うまひと）は 貴人どちや 親友（いとこ）はも 親友（いとこ）どち いざ鬭（あ）はな 我（われ）は たまきはる 内（うち）の朝臣（あそ）が 腹内（はらぬち）は 小石（いさご）あれや いざ鬭はな 我は（日本書紀 720 神功皇后摂政元年三月・歌謡）

4.3.4 中古

中古で初出が確認された表現を下に示す。〈腹〉と結びつく感情として従来の研究では特に〈可笑しさ〉〈怒り〉〈不満〉が挙げられてきたが、(316)(317)の通り、いずれも中古から該当表現の初出が見られる。感情以外の精神作用としては、〈物事の嗜好〉や〈人格〉に関する表現が見られるに過ぎない。

(316) 〈可笑しさ〉 [3]

[3] せつ-ぷく【切腹】／はらを切（き）る

(317) 〈不満〉 [5]

[5] いわ=ぬは [=ねば] 腹（はら）ふくる／おぼしき事（こと）言（い）わねば腹（はら）ふくる／はらが脹（ふく）れる

(318) 〈怒り〉 [8, 12, 14]

[8] はら悪（あ）し／はら悪（あ）しげ

[12] いい-はらだ・つ [いひ..]【言腹立】／うち-はらだ・つ【打腹立】／おおやけ-ばら [おほやけ..]【公腹】／おおやけ-はらだた・し [おほやけ..]【公腹立】／おおやけ-はらた・つ [おほやけ..]【公腹立】／たち-ばら【立腹】／ないばら-を-た・つ【無腹立】／なま-はらだ・つ【生腹立】／はらを=立（た）てる [=立（た）つ]／はらだたし・い【腹立】／はらだたし-げ【腹立-】／はらたち-な・す【腹立為】／はら-だ・つ【腹立】／はら-た・てる【腹立】／ふく-りゅう [..リフ]【腹立】

[14] はらが居（い）る

(319) 〈嗜好〉 [26]

[26] はらに味（あじ）わう

(320) 〈人格〉 [31, 35]

[31] はら-ぎたな・い【腹汚・腹穢】／はら-ぐろ【腹黒】／はら-ぐろ・い【腹黒】

[35] はら悪（あ）し

このうち、〈怒り〉〈可笑しさ〉〈意地悪さ（人格）〉を表す表現の用例を(321)–(323)に挙げる。

- (321) 「よし」と誉（ほ）めし装束（さうぞく）も、すぢかひ、あやしげにし出（い）づれば、いと
どことをつけて、腹を立ちて、しかけたる衣（きぬ）どもも捨（す）て、[蔵人の少将が装束の
雑な仕立てに対して立腹する場面]（落窪物語 10C 後 二）
- (322) これを聞きて、離れたまひし元（もと）の上（うへ）は、腹を切りて笑ひ給ふ（竹取物語 9C
末～10C 初）
- (323) 影もや見えつらむと思ふにあさましうて、腹黒（はらぐろ）う、消えぬものたまはせで」と
言へば、[外の灯火（明かり）が消えてしまっていたことから、几帳の中自分の姿がはっきり
と見えてしまったかもしれないのに、右馬頭が教えてくれなかったことを作者が咎める場面]
（蜻蛉日記 974 頃 下・天延二年）

4.3.5 中世

中世においても、〈怒り〉に関する表現の広がりが見られる。中古の表現は、〈怒り〉の発生・解消段階を表すのみであったのに対し、中世では新たに制御を前提とした表現「腹に据えかねる」が出現する。また、〈怒り〉に対して用いる「腹を据える」は感情を表出し鬱憤を晴らすことを意味するが、(330) に示す例ではそれまで〈怒り〉を抑圧していたことが前文脈で述べられている点に注目されたい。このように、〈腹で怒りを制御する〉という発想は少なくとも中世までに現れていたと考えられる。

- (324) 〈可笑しさ〉 [1, 4]

[1] はらすじ痛（いた）し

[4] ほう-ふく【捧腹・抱（ハウ）腹】

- (325) 〈怒り〉 [10, 12, 14, 32]

[10] はらに据（す）えかねる

[12] けら腹（はら）＝立（た）つれば [=立（た）てば] 鶯（つぐみ・つむぎ）喜（よろこ）
ぶ／そらばらを立（た）つ／たて-はら【立腹】／なま-はらだたし【生腹立】／ねはらを立（た）
つ／はらが立（た）つ／はら-だち【腹立】／はら-たて【腹立】／まけばらを＝立（た）てる
[＝立（た）つ]／りっ-ぶく【立腹】

[14] はらを居（い）る／はらを据（す）える

[32] はら-こぎ【腹-】／むか-ばら【向腹】

(326) 〈内心・本心・考え・意図〉[20, 21]

[20] ふく-ちゅう【腹中】

[21] ころを人（ひと）の腹（はら）に置（お）く²¹⁵／ふく-ぞう [..ザウ]【腹蔵・覆蔵】／ふくぞう無（な）い

(327) 〈度量・包容力〉[28]

[28] ふくちゅう【腹中】（「腹中広し」の形で）

(328) 〈人格〉[31]

[31] こうしの腹黒（はらぐろ）／なま-はらぎたな・し【生腹汚】

(329) 若一は、小鎧をぬいて、ノ、むかしの天野了観にもおとるまじと、こゝやかしこを突き廻れば、さしにも猛き、御（おん）坊たちも、つきまくられてぞ逃げたりける。ノ（つきまくられてぞ——）。エイノ、アフ。上人腹に据ゑかねて、手棒を振上かゝり給へば。[盗みの濡れ衣を着せられた尼女が、仲間を引き連れて反撃に来た場面。応戦する寺の坊主らが思いがけず圧倒される様子をみて、老僧はいよいよ耐えかねる]（虎寛本狂言 室町末～近世初 若市）²¹⁶

(330) とし比（ごろ）、たゞ獨召（ひとりめし）つかひつるに、ふてごとゞ（ど）もして、やすからずおぼえしかども、勘當してはいかにせむぞとおもひねんじてすぎ侍（はべり）ぬ。たゞいまこそ、日來（ひごろ）の腹をばすへ（ゑ）侍らめとて、かくし侍（はべる）ぞかし[男が役人として出世した際に、長く自分に仕えていた従者に対して積年の怒りを示す場面]（古今著聞集 1254 一六・五一八）

さて、中世の特徴をもう一つ挙げるとすれば、和語と漢語では初出の表現の意味が異なるという点である。和語による表現に限って見た場合、精神作用の分類的には中古と変わりはない。一方、(326)の〈内心・本心・考え・意図〉を表す表現として現れるものは、いずれも漢語（由来の）表現である（4.3.3節で見たように、すでに上代から〈内心・本心〉を表す漢語「心腹」「腹心」が現れていたことにも注目されたい）。

(326)の「腹中」は(327)の〈度量・包容力〉でも再掲しているが、これは『日国』が中世での「腹中」の初出例として(331)を引いているからである。ここでの「腹中」はその容積を形容する語「広い」

²¹⁵ 「蕭王推赤心置人腹中」（後漢書・光武紀・上）に基づく。

²¹⁶ 『日国』では資料の成立年として「室町末～近世初」とあるが、出典となる大蔵虎寛本の成立は寛政4年（1792年）とされている（笹野、1942）。蜂谷（1977, pp. 49-50）によれば、虎寛本の台詞を見ると、江戸初期に概ね整えられた形式の中で更なる整理が行われ、一部の表現（たとえば丁寧表現）としては江戸時代中期以降の新しい語形・用法も多く組み込まれている様子が窺えるという。なお、現世に残る最古の狂言台本は、寛永19年（1642年）に書写されたといわれる大蔵虎明本（1642年）である（筋書きの形で書き留められた天正本を除く）。一般的に狂言資料は中世日本語の研究資料として重宝されるが、それらは全て近世以降に成立した（書写された）資料であることを留意しておく必要がある。

と結合することで、少なくとも〈内心・本心〉以外のことを表している。

- (331) きやつがふくちうはまだひろさうな とはふ [秀句好きの大名のもとに來た今参り (新しい使用人) が、繰り返しの大名の問いに秀句で巧みに応答する。それに感服した大名の台詞] (虎明本狂言 室町末～近世初 今参)

(331)の例は、『日国』に限らず「腹中」の用例として方々で引かれ、一般に〈度量〉としての解釈が与えられているが、文脈的には次々と秀句を述べる今参の優れた文学的才識を指しているとも考えられよう。²¹⁷ この件について直接論じた研究は筆者の知り得る限り存在しないが、下房 (1987) では「懐狭 (ふところせば) し」について「他の文献では管見に入らないが、思慮が浅く、才知に欠けることを言うのであろう。」(p. 81) と述べた上で、対義表現として上の「腹中広し」の例に言及している。なお、この「腹中広し」という表現の用例は似た文脈を持つ狂言の別作品でも見つかる。

- (332) さて、汝が腹中は廣そうな。また某も、いかほど言うても盡くることではない。[太郎冠者 (使用人) が旅先で得てきた富士松をめぐって主人と連歌の付合を行うことになったが、太郎冠者はどんな句にも見事に付句する。最終的に富士松を諦めた場面での主人の台詞] (大系デ／大名狂言 富士松) ²¹⁸

いずれにせよ、後の 4. 3. 6 節で見ると、〈腹〉の規模は度量の象徴として「大腹中 (だいふくちゅう)」「小腹中 (しょうふくちゅう)」という表現や、「はらが小さい」「はらが太い」といった「はら」表現の中で近世以降に言及されることとなる。上記の「腹中広し」をそれらと並行して捉え、〈度量〉を表すと解釈するのであれば、中世での先行例として位置付けられるだろう。

では、「腹の中」のように、〈内心・本心〉としての「腹中」の用例は中世では見られないのであろうか。『日国』からは中世の用例を得られないが、『古記録フルテキストデータベース』²¹⁹、『古文書フ

²¹⁷ 関係するかどうかは定かではないが、〈歌の心を心の中でじっくり味わう〉ことを「腹に味わう」(中古での初出)と述べた以下の例もある。〈腹〉は文学的感性を司る部位としての認識があったのかもしれない。

この歌はあるが中におもしろければ、心とゞめてよまず、腹にあぢはひて (大系デ／伊勢物語 四四)

なお、出典を「大系デ」と記す用例は『日本古典文学大系本文データベース』(人間文化研究機構国文学研究資料館)から引いたものである。データベースの元資料である『日本古典文学大系』では旧字体漢字が使用されているが、本稿でも変換不可能な場合を除き引用の際は新字体に改めることはしない。

²¹⁸ また、(332)について、『日本古典文学大系 42』(小山, 1960)では江戸中期の大蔵虎寛本を経て來た大蔵流山本東の書写本(幕末～近代初期書写といわれる)を採用したとあるが、大蔵虎寛本の同曲(笹野, 1942)では、これに対応するような台詞はない。また、近世初期(1642年)に書写されたといわれる大蔵虎明本の同曲(大塚, 2006)を確認しても同様の台詞は確認されない。

²¹⁹ 『大日本古記録』(東京大学史料編纂所)を対象とした古記録のデータベース(ただし、『大日本古記録』以外の古記録・日記類や歴史書・年代記もまとめて処理可能とのこと)。中古～中世の公家日記、武士日記。

ルテキストデータベース』²²⁰、『奈良時代古文書フルテキストデータベース』²²¹（東京大学史料編纂所）での「腹中」の文字列検索の限りでは、執筆年月日が判明している資料のうち、最も古いもので1557年の用例が見つかる。²²²

(333) 連々申度、今度之次に申にて候申にて候、是より外に、我々腹中、何にても候へ、候はす候、たゝ是まで候是まで候〔毛利元就が3人の子ども（隆元、隆景、元春）に当てた書状。家を保つことの重要性和心得を十四箇条に渡って述べるうちの最終条。〕（古文書デ／毛利 405 弘治三年十一月廿五日）

最後に、扱いが最も難しいのが〈心のうちにひめ隠す〉ことを表す「腹藏（ふくぞう）」である。『日国』では、「ふく」に「腹」と「覆」の二つの字を充てており、筆者の菅見では、その他一部の辞書でも同様の扱いをしている（e.g.『大辞林 第四版』『広辞苑 第六版』）。「覆藏（ふくぞう）」（あるいは「ふぞう」とも）はもとは仏教用語でもあり、『例文 仏教語大辞典』では、「1 覆いかくすこと。2 自分の罪を隠すこと。3.《梵 parivāsa の訳。波利婆沙と音写》僧残罪を犯しながら、隠蔽し否認したとき、その隠していた日数に応じて、他の僧と別居させられ、会話など一切禁じられるもの。」とある。『日国』での「ふくぞう」の精神に関する語釈、すなわち「心の内にひめ隠すこと。心に思っていることをつつみ隠して外に現わさないこと。」の初出例は「覆藏」の表記であり、道元(1200-1253)の『正法眼藏』から引かれている。²²³

(334) 脱體の行履、その正當覆藏のとき、自己にも覆藏し、他人にも覆藏す。（大系デ／正法眼藏 仏性）訳：「煩惱を脱しようとする身が、まさにその煩惱を隠しこむとき、己にも隠しこみ、他人にも隠しこむのである。」（石井（訳）, 2013, p.87）

²²⁰ 『大日本古文書 家わけ文書』（東京大学史料編纂所）を含む古代～近代（中世中心）の古文書のデータベース。

²²¹ 『大日本古文書』編年文書（東京大学史料編纂所）を対象とした奈良時代(702-780)の古文書データベース。

²²² 古文書・古記録の用例では、資料群名・文書番号（ある場合）・和暦年月日をデータベースの情報をもとに順に示す。(333)と同じ用例は『時代別国語大辞典 室町時代編』の「腹中」の見出しでも挙げられている。また、同書では、これよりもさらに遡る『応永二十七年本論語抄』（1420年書写）からの以下の用例が挙げられているが、少し〈本心〉の意味からは離れる。

我徳ハヒキウシテ腹中ガミユルホドニ、一分ノ徳ガアラハルヲミテ、我ヲ孔子ニマサレリト云

²²³ この引用部については、訳書・注釈書の間で解釈にかなりの幅が見られることを断っておかなければならない。石井（訳）(2013)の訳では「煩惱を隠しこむ」とあり、一見『日国』の語釈に当てはまりそうだが、この直前をみると、「この故犯すなはち脱體の行履を覆藏せるならん」（このあえて犯すことが、そのまま、身体を脱落した行住坐臥を覆み藏めているはずなのです〔矢島, 2009, p.20〕）とある。従って、ここで覆藏されるのは「脱体（完全な解脱）の行履（行住坐臥）」であり、まさにその状態の時に「自分」にも「他人」にも覆み藏められた状態（自他を超越した状態）であると述べられているのであって、自己が意図的に何かを隠蔽する・しないという意味で「覆藏」を用いているとはいえない。『日本古典文学大系 81』（西尾ほか, 1965）の注釈では、この箇所について、「この脱体の行履は、自己の内容であり、また他人の内容でもある。」(p. 141) という訳を与えている。いずれにせよ、単なる〈内心・本心〉としての解釈は通じない。

一方「腹蔵」の表記は、『日国』での「ふくぞう」の語釈の一つ目「胎内。腹部」として鎌倉時代の寺誌から用例が挙げられており ((335)), 「腹蔵」の字の精神的意味での使用の初出は、子見出しの「ふくぞう無し」にて中世末 (1585 年) の武士日記から引かれている ((336))。さらに、『古記録フルテキストデータベース』、『古文書フルテキストデータベース』、『奈良時代古文書フルテキストデータベース』を調べると、(336) の用例から半世紀弱遡った (337) の用例も見つかる。

(335) 奉納舍利二粒於大仏御腹蔵 (東大寺統要録 供養篇本)

(336) 被失面目候てか可然候すらんと存候歟、無腹蔵申上候 (古記録デ／上井覚兼日記 天正一三年八月九日)

(337) 少事モ不審、互ニ無腹蔵可申願候 [薩州家 (島津氏の分家) が天草氏との抗争を解消、和解した際に残した起請文。相良家が仲介役。] (古文書デ／相良 333 天文八年十月廿六日)

ここで問題となるのは、精神的な意味での「腹蔵」について、漢籍中の用例を十分に認めることができないという点である。『漢語大詞典』では「腹蔵」の項目は確認できない。また、『大漢和辞典 修訂第二版』では、「覆」「腹」の親字ごとに「覆蔵」「腹蔵」の熟字を載せているが、用例が挙げられているのは「覆蔵」のみであり (『角川大字源』『大漢語林』も同様)、「腹蔵」については「→覆蔵に同じ」とのみある。そこで、漢籍のデータベースである『漢籍電子文献資料庫』²²⁴ を用いて「腹蔵」の文字列を検索すると 44 件の結果が得られるが (「覆蔵」は 3367 件)、用例を確認する限り、精神的な意味での用例として解釈されうるのは (338) の 1 件のみであった。²²⁵

(338) 至有腹蔵孟門之險心庫豺虺之毒 (漢籍電子文献資料庫／大正新脩大藏經 第五十二冊 史傳部 四 二一〇三 廣弘明集三十卷 卷二十二 法義篇第四之五 齊沈約立佛法義論五首 陳沙門真觀因緣無性論并朱世卿自然論 朱世卿性法自然論)

²²⁴ 史部を中心に四部 (經史子集) を幅広く含んだ漢籍データベース (2024 年 3 月確認)。2024 年 3 月時点で 1486 種以上の資料を検索可能。

²²⁵ 筆者の浅学により、(338) については確証的な意味の把握に至っていないものの、現段階での解釈を述べておきたい。出典の「性法自然論」(6C, 朱世卿) は仏教の因果応報説に対し、物事にはすべて自ずと定まった本性があることを主張した文書である (『岩波世界人名大辞典』)。引用部は、「至有腹蔵孟門之險」と「心庫豺虺之毒」に分節されるであろう。前半の「腹蔵」の後に続く「孟門」は中国河南省の山道のことかと考えられるが、前野 (2000) によれば、この「孟門」は古くから隘路として有名だったようである。唐代の詩人崔顥の作品に「孟門行」という詩があるが、前野 (2000, p.175) には、「詩の内容は、孟門という地名と直接の関係はない。ただ世の人情のけわしいこと、世わたりのむづかしいことを歎いているので、それを孟門の難路になぞらえる心を含めたのであろう」とある。このように、「孟門」という地名を用いた喩えが別にもあることを考慮するに、(338) の「孟門之險」では、その隘路から連想される心情あるいは性格などの精神的な事柄が述べられており、それが腹 (心中) にあると解釈することができる。後半部の「心庫豺虺之毒」で山犬やマムシの毒が心にあると述べられているが、これも前半分と並行して考えれば「毒」は邪な精神を指している。

「腹蔵」の用例 44 件の確認にあたり、陳翔氏のご協力を得た。また (338) については、陳翔氏に加え、渡辺秀樹先生を通じて王周明先生から解釈の手がかりをご教授いただいた。

(338)のような用例が存在することは確かであるが、「覆蔵」と比較しても漢籍での「腹蔵」の用例数は圧倒的に少ない。従って、日本での「腹蔵」の精神的な文脈での使用が漢籍からの借用によるとは直ちに結論づけ難いだろう。『日国』によると、「ふくぞう」は『日葡辞書』（1603-4年）、『文明峰節用集』（室町中）、「ふくぞう無し」は『和漢音釈書言字考合類大節用集』（1717年）、『和英語林集成（再販）』（1872年）、『言海』（1889年）に記載があるが、葡語で書かれた『日葡辞書』を除き、いずれの辞書においても「覆蔵」「無覆蔵」の表記となっており、「覆」の使用が規範であったことがわかる。以上を考慮するに、元々〈心のうちに秘め隠す〉という意味で使われていたのはやはり「覆蔵」の方であり、〈胎内、腹部〉という意味で用いられていた「腹蔵」が「覆蔵」の異体として流用されるに至ったという仮説を導くことができる。その主要因はやはり両者の音の一致であろうが、同時に、精神の在り処としての〈腹〉の理解が動機として働いたことが想定される。もしこれが正しければ、「腹蔵」は近世以降に多く追加された「腹の内」「腹に一物」「腹を探る」などの〈考え・意図を納める容器としての腹〉の理解の先駆けとなる表現として位置づけられる。²²⁶

もっとも、「覆蔵」は本来動詞的に（行為を表す語として）使用されるはずの熟字であり、一方の「腹蔵」は、(335)のように元々「腹の中」を指す名詞的熟字（事物を指示する語）として使用されていた様子がうかがえる。このように、両者の間には本来品詞的なずれもあったようで、「覆蔵」の異体字として「腹蔵」が用いられるまでには、この隔たりが埋められる過程を経たであろうことを考慮しなければならない。現段階では、以下二つの可能性を想定している。一つは、「無覆蔵」（「ふくぞう無し」）のように、「覆蔵」が〈隠すこと〉のみならず〈隠されたもの〉としても解釈可能な文脈で使用される段階を経ることで、「腹蔵」に置き換わった可能性（事象内でのメトニミー的転移の一種）、もう一つは、「腹蔵」の「蔵」が〈隠す・納める〉という動詞的意味を表す構成要素として改めて解釈されることで、「覆蔵」に近づいた可能性である。「覆蔵」と「腹蔵」の関係性を精査するに当たっては、今後これらが文中でどのような要素として生起していたかを見ていく必要がある。

4.3.6 近世

近世に入ると〈腹〉と精神作用との結びつきはさらに拡大する。(339)(341)の通り、すでに中古から見られた〈可笑しさ〉や〈怒り〉を表す感情表現が多様性を極めている。〈怒り〉の表現に関しては、「腹」が単独で〈怒り〉を指す例が多いため、通し番号を分けて(342)に示した。(341)の[9],[11]の通り、〈怒り〉の激しさを〈腹〉の中の煮え立つ液体や制御し難い虫の粗暴さに喩えるメタファー表現が

²²⁶ この辺りの議論の組み立ては、渡辺秀樹先生から頂いたご助言に基づいている。

加わっている。また、〈内心・本心・考え・意図〉に分類される表現として、中世以前は「腹中」や「腹蔵」などの漢語表現のみを観察したが、(345)の通り和語による表現が堰を切ったように現れている。(348)の〈腹の大きさ・容積〉を〈度量・包容力〉に対応させた表現は、中世の「腹中広し」でその前身を見た通りである。新たに結びついた精神作用として、(344)の〈覚悟〉、(346)の〈理解・納得〉にも注目されたい。

(339) 〈可笑しさ〉 [1, 2, 3, 4]

[1] はらが痛 (いた) い／はらの皮 (かわ) が痛 (いた) い／はらすじを抱 (かか) える／はらすじを＝縊 (よ) る [=切 (き) る] ／よこばらが痛 (いた) い

[2] かたはら捻 (ひね) る／かたはら＝捩 (よじ) れる [=撚 (よ) れる] ／はらがくねる／はらの皮 (かわ) の縊 (よ) り／はらの＝皮 (かわ) [=筋 (すじ)] を＝縊 (よ) る [=捩 (よじ) る] ／はらを＝縊 (よ) る [=捩 (よじ) る] ／はらすじが＝縊 (よ) れる [=切 (き) れる] ／ほてがくねる／ほてっばらがくねる

[3] はらすじを＝縊 (よ) る [=切 (き) る]

[4] はらを抱 (かか) える／はらを捧 (ささ) ぐ

※「痛い」「捩れる」等の後続語が省略されたもの

はらすじ-せんばん [はらすぢ..] 【腹筋千万】／はらの皮 (かわ) ／はら-すじ [..すぢ] 【腹筋】
／はらすじの皮 (かわ) ／ほてっばら 【-腹】

(340) 〈満足〉 [6]

[6] しょうじんの腹 (はら) は満 (み) ちやすし／はら-いっぱい 【腹一杯】／はら-ぞうぶん [..ザフブン] 【腹雑分】²²⁷／はら-ぞんぶん 【腹存分】

(341) 〈怒り〉 [9, 11, 12, 13, 15]

[9] ごう-はら [ゴフ..] 【業腹】／ごうはらを煮 (に) やす／ごうはら-が・る [ゴフはら..] 【業腹-】／ごうはら-まかせ [ゴフはら..] 【業腹任】／ごうはら-まぎれ [ゴフはら..] 【業腹紛】

[11] はらの虫 (むし) が＝治 (おさ) まらない [=承知 (しょうち) しない]

[12] うそばらが立 (た) つ／けら-はらだち 【螻蛄腹立】／ころもばら＝を [=が] 立 (た) つ／こばらが立 (た) つ／こばらを＝立 (た) つ [=立 (た) てる] ／しょうじきぼうの腹 (はら) 立 (た) てず／はらが立 (た) つなら親 (おや) を思 (おも) い出 (だ) せ／はらだたし-さ 【腹立-】／はらだち-がお [..がほ] 【腹立顔】／はらだち-ごえ [..ごゑ] 【腹立声】／はらだ

²²⁷ 「雑分」は「存分」に同じ。

ち-じょうご [..ジャウゴ] 【腹立上戸】／はらだちっ-ぽ・い 【腹立-】／はらだち-なみだ 【腹立涙】／はらだち-ねいり 【腹立寝入】／はらだち-まぎれ 【腹立紛】／はらたて-がお [..がほ] 【腹立顔】／はらたて-ごえ [..ごゑ] 【腹立声】／はらたて-じょうご [..ジャウゴ] 【腹立上戸】／ふくりゅう-せんぱん [フクリフ..] 【腹立千万】／ふくりゅう-まなこ [フクリフ..] 【腹立眼】／ほてはら立(た)つ／ほとけの顔(かお)も三度(さんど)＝撫(な)ずれば [=なぶれば] 腹(はら)立(た)つ／むかばら-たち 【向腹立】／むかばら-た・つ 【向腹立】／もらいばらを立(た)てる／やけばらを立(た)てる／やけ-はらだち 【自棄腹立】／やら-はらだち 【-腹立】

[13] はらに障(さ)える

[15] はら-いせ 【腹癒】

(342) 「腹」が単独で〈怒り〉(腹立ち)を表すもの

[32] いぶり-ばら 【-腹】／うそ-ばら 【薄腹】／かんしゃく-ばら 【癩癪腹】／きき-ばら 【聞腹】／きけば聞腹(ききばら)／きもっ-ばら 【肝腹】／きゅう-ばら [キフ..] 【急腹】／くそっ-ばら 【糞腹】／そこ-はら 【底腹】／ちゅうっ-ばら 【中腹】／ちゅう-はら 【中腹】／はら-ねぶつ 【腹念仏】／ひとり-ばら 【一人腹】／まけ-ばら 【負腹】／むくろ-ばら 【-腹】／むしゃくしゃ-ばら 【-腹】／むしゃくり-ばら 【-腹】／めった-ばら 【滅多腹】

(343) 〈機嫌〉[16]

[16] はら-なり 【腹形】

(344) 〈覚悟〉[18]

[18] はらを据(す)える

(345) 〈内心・本心・考え・意図〉[20, 21, 22, 33, 34]

[20] あい-ふくちゅう [あひ..] 【相腹中】／どうふく-ちゅう 【同腹中】／はらの内(うち)／はらの中(なか)

[21] くちに蜜(みつ)あり, 腹(はら)に剣(けん)あり

[22] いたくない腹(はら)を探(さぐ)られる／いたまぬ腹(はら)を探(さぐ)らる／はら-えぐり [..ゑぐり] 【腹抉】／はらを探(さぐ)る

[33] はら-ぐみ 【腹組】／はら-ごころ 【腹心】／ふく-あん 【腹案】／ふっ-こう [フクカウ] 【腹稿】

[34] どう-ふく 【同腹】／はら-あい [..あひ] 【腹合】／はらを＝合(あ)わす [=合(あ)わせ
る]

(346) 〈理解・納得〉 [25]

[25] しんぷくに落（お）つ／はらへ落（お）ちる

(347) 〈嗜好〉 [27]

[27] はらに合（あ）う／はらに惚（ほ）れる／はらへ嵌（はま）る

(348) 〈度量・包容力〉 [28]

[28] おおきな腹（はら）／おお-ぶくちゅう [おほ..] 【大腹中】／だい-ふくちゅう 【大腹中】／はらが小（ちい）さい／ふとっ-ばら 【太腹】

(349) 〈人格〉 [29, 31, 35]

[29] ふとっ-ばら 【太腹】

[31] はら-じろ 【腹白】

[35] はら-わる 【腹悪】

(350) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈可笑しさ〉 おかし-ばら [をかし..] 【可笑腹】

※ 〈笑いすぎて腹が痛くなること〉（『日国』）。ここでの「腹」は〈痛い腹〉のことを指すか。

〈苦悩〉 せい-はらを揉（も）む

※ 「せい-はら」は「背と腹」。「揉む」は「気を揉む」の「揉む」と同じで、〈気持ちを激しく動揺させる〉の意か。なぜ「背」と「腹」なのかは不詳。

〈知識・才能〉 じぐち-ばら [ぢぐち..] 【地口腹】／すぐち-すばら 【虚口素腹】

※ 「虚口素腹」は〈口も腹も空っぽ〉の意。そこから〈才能・能力が欠けていること〉へ転じた。

〈心を通じ合わせる家臣〉 ここう-ふくしん 【股肱腹心】／ふく-しん 【腹臣】

※ 「腹臣」は〈腹心の臣〉のこと。「股肱」は〈もも・ひじ〉の意で、そこから〈手足となって働く家来〉へと転じた。

〈度胸・胆力〉 はらで行く

※ 「腹」が〈度胸・胆力〉, 「行く」は〈物事に取り組む〉の意で、全体で〈度胸を持って取り組む〉のことか。

(345) のような〈内心・本心・考え・意図〉に関する〈腹〉表現は、従来の研究が、私利の達成を目的とした打算的な心・企みと結びつく〈腹〉の特徴を論じる際に根拠として扱ってきたものである（有蘭 2007, pp. 315, 317; ケキゼ・田中, 2004, pp. 72–74; 田中, 2003, pp. 117–118）。特に「いたくない腹を

探られる」や「いたまぬ腹を探らる」は、〈他人からあらぬ疑いをかけられる〉ことを表す表現であり、当時、私利私欲に基づく駆け引きが〈腹〉を中心に行われていたことを示している。²²⁸ ただし、少なくとも近世の用例を見る限り、(345) が全てそのような性質によって特徴付けられる訳ではない。たとえば「肚裏（はらのうち）」を含む(351)の用例は、ある集落の住民が供物を妖賊に騙し取られていることに気づいた、大法師が、その集落の救済を目論む場面を描いたものである。、大法師が自身の計画を明かさないのは、部外者である己が安易に忠告をしても住民の信用を得られるはずがないと考えるからであり、腹の内での計画は、集落の救済という利他的な目的によって動機付けられている。²²⁹

(351) 那（かの）村人が云々（かにかく）と、説知（ときしら）したる大沼祭（おほぬままつり）の、供物の事こそ信（うけ）られね。そは必（かならず）幻術に、長（たけ）たるものが村人（ら）を、哄（だま）して東西（もの）を奪ふならん。しかりとも是等（これら）の事を、明々地（あからさま）に諭（さと）しなば、素（もと）より愚直の田舎児（みなかうど）の、還（かえつ）って酒家（われ）を鬱悒（いぶせ）く思いて、惑（まよ）いはいよ／＼醒（さめ）ざるべし。要こそあれ、と肚裏（はらのうち）に、尋思（しあん）をしつゝ忽地（たちまち）に、その計（はかりごと）決（さだま）りければ〔、大法師がある集落の怪奇な祭祀を解明しようと計画を練る場面〕（読本・南総里見八犬伝 1814-42 八・六）

また、近世のもう一つの大きな変化として、精神の安定を司る部位としての〈腹〉に、〈怒り〉以外の精神作用が結びついたことが挙げられる。「腹を立つ」「腹が居る」「腹を据える」のように、中古・中世から存在する怒り表現は〈腹〉の安定に目を向けたものを含むが、この安定の概念は、新たに(352)のような〈覚悟〉（〈度胸〉）と対応づけられている。²³⁰ このように、近世では中世までの〈腹〉の性質を継承しつつも、その性質を新たな精神作用へと適用することで表現を拡大したことが分かる。

²²⁸ 『日国』によれば、「腹を探る」は元々腹部の触診を指して中世から用いられていた語であり、「いたくない腹を探られる」は腹痛などない正常の状態で腹を無駄に触診される意味から、あらぬ疑いをかけられる意味へ転じたのだという。そのような転義の背景を考慮すると、「探る」表現が〈腹〉に精神が宿するという理解様式に第一に動機づけられたとは直ちに結論づけ難いが、同じ近世に現れる「腹決り」やのちに見る近代の「腹を見抜く」「腹を読む」という別表現の存在を加味する限り、やはり〈腹〉には他人が知りたいと思うその人の心が宿と考えられていたのだろう。

²²⁹ あるいは、この「肚裏（はらのうち）」の例は、純粹に〈あらかじめ心中で考えておくこと〉を意味する「腹稿」などの表現と並行して考えるべきであるかもしれない。「腹稿」は〈詩文を作る前の計画〉という意味でも用いられるが、少なくともこの使用には秘匿性の意味合いは含まれていないであろう。現代では〈頭〉で行われるはずの知的な精神活動が、当時は〈腹〉で行われると理解されていたことを示している。

²³⁰ 『日国』では、(352)は「気を落ちつけ、対処のしかたを決める。覚悟をきめる。腹をくくる。」という定義の例として挙げられているが、実際は「度胸」に対する注釈部分で引かれた用例であり、〈度胸・胆力〉の意味に近いと考えられる。

- (352) ちかごろはらをすへてぜんあくともいちづにすることをどきやうといふいと／＼はしたなげればつかふべからず〔「胴居（度胸）」の注釈部分として〕（人情本・春色梅児誉美 1832-33 初・二）

参考として、〈度量・包容力〉〈理解・納得〉の用例についても挙げておく。

- (353) 山本（やまもと）にしやうか。山本は腹（はら）がちいさいから、尾花（をばな）やにしやう〔深川の遊郭に遊びに出かけた武士が茶屋を選ぶ場面。それぞれの店の気前の良さを比べていると考えられる〕（洒落本・辰巳之園 1770）
- (354) 一（ひと）つ方便（はうべん）をいはねば、向（むか）ふの腹（はら）へは落（お）ちぬて〔夫婦に貰い子の仲介を持ちかけた男が、先方に子を引き取るための方便を提案する場面〕（人情本・風俗粹好伝 1825 前・上）

4.3.7 近代

次に、近代で初出が確認された表現を (355)–(365) に示す。対応する精神作用としては近世までに確認されたものから大きな変化はない。新しく追加された精神作用としては、(357) の〈恨み〉がある。また、(352) のような〈覚悟〉に加え〈信念・決心〉に関する表現や〈内心・本心・考え・意図〉に関する表現が増加している点に注目されたい。

- (355) 〈可笑しさ〉[2, 4]

[2] おなかの皮（かわ）を＝捩（よじ）る [= 縊（よ）る] ／はらの皮（かわ）が＝捩（よじ）れる [= 縊（よ）れる] ／

[4] ほうふく-ぜつとう [..ゼッタウ] 【捧腹絶倒・抱（ハウ）腹絶倒】／よこっぱらを抱（かか）える

- (356) 〈不満〉[5]

[5] おもう事（こと）言（い）わねば腹（はら）ふくる

- (357) 〈恨み〉[7]

[7] はらに持（も）つ

- (358) 〈怒り〉[9, 11, 12, 15, 32]

[9] はらが＝煮（に）える [= 煮（に）え立（た）つ]

[11] はらの＝虫（むし） [= 中（なか）の虫（むし）]

[12] うすばらが立（た）つ／うすはら-だ・つ【薄腹立】／おお-はらだち [おほ..]【大腹立】／はらだちつ-ぼう [..パウ]【腹立坊】／まけばら-たち【負腹立】／むかつばら-たち【向腹立】／りっぷく-げ【立腹気】

[15] はらが癒（い）える／はらを癒（いや）す

[32] むかつ-ばら【向腹】／むちゃくちや-ばら【-腹】／やけつ-ばら【自棄腹】／やけ-ばら【自棄腹・焼腹】／やけばら-まぎれ【自棄腹紛・焼腹紛】／

(359) 〈機嫌〉[17]

[17] はら-ぐあい [..グあひ]【腹具合】

(360) 〈信念・覚悟・決心〉[18, 19, 33, 34]

[18] はらが据（す）わる／はらを括（くく）る

[19] はらが堅（かた）い

[33] はらに決（き）める

[34] はらが決（き）まる／はらが出来（でき）る／はらを決（き）める

(361) 〈内心・本心・考え・意図〉[20, 21, 22, 23, 24, 33, 34]

[20] おなかの中（なか）／はらから／はらの底（そこ）

[21] せきしんを推（お）して人（ひと）の腹中（ふくちゅう）に置（お）く／はらに一物（いちもつ）／はらに納（おさ）める／ふくちゅう刀（とう）有（あ）り

[22] ない腹（はら）を探（さぐ）られる

[23] はらを見抜（みぬ）く／はら-よみ【腹読】／はらを読（よ）む

[24] はらを割（わ）る

[33] ふく-ぎ【腹議】／ふく-ひ【腹誹】／めんじゅう-ふくひ【面従腹誹】

[34] はらが無（な）い／ひとつ-はら【一腹】

(362) 〈理解・納得〉[25]

[25] はらに入（い）る／はらに入（い）れる／はらに落（お）ちる

(363) 〈度量・包容力〉[28]

[28] はらが太（ふと）い／たい-ふく【太腹・大腹】／はら-ぶと【腹太】／ふと-ばら【太腹】

(364) 〈人格〉[29]

[29] はらが太（ふと）い／はら-ぶと【腹太】／ふと-ばら【太腹】

(365) その他成り立ちが明らかなでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈頑固〉ごう-ふく [ガウ..]【剛腹】

※『日国』に「(「復」「腹」の混同によるか)「ごうふく(剛復)」に同じ。」とある。

〈嫉妬〉やきもち-ばら【焼餅腹】

※用例では「焼餅腹を立つ」とあり、〈(嫉妬心からくる)苛立ち〉のことを指すか。

〈才能・器量・思慮分別〉せんざい-けんふく【譎材儉腹】

※「譎材」とは〈浅はかで才能がない〉こと。儉腹は〈不足した(空っぽの)腹〉のことか。

〈同情(辛さ)〉かたはらいた-さ【片腹痛—】

※「傍」が「片腹(かたはら)」と再解釈され、読まれたことによる。

〈人格〉／なつの鯛(いわし)で腹(はら)が悪(わる)い

※「なつの鯛で～」は「腹が悪い」ははらわたの腐った状態と、すなおでなく意地が悪い意とを掛けたしゃれ」のこと(『日国』)。

〈内心・本心〉へびは百足(むかで)の足(あし)知(し)らず百足(むかで)は蛇(へび)の腹(はら)知(し)らず

※蛇も百足も互いの隠れた部分を知らないことから転じて〈相手の心中は知りえない〉ことの意味。

〈内心・本心・考え・意図〉では、近世の「探る」に加え、「見抜く」や「読む」という詮索のパターンが現れることのほか、反対に主体自ら心中を明かすことの「腹を割る」も現れている。(366)で他人に見抜かれた治作という人物の計画は、(351)にあったような利他的な目的を達成するための計画ではなく、治作側の私利の達成を目的としている。ある人物にとっての私利は、裏を返せば相手にとっての不利益になりうるため、相手は隠されている〈考え・意図〉を「見抜く」必要があるのだ。ケキゼ・田中(2004, p. 72)や有蘭(2007, p. 315; 2009, pp. 207–208)でも指摘されているように、このような「相手側からの探り」を表す表現は現代日本語にも通じる〈腹〉固有の特徴であり、〈腹〉と利己的な心の結びつきを裏付ける証拠である。

(366) 治作(ぢさく)は、お巻(まき)の顔(かほ)に微笑(びせう)を認(みと)めた。その微笑(びせう)は、意味(いみ)ありげに治作(ぢさく)には思(おも)はれた。お巻(まき)までが、治作(ぢさく)の腹(はら)の底(そこ)を見抜(みぬ)いて嘲笑(てうせう)してゐるやうに思(おも)はれた。[男が娘の結婚費用の工面をさせようと従兄弟夫婦のもとを訪れたが、誤魔化しているうちにその計画を見抜かれる場面](太陽 二三・一四 治作と米造)

〈信念・覚悟・決心〉の分類については、(352)に挙げたような物事全般に対する漠然とした心構え

(すなわち、「度胸」と呼べるようなもの)ではなく、将来起こると予測される「特定の」事態に備えた(367)のような〈覚悟〉の表現、また、具体的な意志決定(〈決心〉)を表す(368)のような表現が現れている。

(367) 警察の手をこんなに煩(わづら)はせたことであるから、保証人たる新吉も、どんなに叱言(こごと)を喰つても仕様がないと腹をくゝつてゐたが[男が先妻の養父の起こした火事について、警察から咎められることを覚悟する場面](或る死、或る生 1939〈保高德蔵〉二)

(368) 「糞ッ止めても止まらぬぞ」トいつにない断念(おもいきり)のよさ。こう腹を定(き)めて見ると、サアモウ一刻もいるのがいやになる[主人公の文三が寄宿先を出ていく決意をする場面](浮雲 1887-89〈二葉亭四迷〉一・五)

4.3.8 現代

最後に、現代で初出が確認された表現を(369)(370)に示す。〈腹〉によって表される精神作用に変化はなく、かつ追加数としても近世や近代と比べて少ない。精神作用の座としての〈腹〉の理解は、近世までに、あるいは少なくとも近代までに成熟を迎えたと言えるであろう。

(369) 〈内心・本心・考え・意図〉[24, 33]

[24] はらの底(そこ)を打(う)ち割(わ)る

[33] はら-づもり【腹積】／めんじゅう-ふくはい【面従腹背】

(370) 〈人格〉[30, 31]

[30] ごう-ふく [ガウ..]【剛腹】

[31] はらぐろ-さ【腹黒一】

(370)の「剛腹」は〈頑固〉の意味で(365)で既に取り上げたが、〈胆力がすわっている〉こと〈こせこせしないこと〉の意味では現代が初出である。「剛」には〈かたい〉のほかに〈強い〉の意味もあり、この場合両方の解釈が通用するであろう。

4.3.9 観察のまとめ

以上、『日国』の見出しの観察をもとに、〈腹〉表現の史的展開を概観してきた。調査結果を集約し、慣用的意味(精神作用)に基づいて〈腹〉表現を分類したものを表31として示す。慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語については、分類番号に「*」をつけ、カテゴリー名ではなく表現例を直接示した。また、第3章での分析において、近代以降の用例が見つからないという理由で観察

対象外としたものには「現代」に「(・・・)」と記した。本章で新しく調査対象とした漢語についても、『日国』での近代以降の用例の有無に基づいて判断している。必ずしもこれらが現代で消失しているとは言えないが、表現の使用状況を測る一つの尺度となるであろう。また、例として挙げたものは、全て各カテゴリーの初出時代から得られた表現である。

表 31 が示す通り、〈腹〉表現が現れるのは上代の漢語（「心腹」「腹心」）を除いて中古以降である。中古の段階で〈腹〉と対応していた精神作用は〈可笑しさ〉（「腹を切る」）、〈不満〉（「腹が脹れる」）、〈怒り〉（「腹立つ」）と、〈嗜好〉（「腹に味わう」）、〈人格〉（「腹汚い」）のみであり、のちに見る〈胸〉が中古の段階で対応していた精神作用の範囲よりも狭い。中世になると〈内心・本心〉（「腹中」）、〈考え・意図〉（「腹蔵」）、〈度量・包容力〉（「腹中広し」）に分類される表現が現れるが、数としては非常に限られており、現代に通じるような精神作用の多様性を持ち始めるのは近世ごろであったといえよう。具体的には、近世では、その他多くの〈内心・本心〉〈考え・意図〉に関する表現に加え、〈覚悟〉（「腹を据える」）、〈理解・納得〉（「腹へ落ちる」）といった感情以外の精神作用を表す表現が加わる。〈腹〉表現は近世で急激に増加するとともに概ねの成熟をも見せており、以降対応する精神作用に関しては、近代で新しく加わる〈恨み〉（「腹に持つ」）、〈信念・決心〉（「腹が堅い」）を除き、現代までに大きな変化はみられない。

表 31 精神作用の座としての〈腹〉の史的展開（精神作用固定）

	上代	中古	中世	近世	近代	現代	
精神作用	分類	字義的意味（慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の場合は表現例*）					例
可笑しさ	1		腹が痛い				腹筋痛し
	2			腹を振る			腹を振る
	3		腹を切る				腹を切る
	4		腹を抱える（しぐさ）				捧腹（ほうふく）
不満	5		腹の内容物が増え、腹が膨張する				腹が脹れる
満足	6			腹が内容物で満ちている			腹一杯
恨み	7				腹に内容物を留める		腹に持つ
怒り	8		腹が不快だ				腹悪し
	9			腹の内容物が {燃える／煮える}			業腹を煮やす
	10		腹に内容物を留めておけない				腹に据えかねる
	11			腹の中の虫（が暴れ、制御できない）			腹の虫が治まらない
	12		腹が立つ				腹立つ
	13			腹を害する		（・・・）	腹に障える
	14		腹 {が安定する／を安定させる}				腹が居る
	15			腹 {が癒える／を癒す}			腹癒せ
	32*		向腹				向腹
	16			腹の形			腹形
機嫌	17				腹の状態（具合）		腹具合
信念・覚悟・決心	18			腹を安定させる			腹を据える
	19				腹 {が固い／を固める}		腹が堅い
内心・本心・ 考え・意図	20		腹の内部				腹中（ふくちゅう）
	21		腹に内容物 {がある／がない／を留める}				腹蔵（ふくぞう）
	22			腹の中を {探る／探られる}			腹を探る
	23			腹の中を見る			腹を見抜く
	24			腹を割る			腹を割る
	33*	心腹					心腹（しんぶく）
	34*			腹を合わす			腹を合わす
理解・納得	25			腹に内容物 {が入る／を入れる}			腹へ落ちる
嗜好	26		腹で内容物を味わう			（・・・）	腹に味わう
	27			腹に {合う／嵌る}		（・・・）	腹に合う
度量・包容力	28		腹が {大きい／太い／小さい}				腹中（ふくちゅう） 広し
	29			腹が太い			太っ腹
人格	30				固い（強い）腹		剛腹（ごうふく）
	31		腹の内容物が {汚い／黒い／白い}				腹汚い
	35*		腹悪し				腹悪し

次に、〈腹〉表現の比喩的な成り立ちの変容を分析するために、慣用句を第 3 章の分析に基づいて並べたものを表 32 として示す。表 31 の分類との対応が分かるように、右列に番号を示した。

表 32 精神作用の座としての〈腹〉の史的展開（字義的意味固定）

			上代	中古	中世	近世	近代	現代	
字義的意味			精神作用				表31との対応		例
L1	しぐさ	腹を抱える			可笑しさ				4 捧腹（ほうふく）
	痛み	腹が痛い			可笑しさ				1 腹筋痛し
	不快感	腹が不快だ		怒り					8 腹悪し
L2	振れ	腹を振る				可笑しさ			2 腹を振る
	切付け	腹を切る		可笑しさ					3 腹を切る
L3-C	内 容 物 の 増 量・乱れ・制 御	腹が内容物で満ちている			満足				6 腹一杯
		腹の内容物が増え、腹が膨張する		不満					5 腹が脹れる
		腹の内容物が {燃える／煮える}			怒り				9 業腹を煮やす
		腹の中の虫（が暴れ、制御できない）			怒り				11 腹の虫が治まらない
		腹に内容物を留めておけない		怒り					10 腹に据えかねる
		腹の形			機嫌				16 腹形
		腹の状態（具合）				機嫌			17 腹具合
	内 容 物 の 存 在・保持	腹の内部			内心・本心				20 腹中（ふくちゅう）
		腹に内容物 {がある／がない／を留める}				恨み			7 腹に持つ
					内心・本心・考え・意図				21 腹蔵（ふくぞう）
	内 容 物 の 探 索・露呈	腹の中を {探る／探られる}			考え・意図				22 腹を探る
		腹の中を見る				考え・意図			23 腹を見抜く
		腹を割る				考え・意図			24 腹を割る
	対象の受容・ 玩味	腹に内容物 {が入る／を入れる}			理解・納得				25 腹へ落ちる
		腹で内容物を味わう		嗜好			(・・・)		26 腹に味わう
		腹に {合う／嵌る}			嗜好		(・・・)		27 腹に合う
	容器の規模	腹が {大きい／太い／小さい}			度量・包容力				28 腹中（ふくちゅう） 広し
	内容物の性質	腹の内容物が {汚い／黒い／白い}		性格					31 腹汚い
L3-O	安定	腹が立つ		怒り					12 腹立つ
		腹 {が安定する／を安定させる}		怒り					14 腹が居る
					覚悟	決心			18 腹を据える

		上代	中古	中世	近世	近代	現代	
		字義の意味				精神作用		表31との対応
L3-O	安定	腹 {が強い／を固める} ／強い（強い） 腹				信念・覚悟・決心		19
						胆力・度胸		30
		腹が太い				胆力・度胸		29
	障害	腹を害する				怒り (・・・)		13
	治癒	腹 {が癒える／を癒す}				怒り		15

L1で観察される感覚・運動のうち、〈怒り〉と結びつく[8]不快感（「腹悪し」）は中古から、〈可笑しき〉と結びつく[1]腹筋の痛み（「腹筋痛し」）や[4]しぐさ（「捧腹」）は中世から用いられている。痛みについては、それをメタファー化したと考えられる[3]「腹を切る」の表現が先に中古で現れている点に注目されたい。このように、精神作用に伴う〈腹〉の身体経験は、早期から比喻として用いられている。

L3に注目すると、〈腹〉は初期（中古）より〈容器としての腹〉と〈具象物としての腹〉両方のメタファー的理解を得ていたことが分かる。3.4節では、〈容器としての腹〉の具体レベルのメタファーとして、〈感情／内心・本心／考え・意図／人格は腹という容器に納められた内容物である〉〈度量・包容力は腹という容器の容積である〉〈理解・納得は腹という容器に対象を取り込むことである〉を提案した。〈腹〉の[5]膨張を通じて〈不満〉を表す表現（「腹が脹れる」）、〈腹〉の[31]中身の性質を通じて〈性格〉を表す表現のカテゴリー（「腹汚い」）から判断するに、〈感情／内心・本心／考え・意図／人格は腹という容器に納められた内容物である〉のメタファーは既に中古から存在したと考えられる。ただし、中世までのこのメタファーの適用範囲は狭く、当時〈腹〉の中に内容物として納められていたのは主に感情と人格である。〈内心・本心〉や〈考え・意図〉として分類される知的精神寄りの精神作用については、中世までは「腹蔵」などの漢語による表現([21])が一部該当するのみであり、本格的に現れるのは近世以降であった。特に、他者が中身を[22]探る（「腹を探る」）・[23]見抜く（「腹を見抜く」）、あるいは[24]自分で他人に中身を晒す（「腹を割る」）といった〈考え・意図〉に関する表現は、近世・近代以降の出現である。また、第二の具体レベルのメタファー〈度量・包容力は腹という容器の容積である〉に関係する[28]のカテゴリー、すなわち〈腹〉の規模を通じて〈度量・包容力〉を表す表現は中世に生じているが、実際に表現として得られたのは「腹中広し」のみである。このメタファーに関連するその他の表現や、〈理解・納得は腹という容器に対象を取り込むことである〉のメタファーの存在を裏付ける〈腹〉への内容物の取り込みを通じて〈理解・納得〉を表す表現([25]「腹へ落ちる」）は、いずれも近世以降の初出となっている。

〈具象物としての腹〉の理解に基づくメタファー〈精神の安定は腹の安定である〉についても、適用される精神作用は当初は限定的であった。中世までに〈腹〉の安定と結びついていたのは〈怒り〉のみであり、これが〈信念・覚悟・決心〉や〈度胸・胆力〉にまで拡張するのは近世以降である。安定・不安定の描写方法としても、[12]立つ（「腹立つ」）と[14]居る（座る）（「腹が居る」）といった〈腹〉の自然発生的な姿勢の変化から、[18]据える・括る（「腹を据える」「腹を括る」）などの主体による働きかけの描写へと拡大していった様子が窺える。

以上を要するに、日本語における精神作用の座としての〈腹〉の理解の史的展開として、次のよう

な傾向を指摘することができる。

- 〈腹〉は中世まで感情との結びつきを主とし、そのほかは（漢語による表現を除いて）〈嗜好〉および〈性格〉を表す表現が一部見られるのみである。近世以降になると、〈腹〉は感情以外の精神作用との対応を広げ、具体的には〈内心・本心・考え・意図〉〈度量・包容力〉〈理解・納得〉〈覚悟〉〈胆力・度胸〉といった精神作用を表す表現が出現する。その後の展開から判断するに、〈腹〉は近世には精神作用との対応の成熟を概ね迎えていたと考えられる。
- 漢語による表現を含めた場合、一部の精神作用との対応の成立は早まる傾向にある。
- L1 や L2 に関係する共起性基盤（時間的隣接性）としての身体経験は、初期（中古）から比喩として利用されている。
- L3 に分類される〈容器としての腹〉と〈具象物としての腹〉のメタファーは中古より観察されるが、具体レベルメタファーのうち〈度量・包容力は腹という容器の容積である〉と〈理解・納得は腹という容器に対象を取り込むことである〉のメタファーは中世～近世での発生であると考えられる。また、中古から確認される具体レベルのメタファー〈（特定の精神作用）は腹という容器に納められた内容物である〉と〈精神の安定は腹の安定である〉に関しても、適用される精神作用が当初は限定されており、近世以降〈腹〉の描写方法が多様化するに従い対応する精神作用が拡大している。

4.4 〈胸〉表現の史的展開

4.4.1 分類方法

本節でも同様に、〈胸〉表現の歴史的な展開を 3.5.5 節の分類に基づいて観察していく。〈胸〉表現の分類を表 33 に再構成して示し、3.5.5 節の要点を振り返っておきたい。[1]–[46] に示すように、〈胸〉は特に精神の情緒的側面との結びつきが強いが、その主要因として胸部における身体経験の豊かさが挙げられる。感情に伴う胸部の感覚・運動として、痛覚、苦しさ（閉塞感）、動悸、不快感、体温変化（ただし、体温変化は胸部固有とはいえない）があり、これらがメトニミーあるいはメトニミー由来のメタファーとして利用されたものが〈悲しみ・辛さ・不安〉の [1]（「胸痛し」）、[2]（「胸苦し」）、[9]（「胸が轟く」）、〈恋慕〉の [13]（「胸を熱み」）、〈恐怖〉の [19]（「胸を冷やす」）、〈喜び・期待〉の [20]（「胸が轟く」）、〈嫌悪・怒り〉の [30]（「胸が悪い」）のようなカテゴリーの比喩である（感覚・運動レベル (L1)）。さらに、このような身体経験が別の事象へと喩えられることで、感覚や運動を表す語

以外を用いたメタファー表現が生み出される。たとえば、[1] の痛みと [3] の損傷（「胸に釘針刺す」）、[2] の苦しさと [5], [6] の圧迫・閉塞（「胸が潰れる」「胸塞がる」）、[9], [20] のような鼓動と [10], [21] の動揺（「胸が騒ぐ」「胸が躍る」）のようなカテゴリーの組である（スキーマレベル I (L2)）。

また、〈胸〉は〈腹〉とは別に個別の〈容器〉として理解され、スキーマレベル II～概念レベル (L3) のメタファー表現を形成する。〈容器としての胸〉のメタファー的理解 (L3-O) には〈特定の精神作用を納める胸〉〈物事を受け容れる胸〉という二種類の下位メタファーが存在すると考えられる。前者は [12]（「胸の霧」）、[36]（「胸が一杯になる」）、[37]（「胸より余る」）、[45]（「胸が霽れる」）のように共起性基盤となる特定の身体経験が相対的に明確でない感情カテゴリーに加え、[47]–[51] のように知的精神寄りのカテゴリー（e.g. 「胸に浮かぶ」「胸を明かす」）を生む。一方、後者は〈腹〉でも観察された〈理解・納得〉の [53]（「胸に落ちる」）、〈度量・包容力〉の [58]（「胸量」）、[59]（「胸が狭い」）のようなカテゴリーに加え、〈記憶〉に関する [55]–[57] のようなカテゴリー（e.g. 「胸に刻む」）を生む。

スキーマレベル II～概念レベルには、〈具象物としての胸〉としてのメタファーも確認されるが、該当表現の数はそれほど多くはない。感情表現としては、共起性基盤となる特定の身体経験が見出しにくい〈感銘〉の表現 [27]（「胸に応える」）、[28]（「胸に当たる」）や、身体全体で経験されるはずの体温変化を〈胸〉の燃焼に喩えたと考えられる [14]（「胸焦がる」）、[33]（「胸が燃える」）などが当てはまる。また、感情以外のカテゴリーとして、〈胸〉を擬人化した [52]（「胸に聞く」）がある。

表 33 〈胸〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型（慣用的意味固定）

*L1: 感覚・運動レベル L2: スキーマレベル I L3: スキーマレベル II～概念レベル (L3-C: 〈容器〉／L3-O: 〈具象物〉)

精神作用	番号	レベル	字義的意味	慣用的意味（精神義）	表現例
悲しみ・辛さ・不安	1	L1	胸が痛い	悲しい・辛い・不安だ	胸痛し
	2	L1	胸が苦しい	悲しい・辛い・不安だ	胸苦し
	3	L2	胸を傷つける	悲しい・辛いと感じる	胸に釘打つ、胸に釘針刺す
	4	L2	胸が裂ける	悲しい・辛いと感じる	胸裂く、胸がはり裂ける
	5	L2	胸が圧迫される	悲しい・辛いと感じる・不安を覚える	胸が潰れる、胸拉ぐ
	6	L2	胸が {塞がる／つま る}	悲しい・辛いと感じる・不安を覚える	胸塞がる
	7	L3-C	胸に内容物をせき止める	悲しみをこらえる	胸に塞く
	8	L2	胸が板のように硬直する	悲しい・辛いと感じる・不安を覚える	胸が板のようになる
	9	L1	胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する	不安を覚える	胸走る、胸が轟く
	10	L2	胸が動揺する	不安を覚える	胸が騒ぐ、胸安からず
	11	L2	胸に衝撃を与える	不安を覚える	胸をつく
	12	L3-C	胸の中の視界を遮る天候	不安	胸の霧、胸の雲
苦悶・恋慕	13	L1	胸が熱い	恋しい	胸を熱み

精神作用	番号	レベル	字義的意味	慣用的意味（精神義）	表現例
苦悶・恋慕	14	L3-O	胸が {焦がれる／燃える}	（恋情で）苦悶する	胸焦がる，胸が燃える
	15	L3-C	胸の中の {火／煙}	苦悶・恋慕	胸の火，胸の煙
	16	L1	胸が病む	（恋情で）苦悶する	胸病む
	17	L3-C	胸の閉路	（恋情による）苦悶	胸の閉 [閉路]
	18	L2	胸を削る	苦悶する	胸に鑢を掛く
恐怖	19	L1	胸の温度が下がる	恐れる	胸を冷やす
喜び・期待	20	L1	胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する	喜ぶ・期待する	胸が轟く
	21	L2	胸が動揺する	喜ぶ・期待する	胸が躍る，胸を弾ませる
	22	L3-C	胸の内容物が増え，胸が膨張する	喜ぶ・期待する	胸を脹らます
驚き	23	L2	胸が圧迫される	驚く	胸が潰れる，胸拉ぐ
	24	L2	胸に衝撃を与える	驚く	胸をつく
感銘	25	L2	胸を傷つける	感銘を受ける	胸を刺す
	26	L2	胸に衝撃を与える	感銘を受ける	胸を打つ
	27	L3-O	胸が刺激を強く感じる	感銘を受ける	胸に応える
	28	L3-O	物体が胸に接触する	感銘を受ける	胸に当たる
	29	L3-C	刺激に胸が反響する	刺激に胸が反響する	胸に響く
嫌悪・怒り	30	L1	胸が不快だ	不快だ・怒りを覚えるような	胸が悪い
	31	L3-O	胸を害する	不快だ・怒りを覚えるような	胸に障る
	32	L3-C	胸の内容物が煮える	怒る	胸が煮える
	33	L3-O	胸が燃える	怒る	胸が燃える
	34	L3-C	胸の中の虫	怒り	胸の虫
	35	L3-C	胸に内容物を {留めておけない／抑えつける}	怒りを制御できない	胸に据えかねる，胸を抑える
感情の高ぶり	36	L3-C	胸に内容物が満ちる	感情や思いが高ぶる	胸が一杯になる
	37	L3-C	内容物が胸に収まり切らない	感情や思いが高ぶる	胸より余る
	38	L2	胸がつまる	感情や思いが高ぶる	胸がつまる
感情の抑制	39	L1	胸を手で触る	（不安などの）感情を抑制する	胸を撫で下ろす
感情の平静	40	L3-3	胸の隙間	感情の平静	胸の隙
感情の解消	41	L2	胸の動揺が収まる	（不安などの）感情が解消する	胸が収まる
	42	L3	胸が開く	（不安などの）感情が解消する	胸が開く
	43	L2	胸が空く	（不安などの）感情が解消する	胸がすく
	44	L3-C	胸の中の内容物の嵩が減る	（不安などの）感情が解消する	胸が下がる
	45	L3-C	胸の中の天候が解消し，視界を遮るものが消える	（不安などの）感情が解消する	胸が霽れる
	46	L1	胸を手で触る	（不安などの）感情が解消する	胸を撫で下ろす
内心・本心・考え・意図	47	L3-C	胸の内部	内心・本心	胸の内，むな底
	48	L3-C	胸の堤防	内心・本心	胸陂
	49	L3-C	胸に内容物が浮上する	考えを思いつく	胸に浮かぶ
	50	L3-C	胸に内容物 {がある／を留める}	内心・本心・考え・意図 {がある／を明かさない}	胸にある，胸に持つ，胸に畳む

精神作用	番号	レベル	字義的意味	慣用的意味（精神義）	表現例
	51	L3-C	胸 {を割る／の中を晒す}	内心・本心を知らせる	胸を割る, 胸を明かす
	52	L3-O	胸に尋ねる	自問する	胸に聞く
理解・納得	53	L3-C	胸に内容物が入る	理解・納得する	胸に落ちる
覚悟・決心	54	L3-O	胸を安定させる	覚悟・決心する	胸を据える
記憶	55	L3-C	胸にある帳面	記憶	胸の帳面
	56	L3-C	胸に銘刻する	記憶する	胸に刻む
	57	L3-C	胸に内容物が浮上する	記憶が想起される	胸に浮かぶ
度量・包容力	58	L3-C	胸の容積	度量・包容力	胸量
	59	L3-C	胸が {広い／狭い}	度量・包容力が {ある／ない}	胸が狭い, 胸が広い
人格	60	L3-C	胸の内容物が汚い	性格が悪い	胸汚し

慣用的連結句、構成要素単位での意味拡張を経た合成語としては、「胸」およびその他の〈胸〉の類語が単独で表す精神義として表 34 のようにまとめられる。

表 34 〈胸〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型

分類	「胸」および類語が表す意味	表現例
61	心中（の／での）	胸算用, 胸勘定, 胸臆
62	気持ち・考え・意図	寸胸, 胸が合う, 胸次第, 胸を定める, 胸を極める
63	驚き	と胸
64	嫌悪・怒り	胸糞
65	性格・気	胸がいい／むねが弱い

〈胸〉には〈腹〉と同様の理由で第3章での観察から外されていた表現も多い。本章で新しく観察対象となるカテゴリーは、表で下線を施した通りである。〈胸〉と結びつく精神作用として新しく加わったのは、[54]の〈覚悟・決心〉と[60], [65]の〈人格〉（性格）である。また、〈怒り〉に関する表現が特に多く加わっており、[31], [33]–[35]のようなカテゴリーが新たに加わっている。他を含め、新たに加わったカテゴリーの意味分析は以降のデータ観察において適宜行っていく。

4.4.2 〈胸〉と精神作用が間接的に関係する表現

はじめに、〈胸〉と精神作用の直接的な関係を見出し難い表現を挙げておく。

(371) 近代～：むねを張（は）る

(372) 上代～：むねを打（う）つ

(371)の「胸を張る」の成り立ちについては3.5.1節で説明した通りである。(372)の「胸を打つ」も

〈感動〉や〈驚き〉を経験した際に感じる胸部への衝撃に基づくと考えられる表現として3.5.2節で取り上げたが、歴史的に見ると〈胸のあたりを打つ〉しぐさを以て〈嘆き悲しむ〉ことを表す意味がある。この「胸を打つ」の意味も、元々何らかの精神作用によって乱れた鼓動や呼吸を落ち着かせるためのしぐさに由来するのであれば、心臓や肺・横隔膜が位置する〈胸〉の身体的特徴に動機付けられているという点で、「胸を撫で下ろす」などのしぐさ表現と同様に、4.4.3節以降の観察に含めて良いであろう。しかし用例を概観する限り、本表現はどちらかといえば感情表出のためのしぐさを指し、平静を取り戻すことを意図したしぐさとは異なっているようである。たとえば、以下の例での「胸を打つ」は、飛び上がり、地団駄を踏んで泣き叫び、伏して仰ぐといった一連の感情表出のしぐさに並んで現れている。²³¹

(373) たまきはる 命 (いのち) 絶えぬれ 立ち躍 (をど) り 足すり叫び 伏し仰ぎ 胸打ち嘆き
(万葉集 8C 後 五・九〇四)

本節では、これらの表現は精神作用の座としての〈胸〉の理解には直接結びつくものではないと考え、分析対象としない。

4.4.3 上代

上代から使用が確認される〈胸〉表現は、(374)の三項目のみである。ただし、上代の〈胸〉表現は辞書項目から抜け落ちているのも多いため、あらかじめ用例として確認できるものを併せてあげておきたい。(375)–(378)の用例は全て「万葉集」からの出典である。〈胸〉は痛み、損傷、動揺、熱、病を通じて、(特に色事に関する)〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉〈恋慕〉の感情と対応づけられている。

(374) 〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉 [1, 4, 10]

[1] むね痛 (いた) し

[4] むね裂 (さ) く

[10] むね安 (やす) からず

(375) 夜のほども 出でつつ来らく 度 (たび) まねく なれば我 (あ) が胸 切り焼くごとし²³²
(万葉集 8C 後 四・七五五)

²³¹ ここでの議論は、後藤 (2023) の執筆時に匿名査読者のお一人からいただいた問いがきっかけとなっている。なお、英語にも〈悔い〉や〈悲しみ〉を表す *beat one's breast* という表現があるが、『しぐさの英語表現辞典 新装版』によれば、本表現は胸を叩いて神の前に自己の非を悔いる宗教儀式をもとにしている。

²³² 「切り焼く」は原文では「截焼」。「截」は「たつ、きる」の意。以後、用例の表記は参考文献に記載のものに基づく。また、下線と文脈説明は筆者による。

(376) 聞きしより 物を思へば 我(あ)が胸は 割(わ)れて碎(くだ)けて 利心(ところ)
もなし(万葉集 8C 後 一二・二八九四)

(377) 我妹子(わぎもこ)に 恋ひすべながら 胸を熱(あつ)み 朝戸(あさと)開(あ)くれば
見ゆる霧かも(万葉集 8C 後 一二・三〇三四)

(378) 恋ふれかも 胸の病(や)みたる 思(おも)へかも 心の痛(いた)き 我(あ)が恋(こ)
ひ)ぞ 日(ひ)に異(け)に増(ま)さる(万葉集 8C 後 一三・三三二九)²³³

これらのうち、感覚に関わる語(「痛し」「熱(み)」)を含むものはメトニミー表現、それ以外のも
のはメタファー表現として大分される。(378)の「胸の病みたる」の場合、「病む」という語が胸部の身
体的な不調を指しているのかどうかは判断し難いが、もしそのような実際の感覚が精神的な苦しみに
伴って生じているのだとしたら、メトニミーによる表現として分析できる。さらに、メタファー表現
の中にも何らかの身体経験による動機づけが窺え、たとえば、「裂く」「切り焼く」「割れる／碎ける」
を用いた表現は、感情経験に伴う〈胸〉の痛みを、〈胸〉がまるで物理的な損傷を被るかのように喩え
たものである(メトニミー×メタファーによる慣用句)。

4.4.4 中古

(379)–(386)の通り、中古では感情表現が多く加わっている。上代に続いて、「痛し」(痛み)、「苦し」
(苦しさ(胸の閉塞感))、「走る」(動悸)のように、身体経験に基づくと考えられるメトニミー表現
が観察される。²³⁴さらに、これらの感覚・反応に基づくと考えられる「胸に釘打つ」(痛み)、「胸が騒
ぐ」(動悸)、「胸塞がる」(閉塞感)などのメタファー表現にも注目されたい。この他に、(377)の「胸
を熱み」に関係して、「燃える」「焦がる」などの燃焼に関する語を用いることで〈恋愛感情を伴い苦
悶する〉ことを表す(380)[14]のような表現も見られる。

(379) 〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉[1, 2, 3, 4, 5, 6, 9, 10]

[1] むね痛(いた)し²³⁵

[2] むね苦(くる)し

²³³ 「名詞+を+形容詞語幹+み」の形で原因・理由を表す。「～が...ので」。ここでは、「胸が熱いので」という意味。

²³⁴ 「胸走る」は、「走る」の〈生物や物が素早く移動する〉という意味に従えばメタファー表現として分類されるが、
〈激しく動く〉の意として「例のごとぞあらむと思ふに、胸つぶつと走るに」(蜻蛉日記 974 頃 中)のような使い
方もされる。この用例では心音を指す擬音語「つぶつぶ」を伴うことから、実際の生理現象(鼓動)を指して用いられ
ていることは確かである。

²³⁵ 『日国』では「胸痛し」の語釈として「心が痛い感じである。心配事があって苦しい。つらく悲しい。」とあるが、
〈不安〉を表す用例は上代では確認されないため、再掲する。

[3] むねに釘（くぎ）打（う）つ

[4] むねが裂（さ）ける

[5] むねが潰（つぶ）れる／むね-こころ【胸心】²³⁶／むね拉（ひし）ぐ／むねを潰（つぶ）す

[6] むねがせく／むねの氷（こおり）／むね塞（ふた）がる

[9] むね-はしり【胸走】／むね-はしりび【胸走火】／むね走（はし）る

[10] むねが騒（さわ）ぐ

(380) 〈苦悶・恋慕〉[14, 15, 17]

[14] むねが燃（も）える／むね焦（こ）がる／むねを焦（こ）がす／むねを焼（や）く

[15] むねの煙（けぶり・けむり）／むねの火（ひ）／むねの＝炎（ほのお）[＝焰（ほむら）]

[17] むねの＝関（せき）[＝関路（せきじ）]

(381) 〈恐怖〉[19]

[19] むねを冷（ひ）やす

(382) 〈喜び・期待〉[21]

[21] むねが騒（さわ）ぐ

(383) 〈驚き〉[23]

[23] むねが潰（つぶ）れる／むね拉（ひし）ぐ／むねを潰（つぶ）す

(384) 〈感情の高ぶり〉[37]

[37] むねに満（み）つ／むねより余（あま）る

(385) 〈感情の平静〉[40]

[40] むねの隙（ひま）

(386) 〈感情の解消〉[42, 43]

[42] むね開（あ）く

[43] むねの隙（ひま）開（あ）く

本章では、表現の精神義を辞書の語釈や用例中の意味あるいは先行研究に基づいて分類し、〈〉で示しているが、実際のところ、各々の表現は複数の感情に跨って用いられうることを繰り返しておきたい。このことは古代の用例においても当てはまり、たとえば、(387)のように〈不安〉を表してよく用いられる「騒ぐ」は、対極的に(388)のようなポジティブな意味での気分の高揚（〈喜び・期待〉）を表

²³⁶ 見出しとしては「胸心」であるが、実際の用例は「胸、心もつぶれて、よろづのこと覚えざりしかば」（宇津保物語 970-999頃 蔵開下）という形でのみ。「胸」と「心」を重ねて強めた語（『日国』）。

すことがある。これは、〈不安〉だけでなく〈喜び・期待〉の感情も、動悸という生理現象を引き起こしうるのである（ただし、鼓動に由来する全ての表現がそうである訳ではない）。

(387) 頭中将を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子（なでしこ）の生ひ立つありさま聞かせまほしけれど、かごとに怖（お）ぢてうち出でたまはず。〔源氏が夕顔の死後に頭中将に会う。遺児の成長の様子を話したいが恨み言を言われなかと不安がり、控える場面〕（源氏物語 1001-1014 頃 夕顔）

(388) 二条殿に住まむ。行（い）きて格子（かうし）あけさせよ。きよめせよ」とて、帯刀つかはしつ。胸うち騒ぎて、うれしきこと限りなし。〔幽閉された姫君を助け出そうと企む少将が、のちに姫君と二条の邸に住もうと考え、帯刀を遣わせる場面〕（落窪物語 10C 後 二）

その他の精神義の表現を (389)(390) にまとめて挙げておく。〈腹〉の場合、〈内心・本心〉を表す漢語（「腹心」「心腹」）が上代から現れていたが、〈胸〉の場合は中古からである。一方、和語による表現「腹の内」と「胸の内」を比べると、前者が近世の初出であるのに対して後者は中古からである。

(389) 〈内心・本心〉 [47, 48, 61]

[47] むねの内（うち）／きょう-ちゅう【胸中】

[48] きょう-ひ【胸陂】

[61] きょう-おく【胸臆】／きょう-かい [...クワイ]【胸懷】／しん-きょう【心胸】

(390) 〈人格〉 [60]

[60] むね汚（きたな）し

上に挙げた漢語のうち、『日国』では「胸陂」を除く全ての項目で漢籍からの用例を載せている。梁 (2013, p. 248) によれば、「胸陂」は当時の造語（和製漢語）であり、「陂」は〈堤（堤防）〉の意味である。それが「胸」と組み合わせることで、思いをとどめておく堤防としての解釈を受ける。

「胸の内」のような表現は、〈容器〉としての〈胸〉と〈内容物〉としての〈精神〉を各々に対応させた構造的なメタファーの例である。中古における同様の例として、重要だと考えられる (391) を見ておきたい。(391) は、燃焼物に喩えられた〈恋心〉が〈胸〉で消えることなく燃え続けることを述べており、「燃ゆる思ひ」が「胸」に絶えることなく存在するという分析的な言い回しからは、当時〈胸〉が精神の在り処として理解されていたことが窺える。

(391) いまよりは 富士（ふじ）の煙（けぶり）も よにたえじ 燃ゆる思ひの 胸にたえねば [恋歌から感じられる男からの気持ちがつれないと思い、女が返した歌]（平中物語 965 頃 九）

4.4.5 中世

『日国』において、中世の初出例がある表現は中古のそれよりも少ない。感情に関する表現を (392)–(397) に挙げる。

(392) 〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉 [7, 10, 12]

[7] むねに塞（せ）く

[10] むな-さわぎ【胸騒】／むねが躍（おど）る

[12] きょう-む【胸霧】／むねの霧（きり）

(393) 〈苦悶・恋慕〉 [14]

[14] あわれ胸（むね）を焼（や）く

(394) 〈喜び・期待〉 [21]

[21] むねが躍（おど）る

(395) 〈感銘〉 [28]

[28] むねに当（あ）たる

(396) 〈感情の高ぶり〉 [37]

[37] むねに余（あま）る

(397) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

うつ-きょう【鬱胸】²³⁷／きょう-うつ【胸鬱・胸鬱】

上の表現のうち興味深いのは、主に〈喜び・期待〉に用いられる「胸が躍る」が、(398) の初出例では〈不安〉としても解釈できる文脈で現れている点である。

(398) お（折）りてまいらばやと存る、いそひでまいらふ、いつも参るとちがふて、胸がおどるよ

[僧が他人の桜の木の枝を折って持ち帰り、男児らに与えたところ、さらに強請られて繰り返して盗みに来る場面。この後、持ち主に捕まる]（虎明本狂言・花盗人 室町末～江戸初）

²³⁷ 橋本 (2008) によれば、「鬱胸」という語は漢籍における典拠が不明であり、日本国内で作り出された語である可能性が高い。漢籍に典拠のある「鬱陶」という熟字のうち、「陶」と「胸」の字体の類似から生じた表記上の異同が発生要因として考えられるという。

その他の精神義の表現を (399) にまとめて挙げておく。(399) のうち、漢語の「胸臆 (くおく)」は、『日国』では「あて推量すること。転じて、あいまいでいい加減な考えやことばをいう。」という語釈が与えられ、(389) に挙げた「胸臆 (きょうおく)」(「心。また、心の中。胸中。」の意味) とは別の見出しが設けられている。実際に、(400)(401) のような中世の「胸臆」の用例では、人のいい加減な考えや思い込み、信用ならない推察を批判的に述べる文脈が確認される。²³⁸

(399) 〈内心・本心・考え・意図〉 [47, 50, 61, 62]

[47] きょう-じ 【胸次】²³⁹

[50] むねに持 (も) つ

[61] きょう-い 【胸意】

[62] すん-きょう 【寸胸】²⁴⁰／く-おく 【胸臆】

(400) 以「胸臆之詞」，輒不^レ足^レ信用^二矣（鹿島大禰宜家文書-安貞二年 五月一九日・関東下知状）

(401) 任快者任「胸臆」申^レ之，仍可^レ停^二止任快濫訴^一之由，被^二仰下^一事（高野山文書-建治元年 一二月 日・阿河庄地頭湯浅宗親陳状案）

中古の「胸の内」や (391) の用例から、〈胸〉と〈精神〉を分析的に捉える理解様式が見えることを述べたが、(399) の「胸に持つ」についても同じことがいえるだろう。感情以外の心的内容を納める容器としての〈胸〉表現のうち、和語による表現はここでは「胸に持つ」以外見当たらないが、『日本古典文学大系本文データベース』で調査すると、以下のように特定のジャンル（歌論）からの用例が一定数得られる。(402) は詩想が〈胸〉に湧くことを描いた用例、(403) は連歌を詠むにあたり、先人の秀歌を〈胸〉に留めておくかどうかを述べる用例である。

(402) おほく昔より上手といふ人の初心の時を尋ねしかば、「胸の中に句がおほく湧 (わ) きて，たぶ／＼と句ばやにし侍りける」とのみうけ給はり置き侍りし也。〔歌詠みに長けた者が未熟だった頃の様子を問われた際の回答〕（筑波問答 1357-1372 頃）

²³⁸ 『鎌倉遺文』にみる中世のことば辞典』によれば、この「胸臆」の用法は中世の特徴の一つであり、特に裁判での訴状・陳状の記録で多く見られる。思ったままを主張することから強引な自己主張を指す行為を指すようになり、裁判においては相手の非難のために用いられる常套句となっていたようである。なお、『鎌倉遺文』にみる中世のことば辞典』では「胸臆」を「きょうおく」と読んでいる。

²³⁹ ここでの「次」は〈中〉の意。

²⁴⁰ 「寸」は「寸心」「寸志」と同じように、〈ささやかな・わずかばかりの〉のようなへりくだりの意味合いを出すための語。

(403) 先達語り侍りし。歌をにくみむずる作者の修行こそ心にくゝも侍らね。いかにも秀歌を胸にお
(を)きて、その面（おも）影を匂ごとに含（ふく）むべきことにや。[歌と連歌の関係について論じる様子]（ささめごと 1463-1464 頃 上）

4.4.6 近世

今回の調査で初出表現が最も多く得られた時代が、近世である。まず、感情の抑制を表すしぐさのメトニミー表現として (404) を挙げる。これらは情緒的興奮によって乱れた鼓動や呼吸を整えることを意図したしぐさとして分析でき、心臓や肺・横隔膜が位置する〈胸〉の身体的特徴に動機付けられている。²⁴¹

(404) 〈感情の抑制〉〈感情の解消〉 [39, 46]

[39] むねに手（て）を置（お）く／むねを抱（だ・いだ）く／むねを抑（おさ）える／むねを摩（さす）る／むねを＝撫（な）でおろす [=撫（な）でる]

[46] むねを＝撫（な）でおろす [=撫（な）でる]

次に、(405)-(413) は〈胸〉内部の感覚・内容物としての感情を述べるメトニミー・メタファー表現である。

(405) 〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉 [1, 3, 4, 5, 6, 8, 10, 11, 12]

[1] むねが痛（いた）む／むねを痛（いた）める

[3] むねに釘（くぎ）／むねに釘針（くぎはり）刺（さ）す／むねに焼（や）き鉄（がね）刺（さ）す

[4] むねがはり裂（さ）ける

[5] むな-つぼらし【胸-】／【胸-】むな-づわらし [..づはらし]²⁴²／むねに盤石（ばんじゃく）

[6] むな-づかい [..づかひ]【胸支】／むな-づかえ [..づかへ]【胸支・胸痞】／むな-づか・える [..づかへる]【胸支・胸痞】／むな-つまらし【胸詰】／むねがつかえる／むねが塞（ふさ）がる／むねにつかえる／むねのつかえ

²⁴¹ 同様の記述は有蘭 (2007, p. 318) にも見られる。(404) のうち、「胸に手を置く」は単に落ち着きを保つことだけでなく、その後の思考行為をも意味に含んでいる点に注目されたい。また、「胸を抱く」は『日国』の語釈として「不安・心配で自分で自分の胸を抱く。不安がる。心配する。」とあり、成立の動機が特定し難いが、他の表現と同様に無意識的な感情の抑制のしぐさを表すと捉え、(404) にまとめた。

²⁴² 「づわらし」は「つぶらわし」の変化したもの（『日国』）。

[8] むねが板（いた）のようになる²⁴³

[10] むね-さわぎ【胸騒】／むねを＝躍（おど）らす [=躍（おど）らせる]

[11] むねをつく

[12] むねの雲（くも）／むねの闇（やみ）

(406) 〈苦悶・恋慕〉[14, 18]

[14] むねに焚（た）く火（ひ）

[18] むねに鑢（やすり）を掛（か）く

(407) 〈喜び・期待〉[20, 21]

[20] むねを轟（とどろ）かす

[21] むねを＝躍（おど）らす [=躍（おど）らせる]

(408) 〈驚き〉[24, 63]

[24] とむねを突（つ）く／むな-つ・く【胸突】／むねをつく

[63] と-むね【-胸】

(409) 〈感銘〉[27, 29]

[27] むねに応（こた）える

[29] むねに響（ひび）く

(410) 〈嫌悪・怒り〉[30, 31, 64]

[30] こむねが悪（わる）い／むねが悪（わる・わる・わり）い／むねくそが悪（わる・わり）

い／むねつくそが悪（わる・わり）い／むね-わる【胸悪】／むね-わる・い【胸悪】

[31] こむねに障（さわ）る／むな-き【胸気】²⁴⁴／むな-け【胸気】／むね-き【胸気】／むねき-もの【胸気者】／むねに障（さわ）る

[64] むね-くそ【胸糞】／むねっ-くそ【胸糞】

(411) 〈怒り〉[32, 33, 34, 35]

[32] むね が＝煮（に）える [=煮（に）え返（かえ）る・＝煮（に）えくら返（かえ）る]／

²⁴³ 「胸が板のようになる」は、「のように」を含む直喩（シミリー）であり、『日国』ではこの形式で見出しが登録されているが、挙げられている近世の用例を見ると必ずしも直喩標識を伴っている訳ではない（e.g. 「おともしや、是（これ）胸（むね）が板（いた）になる、どうぞ思案（しあん）は有（あ）るまいか」（浄瑠璃・持統天皇歌軍法 1713 二）。「板のようになる」がどのようなイメージに由来するかは定かではないが、胸の閉塞感を感じた際に、その感覚を、通常は呼吸に応じて盛り上がり、元に戻る動きを繰り返しているはずの〈胸〉がこわばり、まるで板のようになってしまったかのように述べた表現であろう。各辞典の語釈を参照すると、『日国』（「胸が板のようになる」）や『古語大辞典』（「胸が板になる」）では「胸がふさがる」との説明が、『角川古語大辞典』（「胸が板になる」）では「胸がわだかまりこわばる」との説明がみられる。

²⁴⁴ 「気」は「気障り」のこと（『江戸語大辞典』）。

むねつくそが沸（わ）く

[33] むねが燃（も）える／むねに炬燵（こたつ）を仕出（しいだ）す

[34] むねの虫（むし）／むね-むし【胸虫】

[35] むねにすえかねる／むねを抑（おさ）える²⁴⁵

(412) 〈感情の高ぶり〉[36]

[36] まん-きょう【満胸】／むねが迫（せま）る／むねに迫（せま）る

(413) 〈感情の解消〉[42, 43, 44, 45]

[42] かい-きょう【開胸】／むねが＝開（ひら）く [=開（ひら）ける]

[43] むねがすく

[44] むねが下（さ）がる

[45] むねを晴（は）らす／むね-ばらし【胸晴】／むねが霽（は）れる

(410) の「胸が悪い」は〈嫌悪感を覚える〉こと〈腹立たしい〉ことを表す表現であるが、現代と同様に当時も吐き気や胸焼けといった生理現象に対して用いられていた。用例を見ると、(414) のように明らかに精神義の意味で用いられた用例だけでなく、(415) のように、吐き気などの生理的な感覚なのか心理的な不快なのか判断し難い両義的なものが存在する。

(414) ある時、男の申けるは、「近比、申かね候へども、そなたを見れば、胸が悪い。合點づくにて、去んでたもれ」といふ。[長年寄り添ってきた妻と別れたくなった夫が、妻に家を出てってもらおうと打ち明ける場面]（大系デ／きのふはけふの物語）

(415) かこ「夫から酒孝さんが買立の耳盥の中へ、えまし麦に海苔のどろ++交つたのさ△はね「ヲヤ++++穢へ。そりやア小間物店に見立たのか△ねこ「さうだらうよ。いやだのう。聴ても胸がわるいよ」[芸者が新年に汚細工の料理をしたことについて談笑する場面]（大系デ／浮世風呂）

246

また、〈怒り〉については〈腹〉と共通して液体が沸騰したり、虫が暴れたりする様子に喩えたメタ

²⁴⁵ 「胸を抑える」は「胸」は〈内容物〉としての〈怒り〉の感情を指し、「抑える」はその感情を〈押し留める〉ことを指すであろう。「抑える」はこの解釈のほかに、実際に〈(手で) 押さえる〉という解釈も可能である。『日国』では「抑」の字が充てられており、この場合通常前者の解釈が優先されると考えられるが、挙げられている用例では「抑」が用いられているというわけではない。なお、何らかの精神作用に関わるものかどうか定かではないが、「胸をおさえる」という表現はすでに中古においても用例が確認される（『御帳（みちょう）の内に入りたまひて、胸を押さへて思ふに、いといみじければ』（源氏物語 1001-1014 頃 夕顔）。『新編日本古典文学全集 20』（阿部ほか（訳・校注）、1994）では「ここでは、動悸を静めるために、胸に手をあてておさえる、の意か。」（p. 173）との注が振られている。

²⁴⁶ きたなぎいくの料理（りょうり）：「江戸時代、通人仲間に行なわれた遊びの一つ。清潔な料理なのに、盛る器物などによって、一見不潔な物を連想させる趣向の料理。」（『日国』）

ファー表現が現れている。〈怒り〉を〈胸の中に棲む虫〉として捉える理解様式は、現代日本語では（ほぼ）消失していると考えられるが、その用法としては〈腹の虫〉とほぼ同じである。すなわち、(416)のように、主体からは独立した意志を持った存在として描かれる。

(416) はらわたがもえ返り、胸（むね）の虫（むし）がむか／＼と耐（こら）へかねて候へども、無事（ぶじ）にすまば済（す）まさんと、齒（は）をくひしぼり控（ひか）えし所に〔海野という武士が手柄を立てるため、ある兄弟を主人頼朝の敵の張本として無理に捕えようとした。その様子を五郎時宗が見かねて発言する場面〕（浄瑠璃・百日曾我 1700 頃 二）

なお、第3章で観察された〈怒り〉を表す〈胸〉表現は「胸が煮える」のみであり、それ以外は上でも挙げた〈嫌悪〉を第一義とするような「胸が悪い」のような表現を除いて確認されなかった。一方、(411)の通り、歴史的には虫表現のみならず、[33]〈胸〉の燃焼に喩える表現や[35]〈胸〉内部での制御に喩える表現など、限りなく現代日本語の〈腹〉表現に近いものが得られている。

さて、近世では感情に限らず広範囲の精神作用を表す表現が多く加わっている。

(417) 〈内心・本心・考え・意図〉[47, 50, 51, 61, 62]

[47] きょう-り【胸裏・胸裡】／むな-うち【胸内】／むね-さんずん【胸三寸】

[50] きょうちゅう成竹（せいちく）あり／むねにある／むねに一物（いちもつ）／むねに納（おさ）める／むねに畳（たた）まる／むねに畳（たた）む／むねに包（つつ）む

[51] むねを開（ひら）く

[61] きょう-う【胸宇】／きょう-かく【胸膈】／きょう-し【胸旨】／きん-きょう【襟胸】／こけ-むね【虚仮胸】／むな-ざん【胸算】／むな-ざんよう【胸算用】／むな-だくみ【胸工】／むな-づもり【胸積】／むね-あて【胸当】／むね-ごと【胸事】／むね-ざんよう【胸算用】／むね-だくみ【胸工】²⁴⁷

[62] むねが合（あ）う／むね-しだい【胸次第】

(418) 〈理解・納得〉[53]

[53] むねに落（お）ちる²⁴⁸

²⁴⁷ 「当て」は〈見込み〉の意。「工」は〈はかりごと〉の意。

²⁴⁸ 理解・納得に関連して、『時代別国語大辞典 室町時代編』には、「得心」を表す「胸に乗る」という表現が記載されているが、その用例は『新編江湖風月集略註鈔』（1633 年刊）の万安英種（1591-1654）による禅詩の注釈部からの出典のみである。文献上に現れるまでの時間差を考慮すると、本表現が中世から存在することは大いに考えられるが、現段階ではその用例が確認できていないため、中世の表現として扱うことを保留とした。なお、この表現は少なくとも近世では用例が見られる（「なんと此（こ）の談合（だんかう）が胸にのれば、歴々（れきれき）の後家のように、衣裳（いしやう）からこしもとからかごのり物（まで）」（浮世草子・野白内証鑑 1710 四・二二））。

(419) 〈覚悟・決心〉 [54, 62]

[54] むねを据（す）える

[62] むねを定（さだ）める／むねを極（き・きわ）める

(420) 〈記憶〉 [55]

[55] むねの帳面

(421) 〈度量・包容力〉 [58, 59]

[58] きょう-りょう [..リャウ] 【胸量】

[59] むねが狭（せま）い

(422) 〈人格〉 [65]

[65] むねがいい／むねが弱（よわ）い／むねが悪（わる・わる・わり）い／むねわる-もの【胸悪者】

上に挙げた近世初出の表現は、〈胸〉の理解様式としても多様性を極めている。(417)のように、〈胸〉を〈容器〉とみなし、そこに納められた〈内心・本心〉(e.g.「胸に納める」)や〈考え・意図〉(e.g.「胸に一物」)を表す表現のほか、外から対象を取り込むことを通じて〈理解・納得〉を表す(418)の表現(「胸に落ちる」)、容積を通じて〈度量・包容力〉を表す(421)の表現(e.g.「胸が狭い」)が加わる。(420)の「胸の帳面」は、〈胸〉を記録物と見做し、そこに書き留められた情報を記憶内容とする表現であり、容器としての〈胸〉と内容物としての心的内容の対応に類似している。

4. 4. 1 節において、容器としての〈胸〉の理解には、〈特定の精神作用を納める胸〉〈物事を受け容れる胸〉という二種類の下位メタファーが存在することを述べたが、(418)(420)(421)からわかるように、近世にて後者のメタファー〈物事を受け容れる胸〉が加わっている。また、第3章において、〈腹〉では〈特定の精神作用を納める腹〉〈物事を受け容れる腹〉のほかに〈人格を納める腹〉(e.g.「腹黒い」「腹汚い」)という下位メタファーが存在することを指摘したが、現代日本語の〈胸〉ではそのような人格に関係する表現は得られていなかった。一方で、中古で初出の「胸汚し」という表現を観察した通り、〈人格を納める胸〉という下位メタファーは歴史的には存在したと考えられる。このことは、(422)のように「いい」「悪い」のような評価を示す形容詞と結びつくことで、何らかの人格を表していた〈胸〉表現が歴史的に存在したことからも示唆される(「胸が悪い」は第3章で現代日本語表現としても観察したが、〈嫌悪・怒り〉の意味としてのみである)。

以下、その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なものをまとめて挙げておく。

(423) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈内心・本心〉ぐにんの眼（まなこ）は面（おもて）にあり智者（ちしゃ）の眼（まなこ）は胸（むね）にあり

※「愚者は人や物の表面しか見ないが、智者はその心中までも洞察する。」（『日国』）の意。ここでの「胸」は精神の座を指す。

〈勇氣・胆力〉ど-きょう【度胸】／どきょうが据（す）わる／どきょうを定（さだ）める／どきょうを据（す）える

※『日国』の補注では、「近世末期の「随筆・皇都午睡-三・中」に、上方の「肝の太ひ」を、江戸では「度胸がよい」という、とあるように、江戸言葉で、「胴居」「動居」などとも書かれ、表記は固定していなかった。」とある。この場合の「胸」の使用は、音韻上の動機によるところが大きいのか、それとも(419)に挙げた「胸を据える」のように精神の安定を司る〈胸〉の理解に基づくのか定かではない。

むな-ごろし【胸殺】

※ここでの「殺す」は「押し殺す」すなわち〈抑圧する〉の意味で、全体として〈胸の中で抑圧する〉の意か。

〈嫌悪〉むね-くさ・い【胸臭】

※同義表現として「胸糞が悪い」があるが、この読みである「むねくそがわるい」という音から派生したか。

4.4.7 近代・現代

最後に、近代以降の初出表現を(424)–(436)に挙げる。今回得た資料のうち、現代での初出に当てはまる表現は「胸が弾む」のみであった。近代での展開に目を向けると、新たに加わった精神作用は無く、全て近世までに確認されたものである。

(424) 〈感情の抑制〉〈感情の解消〉[39]

[39] むねに手（て）を当（あ）てる／むねを＝撫（な）でおろす [=撫（な）でる]

(425) 〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉[3, 5, 9, 10]

[3] むねを囁（か）む

[5] むねを潰（つぶ）す

[9] むねが轟（とどろ）く

[10] むな-さやぎ【胸騒】／むな-ゆらぎ【胸揺】

(426) 〈喜び・期待〉[20, 21, 22]

[20] むねが轟（とどろ）く

[21] むね-おどり [..をどり]【胸躍】／むねをときめかす／むねを弾（はず）ませる

[22] むねを脹（ふく）らます

(427) 〈驚き〉[24]

[24] むねを打（う）つ

(428) 〈感銘〉[25, 26]

[25] むねを刺（さ）す

[26] むねを打（う）つ

(429) 〈嫌悪・怒り〉[30]

[30] むねわる-さ【胸悪—】

(430) 〈感情の高ぶり〉[36, 38]

[36] むねが一杯（いっぱい）になる／むね-いっぱい【胸一杯】

[38] むねがつまる

(431) 〈感情の解消〉[41]

[41] むねが収（おさ）まる

(432) 〈内心・本心・考え・意図〉[47, 49, 50, 51, 52, 61]

[47] きょう-かん【胸間】／むな-そこ【胸底】／きょう-てい【胸底】

[49] むねに浮（う）かぶ

[50] むねさんずんに＝畳（たた）む [=納（おさ）める]

[51] きょうおくを開（ひら）く／きょうきんを開（ひら）く／むねを明（あ）かす／むねを割（わ）る

[52] むねに聞（き）く

[61] きょう-さん【胸算】／むな-かん【胸勘】／むな-かんじょう [..カンヂャウ]【胸勘定】

(433) 〈覚悟・決心〉[62]

[62] むねが決（き）まる

(434) 〈記憶〉[56, 57]

[56] むねに刻（きざ）む／むねに彫（ほ）り付（つ）ける

[57] むねに浮（う）かぶ

(435) 〈度量・包容力〉[59]

[59] むねが広（ひろ）い

(436) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈胆力・勇気〉くそ-どきょう【糞度胸】／どきょう-くらべ【度胸比】／どきょう-だめし【度胸試】／どきょう-づけ【度胸付】／どきょう-もの【度胸者】／わる-どきょう【悪度胸】

(437)(438) に〈記憶の想起〉〈記憶〉に関する表現の用例を挙げておく。(437) はツルゲーネフ原作小説の二葉亭四迷による翻訳であるが、「胸に浮かぶ」は“вспомнил”（「思い出した」）の訳語として充てられたものである。²⁴⁹

(437) 此身ハ壁によせかけた哀れ気な書像といふ義　といふ西班牙（いすぱにや）の奇異譚（ロマンス）の二句が胸に浮んだ〔主人公が一目惚れした婦人に仮面舞踏会で偶然再会する場面〕（めぐりあひ　1888-89 〈二葉亭四迷（訳）〉二）

(438) 此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろ／＼こぼれて一と言もなし〔寄宿先の娘に恋をした主人公が、地元での縁談のために帰郷することになり、別れを告げる場面〕（ゆく雲　1895 〈樋口一葉〉下）

4.4.8 観察のまとめ

本節での調査結果を集約し、慣用的意味（精神作用）に基づいて〈胸〉表現を分類したものを表 35 として示す。〈腹〉の場合と同様に、慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語については、分類番号に「*」をつけ、カテゴリー名ではなく表現例を直接示した。また、第 3 章での分析において、近代以降の用例が見つからないという理由で観察対象外としたものには「現代」に「(・・・)」と記した。本章で新しく調査対象とした漢語についても、『日国』での近代以降の用例の有無に基づいて判断している。また、例として挙げたものは、全て各カテゴリーの初出時代から得られた表現である。

〈胸〉は既に上代から〈悲しみ・辛さ〉（「胸痛し」）、〈不安〉（「胸安からず」）、〈苦悶・恋慕〉（「胸を熱み」）といった感情との対応が確認される。その後、中古では新たに〈恐怖〉（「胸を冷やす」）、〈喜び・期待〉（「胸が騒ぐ」）、〈驚き〉（「胸が潰れる」）や、〈感情の高ぶり〉（「胸より余る」）、〈感情

²⁴⁹ Тургенев, И.С. (1980). Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах. Т. 4. стр. 240. Наука: Москва.

の平静〉(「胸の隙」), 〈感情の解消〉(「胸開く」)といった感情一般の起伏との対応, 中世には〈感銘〉(「胸に当たる」)との対応, 近世では〈嫌悪・怒り〉(「胸が悪い」), 〈感情の抑制〉(「胸を摩る」)との対応を得る。〈胸〉と感情との対応は既に中古の段階で広範囲に及んでおり, 近世までには全てが出揃っていたことが分かる。感情(情緒的精神)以外の精神作用との対応に目を向けると, 中古の段階で〈内心・本心〉(「胸の内」), 〈性格〉(「胸汚し」)を表す表現が一部観察され, その後〈考え・意図〉(「胸に持つ」)に関する表現が中世で, 〈理解・納得〉(「胸に落ちる」), 〈覚悟・決心〉(「胸を据える」), 〈記憶〉(「胸の帳面」), 〈度量・包容力〉(「胸が狭い」)に関する表現が近世で加わる(ただし, 中世の(403)「秀歌を胸にお(を)きて」の例を〈記憶〉と解釈することもできるだろう)。全体として感情より一歩遅れるが, 対応する精神作用としては近代以降に新たに加わるものではなく, 〈胸〉と精神との対応は近世には成熟を迎えたと考えてよいだろう。

なお, 〈胸〉と結びつく精神作用と〈腹〉と結びつく精神作用の間には近世の時点でかなり重なる部分が見られる。長谷川ほか(2005)でも指摘があるように, 近世の〈腹〉表現と〈胸〉表現は互換性のあるものが多い。今回の観察に基づき, 意味の重複・表現レベルでの互換性が見られるものをいくつか挙げると, 「{腹／胸}が煮える」「{腹／胸}の虫」(〈怒り〉), 「{腹／胸}に一物」(〈考え・意図〉), 「{腹／胸}に落ちる」(〈理解・納得〉), 「{腹／胸}を据える」(〈覚悟・決心〉)のように複数の表現が該当する。一方で中世以前に目を向けると, こうした共通性は稀であり, 中古における「{腹／胸}汚し(汚い)」が該当する程度である。すなわち, 中世までの〈腹〉と〈胸〉はいずれも情緒的精神との結びつきが中心であるものの, それぞれ異なる感情と結びついており, 〈腹〉は〈怒り〉〈不満〉〈可笑しさ〉と, 〈胸〉は〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉〈苦悶・恋慕〉〈恐怖〉〈喜び・期待〉〈驚き〉〈感銘〉と結びつく。〈腹〉〈胸〉の両方と結びつき, 表現の明らかな互換性が見られる感情は, 通時的に見ても〈怒り〉が該当する程度であり(e.g. 「{腹／胸}にすえかねる」), 互いに相補的な役割を果たしていると言えるだろう。さらに言えば, 第3章での観察の限りでは, [31]の「胸に障る」, [33]–[35]の「胸が燃える」「胸の虫」「胸に据えかねる」ような〈胸〉の描写が〈怒り〉とは対応していなかったように, 近代から現代にかけて対応する感情の分化がさらに進んできたものと考えられる。

表 35 精神作用の座としての〈胸〉の史的展開（精神作用固定）

	上代	中古	中世	近世	近代	現代	
精神作用	分類	字義的意味（慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の場合は表現例*）					例
悲しみ・辛さ・不安	1	胸が痛い					胸痛し
	2	胸が苦しい					胸苦し
	3	胸を傷つける					胸切り焼く
	4	胸が裂ける					胸裂く
	5	胸が圧迫される					胸が潰れる
	6	胸が {塞がる／つまる}					胸塞がる
	7	胸に内容物をせき止める				(・・・)	胸に塞く
	8	胸が板のように硬直する				(・・・)	胸が板ようになる
	9	胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する					胸走る
	10	胸が動揺する					胸安からず
	11	胸に衝撃を与える					胸をつく
	12	胸の中の視界を遮る天候					胸の霧
苦悶・恋慕	13	胸が熱い				(・・・)	胸を熱み
	14	胸が {焦がれる／燃える}					胸を焦がす
	15	胸の中の {火／煙}					胸の火
	16	胸が病む				(・・・)	胸病む
	17	胸の閑路				(・・・)	胸の閑
	18	胸を削る					胸に鑢を掛く
恐怖	19	胸の温度が下がる					胸を冷やす
喜び・期待	20	胸が（大きな音を立てて）激しく鼓動する					胸を轟かす
	21	胸が動揺する					胸が騒ぐ
	22	胸の内容物が増え、胸が膨張する					胸を脹らます
驚き	23	胸が圧迫される					胸が潰れる
	24	胸に衝撃を与える					胸をつく
	63*	と胸				(・・・)	と胸
感銘	25	胸を傷つける					胸を刺す
	26	胸に衝撃を与える					胸を打つ
	27	胸が刺激を強く感じる					胸に応える
	28	物体が胸に接触する					胸に当たる
	29	刺激に胸が反響する					胸に響く
嫌悪・怒り	30	胸が不快だ					胸が悪い
	31	胸を害する				(・・・)	胸に障る
	32	胸の内容物が煮える					胸が煮える
	33	胸が燃える				(・・・)	胸が燃える
	34	胸の中の虫				(・・・)	胸の虫
	35	胸に内容物を {留めておけない／抑えつける}				(・・・)	胸に据えかねる
	64*	胸糞				(・・・)	胸（むね）糞
感情の高ぶり	36	胸に内容物が満ちる					胸に満つ
	37	内容物が胸に収まり切らない					胸より余る
	38	胸がつまる					胸がつまる
感情の抑制	39	胸を手で触る					胸を摩る
感情の平静	40	胸の隙間				(・・・)	胸の隙
感情の解消	41	胸の動揺が収まる					胸が収まる
	42	胸が開く				(・・・)	胸開く
	43	胸が空く					胸がすく
	44	胸の中の内容物の嵩が減る				(・・・)	胸が下がる
	45	胸の中の天候が解消し、視界を遮るものが消える					胸が霽れる
	46	胸を手で触る					胸を撫で下ろす

	上代	中古	中世	近世	近代	現代	
精神作用	分類	字義的意味（慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の場合は表現例*）					例
内心・本心・ 考え・意図	47		胸の内部				胸の内
	48		胸の堤防			(・・・)	胸岐（きょうひ）
	49				胸に内容物が浮上する		胸に浮かぶ
	50		胸に内容物 {がある／を留める}				胸に持つ
	51			胸 {を割る／の中を晒す}			胸を開く
	52				胸に尋ねる		胸に聞く
	61*		胸臆				胸臆（きょうおく）
	62*		寸胸				寸胸（すんきょう）
理解・納得	53			胸に内容物が入る			胸に落ちる
覚悟・決心	54			胸を安定させる		(・・・)	胸を据える
記憶	55			胸にある帳面		(・・・)	胸の帳面
	56				胸に銘刻する		胸に刻む
	57				胸に内容物が浮上する		胸に浮かぶ
度量・包容力	58			胸の容積		(・・・)	胸量（きょうりょう）
	59			胸が {広い／狭い}			胸が狭い
人格	60		胸の内容物が汚い			(・・・)	胸汚し
	65*			胸が ^い いい		(・・・)	胸が ^い いい

次に、〈胸〉表現の比喩的な成り立ちの変容を分析するために、慣用句を第 3 章の分析に基づいて並べたものを表 36 として示す。表 35 の分類との対応が分かるように、右列に番号を示した。

表 36 精神作用の座としての〈胸〉の史的展開（字義的意味固定）

		上代	中古	中世	近世	近代	現代			
字義的意味		精神作用					表35との対応	例		
L1	しぐさ	胸を手で触る			感情の抑制			39	胸を摩る	
					感情の解消			46	胸を撫で下ろす	
	痛み	胸が痛い	悲しみ・辛さ					1	胸痛し	
			不安							
	苦しさ (閉塞感)	胸が苦しい		悲しみ・辛さ					2	胸苦し
				不安						
	動悸	胸が(大きな音を立てて) 激しく鼓動する		不安					9	胸走る
						喜び・期待			20	胸を轟かす
	不快感	胸が不快だ			嫌悪・怒り				30	胸が悪い
	体温変化	胸が熱い	恋慕				(・・・)		13	胸を熱み
胸の温度が下がる			恐怖					19	胸を冷やす	
病	胸が病む	苦悶・恋慕				(・・・)		16	胸病む	
L2	動揺・鎮静	胸が動揺する	不安						10	胸安からず
				喜び・期待					21	胸が騒ぐ
		胸の動揺が収まる				感情の解消			41	胸が収まる
	衝撃	胸に衝撃を与える			不安				11	胸をつく
					驚き				24	胸をつく
						感銘			26	胸を打つ
	損傷	胸を傷つける	悲しみ・辛さ						3	胸切り焼く
					感銘				25	胸を刺す
		胸が裂ける	悲しみ・辛さ						4	胸裂く
			胸を削る			苦悶				18
硬化	胸が板のように硬直する			悲しみ・辛さ		(・・・)		8	胸が板のようになる	
圧迫	胸が圧迫される		悲しみ・辛さ					5	胸が潰れる	
			不安							
			驚き					23	胸が潰れる	
	閉塞・閉塞の 解消	胸が {塞がる／つまる}		悲しみ・辛さ					6	胸塞がる
				不安						
	胸が空く				感情の高ぶり			38	胸がつまる	
					感情の解消			43	胸がすく	

		上代	中古	中世	近世	近代	現代		
字義的意味		精神作用					表35との対応	例	
L3-C	内容物の増減・乱れ・制御	胸に内容物が満ちる		感情の高ぶり				36	胸に満つ
		内容物が胸に収まり切らない		感情の高ぶり				37	胸より余る
		胸が開く		感情の解消			(. . .)	42	胸開く
		胸の中の内容物の嵩が減る			感情の解消		(. . .)	44	胸が下がる
		胸の隙間		感情の平静			(. . .)	40	胸の隙
		胸の内容物が増え、胸が膨張する				喜び・期待		22	胸を脹らます
		胸の内容物が煮える			怒り			32	胸が煮える
		胸の中の虫			怒り		(. . .)	34	胸の虫
		胸の中の {火／煙}		苦悶・恋慕				15	胸の火
		胸の関路		苦悶・恋慕			(. . .)	17	胸の関
		胸に内容物をせき止める			悲しみ・辛さ		(. . .)	7	胸に塞く
		胸に内容物を {留めておけない／抑えつける}			怒り		(. . .)	35	胸に据えかねる
	空間の視界を遮る天候とその解消	胸の中の視界を遮る天候			不安			12	胸の霧
		胸の中の天候が解消し、視界を遮るものが消える				感情の解消		45	胸が霽れる
	反響	刺激に胸が反響する				感銘		29	胸に響く
	内容物の存在・保持	胸の内部		内心・本心				47	胸の内
		胸に内容物 {がある／を留める}			内心・本心・考え・意図			50	胸に持つ
	内容物の露呈	胸 {を割る／の中を晒す}				内心・本心		51	胸を開く
	対象の受容	胸に内容物が入る				理解・納得		53	胸に落ちる
	内容物の浮上	胸に内容物が浮上する					考え	49	胸に浮かぶ
							記憶	57	胸に浮かぶ
	銘刻・記録	胸に銘刻する					記憶	56	胸に刻む
		胸にある帳面				記憶	(. . .)	55	胸の帳面
	容器の規模	胸の容積				度量・包容力	(. . .)	58	胸量 (きょうりょう)
		胸が {広い／狭い}				度量・包容力		59	胸が狭い
	内容物の性質	胸の内容物が汚い		性格			(. . .)	60	胸汚し
L3-O	刺激と感知	物体が胸に接触する			感銘			28	胸に当たる
		胸が刺激を強く感じる				感銘		27	胸に応える
	障害	胸を害する				嫌悪・怒り	(. . .)	31	胸に障る
	燃焼	胸が {焦がれる／燃える}		苦悶・恋慕				14	胸を焦がす
					怒り	(. . .)	33	胸が燃える	
	安定	胸を安定させる				覚悟・決心	(. . .)	54	胸を据える
	問いかけ	胸に尋ねる				内心・本心・考え・意図		52	胸に聞く

〈胸〉の特徴として第一に注目すべきは、共起性基盤に基づく L1 や L2 の表現が早期から現れているという点である。感情経験に伴う生理的感覚・反応とみなされる身体経験 (L1) のうち, [1] の痛み (「胸痛し」), [2] の苦しさ (閉塞感) (「胸苦し」), [9] の動悸 (「胸走る」), [19] の体温変化 (「胸を冷やす」), [16] の病 (「胸病む」) に基づく表現は上代～中古の間に初出が観察され, その後近世に [30] の不快感 (「胸が悪い」), [39], [46] のしぐさに基づく表現 (「胸を摩る」「胸を撫で下ろす」) が追加される。これらの経験をメタファー化したと考えられる表現についても, その多くが早期に現れており, 動悸・動揺の [10] (「胸安からず」)・[21] (胸が騒ぐ)・[41] (「胸が収まる」), 衝撃の [11, 24] (「胸をつく」)・[26] (「胸を打つ」), 損傷に関する [3] (「胸切り焼く」)・[25] (「胸を刺す」)・[4] (「胸裂く」), [18] (胸に鑢を掛く), 硬化の [8] (「胸が板のようになる」), 圧迫の [5, 23] (「胸が潰れる」), 閉塞や閉塞の解消の [6] (「胸塞がる」)・[38] (「胸がつまる」)・[43] (「胸がすく」) のカテゴリーのうち, 衝撃, 硬化を除く全てが上代～中古の間に確認された。²⁵⁰ 4.3.9 節での〈腹〉の分析において, L1 や L2 に該当する表現の発生が比較的早いことを指摘したが, この傾向は〈胸〉でも認められるだろう。

L3 に目を向けると, 上代の表現は確認されない一方で, 中古では〈容器としての胸〉のメタファー (L3-C) に当てはまるカテゴリーが複数現れている。第 3 章での分析において, 〈容器としての胸〉のメタファーの下位分類として〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報 (記憶) は胸という容器に納められた内容物である〉〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉を提案した。一つ目の〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報 (記憶) は胸という容器に納められた内容物である〉については, 〈胸〉に内容物が一杯になったり, 収まりきらない様子を通じて〈感情の高ぶり〉を表す [36] (「胸に満つ」)・[37] (「胸より余る」), 〈胸〉が開く様子を通じて〈感情の解消〉を表す [42] (「胸開く」), 〈胸〉の中で燃える火を通じて〈苦悶・恋慕〉を表す [15] (「胸の火」), 〈胸〉のふさがりを関路 (関) に喩え, 〈苦悶・恋慕〉を表す [17] (「胸の関」), 〈胸〉の中身を通じて〈内心・本心〉を表す [47] (「胸の内」) のカテゴリーが中古より現れていることから判断するに, 当時から存在したと考えられるが, 内容物として収まる精神作用は後代の〈胸〉と比較して限定されていたと推定される。また, 二つ目の〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉, 三つ目の〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉の

²⁵⁰ 『角川古語大辞典』では, 本稿やその他の認知言語学的分析と同様に, 「胸」の精神義を身体経験と精神作用の連動の観点から解釈した記述が見られる。本稿での分析とは必ずしも一致しないが, L2 に分類されるようなメタファー表現を生理的感覚・反応の延長として説明しているので参照されたい。同様に, 近世の表現を観察した長谷川ほか (2005) においても, 「胸」表現の「身体義」「心理義」を分析するにあたり「胸がどきつく」などの鼓動に関する表現を体感的なものとして述べ, 「むな騒ぎ」のような表現を「身体の体感を即物的に述べたものとは言えないけれど, 体感と深く関わる表現であることも否定できない」(p. 81) と分析している。この区別は, 結果的に本稿での L1 と L2 の区別と概ね対応することになると考えられる。研究の枠組みは異なるにせよ, 身体経験を念頭に置いた従来の認知的言語学的分析と整合する説明が含まれているので, 注目に値する。

メタファーの存在を裏付ける表現は中世以前に得られず、近世以降にはじめて〈胸〉での対象の受容を通じて〈理解・納得〉を表す [53] (「胸に落ちる」)、〈胸〉への銘刻・記録を通じて〈記憶〉を表す [55] (「胸の帳面」)・[56] (「胸に刻む」)、〈胸〉の収容力を通じて〈度量・包容力〉を表す [58] (「胸量」)・[59] (「胸が狭い」) のようなカテゴリーの表現が観察される。さらに、〈胸〉の中身の汚さを通じて〈人格〉を表す [60] (「胸汚し」) は現代日本語表現の観察では得られなかったカテゴリーであり、〈人格を納める胸〉という理解様式が少なくとも中古の段階では存在したことが示唆される (cf. 〈人格を納める腹〉)。

〈具象物としての胸〉のメタファーに関しては、〈胸〉の燃焼を通じて〈苦悶・恋慕〉を表す [14] (「胸を焦がす」) のカテゴリーの存在から判断するに、中古に発生していたことが推察される。現代日本語表現の観察を通じて〈感銘は胸への衝撃である〉〈恋慕は胸という物体が燃焼することである〉〈自問は胸という他者に問いかけることである〉という具体レベルのメタファーを提案したが、上の [14] に加え、〈胸〉への物体の接触を通じて〈感銘〉を表す [28] に関する表現「胸に当たる」が中世に加わっている。一方、〈胸〉への問いかけを通じて〈自問〉を表す [52] の表現「胸に聞く」が近代に現れていることから判断するに、知的判断が可能な他人として〈胸〉を擬人化するメタファー (〈自問は胸という他者に問いかけることである〉) は、情動経験に応じて反応を示すという〈胸〉の理解様式よりも遅れて成立したと考えられる。なお、L3-O では現代日本語の観察の際から新たに〈怒り〉や〈覚悟・決心〉に関するカテゴリーも加わっている。〈腹〉を安定させることを通じて〈覚悟・決心〉を表す [54] (「胸を据える」) のようなカテゴリーから判断するに、少なくとも近世頃には〈精神の安定は腹の安定である〉に似た〈胸〉のメタファーが存在したと考えられる。

L3 で結びつく精神作用の展開に目を向けると、〈腹〉と同様に、情緒的精神から知的精神という意味拡張の方向性が指摘できるだろう。上述の通り、〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉のメタファーに関係する表現は、全て近世以降の初出であるが、これらによって表現される精神作用〈理解・納得〉〈記憶〉〈度量・包容力〉は全て知的精神寄りである点に注目されたい。²⁵¹ また、〈特定の精神作用を納める胸〉のメタファーは中古から存在したと考えられるが、(391) の「燃ゆる思ひの 胸にたえねば」の用例で見たように、当初〈胸〉に納められていたのは基本的に情緒的な要素を伴う精神作用であったと考えられる。ただし、知的精神作用を納めるという〈胸〉の理解様式の発生は〈腹〉と同じか、あるいはそれよりも若干早かったと推定され、実際に (402) で見た「胸の中に匂がおほく湧きて」のような一部の用例は既に

²⁵¹ 〈度量・包容力〉については人柄・人間性に関する精神の側面であり、知的精神寄りとは言えないかもしれないが、少なくとも何かの物事 (誘因) をきっかけに生じるという感情の一面は持ち合わせていない。

中世で得られている。

以上の考察に基づき、精神作用の座としての〈胸〉の理解の史的展開を次のように特徴付ける。

- 〈胸〉と情緒的精神との対応は上代まで遡ることができ、中古の段階で既に〈悲しみ・辛さ〉〈不安〉〈苦悶・恋慕〉〈喜び・期待〉など広範囲の感情と結びついていた。情緒的精神以外の精神作用との対応も中古の段階で一部確認されるが、全体的にそれらとの結びつきを得るのは感情よりも遅かったと考えられ、〈理解・納得〉〈覚悟・決心〉〈記憶〉などの精神作用との対応が現れるのは近世である。ここで〈胸〉と精神との対応は出揃い、成熟を迎えたと考えられる。
- L1 や L2 に関係する共起性基盤（時間的隣接性）としての身体経験は、上代・中古から比喩として利用されており、これが早期からの感情との対応を実現している。
- L3 の〈容器としての胸〉〈具象物としての胸〉のメタファーはいずれも中古より一貫して存在することから、〈胸〉と〈精神〉の概念レベルでの結びつきはすでに中古までに発生していたと考えられる。しかし、具体レベルのメタファーの発生時期には差が見られ、〈度量・包容力は胸という容器の容積である〉〈理解・納得／記憶は胸という容器に対象を取り込むことである〉〈自問は胸という他者に問いかけることである〉の理解様式は遅くに発生したと考えられる。〈感情／内心・本心／考え・意図／知識・情報（記憶）は胸という容器に納められた内容物である〉のメタファーについても、それ自体中古より存在したが、〈胸〉の中に収まる精神作用は後代よりも限定されており、時代の経過とともに拡大していったと考えられる。

4.5 〈頭〉表現の史的展開

4.5.1 分類方法

最後に、〈頭〉表現の意味拡張の史的展開を観察・分析していく。まず、3.6.4 節でまとめた〈頭〉表現の分類を表 37 に再構成し、その特徴を振り返っておきたい。これまでと同様に、下線は本章での調査で新たに確認された対応である。

情緒的精神と知的精神の二大区分のうち、〈頭〉と情緒的精神の結びつきを窺わせるのは [1]–[4] に示す〈怒り〉（「頭へ湯気を立てる」「頭に来る」）あるいは〈情緒的な興奮・抑制〉（「かしらへ血が上がる」「頭を冷やす」）に関する表現である。また、〈思考（苦悶）〉とした [5]–[10] のカテゴリーは、知的精神に情緒的精神が混ざったものであり、〈過度に考えて苦悶する〉様子を描く（e.g. 「頭が痛い」「頭を砕く」）。[1]–[4] が体温や血流の変化といった身体経験に動機づけられていると考えられるのに対し、

[5]–[8]についても頭痛や頭重感といった身体経験との関連が窺える。[3]を除くこれら [1]–[8] のカテゴリーは、メトニミー表現あるいはメトニミーとメタファーが合成した表現として感覚・運動レベル (L1)、スキーマレベル I (L2) に分類される。

[11] 以降の表現は、より純粋な知的精神と結びつく〈頭〉の理解であり、いずれもスキーマレベル II～概念レベル (L3) に分類される。これらの表現は〈頭〉が知的精神を司る部位であるという理解を前提に、〈思考 (行為)〉 (「頭を使う」)、〈考え〉 (「頭に浮かぶ」)、〈思考力〉 (「頭の回転が速い」)、〈思考方法〉 (「堅かしら」)、〈記憶〉 (「頭に入れる」) という細分化された精神義を実現している。また、比喩の類型に注目すると〈腹〉〈胸〉と同様に〈容器としての頭〉のメタファー (L3-C)、〈具象物としての頭〉のメタファー (L3-O) の両方が確認されるが、その適用方法については大きく異なっている。〈容器〉としての〈頭〉に収容されるのは〈考え〉や〈記憶〉 (〈知識・情報〉) であり (e.g. 「頭に入れる」「頭でっかち」)、感情は原則として〈頭〉には位置しない (例外が「頭に来る」である)。一方、〈具象物〉としての〈頭〉は〈思考〉のための〈道具〉とみなされ (有蘭, 2007, 2009, 2021), [13], [20] の「頭が回る」「頭の回転が早い」のように場合によっては〈機械〉のような回転する物体に喩えられる。このように、具象物としての〈頭〉の働きで注目されるのは〈思考力〉としての作動速度である。また、[21] の「堅かしら」ように〈頭〉の物質的な固さに注目する比喩は〈腹〉と共通するが (e.g. 「腹が強い」「腹を固める」)、〈頭〉では〈思考方法〉へと適用され、どちらかといえば否定的な意味合いを持つ表現が生じている。

表 37 〈頭〉の慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語の類型 (慣用的意味固定)

*L1: 感覚・運動レベル L2: スキーマレベル I L3: スキーマレベル II～概念レベル (L3-C: 〈容器〉/L3-O: 〈具象物〉)

精神作用	分類	*レベル	字義の意味	慣用的意味 (精神義)	表現例
感情の高ぶり	1	L1	血が頭に集中 (上昇) する	感情が高ぶる	かしらへ血が上がる
怒り	2	L2	頭に湯気が立つ	怒る	頭へ湯気を立てる
	3	L3-C	頭に内容物が到達する	怒る	頭に来る
興奮の抑制	4	L1	頭を冷却する	興奮を抑制する	頭を冷やす
思考 (苦悶)	5	L1	頭痛がする, <u>頭痛</u>	苦心して考え悩む, <u>悩み</u>	頭が痛い, 頭痛
	6	L1	<u>頭痛</u> のもと	<u>悩みの原因</u>	かしら種
	7	L1	頭が重く感じる	苦心して考え悩む	頭が重い
	8	L2	頭を破壊する	苦心して考え悩む	頭を砕く, 頭を割る
	9	L3-C	頭を搾る	苦心して考え悩む	頭を搾る
	10	L3-O	頭を煩わす	苦心して考え悩む	頭を悩ます
思考	11	L3-O	頭を使う	思考する	頭を使う
	12	L3-O	頭 {が働く/を働かす}	思考が働く/思考する	頭が働く/頭を働かす
	13	L3-O	頭が回転する	思考が働く	頭が回る
	14	L3-O	頭を {(水に) 浸す/没する}	一つのことに集中してよく考える	頭を浸す, 没頭
	15	L3-O	頭の休憩	思考の中断	頭休め
考え	16	L3-C	頭に内容物が浮上する	考えを思いつく	頭に浮かぶ
	17	L3-C	生物・物体が頭を通過する	考えを思いつく	頭を過る

精神作用	分類	*レベル	字義の意味	慣用的意味（精神義）	表現例
思考力	18	L3-C	頭に内容物が存在する	思考力（智慧）がある	頭に智慧がある
	19	L3-C	頭が（相対的に）大きい	思考がよく働くが実践を伴わない	頭でっかち
	20	L3-O	頭の作動（回転）が {速い／遅い}	思考力が {高い／低い}	頭の回転が早い，頭が鈍い
思考方法	21	L3-O	頭が固い	頑固で思考の融通がきかない	堅かしら，石頭
記憶	22	L3-C	頭の内部	記憶の座	頭中（に秘蔵する学問）
	23	L3-C	頭に内容物が {到達する／浮上する}	記憶が想起される	頭に来る，頭に浮かぶ
	24	L3-C	生物・物体が頭を通過する	記憶が想起される	頭を過る
	25	L3-C	頭に内容物が付着する	物事を忘れられなくなる	頭に付く
	26	L3-C	頭に内容物 {が入る／を入れる}	記憶する	頭に入る，頭に入れる

慣用的連結句，構成要素単位での意味拡張を経た合成語でも「頭（脳）」は知的精神作用と結びつく。

表 38 〈頭〉の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の類型

分類	「頭」および類語が表す意味	表現例
27	思考（・思考力）	頭腦的
28	思考力	頭がいい，へぼ頭
29	思考方法	頭が古い

4.5.2 〈頭〉と精神作用が間接的に関係する表現

〈腹〉表現，〈胸〉表現の観察時と同様に，精神義を持つものの〈頭〉と精神作用の直接的な関係を見出し難い表現をまとめて観察していく。本項で挙げる表現は，分析対象には含めない。

3.6.1 節で観察したように，〈頭〉は心的経験に伴い無意識的あるいは意識的に生じるしぐさの参照部位として用いられることが多い。(439)はそのような表現を集めたものである。

(439) 中古～：かしらを搔（か）く／かしらを傾（かたぶ・かたむ）ける／中世～：あたまを叩（たた）く／かしら-かき【頭搔】／てん-とう【点頭】／近世～：あたまを搔（か）く／きのどくの頭（あたま）を搔（か）く／ずを傾（かたぶ）ける／近代～：あたまを抱（かか）える／あたまを拵（ひね）る／あたまを丸（まる）める／こうべを傾（かたぶ・かたむ）く／そう-とう【サウ..】【搔頭】

これらは〈頭〉に関する語を含むが，動悸をなだめるために行う「胸を撫でる」のしぐさのように，精神作用と〈頭〉との間に何らかの固有の経験的相関が存在するわけではない。このことは，(440)に示す姿勢に関する表現についても同様である。姿勢の表現では，身体的最上部に位置する〈頭〉を参

照点とすることで、お辞儀をするなどして身体全体の姿勢を低く保ち、相手への敬意・服従を示すこと、あるいは姿勢を高く保って横柄な態度を取ることを表す。

- (440) 中古～：こうべを傾（かたぶ・かたむ）く²⁵²／てい-とう【低頭】／中世～：ていとう-もんじん
【低頭問訊】／近世～：あたまが上（あ）がる／かつごうの頭（こうべ）を傾（かたむ）ける
／こうべ-くだし [かうべ..]【首下・頭下】／ずが高（たか）い／ていとう-へいしん【低頭平身】
／ず-たか [ヅ..]【頭高】／近代～：あたまが下（さ）がる／あたまを下（さ）げる／へいしん-ていとう【平身低頭】／近代～：あたまを垂（た）れる／ずが上（あ）がらぬ

また、次の表現も身体動作を表すために〈頭〉を参照したものである。

- (441) 中世～：こうべを回（めぐ）らす／近世～：てん-とう【転頭・顛頭】

『日国』において「こうべを回（めぐ）らす」の一つ目の語釈に「頭をうしろの方に向ける。うしろを、ふりかえって見る。ふりむく。」とあるように、この表現には〈後ろを振り返って見る〉という原義がある。これに時空間メタファー (e.g. Lakoff, 1993, pp. 216–218; Lakoff & Johnson, 1980/2003, Ch. 9; 1999, Ch. 10) が重なることで、〈後ろに存在する過去を振り返って見る〉という解釈が成立したと考えられる。

姿勢の表現がそうであったように、身体之最上部に位置する〈頭〉は、〈物事の先端〉として比喩的に用いられることもある。

- (442) 中世～：しん-とう【心頭】／ねん-とう【念頭】／近世～：しんとうに落（お）とす／近代～：ねんとうに＝置（お）く [=掛（か）ける]

- (443) 近代～：あたまを上（あ）げる／あたまを＝擡（もた）げる [=持（も）ち上（あ）げる]

(442)の「心頭」や「念頭」という語はいずれも漢籍からの出典が確認される表現であるが、「頭」は〈(心の) 先〉を表すと考えられる。同様に、3. 6. 1 節でも分析した(443)の表現では〈考え〉を〈人体〉として捉えることで、〈身体之最上部に位置する頭を起こす・持ち上げる〉という視覚的イメージから〈考えが目立つようになる〉という意味が生じたと考えられる。これらはいずれも、〈頭〉が身体之最上部に位置しており、視認性の観点から特に目立つ身体部位として理解されていることに起因するであろう。精神作用に関する話からは外れるが、〈頭〉は〈身体〉を指すためのメトニミーの参照点

²⁵² 「こうべを傾く」ははじめ〈頭を下げてひれ伏す〉の意味から始まり、その後近代に〈頭部を横にひねる〉の意味に変化したようである。

として選択される認知的際立ちを有していると考えられる。

最後に、3. 6. 1 節でシネクドキーとして分析した表現を挙げておく。繰り返しになるが、この表現も〈頭〉が身体の最上部に位置するという知識から、〈頭から水を浴びると全身に水がかかる〉という推論が働くことで成立している。

(444) 近代～：あたまから水（みず）を＝浴（あ）びたよう [=打（う）ちかけられたよう]

4. 5. 3 中世以前

中世までに初出が確認される〈頭〉の表現は、もっぱら (439) や (440) で見たようなしぐさや姿勢を参照したメトニミー表現である。それらは〈頭〉を指す語を含むが、〈頭〉が精神の座として理解されていたことを裏付けるものとは言い難い。少なくとも中世末の時点で精神の座としての〈頭〉の理解が定着していなかったことは、『日葡辞書』(1603–1604) での「あたま」「かしら」「こうべ」「ず」の見出しに、単に身体部位としての語釈が与えられているに過ぎないことから示唆される（対する「はら」「むね」には精神に関する語釈が見られる）。²⁵³ 今回の調査から知り得る限り、中世以前の〈頭〉表現に明確な精神義が観察されるのは下に挙げる中世末期のキリシタン資料からの二例のみである。

(445) xoxen cayōno itazzuramonouo xabafufagueni iqete voite, caxirano itai cotouo corayō yoriuato vomoi （「所詮かやうの徒者を娑婆塞げに生けておいて、頭の痛い事を堪ようよりは」と思い）[性格のねじ曲がった蛇のことを許せない蟹が、蛇を生かしておいて思い悩むよりも、殺してしまった方が良くいと決断する場面]（天草版伊曾保物語 1593 蟹と、蛇の事）

(446) gofenno votogaini aru figueno cazu fodo, atama ni chiyega aru naraba, yenriomo nō ygauano nacayeua fairumai zoto yūte azaqetta （御辺の頤にある鬚の数程、頭に智恵があるならば、遠慮もなう井の中へは入るまいぞ」と言うて嘲った）[狐と野牛が井戸の中から出られなくなり、狐だけが野牛を踏み台にして脱出した。狐が野牛を助けることなく、嘲る場面]（天草版伊曾保物語 1593 狐と、野牛の事）²⁵⁴

²⁵³ ただし、精神作用からやや外れるが、〈拒否〉のためのしぐさ表現「頭を振る」が表現例に含まれている。また、『日国』の「ず（頭）」では、『日葡辞書』の“Zzu”の見出しにある「Zzuno（ツノ）ヌケタ ヒト」という表現例を引いて「脳の働き」という語釈を与えているが、実際に原文を確認すると“Homem descabeçado”とあり、これは直訳すると「頭部のない人」である。字義的に解釈するのであれば、頭部を切り取られた状態の身体を指していると考えられ、原文が精神義を意図して書かれたかは定かではない。

²⁵⁴ 『天草版伊曾保物語』(ESOPONO FABVLAS)の原典本は現時点では特定されておらず、(446)での「頭」への言及が原典にも見られたのか、それとも日本語口語文への翻訳の際に加えられたのかは確認し得ない。『天草版伊曾保物語』は古活字本『伊曾保物語』とともにドイツのハインリヒ・シュタインヘーベル (Heinrich Steinhöwel) によって編纂されたイ

このほかに、辞書見出しとしては登録されていないものの、内的感覚としての頭痛を表すために〈頭〉を参照した事例は、既に中古から観察されることから (e.g. 「げにいとかうばしき香 (か) の満ちて頭 (かしら) 痛きまでありつれば」(源氏物語 1001-1014 頃 夕霧)), (445) のようなメトニミー的転用の素地は当時から存在したと考えられる。実際、(447) に挙げる「かしら痛し」の用例は、体感としての頭痛をそのまま報告していると考えられるが、「心憂」という心情が直前で述べられていることから分かるように、感情経験が伴っている。(445) のように表現が単独で精神作用を表す訳ではないが、メトニミー表現と捉えるに近い例であるといえよう。

(447) いであな心憂 (こころう)。これ仰せられよ。あな、頭 (かしら) いたや。いかでとく聞きはべらむ [藤三位が見覚えのない立文を受け取り、誰のものかと疑っていたところ、一条天皇と定子の仕業であったことを知り、当惑し問い詰める場面] (枕草子 10C 終 一三二・円融院の御果ての年)

この他に、表現の成り立ちが不明瞭ではあるが、精神義を持つ表現として (448) が得られた。

(448) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈自惚れ〉あたまへ上 (あ) がる

※ 〈(自らの優位を感じて) 驕り高ぶる、つけあがる〉ことを表す。意味・形式ともに (440) の姿勢表現「頭が上がる」に類似するが、へ格が用いられており、文字通り解釈すると頭へと上がる事物が隠れていることになる。もしこの事物が〈自信〉などの心的内容物であり、それが〈頭〉へ上るという認識に基づくのであれば、ここで扱われるべき表現に含まれる。

〈支離滅裂 (思考力)〉あたま (が) 合 (あ) わず

※ 「ある人の言動が、その時時で違っていて首尾一貫しない、支離滅裂である。」(『時代別国語大辞典 室町時代編』)。『角川古語大辞典』には「数が合わない。適合しない。釣り合わない。数を数えることを「頭を数へて箕を以って米を斂めて取るぞ (漢書列伝抄・一)」のように言う

ソップ集 (1480 頃) やそのスペイン語訳版との関係が指摘されているが、それを直接底本としたのではなく、その間に手書き稿本の原典となる伊曾保物語が挟まり (現在までに発見はされていない)、そこからローマ字口語体本 (天草版) と国字本 (古活字版) が生じたと考えられている (伊藤, 2010; 小堀, 2001, 第2部1)。著者としては、「頤」(下顎) の「鬚の数」と「智恵 (の量)」を対比するにあたり、「頭」という別の身体部位を持ち出すことは修辭的にも意味を持つことから、原典に同様の記述が存在したとしても不思議ではないと考えているが、『天草版伊曾保物語』の本寓話の原典に最も近いと考えられているラテン語版 (リヌッチョ・ダ・カスティオーネ (Rinuccio da Castiglione) によるもので、シュタインヘーベル版に収録) では、鬚への言及はある一方で、頭については述べられていない。一方で、たとえば系統を同じくすると考えられている 1692 年の英語版 (ロジャー・レストレンジ (Roger L'Estrange) によるもの) を見ると、対応箇所において “If you had but half so much Brains as you have Beard,” とある (いずれも伊藤 (2010) を参照。左の引用は L'Estrange (1692, p. 80) より)。

ことに基づく。」とある。〈頭〉がメトニミーによって〈人〉へと拡張し、〈(人) 数を数えても合わない〉ことを「頭合わず」と表現するようになった後、さらに〈数が合わないこと〉から〈支離滅裂・守備一貫しない〉という意味へと転じたか。

4.5.4 近世

近世の初出として得られた表現は、感情（〈感情の高ぶり〉〈怒り〉）に関する (449)(450)、〈思考（苦悶）〉に関する (451)、〈思考方法〉に関する (452) である。

(449) 〈感情の高ぶり〉 [1]

[1] あたまに血（ち）が多（おお）い／かしらへ血（ち）が上（あ）がる

(450) 〈怒り〉 [2]

[2] あたまへ湯気（ゆげ）を立（た）てる

(451) 〈思考（苦悶）〉 [5, 6, 7, 8]

[5] ず-つう [ヅ..] 【頭痛】／ずつう-はちまき [ツツウ..] 【頭痛鉢巻】／ずつう-はっぴゃく [ツツウ..] 【頭痛八百】／となりの疝気（せんき）を頭痛（ずつう）に病（や）む／ひとの疝気（せんき）を頭痛（ずつう）に病（や）む

[6] かしら-ぐさ 【頭種】

[7] かしらが重（おも）い

[8] あたまを 砕（くだ）く／あたまを割（わ）らす／あたまを割（わ）る／きのどくの頭（あたま）を割（わ）る／こうべを＝割（わ）る [=割（わ）らす]

(452) 〈思考方法〉 [21]

[21] かた-かしら 【堅頭・固頭】²⁵⁵

感情に関する (449) のうち、「頭へ湯気を立てる」はメタファー表現であるが、3.6.2 節で述べたように、〈怒り〉に伴う生理的変化を基盤としている。また、(451) の〈思考（苦悶）〉に関する表現も、頭痛や倦怠感を参照したメトニミー表現のみならず、頭痛の感覚を〈頭〉の損傷に例えたメタファー表現が含まれる。(453) のように思い悩む様子を描くのが特徴であり、より純粋な〈思考〉を表す「頭を使う」などの表現の出現は次に見る近代が初めてである。

²⁵⁵ 「堅 [固] かしら」の『日国』の語釈「きまじめで頑固なこと。また、そのさま。」は必ずしも〈思考〉に関するものとは言えないため、後藤 (2023) では〈性向〉としていたが本稿では第3章で扱った「頭が固い」「頭が柔らかい」などの表現の存在を考慮し、〈思考方法〉とした。

(453) 勿体（もったい）ない事斗（ことばかり）」と、走早（あしばや）に帰（かへ）られぬ。主（あるじ）気の毒（どく）の頭（あたま）を割（わ）って思案（しあん）する中（うち）に「遊女が梅毒を患ったかのように偽り、身請けを申し出た大臣（大尽客）を諦めさせる。それを見た店の主人がどうしたものかと思ひ悩む場面」〔浮世草子・傾城禁短気 1711 三・三〕

近世についても、表現の成り立ちが不明瞭ではあるが精神義を持つ表現が得られたので暫定的な解釈ともに挙げておく。

(454) その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの

〈高慢〉〈気質（無鉄砲）〉あたま-がち【頭勝】／かしら-がち【頭勝】

※「頭勝ち」「かしら勝ち」はもともと〈頭の大きいこと〉を表す。〈高慢〉の意味は、〈頭が大きく目立つ〉ことが「頭が高い」などと同様に横柄に見えることと解釈されることで生じたか。また、〈気質（無鉄砲）〉の意味での、「頭」は〈初め〉のことを指し、そこから〈初めだけ勢いづいていること〉を表すようになったか。なお、『俚言集覧 上巻』には「此はさしてもなき人の初対面より倨傲にかつがましきを云又うはづりなるを云〔ひそめ草〕〔増〕転じては始め巨大なることの終は小になるもいふ」とあるが、この解釈に従えば、〈高慢〉の意味での「頭勝ち」でも「頭」が〈初め〉という意味で用いられているとみなすことができる。

〈高慢〉たこの糞（くそ）で頭（あたま）へ上（あ）がる

※中世の初出で挙げた「頭へ上がる」に「蛸の糞で」がついたもの。かつて蛸の頭に見える胴体には糞が詰まっていると言われていたことに由来する（『大辞林 第四版』）。『俚言集覧 中巻』には「己のみ矜（ホコ）れとも他より見るものは卑め思ふにいへり蛸の糞は頭にあるものゆえに云」とある。〈（自らの優位を感じて）驕り高ぶる、つけあがる〉ことを表す「頭へ上がる」に基づくことは確かであるが、「蛸の糞で」とあるように「が」ではなく「で」が用いられており、〈内容物〉としての〈糞〉が頭部に上っていくことを表すのかは不明である。〈頭が高い〉様子で振る舞うものの、高く位置した〈頭〉に詰まっているのは〈糞〉のように卑しいものであった、というイメージの滑稽さから生じた表現とみなすべきか。

4.5.5 近代

近代で追加された表現として、まず(455)の〈思考（苦悶）〉、(456)(457)の〈怒り〉〈興奮の抑制〉を表す表現を挙げる。(455)の「頭を搾る」では、〈締め付けて蓄えられた液体を外に出す〉ことを表す語

「しぼる」が用いられており、しぼり出される水分と〈思考〉が対応して解釈されている。同様の意味を持つ「頭を砕く」等の表現が頭痛という共起性基盤を持つメタファー表現（スキーマレベル I）であったのに対し、「頭を搾る」は構造的な対応関係を持つメタファー表現（スキーマレベル II～概念レベル）である。

(455) 〈思考（苦悶）〉 [5, 6, 9, 10]

[5] あたまを 痛（いた）める／おお-ずつう [おほヅツウ] 【大頭痛】／たにんの疝気（せんき）
を頭痛（ずつう）に病（や）む

[6] ずつうの種（たね）

[9] あたまを搾（しぼ）る

[10] あたまを悩（なや）ます

(456) 〈怒り〉 [3, 23]

[3, 23] あたま＝に [=へ] 来（く）る

(457) 〈興奮の抑制〉 [4]

[4] あたまを冷（ひ）やす／れい-とう 【冷頭】

3.6.3 節で説明した通り、(456)の「頭に来る」は、先行研究でもその比喩的な成り立ちが繰り返し扱われてきた表現であるが、この表現は〈腹〉や〈胸〉の〈怒り〉表現と比較すると思いのほか成立が遅いことがわかる。さらに、本表現の定着時期については追跡調査の必要があることを述べておかなければならない。馬場 (2012, p. 34) は、現代において「頭に来る」という表現が〈怒り〉以外の精神作用に用いられることは稀と考えられる一方で、「青空文庫」では〈怒り〉の意味で用いられた例は見当たらないことから、比較的新しい用法ではないかとの見解を示している。実際、『日国』で感情の意味として挙げられている「頭に来る」の初出例は誤った解釈であり、〈アルコールが頭に達して酔う〉という意味で用いられたものである。

(458) 「この間は失敬しました、あの日は先生だいぶよっぱらってしまいましたね、ずいぶんいいかつこうでしたよ、」とお辞儀が終わると、彼は冒頭にそんなことを一息にしゃべったものだ。
(...)

「いやあ、あの時はいつになく頭に来ましてね、」と佐山がこれまた特徴のある唇に、くせの、手をかざしながら、「ワッハッハッハッ」と例の豪傑笑いでむくいて、（苦の世界 1918-21 〈宇野浩二〉 三）

今回『日本語歴史コーパス』でも用例を確認したが、〈怒り〉の意味で用いられたと解釈可能な「頭に来る」の近代の用例はわずか1件のみであり、精神作用の意味として他に確認されたのは何かが意識にのぼること（〈記憶の想起〉）を表す次のような例である。

(459) 曩に度々信一が、はつきりしたい氣持から、一緒になる事の申來をした。が、松子は「二度目なのですから」と應じなかつた。先の主人と別れた荻田と左うなつた、彼女が自ら爲た事に輕薄でない點で、又いつも左う云ふ申出を容易に應じない點で、信一は一面に却つて頼もしく感じた。其が頭に來た。(CHJ: 60N 無限 1921_12001, 99930)

(460) 驢て列車の一つの窓から徳永翁が顔を出した。未何分かあつた。翁は彼女に名刺の裏に書付たものを渡した。「蜜柑むいてみかんの紀州のはなしする」と即興の句がある、彼女の紀伊の生れなのが頭に來たのだ。(CHJ: 60N 無限 1921_12003, 22420)

上の例は、どちらも同作品からの引用である。(459)の例は、信一という男性が松子という女性に結婚の申し出をする場面である。離婚経験があるという理由で慎重になる松子の様子を、信一は「却つて頼もしく感じた」という描写がある。それが「頭に來た」というのだが、じれったさから来る苛立ちのことを指すのであろうか。〈怒り〉を表すとしても、解釈が難しい用例である。一方、(460)では「徳永翁」という人物が、女性に即興の句を書き留めて送ったことが述べられている。「彼女の紀伊の生れなのが」との前置きがあるように、徳永翁という人物の「頭に來た」のは〈怒り〉ではなく、女性が紀伊出身であるという〈記憶〉である。以上の観察に基づくと、〈怒り〉の意味での「頭に来る」の使用は近代に存在した可能性はあるものの、一般的に普及した表現であつたとは言い難い。

話を戻そう。下に挙げるように、近代では（情緒的な要素を伴わないという意味で）より純粹な知的精神を表す表現が加わっている。

(461) 〈思考〉[11, 14, 27]

[11] あたまを使（つか）う

[14] あたまを浸（ひた）す／ぼつ-とう【没頭】／もつ-とう【没頭】²⁵⁶

[27] ず-のう [ヅナウ]【頭腦】／ずのう-てき [ヅナウ..]【頭腦的】／ずのう-ろうどう [ヅナウラウドウ]【頭腦労働】²⁵⁷

²⁵⁶ 中国語にて、「没頭」は「没头没脑」の形で用いられ、〈手がかりがない・糸口がない〉ことを表す（大西, 2017, p. 406）。〈集中する〉ことを表す「没頭」の意味は日本語特有である可能性が高いが、類似の形式で同じ意味を表す中国語表現として「埋头」が挙げられる。

²⁵⁷ 『日国』では精神作用の意味での「頭腦」の漢籍からの出典は挙げられていないものの、少なくとも現代中国語では「头脑(tóunǎo)」で〈頭腦〉のことを指す。

(462) 〈思考力〉[20]

[20] あたまが遅（おく）れる

(463) 〈思考方法〉[21]

[21] いし-あたま【石頭】²⁵⁸

(464) 〈記憶〉[22, 25, 26]

[22] とう-ちゅう【頭中】²⁵⁹

[25] あたまに付（つ）く

[26] あたまに入（い）れる／あたまに入（はい）る

たとえば、〈(苦心しながらの) 思考〉を意味する「頭を痛める」に対し、「頭を使う」はそのような含みを持たない。また成立の動機についていえば、上の表現は、いずれも頭痛や頭重感などのメトニミー的転義の素地を持つ生理的感觉ではなく、〈頭〉が(461)–(463)のように知的な精神作用を司る、あるいは(464)のように知的精神を納める身体部位であるというメタファー的理解を前提として成立している。

以下、今回の歴史的調査でコーパスやデータベースからのみ得られた表現をまとめて挙げておきたい。まず(464)に関して、3.6節での現代日本語表現の観察では〈記憶が想起される〉あるいは〈考えを思いつく〉ことを表す表現として、「頭に浮かぶ」を挙げたが、今回の調査では辞書見出しとしては得られなかったため、『日本語歴史コーパス』の検索で確認された用例を下に挙げる。

²⁵⁸ 「石頭」については、『日国』で「融通がきかず、ものわかりが悪いこと。また、その人。」の意味で中世の抄物『巨海代抄』(1586–1599)から「霊とをせられた石頭などの御修行を以ては答話の処をば見様ずが慕^レ諸聖重^レ己^レ霊^ニは山下足本の事だ」という一節が引かれている。しかしこれは誤読であり、「石頭」は中国唐代の禅僧「石頭希遷(せきとうきせん)」のことを指すと考えられる。実際、「慕^レ諸聖重^レ己^レ霊^ニ」とは『巨海代』の対応部「不^レ慕^レ諸聖不^レ重^レ己^レ霊^ニ」に対する注釈であり、「不^レ慕^レ諸聖不^レ重^レ己^レ霊^ニ」は石頭希遷が述べた言葉として伝承されているものである。入矢(2012, p. 86)はこの言葉を次のように説明している。

石頭希遷(700–790)は「諸(もろ)もろの聖をも慕わず、己の霊をも重んぜず」と言った。「不慕諸聖」は法身向上であり、「不重己霊」とは自己向上である。

さらに『日国』では、同じく「融通がきかず、ものわかりが悪いこと。また、その人。」の意味の用例として近世の句「佐用姫は生れ落から石天窓」(雑俳・柳多留 一四三 1836)を引いている。ここでの「佐用姫」というのは「佐用姫伝説」として知られる松浦佐用姫のことを指す。この伝説によれば、愛する人物(大伴狭手彦という人物)との別離を経験した佐用姫が、悲しみのあまり泣き続け、そのまま石化してしまったという。これは佐賀県唐津を舞台とする伝説であるが、古代から近代に至るまで長く語り継がれてきた(近藤, 2010)。ここでの「石頭」が佐用姫の石化を暗示し、かつ〈頑固であるほどに相手に固執すること〉を表すとすればこの語釈に合致するが、解釈が文脈に依存し、かなり特殊な例であるため、近世の初出として提示することは控えた(他の近世の用例は現時点で見つけられていない)。ただし、近世に「かた-かしら【堅頭・固頭】」という表現が現れているように、〈頭の固さ〉と〈頑固さ〉の対応はすでに近世で存在していたことは確かである。

²⁵⁹ ここでは『日国』で唯一挙げられている用例「汝の頭中に秘蔵する学問には黴(かび)が生(は)えるべし。」(吾輩は猫である 1905–1906〈夏目漱石〉九)に従い、〈記憶〉に分類した。

(465) 塚野は戸一重隔つて部屋の騒ぎを他所に、暫らく物干場をうろうろしてゐたが、社長の無情の言葉が容易に消え失せぬ。同僚の侮蔑も今日は際立つて頭に浮ぶ (CHJ: 60M 太陽 1909_01017, 20370)

(466) 其の中に、ふと別の考が先生の頭に浮かびました。「電信は、電氣の作用によつて、點や棒の符號を用ひて通信するものだが、此の符號の代りに人間の聲を用ひることは出来ないか。」(CHJ: 60T 小説 1933_46A08, 4790)

同様に〈記憶が想起される〉あるいは〈考えを思いつく〉ことを表す表現として、3.6節では「頭を過(よぎ)る」の表現を観察した。この表現に関しては『日本語歴史コーパス』でも用例を確認することができなかったため、比較的新しい表現であると考えられる。²⁶⁰ 「過る」は空間としての〈頭〉を生物や物体としての考えや記憶が通過するように準えたメタファー(〈発想／記憶の想起は生物・物体が頭という空間を通過することである〉)に基づくと考えられるが、同じ理解様式から生じたと考えられる表現例を「青空文庫」から得ることができたので下に挙げておきたい。

(467) 久保田さんは眼をくるくるさして、満足げに伶俐な長男を眺めた。その時、新たな想念が頭を掠めた。

「なるほど、嬰兒……だが天国はいかんよ。嬰兒の如くならずば神の国に入ることを得ず。そこで……子供の如くならずば人の国に入ることを得ず……大人の如くならずば悪魔の国に入ることを得ず……。」(人の国 1924 〈豊島与志雄〉青空文庫)

(468) 昨夜のことがきれぎれに彼の頭をかすめて通りすぎる。細君の顔と刑事課長の顔とが消えたり浮んだりする。その度びに彼は脳髓の中へ氷の棒をつきとおされるような思いがした。(犠牲者 1926 〈平林初之輔〉七 青空文庫)

次に、〈頭〉を擬人化したと考えられる「頭が働く」の表現についても、『日国』では見出しが登録されていないため、代わりに『日本語歴史コーパス』から得られた用例を挙げる。

(469) 一體に日本人は偉すぎる。頭が働き過ぎる。自分の足許を見るよりも前の成功ばかり見てゐる。五十町歩、百町歩の土地を高利の借金によつて買収するとしても、作がうまく當ればすぐ返却も出来るであらうが、一朝不作にでも逢つた時には、みぢめなものである。(CHJ: 60M 太陽 1925_14005, 45260)

²⁶⁰ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の語彙素「頭」+「を」+「過る」の条件検索では、93件の用例が得られた。

さて、3.6.3でも説明したように、有蘭（2007; 2009, 第5章; 2021）は身体部位詞の慣用表現の意味拡張に行為のフレームに基づくメトニミーが関与することを論じている。この行為のフレームの要素関係にメトニミー操作が働くことで、〈道具〉としての〈頭〉は〈能力〉（〈思考力〉）や〈方法〉（〈思考方法〉）に関する意味をも担うことができる。これらの〈能力〉〈方法〉のうち、前者は(462)の「頭が遅れる」によって近代での意味拡張が認められるだろう。また、『日国』の同表現の語釈に「考えが追いつかない。時流にとり残される。」とあるように、本表現は〈考え方が古くなる〉という意味を持つ。従って、考えが追いつかないのは〈思考力〉ではなく〈思考方法〉の問題であるとも解釈でき、この場合「頭が遅れる」は後者に分類される。〈思考力〉〈思考方法〉に関する近世の初出表現は、『日国』では「頭が遅れる」の他に得られなかったものの、『日本語歴史コーパス』からは、〈思考力〉に関して「いい／悪い」、さらには「鋭い／鈍い」などの語を用いた表現が見つかった。

(470) 世間では勞農政府の政治を無産階級の獨裁政治と呼ぶが、自分は刑餘階級の獨裁政治と呼びたい、レーニンもトロツキーも國事犯で流されてゐる、陸海軍大臣をやつたフロンゼ將軍も流刑に處せられ二回までも逃亡してゐるではないか。と、此の言葉から見ても氏の頭の鋭さが判る。
(CHJ: 60M 太陽 1925_07042, 6960)

(471) 人間が空中を飛ぶといふことは鳥といふものが空を翔つてゐる以上、考へさうなことであつて、飛行機の發達がここ僅か十五年や二十年のものとはあまりに人間の頭の鈍いのに驚かされるくらゐである。(CHJ: 60M 太陽 1925_04018, 5570)

また、〈思考方法〉については、「頭が遅れる」に近い意味を表す表現として次のような例が得られた。以上の観察より、〈能力〉〈方法〉を含む〈頭〉の意味拡張は、近代で一通り実現していたと考えられる。

(472) 現に自然派といふ旗幟を翻へして文壇の先輩、古老に對し頭が古いとか、アナクロニズムだとか一言の下に葬り去らうとした驅引などは素晴らしかつた。(CHJ: 60M 太陽 1909_14037, 18970)

4.5.6 現代

(473)–(474)の通り、現代では〈思考（苦悶）〉〈思考〉〈思考力〉に関する表現が足される。

(473) 〈思考（苦悶）〉[5]

[5] あたまが痛（いた）い

(474) 〈思考〉 [13, 15]

[13] あたまが回（まわ）る

[15] あたま-やすめ【頭休】

(475) 〈思考力〉 [19, 20, 28]

[19] 頭でっかち

[20] あたまの回転（かいてん）が早（はや）い²⁶¹／あたまが切（き）れる

[28] あたまが＝足（た）りない [=足（た）らない・足（た）りぬ] ／へぼ-あたま【一頭】

このうち、比喩のパターンとして〈頭〉を機械のような回転する物体に喩える表現「回る」「回転が早い」が新たに加わっている。ただし、これらに先行して「頭の回転」という形式で近代の用例が見つかっているので、現代の用例 (476) の用例のあとに (477) として挙げておきたい。

(476) 「たしかに団地族にはよろしいでしょうな、あのせまいところでは、お通夜もできんし、第一、団地サイズの棺をあつらえんと、表に出せんのとちやいますか。」先生が頭の回転の早いところをみせ、（とむらい師たち 1966 〈野坂昭如〉）

(477) それから先は、老人が寝てゐた間の頭の回転の工合によつてどんな事にでもなつて行く。[博打好きの老人が例のごとく負けて帰ってきて寝込んでいる。そして突然起き上がり、また博打に出かけていくという場面]（金 1926 〈宮嶋資夫〉一三）

4.5.7 観察のまとめ

以上の調査結果を集約し、慣用的意味（精神作用）に基づいて〈頭〉表現を分類したものを表 39 として示す。〈頭〉は中世まではしぐさや姿勢を参照した表現が観察されるのみであり、今回の調査の限りでは先に挙げた (445) の「頭（かしら）の痛い事」（「かしら痛し」）と (446) の「頭に智慧がある」の中世の例を除いて精神との対応を明確に見いだすことができない。近世では、〈感情の高ぶり〉〈怒り〉〈思考（苦悶）〉を表す表現に加え、〈思考方法〉の表現が一例のみ追加されるが、〈頭〉と知的精神との対応を裏付けるその他の表現（〈思考〉〈考え〉〈思考力〉〈思考方法〉〈記憶〉）が本格的に現れるのは近代・現代である。このことから、現代に通じる〈頭〉表現の精神義が確立するのは近代以降であったと考えるべきであろう。

²⁶¹ 脚注 197 でも触れた通り、「回転が早い」の「早い」は作動速度のことを指す場合「速」を用いる方が自然に感じられるが、『日国』では「早」が充てられている。これは、(476) に挙げた初出例の表記に従ったものと考えられる。他の辞書では「速」が用いられており、確認した限りでは「早」を充てた辞書は『日国』のみであった。

表 39 精神作用の座としての〈頭〉の史的展開（精神作用固定）

	上代	中古	中世	近世	近代	現代	
精神作用	分類	字義の意味（慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語の場合は表現例*）					例
感情の高ぶり	1			血が頭に集中（上昇）する			かしらへ血が上がる
	2			頭に湯気が立つ			頭へ湯気を立てる
	3				頭に内容物が到達する		頭に来る
興奮の抑制	4				頭を冷却する		頭を冷やす
	5		頭痛がする、頭痛				かしらが痛い
思考（苦悶）	6			頭痛のもと		(・・・)	かしら種
	7			頭が重く感じる			かしらが重い
	8			頭を破壊する			頭を砕く
	9				頭を搾る		頭を搾る
	10				頭を煩わす		頭を悩ます
思考	11				頭を使う		頭を使う
	12				頭 {が働く／を働かす}		頭が働く
	13				頭が回転する		頭の回転
	14				頭を {（水に）浸す／没する}		頭を浸す
	15					頭の休憩	頭休め
	27*				頭腦的		頭腦的
考え	16				頭に内容物が浮上する		頭に浮ぶ
	17				生物・物体が頭を通過する		頭を掠める
思考力	18		頭に内容物が存在する				頭に智慧がある
	19					頭が（相対的に）大きい	頭でっかち
	20				頭の作動（回転）が {速い／遅い}		頭が鋭い
	28*				頭がいい		頭がいい
思考方法	21			頭が固い			堅かしら
	29*				頭が古い		頭が古い
記憶	22				頭の内部		頭中（とうちゅう）
	23				頭に内容物が {到達する／浮上する}		頭に浮ぶ
	24				生物・物体が頭を通過する		頭を掠める
	25				頭に内容物が付着する		頭に付く
	26				頭に内容物 {が入る／を入れる}		頭に入る

次に、〈頭〉表現の比喩的な成り立ちの変容を分析するために、慣用句を第 3 章の分析に基づいて並べたものとして示す。表 39 の分類との対応が分かるように、右列に番号を示した。

表 40 精神作用の座としての〈頭〉の史的展開（字義的意味固定）

		上代	中古	中世	近世	近代	現代		
字義的意味		精神作用					表39との対応	例	
L1	痛み	頭痛がする、頭痛		思考（苦悶）				5	かしらが痛い
		頭痛のもと			思考（苦悶）	(・・・)		6	かしら種
	頭重感	頭が重く感じる			思考（苦悶）			7	かしらが重い
	血液の集中	血が頭に集中（上昇）する			感情の高ぶり			1	かしらへ血が上がる
	体温変化	頭を冷却する				興奮の抑制		4	頭を冷やす
L2	蒸気	頭に湯気が立つ			怒り			2	頭へ湯気を立てる
	損傷	頭を破壊する			思考（苦悶）			8	頭を砕く
L3-C	内容物の上昇	頭に内容物が到達する				怒り		3	頭に来る
						記憶		23	頭に来る
		頭に内容物が浮上する				記憶		23	頭に浮ぶ
						考え		16	頭に浮ぶ
	対象の受容	頭に内容物 {が入る／を入れる}				記憶		26	頭に入る
	内容物の保持	頭の内部				記憶		22	頭中（とうちゅう）
		頭に内容物がある		思考力（知恵）				18	頭に知恵がある
		頭に内容物が付着する				記憶		25	頭に付く
	内容物の搾出	頭を搾る				思考（苦悶）		9	頭を搾る
	容器の規模	頭が（相対的に）大きい					思考力	19	頭でっかち
L3-O	通過	生物・物体が頭を通過する				考え		17	頭を掠める
						記憶		24	頭を掠める
	使用	頭を使う				思考		11	頭を使う
	労働	頭 {が働く／を働かす}				思考		12	頭が働く
	休憩	頭の休憩					思考	15	頭休め
	煩い	頭を煩わす				思考（苦悶）		10	頭を悩ます
	作動	頭が回転する（作動する）				思考		13	頭の回転
	作動速度	頭の作動（回転）が {速い／遅い}				思考力		20	頭が鋭い
	固さ	頭が固い			思考方法			21	堅かしら
	沈水	頭を {（水に）浸す／没する}				思考		14	頭を浸す

〈腹〉や〈胸〉では、L1やL2に分類されるような身体経験に基づく表現が中世までに多く出揃っていた。対する〈頭〉の場合、中世以前は(445)で見た「かしら痛し」のような頭痛([5])が該当するのみであり、全体的に発生は遅れている。しかしながら、L3と比べた場合、L1やL2に属するカテゴリーの発生は明らかに先行しており、近世には[7]の頭重感(「かしらが重い」)、[1]の血液の集中に関するメトニミー(「かしらへ血が上がる」)に加え、[2]の湯気の発生(「頭へ湯気を立てる」)、[8]の損傷(「頭を砕く」)を描くメタファーが加わっている。

L3に目を向けると、第3章での現代日本語表現での分析では、〈容器としての頭〉とその下位メタファー〈発想／記憶の想起は生物・物体が頭という空間を通過することである〉〈怒り／考え／知識・情報(記憶)は頭という容器の中に納められた内容物である〉〈記憶は頭という容器に対象を取り込むことである〉を提案した。中世の「頭に智慧がある」の用例に基づく[18]は、このいずれのメタファーにも分類し難いが、少なくとも〈容器としての頭〉のメタファーの存在を支持するであろう。²⁶² 残りのL3-Cのカテゴリーが全て近代以降に表れていることから明らかなように(e.g.「頭を掠める」「頭に浮ぶ」「頭に入る」)、これら三種のメタファーが発生・定着するのは近代以降であると考えられる。

一方、〈具象物としての頭〉のメタファーについては、第3章で〈思考は頭という道具を用いることである〉〈思考の柔軟性は頭という物体の固さである〉のメタファーを提案した。このうち、後者については、〈頭〉の固さを通じて〈思考方法〉を表す[21]のカテゴリーをもとに、近世から存在したことが推定される(ただし、近世で得られたのは「固かしら」の表現のみ)。一方、L3-Oのその他すべてのカテゴリーが近代・あるいは現代に現れているように、〈思考は頭という道具を用いることである〉というメタファー(e.g.「頭を使う」「頭の回転」)は近代以降の発生・定着である。

〈腹〉〈胸〉の場合、精神作用の座としての理解の成熟は近世であることを述べたが、〈頭〉についてはいつ頃と考えるべきであろうか。表39で示した通り、〈頭〉と対応する精神作用に関して近代と現代では変わらない。また、上の表40から判断するに、現代で追加される〈頭〉の描写も近代でほとんど出現している。これらのことから、精神作用の座としての〈頭〉の理解は近代に急激に発展しそのまま成熟を迎えたと考えられる。

以上の観察をもとに、精神作用の座としての〈頭〉の理解の展開の特徴を次のようにまとめる。

- 〈頭〉と情緒的精神との対応は少なくとも中世末まで遡ることができるが、得られる言語表現は限られており、本格的に現れるのは近世以降である。ただし、近世も〈怒り〉などの一部感情や情緒的要素を伴う〈思考(苦悶)〉との対応が主であり、〈思考〉〈記憶〉などの現代に通じる知的精

²⁶² 「頭に智慧がある」は単発的な例であるが、〈頭〉と知的精神の結びつきを示唆する最古の例であるため加えた。また、現代でも十分通じるため、表39、表40では近代以降の使用が確認されないことを表す(・・・)をつけていない。

神との結びつきが定着するのは、近代以降である。

- 共起性基盤（時間的隣接性）としての身体経験に基づく L1 や L2 の表現の発生は、〈腹〉や〈胸〉の場合と比べて遅れるが、〈頭〉表現の中で見た場合、L3 の表現の発生に先行している。
- L3 での〈容器としての頭〉〈具象物としての頭〉のメタファーに基づく表現は近世以前ほとんど観察されず、近代になって爆発的に増加する。精神作用の座としての〈頭〉の理解は、近代という一時代の中で急発展・成熟を経たと考えられる。

4.6 考察

4.6.1 身体基盤と通時性、文化基盤と意味の変容

本章での歴史的調査はあくまで辞書見出しの情報を主たる手がかりとしたものであり、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の精神義の消長を歴史的に細かく追跡したわけではないが、それでも身体部位詞の意味拡張の傾向としていくつか見えてきたことがある。ここでは、4.1.2 節で設定した以下の仮説に基づき、調査結果を分析していく。

(478) I. 身体基盤は通時的に（すなわち早期からの）〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の比喩義の発生を促す。

II. 文化基盤はそれが普及した特定の時代において、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の比喩義の発生を促す。

(=311))

I の仮説に関しては、感覚・運動レベル (L1) とスキーマレベル I (L2) に関する比喩の発生期が検証の手がかりとなる。〈腹〉〈胸〉〈頭〉の L1 と L2 の比喩の発生時代を集約したものを以下の表として示す。

表 41 感覚・運動レベル (L1) およびスキーマレベル I (L2) の比喩の発生時代

		上代	中古	中世	近世	近代	現代
腹	L1		不快感	しぐさ、痛み			
	L2		切付け		振れ		
胸	L1	痛み、病、 体温変化	苦しき、動悸		しぐさ、 不快感		
	L2	動揺、損傷	圧迫、閉塞		硬化、衝撃		
頭	L1			痛み	頭重感、血液 の集中	冷却	
	L2				蒸気、損傷		

既に各部位のまとめでも述べた通り、L1 や L2 に分類される表現は相対的に早い時代から観察される傾向にあり、それが最も顕著なのが、これら L1 と L2 のレベルに該当する比喩が豊富な〈胸〉である。従来の研究および第 3 章での議論の通り、〈胸〉は心臓、呼吸器官が位置する部位として身体性が際立っている。ここでいう身体性の際立ちとは、Lakoff (1987, p. 382) が“The physiological effects of an emotion stand for the emotion.”（ある感情の及ぼす生理的影響がその感情を表す）と述べるような、共起性基盤（時間的隣接性に基づくメトニミー拡張の素地）を〈胸〉が豊かに備えているという意味である。このような内的器官に由来する〈胸〉の身体経験は、表 41 の通りその多くが上代・中古から比喩として利用されている。また、L1 や L2 のカテゴリー数から判断する限り、〈腹〉では共起性基盤として用いられる身体経験が〈胸〉よりも少ないと考えられるが、それでも比喩表現としては早い時代から観察される傾向にある。〈頭〉については、〈腹〉と〈胸〉と比べて L1 や L2 に示すような身体経験に基づく比喩の発生が遅れているものの、4.5.7 節で指摘したように、L3 に分類される比喩が近代以降に現れるのに対し、L1 や L2 はそれよりも早い近世での発展が見られる。つまり、〈頭〉という身体部位の中で言えば L1 や L2 の相対的な発生は早いのである。

以上の観察に基づいた場合、I の仮説についてはある程度支持されるべきであろう。すなわち、上の表で挙げたような感情に伴う身体経験は通時的にも（半）普遍性を有する。我々現代人がそうであるように、古代の人々も感情とともに生じる生理的感覚・反応を経験的に理解していたはずであり、〈腹〉〈胸〉〈頭〉と感情との対応が早期から存在することは、この観点を以てすれば至極自然な帰結として説明される。

上で「ある程度」と加えたのは、普遍的な身体経験の存在が L1 や L2 の比喩の発生を動機づける十分条件とはならないためである。実際に、早期から多くの比喩が観察される〈胸〉に関しても、L1 や L2 の項目全てが中古までに確認されるわけではなく、不快感（e.g. 「胸が悪い」）や、苦しさに基づくと考えられる硬化（「胸が板になる」）、動悸に基づくと考えられる衝撃（e.g. 「胸をつく」）の比喩は全て近世に現れている。特に L2 に関しては、身体経験をどうメタファーとして喩えるかは人間の創造力に委ねられているのであって、時代の経過とともに多様化していくことは自然の成り行きである。また、全体として精神作用に関する比喩表現の発生が遅い〈頭〉については、身体経験に基づくと考えられる L1 や L2 の比喩であっても〈腹〉や〈胸〉と比べて遅れる傾向にある。このずれに関しては、身体経験の厳格な普遍主義を採る限り説明がつかない。身体経験はそれに基づく比喩表現の基盤を通時的に提供するが、あくまで表現成立の必要条件であると考えられる（cf. Kövecses, 2005）。

さて、L3 に属する比喩のうち、特に感情以外の精神作用を表す表現については、〈腹〉〈胸〉〈頭〉のいずれにおいても L1 や L2 より発生が遅れる傾向にあることを指摘した。「胸に刻む」「腹を探る」「頭

を使う」などの表現は、その意味から情緒的な要素の存在を完全に排除できるものではないが、動機づけとして L1 で観察されたような生理的感覚・反応の経験を明確に見出すことは困難である。これらの表現は、何らかの概念メタファーに基づいて生じた表現であると考えられる（〈記憶は胸という物体に銘刻することである〉〈考え・意図は腹という容器に納められた内容物である〉〈思考は頭という道具を用いることである〉）。ただし、身体経験の影響が皆無であるとは言い切れない。これらを支える概念メタファーの成立には、〈腹〉〈胸〉〈頭〉が精神作用の座であり、精神作用を司るという理解が大前提として必要であり、この理解の発生には、後に取り上げる文化基盤だけでなく、身体基盤が役を担っていると考えられる。すなわち、感情経験の度に生じる各身体部位の生理的感覚・反応こそが、「その部位が精神作用と何らかの関係を持つ」という気づきを促し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解が徐々に確立していくのである。ここに情動としての感情から他の精神作用への拡がりの方向性を見出すことができ、このことは、歴史的な展開として情緒的精神との結びつきがその他の精神作用に先行するという本章での調査結果と整合する。

無論、L3 の中には感情に関する比喩も存在するように、感情を表す全ての表現の成り立ちを生理的感覚・反応との共起（時間的隣接性）によるメトニミー表現、あるいは身体経験に基づくメタファー表現として片付けることはできない。たとえば、「腹が煮える」や「胸を焦がす」の表現では、感情経験に伴う体温変化が動機づけの一つとなっていると考えられるが、体温変化が身体の広範囲で生じる生理現象であることを考慮するに、感情と〈腹〉〈胸〉が結びつくための何らかの動機が必要である。つまり、ここでも〈腹〉〈胸〉が精神作用の座であり、精神作用を司る部位であるという理解が必要であり、この大前提をもとに〈怒りは腹という容器の中に納められた熱い液体である〉や〈恋慕は胸という物体の燃焼である〉という概念メタファーが成り立っているのである。²⁶³

次に、II の仮説に関しては、本章での調査結果はそれを支持するものと明確には支持しないものに分かれている。支持する結果は、古来の五臓思想に新たに西洋医学における脳学説が導入されたことに伴う〈頭〉表現の展開の様子である。〈腹〉〈胸〉表現の展開と〈頭〉表現の展開から判断するに、五臓思想の影響、近代西洋医学における解剖学的知見の影響は身体部位詞の意味拡張に明確に反映されていたと考えられる。3.3.4.1 節で説明したように、6-7 世紀ごろに伝来したとされる五臓思想に基づく心身観のもとでは、精神作用の座は五臓六腑（を納める腹・胸）であるとされていた。このような

²⁶³ L2 から L3 の中間に位置するのが「胸がつまる」や「胸がつかえる」のような表現を例とする比喩であろう。3.5.2 節の現代日本語の〈胸〉表現の分析で論じた通り、これらの表現は詰まりの原因となる内容物の存在を含意するが、精神作用の比喩として利用される場合、苦しいという感覚そのものを描写することが主たる動機となっていると考えられる。つまり、表現の成立にあたっては、詰まりの原因が感情であるという認識を必ずしも必要としない。とはいえ、このような内容物の存在を含意する語の使用自体が、話者の〈胸に感情が収まっている〉という再分析を促進し、L3 の〈容器〉メタファーの形成を促進していることは確かである。

五臓中心の心身観は、近世における近代的な解剖学的知見の流入によって揺さぶられ、そのような西洋学説に基づく知識が一般に普及した近代において、脳（頭）中心の心身観に置き換わっていった。このような心身観の歴史的な変容は、近世までに〈腹〉〈胸〉と精神作用の結びつきが成熟を迎え、その後近代に〈頭〉と精神作用の結びつきが急速に発展・成熟したという本研究の調査結果と整合する。ただし、五臓思想という文化基盤が速やかにあらゆる〈腹〉〈胸〉表現の発生を保証したわけではない。これらの部位に関する身体部位詞は、上代・中古から近世まで段階的に精神義を拡げている。

以上のように、文化的に形作られた心身観が〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞の精神義の獲得を大きく動機づけたことは明らかであるが、だからといって身体基盤の重要性が霞むかと言えばそうではない。たとえば、中世以前の表現を観察する限り、〈腹〉と〈胸〉では〈胸〉の方が精神義の拡大が早い傾向にあるが、これは〈胸〉において身体経験が特に豊かであるからである。このような〈腹〉と〈胸〉の精神義の発展のずれは、五臓思想のみを以ては説明できない。また、〈頭〉が知的精神との対応を得る一足先に、感情あるいは情緒的要素を持つ思考との対応を達成している点にも注目されたい。〈頭〉は解剖学を通じて脳に関する西洋学説が流入する近世以前にさえ、何らかの身体基盤を持つ精神義を一部獲得していたことは示唆に富んでいる。

さて、五臓思想が近世以前の〈腹〉〈胸〉と精神作用の結びつきを広く動機づけたと考えられる一方で、3.4節で取り上げた丹田思想あるいは腰肚文化は、〈腹の安定〉と〈精神の安定〉の結びつきを動機づけたと考えられる。安定性に関する比喻を辿ると、「腹立ち」に関する表現が〈腹〉全体のなかでも最も早くに出現しており、その後近世・近代に〈信念・覚悟・決心〉といった精神作用との対応に拡大する。一点問題として残るのは、道教に由来する丹田思想が日本文化に取り込まれ、根付いたのが後代の可能性があるという点である。片渕(2023, pp. 180–181)によると、16世紀末～18世紀初頭にかけての養生論において、臍下丹田の重要性が語られた資料はほとんど見つからず、丹田の心身調和の役割やそこへの意識・力の集中についても説かれてはいないという。『日国』で「丹田」を確認すると、初出の典拠は中世の資料（1485年）であり、「腹立ち」表現の成立よりも遅い。少なくとも丹田と重要性が文献上によく現れるようになったのは18世紀以降であり（片渕, 2023, pp. 180–181）、3.3.4.2節でも取り上げた貝原益軒による『養生訓』（1713年）が書かれたのもこの時期である。このように考えると、〈腹〉が精神の安定と関係するという認識は道教の丹田思想を借り入れたことで初めて生じたものではなく、元々日本文化の中である程度培われていた可能性が高い。中古に生まれたと考えられる「腹立ち」表現（今回の調査に基づく限り、9世紀末～10世紀初頭成立の『竹取物語』の「腹立つ」の用例が最も古い）に関して、漢語や現代中国語に相当表現がなく、「立腹」（りっぷく）や「腹立」（ふくりゅう）が和製漢語であることを加味するに、少なくとも〈怒り〉と〈腹〉の安定の結びつきは何

らかの契機によって日本であらかじめ生じた理解様式であると考えられる。²⁶⁴

また、Matsuki (1995) が「本音と建前」という用語を用いて〈怒り〉のメタファーを特徴づけるために持ち出した、日本の「本心を外に出さない」という文化的特徴の歴史的な影響については、正確に議論することが難しい。そもそも、心のうちに思うことを外に出す・出さないというのは程度問題であって、常時曝け出すことを当然とする文化は存在し難いであろう。そのような意味で、史的資料の限られた中で本心の隠し立てに対する認識の変容を探ることは困難さを伴うからである。

Matsuki (1995) の用いた「本音」「建前」という語は比較的新しく、『日国』の情報に基づく限り「本音」は近代から、「建前」は近世から用いられるようになった語である。ただし、本研究で繰り返し用いてきた「本音」の類語「本心」は少なくとも中古から存在する語であり、「うわべだけでない本当の心。真実の気持。」という語釈に限った場合の初出例は 15 世紀末である。また、「本音」と「建前」のように対をなす語の組として、「表（おもて）」と「裏（うら）」がある（それぞれ語としては中古・上代から存在）。『日国』では「表」の「外に見せるようにした部分。うわべ。外見。見え。」の語釈の最も古い用例を『日葡辞書』から引いているが、その用例「Vomote（ヲモテ）ウラノアルヒト。すなわち、ヒョウリナモノ〈訳〉裏と表のある偽善者」という説明から判断するに、このような「オモテウラ」の対立概念（土居, 1985）は中世末には存在したといえる。さらにいえば、「心」は「ウラ」と読まれることがあり、たとえば、「心（うら）も無し」という表現は、「相手に対して、自分の心の中を包み隠したりしない。心の中で相手を恨んだり疑ったりするような隔て心がない。」（『日国』）という意味で、中古から用いられていたようである。このような「本音と建前」あるいは「オモテウラ」の概念に関して、土居 (1985, pp. 36-37) は少なくとも『徒然草』（1330-1331 頃）の一節にはそのような対立概念が窺えることを指摘している。しかしながら、上で述べた通りこのような対立概念が文化の中でどの程度地位を得ていたかは不明である。

そこで、当時の文化を捉える有効な手立てとなるのが、かつての日本人が外の人々にどう映っていたかを見ることである。土居 (1985, pp. 35-36) は、中世末の宣教師らの書記の中に、日本人が本心をはっきりと述べない民族であるという記述があることを指摘している。たとえば、その一例であるアレッサンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano) の『日本巡察記』では日本人の悪い特性として「外部で表れた言葉では、胸中で考え企てていることを絶対に知ることができない」（松田ほか（訳）、1973, p. 18）と説明している。このことから、中世末の段階ではすでに本心を隠し立てるという文化としての傾向が多少なり生じていたことが推察される。

²⁶⁴ 伊原 (1990) は和語による「腹立ち」表現が漢文中で用いられる中で「腹立（ふくりゅう）」を経て「立腹（りっぷく）」に変化していった過程を分析している。

ここで、今回の調査結果として心中への隠し立てに関連する〈腹〉表現の展開を振り返ると、中世以前は「腹が脹れる」（中古～）や「腹に据えかねる」（中世～）などの対人的な感情を表す表現が一部確認される。一方、〈考え・意図〉を表す表現としては唯一「腹蔵」が中世に確認されるのみで、それ以外の表現（e.g. 「腹を探る」「腹を見抜く」「腹を割る」）は近世以降に現れている。〈不満〉や〈怒り〉を隠すことが他人との衝突の回避という消極的理由に動機付けられているのであれば、〈考え・意図〉の隠蔽は典型的には目的の達成というどちらかと言えば積極的な動機に支えられており、それぞれ異なる性質を持つ。〈腹〉での精神内容の隠蔽は、このような消極的な動機から積極的な動機へと段階的拡張があったと考えられる。上で挙げた宣教師の書記に基づいた場合、本心を隠すという文化としての傾向は少なくとも中世末には生じていた可能性があるが、このような文化的背景が〈腹〉表現の意味拡張の方向性とにどう関係するのか（あるいはそもそも関係性があるのか）については、今後の追跡調査を要する。

最後に、〈頭〉に関して依然として未解決なのは、なぜ知的精神のみが〈頭〉と結びつくことになったかという問いである。近現代の西洋医学は理知的な精神作用のみを脳の働きに帰属させてきた訳ではないからである。²⁶⁵ 本件については今後の追跡調査が必要であるが、二つの要因が考えられるだろう。一つは、本来あらゆる精神作用の座であった五臓六腑（〈腹〉〈胸〉）が、近世末～近代の心身観の転換により、知的精神の座としての地位のみを一部脳（〈頭〉）へと譲り渡したという可能性である。この可能性については、今後〈腹〉〈胸〉の意味の衰退・消失という観点からも歴史的に調査していく必要がある。もう一つは、近代の文明開化とともに、精神の理知的な側面が重視される中で脳中心の新しい心身観が普及したという歴史的背景である。脳の働きが人々にどのような場で、どのような文脈のもと伝えられたかが重要であり、そのような社会・文化的背景の調査と並行した一時代の〈頭〉表現の意味の変遷を精査していく必要があるだろう。

4.6.2 言語接触：漢語の影響

本稿では〈腹〉〈胸〉の文化基盤を考える上で、東洋医学による五臓思想や道教に端を発する丹田思想など、中国大陸由来の文化を参照することで、それらの日本語表現への影響を考えてきた。このような分析を加えるにあたり注意しなければならないのは、「文化基盤が人々の心身に関する認識のレベルで影響を与える」という暗黙の了解をもとに議論がなされる傾向にあるという点である。しかし4.2節で指摘したように、身体部位詞の比喻義が常に認識レベルで他文化の影響を受けるとは限らない。

²⁶⁵ これに関連して、長谷川ほか（2012, 第10章）では、西洋医学に基づく新しい身体観の普及に、学校教育が大きな影響を与えたことを論じ、「脳・神経」への科学的解説がすでに小学校教科書の中で現れることを指摘している。

中には初めから比喻義を備えて入ってくる身体部位詞表現もある訳である。このような現象は、漢語の伝来によって書記言語へのきつかけを得た日本語にとって、特にありうることである。

本章では、主に『日国』の用例出典をもとに、漢籍の出典が確認される漢語表現に下線を施してきた。その結果を集約したものを次頁の表 42 に示す。集約の際には『大漢和辞典 修訂第二版』に同じ見出しがある場合、用例に漢籍からの出典がないか一通り確認した。表には観察の際に「その他成り立ちが明らかでないもの・成り立ちが特殊なもの」と分類した表現を含めた。また、漢語だけでなく漢語を構成要素に持つ合成語や句を広く含めた。左列は漢籍の出典が確認された項目、右列は漢籍の出典が確認されなかった項目である。「頭痛（ずつう）」のように、中国由来の漢語であるものの、精神作用に関する独立した語彙に関して漢籍からの出典がないものについては「漢籍の出典なし」として分類した。これらは、元々別の意味で入ってきた漢語が日本で新たに精神義を獲得した表現例であると考えられる。

表 42 『日本国語大辞典 第二版』において漢籍の出典が確認される漢語および漢語によって構成される慣用表現

	漢籍の出典あり（精神義の語釈の用例）	漢籍の出典なし（精神義の語釈の用例）
〈腹〉	【上代～】心腹（しんぷく）、腹心（ふくしん） 【中古～】捧腹・抱腹（ほうふく） 【中世～】腹中（ふくちゅう） 【近世～】腹稿（ふっこう） 【近代～】赤心を推して人の腹中（ふくちゅう）に置く、腹議（ふくぎ）、腹誹（ふくひ）	【中古～】切腹（せつぷく）、腹立（ふくりゅう）、立腹（りっぷく） 【中世～】腹蔵・覆蔵（ふくぞう）、腹蔵（ふくぞう）無い 【近世～】腹立千万（ふくりゅうせんばん）、腹立眼（ふくりゅうまなこ）、相腹中（あいふくちゅう）、同腹中（どうふくちゅう）、腹案（ふくあん）、心腹（しんぷく）に落つ、大腹中（おおぶくちゅう・だいふくちゅう）、股肱腹心（ここうふくしん）、腹臣（ふくしん） 【近代～】捧腹絶倒・抱腹絶倒（ほうふくぜつとう）、立腹気（りっぷくげ）、腹中（ふくちゅう）刀有り、面従腹誹（めんじゅうふくひ）、太腹・大腹（たいふく）、剛腹（ごうふく）、謫材儉腹（せんざいけんふく） 【現代～】面従腹背（めんじゅうふくはい）
〈胸〉	【中古～】胸中（きょうちゅう）、胸臆（きょうおく）、胸懷（きょうかい）、心胸（しんきょう） 【中世～】胸次（きょうじ） 【近世～】胸中（きょうちゅう）成竹あり、満胸（まんきょう）、胸宇（きょうう）、胸膈（きょうかく）、 【近代】胸臆（きょうおく）を開く	【中古～】胸陂（きょうひ） 【中世～】胸霧（きょうむ）、鬱胸（うつきょう）、胸鬱・胸鬱（きょううつ）、胸意（きょうい）、寸胸（すんきょう）、胸臆（くおく） 【近世～】開胸（かいきょう）、胸裏・胸裡（きょうり）、胸旨（きょうし）、襟胸（きんきょう）、胸量（きょうりょう）、度胸（どきょう）、度胸（どきょう）が据わる、度胸（どきょう）を定める、度胸（どきょう）を据える 【近代～】胸間（きょうかん）、胸底（きょうてい）、胸襟（きょうぎん）を開く、胸算（きょうさん）、糞度胸（くそどきょう）、度胸（どきょう）比べ、度胸（どきょう）試し、度胸（どきょう）付け、度胸者（どきょうもの）、悪度胸（わるどきょう）
〈頭〉		【近世～】頭痛（ずつう）、頭痛鉢巻（ずつうはちまき）、頭痛八百（ずつうはっぴやく）、となりの疝気を頭痛（ずつう）に病む、人の疝気を頭痛（ずつう）に病む 【近代～】大頭痛（おおずつう）、他人の疝気を頭痛（ずつう）に病む、頭痛（ずつう）の種、冷頭（れいとう）、没頭（ぼつとう・もつとう）、頭腦（ずのう）、頭腦的（ずのうてき）、頭腦労働（ずのうろうどう）、頭中（とうちゅう）

表から読み取れるように、〈腹〉〈胸〉に関する漢語はその多くが日本で新たに成立した、あるいは新たに精神義を獲得した可能性がある一方で、元々精神作用に関する意味を備えて日本に流入したと考えられるものも一部存在する。たとえば、〈頭〉については漢籍の出典がある項目が存在しない点に

注目されたい。これは、同じ五臓思想の影響下にあった漢語が、古くは「頭」と精神作用を結び付けていなかったことを示唆している。²⁶⁶ 漢籍の出典が確認される表現に注目してみると、〈腹〉〈胸〉ともに〈内心・本心〉を表す「心腹」や「胸中」などの語が確認される。さらに、〈腹〉については〈笑い〉のしぐさ表現「捧腹・抱腹」や、〈考え・意図〉に関する「腹稿」、〈心中で相手を非難すること〉を表す「腹誹」なども該当する。〈胸〉に関しては、ほとんどが語全体で〈内心・本心〉の意味を表す表現であり、「満胸」に限り〈胸一杯〉の意味を表す。

一方、漢籍の出典が確認されなかった表現が表す精神作用のうち、漢籍の出典が確認された表現では対応しなかった精神作用に注目してみよう。〈腹〉では「立腹」系表現が表す〈怒り〉に加え、「剛腹」が表す〈胆力〉、「大腹中（だいふくちゅう）」「大腹（たいふく）」などが表す〈度量・包容力〉が該当する。〈胸〉については「胸霧」「鬱胸」が表す〈不安〉〈苦悶〉、「胸臆（くおく）」「胸意」「胸算」などが表す〈考え・意図〉、「胸量」が表す〈度量・包容力〉が該当する。また、「度胸」関連の多くの表現によって〈胆力〉が表される。

以上を要するに、身体部位詞を含む一部の漢語が精神義を備えて日本に流入したことは確かであるが、見込まれるほど多くは該当しない。また、様々な精神作用を表す広範囲の表現が借用されたとも言い難い。従って、今回の調査結果に基づく限りでは、日本で用いられた漢語表現の精神義が、必ずしも漢語の既存の意味の表面的な借り入れによって成り立っている訳ではないと結論づけることができる。漢語による身体部位詞の精神義を、かつての日本人の身体に関する認識レベルでの問題として分析することは全くの無意味ではないといえよう。

4.7 第4章のまとめ

本章では、『日本国語大辞典 第二版』の見出しにある用例の初出年を主たる手掛かりに、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開を歴史的に追ってきた。(310)で設定した以下三つのリサーチクエスションに対し、次のように結論付ける。

²⁶⁶ 吉田・支(1999)は、現代中国語の「頭(頭)」が原則として〈頭脳の働き〉としての意味を持たないことを指摘している。吉田・支(1999)によれば、現代中国語では、精神作用の意味では「脳」が用いられる傾向にある。なお、現代日本語では呉音を用いた「頭腦(ずのう)」が知的精神に関する〈思考(力)〉の意味で使われているが、脚注 257 でも触れたように、中国語では「頭腦(tóunǎo)」となる。

なお、『大漢和辞典 修訂第二版』では、「頭腦(ずのう)」に「判断力。識別力。」という語釈を与えて王陽明(1472–1528)の『伝習録』(16C)から「只是有箇頭腦」を引いているが、この箇所に「判断力。識別力。」という解釈をあてる他資料は管見では見つからない。たとえば、杉原(1910)による註解では「頭腦」に対して「タイセツなところ。即ち根本となるものをいふ。」(p.8)とある。

RQ 1: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉と結びつく精神作用は歴史的にどのように拡がっていったか。

- 〈腹〉 〈胸〉 〈頭〉ともに情緒的精神（感情の要素を持つ思考を含む）に関する意味の発生が先行する傾向にあり，〈腹〉と〈胸〉は中古あるいは上代から，〈頭〉は中世からそれらとの対応が見られる。中でも〈胸〉は現代日本語と同様に情緒的精神との結びつきが強く，それゆえ古くから多くの表現が現れている。
- 知的精神や人格に関する意味の成立は，〈腹〉 〈胸〉 〈頭〉ともに情緒的精神の意味の成立よりも遅れる傾向にある。〈腹〉 〈胸〉は近世にこれらの精神作用との対応が一通り出揃い，成熟を迎えるが，一方の〈頭〉は知的精神との対応を近代で集中的に獲得する。
- 精神義を持つ一部の漢語表現については，使用開始時代が和語による表現の意味拡張傾向に沿わない。この傾向は，特に〈腹〉で当てはまる。

RQ 2: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を支える比喩の展開にどのような特徴が見られるか。

- 比喩の種類のうち，「メトニミーによる慣用句・合成語，メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語」（L1: 感覚・運動レベル）に加え，「メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語」（L2: スキーマレベル I）は早期に成立するものが多い。
- 概念メタファーの二大区分〈容器としての腹／胸／頭〉〈具象物としての腹／胸／頭〉に関しては，両者の発生時期に大きな差は見られない。いずれのメタファーに関しても，〈腹〉 〈胸〉は中古から近世に至るまで徐々に適用される精神作用の範囲を拡大させていった。

RQ 3: 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開に身体基盤・文化基盤はどのように影響したか。

- RQ 1 に対する結論の一つ目と RQ 2 に対する結論の一つ目で指摘した傾向は，「身体基盤は通時的に（すなわち早期からの）身体部位詞の比喩義の発生を促す」という仮説を支持する。感覚・運動レベル (L1)，スキーマレベル I (L2) の表現は，時間的隣接性に基づくメトニミー（共起性）基盤を有しており，それは主に情緒的精神において経験される基盤であるからである。ただし，このような身体基盤の存在が通時的な比喩表現の成立を必然的に導くとは言えない。
- RQ 1 に対する結論の一つ目と二つ目で指摘した〈腹〉 〈胸〉表現と〈頭〉表現の精神義の拡大の隔たりは，日本における心身観の転換（五臓思想から西洋医学に基づく知識への転換）と概ね対応する。このことは「文化基盤はそれが普及した特定の時代において，身体部位詞の比喩義の発生を促す。」という理論的仮説を支持するが，一方で，丹田思想と〈腹〉の安定に関する比喩発生など，

特定の文化基盤の想定される普及時期と完全には整合しない比喻義の発生もある。

また、このほかに RQ 1 に対する結論の三つ目に関して以下の点を補足する。

- 比喻義を備えた状態で借用された漢語表現は、和語による表現の意味拡張と傾向を異とする場合がある。しかし、少なくとも身体部位詞に限っては、日本で独自に生じたと考えられる漢語表現が多い。

第5章 結論

5.1 本研究のまとめ

本研究では、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語を構成要素に含み、精神作用に関する意味を持つ日本語表現を認知言語学の枠組みに基づいて分析することで、それらの表現を成立させる比喻の仕組みと動機づけ（基盤）を明らかにした。従来の認知言語学研究は、身体部位詞の精神義を支える身体基盤・文化基盤を論じてきた一方で、各々の研究が独自に巨視的な説明を与える傾向にあり、体系的に欠けるという問題がある。本稿では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の動機づけとして複数の身体基盤・文化基盤が存在するという考えのもと、一連の表現を比喻的な成り立ちに基づいて分類することで、各基盤が関係する表現を整理し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルを特徴づける中心的な役割を果たす基盤が何であるかを論じた（第3章）。また、意味拡張という観点から通時的調査を行うことで、新たに〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の史的展開を記述するとともに、現代日本語表現に対して行なった動機づけの分析結果に基づき、身体部位詞の意味拡張に対する身体基盤と文化基盤の働きを検証した（第4章）。

第2章では、本研究の分析で援用する理論的枠組みとして、慣用句（本研究でいう慣用表現）の分解可能性に基づく分類と、認知意味論の諸概念を整理した。はじめに、イディオム・慣用表現の意味に焦点を当てた国内外の先行研究をたどり、分解可能性の観点から本研究での身体部位詞表現の分類方法を定義づけた。Nunberg (1978) 等による分解不可能なイディオム・分解可能なイディオムの二分と有蘭 (2009) による慣用句・慣用的連結句の分類は、互いに類似する一方で、一部相違すると思われる点が存在する。この相違は、句全体の慣用的意味を見た際に、その意味要素と構成語それぞれが持つ意味との対応づけの可否を判断基準とするのか、それとも句が慣用的意味を得る際に意味拡張が生じた単位（語かそれとも句か）を判断基準とするのかで生じると考えられる。本稿では、後者の基準をもとに、援用する有蘭 (2009) の慣用句・慣用的連結句の概念を再解釈し、さらに対象を合成語にまで広げることで、慣用表現の下位区分（慣用句・慣用的連結句／全体としての意味拡張を経た合成語・構成要素単位での意味拡張を経た合成語）を定義づけた。続く第2章の後半では、本研究で援用する分析の枠組みである認知言語学の重要概念として、メタファー、メトニミー、メタフトニミー、イメージスキーマ、プロトタイプシナリオ、身体基盤と文化基盤、文化モデルを順に概観した。

第3章では、現代日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義を成立させる比喻とその動機づけを分析し、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解（文化モデル）の成立基盤を明らかにした。まず、主なりサーチギャップとして上で述べた動機づけに対する体系的な説明の欠如を取り上げ、想定され

る複数の基盤を統合的に扱うモデルが確立されていないことを指摘した。そこで本章では、楠見・米田 (2007) の「感情言語の階層モデル」を応用した「身体部位詞表現の階層モデル」を新たに導入し、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の分析を行なった。このモデルは、精神作用に関する意味を持つ身体部位詞慣用表現を、比喩的な成り立ちに基づいて複数の階層に分類することで、その身体部位と精神作用をつなぐ動機づけを明らかにすることを可能にするものである。このモデルに基づけば、身体部位詞慣用表現は、慣用表現としての分解可能性とその比喩的な成り立ちから、下の七種に分類することができる (表 5 を再掲)。分析にあたっては、これらが三層に大分され、慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語についてはその比喩的な成り立ちから各層に割り当てられる。精神作用との共起的経験に基づくメトニミー表現 (e.g. 「頭が痛い」) は感覚・運動レベル (L1) と呼ばれる層へ、それらの身体経験がメタファーを通じて描写された表現 (e.g. 「頭を砕く」) はスキーマレベル I (L2) と呼ばれる層へ、構造的な類似性に基づくメタファーによって精神作用との結びつきを獲得した表現 (e.g. 「頭の回転が速い」) はスキーマレベル II～概念レベル (L3) と呼ばれる層に三分類される。一方の慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語は、L3 の表現として扱われる。

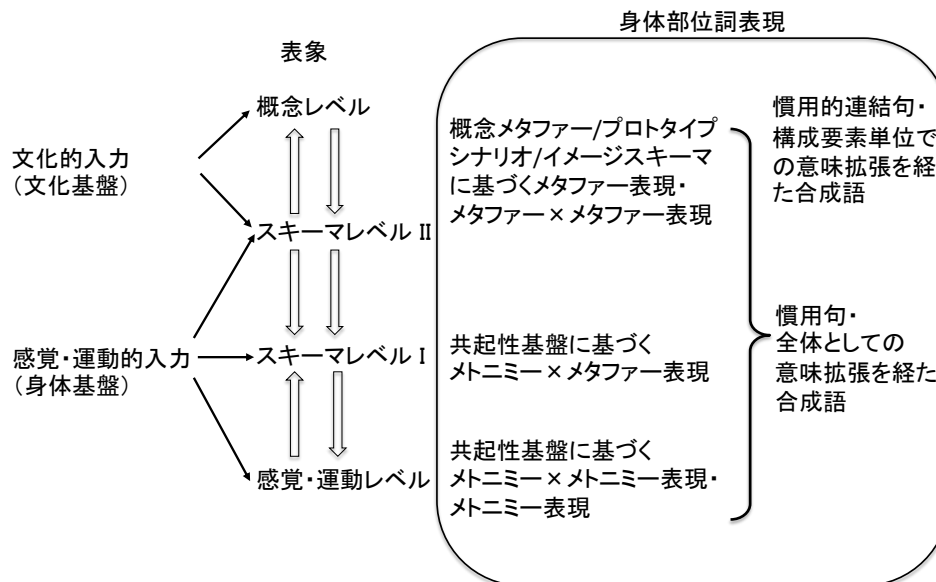
表 5 〈腹〉〈胸〉〈頭〉の慣用表現の分類

	表象レベル	身体部位詞表現の分類	表 4 との対応	(17) での慣用表現の分類との対応	例
L3	スキーマレベル II ～概念レベル	身体部位詞とその他の要素が意味拡張した慣用的連結句・合成語		慣用的連結句 (名詞のみが意味拡張した慣用的連結句・名詞と動詞 (あるいは形容詞) が意味拡張した慣用的連結句)・構成要素単位での意味拡張を経た合成語	腹が出来る 頭が弱い
		身体部位詞のみが意味拡張した慣用的連結句・合成語			頭がいい 胸算用 腹を合わせる
		メタファー×メタファーによる慣用句・合成語	⑥	慣用句・全体としての意味拡張を経た合成語	腹の底を打ち割る 胸の霧 頭の回転が速い
		メタファーによる慣用句・合成語	④		腹が大きい 胸が狭い 頭でっかち
L2	スキーマレベル I	メトニミー×メタファーによる慣用句・合成語	③		腹を切る 胸騒ぎ 頭を砕く
L1	感覚・運動レベル	メトニミー×メトニミーによる慣用句・合成語	②		頭が上がらない 頭が高い
		メトニミーによる慣用句・合成語	①		腹を抱える 胸が高鳴る 頭が痛い

このうち、L1 や L2 は身体基盤による動機づけが働くレベルであり、L3 は抽象化・一般化された身

体経験の動機づけに加え、概念上の理解として文化的な要因が基盤として介入しうるレベルである（図1を下に再掲）。

図1 身体部位詞表現の階層モデル



第3章では、この「身体部位詞表現の階層モデル」を用いることで、精神義を持つ〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現を分類し、各種表現に関係する身体基盤・文化基盤を論じた上で、精神作用の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の理解が成立基盤の観点から次のように特徴付けられることを結論づけた。

- 精神作用の座としての〈腹〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、五臓思想（e.g. 長谷川ほか, 2012）・丹田思想（e.g. 片淵, 2023）・本音と建前文化（Matsuki, 1995）といった文化基盤であり、特に丹田思想・本音と建前文化に関しては他部位との差を最も明確に生じさせる文化的要因である。
- 精神作用の座としての〈胸〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、感情経験に伴う生理的感覚・反応に関する胸部の共起的な経験基盤（有蘭, 2007, 2009）である。
- 精神作用の座としての〈頭〉の理解を特徴づける動機づけの中心にあるのは、近代西洋医学に基づく知識的な文化基盤（e.g. 長谷川ほか, 2012）である。

上の結論は、想定される一つの基盤に注目するのではなく、複数の基盤を包括的に扱った上で全体像を示し、その上で部位を特徴づける中心的な動機づけを明らかにしたものである。このようなプロセスを経たことで、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の動機づけとして従来論じられてきた基盤の裏付け

がなされた点に第3章の意義が見出される。

続く第4章では、身体部位詞の意味拡張という観点から、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の展開を歴史的に観察することを通じて、第3章で分析した〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルがそれぞれの部位に関わる身体基盤・文化基盤の影響を受けながら現代までに発展してきたことを明らかにした。まず、リサーチギャップとして、認知言語学における日本語身体部位詞の歴史的調査の欠如、身体基盤・文化基盤の両観点を取り入れた比喩表現研究の事例研究（検証）の不足という二点を指摘した。これらの課題に取り組むため、『日本国語大辞典 第二版』の（子）見出しの初出例として挙げられている出典の成立時代を主な手がかりとして、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する身体部位詞慣用表現の概ねの成立時期を上代・中古・中世・近世・近代・現代へと分類し、各身体部位の全体的な意味拡張の傾向を記述した。その上で、第3章で行なった動機づけの分析を身体部位詞の意味拡張に適用することで、〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現の精神義の展開に対する身体基盤・文化基盤の影響を論じた。調査結果の要点を下に示す。

- 〈腹〉〈胸〉〈頭〉表現のいずれに関しても、情緒的精神（感情）に関する意味の発生が先行する傾向にある。それが顕著なのが、感情経験に伴う身体経験が特に豊富な〈胸〉である。
- 精神のその他の側面に関わる表現が際立って現れるのは、〈腹〉〈胸〉〈頭〉ともに近世以降である。〈腹〉〈胸〉は近世に一通り現代に通じる精神作用との対応が出揃い、〈頭〉は一步遅れて近代以降に精神作用との対応が定着する。
- 比喩の種類のうち、感覚・運動レベル(L1)に属する比喩に加え、スキーマレベルI(L2)に属する比喩は早期に出現する傾向が見られる。これらは身体経験との共起性基盤に基づいて成立する比喩であり、身体経験が通時的に身体部位詞の比喩義の発生を動機づけるという理論的な仮説を支持するものである。
- 〈腹〉〈胸〉表現と〈頭〉表現の精神義の拡大の隔たりは、日本における心身観の転換（五臓思想から西洋医学に基づく知識への転換）と概ね対応する。このことは、文化基盤はそれが普及した特定の時代において、身体部位詞の比喩義の発生を促すという理論的仮説を支持する。その一方で、特定の文化基盤の想定される普及時期と完全には整合しない比喩義の発生もある。

本研究で扱った日本語の〈腹〉〈胸〉〈頭〉は、身体部位詞研究の中でも繰り返し分析されており、第3章で詳しく取り上げた動機づけの多くは、先行研究で指摘されてきた基盤である。本研究では新たに、想定されるそれら複数の基盤を包括的に扱い、比喩のレベルごとの分布に基づき、その部位を特

微づけるより中心的な動機づけを見出した。身体部位詞を含め、それ一つで様々な意味に関する比喻表現を構成する語（語群）を対象に比喻義の動機づけを論じるにあたっては、まずは各々の表現の比喻の仕組みに着目し、分類・分析を施した上で、適切なレベルで動機づけの説明を与えるべきである。このような表現レベルでの微視的視点に加え、それらの表現の共通項である構成語（身体部位詞）に対する巨視的な分析を施すことで、その身体部位詞の背後にある身体の文化モデルを把握することができると思われる。

また、身体部位詞の比喻義の意味変化に関する歴史的研究は、少なくとも日本語においてはまだ未着手の研究テーマである。第4章では、従来対照言語学的アプローチを通じて論じられることが多い比喻の成立における身体基盤・文化基盤の役割を、新たに歴史的観点から検証した。比喻の成立基盤に関する理論は、従来の対照言語学的な手法によって検証されると同時に、新たに意味変化という観点からの裏づけを得ることで今後の精緻化を図ることができると考えられる。

5.2 今後の展望

今後の研究の展望としては、調査対象部位の拡充による分析モデルの検証、隣接部位との比較における〈腹〉〈胸〉〈頭〉の分析の精緻化、漢語に関する追跡調査の実施の三点が挙げられる。第一に、本研究での身体部位詞表現の階層モデルは、第3章での分類に関して〈腹〉〈胸〉〈頭〉の分析に最適化された部分がある。その他の部位の分析にこのモデルを適用するにあたり、別の比喻的な分類（たとえば本研究ではほとんど該当例が見つからなかったシネクドキーによって成り立つ分類枠）を設ける必要性や、慣用的連結句・構成要素単位での意味拡張を経た合成語を含む現在の七分類とそれらの三層への割り当ての妥当性を検証していく必要があるだろう。

第二に、本研究で対象としたのは外的部位としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉のみであり、場合によってはそれらよりもより近い関係にあるその他の隣接部位・器官、例えば〈腹〉と〈肝〉や〈腹〉と〈腰〉などの比較の視点が欠けていた。1.1節で述べたように、人間は本来連続的な存在である身体を身体部位詞を通じて分節することで、今回調査した〈腹〉〈胸〉〈頭〉のような区分の中にも特有の意味を見出している。今後は本研究の手法に基づき、〈腹〉〈胸〉〈頭〉に関する語を、内臓語を含む隣接部位・器官と比較させることで、精神作用との対応に関する共通性・相違性（文化モデルの重複部分とそうでない部分）を明らかにし、それらの共通性・相違性を身体基盤・文化基盤の観点から説明していく必要があるだろう。これらの個別部位の比較分析は、最終的に〈身体〉としての文化モデルの有り様を把握することにつながると考えられる。

第三に、第4章で行われた歴史的調査は主に和語を対象としており、漢語として扱われたのは辞書見出しに登録されたものに限定されていた。4.6.2節でこれらを概観した通り、身体部位詞を含む一部の漢語が精神義を備えて日本に流入したことは確かであるが、見込まれるほど多くは該当せず、少なくとも辞書見出しにある精神義を持つ漢語は日本で成立したあるいは新たな意味を獲得したものが多いと考えられる。この調査結果が、本研究が辞書見出しの漢語を対象としたことに因るのか、それとも日本漢文資料中で広く見られる傾向なのかについて確認する必要がある。漢文資料中での身体に関する語を用いた心情描写と、和文資料中で見られる身体部位詞の心情描写が異なるのであれば、精神の座としての〈腹〉〈胸〉〈頭〉の文化モデルを論じるにあたっては、両者を観察していくことが求められるだろう。

参考文献

- Caplan, H. (Trans.) (1954). *Ad C. Herennium de ratione dicendi : Rhetorica ad Herennium*. Harvard University Press.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and utterances: The pragmatics of explicit communication*. Blackwell Publishing. (内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子 (訳) (2008). 『思考と発話—明示的発話の語用論—』 研究社.)
- Chomsky, N. (2002). *Syntactic structures* (2nd ed.). Mouton de Gruyter. (Original work published in 1957)
- Clausner, T. C., & Croft, W. (1999). Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics*, 10(1), 1–31.
- Croft, W. (2002). The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. In R. Dirven & R. Pörings (Eds.), *Metaphor and metonymy in comparison and contrast* (pp. 161–206). Mouton de Gruyter. (Reprinted from “The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies,” 1993, *Cognitive Linguistics*, 4[4], 335–370)
- Croft, W., & Cruse, D. A. (2004). *Cognitive linguistics*. Cambridge University Press.
- Cruse, D. A. (1986). *Lexical semantics*. Cambridge University Press.
- D’Andrade, R. (1987). A folk model of the mind. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought* (pp. 112–148). Cambridge University Press.
- Deignan, A. (2005). *Metaphor and corpus linguistics*. John Benjamins Publishing Company. (渡辺秀樹・大森文子・加野まきみ・小塚良孝 (訳) (2010). 『コーパスを活用した認知言語学』 大修館書店.)
- Dirven, R. (2003). Metonymy and metaphor: Different mental strategies of conceptualisation. In R. Dirven & R. Pörings (Eds.), *Metaphor and metonymy in comparison and contrast* (pp. 75–112). Mouton de Gruyter.
- Dirven, R., Wolf, H.-G., & Polzenhagen, F. (2007). Cognitive linguistics and cultural studies. In D. Geeraerts & H. Cuyckens (Eds.), *The Oxford handbook of cognitive linguistics* (pp. 1203–1221). Oxford University Press.
- Fillmore, C. J., Kay, P., & O’Connor, M. C. (1988). Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: The case of let alone. *Language*, 64(3), 501–538.
- Fraser, B. (1970). Idioms within a transformational grammar. *Foundations of Language*, 6(1), 22–42.
- Geeraerts, D., & Gevaert, C. (2008). Hearts and (angry) minds in Old English. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 319–348). Mouton de Gruyter.
- Geeraerts, D., & Grondelaers, S. (1995). Looking back at anger: Cultural traditions and metaphorical patterns. In J. R. Taylor, & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the cognitive construal of the world* (pp. 153–180). Mouton

de Gruyter.

- Gibbs, R. W. (1990). Psycholinguistic studies on the conceptual basis of idiomaticity. *Cognitive Linguistics*, 1(4), 417–452.
- Gibbs, R. W. (1994). The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding. In *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. Cambridge University Press. (辻幸夫・井上逸兵 (監訳)・小野滋・出原健一・八木健太郎 (訳) (2008). 『比喩と認知—心とことばの認知科学—』 研究社.)
- Gibbs, R. W. (1999). Taking metaphor out of our heads and putting it into the cultural world. In R. W. Gibbs & G. J. Steen (Eds.), *Metaphor in cognitive linguistics: Selected papers from the 5th International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997* (pp. 145–166). John Benjamins Publishing Company.
- Gibbs, R. W. (2005). *Embodiment and cognitive science*. Cambridge University Press.
- Gibbs, R. W., & Nayak, N. P. (1989). Psycholinguistic studies on the syntactic behavior of idioms. *Cognitive Psychology*, 21(1), 100–138.
- Gibbs, R. W., Nayak, N. P., Bolton, J. L., & Keppel, M. E. (1989). Speakers' assumptions about the lexical flexibility of idioms. *Memory & Cognition*, 17(1), 58–68.
- Gibbs, R. W., & O'Brien, J. E. (1990). Idioms and mental imagery: The metaphorical motivation for idiomatic meaning. *Cognition*, 36(1), 35–68.
- Goossens, L. (2002). Metaphonymy: The interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action. In R. Dirven & R. Pörings (Eds.), *Metaphor and metonymy in comparison and contrast* (pp. 349–377). Mouton de Gruyter. (Reprinted from “Metaphonymy: the interaction of metaphor and metonymy in expressions for linguistic action,” 1990, *Cognitive Linguistics*, 1(3), 323–342. Also in *By word of mouth: Metaphor, metonymy and linguistic action in a cognitive perspective*, pp. 159–174, L. Goossens, R. Pauwels, B. Rudzka-Ostyn, A.-M. Simon-Vandenberghe, & J. Vanparys, Eds., 1995, John Benjamins Publishing Company.)
- Goto, H. (2017). On the Understanding of *HARA*, *KIMO*, and *HARAWATA* in Japanese. 『日本認知言語学会論文集』 17, 120–132.
- Grady, J. (1997a). *Foundations of meaning: Primary metaphors and primary scenes*. [PhD Dissertation, University of California].
- Grady, J. (1997b). THEORIES ARE BUILDINGS revisited. *Cognitive Linguistics*, 8(4), 267–290.
- Grady, J. (1999). A typology of motivation for conceptual metaphor: Correlation vs. resemblance. In R. W. Gibbs & G. J. Steen (Eds.), *Metaphor in cognitive linguistics: Selected papers from the 5th International Cognitive*

- Linguistics Conference, Amsterdam, 1997* (pp. 79–100). John Benjamins Publishing Company.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech Acts* (pp. 41–58). Academic Press.
- Ibarretxe-Antuñano, I. (2008). Guts, heart and liver: The conceptualization of internal organs in Basque. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 103–130). Mouton de Gruyter.
- Ikegami, Y. (2008). The heart – What it means to the Japanese speakers. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 169–190). Mouton de Gruyter.
- Jäkel, O. (1995). The metaphorical concept of mind: “Mental activity is manipulation.” In J. R. Taylor & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the cognitive construal of the world* (pp. 197–229). Mouton de Gruyter.
- Jakobson, R. (1971). Two aspects of language and two types of aphasic disturbances. In R. Jakobson (Ed.), *Roman Jakobson selected writings*, vol. 2, (pp. 239–259). Mouton. (Original version published in 1956) (川本茂雄 (監修)・田村すゝ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子 (訳) (2019).「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」『一般言語学』(新装版) (pp. 21–44) みすず書房. (初版 1973 年))
- Johnson, M. (1987). *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之 (訳) (1991).『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換—』紀伊国屋書店.)
- Katz, J., & Postal, P. (1963). Semantic interpretation of idioms and sentences containing them. *MIT research laboratory of electronic quarterly progress report*, 70, 275–282.
- Koch, P. (1999). Frame and contiguity: On the cognitive bases of metonymy and certain types of word formation. In K.-U. Panther & G. Radden (Eds.), *Metonymy in language and thought* (pp. 139–167). John Benjamins Publishing Company.
- Kövecses, Z. (1986). *Metaphors of anger, pride and love: A lexical approach to the structure of concepts*. John Benjamins Publishing Company.
- Kövecses, Z. (1990). *Emotion concepts*. Springer-Verlag.
- Kövecses, Z. (1995). Anger: Its language, conceptualization, and physiology in the light of cross-cultural evidence. In J. R. Taylor & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the cognitive construal of the world* (pp. 181–196). Mouton de Gruyter.
- Kövecses, Z. (1999). Metaphor: Does it constitute or reflect cultural models? In R. W. Gibbs & G. J. Steen (Eds.),

- Metaphor in Cognitive Linguistics: Selected papers from the 5th International Cognitive Linguistics Conference, Amsterdam, 1997* (pp. 167–188). John Benjamins Publishing Company.
- Kövecses, Z. (2000). *Metaphor and emotion: Language, culture, and body in human feeling*. Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. (2005). *Metaphor in culture: Universality and variation*. Cambridge University Press.
- Kövecses, Z. (2010). *Metaphor: A practical introduction* (2nd ed.). Oxford University Press. (Original work published in 2002)
- Kövecses, Z. (2015). *Where metaphors come from: Reconsidering context in metaphor*. Oxford University Press.
- Kövecses, Z., & Radden, G. (1998). Metonymy: Developing a cognitive linguistic view. *Cognitive Linguistics*, 9(1), 37–77.
- Lakoff, G. (1987). *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田禎之 (訳) (1993). 『認知意味論—言語から見た人間の心—』 紀伊国屋書店.)
- Lakoff, G. (1993). The contemporary theory of metaphor. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (2nd ed., pp. 202–251). Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Johnson, M. (1999). *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to western thought*. Basic Books. (計見一雄 (訳) (2004). 『肉中の哲学—肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する—』 哲学書房.)
- Lakoff, G., & Johnson, M. (2003). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press. (Original work published in 1980) (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986). 『レトリックと人生』 大修館書店.)
- Lakoff, G., & Kövecses, Z. (1987). The cognitive model of anger inherent in American English. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought* (pp. 195–222). Cambridge University Press.
- Lakoff, G., & Turner, M. (1989). *More than cool reason: A field guide to poetic metaphor*. University of Chicago Press. (大堀俊夫 (訳) (1994). 『詩と認知』 紀伊国屋書店.)
- Langacker, R. W. (1999). *Grammar and conceptualization*. Mouton de Gruyter. (Reprinted from “Reference-point constructions,” 1993, *Cognitive Linguistics*, 4(1), 1–38.)
- Makkai, A. (1972). *Idiom Structure in English*. De Gruyter Mouton.
- Matsuki, K. (1995). Metaphors of anger in Japanese. In J. R. Taylor & R. E. MacLaury (Eds.), *Language and the cognitive construal of the world* (pp. 137–152). Mouton de Gruyter.
- McVeigh, B. (1996). Standing stomachs, clamoring chests and cooling livers: Metaphors in the psychological lexicon

- of Japanese. *Journal of Pragmatics*, 26(1), 25–50.
- Mischler, III, J. J. (2013). *Metaphor across time and conceptual space: The interplay of embodiment and cultural models*. John Benjamins Publishing Company.
- Mueller, R. A. G., & Gibbs, R. W. (1987). Processing idioms with multiple meanings. *Journal of Psycholinguistic Research*, 16(1), 63–81.
- Nagai, T., & Hiraga, M. K. (2011). Inner and outer body parts: The case of *hara* ‘belly’ and *koshi* ‘lower back’ in Japanese. In Z. A. Maalej & N. Yu (Eds.), *Embodiment via body parts: Studies from various languages and cultures* (pp. 149–170). John Benjamins Publishing Company.
- Niemeier, S. (1997). To have one’s heart in the right place – Metaphorical and metonymic evidence for the folk model of the heart as the site of emotions in English. In B. Smieja & M. Tasch (Eds.), *Human contact through language and linguistics* (pp. 87–106). Peter Lang.
- Niemeier, S. (2000). Straight from the heart – metonymic and metaphorical explorations. In A. Barcelona (Ed.), *Metaphor and metonymy at the crossroads: A cognitive perspective: A cognitive approach* (pp. 195–213). Mouton de Gruyter.
- Niemeier, S. (2008). To be in control: kind-hearted and cool-headed. The head-heart dichotomy in English. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 349–372). Mouton de Gruyter.
- Nippold, M. A., & Rudzinski, M. (1993). Familiarity and transparency in idiom explanation: A developmental study of children and adolescents. *Journal of Speech, Language, and Hearing Research*, 36(4), 728–737.
- Nunberg, G. (1978). *The pragmatics of reference*. Indiana University Linguistics Club.
- Nunberg, G., Sag, I. A., & Wasow, T. (1994). Idioms. *Language*, 70(3), 491–538.
- Oakley, T. (2007). Image schemas. In D. Geeraerts & H. Cuyckens (Eds.), *The Oxford handbook of cognitive linguistics* (pp. 214–235). Oxford University Press.
- Quinn, N. (1987). Convergent evidence for a cultural model of American marriage. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought* (pp. 173–192). Cambridge University Press.
- Quinn, N. (1991). Cultural basis of metaphor. In J. Fernandez (Ed.), *Beyond metaphor: The theory of tropes in anthropology* (pp. 56–93). Stanford University Press.
- Quinn, N., & Holland, D. (1987). Culture and cognition. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought* (pp. 3–40). Cambridge University Press.
- Radden, G. (2000). How metonymic are metaphors? In A. Barcelona (Ed.), *Metaphor and metonymy at the crossroads:*

- A cognitive perspective: A cognitive approach* (pp. 93–98). Mouton de Gruyter.
- Radden, G., & Kövecses, Z. (1999). Towards a theory of metonymy. In K.-U. Panther & G. Radden (Eds.), *Metonymy in language and thought* (pp. 17–59). John Benjamins Publishing Company.
- Reddy, M. J. (1979). The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought* (1st ed., pp. 164–201). Cambridge University Press.
- Rohrer, T. (2007). Embodiment and experientialism. In D. Geeraerts & H. Cuyckens (Eds.), *The Oxford handbook of cognitive linguistics* (pp. 25–47). Oxford University Press.
- Ruiz de Mendoza Ibáñez, F. J., & Díez Velasco, O. I. (2003). Patterns of conceptual interaction. In R. Dirven & R. Pörrings (Eds.), *Metaphor and metonymy in comparison and contrast* (pp. 489–532). Mouton de Gruyter.
- Sharifian, F., Dirven, R., Yu, N., & Niemeier, S. (2008a). Culture and language: Looking for the “mind” inside the body. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 3–23). Mouton de Gruyter.
- Sharifian, F., Dirven, R., Yu, N., & Niemeier, S. (Eds.). (2008b). *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages*. Mouton de Gruyter.
- Shinohara, K., & Matsunaka, Y. (2003). An analysis of Japanese emotion metaphors. 『ことばと人間』 4, 1–18.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and cognition* (2nd ed). Blackwell Publishing. (Original work published in 1986) (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子 (訳) (1999). 『関連性理論—伝達と認知— 第二版』 研究社出版。(翻訳初版 1993 年))
- Swan, T. (2009). Metaphors of body and mind in the history of English. *English Studies*, 90(4), 460–475.
- Sweetser, E. (1990). *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge University Press. (澤田治美 (訳) (2000). 『認知意味論の新展開—語源学から語用論まで—』 研究社.)
- Trim, R. (2015). The interface between synchronic and diachronic conceptual metaphor: The role of embodiment, culture and semantic field. In J. Díaz-Vera (Ed.), *Metaphor and metonymy across time and cultures: Perspectives on the sociohistorical linguistics of figurative language* (pp. 95–120). Mouton de Gruyter.
- Ungerer, F., & Schmid, H.-J. (2006). *An introduction to cognitive linguistics*. (2nd ed.). Routledge. (Original work published in 1996) (池上嘉彦・坪井栄治郎・西村義樹・塩谷英一郎・野村益寛・本多啓 (訳) (1998). 『認知言語学入門』 大修館書店.)
- Vasiljevic, Z., & Graham, J. (2020). Conceptualization of anger in English and Japanese. 『文学部紀要』 34(1), 1–46.

- Wagner, H., Rehmes, U., Kohle, D., & Puta, C. (2014). Laughing: A demanding exercise for trunk muscles. *Journal of Motor Behavior*, 46(1), 33–37.
- Yu, N. (1995). Metaphorical expressions of anger and happiness in English and Chinese. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10(2), 59–92.
- Yu, N. (1998). *The contemporary theory of metaphor: A perspective from Chinese*. John Benjamins Publishing Company.
- Yu, N. (2003). Metaphor, body, and culture: The Chinese understanding of gallbladder and courage. *Metaphor and Symbol*, 18(1), 13–31.
- Yu, N. (2008). The Chinese heart as the central faculty of cognition. In F. Sharifian, R. Dirven, N. Yu, & S. Niemeier (Eds.), *Culture, body, and language: Conceptualizations of internal body organs across cultures and languages* (pp. 131–168). Mouton de Gruyter.
- Yu, N. (2015). Embodiment, culture, and language. In F. Sharifian (Ed.), *The Routledge handbook of language and culture* (pp. 227–239). Routledge.
- 青木歳幸 (2012). 『江戸時代の医学—名医たちの三〇〇年—』 吉川弘文館.
- 浅見高明・平井仁 (1994). 「正坐と結跏趺における丹田と重心の位置について」『武道学研究』 27(1), 1–11.
- アリストテレス (著)・三浦洋 (訳) (2019). 『詩学』 光文社.
- 有蘭智美 (2007). 「「頭」「胸」「腹」—精神活動の在り処としての身体部位詞—」『日本認知言語学会論文集』 7, 310–320.
- 有蘭智美 (2008). 「分解不可能な慣用表現の慣用的意味の成立—〈身体の状態 (の変化)〉から〈精神状態 (の変化)〉への意味拡張—」『日本認知言語学会論文集』 8, 263–273.
- 有蘭智美 (2009). 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究」[博士学位論文] 名古屋大学.
- 有蘭智美 (2021). 「身体部位詞と形容詞による叙述表現の意味」『認知言語学研究』 6, 25–44.
- 石田秀美 (1987). 『気流れる身体』 平河出版社.
- 石田プリシラ (2015). 『言語学から見た日本語と英語の慣用句』 開拓社.
- 伊藤博明 (2010). 「「猫の首に鈴をつける」(1)—アステーミオ『百話集』をめぐって—」『埼玉大学紀要 (教養学部)』 46(1), 31–60.
- 伊藤眞 (1999a). 「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』 51, 95–117.
- 伊藤眞 (1999b). 「慣用句の意味の成立要因について」『Rhodus 筑波ドイツ文学会』 (15), 185–197.

- 伊原信一 (1990). 「和製漢語「腹立 (フクリフ)」の語史—腹立から立腹へ—」『国語国文学研究』 26, 1–12.
- 入矢義高 (2012). 『増補 自己と超越—禅・人・ことば—』 岩波書店.
- 岩下隆 (2003). 「中国語 (漢語) から借用した日本語」『清泉女学院短期大学研究紀要』 (22), 97–113.
- ヴァリニャーノ (著)・松田毅一・佐久間正・近松洋男 (訳) (1973). 『東洋文庫 229 日本巡察記』 平凡社.
- 大田垣仁 (2009). 「名詞の関数的な側面からみた指示的換喩の 2 つのタイプ」『KLS』 29, 23–33.
- 大西博子 (2017). 「日本語と中国語の「頭」を含む漢字語彙—その形態的特徴と意味比較—」 杉村博文教授退休記念中国語学論文集刊行会 (編) 『杉村博文教授退休記念中国語学論文集』 (pp. 391–411) 白帝社.
- 貝原益軒 (著)・石川謙 (校訂) (1961). 『養生訓・和俗童子訓』 岩波書店.
- 貝原益軒 (著)・蓮村誠 (編訳) (2014). 『新釈 養生訓—日本人が伝えてきた予防健康法—』 PHP 研究所.
- 片渚美穂子 (2023). 『気ながれる身体 of 考古学—近世日本における養生—』 晃洋書房.
- 片山きよみ (2005). 「日本語他動詞の再帰的用法について」『ありあけ—熊本大学言語学論集—』 4, 325–369.
- 金子弘 (2022). 「『日本国語大辞典』で学ぶ語誌—「歴史」—」『日本語日本文学』 (32), 36–47.
- 香山雪彦 (2010). 「昔の中国・日本では「脳」はどのようなものと捉えられていたか—「脳」の漢字から考える—」『日本生理学雑誌』 72(12), 241–245.
- 桐ヶ谷英邦・木村一雄 (2021). 「たこつぼ症候群の臨床像と診断基準の現状」土橋和文・上嶋健治 (編) 『たこつぼ症候群—これまでの歩みと未来へのメッセージ—』 (pp. 31–39) 克誠堂出版.
- 楠見孝 (1996). 「感情概念と認知モデルの構造」土田昭司・竹村和久 (編著) 『感情と構造・認知・生理—感情の社会心理学—』 (pp. 29–54) 誠信書房.
- 楠見孝・米田英嗣 (2007). 「感情と言語」藤田和生 (編) 『感情科学』 (pp. 55–84) 京都大学学術出版会.
- 楠見孝・中本敬子・子安増生 (2010). 「痛みの比喩表現の身体感覚と認知の構造」『心理学研究』 80(6), 467–475.
- 国広哲弥 (1985). 「慣用句論」『日本語学』 4(1), 4–14.
- 国広哲弥 (1997). 『理想の国語辞典』 大修館書店.
- ケキゼ タチアナ・田中聡子 (2004). 「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」『言語文化論集』 25(2), 55–83.

- 厚生労働省 (n.d.). 「過敏性腸症候群. e-ヘルスネット [情報提供]」 <https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/dictionary/heart/yk-079.html>
- 小曾戸丈夫 (新釈) (2006). 『素問』 たにぐち書店.
- 後藤秀貴 (2016). 「「腹」の比喩表現と認知モデル再考—「きも」, 「はらわた」, 「ふ」との接点—」 『越境するレトリック—意味・認識・間テキスト性— (言語文化共同研究プロジェクト2015)』 45-56.
- 後藤秀貴 (2018). 「日英語の胸部と腹部の理解をめぐって—比喩的認知を生む身体経験, 社会・文化経験の観点から—」 『JELS』 35, 21-27.
- 後藤秀貴 (2020). 「「こころ」の理解考—「むね」との比較を通じて—」 『レトリックとメディア (言語文化共同研究プロジェクト2019)』 43-58.
- 後藤秀貴 (2023). 「〈胸〉と〈頭〉を指す日本語身体部位詞の意味拡張に関する史的研究—精神作用に関する比喩義を対象に—」 『認知言語学研究』 8, 1-37.
- 小林祐子 (1975). 『身ぶり言語の日英比較』 英語教育協議会.
- 小堀桂一郎 (2001). 『イソップ寓話—その伝承と変容—』 講談社.
- 呉琳 (2016). 「日本語の慣用句に関する研究の概観」 『日中語彙研究』 (6), 87-105.
- 近藤直也 (2010). 『松浦さよ姫伝説の基礎的研究 古代・中世・近世編』 岩田書院.
- 齋藤孝 (2000). 『身体感覚を取り戻す—腰・ハラ文化の再生—』 日本放送出版協会.
- 酒井シヅ (1997). 「十七, 十八世紀の日本人の身体観」 山田慶兒・栗山茂久 (編) 『歴史の中の病と医学』 (pp. 431-455) 思文閣出版.
- 酒井シヅ (訳) (1998). 『新装版解体新書 全現代語訳』 講談社.
- 酒井シヅ (2004). 「頭痛の誕生と腹痛の変容」 栗山茂久・北澤一利 (編著) 『近代日本の身体感覚』 (pp. 83-102) 青弓社.
- 佐竹隆三 (1984). 『腹と胸—「身体言語」ものしり辞典—』 大正大学出版部.
- 佐藤信夫 (1992). 『レトリック感覚』 講談社. (初版1978年)
- 下房俊一 (1987). 「注解『七十一番職人歌合』稿 (二)」 『島根大学法文学部紀要文学科編』 10(1), 65-101.
- 庄司明子 (2010). 「日英語イディオムの認知的研究」 [博士学位論文] 東北大学.
- 白石大二 (1977). 「解説 国語慣用句とその研究のもたらすもの」 白石大二 (編) 『国語慣用句大辞典』 (pp. 525-593) 東京堂出版.
- 瀬戸賢一 (1995). 『メタファー思考—意味と認識のしくみ—』 講談社.
- 瀬戸賢一 (1997). 「意味のレトリック」 中右実 (編)・巻下吉夫・瀬戸賢一 (著) 『文化と発想とレトリック』 (pp. 93-183) 研究社.

- 瀬戸賢一 (2017). 「メトニミー研究を展望する」『認知言語学研究』 2, 79–101.
- 仙頭正四郎 (編) (2018). 『最新カラー図解 東洋医学基本としくみ』 西東社.
- 高尾享幸 (2003). 「メタファー表現の意味と概念化」 松本曜 (編) 『認知意味論』 (pp. 187–249) 大修館書店.
- 田中聰子 (2002). 「「口」の慣用表現—メタファーとメトニミーの相互作用—」『言葉と文化』 (3), 5–20.
- 田中聰子 (2003). 「心としての身体—慣用表現から見た頭・腹・胸—」『言語文化論集』 24(2), 111–124.
- 田中太一 (2021). 「メトニミーと類似性—ネットワークモデル再考—」『東京大学言語学論集』 (43), 293–307.
- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー—』 研究社.
- 千葉徳爾 (1994). 『日本人はなぜ切腹するのか』 東京堂出版.
- デカルト (著)・谷川多佳子 (訳) (2008). 『情念論』 岩波書店.
- デュルクハイム カールフリート (著)・落合亮一・奥野保明・石橋喬 (訳) (2003). 『肚—人間の重心—第二版』 麗澤大学出版会. (翻訳初版 1990 年) (初版 1954 年: *Hara: Die erdmitte des menschen*)
- 土居健郎 (1985). 『表と裏』 弘文堂.
- 長野仁 (2007). 「スタマック・モンスター大集合!」 長野仁・東昇 (編) 『戦国時代のハラノムシ—『針聞書』のゆかいな病魔たち—』 (pp. 82–103). 国書刊行会.
- 鍋島弘治朗 (2003a). 「メタファーと意味の構造的性—プライマリーメタファーおよびイメージ・スキーマの関連から—」 山梨正明 (編) 『認知言語学論考』 2 (pp. 25–109) ひつじ書房.
- 鍋島弘治朗 (2003b). 「領域を結ぶのは何か—メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性—」『日本認知言語学会論文集』 3, 12–21.
- 鍋島弘治朗 (2011). 『日本語のメタファー』 くろしお出版.
- 西原克成 (2002). 『内臓が生みだす心』 日本放送出版協会.
- 西村書店編集部 (編) (2016). 『解体新書 復刻版』 西村書店.
- 新渡戸稲造 (著)・岬龍一郎 (訳) (2005). 『武士道—いま、拠って立つべき "日本の精神"—』 PHP 研究所. (初版 1899 年: *Bushido: The soul of Japan*)
- 橋本行洋 (2008). 「書記言語における新語の成立—「鬱胸」の場合—」『國文學』 92, 313–327.
- 長谷川雅雄・辻本裕成・ペトロ クネヒト・美濃部重克 (2012). 『「腹の虫」の研究—日本の心身観をさぐる—』 名古屋大学出版会.
- 長谷川雅雄・ペトロ クネヒト・美濃部重克・辻本裕成 (2005). 「「虫」の居所—「腹」と「胸」をめぐる— (上) —」『アカデミア 人文・社会科学編』 (80), 49–102.

- 蜂谷清人 (1977). 『狂言台本の国語学的研究』 笠間書院.
- 馬場典子 (2001). 「怒りの直接表出表現「ハラガタツ, アタマニクル, ムカツク」の意味分析」『世界の日本語教育』 (11), 195–207.
- 馬場典子 (2002). 「「腹が立つ」の動機付けに関する一考察」『言葉と文化』 (3), 31–44.
- 馬場典子 (2012). 「「頭」を含む怒りを表す動詞句の意味の成り立ちをめぐる考察」『ことばの世界—愛知県立大学高等言語教育研究所年報—』 (4), 23–42.
- 平馬直樹・浅川要・辰巳洋 (監修) (2014). 『オールカラー版 基本としくみがよくわかる東洋医学の教科書』 ナツメ社.
- 福土審 (2007). 『内臓感覚—脳と腸の不思議な関係—』 日本放送出版協会.
- 藤原浩史 (1995). 「第九章 古代の語彙」佐藤武義 (編著) 『概説日本語の歴史』 (pp. 153–169) 朝倉書店.
- 船橋新太郎 (2007). 「感情の神経科学」藤田和生 (編) 『感情科学』 (pp. 85–110) 京都大学学術出版会.
- 古島知樹・真玉英生・安田聡 (2021). 「誘因ないし背景」土橋和文・上嶋健治 (編) 『たこつば症候群—これまでの歩みと未来へのメッセージ』 (pp. 87–99) 克誠堂出版.
- 星野命 (1976). 「身体語彙による表現」鈴木孝夫 (編) 『日本語講座第四巻 日本語の語彙と表現』 (pp. 153–181) 大修館書店.
- マスペロ アンリ (著)・川勝義雄 (訳) (1978). 『東洋文庫 329 道教』 平凡社.
- 松井真人 (2007). 「メタファーの経験的基盤に関する一考察—「心」の存在場所に関する日英語のメタファーをめぐる—」『山形県立米沢女子短期大学紀要』 (42), 37–44.
- 松浦光 (2017). 「現代日本語における気象現象の概念化—概念メタファー理論によるアプローチ—」[博士学位論文] 名古屋大学.
- 松本曜 (2003). 「認知意味論とは何か」松本曜 (編) 『認知意味論』 (pp. 3–16) 大修館書店.
- 三浦於菟 (1996). 『東洋医学を知っていますか』 新潮社.
- 三木成夫 (2013). 『内臓とこころ』 日本放送出版協会.
- 宮地敦子 (1979). 『身心語彙の史的研究』 明治書院.
- 宮地裕 (編) (1982). 『慣用句の意味と用法』 明治書院.
- 宮地裕 (1985). 「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』 4(1), 62–75.
- 村木新次郎 (1991). 「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』 (pp. 1–30) くろしお出版.
- 舩山洋介 (1997). 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』 (80), 29–43.

- 舩山洋介 (2002). 『認知意味論のしくみ』 研究社.
- 舩山洋介 (2006). 『日本語は人間をどう見ているか』 研究社.
- 舩山洋介 (2010). 『認知言語学入門』 研究社.
- 舩山洋介・深田智 (2003). 「意味の拡張」 松本曜 (編) 『認知意味論』 (pp. 73–134) 大修館書店.
- 森田良行 (1966). 「慣用的な言い方」 『講座日本語教育』 2, 61–78.
- 矢島忠夫 (2009). 「正法眼蔵『仏性』(下)」 『弘前大学教育学部紀要』 (102), 9–23.
- 山路平四郎 (1962). 「忍熊王物語の「熊之凝」の歌」 『国文学研究』 (25), 9–16.
- 山梨正明 (2000). 『認知言語学原理』 くろしお出版.
- 山梨正明 (2007). 『比喩と理解』 東京大学出版会. (初版 1988 年)
- 山梨正明 (2012). 『認知意味論研究』 研究社.
- 山本幸一 (2006). 「「関連性」による意味拡張としてのメトニミー」 『日本認知言語学会論文集』 6, 299–309.
- 吉田則夫・支洪濤 (1999). 「身体語を含む慣用句についての日中対照研究—「頭」の場合—」 『岡山大学教育学部研究集録』 (110), 105–109.
- 梁青 (2013). 「『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現」 [博士学位論文] 名古屋大学.

【辞書】

- Ayto, J. (Ed.). (2020). *Oxford dictionary of idioms* (4th ed.). Oxford University Press.
- Hornby, A. S. (2020). *Oxford advanced learner's dictionary of current English* (D. Lea & J. Bradbery, Eds.; 10th ed.). Oxford University Press.
- Oxford University Press. (n.d.). *Oxford English dictionary*. <https://www.oed.com>
- 石田瑞麿 (1997). 『例文 仏教語辞典』 岩波書店.
- 岩波書店辞典編集部 (2013). 『岩波世界人名大辞典』 岩波書店.
- 額原退蔵 (著)・尾形侑 (編) (2008). 『江戸時代語辞典』 角川学芸出版.
- 大久保忠国・木下和子 (編) (1991). 『江戸語辞典』 東京堂出版.
- 大塚高信・中島文雄 (監修)・荒木一雄・井上和子・太田朗・福村虎治郎・榊井迪夫・宮部菊男・毛利可信・安井稔 (編) (1987). 『新英語学辞典 縮刷版』 研究社.
- 尾崎雄二郎・都留春雄・西岡弘・山田勝美・山田俊雄 (編) (1992). 『角川大辞源』 角川書店.
- 鎌田正・米山寅太郎 (1992). 『大漢語林』 大修館書店.

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1996）.『言語学大辞典』6.三省堂.
- 京都大学文学部国語学国文学研究室（編）（1968）.『諸本集成倭名類聚抄 本文編』臨川書店.
- 金田一京助・佐伯梅友・大石初太郎・野村雅昭（編）（2002）.『新選国語辞典 第八版』小学館.
- 国語学会（編）（1980）.『国語学大辞典』東京堂出版.
- 国立国語研究所（編）（2004）.『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書.
- ことばの中世史研究会（編）（2007）.『「鎌倉遺文」にみる中世のことば辞典』東京堂出版.
- 小林祐子（編著）（2008）.『しぐさの英語表現辞典 新装版』研究社.
- 佐藤進・濱口富士雄（編）（2017）.『全訳漢辞海 第四版』三省堂.
- 小学館（編）（1984）.『日本大百科全書』小学館.
- 上代語辞典編修委員会（編）（1967）.『時代別国語大辞典 上代編』三省堂.
- 白石大二（編）（1977）.『国語慣用句大辞典』東京堂出版.
- 新村出（編）（2008）.『広辞苑 第六版』岩波書店.
- 芹生公男（編）（2015）.『現代語古語類語辞典』三省堂.
- 築島裕編集委員会代表（編）（2011, 2016）.『古語大鑑』1・2. 東京大学出版会.
- 土井忠生（解題）（1960-1961）.『日葡辞書』岩波書店.
- 東郷吉男（編）（2003）.『からだことば辞典』東京堂出版.
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄（編）（1983）.『古語大辞典』小学館.
- 中村明（編）（1993）.『感情表現辞典』東京堂出版.
- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）（1982-1989）.『角川古語大辞典』角川書店.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000-2002）.『日本国語大辞典 第二版』小学館.
- 野内良三（1998）.『レトリック辞典』国書刊行会.
- 北京商務印書館・小学館（編）（2016）.『中日辞典 第三版』小学館.
- 堀井令以知（編）（2003）.『日常語の意味変化辞典』東京堂出版.
- 前田勇（編）（1964）.『近世上方語辞典』東京堂出版.
- 前田勇（編）（1974）.『江戸語大辞典』講談社.
- 松村明・三省堂編修所（編）（2019）.『大辞林 第四版』三省堂.
- 源順（撰）（1617）.『倭名類聚鈔 20 卷』那波道圓.（国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2606770>（2023 年 11 月 30 日確認））
- 村田了阿（編）井上頼圀・近藤瓶城（増補）（1899）.『俚言集覧』上巻・中巻. 皇典講究所印刷.（国立国

会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/991569> (2023 年 11 月 30 日確認)

<https://dl.ndl.go.jp/pid/991570> (2023 年 11 月 30 日確認))

室町時代語辞典編修委員会 (編) (1985-2001). 『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂.

諸橋轍次 (2000). 『大漢和辞典 修訂第二版』大修館書店.

羅竹風 (主編)・漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処 (編) (1986-1994). 『漢語大詞典』上海辞書出版社・漢語大詞典出版社.

【コーパス・データベース】

JapanKnowledge Lib. (n.d.). <https://japanknowledge.com/library/> (2024 年 3 月 23 日確認) .

『青空文庫』 (n.d.). <https://www.aozora.gr.jp> (2024 年 3 月 23 日確認) .

国立国語研究所 (2021). 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 (バージョン 2021.3, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/> (2024 年 3 月 19 日確認) .

国立国語研究所 (2023). 『日本語歴史コーパス』 (バージョン 2023.3, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2024 年 1 月 26 日確認) .

台湾中央研究院 (n.d.). 『漢籍電子文献資料庫』 <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm> (2023 年 11 月 30 日確認) .

東京大学史料編纂所 (n.d.). 『古記録フルテキストデータベース』 <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/> (2023 年 11 月 30 日確認) .

東京大学史料編纂所 (n.d.). 『古文書フルテキストデータベース』 <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/> (2023 年 11 月 30 日確認) .

東京大学史料編纂所 (n.d.). 『奈良時代古文書フルテキストデータベース』 <https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/> (2023 年 11 月 30 日確認) .

人間文化研究機構国文学研究資料館 (n.d.). 『日本古典文学大系本文データベース』 <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/> (2023 年 2 月 15 日確認 (2023 年 4 月 1 日より公開停止)) .

【用例出典】

L'Estrange, R. Sir. (1692). *Fables of Æsop and other eminent mythologists with morals and reflexions*. Printed for R. Sare, T. Sawbridge, B. Took, M. Gillyflower, A. & J. Churchil, and J. Hindmarsh.

Sheridan, R. B. (2012). *The rivals*. Oxford University Press.

Winchell, W. (1927, November 1). A primer of Broadway slang. *Vanity Fair: The complete archive*.
<https://archive.vanityfair.com/article/1927/11/a-primer-of-broadway-slang>

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（訳・校注）(1994).『新編日本古典文学全集 20 源氏物語 1』小学館.

阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（訳・校注）(1996).『新編日本古典文学全集 23 源氏物語 4』小学館.

井上章（編）(1964).『天草版伊曾保物語』風間書房.

宇野浩二(1952).『苦の世界』岩波書店.

大塚光信（編）(2006).『大蔵虎明能狂言集—翻刻註解—上・下』清文堂出版.

片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子（訳・校注）(1994).『新編日本古典文学全集 12 竹取物語／伊勢物語／大和物語／平中物語』小学館.

菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久（訳・校注）(1995).『新編日本古典文学全集 13 土佐日記／蜻蛉日記』小学館.

木谷蓬吟（編著）(1922).『大近松全集 第11巻』大近松全集刊行会.

木藤才蔵・井本農一（校注）(1961).『日本古典文学大系 66 連歌論集／俳諧集』岩波書店.

曲亭馬琴（著）・小池藤五郎（校訂）(1990).『南総里見八犬伝 1』岩波書店.

雲井竜雄（抄）・杉原夷山（注解）(1910).『王陽明伝習録』千代田書房.（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/753358/1/1>（2024年1月30日確認））

巨海良達（撰）(1653).『巨海代』寺町誓願寺前（京都）：村又左衛門.（早稲田大学図書館古典籍総合データベース https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko31/bunko31_e1121/index.html（2023年11月30日確認））

小島憲之・木下正俊・東野治之（訳・校注）(1994).『新編日本古典文学全集 6 万葉集 1』小学館.

小島憲之・木下正俊・東野治之（訳・校注）(1995).『新編日本古典文学全集 7 万葉集 2』小学館.

小島憲之・木下正俊・東野治之（訳・校注）(1995).『新編日本古典文学全集 8 万葉集 3』小学館.

小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守（訳・校注）(1994).『新編日本古典文学全集 2 日本書紀 1』小学館.

駒沢大学文学部国文学研究室（編）(1973).『禅門抄物叢刊第一 巨海代抄』汲古書院.

小山弘志（校注）(1960).『日本古典文学大系 42 狂言集 上』岩波書店.

笹野堅（校訂）(1942, 1943).『能狂言 大蔵虎寛本』上巻・中巻.岩波書店.

- シェリダン, R.B. (著) 竹之内明子 (訳) (1990). 『恋がたき』 日本教育研究センター.
- 立野信之ほか (1957). 『現代日本文学全集 86 昭和小説集 1』 筑摩書房.
- 近松門左衛門 (著)・国民図書株式会社 (編) (1927). 『近代日本文学大系 6 近松門左衛門集 上』 国民図書.
- 道元 (著)・石井恭二 (訳) (2013). 『現代文訳正法眼蔵』 河出書房新社.
- 中田祝夫 (編) (1976). 『應永二十七年本論語抄 東山御文庫蔵称光天皇宸翰』 勉誠社.
- 永積安明・島田勇雄 (校注) (1966). 『日本古典文学大系 84 古今著聞集』 岩波書店.
- 中野幸一 (訳・校注) (1999). 『新編日本古典文学全集 14 うつほ物語 1』 小学館.
- 中野幸一 (訳・校注) (2001). 『新編日本古典文学全集 15 うつほ物語 2』 小学館.
- 中村幸彦 (校注) (1962). 『日本古典文学大系 64 春色梅児誉美』 岩波書店.
- 夏目漱石 (1995). 『吾輩は猫である 下』 集英社文庫.
- 西尾実・鏡島元隆・酒井得元・水野弥穂子 (校注) (1965). 『日本古典文学大系 64 正法眼蔵 正法眼蔵随聞記』 岩波書店.
- 野坂昭如 (2007). 『野坂昭如ルネサンス 5 とむらい師たち』 岩波書店.
- 野間光辰 (校注) (1966). 『日本古典文学大系 91 浮世草子集』 岩波書店.
- 長谷川強 (訳・校注) (2000). 『新編日本古典文学全集 65 浮世草子集』 小学館.
- 樋口一葉 (著)・伊藤整ほか (編) (1962). 『日本現代文学全集 10 樋口一葉集』 講談社.
- 福永換 (1917). 「治作と米造」『太陽』 23(14), 博文館.
- 二葉亭四迷 (著)・十川信介 (校注) (1972). 『浮雲』 岩波書店.
- 二葉亭四迷 (著)・十川信介・安井亮平 (編) (1986). 『二葉亭四迷全集 2』 筑摩書房.
- 前野直彬 (註解) (2000). 『唐詩選 上』 岩波書店.
- 松尾聰・永井和子 (訳・校注) (1997). 『新編日本古典文学全集 18 枕草子』 小学館.
- 水野稔 (校注) (1958). 『日本古典文学大系 59 黄表紙洒落本集』 岩波書店.
- 三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二 (訳・校注) (2000). 『新編日本古典文学全集 17 落窪物語／堤中納言物語』 小学館.
- 宮島資夫 (著)・小田切秀雄 (監修)・西田勝・宮嶋秀・黒古一夫 (編) (1983). 『宮島資夫著作集 5』 慶友社.
- 村上静人 (校訂) (1915). 『風俗粹好傳／花筐』 人情本刊行会.